THE CENTRAL REVIEW

大正三年一月一日發行（毎月一回一日發行）

中央公論

新年號

第廿九年第一號

三百號記念

新刊

東北學院文學部教授 増富平藏先生譯

ショーペンハウエル随想録

橋本邦助氏裝 四六判總クロース製美本 全一冊 正價壹圓廿錢 郵税拾錢

▼厭世悲觀の哀調＝再生解脱の福音＝春晝秋夜の閑話▲

本書は、將來に於ける一切の精神的又道徳的文明の根底とすべき者（ワグネル評語）と云はれ、或は形而上學の完成者（ドイッセン教授評語）とたゝへらるゝショーペンハウエルが弱年の頃より晩年に至る迄随時に書留め置けるものをグリーセッバ博士が秩序的に編纂せるものにて、上は倫理宗教の眞理、處世の指南より、下は男女の情事、交接等に至るまで忌憚なく論議して一流の人生觀を吐露せる短文實に四百餘章、譯筆亦ショ氏の私淑者増富先生が三たび稿を更へたりと言はるゝほど極度の苦心を重ねたるものにて、警拔の想、明快の文、相俟つて近來の好譯本たるを疑はず。

中村不折 小鹿青雲共著

支那繪畫史

▼不折畫伯裝釘意匠▲ 菊版上製美本 全一冊 價壹圓五拾錢 郵税拾貳錢

◉時事新報評『吾人は本書を目して本邦唯一の支那繪畫史として深く推賞する者也』

高橋五郎先生譯 ▼橋本邦助畫伯意匠▲

ラロシフコー 寸鐵 又名 人生裏面觀

總クロース 全一冊 價八十五錢 郵税十錢

◉時事新報評『言々珠玉光彩陸離として更らに言辭を加ふるを容さず。』

戸川秋骨先生譯 ▲總クロース金文字入

エマーソン論文集 上下二冊

◉上卷 壹圓四拾錢 ◉下卷 壹圓貳拾錢 ◉郵税各一冊十三錢

〔五版〕上卷目次 ◉歴史論 ◉自恃論 ◉報償論 ◉靈法論 ◉戀愛論 ◉友情論 ◉細慮論 ◉勇壯論 ◉大靈論 ◉圓環論 ◉智力論 ◉藝術論

〔三版〕下卷目次 ◉詩人論 ◉經驗論 ◉人格論 ◉作法論 ◉進物論 ◉自然論 ◉政治論 ◉名目論 ◉改革論

◉中外英字新聞『簡潔にして光彩ある邦文を以て巧に飜譯せり 寸鐵殺人の警句は殆んど毎行に盈つ』

版元 東京神田區雉子町 玄黄社 電話本局二〇九一番 振替東京七九九五 ◉全國有名書店賣捌

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

考證は芥子に須彌を藏し

文學博士 鷗外 森林太郎先生鈔

ファウスト考
ギヨオテ傳

獨逸のファウストは伊太利のヂヰナ、コメヂアと並立せる世界藝苑の聯璧なり鷗外先生其精細周到なる完譯を出し、飜譯文字ありて以後最大の勞作として天下に歡迎せられたりき。然るに今爰にファウスト考及ギヨオテ傳の發表を見る。其考證は一見比較的小冊子たりと雖も、中にあらゆる重要なる記載を網羅し、殆と芥子に須彌を藏するの趣あり。其傳記は彼一介の書生よりして忽ちワイマル政府の首相となりしギヨオテの政治家的外生的を經とし多情多感にして幾多の才媛佳人と分合し、老の至るを知らざりし其藝術家的内生活を緯として、宛然一匹の錦繡を織成せり。ファウストを讀む者。此二書を併せ讀まざる可らざるは多言を須ゐずして知るべし。

四六判美裝全二册函入
定價貳圓八拾錢
特價貳圓五拾錢
郵税内地十二錢

（第十三版）

ファウスト

四六版上下二册函入美本
定價三圓五拾錢

此際**特價貳圓八十錢**を以て高需に應ず。乞ふ速かに申込あれ。

發兌 東京神田 （振替五〇一番 電本四一三〇 一〇三六） 合資會社 富山房

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

本誌二倍大・十二月二十日製本出來・本號に限り貳拾貳錢

新年號

前金郵稅共 半年分壹圓六拾錢 一年分參圓貳拾錢

實業之日本

特集 健康增進法 總理大臣 山本權兵衛

▼成敗の分岐點決斷力修養 社長 增田義一

▼實業界將來の中心人物……岳淵生

▼「新商人道」（一大雄篇）……法學博士 福田德三

▼小賣商店に勸めたき新年賣出し法 三越吳服店 豐泉益三

▼運命開拓論 新渡戸博士

●當世酒豪家番附……

●名士の雅號と讀みにくい名……

聖上御宸筆

未だ世に出でざる最近の御宸筆長三尺一寸畫僊紙剛幅九寸七分軸物に好適萬人奉戴の新年大附錄

▼現代青年論 大隈伯爵

●三百名士の子弟教育意見……

●夫婦仲のよい實業家……

▼赤手空拳外人を壓倒して成功したる貿易界の大覇王 記者

▼教育家及び現代青年氣風論……文部大臣 奧田義人

▼貿易界の巨人三井王國解剖的觀察……楚水生

▼余が實驗上より愛兒に與ふる書 法學博士 高根義人

健康長壽の靈藥發見せらる

是最近猛烈なる勢を以て行はれつゝある靈劑にして我社は理論實驗より之を詳說せんとす

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替三二六番 賣捌全國各地書店

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

金權時事の寵兒は株式會社にして出版界の寵兒は本書なり。

東京高等商業學校教授上田貞次郎先生著

株式會社經濟論

（忽三版）

菊判布製 三百八十余頁 定價金貳圓 郵稅内地拾貳錢

零碎の資金を集積して合本結社の實を擧ぐる株式組織は金權時代の寵兒にして、其一會社の消長は時に國家の財政にも影響す。之が研究は實業界の發展に伴つて最も緊要にして亦最も興味ある問題たり。本書は著者多年研究の結果を公にせるものにして其の經濟的なる眞の活道的方面を論述し、殊に財政に關しては精窮懇到を極む。會社事業に從事するものは素より、一般人士も亦之によりて株式會社に對する正確の知識を求むるを得べし。

上編 株式會社の歴史
株式會社の先驅
特許貿易會社
第十七八世紀の株式會社
株式會社に關する立法
第十九世紀の株式會社
日本株式會社略史
中篇 株式會社の本質及び組織
第一章 株式會社の形式と實質
第二章 株式會社の機關
一 株式總會
二 監査役
三 取締役
四 大株主と會社との關係
第三章 變體の株式會社
一 私會社及有限責任會社（附日本舊商法の合資會社）
二 保證責任及び一部拂込の株式會社（附ゲウェルクシャフト）
下編 株式會社の財政
第一章 株式
一 形式上の問題
二 實質上の問題
第二章 會社の設立
一 同時設立と順次設立
二 株金拂込
三 現物出資
四 過大資本
第三章 發起人の利益
一 功勞金
二 現物出資の利益
三 株式轉賣の利益——權利株
四 特別の利潤
第四章 起業金融
一 獨逸に於ける起業金融
二 米國に於ける起業金融
三 獨米起業金融の比較
第五章 利益金及其の處分
一 利益の算出
二 利益金の處分
第六章 增資及び減資
一 增資
二 減資
第七章 社債
一 社債の種類
二 社債の發行
三 償還及び借替
第八章 會社の合併及結合
一 會社の合併
二 會社の結合

發兌元 東京神田
振替五〇一番
四一三〇
電本一〇三六
合資會社 富山房

議論に權威あり記事に生魂あり新聞事業として機關の整備せるは夙に東洋第一の公評あり編輯事務兩局を通じて二千の社員は晝夜の區別なく活動して休止せず

夕刊 朝刊 報知新聞

七臺の輪轉機は毎日午後三時より翌日午前四時迄轟々輪轉の聲を絶たず發行部數實に四十五萬部を超ゆ廣告機關として拔群の偉功を奏するは多言を要せず

▲定價夕朝刊一部二錢一ヶ月卅八錢
▲郵送一ヶ月卅五錢郵稅十五錢
▲三ヶ月分拂に限り郵稅共一圓廿錢
▲郵券代用一割增

東京丸の内
報知社
振替口座東京七三八代理部
振替口座東京七三九會計部

電話

本局長 本局長 浪花 本局特長 本局長 本局 本局 本局 本局 長 長 長 長 長

五〇六〇 五〇六一 五〇六二 三六五一 五〇六五 五〇六三 九〇六六 五〇六四 一二〇九 一四三〇 二六四九 一四三七 五六五 五七 五三一 一二二一

編輯局

兜町出張所
販賣部
廣告部
監理部
代理部
安信所
大阪支局
神戸支局
名古屋支局
京都支局
靜岡支局
横濱支局
横須賀支局

英國ハヴェロック・エリス原著　小倉清三郎譯（最新刊）

性的特徴

●菊判上製全一冊　定價壹圓五拾錢　郵税十二錢●

男女兩性の科學的研究

男女兩性の相違は那邊まで存するものなりや。之を研究するは、社會上、教育上種々の難問題を解決するの楔子なり。故に近時歐米にありては斯學の研究頗る盛にして多くの專門學者を出す。就中其の最も著名なるを英國のエリス氏とす。氏の『男女論』の如きは實に斯學の權威なり。之を一讀するに多大の興味ありて爲に啓發せらるゝ所多く、性的相違の問題は釋然として氷解するの慨あり。吾人は皆男女其の孰れにか分れ、互に異性を識り、自性を知るの要あるに於て此の書實に各人の精讀を値す。

發行所　東京麴町二丁目（振替貯金口座東京七八四七）丁未出版社

賣捌全國各地書店

最大好評

東京朝日曰く＝書翰文に關する書、近來頻々として出づ。しかも其說の憑據あり、定見あり敍述の理路整然たるものに至りては、本書を以て第一に推さゞるを得ず……

文學博士 芳賀矢一先生 代水 杉谷虎藏先生 合著

書翰文講話及文範

まづ見本請求の上

内容の眞價をトせよ

往復葉書申込次第進呈の事

特價貳圓四拾錢

菊判美本上下二冊千二百六十頁
正價金二圓八拾錢郵稅内地廿錢

手紙を書きて面談同様又は面談以上の効果を收め得る人は成功の左券を握れる人なり。◎筆の廻らざるを歎ずる人、辭句に趣味なきをかこつ人、前後聯絡の捌方に不得意の人は本書を繙け。如何なる書きにくき書柬も自由自在に認め得べき細大の方法極めて懇切に説明せらる。◎單に一通讀したるのみにても、書翰の技倆直ちに上進すべきは本書の期待する所なり。二圓四拾錢の價は、購入の翌日一書翰を認むれば、優に回收し得て餘あらん。

本書特價發表以來申込日に激增、印刷製本に全力を注ぐも尚不足を告げ、而も申込引きも切らず由て更に壹萬部を追刷して特價期限を來二十五日迄とす。即刻申込あらざれば忽ち一萬部に達して遂に特賣撤回の止むを得ざるに遭ふべし

發賣所 東京神田（振替五〇一番 電本四一三〇 一〇三六）合資會社 富山房

ANDERS ZORN



"SKERI KULLA" (Swedish Peasant Girl)

大正三年を迎ふ

今上陛下大統を繼かせ給ひてより玆に第二回の新年を迎ふ、四海波靜かにして、皇化萬方に及ぶ、殊に本年中には御即位の大禮を擧させられんとす、嗚呼大正三年は眞に是れ芽出たき年なるかな、吾人は謹んて上　皇室の爲め下、同胞七千萬人の爲め慶福の愈益々裕ならんことを祈る、

眼を放つて海外を觀れば孰れの方面に向つても我邦が最も親き交はりを維持しつゝあるは大に祝すべし、加州土地法の善後策に就ては日米兩政府の間未だ交渉を結了せずと雖も、近來米國の識者中漸く正義の所在に着眼するもの多く、殊に前大統領タフト氏の華府に於ける講筵中、帝國に對し公明の態度を失すべからずとして大に警告せしが如き、吾人の多しとする處たらずんばあらず、事の容易に解決せざるは頗る遺憾とすべしと雖も、兩國の關係には毫も不穩の徵候を示さず、若し假すに相當の時期を以てせば必ず滿足なる解決を見るべきは疑を容れざる所たり、次に日支間に於ても從來の懸案順次に解決を告げ、極東の平和を把持せんとして帝國が致せる至誠の漸く徹底せんとするが如きは頗る喜ぶべし。

翻りて內を顧みれば人心の狀態漸く傳統の權威を脫し個人的傾向を帶び來らんとす、吾人は之を以て我國民が一段の自覺に入らんとする前兆として、寧ろ大に歡迎せんと欲す、若し之に許すに自由を以てし、且つ先覺者の指導宜しきを得ば國運の隆盛玆に初めて眞の根蔕を得べきなり、而して吾人はまた中央公論が創刊三百號を記念するに當り國運開展の一大機會に遭遇するを慶幸とす。

中央公論



第二十九年第一號
新年號
創刊第三百號紀念號

教育・宗教の關係及び前途

(一)

今や我邦有識者間に一大不安の念の漲らんとするは爭ふべからざる事實なり、國防の不備か、否然らず、海軍力不足せば巨艦巨砲を製作すべきのみ、陸軍力不足せば二師團又は三師團を増加すべきのみ、素より國家の憂とするに當らず、財政の困難か、否然らず、輸出入の不平均、兌換準備の減少の如き必ずしも憂ふるを須ゐず、吾人は之を補足するに自ら其方法あるべきを疑はず、政界主力の動搖か、曰く否、藩閥の凋落は政黨政治を以て之に換ゆべく、一政黨横暴ならば新たに大政黨を組織して之に代ゆるを得べし、彼の政局の危機を叫び平地に風波を起さんと狂奔するもの丶如き寧ろ知盛の亡靈が壇浦の

怨を醸さんと欲して焦燥せるが如きのみ、辨慶の珠數の一振は以て之を鎭撫するに足らん、然らば則ち今日我邦先覺者の胸中に涵きて禁ずべからざる一大憂念とは何ぞ、曰く國民道德の根蒂を亡へることと即ち是れなり、別語を以て之を言へば我邦の深憂は國家教育上、徳性涵養に關し未だ適當の方法を得ざるにあり、更に明に之を云はん乎、我邦の教育は從來全然宗教と分離し、寧ろ排宗教の方針を採り、又た徳川時代德性涵養の淵源たりし經典主義をも執らず、漢文學は一の文章學に外ならずして毫も道德修養に效なく、倫理科の下に説く處は教育勅語の　聖旨を敷衍し忠君愛國の大義を奬勵するに在れば素より可ならざるなけれども、人の心は官學の先生輩や老朽有司の思ふ様にも參らず、教場に出て頭を垂れ唯々として道德の講釋を聽くもの必ずしも品性の向上を示さず、各學校は年々歳々續々として片々たる才子を出だし又た其裡面には各種の危險思想は滔々として天下青年の心を侵さんとするものあり、此の恐怖すべき狀態に關し天下の人心を驚動せしは實に數年以前の大不敬事件にあり、流石に我邦道德の缺陷に對し無神經なりし政治界、法曹界、教育界に取りて該事件ばかりは眞に晴天の霹靂たりしが如し、爾來一方には濟生會の組織を見ると同時に他の方面には直接に教育界の缺所を補はんとするの考を生じ、一昨年の春始めて内務高官の奬誘に由り開かれたる三教會同の如き盲目的に何かの方案を得んとして捜索するものと云ふべし、彼三教會同を計畫せしと同一の面振れに因り組織されし歸一會も亦た各同の心に蟠まれる一大不安の徴表と見做すを至當とせん、而して最近宗教局を内務省より文部省に移し、從來排宗教を金科玉條とせし文部當局をして宗教の監督を爲さしめんとするが如き、亦た是れ當路者に於て

如何なる動機より出でしや蓋し推測するに難しとせず、奥田文相が過般の各教派代表招待會席上に於ける演説は暗に從來の排宗教方針の撤回を示すものと云ふべく、而かも今後果して如何の方法に因り教育と宗教は相提契するを得べきか、又た政府として宗教を奬勵するに由て果して幾許の效果を收むるを得べき乎、是等の疑問に對して文相も亦た劇かに明なる解答を爲す能はざるべき乎。

（二）

問題の解決に向ひ一指を染めんとするに先だち、吾人は我邦教育制度の由來及び動機に就いて少しく語る所なかるべからず、回顧すれば今を距ること四十一年の前、明治五年八月、即ち廢藩置縣の翌年にして徴兵令發布と同年、又征韓論勃發の年に當れる、天下の人心は尚ほ封建の舊夢より醒めず、所在動もすれば亂を思ふの徒ある時に際し、維新政府は最も進歩的にして且つ組織的なる『學制』を發布せり、今その大要を云はんに日本全國の學政は擧げて之を中央の文部省に統ぶと云ふ大方針に基き、全國を分ち八大學區として毎區大學校一所を置き、毎大學區を分ち三十二中學區として毎區一中學校を置くべく（總數二百五十八校）、更に各中學區を分ち二百十小學區とし毎區一小學校を置くべく（總數五萬三千七百六十校）規定せり、更に太政官は學制發布に伴ひ『學問奬勵の被仰出書』を發表せり、其文に曰く

人々自ら其身を立て其産を治め其業を昌にして以て其生を遂ぐる所以のものは他なし身を修め智を開き才藝を長ずるによるなり、而して其身を修め智を開き才藝を長ずるは學に非ざれば能はず、是れ學校の設ある所以にして日用常行言語書算を初め士官農商百工技藝及び法律政治天文醫療等に至る迄、

凡そ人の營む所の事業あらざるはなし、人能く其才のある所に應じ勉勵して之に從事し而して後ち初めて生を治め產を興し業を昌にするを得べし、されば學問は身を立つるの財本といふべきものにして人たるも誰か學ばずして可ならんや、×××××自今以後一般の人民（華士族農工商及び婦女に）必ず邑に不學の戶なく家に不學の人なからしめんことを期す、人の父兄たるもの宜く此意を體認し其愛育の情を厚くし其子弟をして必ず學に從事せしめざるべからざるなり、云々

先きの學制と此の被仰書とを並讀するものは誰か其規模の廣大にして、氣象の寬宏なるに驚かざらんや譬へば溶々として大川の流れて盡きざるが如く、此心以て國家を興すべく亦以て新附の民を化育すべきなり、然るに當時の形勢は前に指示せしが如き頗る險惡の徵候に富み、「學制」發布の理想を無難に遂行せんとするには餘りに紛亂せり、征韓論の分裂は端なく在朝の有力者を二分し、內治の改良　中央集權の完成を主眼とせる岩倉、大久保、木戶は對外硬の西鄉、板垣を廟堂より放逐したれば、所在中央集權に不平の徒は相率ゐて西鄉、板垣に與みし遂に狹、佐賀の亂となり、十年の西南の役を見るに至りて始て大勢は一定するを得たりき、然れども直接亂に與みせざりし板垣伯は民權自由の使徒と爲りて大に天下に遊說して大々的國會請願の運動を喚起し、幾許もなく大隈伯も亦政黨運動を開始し、此間中江一派はルソーの民約說を唱へ、帝國憲法は國約憲法たるべしとの說殆んど國論を風靡せり、茲に於て政府は一方、國會開設の詔勅發布により民論の稍々和くを觀ると前後して大に言論集會の取締を嚴重にしたりしが、又夙に國家統一の根帶は教育に在ることに着眼せり、憲法取調の命を帶び外遊せる伊藤公は倫敎

に於て森公使と謀る處あり、十八年の伊藤内閣に文相と爲れる森子は隆々たる勢望と非常の熱心とを以て其經綸を斷行し以て我教育界に一大革新を施せり、其經綸の要は帝國大學令、師範學校令等に明なる如く、大に制度を更改して、高等教育と師範教育とは小學校を下級の發端として秩序整然たる系統の部分を爲すに至る、是れ單に制度の改正又は整理に過ぎずと云ふべきに似たれども、森子が精神を傾倒して企劃せしは國家主義の基礎を打立るに在りて、兵式體操を中學課程に加へ、忠君愛國を以て倫理教育の主眼と爲し、其狀宛も封建時代の武士的教育を回復せんとするもの丶如くなりき、玆に於て我國家教育の基礎始めて確乎不拔と爲れり、爾來幾多の改正を見るも悉く皆な枝葉に屬し、國家教育の本體は毫も森有禮子の時に定められし處と異ならず、但し今日に至り森子が倫理教育の重要件として遺せし一方針に對し大に疑問を生じ來りしは形勢の變化亦た止むを得ざるに由る乎。

（三）

倫理教育の重要件として森子の遺せし方針は他なし宗教と政治を一切學校内に入るべからずと云ふ事是れなり、文部省の内訓として中學校及び官立學校の學生は多年政談演説を聞くことゝ禁ぜられ居りしが、近年その禁稍々緩るみしが如きも、官立學校内に於て政治問題を討論すと云ふが如きは吾人の曾て耳にせざる所なり、各高等學校の文科法科の如き殊に大學生に至りては政治問題を討論し若しくは知名の政治家を聘して其意見を聞くが如きは文學政治法律經濟等の攻究に從事するものに取り最も必要なるべきも、吾人は曾て其事ありしを聞かず、恐らくは明治十一、二年の交故鳩山和夫氏等が新歸朝の勢に

乘じ大に政務を論じて上官の譴責を受けし以來政論は全然帝國大學內に聞くことなしと云ふを得ん、森子の教育方針を定むるや從來の排政論主義を確定すると同時に排宗教主義を明かにし、大凡官立學校內に於て全然宗教を入れざる耳ならず、苟も國家教育の系統內に入るものは、假令私立學校なるにもせよ又は正課外に於てするにもせよ、一切宗教の教育を施し又は儀式を行ふべからずと定めたり、即ち左の明治三十二年文部省訓令第十二號に依り最も明かに之を知るべし、曰く、

一般の教育をして宗教の外に特立せしむるは學政上最必要とす、依て官立公立學校及學科課程に關し法令の規定ある學校(記者曰即ち私立學校の一部)に於ては課程外たりとも宗教上の教育を施し又は宗教上の儀式を行ふことを許さざるべし、

右の訓令は一種の事情の爲め三十二年に發せしものなれども、是れ文部省が多年執來れる方針を文字に書き著はせしに過ぎず、文部の方針已に斯の如くなるが故に基督教主義の各學校は中學校と稱する學校を設くるを得ず、止むを得ず一種の方便として其課程は殆んど中學校と異ならざるも、之を中學程度の學校と稱し、文部當局は此等諸學校が別途私に各高等學校と入學試驗に關する特約をなすことを許し、又文部省は宗教學校の或る專門科に對し其卒業生に檢定免狀を渡すことも許せり、斯くて文部省は從來の方針を殊更に訓令に書き著はしてより僅々二三年を出でざるに、早く既に訓令を勵行すべからざる困難に遭遇し。該訓令をして殆んど空文たるに至らしめたり、是れ蓋し止むを得ざるなり、時勢は駸々乎として進めるが故に、二十八年以前には必要なりし方針も終に其必要の程度を異にするに至らざるを得

ざればなり、

排政論及び排宗教の方針は二十八年前にありて必要なりし乎、曰く然り吾人は之を必要なりしと思ふ、何を以て然りと云ふ乎、請ふ少しく當時の形勢に就て之を論せん、明治十八年前後に於て政府當局者より觀て以て最も危險なりとせしは民間の政論にして、之に次て基督教の傳道も亦た多數の有司、教育家等より危險視せられたり、而して佛、神道に至りては保守思想の凝結と見做され、開國進取の主義に則らんとする國家教育の立脚地よりは亦一種の厄介物と思惟せられざるを得ざりしなり、即ち政論と耶蘇教は急進なりとして忌まれ、神佛兩教は其保守思想の爲め遠けられ、保守と急進の間に立ち中庸を踏まんとする政府の當局が總て此三方面の勢力より教育事業を特立せしむるの方針を執りしは勢止むを得ざりしことゝ思ふ、殊に政論、耶蘇教を排斥するに力を致せしが如く見へしは、兩者は新來の勢に乘じて頗る狂熱を帶び政府の執れる中央集權主義と往々衝突するものありたればなり、斯くて森文相は宣言して曰く政論と宗教に對しては學生の心をして白紙たらしめよ、卒業の後に至り各立脚地を定むに未だ遲しとせずと、斯くて森子が一時の權道に依り定めたる方針は固定して後任者の金科玉條となり、法規を應用するに熱中して時勢を解せざる文部の有司は今日に至り宛も盲人が杖を失して障壁に面着せる如く、頗る狼狽の狀あるは憫笑するに堪へたり、

（四）

大凡そ國家教育を指導せんとするものは時勢を觀るの活眼あるを要す、試に大正三年の形勢を以て明

治十八年の形勢に比較せば自ら隔世の感なからずや、當時國論亂れて麻の如く、在朝有司と民間の志士とは仇敵も啻ならず、教育界に私塾なるもの隨所に繁昌し其中には過激なる自由主義を說きて革命を鼓吹するもの少しとせず、基督教各學校亦た一種の改革者の養成所たるの觀ありて、社會の舊慣習俗に取りては恐るべき破壞者と看做されたり、故に神佛兩派の耶蘇教徒を惡むこと蛇蝎よりも甚だしく、新舊教者間の論難駁擊天下に喧囂たり、此光景を目擊したる一部の識者は眞面目に宗教戰爭の起るべきを憂へたり、森子に代り文相たりし井上毅子の如き宗教戰爭を豫想し憂へたるものゝ一人なりき、斯の如き事情の下に在りては天下爭論の二問題たる政治及宗教を學校より排斥したるは學校內の秩序と學生の心の安靜を保たんとする爲には實に止むを得ざりしなり、加之國民の精神的統一を保ち國家主義の樹立を期するに於て學校を政治宗教以外に特立せしめしは一時の權道として亦之を是認せざる可らず　乍然大正三年は明治十八年に非ず、奧田文相は森子の時を距ること二十八年の後に在ることを忘るべからず、此間には帝國憲法發布せられて君民同治の基を開き（二十二年）、教育に關する　聖詔出でゝ國民倫理の大本を定め（二十三年）、列國と條約を改訂して國權を回復し（二十七年）、日清戰爭に勝ちて國民自覺の端を開き（二十八年）、日英同盟の成立して始めて世界の舞臺に立ち（三十五年）、日露戰役の結果として遂に極東の覇權を握り（三十八年）、斯くて我國家は終に中古式封建帝國の狀態より漸く進化して近世式立憲帝國の形體を備ふるに至り、官民の仇怨全然一掃せられて將に政黨政治の時期に入らんとし、舊新各宗教は前日の怨恨を解きて三教者の會同を見ること屢々なり、即ち前年政府が國家の分裂を防がんとし

て採りし教育統一策は多くは其目的を達して、寧ろ今日に於ては頗る其弊に堪へざらんとするの狀態にあり、今の局に當るもの若し隻眼時勢を觀るの明あらば必ずや多年青年子弟の心に施し來れる拘束を解き、彼等をして一面政論に接觸して大に國事に任ずるの志を養はしめ、更に他の一面には哲學宗教の問題を研究して天地の正氣に交はるの道を得しむべきなり、試に封建時代の儒教主義の教育を回顧せよ、其詞章記誦の末に趨り空理虛談の途に陷り、文明の實學を知らざりしは實に其短所なりと云ふべきも、修身齊家、平天下を以て理想と爲すの一事は以て眞に國士を陶冶するに足れりと云はざるべからず、更に性命の理を談じ、鬼神の德を崇め、天地の化育を觀、且つ天を說く、其說くこと詳しからずと雖も亦以て學者をして自反省察の工夫を知らしめ、安心立命の端を開くを得しむるものあり、即ち學問の最高目的を以て人格の養成に在りとせば昔日の教育は寧ろ今日の教育に比して遙かに優るものありと云はざるべからず、若しも當路の有司、古に鑑み今の世態を察して時弊を救ふの策を求さは必ずや其途を得るに於て至難とせざるべし、

（五）

過般文部省の召集せし全國師範學校長會議が德育を有効ならしむる方法如何と云ふの諮問に對し、全會一人の異議者なく『自立開發』の方針を執るべしと云ふ答案を可決せしは看過すべからざる事實なり、抑も我邦の師範教育は從來文部省が最も嚴密にその理想を實行せんと努力せし所にして、而して高等師範學校は各縣師範學校卒業生中の俊秀を撰拔して、其理想教育を施したる所たり、然るに高等師範の卒

業生が多數を占むる全國師範學校長會議に於て自立開發の方針を採るべしと云ふの決議案を通過せしは以て最も明かに時勢の趨向を見るべきに非ずや、即ち形式的教育の失敗を暴露するものにして、此の重厚者にして尙ほ且つ然り、以て天下一般の輿論の擧て教育方針の改善を切望することを察すべきのみ、今より數年前小松原氏の文部省大臣たるや、深く德敎の擧らざるを概し祖先崇拜を奬勵し、倫理科を修身科と改稱せしめて、苟も理論に馳するの講義を避けて全然實際應用の範圍を出づべからずと內訓せり小松原氏が德育の効少きを憂ふる一段に於て吾人は氏と其憂を共にするものなれども、德育方法の改善に至りては全然見を異にせずんばあらず、而して該師範學校長會議の決議案の如き亦た全く小松原氏と方針を異にするものなり、保守反動は時弊を救ふに益なし、何處まで進步開展して濟時の策を求めざるべからず、

大凡天地間のもの皆な遠心力と中心力の平均に由りて中和を保つを得るなり、人間社會の事亦た然らざるなし、中央集權は國家の求心力にして、民權自由は國民の遠心力なり、傳統的倫理は個人の求心力にして自由考究は其遠心力なり、今我敎育界に於ける倫理講說の狀態を見るに傳統的思想を反覆するに重きを置き、其思想の由て立つ處の哲理に至りては殆んど講することあらず、況んや近世文明社會の特徵たる社會主義的傾向の如き其得失利弊を討究するは靑年の思想を向上するに必要なるに關はらず、其危險を恐れて問題と爲すを許されず、即ち我倫理敎育は徒らに求心力のみ强きが故に固結して活力なし是れ全國の師範學校長會議が『自立開發』の必要を叫ひし所以なり、

且夫れ人は五倫五常のみにて生きるものに非ず、一面同類に對すると同時に他の一面は人間に非ざる天地と關係を有す、宇宙萬有の無窮の力は個人として到底度外すべからざるものたり、蓋世の英雄も何時にか不可抗の自然力に屈せざる可らず、斯くて人は一たび深く自己の小なるを思へば元氣頓に消耗し、復た同類に對する本分を全ふするの力なきに至るなきを保せず、宗教の要は消極なりと云ふと雖も、其消極なるだけに或場合に於ては實に人生及び倫理關係に對する信念の根底たり、夫の宗教的信念の必要を感せざるものゝ如きは思慮淺薄にして遂に人として思ふべき所に思ひ到らざるのみ、故に倫理觀念の基礎は人の德性にありと云ふべきも、能く此の德性を涵養して順境にも逆境にも光明を發して變ることと無らしめんと欲せは、單に倫理哲學の根蒂を培養すべき耳ならず、亦實に人生を超脫せる宗教の信念に基を置かざる可らず、然らざるに於ては人の倫理觀念は未た以て自然的にして又た開發的なりと云ふ可らず、倫理哲學を排し宗教の必要を否定せる我邦德育の無効なること豈復た怪しむる須ゐんや、

（六）

吾人が宗教の必要を云ふは必ずしも或一種の既成宗教を指して云ふに非ず、神道乎、佛法乎、基督教乎、其孰れるを最も可とすべきは一に讀者の撰擇に放任せん、又其孰れも可らずと云ふものあらは吾人は強ゐて爭はざるべし、但し宗教的信念の必要を云ふに於て毫も妨げざるなり、英國の故のハックスレー教授は有名なる生物學者にして又た懷疑論者なり、彼曾て曰く、吾もし吾愛子を全然無宗教の學校に送るか、又は最も頑迷なる宗教學校に送るか、二者その一を撰ぶを要する場合に立たは吾は何の躊躇する

所なく後の宗教學校を撰ぶべしと、蓋し教授の意は宗教の形式を重んぜるに非ず其の教養により愛子が受くべき精神上の練磨を必要と爲せしなり、想ふに宗門教派の數甚だ多しと雖も其神髓に至りては自ら歸一する處あるべし、而して教養の効果に至りては時に頑迷者の感化に得ること却て多大なるの例なきに非ずと思ふ、

然らば則ち宗教もしくば宗教的信念を以て我教育界の缺所を補ふの法果して如何、吾人は其方法は自ら二個の方面に區劃さるべしと思ふ、即ち學校内に於ける宗教の感化及び一般社會又は家庭に於ける宗教感化是なり、一般社會又は家庭に於ける宗教の感化か今一層有効ならんことを希望するに於て吾人は全然奥田文相と同感なり、今日の我宗教界は決して滿足の狀態にありと云ふべからず、佛教各派の内部より時々苦々敷醜聞の傳はるが如きは吾人の最も傷む處にして、基督教亦新來の鋭鋒漸く消磨したるが如く氣勢頗る揚からざるは甚だ遺憾の事たり、最近發起されし歸一會運動の如き別に各派個々の實際運動ありて初めて歸一の趣旨も引立つべきも、神佛、基ともに今日の如き不振の狀態にありては歸一會の効を發揮せんことも容易に望むべからず、但し時勢は明かに各種宗教運動の起らんことを促しつゝあり、例せば今春を期し世界各國各宗派の大家が一種の精神同盟を形成し、各國巡遊の末我邦に來らんとするが如き、必ずや多少我邦人の宗教感念を喚發するの効果あるべし、又た一種の有神哲學を唱へ多年歐洲の天下を風靡せし唯物的傾向を一掃するに與りて力ある獨逸のオイケン教授また同時に來遊すべしと云ふか如き一福音たるを失はず、吾人は我邦人心の現狀と外來の刺激と相待つて大に我宗教界の人士を奮

起せしむるに至らんことを切望して止まず、

學校内に於ける宗教の感化に關し、吾人の意見を云ふ前に一言せざるべからざるは、吾人は我國家教育が主義として宗教宗派より特立するの方針を改變せしめんとするものに非ずと云ふこと是なり、例へば獨逸の各學校に行はれる如く各派の教旨を生徒もしくは父兄の希望に從ひ別々に授くるが如き到底繁に堪ゆべきに非ざるを以て、官公立の學校に於ては一切學校としては宗教上の干渉を試みざるの方針を取ること必要なりと思ふ、但し學生間の會合等に於て宗教の研究を爲さんとするが如きは間接に之を奬勵するも亦た妨げなかるべし、然れども私立學校に於ては大に趣を異にす、此等の諸學校中には基督教に屬するものあり、神佛諸派に屬するものあり、吾人は此種の學校に對し文部省は宜しく全然宗教上の自由を許すを必要なりと思ふ、明治三十二年の訓令第十二號（前掲）の如きは之を改正し、私立學校に對しては例令文部省の命ずる學課の規定に從ふものと雖も、宗教上の拘束を一切加へざることゝなすべし、例せば正課外に於て宗教を教へ又は儀式を行ふも完全の資格ある中學校たることを妨げざることゝなすべし、斯くて我邦の劃一せる教育界に多少の異彩を生じ、旗幟の異なれる諸學校間に成蹟（道德上にも云ふ）の競爭を爲さしむる亦頗る妙ならずや、現在に於ては宗教に關係ある學校は甚だ多からずと雖も、文部省にして一たび其窮屈なる規定を撤回せば必ず更に宗教學校の數を增加する耳ならず、亦た既成各學校も乍ち大に勢力を加ふるに至らんこと疑ふべからずして、死せる今の教育界に一種の活氣を注入するの功蓋し思半に過ぐるものあるべし、

之を要するに吾人は文部の當路に向ひ先以て大に活眼を開き今の時勢、其外に現はれ内に潜める傾向を詳にせんことを勸告せんとするものなり、藥を投ぜんとするには先ち病理を知るの要あればなり、而して今日の國情の全然前年と趣を異にするを知らば、單に遊りながら時勢後れの訓令を撤回するに止めず、進んで大に言路を開放し、世間の議論を歡迎する耳ならず、官學の下に職を奉ずる學者等にも大に講究の自由を許し、以て其偉材大器を(若し偉材大器あらば)を發揮するの途を得せしめんことを要す、更に民間の教育家又は宗教家に向ては吾人は今の千歳一遇の時に際し諸君が大に奮發興起せんことを望むものなり、今の時に當り抑も何の必要ありてか官權の鼻息を伺ふが如きを事とせんや、今の道元、親鸞、日蓮、ルーテルたるもの果して何處にありや、之を在朝の有司と云はず之を民間の志士と云はず、時勢は諸君の奮起を望むや切なり、然れども諸君にして若し奮起せず濟時の功を立つる能はずんば、時勢は諸君を捨去りにして駸々乎として進まんとす、是れ實に吾人が一片の憂念禁ずる能はざる所以なり。

帝國議會に望む

回顧すれば昨年の帝國議會は　今上御宇に於ける最初の議會にして且つ諒闇中に屬するを以て必ず無事なるべしとは天下萬人の期待せし處なるに關はらず、一種不自然なる政變の結果、第三十議會の開院式前後已てに桂内閣不信任案提出の說あり、新年休會後は停會に次ぐに停會を以てし、其間内閣彈劾的質

問の提出あり、終に桂内閣の辭職を以て一段落を告げしも、大風後の『ウネリ』最も甚だしく、船乘り巧者の山本伯も新内閣の船を運轉する爲めには頗ぶる苦辛の態あり、然れども爾來公約の履行に努め、行財政の整理、文官任用令の改正等多少見るべきものあり、且つ政友會は其一時失墜せし過半數を回復し得たるを以て、現内閣は第三十一議會に對し多少の優位を占め、決して前議會に對すると同日に論ずべからず、外交の成績に關しては大に議すべきの點少なからずと雖も、不信任決議に價するもののあるべくも見えず、議員の質問に對し牧野外相も時に稍〻答辯に窮することあらんも、元來支那と云ひ米國と云ひ孰れも一種特別の國柄なれば、之を相手の談判にハキ／＼要領を得よう筈なく、外相の不得要領亦た問題に相應じと云ふ可き乎、蓋し本年の議會には内閣死活の問題の上らざる代り、反對黨の質問には隨分と花を咲かすなるべし、原内相に對し横濱下ノ關兩市に於ける官權亂用に關する質問も出づべく、又高橋藏相に對し剩餘金處分に對する攻擊も出づべし、然れども内閣の致命傷たるべきもの一も有ようとは思はれず、兎に角第三十一帝國議會は平穩無事に其會期を終了すべきこと〻想像に餘あり、

前代稀有の大紛擾を惹起したる第三十議會の後に開かる〻今期議會が平穩、否な平凡たるべきは不思議とするに足らざれども、吾人は切に議員諸君に希望せざるべからざるものあり、他なし今期の議會をして滑稽劇たらしむるなからんこと是なり、議會の重大問題は結局多數黨の黨議に由り決定すべきを以て、議院内の辯論の如き多くは院議を左右するに足らずと雖、議院は議院なり討論は議院の生命なり、吾人は少數黨に對し其成敗を別として討論に努めんことを奬誘すると同時多數黨が克く寛容にして集議に

客ならざらんことを希望す、少數黨をして腹藏なく言ふべきだけを言はしめ我亦た丁寧反覆辯明擁護してこそ初めて多數決の價値ありと云ふべきなれ、又近來辯論の調子次第に卑陋となり、演說者とヤジッ屋と互に卑陋を競爭するが如き亦決し議院の品位を高からしむる所以に非ず、帝國議會が近時漸く政治の中心勢力たらんとするの傾向あるに際し、吾人は特に其自重自尊を必要なりと思惟す、議會が其自ら輕んて品位を墜すは即ち日本國家の品位を卑下するものたることを記臆せざるべからず。

フリードリッヒ、ニーチェ

中澤臨川

一、

ニーチェは哲學者であらうか。勿論彼は哲學者であるに相違ない。然かし彼は世間普通に言ふ專問的、アカデミカルの哲學者ではない。彼は系統的にも、所謂客觀的にも、彼の純粹哲學や認識論を發表したことはない。彼は卒直に、而かも侮蔑的に普遍絶對の眞理と云ふものを拒んだのであるから、在來見做された哲學なるものが、彼に依て成立しよう筈はない。彼の著作は多く短かい警句（アフォリズム）の集合か、または劇詩的に取扱はれた『ツァラッストラ』のやうな物ばかりで、それも前後を通じて矛盾や撞著に充たされてゐる。要するに彼はエマーソンやカーライルやメーテルリンクを哲學者と呼ぶ意味での哲學者である。偶ま彼が獨逸に生れて、自分からも哲學者と稱んでゐた爲めに、所謂專問哲學者の仲間扱をされて、哲學史の幾頁かを滿たし、その認識論までを事々しく論ぜられるやうになつたのである。

斯う云ふ私の意味は、毫も哲學者としてのニーチェの價値を貶さうとするのではない。却つてそこに彼の偉大な點を見やうとするのである。在來の哲學者は理

智の爲めには生命や行爲を犧牲に供した。恒久の眞理と云ふ美しい名のもとに沒人格的なバベルの塔を造り上げた。然るに Pragmatic な近代人は、今迄神聖視せられてゐた『哲學』を、人間の活動のうちでも一番に枯渇萎靡した産物てあるやうに見做し、その使徒を侮蔑の眼を以て視るやうになつた。ニーチエはこの點に於て先づ新しい哲學者てある。彼は第一に行爲主義（プラグマチズム）の宣傳者てある。彼はウィリアム、ジエームスに先んじ、スタンダルと並んで、久しい間の懸案てあつた理想と行爲の藤葛を解いた。行爲の理想よりも根本的てあり、重んずべきものてあると云ふ現代人の要求する謎に先づ第一に手を附けた。行爲の尊重はやがて生命の尊重てありまた本能の尊重てある。理智も理想も生命乃至行爲の屬性てある限りは、それ自ら獨立した普遍絶對の眞理と云ふ物のあらう筈はない。『或る意見の誤つてゐると云ふことが、直ちにそれに反對すべき理由とはならない。要するに、その意見が何れだけ生命を向上させ、生命を保存し、種屬を保存するかが問題てある』と。て、彼の說では、眞理は絶對てなくて相對てある、行爲の屬性てある。種屬にとり個人にとり、その生命を向上保存せしむるものが、即ちその種屬なり個人なりの眞理てある。從て眞理は千差萬別てなければならない。

第二に彼は個人主義的の哲學者てある。『汝の良心は何を汝に訴るか』、斯う彼は自ら訊ねた。『汝は汝のある所のものてあれ』。傳習や遺傳や理智て作られた外皮の汝自身てなく、本來の汝自身てあれ。更に全體の汝自身てあれ。汝の肉をも本能をも感情をも才智をも嚴しく檢ため、詳細に知り悉した上て、汝は汝自らの性格に適つた人生の法則を發見せなければならない。またそれに應じて外圍の自然を採入れなければならない。自覺に達する途に普遍の道程はない。なぜなら、ニーチエの說ては、人間の生れながらの不平等は確い信念てあるから。て、人は彼自身の眞理や法則を彼自身に覺めるほかはない。或る人に善きもの惡しきもの、または必用なもの有害なものが、必然的に他人にも當て

はまると思ふのは間違である。「今余は汝をして私を棄てて汝自身を求めしめる。汝が全く私を棄て了せた時に初めて余は汝に歸るであらう」と、ツァラツストラはその使徒に教へた。また彼は斯うも言つてゐる。「これが私の道だ——何處に汝の道が在るか」。斯う余は余に「道」を訊ねた者に答へた。固定の道と云ふものは——それは存在せぬ。」

「幾多の哲學體系は唯だその建設者にのみ絶對に眞理である。その後に出た哲學者にはそれ等は一般に一つの大きな誤錯でなければならぬ。……それ故、彼はいかなる哲學者をも非難する。なぜなら彼の目的は彼等と違つてゐるのであるから。……然かし、今茲にあらゆる偉人に興味を有する人があるならば、彼はまたあらゆる斯様な思想の體系にも興味を見出すであらう、よしそれが如何樣に間違つてゐるにしても。なぜなら、是等の體系にはおしなべて拒むことの能きない一つの點がある。即ち人格的の感觸と色彩である。丁度或る場所に生じた植物からその土質を推定させるやうに、我等はその特色から一個の哲學者の心象を形造ることが能きる」と。て、總ての哲學者の能事は唯だ正直に彼自身の心靈を談り、その人固有の感觸と色彩を傳へるにある。言ひ易へれば、彼は如何にして彼自身を發見したか、如何なる信念に據てその内心の平和を贏ち得たか——と云ふことを告白し、世の中の人にその實例を示して彼等自身を求めさせるのが其の任務である。更に言ひ易へれば、彼には固定の教義がない。彼は御し易い群羊を指揮する牧者ではないのである。

既にニーチェにとつては、哲學者は怠惰ものを安易に導く爲めに人生の上に敷かれた軌鐵ではない。菓子屋がワップルを作るやうに安々と型にはめた教義でもない。それは偉大な人格が忍苦し努力して彼自身を發見し創造する苦い鬪爭の歷史である。その歷史は彼にとつては唯一無二のものである。眞に偉大な哲學者は皮相な理智の遊戲のみでは滿足しない。彼は全人格を以て戰ひ且つ造る。肉を虐め靈を虐め、然る後に新に強く深く肉に再生し靈に再生する人である。渾身の細

胞を奮ひ起して意志する人てある。彼の所謂『鐵槌を以て思索する』人てある。『我友よ。汝の感情と汝の思想の背後に、或る力強い主人、見えない哲人がゐる――彼の名を「自己」（Selbst）と謂ふ。彼は汝の身體に住み、汝の身體てある。』と、ツァラツストラは言つてゐる。その所謂『自己』は、再びニーチェの詞を籍りて言へば『大理性』てある。本能をもち、感情をもち、『小理性』をもち、『權力意志』を持つた身體が、血の漲る人格として全的努力をなす時が即ち大理性の働く時てある。哲學者の事業は當にこの大理性の發揮に由て、自分の內心に動く不可思議な『自己』を他人に接觸せしめねばならない。

要するにニーチェは行爲及自我を尊重し、人格の全的努力を標榜した哲學者てあつた。ニーチェにとつてはその著書は、先づ何よりも彼の行爲てあつた。『一々の基本的の問題に於て、そこに不變な「私は之てある」が口を挾む』と彼は言つてゐる。それほど彼の著作は彼の自己解剖を以て俺相されてゐる。彼が超人の發達する徑路や苦悶を說く時は、即ち彼自身が自己解脫に於て得たいろ〳〵の經驗を誇大にして談つたのてはないか。彼が總ての價値の顚倒を述べる時は、即ち彼が年少から踏んて來た長い內心の鬪爭を顧みて、過古の自分を再び書物の上に住んだのてはないか。

私は冷かにニーチェの成し遂げた事業を思ふたびに、不思議な考に打たれることがある。理智的に判斷を下すならば、彼の突飛とも見えるいろ〳〵の所說には一として新しい物がない。彼の『貴族の道德』に取も直さずダーウヰンの適者生存之法則の拙惡な燒直しとも採れるてあらう。彼の『權力意志』は矢張進化論やショーペンハウエルから出た生存意志を誇大化したものてはないか。また彼の『超人』は、人間の猿から一段上の動物を步みた幼稚な進化論者の忘想てはないか。更に彼の『永遠輪廻說』は遠い希臘や印度に行はれた宿命說の反覆てはないか。それに彼の論議は一として立派な或形を具へたものはない。彼は立證の事實を缺き、映象の技巧をさへ無みしてゐる。

それてあるのに、なぜ彼の著作はかくまで世の人の注意を牽き、現代人の心に革命を引起させるまでの魔力を有してゐるのであらう。それは彼の優れた藝術的素質に由るのであらうか。勿論その點もある。「詩句の詩人に於けるは丁度理論的思索が哲學者に於ける關係である。彼はその妙魔を把持する爲めに、それを化形する爲めに、慌ててそれを把かむ」と、「彼の言つてゐるのは、よくその述作の態度を示してゐる。然かしニーチェの有する力の秘訣は別に深く據る所がある。それは前にも述べたやうに彼の深甚な自己觀察、自己解剖の光である。天才の誠實な內的經驗の火である。て、彼の著作を貫く獨創は全くその感情にあり、內生活の豐富にあり、常に新しい氣分にあり、高潔な意志のきらめきにあり、全人格の勇ましい努力の叫びにあるのである。若し彼の事業が強く我等を動かすとしたら、それは勿論該博な科學の智識に由るのでもなければ、精到な論理や客觀的な眞理の力に由るのでもない。反對に、彼の偉大な人格、「大理性」――、全自我の苦悶と創造と敗北と勝利とに由るのである。今迄の哲學者が、「余は汝に眞理――客觀的普遍的の眞理、私自身とは全く獨立した眞理、いかなる人間の理性も必ずその下に跪き仰がざるべからざる恒久の眞理を談る」と言ふならば。彼は反對に斯う言ふてあらう、「余はここにある、私の本能と、信念と、身體と、私自身の眞理と、私の過失さへも以て」と。

繰返して言ふニーチェは自己の哲學を住んだ。否な、彼は自己の經驗を哲學化した。彼の哲學はリテラリーに彼の行爲であつた。即ち彼の哲學は本能、感情、氣分の哲學であつた。彼は一生たゞ彼自身を發見する爲めにのみ思索した。そしてたゞ彼自身の心靈の歷史を書いた。(彼は率直にその告白を急いだ。それだけ、前にも述べたやうに、彼の議論には事實の立證と構成の完全を欠いてゐる。彼はたゞ結論だけを與へた。任他、それが彼の內心の忠實な聲明である限りは彼にとつてそんな微細な欠點が何であらう。況んや、斯樣な方法が得て陷り易い單調無味から脫れるべく、斯の天才の

内生活の經驗は能く富み能く深かかつた。)で、彼の大作「ヅァラッストラ」は彼の努力の標的、理想であるばかりでなく、また彼の悶みした内的經驗の誠實な告白である。我等は人としてのニーチェを知らずしてヅァラッストラの哲學や豫言を解することの能きないやうに、またヅァラッストラの哲學を知らずしてニーチェの眞天才を窺ふことが能きない。ニーチェの哲學を解する要諦は即ち Zarathustra-Nietzsche なる二身一體を知ることである。彼の人格上の努力向上とそれに伴つて發達した彼の思想とを併せて研究することである。

二、

彼の妹の書いた忠實な彼の傳記を繙いて、先づ我等の驚くことは、彼の殘した哲學のそれだけ劇しく、破壞的で、ストーミーで、力强い物であるにかゝはらず、生來のニーチェは至て溫厚で敬虔な君子人であつたと云ふことである。彼の一生は潔白、溫良、慈悲、友愛のつゝましい連綴であつた。彼の眞我――その奧底の思想や情緒、即ち彼の日常生活の行動を支配した生來の品質と、彼の發表した哲學との間には非常な相違があつた。即ち生の儘のニーチェとヅァラッストラとは正に反對の位置に立つ兩極であつた。

斯う私の言ふのは敢て彼を卑下しようとする意味ではない。また、「彼の哲學は即ち彼の行爲であつた」と云つた私の前言と撞着する意味でもない。否、それは却て彼の偉大を證明する意味である。思想と生活の間に横はるこの一見不可思議な矛盾こそ實にあらゆる偉大な天才の一生に蟠まる謎である。

なぜなら、自分の缺點を痛切に意識すること――その缺點から逃れる爲めに、勇氣と誠實の稀れな德を以て、固陋な遺傳や習慣を打破し、自由な眞我に到達せようと努めることが天才の唯一の特徵である。で、凡そ人が彼自身を求め、自己を發見するといふことは、即ち彼自身の缺點を見出すと云ふことである。若しその人が誠實であるならば、彼は必ず發見せられた自己――その缺點――の破壞を企てなければならない。彼

の人物が偉大であればあるだけ、その破壞事業は根本的に行はれるであらう。て、破壞の後には改造が伴ふ。彼は必ずその手段として、生來の自己に缺けた物、自分の現在の實有に正反した理想を捧げて、力と自由に達する道程の導きとするであらう。これが天才の一生である。唯だそれだけの努力が彼の運命である。然かし彼には終極の成功がない。なぜなら、彼の行く道は無限であるから。……斯うしてニーチェはツァラツストラを創造し Will した。が、ニーチェは直ちにツァラツストラではない。二人(ふたり)の間には遠い距離(へだたり)がある。しかし、その距離(へだたり)は兩者に共通した人格の蒸氣(ベーポア)、兩者を連貫する強い忍苦の力で結び附けられてゐる。「意志」がツァラツストラ――ニーチェなる有機體を造つた。

要するに天才の發達する過程には二つの作用が行はれる。自己發見と自己創造と。言ひ易へれば、彼はその一生を通して自己の缺點を意識し、之を破壞し、之を改造し、之を補足して進むのである。自由と完全を求めて進むのである。即ち彼の一生は強い意志の一生である。生來本能と肉の克つたトルストイは一生八十年を自己否定に費して、極端な利他主義(アルトルイズム)に歸依した。之と正反對に敬虔な天賦と弱々しいセンチメンタルな氣質を有つてゐたニーチェは、劇しい本能の力を慕ひ、權力意志を標的として自我主義(イゴイズム)の宣傳者になつた。みな自分に缺けた半面を求めたのである。て、ニーチェの基督教に對する強い反感は彼の遺傳的に有してゐた清教的良心に向けた自己破壞の手段であつた。彼の權力意志の宣傳は即ち彼のセンチメンタルな、デカダンな生活に對する反抗であつた。(彼は其自敍傳『この人を見よ(エッセ、ホモ)』の中て、自分にデカダン的氣分の充分に存在したことを告白してゐる。)要するに彼の一生は自己完成の強い努力であり、強制的意志の坩堝(るつぼ)であつた。彼はその爲には宇宙的實在なる「意志」の上にも特に「權力」なる強い形容詞を冠らせなければならなかつた。彼の劇しい憧憬は偉人(ヘイアーマン)の上に猶ほ一段高い「超人」を建設せずには措なんだ。彼は無道徳主義(アモーラル)の論者でありながら非道徳論(アンチモーラル)に陷らさ

るを得なかつた。彼の哲學は皆な彼の内心の要求から出た痛切な叫である。何んなに極端な立論でもが彼自身にはそれが適切であり且許さるべきものであつたのだ。丁度、トルストイの性行から離して彼の教義を知りまたは批評することの不可能であり徒事であるやうに、ニーチエの人格に對する智識の缺亡はやがて彼を誤解する第一歩である。

ニーチエは人生を意志した。そして何事に對しても「然り」と受けた。彼は斯様に强い意志を以て、肉に於ても靈に於ても、刻々に征服し、快復し、創造した。その變遷を知る爲めには、試みに、彼が幼時からの肖像をとつて見るがよい。極めて幼年の頃に寫した物で先づ我等の注意を牽くのは、その弱々しい蒼顔に浮べた重たるい輪廓と不確實な表情と倦怠の氣分である。眼はどんよりして迷視してゐる。それが少年から青年の頃になるに從つて、次第に輪廓は明白になり、決心の線が高まつて來てゐる。殊に變つて行つたのはその眼色である。佛蘭西のシユーレと言ふ人が、ベーロイスに彼を訪つた頃は丁度彼の壯年期に這入つた時代て、ワグナルと別れ、所謂解放期に當る所であるが、その時、この人の見たニーチエの容貌が最も好く當時の彼を寫してゐる。「私は優越した彼の智識と不思議な彼の顔容とに二つながら驚かされた。廣い額、後になて附けた短かい髮、スラブ人種のやうな突出した頬骨。その太い口髯と際だつた輪廓とは、若し彼に臆病で同時に傲慢な風采がなかつたら、丁度騎兵士官のやうな容貌を彼に與へたであらう。彼の音樂的な聲と徐かな話方は藝術家の氣品を示し、その愼重な瞑想的な態度は哲學者を思はしめた。然し彼の斯様な外見的の鎭靜ほど人を騙き易いものはない。彼の見つめた眼の色は痛ましい思想の分娩を示した。その眼は同時に鋭い觀察者の眼であり、また熱狂的な夢想家の眼であつた。て、この凝視の二重的な性質が何とも言へない不安な印象を生じた。なほさら、それが常に或る一點にばかり固定して動かないのであるから。然かし時に由ると、ある感情の發露からその凝視が急に夢みるやうな甘さ

に柔げられることがあるが、直ぐまた敵意的に變ずる」と。それから更に彼の晩年の肖像になると（例へばカール、ドンロルフの刻んだ彼の彫像のやうな）、その輪廓はます〳〵明白にエナーヂェチックになり、その凝視はます〳〵大膽に、鋭く徹底的になり、强い意志の力を有つた貴族の容貌が現はれてゐる。トルストイの晩年の相を男性的慈悲の相とするならば、これはまた男性的意志乃至力を權化してゐる。與に最近代に現はれてその文明の兩極端を指し示してゐる二大天才の具體的象徵である。

三、

フリードリッヒ、ニーチェは一八四四年十月十五日に獨逸聯邦ザクセンのレッケンと云ふ田舍町に生れた。彼の家は代々牧師を業としてゐたので、其父も矢張溫厚な新敎の宣敎者として、また忠實な皇帝の僕として、その短かい一生を淋しい僻村に過ごした。彼の唯一の樂みは音樂であつた。殊に彼は即興樂に秀ててゐた。若い牧師とその妻とは結婚後四年目に一人の男の子を上げた。それは丁度天長節に當る好き日であつた。敬虔な牧師の喜は譬へるに物のないほどで、直ちにその子に皇帝の名を採てフリードリッヒと命名した。フリードリッヒには直きに一人の弟と一人の妹が增えた。彼等の母は至て元氣の好い、頑丈な、「美しい野蠻人」と云ふ渾名の付いたほど快豁な女であつた。

フリードリッヒは幼い頃から至極無口な華奢な小供であつた。彼が五歳の時に其父は不時の災難で失くなり、續いて彼の小さな弟も其跡を追つた。彼が十五歳の時に書いた日記の中に當時を回想して斯う言つてある。「この重さなる不幸の後で天なる神が我等の唯一の慰籍者であつた」と。そこて、彼の母はその小供と殘る家族とを連れて、自分の生家に近いナウンブルグへ引越した。

フリードリッヒは至て信神深い小兒であつた。て、彼は幼少の頃からその父祖の業を繼いで牧師になりたいと云ふ希望を有つてゐた。彼の妹の書いた傳記に由

ると、彼等の幼年時は美しい、チヤーミングな物語に充ちてゐた。フリードリッヒは四歳の時から讀み書きの道を覺えた。彼は無口な、引込勝な、寧ろ頑迷な小兒で、時々感情の發作に襲はれ易い性質であつたが、夙く幼ない時から自分を制することを覺えてゐた。或る時は、昔の或る聖人の行爲が何でもないことを示す爲めに、自分でその手を燒いたことがある。また或時、彼は學校の歸り路に篠突く雨の中を傘も持たずに平氣で徐歩して來るのをその母が認めて咎めると、落附はらつて斯う答へた、『だつて、街の中を走るなと先生が敎へました』。彼はまた少しでも自分に疑はしい事、やましい事があると、何時も孤りで物の蔭へ隠れて、自分の良心に聞き質したと云はれてゐる。それ程彼の自省心や克己心は幼い頃から發達してゐたので、やがて其が彼の一生を貫く貴い意志の發源をなしたのである。

彼はまた幼少から孤獨と親しみ、殆んど快豁な少年の仲間入をして遊戯に耽つたことがない。彼の學校友達は彼に『小さな牧師』と云ふ渾名を附けて、彼が聲高く聖書の一節を讀み上げる時は、皆な靜肅に聞いてゐたと云ふことである。彼の學校友達の一人が當時のニーチエを追想して斯う言つてゐる。『彼の根本的性癖は、彼の全身に現はれた一種の憂鬱であつた』と。

その頃の彼はまた其妹をつかまへて、至て嚴肅に斯んなことを敎へてゐる。『若しも人が自分の主人であるならば、彼はまた同時に全世界の主人である』と。彼は生れながら傲慢な性質を持つてゐた。殊に自分の祖先が貴族であると云ふことが彼の一生のほこりであり、また自制の素因であつた。不確實ではあるが彼の祖先は素と波蘭の貴族ニエッキーの後裔で、それが宗敎改革の頃迫害を受けて獨逸へ移住したと云ふ傳説が行はれてゐた。で、彼は小兒の折から斯様な麗はしい祖先の物語に聞き惚れて、深く其傳説を信じた。『伯爵ニエッキーは決して虛言をついてはならぬ』と、能く彼はその妹に言ひ〳〵した。生れながらに潔癖な少年、傲慢で自制心の勝つた少年、孤獨と省察に育まれた少年の斯様な自負と信念は、長ずるに從つて益々深くな

り益々確くなつた。やがてはそれが彼の倫理的心性の一部となつて所謂『貴族の道德』を形作る基礎を成したのである。

幼時の彼は奇麗に裝束（みつくり）した瀟洒たる少年であつた。たとへ內心は傲慢な性質（たち）であつたにしても、彼は至て溫良な、聲の美しい、禮儀に厚い、それて以て情け深い小公子であつたから、誰からも愛せられてゐた。チユリンの市場の菓物賣の女達は爭つて彼にその大きな葡萄房を與へたと言はれてゐる。

音樂は殆んど彼の天品であつた。彼は十歲にして夙（つと）く即興樂を作ることを覺えた。彼の母は彼のこの趣好を見て、早逝した夫の運命を思ひ浮べながら怖れたと云ふことである。彼はまたその頃から詩を作り始めたて、彼は一生是等の藝術を捨てることが能きなんだ。或る著者に言はせると、ニーチェの偉大は、その哲學よりも寧ろその詩にある。獨逸現代詩の鼻祖と謂はれるリリエンクロオンに直接の感化を及ぼして、彼を啓發した者はニーチェであると稱してゐる。彼はまた音樂に於ても相當の自負心を有してゐた。晚年彼が『人生の曲』を作曲して、丁抹のブランデスに自ら推讃した所を見てもそれがわかる。

丁度ニーチェが數へどし十五の歲であつた。彼は暑中休暇を利用して、或る河岸の村に避暑に連れられて行つたことがある。彼は幸福であつた。豐かな日光と生命が彼の身邊に充ちてゐた。すると、彼は急に不安の念に襲はれた。不可思議な未來が彼の頭を惱した。靑春（アドーレツセンス）が來りかけたのである。彼はその定めな　自分の未來を思ふと與に、無邪氣な幼年に別れる悲を味つた。過ぎ去つた幼ない喜と悲の十餘年が幻のやうに彼の眼の前に現はれた。て、彼は筆を執て十二日間に自分の幼年時の歷史を書いた。『今私は私の第一の記錄を終つた。私はこの仕事に至極滿足した。私は大きな愉快と些の疲勞もなく書くことが能きた。人がその第一時代の步みを自分の前に展開し、自分の心靈の發達を辿つて見ると云ふことは重要な事である。私は詩もなく文飾もなく忠實に總ての事實を數へ上げた。なほ私

は今後も斯樣な記錄の幾つかを書きたいと思ふ。」と、彼は書き足した。終に短かい詩が載つてゐる。

"Ein Spiegel ist das Leben
In ihm sich to erkennen,
Möcht' ich das erst nennen
Wonach wir nur auch Streben."

(人生は一つの鏡である。その中に我等自身を認めることが、即ち我等の努むべき第一の目的である。)

ニーチェの一生を通じた鋭い自己解剖の萌芽が、既に充分その中に現はれてゐる。

彼はその年に自分の家庭を棄ててナウンブルグから五哩ばかり距たつたプォルタの豫備校へ入つた。この學校は嚴格な宗教的教育を施すので昔から有名な所て、ノワリスやフィヒテやシェレーゲルやランケのやうな詩人、學者を出してゐる。彼は相變らず孤獨な學生として、日曜日を樂みに必ず母の家へ歸つて來た。今、彼の生活に一種の新しい光がさし始めた。それは智識欲の眼ざめてある。「この時私は智識に對し世界的教養に對する非常な欲望に把まれた。この衝動は丁度今私の讀んだフンボルトから來たのである。願はくば之が詩に對する私の愛のやうに長く續けばよいが。」と、彼は言つてゐる。て、彼はその中に地質學、植物學、天文學、ラテン語、ヘブライ語——軍事學さへも含んだ大きな學課表を造り上げた。「それから、何よりも先づ總ての智識の根本である宗教」と、斯う誌して、「智識の世界は宏く、眞理の探究は無限である」と結んてゐる。

然かし斯樣な自發も努力も不安な青春期(アドーレッセンス)の前には力が薄かつた。年十八にして、また鬱憂の時期が來た。センチメンタルな詩の世界が復つた。彼はシラー、ヘルデルリン、バイロンを讀み、マンフレットに魔せられた。彼は學校を怠け、學問を棄てて音樂者とならうとすてした。彼は空想に任せていろ／＼な物を書いた。敬虔な少年の頭に漸く宗教的懷疑が萌し始めた。

そのヘルデルリンと言ふ名は讀者の餘りに聞かれない名てあらう。然るにこの無名の詩人こそ實はその頃のニーチェが最も私淑し敬仰した殿堂であつた。貧し

い牧師の子に生れ、大學で神學を研究しながら、夙く信ずることを已めた此の詩人の一生ほど拙なく薄幸な一生はなかつた。ローマンチックな夢に耽り乍ら諸方を流浪し、失心して彼は乞食のやうにその故郷へ歸つて來た。その痛ましい精神痲痺の情態が四十年間續いて、一八四三年に彼はこの世を去つた。それは丁度ニーチェの生れる前の歲であつた。ヘルデルリンの懷いた偉きな夢は、古い希臘の文明と獨逸文明との融合であつた。其の未完な散文詩に於て、彼は或る希臘の青年を主人公とし、故國の廢墟を嘆き、再びその勇壯な文明の復らんことを祈る所を寫してゐるが、その主人公は丁度ツァラツストラの力弱い前身とも採ることが能きる。斯うしてニーチェは彼の希臘文明に對する趣味の手ほどきをヘルデルリンから學んだのであらう。趣味に於てローマンチック、憧憬に於て古典的な此の二人の間には一道の流脈が通じてゐた。盲目的な文明の推移も決して無駄ではない。一方で羸弱く萎びかけた種が、時來れば他の肥えた土に新しく芽ざして、力強く結實するのである。

その頃ニーチェはひどく眼を病んだことがある。またその頃、彼の一生に特筆すべき珍らしい一事件が持ち上つた。彼はその頃ブォルタに於て初めて社交の味を覺えた。で、二三の教授から晩餐に呼ばれて行くことなどがあつた。彼は左樣な席で或る可愛い一人の娘に逢つた。彼は生れて始めて、しかも一生にたつた一度の戀をした。暫くの間彼の樂しい夢は續いた。どんな書籍を彼女に貸せようとか、どんな音樂を彼女に聞かせようとか云ふ考が彼の心を躍らした。然かし間もなくその娘はブォルタを去つたので、忽にして彼のはかない夢は崩づされた。彼はプラトーに讀み耽つたり、唯だ二人の友達のゲルスドルフやドイッセンに即興樂を聞かせたりして其日を慰めた。

ニーチェの婦人に對する關係は餘程不思議なものであつた。凡そ世の中に彼位清淨な生活を送つた者は尠ない。よく世間では彼がショーペンハウエルに倣つて、女を獸類視したやうに言ひ囃してゐる。そして、「若し

も「お前が女の中に行くなら鞭を忘れるな」とか、「情熱的な女の夢の中へ這入るよりは人殺しの手に落ちる方が優しだ」とか云ふ彼の詞を引合に出してくる。勿論彼は持說としては、貴族に對する奴隷の部類に女を組入れることをば忘れなんだ。しかし彼はその感情に於てまた日常の行爲に於て、かの多妻主義の厭世哲學者ほどに女人に對して冷酷ではなかつた。「學問した女は或る心理的錯誤をもつてゐる」と彼の言つた通り、その嫌つてゐたのは、女らしからざる女、所謂新しい女に對してであつた。實際、彼の日常はその接近した婦人に對して本能的に尊敬を拂つてゐた。それは彼がその妹のフォエルスター婦人や、彼が長らく交際してゐたマルブィダ、ド、メーセンブッグ孃に對する態度に徵しても明らかである。彼は一時、アンドレアス、サロメと云ふ婦人にその內心のいろ／＼な祕密や葛藤をさへ打明けたことがある。また彼はペーロイスて知り合つた若い一婦人には柔さしい、デリケートな感情に充ちたかず／＼の手紙を送つてゐる。彼は肉的には淸淨てあつたにしても、尠くとも女性の情愛と云ふものは味ひ知つてゐたに相違ない。

それにしても彼の婦人に對する關係は餘りに淡泊か奇矯であつた。彼の妹はそれに就て斯う談つてゐる。「その一生を通して私の兄は全然戀愛や卑しい快樂から遠ざかつてゐた。彼の唯一の情熱は眞理の探究てあつた。晩年になつてから、彼は自分が一度も情熱的戀愛を味ひ得なかつたことを非常に悔んてゐた。然かし彼の異性に對するあらゆる夢想は、よしその相手が何れだけ可憐な女てあつたにしても、直きに仲の良い友情と變つて了つた」と。

彼は肉的に不具てあつたのてあらうか。之に就ては親友のドイッセンが、一八六五年にニーチェが友人につれられて妓樓に遊んだと云ふ事實を明かに談つてゐる。然らば、彼は情慾的の冒險を犯すべく餘りに卑怯てあつたのてあらうか。彼は餘りに潔白過ぎたのてあらうか。それとも彼はその天才を智識欲一方に集中すべく自制の道を採つたのてあらうか。誰がその眞因を

知ることが能きやう。恐らくそのめい〳〵の原因が手傳つてゐたのであらう。唯だ玆に最も信頼すべき原因は、彼が生れながらの確い理想家であつたと云ふことである。彼はたゞ靈魂に於てのみ愛しえた。彼の婦人に對する情熱は高まれば高まるほど其肉の影を失くして清純な友情と變つた。要するに彼は戀愛に於ても、友情に於ても微妙至惇な理想家であつたのだ。

四、

ニーチェは一八六二年にプォルタを見棄てゝボン大學へ入つた。新しい境遇は新しい希望を齎して、彼は暫くの間樂しく快豁な青年期を過ごした。然かしこゝでも彼は孤獨であつた。二三の親しい友人を對手にして、當時のふしだらな學生生活に染まうとはしなんだ。彼は煙草も喫はず、麥酒の杯を手にしたこともない。それでも例の敗け嫌ひから決闘だけは行つた。「習慣は強い力である。人が日々の生活に起る惡事に對して本能的憎惡の念を失ふのは即ち彼自身を失ふのである。」と、當時の彼は言つてゐるが、玆にも強い克己心が現はれてゐる。

その頃から青春の不安が最も強く彼を襲つた。信仰の動搖と職業選擇の問題が相纏れて彼を苦しめた。輕薄なボンの空氣が斯樣な氣分の青年に合ふべき筈がない。彼は努めて孤獨を求めて田舍を散歩したり、自分の部屋に閉籠つて藝術史やビートーベンの傳記を研究したりした。左右するうち、ニーチェは思ひ切つて此町を離れようと決心した。「私は囚人のやうにボンを見棄てた」と、彼は言つてゐる。て、彼は伯林に遊び、ライプチッヒへ行つて、其處の大學へ入つた。

前にも述べたやうにニーチェの父祖は代々新敎の牧師として敬虔な生活を送つてきた。彼も幼少の頃は人一倍の信仰家で、自分の父祖の業を繼いで、神に仕へる身とならうと考へてゐた。然かし十六七歳の頃から、彼のローマンチックな詩人的の氣分はバイロンやヘルデルリンに走り、一方その飽くなき智識欲は科學や哲學の領分に多大の趣味を有するやうになつた。その頃

から彼は疑ひ始めた。潔癖な彼の良心が斯様に重大な問題を打捨てて置かう筈はない。然かし彼は飽迄も小心であつた。彼にはトルストイのやうに極端から極端に走る行動は無かつた。新しく彼に開けた詩や科學の世界は先づ彼を牽附ける前に彼を驚かした。彼は斯様に大膽な否定的な傾向を無上の罪惡と思つた。て、日々に傾けかけるその信仰を引留めようと努めた。彼は徐かにそして恐々と神から離れた。徐かに。なぜなら、彼は樂しい自分の幼年の想ひ出と早く別れた父の面影の刻まれた其信仰を捨てるには餘りの傷ましさを感じたから。恐わ〴〵。なぜなら、要心深い彼の性質から、新しい安息所の見付かる前に住み馴れた舊い殿堂を去る危險を思つたから。

我等が忠實に斯様な問題を會得する爲めには、何よりも先づニーチエ自身の告白を聞くほかはない。彼がまだプォルタの豫備校にゐた頃次のやうな感想を筆にしてゐる。彼は既に『彼は觀念の無限の海』を測り、『懐疑の海に乘出さう』とした。が、

斯様な冒險は數週間の事業でなく、實に生涯の事業である。然かし、一少年の空想を唯一の武器として、既にあらゆる時代の最も深い思想家が承認した二千年來の權威へ破壞すると云ふ事が可能であらうか。人がたゞ彼の安念とうぶな思想を楯として、歴史が深く染め貫いた宗教の煩悩と感喜とを彼から追ひ攘ふと云ふことが可能であらうか。

幾千年來人間の思想が斷えざる戰鬪を續けた其等の哲學上の問題を一擧にして決定すること。最も重大な權威として人々が承認し、第一に人類を眞人道の地歩まで昂げてくれた信仰を改革すること。多くの結果を豫期することもなく、哲學と自然科學とを結合させようとすること。まだ彼が宇宙の歴史の調和またはその根本方則を知らずして、自然科學から一個の眞理の方式を發見しようとすること——之は實に無謀の頂上である。……

案内者も羅針盤もなく、一人で懐疑の海に乘出すと云ふのは、若い頭腦にとつては實に迷盲であり狂氣の沙汰である。その海の上では數多い冒險者が嵐に呑まれ、新しい島へ辿り着く者は至て尠ない。

更に彼はつゞけて斯う言つてゐる。

基督教の總ては假說の上に造られてゐる。神の存在、靈魂不滅、聖書の權威、啓示、そのほか皆疑問である。私は總てそれ等を否定しようと試みた。吁、破壞は易いが、然かし其の跡へ建設せねばならない。その破壞さへも見かけほどに容易ではない。我等の内部意識

は、幼時のさま〴〵の印象や父母教師の影響に由て左樣に強く粘附いてゐるので、唯だ議論や意志の一命でたやすく動くものでない。習慣の力、理想の要求、現世の歡樂、二千年來妄想の犠牲たりしやの觀ある人道に對する疑ひ、我等の猜勇と憶斷のあやぶみ――其等の感慨が我等の内心で勝敗の附かぬ爭をしてゐるうちに、苦がい經驗と悲しい事件の日が來て、復た我等の心を幼年時の舊い信仰へもどす。

彼はまだ信じた。然かし彼の基督教は最早單なるシンボルに過ぎなんだ。何んなに彼は大膽に疑つたか。シカも愼重に顧盼したか。彼は因習の力の偉大なるを想つた。從て之を破るには生涯の全努力を要することを豫想した。十七歳のニーチェは既に無意識的に自己の生涯の天職と運命を悟つてゐたのである。彼はまた歷史上「神の死」の時代の近いたことを知つてゐた。「懷疑の惱みと内心の鬪爭を經てフューマニチーは其丁年、その男々しい時代に到達した。それ自身のうちに宗教の始と中と終を見た。」と斯う彼は言つてゐる。

疑ひながら古い信仰を捨て兼ねてゐた當時のニーチェは、その孤疑的態度にもかゝはらず、時々發作的に自己内心の包み隱した聲を聞いた。「神の意志と謙讓とに對する服從なるものは、我等が勇氣を以て己の運命に對はねばならない時に起る怯懦心を蔽ひ隱すマントルに過ぎない」と。

その後兩三年間、彼は信仰の問題に就て碌く口を緘してゐた。或時友人のドイッセンがその頃現たストラウスの『基督傳』を彼に示して之を讃めると、ニーチは自分の意見を挾むことを拒んだ。て、彼は斯う言つた。「これは非常に重要な問題だ。もし君がジエーサスを棄てるなら、矢張神をも棄てねばならぬ」と。斯樣な沈默の間に、彼の内心には決然たる戰が行はれた。彼は今信仰か眞理かの何れかを擇ばねばならぬ立場に陷つた。ストラウスの採つたやうな近世獨逸新教の生柔しい妥協――宗教と科學との不合理な調和――は彼の忍びうる所でなかつた「總て、然らざれば無」が彼の潔癖な良心の金言であつた。彼が古い信仰を擇ぶとしやうか。然らば彼は、それがいかに背理のものであらうとも、祖先の遺したあらゆる信條を採入れて、主觀

的情調的に之を體得し、その中に靈魂の平和と晏靜を求めようとした。また彼が平和や幸福を希はない「經驗者」(Versucher)の孤獨な苦難な道を擇ぶとしやうか。然らば、眞理がどれだけ恐るべくまた頑强な物であらうとも、彼は之に向て突進するのほかはなかつた。

彼はどう云ふ風に其撰擇を遂げたであらうか。こゝに彼の天才の異常な誠實は遲疑することなく自分の深(しん)底(そこ)の本能の聲に聞いた。若しも汝が自由探究のヒロイックな道を採て戰はうとせずに、信仰の廣い晏易な大道を歩まうとするならば、自分の良心を欺くものであると。――歩め、孤りて歩め、蹣跚(よろめ)くとも、心憶すとも、情傷み胸破るゝとも、唯だ汝の與へられし眞理の道をと。

彼がその頃妹に送つた手紙に次のやうに言つてある。

おん身は如何に思はるるか。我等自身その教の中で育てられ、徐々として我等の生命に深く根ざし、我等の親戚故舊や優れた幾多の人々が夢疑はないかの信仰を守つて行くことが左程困難であらうか。その信仰の道は、疑ひと寂寞を負ひ、あらゆる精神的困憊、否、悔恨にさへ暗められるかの全自已の因習に對する鬪爭――人を失望に誘へど、また彼を眞、善、美に導き行く新しい發見に忠實な鬪爭――の道よりはより困難であらうか。……

我等の求める物は何であらう。休息とそして幸福か。否、眞理のほかに何もなし。よしそれが惡であらうとも恐るべき物であらうとも。……かくて人の一生は決められる。若しも汝が靈魂の平和と幸福を望むなら、去らば信ぜよ。若しも汝が眞理の使徒たらば、さらば索(たづ)れよ。……

これは彼が廿二歳の時であつた。斯うして彼は全く基督教の信仰から離れた。その時から彼は自分の前に横はる行路の困難と、重い自分の使命とを覺悟した。その使命はやがて人類の歷史に於て最も著大な事件(できごと)たる「神の死」の宣言と、新人道の創造にあることを自識した。

斯樣にしてニーチェは徐々として神に離れ、徐々として眞理に隨つた。彼の潔癖な良心は唯だ極端にのみ停まることを得たのであるが、細心な彼の性質は無謀な跳躍を許さなんだ。また彼は生れながらの清教徒(ピューリタン)て

あつたから、信仰を有つにしても其れから離れるにしても、彼の日常生活の良心には些の變化を及ぼさなんだ。彼の内生活には大なる變化がありながら、所謂『轉機』のやうな急劇な顯象がない。その點はトルストイと餘程違つてゐる。彼は『この人を見よ』の中て、自分から其點に言ひ及んてゐる。『私は決して私の力を浪費したことがない。實際的な宗教上の煩悶など云ふ事には私は經驗がない。また私は一度も「罪」だと思つたことがない。同様に私は良心の苛責が何んなものだかを知る經驗を全く缺いてゐる。何の點から見ても良心の苛責などは餘り讃むべきことてない。……一度自分てした行をそつと隱して置くやうなことを私は嫌ふ。……私に言はせれば、良心の苛責とは「惡るい眼」の一種だ。失敗した事實は、それが失敗てあるだけ、いやが上にもより濃厚く、より正確に尊重されなければならない――これが我々の道徳を保つ道だ』と。即ち彼は一生涯、所謂罪をも良心の苛責をも知らなんだ。たゞ失敗を知つてゐただけだ。それほど、彼は生れつきの淸敎徒てあり君子人てあつた。言ひ易へれば彼は『天賦の、本能的の無神論者』てあつた。救ひの神にたよる必要のない人てあつた。て、この淸敎徒は無用な『神』を捨てて、自分の最も要求する『眞理の神』に赴いた。

その頃ニーチェの心を悩ました今一つの問題は職業の撰擇てある。幼少の頃の彼の志は父祖の業を継いて牧師となることてあつた。しかし次第に信仰から離れるに從て、彼は何時しかその職業を嫌ひ出した。ローマンチックな少年の空想に驅られて、一時は音樂家とならうとしたこともある。然かし最も强い彼の本能は智識欲てあつた。彼は幾多の科學、哲學を包括したプログラムを作つたことがある。然かし斯様に廣汎な欲望が存分滿されよう筈がない。次第に世の中を知るにつけて彼は所謂『近代敎育の代表者』即ちジャーナリスト、『空虚てあつて同時に総てを表明する文士』なるヂレッタントに憎惡の念を挾み始めた。彼は狹くとも

深く確實な智識の『主人』とならうとした。て結局、言語學を大學の課程に撰んだ。

彼が言語學を撰んだに就てはいろ〳〵の理由を擧げることが能きる。第一は彼の貴族的傾向である。近代の功利主義者　利慾の凡衆が輕んじ棄てて顧みない斯の古代寶庫は、騷擾と浮薄の世の中に殆んど求めることの能きない靜思、沈默、遲寬、忍耐の類ない世界を與へて吳れる。それは『言語に應用した寬豁な鍛冶屋の技術である』。『それは如何に善く讀むべきか、即ち半ば心の扉を開け、深意鋭どい指と眼を以ていかに徐かに深く讀むべきかと云ふことを敎える』と、彼は言つゐる。第二の理由は彼の強い自制心克己心の發露である。その頃の彼は青春の不安に驅られ、ローマンチックな夢に囚はれて、詩に音樂に遣瀨ない倦怠の月日を送つてゐた。て、彼はいかにもして斯樣な感傷的な氣分を打消さうと、努めて無味乾燥なそして忍耐力を要する言語學に指を染め出した。斯樣な修養の道具として、斯學はその堅實な研究法に於て、その精緻な解剖法に於て、寔に格好なものであつた。ライプチヒ大學の教授で有名な言語學者のリッチェルは、當時の愛弟子たる彼を捉へて、よく斯う言ひ〳〵した。『若しお前が強い人とならうとするなら專問の智識を養へ』と。て、彼はその頃一個年間を限つて斷じて詩や音樂の世界から距らうと決心したことさへある。

以上はニーチェをして言語學を撰ましめた消極的、反抗的の原因であるが、他に猶は一つ積極的の原因がある。前にも述べたやうに彼はゲーテやヘルデルリンの感化をうけて、希臘文明に對する深い興味を懷いてゐた。て、その文明の無限の寶庫を開く爲めの唯一の鍵は言語學のほかはない。つまり彼は言語學を以て無味乾燥な道具とせず、哲學的――文學的――言語學者の態度から之を研めようとした。古い偉大な文明の中に無窮な人生の意義を捕まへようとした。

ニーチェは幾代かの遺傳を持つた新教徒の子孫で、生れながらのピューリタンであつた。即ち彼は純血な北方文明の產であつた。だけそれだけ彼は南方を慕つ

た。肉體的にも精神的にも彼の終生の憧憬は南てあつた。自國獨逸及基督教の文明に飽足らなく成ればなるほど、彼は以太利を戀ひ、佛蘭西に憧がれ、殊に古代希臘の文明に羨望と心醉を傾倒したのであつた。「ニーチェの事業は北方の精神の南化てある」と、「人生の軌道」の著者チィ、セラは言つてゐる。

斯様にして希臘言語學の研究はニーチェの哲學にその基調を與へた。

五、

ライプチヒへ行つてから後のニーチェは忠實な學生として、その文庫に殘つてゐた詩の稿を燒き盡くし、專念言語學の研究に耽つた。その頃、彼の生涯に最も重大視すべき二つの事件が起つた。それはショーペンハウエルとワグナーを知つたことてある。

凡そ人はその青春の不安期に彼を慰め彼を導くべき何物かの權威を要する。丁度、今幼年からの信仰に離れたニーチェの心は發生期にある瓦斯のやうに化合すべき或る對象物を求めて已まないのであつた。その頃彼は或る本屋て、まだ曾て名を聞いたことの無い一著者の著述を偶然にも手に取つて見た。それはショーペンハウエルの「意志及び觀念としての世界」てあつた。明晰な文字と大膽な語句が先づ彼の心を牽いた。「ある會體の知れない鬼がその時斯う私に囁いた、「早く歸れ、そしてこの書籍を携へて行け」と。て、私は家へ入るや、否や、さうして得た私の寶を披いて見た。そして其の力のある崇高い天才の魔力に私を服從させた。」と、當時の彼は語つてゐる。

誰もその書を繙いた經驗のある者は必ず知ることてあらう。それには久しく顧みられなかつた著者が、長い間に書いた三つの序文が添えてある。是等は傲慢て辛辣てはあるが、少しも驕つた心のものてはない。其內容には深い思想と鋭どい諷刺が充ちてゐる。而かも何たる文體てあらう。獨逸文學に稀に見るほどの古典的整調的の美が全篇を貫いてゐる。斯様な性質の書が、その深遠な思想と、その藝術味と、その自由の空氣と

を以てニーチェの人格を動かさずに措かう筈がない。その著者が、

私の思ふに、或人が發見した眞理、または彼が或る暗黒點に投げた光は、必ず何時の日かには他の思想家を撃ち、彼を動かし、彼を喜ばせ、彼を慰める時がある。で、前者の語る事は正しく斯樣な人を對手にしてである。丁度、我等に似た他の以前の心靈が人生の沙漠に於て我等に話し、我等を慰めて吳れたやうに。

と、言つてゐるのは、ニーチェにとつて何れだけ喜ばしく感じたであらう。彼には斯の流浪的天才の一言一句が唯だ彼自身にばかり訴へてゐるやうに思はれた。それは丁度一八六五年の暮て、ショーペンハウエルが死んてから六年を數えてゐた。

ショーペンハウエルの導く世界は最も恐怖すべき世界である。そこには攝理もなく神も住まない。たゞ不可撓な盲目の『意志』がありとある時、所を通じて支配してゐる。總ての宇宙の顯象はこの大意志の發つ光てある。で、この『意志は自分て自分を屠つて生きてゐる。なぜなぜ、それ自身のほかには何も存在せず、またそれは餓鬼の意志てあるから』。で、人生は一の欲望てあり、欲望は斷えざる苦惱てある。人間の權威を信じ進歩を信ずる愚かなる凡衆よ。かの『意志』は『平均三十年の壽命を保つ地球上の新參者』を無視するを知らざるか。進歩とは哲學者の馬鹿々々しい發見に過ぎない。理性の敵なる『意志』には始なく終なく、たゞ無法てある。その支配する宇宙もまた無意義てある。……

この厭世無殘な恐ろしい偶像破壞者の哲學が何れだけニーチェを感動させたであらう。彼はその甚大な悲觀と破叫の中に、著者それ自身の偉きな力と類なき誠實の人格とを觀た。彼は殆んど十四日間寢らず食はずその書に讀み耽つた。彼の靈魂は溢れ、彼はその眞理を讀んだ。よし眞理がどれだけ殘忍なものてあらうとも、何だ。彼の良心は既に之を受入れるだけの準備を整へてゐたてはないか。

彼は最早恐れなんだ。なぜなら彼は既う一人てなかつたから。彼は斯く著者の智慧に賴つて遂々自分の一番深い欲望を滿足さすことが能きた。で、彼はショー

ペンハウエルの事を『我が父』と呼んでゐた。その後彼は一八七四年に『教育者としてのショーペンハウエル』なる論文を書いて感謝の意を表してゐるが、その中にも斯う言つてある。『私は彼の讀者のうちでも次のやうな者の一人だ。即ちその人は彼の一頁を讀んだだけで、もう自分は其の書の最初の行から最後の行まで讀み盡すであらうし、また彼の唇から出る一々の詞を熱心な注意を以て傾聴するであらうと云ふことを確かに直覺する』と。

ショーペンハウエルは何んな意味での教育者であるかと言ふに、ニーチェの解釋は斯うである。凡そ現代人は彼自身を求めてゐる。で、今彼の實性、彼の眞我を發見するに最も有益な方便は一人の教師を得ることである——その人は、我等に或る軌範的行路を授け、廣い生活術を指し示して與れる所の世間並の教師を謂ふのでなく、我等の隱れた自我に通ずる路を遮げてゐるあらゆる障害を除去して與れる教育者を謂ふのである。丁度ニーチェはショペルハウエルに於て斯樣な教師を發見した。彼は先つこの哲學者に於て偉大な智的忠實を視、神に近い熱誠な人格に接した。『ショーペンハウエルの詞は彼自身に談しかけた獨語だ。若しまた其處に一人の聽者を豫想するならば、それはその子を誡めてゐる父の詞だ。能く聞き能く愛する對話者に打明けた、素朴で正直で快豁な物語だ。實際斯樣な著者は至て稀だ。彼の力と健全とがその聲の第一の響に伴れて我等を包む。それは丁度高山の森の中へ入るやうで、我等は深く呼吸し再び健やかに蘇える。我等は四圍に卓勵の氣を覺え、著者の誠實と自然に感應する。』と、彼は言つてゐる。

ニーチェが初めて實在——その冷索と醜惡と、それが伴ふ苦惨とを持つての僞らざる實在、に面するを得たのはショーペンハウエルの門に入つてからである。彼はまた天才者の劇しい運命を了得した。彼は先づ第一に世間と戰はねばならぬ。彼が時代の因習、偏見、迷信、弱點、罪惡を敵として戰ふと云ふことは、即ち彼自身から凡らゆる外襲的皮相的の分子を取除け、歷史

の泥濘に生じた寄生蟲を殺去する唯一の方法てある。斯くして彼は眞我の道ヶ掃ひ、鐵屑の中から天才の黄金を浮めることが能きる。然かしその道は難い道てある。ショペンハウエルの世界に浮いた歡樂ハ鬼は住まない。「幸福の生活は及ぶべきものてない。人間が實現することの能きる最ゃ麗はしい行動は一個の勇壯生活てある。即ち一般善を齎す目的の爲めに彼自身を犧牲に供し、數知れぬ困苦に打勝つたあとて、僅かに報はれ或は全く報はれざる戰勝者となることてある。」と、ニーチェは悟つた。

ライプチッヒに於けるその兩三年はニーチェにとつて最も樂しい生活てあつた。「君は私に於けるショーペンハウエルの援助と訊ねらるるか」、斯う彼は友人のドイッセンに書いた。「私は唯だ單に斯う答へるほかない。私は勇氣と自由を以て人生に面接する。なぜなら、私の足は堅い地を見出したから」と。て、その頃の彼は熱心な言語學の學生として教授リッチェルを悅ばした。「この男は私の科學的良心てある」とまて教授は賞揚した。

その頃から文章の趣味、述作の欲望が彼に起つた。「至上命令(カテゴリカル、インペラチブ)「汝は書かねばならぬ、汝の書くと云ふことは必須てある」と云ふ聲が私を醒ました。」と、彼は言つてゐる。

一八六七年には彼は急に兵役に召集されて、ナウンブルグの騎兵隊に屬したが、落馬の爲め胸部に負傷して除隊された。そこて彼は靜養の後卒業論文を書く爲めに翌年再びライプチッヒへ歸つて來た。

丁度その年てあつた。ショーペンハウエルに對する熱のまだ醒めない彼に、重ねて新しい喜、生涯に二度とない喜が加へられた。それは新天才ワグナーの發見てある。

ニーチェは幼少の頃から音樂を好み、ワグナーの名をも久しく聞いてゐた。彼が特にこの不思議な天才に興味をもつやうになつたのは、「トリスタンとイソルデ」を聞いてからてあつた。一八六八年にこの天才が

獨逸勃興の新氣運に投じて作つた『マイスチルシングレ』は當時の青年の熱情を煽つて、一段高く彼の名聲を昂げた。ニーチェも亦この樂を聞いた一人であつた『昨晩の奏演會で、「マイスチルシンゲル」の序樂は永らく經驗したことのないほど強い心臟の鼓動を私に與へた。……斯樣な人に對して正しい判斷をもつためには、我等に少しばかりの熱情が必要である。冷靜な心で彼の樂曲を聞かうとした私の努力は無駄であつた。一つ〳〵の神經が私の身內で波打つた。』と、彼は言つてゐる。その頃ワグナーの妹ブロックハウス夫人がライプチッヒに住まつてゐたので、ワグナーは或時微行してその家に客となつたことがあるが、幸にニーチェは其機會に彼に逢ふことが能きた。

ニーチェは其時の光景を或る友人へ送つた手紙に詳しく書き殘してゐる。一日、彼の紹介者のウィンディッシュから、次の日曜の午後何時にワグナーに逢はせるから劇場附のカフェーで待ち合せて一緒に行かうと云ふ手紙が來た。彼はその數日間を夢のやうな氣分で暮した。『斯樣に重要な使命』を果す爲めには、能きるだけ立派な服裝をしようと云ふので、急いで新調の服を誂へた。その日曜は雨混りの雪の降る怖ろしい日であつた。午後になり夕方が近いても服屋はまだ遣つてこない。彼は訪問の友人を匆々に送り出しながら、催促に出懸けて見ると、服屋の店先は『奴隷ども』が一心に彼の服を縫つてゐる。三時には出來上ると云ふとを聞いて滿足しながら彼は歸り路に或る新聞社の前を通りかゝると、ワグナーは今瑞西にゐるなどと云ふ記事が載つてゐる。『えへん、俺はこれでも今晩彼に逢ひに行くんだ。それから俺は、昨日王子から彼に宛てて「偉大なる獨逸の作曲家リチャード、ワグナー殿」と云ふ手紙の來てゐることまで知つてゐるのだ。』などと至極得意であつた。家へ歸つて見ると、まだ服屋は來てゐない。千秋の思で戶口のノックの響を待つてゐると、果してその使が來た。早速着試したが、好く似合ふ。そこで彼は使の者に禮を言つて歸さうとすると、奴さん代金の請求に及んだ。生憎、持合せが尠ないので拒絕

したが、先方は仲々頑强て、終ひには服を持つた儘歸つて了つた。ニーチェの失望つたら無い。澁々古い黑裝束を着出して篠突く雨の中を出かけた。カフェーて友人と待合せて、ブロックハウス家を音づれた。「禮服のない貧乏な私だが、至てローマンチックな上機嫌てあつた。運命が私を愛して吳れた。この雪の夜の街の光景が何となく神秘て異常に見えた」と言つてある。ワグナーは熱心に彼等を迎へた。て、なぜ自分の信者になつたかと云ふやうなことを細かくニーチェから訊いた。晩餐の後ては、彼は手づから『マイステルシンゲル』の要所々々を彈いて聞かせた。彼はまたショーペンハウエルの話をした。彼が如何にショーペンハウエルの哲學に負ふ所があるか、許多の哲學者のうちてもこの大哲人のみが獨り音樂を解してゐたかと云ふやうなことを談つた。それから彼がライプチヒの書生時代の回想錄を持出して讀んて聞かせたしりた。それは至つて滑稽な面白いものてあつた。『私は今思出しても笑はずにはゐらなれない。彼の心は驚くべきほどしなやかて快豁てあつた。」と、ニーチェは言つてゐる。

終ひにニーチェは彼とかたい握手を交はし、再見を約して歸つた。彼は神のやうな人に逢つて天才の衝動を受けた。詩と彫刻と音樂との神秘な綜合藝術のなかに新たにされた獨逸精神の精華が彼を醉はした。

その年彼は廿五歲て、リッチェル敎授の推薦によりバーゼル大學の言語學敎授に任ぜられた。て、彼は無試驗てライプチッヒ大學の學位を受けると云ふ異常な名譽を擔つた。

ニーチェが匆卒バーゼルに行李を解いた頃には、ワグナーはルセルネに近い湖畔トリーブシェンの寂寥な半島、ポプラの樹立に圍まれた一つ家に鎭靜な生活を送つてゐた。就職後間もなく、ニーチェは二三の友人とその湖畔に遠足を試みたが、獨り別れて師の別莊を音づれた。繁つた樹の枝が家を隱くし、彼の立ちとまつた門は堅く閉されてゐた。内からは微かにハーモニーの響が洩れた。案内を乞ふた從僕が再び現て、「御主人はヘル、ニーチェが曩にライプチヒて一夕お會ひ申し

た御仁と同じ方であるかを知りたいと言はるるが。」――「然り」と答へると、彼は猶豫なく奥まつた一室へ通された。斯うして彼はワグナー夫妻の唯一の親友となつた。

その頃のワグナーは彼の天才の頂上に立つ時であつた。彼は未だ名譽にも汚されず、社交にも染まず、ひたすらその純潔な才能を發揮することに努めてゐた。彼は公衆から離れ、新聞記者から離れて、唯だ孤りであつた。偶まコシマ、ワグナーとの結婚が世間の物議を招いたので、靜かに隱退して其大作の完成を急いだ。雄大無雙な四部戲曲がそれであつた。いかなる公衆が之を聞き別け、いかなる唱歌者の一團が之を歌ひ、いかなる劇場が之を上すことが能きたであらう。遮莫之は俗衆の快樂を目的とせず、その心靈の貴い攪亂と救濟とを本旨とした。世界をこそ其膝下に招け、彼は斷じて世間に降服せじと決心した。今、「ラインゴールド」と「フォルキトリース」の二曲が成り「シーグフリード」の完成に近づいてゐた。彼の天才は極度に發達し、彼は製作者の勝利の歡樂を誇つた。

不安と憤りがまた彼の喜に雜つた。なぜなら、彼は聞かれることを欲した。彼には萬人の夢を驚かす名譽心があつた。常に重い足並の獨逸人は彼の堪ゆる所でなかつた。「私を援けよ」斯う彼は叫んだ。「なぜなら、汝は今强くなるべく始めた。汝は昔から汝の精神上の師父を侮辱しまたは粗略にした例がない――ルーテルをもカントをもシラーをもビートーベンをも。て、私もまた是等の師の後繼者であるからは、私は援けよ。私は自由な劇場を要する。私にそれを與へよ。私は私に傾聽する公衆を要する。汝はその公衆であれ。私を援けよ、それが汝の義務だ。そのかはり私は汝を光榮するであらう」と。

丁度斯樣な時にニーチェが彼を訪ねた。讀者はその會見の光景を胸に浮べて見るがよい。一方は鋭い容貌と神經質の聲を有ち、ショーペンハウエルの哲學を心内に羽含んだ熱心博學な青年、一方は異常な智慧と經驗を積み、五十九歲のその歲にして些の衰弱の相もな

く、愈々強く愈々深い熱望と期待に燃えてゐた天才——一方が崇敬と友愛の情を捧ぐれば、一方は感謝と好奇の意を以て之を受けた。『私はあなたを助けるてあらう』と一人が言ふならば、『汝は私に據て偉きくなれ』、斯う一人が答へたてあらう。

夜は明かく、話ははずんだ。辭し去らうとするニーチェを送つて、ワグナーは彼と添ひながら河のほとりを歩いた。ニーチェの心の喜は譬ふるに物もない。久しく彼の求めてゐたものが遂に來た。彼は青春の情熱から、愛し敬ひ傾聽すべき的を尋ねてゐた。唯だ書物の上てのショーペンハウエルに對する崇拜は餘りに冷索てあつた。遂々彼は師を現世の人に得た。「如何なる尊敬も愛も餘りに強しと謂ふことの能きないほど偉大な人格に接觸することが能きた。その時から彼は自分の一身を捧げて斯の孤獨の天才を援け、固陋な俗衆と戰ふべく、大學と寺院と國會と王室との獨逸と戰ふべく決心した。

『來れ、そして二三日我等の軒下て眠れ。……來れ、そして私がゲーテ等と與に獨逸の自由と稱びなす所の私の永い間の信仰を援けて吳れ』。或時は斯んな手紙がワグナーから達いた。ニーチェは亦ニーチェて他の自分の友達に向けて次のやうな手紙を送つた。

ワグナーは我等の總ての熱望を現實してゐる。豐かで偉大でそして宏壯な精神。あらゆる愛に値し、あらゆる智識に餓えた強い人格、魔力ある男子。……世の中の記者や音樂批評家が彼に就て書く一言だも信ずるな。世界に誰一人でも彼を識つた者はなく、誰も彼を批判することは能きない。なぜなら、全世界が據て立つ基礎は彼の基礎ではない。彼の面前で我等は丁度神と接してゐるやうに感ずるほど、彼は左樣に高い理想と左樣に震動的で左樣に深い人道とに充されてゐる。

ワグナー夫人も亦非常にニーチェを愛してゐた。彼女は斯んな事を言つた。『私はあなたが敎授や博士や言語學者だと云ふことを忘れて了つた。たゞ二十五歲のあなたを覺えてゐる』と。

かうして彼等の間の交は日に增し深くなつた。一方ニーチェは熱心で眞面目な大學敎授としてバーゼルの人々から深い尊敬を拂はれてゐた。その間に彼の希臘

文明に關する研究は漸く熟した。彼は『悲劇の出生』の稿を起した。斯樣に平隱な當時の彼の生活を妨げたたつた一つの出來事は一八七〇年の普佛戰爭であつた。彼は看護隊附の一從卒として出征したが、間もなく重病にかゝつて故郷に送り返された。それ以來彼は一生涯病と戰ふべく運命られた。

彼は病を押して教授の職に復つた。一八七二年にはワグナーがベーロイスへ移つた。その頃、ニーチェと彼との交際は頂點に達した。『私はワグナーと同盟を作つた。何れだけ私達の友情が濃く、どれだけ私達の計畫が一致するかは貴下の想像に及ばない所だ。』と、彼は友人へ書き送つた。彼はいつそ教鞭を抛つて專心ワグナーの事業を援けようかとまで思つてゐた。彼が後年に書いた『ベーロイスに於けるリチャード、ワグナー』と題する論文は當時の交情に對する感謝であつた。

その論文の中て、ニーチェはワグナーを以て近代のユーースチラスに比してゐる。古代の『悲劇的』靈智は再び彼に於て現はれた。而かもショーペンハウエルに於ける如く哲學的形式を以てでなく、藝術の不朽な具體的の形で。彼は『ヂヲニソス』的大才を有ち、その心内に大波打つ無限際の感情を單なる詞だけでは表現しえないことを知つて『頌酔戲曲家』となつた。て、俳優、音樂、詩歌の諸藝術を打證して偉大な綜合藝術を形作つた。『藝術的天才がその全發達を遂げ發育の頂點に達した時は、彼自身が完璧の作品である。彼は眞に自由な藝術家で、彼の思量には必ず同時にあらゆる諸藝術が浮び上る。彼は外見上相背反した音樂と詩歌の兩世界を調和させる仲介者である。彼は我等の藝術的機能の一致と圓滿を取もどす。て、その一致たるや、智を以て量り或は理を以て推すことの能きないものて、唯だ行爲が之を現はすのである。』と、ニーチェは言つてゐる。要するにワグナーは希臘悲劇の精神を近代に復活させた第一人て、歐州文明に於ける唯一稀有の出現であり、やがては人道の新時代の曙を告げる聲であると言ふのだ。

六、

ニーチエは言語學上の立場から希臘を研究してゐるうちに、ショーペンハウエルやワグナーの理想に感化を受けて、その文明の中に特殊な意義を發見した。一八七二年に彼の公にした處女作『悲劇の出生』(Die Geburt der Tragädie) がそれである。この書はやがて彼の哲學の基礎を成すので、ニーチエの研究には忽諸にすることの能きない物である。

ニーチエの出立點はショーペンハウエルの哲學である。彼はこの偉大な厭世家と與に、世界の根底が意志にあることを承認した。この意志はあらゆる生物を貫通し、あらゆる創造に其姿を現はす。それは忍苦の意志であり。それあるが爲めに人生は斷えざる鬪爭である。若しも人間が理智の眼を以てこの世界を視るならば、我等の生存は無價値である。なぜなら、我等の人生に於て苦痛は遙に幸福より多いのであるから。果して然らば我等が幸福に達する途は意志の絕滅を計るよりほかはない。一たび我等の意志にして絕滅せられんか顯象世界はおのづから消滅するであらう……これがショーペンハウエルの到達した解決である。ニーチエは彼の意志說に於て偉大な眞理をみ、また其忍苦の教を承け容れた。「悲痛が人生の根本であり唯一の眞理である」とした。彼はまたヘーゲルの哲學が導いた輕薄な文明と近代の安價な樂天觀とを救濟する無二の良藥として、ショーペンハウエルの破邪的人生觀を最も喜び迎へた。然かし彼は後者の哲學に全然降服したわけではない。殊に彼はその消極的解脫觀——意志絕滅の敎義——に於て遠く其師から別れた。

ニーチエは希臘文明を研究してゐるうちに、その國民の間に行はれた立派な人生觀に逢着した。それは藝術的に解脫を求める方法である。ショーペンハウエルの說くやうに理智の眼からは肯定し甘受することの能きない人生も、藝術的顯象として之を視る時は充分承認の價値がある。興趣に充ちた藝術家の心像または優秀な藝術品としての宇宙は、その創作者に一種登仙の

歡樂鄕を賦へる。て、人は彼の美的感情を研き、美的見地からのみ宇宙を視るやうに馴らされねばならぬ。斯うして彼は直接（藝術家）または間接（藝術鑑賞家）に、創造的幻像の賚に由て美的世界の占領者となり、其齎す歡びを味ひ、人生を肯定することが能きる。

然るに斯樣な藝術鄕には二つの違つた天地がある。その一つは人間の個性的本能から作られた內的幻像の世界、即ち外界の模倣よりうる獨自の夢の世界て、ニーチェは之を「アポロ的」情態と稱んてゐる。そはたゞ好ましき夢、意識された虛僞て、斯樣な「アポロ的」藝術を代表するものは彫刻、繪畫、敍情詩などてある。易言すれば「アポロ的」人間は美の幻像に由て厭世觀から遁れる。そして彼は斯う人生に言ふ、私は汝を欲する、なぜなら汝の像は美しく、汝は夢みるに値するからと。

更に今一つの藝術世界は我等が宇宙的意志の認識に由て生ずる世界てある。前者の個性化の世界と違つて、之は宇宙的自覺または融合の世界てある。人間がその個性を滅却して大宇宙に瀰漫する意志と一體になり、自らもその意志の一部たることを感ずる時に生ずる情態てある。例へばある劇樂が齎す甘醉、一陽來復の春が生物に蘇えらす歡喜のやうな心的發作に於て、宇宙と自己とを別つ障壁は急に除去せられ、我等は大自然と融合し抱和することを意識するてあらう。ニーチェは斯樣な情態に名けて「ディオニサス的」情態と言つた。て、「ディオニサス的」人間の自然の聲は音樂てある。されば音樂は永遠にして野性的な意志の表現てあり、また宇宙の深底を流れる斯の永遠意志の完全な象徵てなければならない。斯樣な「ディオニサス」的情態に於て人間は宇宙的悲慘を意識するが、また同時に彼が抱合する自然の永遠性を悟り、併せて彼自身の不滅を感想するてあらう。彼は有限なる凡らゆるものの恐るべき破滅――例へば英雄の死の如き――を目擊しながら、却ていかなる力も滅することの能きない永遠意志の生命を彼自身の中に發見するのてある。易言すれば、「ディオニサス的」人間は、現象界の流轉の底を流

れる意志の永遠性を悟ることに由てその厭世觀から遁れる。そして彼は斯う人生に言ふ、私は汝を欲する、なぜなら汝は永遠の生命である故にと。

ニーチェの説に據れば、初代希臘の民は實に斯樣に幸福な二つの藝術的幻像に由て其厭世觀から遁れ、價値あり住みがひある人生を造つた。

希臘太古の歴史を研べて見ると、その國民は性來厭世的の氣分の多い民族であつた。彼等は人間の悲慘に眼を閉ぢて容易に樂天觀を把持し得るやうな輕い天分を缺いてゐた。言ひ易へれば、彼等は生存に對する恐れ悲みを最高度に解し、苦み悶えうる微妙な感受性のもとに生れた。この特性が――人生を住み易くさせる爲めに――彼等をしてオリンピックの神々を創造せしめた。現實の恐怖から遁れる手段として希臘の天才が發見した是等の諸神は實に立派な「アポロ的」精神の發現であつた。て、彼等はその創造に信じ美しい諸神に賴つて、再び爛漫たる人生の春を取戻した。詩聖ホーマーは斯樣な「アポロ的」希臘精神の精髓であり、彼の詩歌はその邦特殊の文明の勝利を誇つてゐる。

然るに一方には斯の「アポロ的」文明と對抗して、次第に「ディオニサス的」或は「悲劇的」文明が其國民を侵蝕し始めた。その起原は野蠻人の間に行はれた舞宴(オルジー)である。彼等は斯樣な機會を利用して全き獸的情態に復り、放縱素野な本能の趣く儘に其歡樂を貪つた。て、その風習が知らず〳〵の間に希臘人にも傳つた。然かし彼等は獸的にはならなんだ。彼等の舞宴は四期の交替を祝ひ自然との交通を歡ぶ祭禮となつて現はれた。斯樣な「ディオニス的」舞宴が實に希臘悲劇の濫觴である。

その悲劇の最初の形は人羊神(サチル)の合唱であつた。希臘人は人羊神を「自然人」の模範として考へた。彼は凡ての文明の背後に潜んだ不朽の自然を代表し、その出現は一擧にして文明の觀念を打消すのみならず、人と自然とを距つる障壁を打破する力を有つ者と思はれてゐた。即ち彼は永遠に力強く常に生々たる自然の象徴であつた。彼は文明に汚されず、獸美にも墮ちない一

種崇高にして神聖な性格を授けられた。彼は最も、熾んな人間の本能の化身として、神に近づくとを許された。彼は自然の智慧てあり、同時に生命の力てあつた。彼は素野てはあるが、然かし憐憫の心をもち同情をも解してゐた。なぜなら、彼はディオニサスの忍苦を分つものてあるから。

人羊神の合唱は舞踏と音樂に由て觀客に一種神聖な熱情を起さしめた。彼等はその誇とする文明と個性とを忘却してその羊神と同化し、彼の野的狂醉を分つのてあつた。て、合唱の頂點に於てディイオニサスの神が其姿を現はし觀客に面接する。即ち人羊神の合唱は「ディオニサス的」歡喜が更に「アポロ的」幻像を誘起したものてある。

かるが故に希臘悲劇は人間の「ディオニサス的」情態を現はすに「アポロ的」藝術を以てしたもので、兩者の微妙な調合の成果てある。然かしその根本の神興（インスピレーション）は矢張音樂的てあつて、意志の勝利の叫びにほかならない。て、その主人公は唯一のディオニサスてある、たとへそれが色々な悲劇的人間の形をとつて現はれたにしても。

ニーチェに從へば、斯様な「悲劇的叡智」の時代は希臘文明の最高潮てあつて、ユースチラスの戯曲とヘラクリタスの哲學が之を代表してゐる。然るにその文化の後年に於て斯様な「ディオニサス的」文明は科學的文明に壓倒された。美の幻像または永遠意志の認識に由て其厭世觀から脱れて來た人民は、更に第三の方法即ち理的智識の世界をその隱れ家とするやうになつた。實際に科學は矢張厭世思想に對する良藥てある。科學的人間は人生に對して斯う言ふ、私は汝を欲する、なぜなら汝は知るに値するからと。ソクララスが現て斯様な文明を建設した。かくて希臘の藝術的または悲劇的文明は斃されて、科學的文明が起り、虚僞にして安易な樂天説が世界を支配するやうになつた。猶ほこの事に就ては後章て詳しく紹介しようと思ふ。

以上はニーチェの希臘文明に對せる見解てあり、また彼が初期の思想を具體化したものてある。要するに

彼の哲學は藝術的人生觀てあつた。それにはワグナーの感化が與かつて力あることと思はれる。彼にとつては人生は美の世界てあり、また意志の世界てある。然るに意志の世界は力と本能の世界てあつて同時に溢る生命の世界てある。理智が否定する我等の生命も美意識と本能によれば之を肯定することが能きる。で、ディオニサスの力は益々アポロの美を發揮するのてあるから、力は即ち美てあり、生命の愈々榮える所に藝術は益々其春を誇りうるのてある。一方また、人生が苦難てあればあるだけ我等は强き意志を要する。即ち人生の悲慘と勞苦は美の源てあり、生存の價値を增進する刺戟劑てある。

要するにニーチエはショペンハウエルに從て意志の世界を承認した。彼にとつては苦難はこの世に於ける唯一の事實てある。彼はその師とともに安逸な樂天觀を避けて、冷たく醒めた道を採つた。然かし彼は前者のやうに意志の否定に由る消極的なあきらめから斯の現實世界を遁れようとはせなんだ。彼は斯う人生に言つた。私は汝を欲する、なぜなら汝は永遠の生命てあり、美と力の源てあるから。汝の苦難の深ければ深いほどその美と力は愈々充ち溢れ、汝は益々住むに値するからと。斯うして彼は人生を肯定し、そを全的に住むことを教えた。即ち彼にとつては

人生＝美＝力

てあつた。斯様な思想は明かに異教的、反基督教的てあり、反科學的てあり、また反民主的てあらねばならなんだ。ニーチエの後年の教義が既に充分その中に窺はれる。

七、

ニーチエがショーペンハウエルから享けた感化は偉大な者てあつたにしても、彼の思想が前者のそれと歸納に於て非常な相違のあることは前章述べた所て明らかてある。彼のこの疑は一八六七年頃から既に芽ざしてゐた。彼が第一にショーペンハウエルに趣いた點はその深遠にして破邪的な厭世觀てあつた。安逸な科學

的樂天說の一世を風靡する世の中に、誠實な思想家の採るべき唯一の態度は斯樣に恐ろしい現實曝露の思想よりほかにはなかつた。血氣な彼は先づ之を金科玉條として在來の自己及び世界を破壞することを第一の義務とした。然かしショーペンハウエルの消極的虛無的な結論――その意志否定說に到達したとき彼の疑は起つた。彼は斯う考へた。若しも十九世紀が凡庸にして安逸に馴れた俗衆(フィリスチン)の榮へる時代であるならば、一方斯の世紀は、更により以上、生活に疲れ忍苦に倦み姑息な平和と虛無を憧憬するデカタンの時代である。然らば安價な樂天說の有害であるやうに、消極的虛無主義がまた同樣に有害でなければならないと。

前にも述べた如く、ニーチェは自識したデカタンであつた。彼は年少の頃から、自己及び自己の周圍を腐蝕し、世の中に擴がり蔓つた斯樣な頹廢の氣運を思つたとき、猛然として之に刄ふべく決心した。以前は世の中の安價な樂天說に對抗する爲めに結んだ同盟者も、此度は忌むべき虛無主義者として自分の敵に廻さざるを得なくなつた。從前の彼の「敎育者」は實は彼の誘惑者であつた。若しも彼がその深い影響から振り離れない限りは、眞の彼自身であることは能きない。生の肯定者として、「ディオニサス的」叡智の哲學を「超人」の哲學まで推し擴めることが能きない。斯う云ふ意味で彼は最後にショーペンハウエルから別れた。

然かし彼がショーペンハウエルに私淑した所以は唯だその思想上ばかりではない。「最初に我等は哲學者を信ずる。次に我等は斯う言ふ、若しも彼の說明の方法が誤つてゐるにしても彼の命題は眞であると。最後に我等は斯う結論する、彼の命題そのものは別價値で、その人の天性が百の體系に値するのだと。敎師としては彼は或は甚だ不適當であらう。然かし彼の人格そのものは常に正しい。て、我等の注意を要する點はこの點である。世の中には哲學者らしからざる或物(サムシング)を有つた哲學者がある。即ち彼は諸哲學の基礎となる天才を有つてゐる。」と彼は言つてゐるが、この矛盾らしい警句が、彼のショーペンハウエルに對する態度を最も好く

說明してゐる。即ち彼は斯の大哲人の人格に深い信用を拂つた。それだけその人から離れることが彼には大きな苦痛であつたらう。我等はいかなる天才の一生に於ても斯樣に崇高な離別の悲哀を目擊したであらう。それは蛇のその殼をぬぐ如く、解脫と進化の生活に必ず免れることの能きない階段である。自我に達する爲めの苦しい道である。

ショーペンハウエルに別れたニーチェは更により苦がい經驗と悲哀を以てワグナーとも袂を分たなければならない時が來た。

一八七二年にワグナーがベーロイスへ移つた後にも、ニーチェは猶ほ彼と親しい交際を續けてゐた。然かし彼の前者に對する信用は餘程久しい前から次第に疑惑の雲に掩はれた。殊にトリーブシェンで初めて逢つた孤獨の天才は、今や世界的の名聲を博して彼の欲する公衆を其周圍に集め、得意の頂上でゐた。彼は政治に容喙し、革命黨に關係し、輕薄な國民性の謳歌者ともなつた。彼の天才には不思議な二重性があつた。「彼の性質は突飛で、バッハやビートーベンほどに深い天分を持たない」と、ニーチェは思つた。殊に彼は藝術家としてのワグナーの素質を疑つた。彼は音樂家であらうか、詩人であらうか、作劇家であらうか、それとも思想家であらうか。否や彼は一種のデカダンではあるまいか。斯うした疑が人知れずニーチェの心の中で長い間煩悶を續けてゐた。

實際ニーチェはこの不思議な天才の絢爛な樂才に眩惑して彼を誤解したのである。最初彼の眼に映つたワグナーは原始的純一な天才としてであつた。新しい文明の强力な先驅者としてであつた。然るに事實は之に反して、彼は寧ろ爛熟した文明の黄昏を彩るしんがりの巨人であつたのだ。彼はその神秘的鬼才を驅つて、幾世紀かに積み上げられた凡らゆる材料から、微妙にして不可思議、珍奇にして復雜な藝術を秋の夕陽の色に染出した。それにはニーチェの誤解してゐたやうな純美も崇高も確實な勝利もなかつた。猶ほニーチェの說に從へば、ワグナルの音樂は「松火」の火の如きもので

あつた。それはデカダンの時代に適つた藝術的表現てあり、世紀末の人心の迷路の奥を照らす燈明てあつたのだ。て、この偉大な魔術師から脱れることはニーチェにとつては生死の重要問題てあるとまて思はれた。「私の一生の最重要の出來事は生命の回復てあつた。なぜなら、ワグナーは實に私の病氣てあつたから。」と彼は言つてゐる。

斯うしてニーチェの心は次第にワグナーから離れた。一八七六年に彼が「ベーロイスに於けるワグナー」なる一文を書いて、其天才を賞揚した頃は、彼の心は全くその友から離れてゐた。「私の過古の一瞬、最も麗はしい「靜かな海」の一時期――しかし私の人生て最も危險な一時期――に對する感謝の記念として私はその書を書いた。……それは實際は離別てありまた左様ならてあつた。」と彼は言つてゐる。丁度その年ベーロイスの祝典に列したニーチェは、實際のワグナーと彼の理想のワグナーとの間に到底越すべからざる講渠のあることを覺つて、一層失望の度を深くした。越えて貳年、彼の「人情的、餘りに人情的」が世に現はれた際に彼等の間の交際は全く斷たれて了つた。

ニーチェは生來のデリケートて熱情的な性質から常々友愛、嘆稱、尊敬の的を求め搜してゐた。彼のやうな性質の者はその中て自由に呼吸しうる同情ある團欒の必要を人一倍に感ずるのてある。て、彼の生涯の何の時期をみても、必ず其の眞情を打明けることの能きる一二の友人を持つてゐた。彼の友情は非常に熱烈てあつた。それだけまた悲慘な終局が來易すかつた。彼は一たび友達をうると、その人々のまはりに凡らゆる美徳を凝化させて、彼等の實質以上に其美その文を擴ろげ、之を慕ひ之を崇めようとした。彼は情熱の迷ひから友達の凡らゆる惡徳や弱點に眼を閉いだ。彼のローマンチックな性癖は其求める者に完全を觀なければ已まなんだ。然かし彼のこの情熱は熾んてはあつたが、卑俗や嫉妬的てはなかつた。丁度彼の婦人に於ける關係のやうに頗る精神的のものてあつた。彼は或時はボール、リーのやうな思想家に非常な尊敬を拂つたり、

メーセンブツグまたはサロメなど云ふ婦人に格外な敬意を表したりした。彼がワグナーを崇拜し始めたに就ては斯樣なローマンチツクな情熱が殊に手傳つた。彼は靑春の血氣からショーペンハウエルの哲學に入り、希臘文明に其憧憬の滿足を買ひえた矢先、ワグナーの藝術が斯樣な文明の復活斯樣な哲學の具象として彼の眼を牽いた。彼の迷つたのも無理はない。然かしやがては醒める時期が來る。殊に彼のやうに、一方智的に誠實て正直な者には其覺醒は人一倍に悲慘でなければならない。

果してその夢の醒める時が來た時、何んなに彼は苦しんだてあらう。彼は藝術家以外に人としてのワグナーを忘れることが能きなんだ。て、彼はその人の前ては自分の思想を殺してまでも其友情の長く續かんことを希つた。然かし遂々結末の時が來た。彼等の間を渡した思想人格の橋梁の最後のスパンが取はずされた時に、ニーチェの誠實な思想的良心は何條默して已むことが能きたてあらう。その後彼は「人情的、餘りに人情的」(Menschliches, allzu Menschliches)「ワグナー事件」(Der Fall Wagner)「ニーチェ對ワグナー」(Nitzsche Contra Wagner)など云ふ著作を公にして、彼の立場を明にしてゐる。

從前幾多の批評家はニーチェ對ワグナーのローマンスに於て、多くニーチェに銳い抗擊の矢を向けた。任他、彼の妹の編纂した忠實な傳記はこの問題の解決に資すべき新しい許多の材料を與へてゐるが、私は茲に之を詳述する餘裕を許されない。

要するに私として唯だ之だけのことを言つて置きたい。前にも述べたやうに、ニーチェは其生涯に於ける唯一の慰籍てあつた友情に於て非常にローマンチツクてあつた。彼は美と偉大の崇拜者てあるだけ、其愛情にも卑劣や惡德の雜ることを忍びえなんだ。彼はその友達を對者として能きるだけ麗はしい夢を見た。勿論それは彼の缺點てあるに相違ない。然かしその缺點は崇高い人間の所有すべき缺點てある。彼はその爲めには醒めた夢の跡て恐ろしい悲哀の犧牲を拂つた。て、

至極矛盾的な彼の友情は實はその至諄な性癖の發露てあつたのだ。

晩年になつてから彼はその頃の事件を顧みて、次のやうな感懐を洩してゐる。

私達は友人であつた。そして終ひにはお互に他人となつた。然かし、それは在るべくして在つたのだ。私達は恰もそれを恥ぢるかのやうに、隠立したり偽つたりしようとは思はない。私達は各自それ自身の航路をもちそれ自身の港を持つ二つの舟だ。私達は嘗てなした如く、再び相逢ひ、互に喜ぶことが能きるかも知れない——然り、是等の好き舟がかくも平和に同じ港に繋がり、同じ太陽の光の下で、恰もその航海が終りであるかのやうに休息つた彼の時のやうに。然かしその後私達の努力の力強い必然は再び私達を違つた海と氣候の方へ遠く離した。或は私達はもう逢へないであらう——それとも、逢ひは逢つてもお互に知らずに濟すであらう。それほど海と太陽は私達を變へた！。かくて我達はお互に他人となつた。これも高い意志のお思召だ。さればこそ私達は猶更お互を尊敬し合はねばならない。さればこそ私達の舊い友情は猶更神聖にせねばならない。かの天には疑もなく無限際な星の道があらう。で、その中では、遠く距つたやうに見える私達の目的や手段も實は一番近い圓弧に過ぎないことであらう——斯様に高い思想の程度まで私達を昂げねばならない。然かし斯様に崇高い意味の友情に達するには、我等の生命は短く、我等の眼界には限がある。さもあれ、私達はこの地上では敵たりとも、せめて星の界の友情を信じよう。（『歡の智慧』）

何と云ふ温かい心であらう。そして何といふ透明な智慧であらう。誰が斯様な人の友情に嫉妬や依怙のさもしい劣情の挾まることを信じえられよう。

ニーチェは、よし公人としてのワグナーに何れだけ劇しい抗撃を加へたにしても、個人としては終生彼の德を思ひ、その恩に感謝を拂つてゐた。彼はその最晩年に自叙傳『この人を見よ』(Ecce Homo)を書いた中でも次のやうに述べてゐる。『私は玆に私の生涯のかず〳〵の慰安を語るにつけても、遙に他に秀でて心の底から、最も深く私を慰めてくれたその一つに感謝の數言を費さなければならない。勿論それはリチャード、ワグナーと私との親交を言ふのである。他の人と私の關係は輕く取扱ふことが能きるが、私がトリープシェンて費した月日——信頼と愉樂と崇高い神興と深い意味の瞬間とのそれ等の日——は何んな價を以ても償ふ

ことが能きない。私はワグナーが他の人に何う見えたかは知らないが、尠くとも私と彼との間の空は嘗て雲に隠されたことがない」と。

ニーチェがショーペンハウエルやワグナーの門に入つたのは、彼自身を發見する爲めてあつた。て、彼が是等の師を辭し去る時は即ち彼の眞自我の醸された時てあつた。然かし新しい酒は猶ほ鍛えられねばならぬ。彼はどうしてそれを醇化したか。

丁度その頃彼の前には恐ろしい難關が横はつてゐた。それは一生涯彼を苦しめた病氣である。前にも述べた如く、ニーチェは一八七〇年に出征した際、劇烈なヂフテリヤに感染した。またその時服した醫藥の爲めに、後には强度の神經衰弱に罹つた。それが終生彼を苦しめるやうになつた病氣の源であるらしい。その時彼は病を押して教授の職に復つたが、丁度ワグナーと別れる少し前頃（一八七五）から病勢が募つたので、一年間請暇して休養せねばならないことになつた。

その病氣は初め何れだけ彼を苦しめたてあらう。『噫、何れだけ私は健康を欲するかよ。安易な一夜、柔らかな光線の一すぢ、消化の好い一椀に向つてさへ、どれだけ私は感謝の意を表するかよ』と彼は言つてゐる。彼は劇しい病苦の中て樂譜などを作つて僅に自ら慰めてゐた。『私は二週間のうちに十分間ばかりしかない稀な時間を擇んて「孤獨の讃歌」を作つてゐる。その恐ろしい美を貴下にお眼に懸ける時があらう』と、友人に書き送つた。また彼はその頃斯んな事も言つてゐる。『私が病氣て床に横はつてゐる時、私は人生の無意義て我等の終局は幻影に過ぎないと云ふ思想に犯されることがある』と。

彼は瑞西の山中や伊太利の海岸、さてはその温泉場て斯様な月日を過ごした。つく〳〵物憂さに堪えない折には早く良い妻を得たいと思ふことさへあつた。

然かし彼の强い意志は容易く病苦の前に屈するものてなかつた。ゼネバ湖畔の明媚な風光とその淸冽な空氣は先づ彼の元氣を蘇えらせた。

私は私の善良な意識を回復した。私は今日まで私自身を强める爲めにあらゆる努力を盡した。私のこの努力は自分自身の爲めのみではない。で、私は再びその道を辿らうと思ふ。最早過古の記臆も未來の失望的な豫兆も、何物も之を阻めることはならない。人間も尊重し拜跪すべき唯一の物は崇高な行爲である——これが今日の私の發見である。妥協となし！　決して、決して。深奧な成功は唯だ自巳に忠實なることに由て得られる。若しも私が弱くなり懷疑的になるならば、私は私自身のみならず私と與に發達する幾多の心靈を荒廢さすものである。

彼が『謎と問題の友』なる病氣に打克つ爲には實に斯樣なプライドを要した。

ボヘミヤとフランコニヤを分つ山嶺はベーロイスから數哩の所にあり、深い森が之を掩ひ隱してゐた。ニーチエは此處にも暫く俺留した。森林の逍遙が彼の日課てあつた。その深い沈默と冷たい息とが峻嚴な訓練を與へた。『若しも我等がこの森と山とのやうな確實にして靜肅な地盤を我等の心に與へないならば、我等の內生活は凡ての平靜を失ふてあらう。て、それは都會人の心のやうに破られるてあらう。……靜平、單純、偉大！。』斯う彼は叫んてゐる。

一八七七年五月彼は再びバーゼルに歸つて敎鞭を取つたが、彼の病氣は到底永くその位置に在ることを許さなんだ。そこて彼は七九年の春辭表を差出して閑散な身となつた。その時彼は三十六歲てあつた。新しい生活が彼に始まつた。それは不確實な危險な生活てあつたが、一方には自由と獨立が得らるることとなつた。

孤獨は偉人の運命てある。然かしニーチエほど眞實孤獨の生活を甞めた者は尠ない。病氣が彼に閑寂を餘儀なくしたその頃から、彼は生涯の慰籍としてゐたこよない寶——その尊い友情をも、折重ねて失はなければならない羽目に陷つた。それは前にも述べたワグナーとの離隔てある。

自分自身を他人に傳へることの能きないほど最惡な孤獨はない。人間の天性の相違は如何なる鐵の兜よりも猶ほ堅い兜てある。て、充實した誠の友情はたゞ『對等の間』にのみ存する。『對等の間』！。實際この詞は、常々から巳むを得ず孤獨てゐる者にとつては、慰籍と希望と誘惑に滿ちた隱語てある。……深刻な人間ほど友を要する——若しも彼がなほ神に親るにあらざれば。

と、彼はその妹に書き送つたことがある。病氣の苦痛、孤獨。淨く溫かい友情の求めて得られない孤獨。

ニーチェが教職を辭したことは、たとへ已むを得ない動機に由つたとは言へ、彼の生活の局面を開展させるに與つて力あつた。前にも述べたやうに、ニーチェは大半消極的の理由から彼の職業を擇んだ。然るに彼は次第に其の天職を自覺するに及んで、言語學と云ふやうな批評的學究的な科學に甘んずることが能きなくなつて來た。彼のやうに鋭い自省癖と心理的解剖力をもつ者が、何時まで斯んな冷索な客觀的の事業に安心して携はることが能きよう。で、彼は永いこと自分の職業と良心との間の矛盾に惱まされてゐたのであるが、丁度彼の病氣は彼をして否應なしに其職業を捨てさせるやうになつたので、ニーチェは斷然其苦痛な過去を棄てることが能きた。

彼を導いた孤獨と閑散と苦痛の生活は彼をして其眼を外から內に向けさせた。騷々しい世間の響に聾せられ、衒學と博識の空氣に埋れ、小さな義務の拘束を受けて、冷たく固まつてゐた彼の自我が再び覺め始めた「私の病氣の最も苦痛な時代ほど私に多大な幸福を與へた年はない。この「私自身への歸復」は私にとつて實に高價な回復であつた」と彼は言つてゐる。斯うして彼は冷靜な科學者から、主觀的な哲學者となり、道德家となり、論議を乘越した豫言者となつた。

永い病氣の苦みが彼の心からあらゆる美しい夢を振落した。人生が其人の前に微笑む健康者を慰め欺くに充分な色々倣大な忘想も、彼には却て苦笑の種となつた。不斷生死の境目に立つ所から、彼は人生に對してより大膽になつた。「私は苦痛が我等をより善くするや否やは知らないが、然かし尠くともそれは我等をより深くする」と彼は言つた。

斷間なき病苦の犧牲にされた者が採るべき道に二つある。それは彼が一切浮世の事を棄てて空寂界に悟入するか、それとも强い自我を研いて最後まで運命に刄向ふかである。ショーペンハウエルの意志否定か、積極

的な意志擴大かてある。勿論ニーチェは彼の天賦に從て後者の道を採つた。斯様な錬獄に立て、彼はその受ける苦痛の强ければ强いほど反抗の度を高めた。彼は唯だ自我にのみ頼り、深い猜疑心を以てあらゆる世の中の誘惑的な色や響を視た。彼は人生に對して復讐を欲した。そが幾千年の間に建てた數知れぬバベルの塔や誇りがな文明の假面を彼は容赦なく打碎いた。凡そ戰を避けて平和を謳歌する哲學、幸福の文字に消極的な意義を與へる道德、神や彼岸を恃む宗教——を彼は頽廢したデカダンの徵候と見做した。苦慘のほかに何がこの世にあるか、その苦慘と戰ふ强い意志のほかに、何の貴い物があるか、と彼は考へた。

斯樣な苦しい戰に於て彼は傲慢を必要とした。彼はその身を古來の悲慘な偉人の生活に較べて見た。レオパルディか?。然かしレオパルディは病に敗け、人生を呪つたてはないか——病人は厭世家となる資格がないと云ふのが斯の世の冷たい眞理てあるのに。耶蘇基督か?。然かし基督てすら十字架の上ては心衰へたてはないか。彼はその時、「父よ父よ。なぜあなたは私を見捨て給ふか」、然う言つたてはないか。然るにニーチェには神もなく父もなく信仰もなく友もなかつた。彼はあらゆる助力を自分自身に求めて更に屈しなんだ。かりそめの悲み悔みも敗辱の影てあるとまて彼は思つた。

苦痛の壓制の下に曲げられた理智の非常な張力は萬の物を新しい光て見せる。て、その一々の新しい光線の言ふべからざる魔力は、自殺の總ての誘惑に打勝ち、患者に生活を愛欲させる充分の力を持つてゐる。彼は、健全な人間が何の思慮もなくその中を蠢動する温かく愉快な夢の世界を輕蔑の眼を以て視る。彼はまた、自分が今迄耽つて來た幻想の最高なるもの最愛なる物をも輕蔑の眼を以て視る。この輕蔑は彼の喜であり、また彼の肉體の苦痛をこらへるに必要な釣重である。……我等の傲慢心は嘗て知らなかつたほど叛鼕し苦痛と稱ぶ暴君——我等を人生に對して試めす暴君に、笑つて矢を向けさせる。この暴君と面前に對抗して人生を堪える(こら)と云ふとは限りなく興味のある仕事だ。(『日の曙』)

て、彼はその苦痛に對して反抗し人生に打克つためには樂天を will した。孤獨や病氣から厭世思想のい、どん底まて嘗め盡して其原因結果から弱點まて知り貫(ぬ)

いた彼は却て樂天說を謳歌した。彼はその絕大な苦戰の旗印として是非とも强い意志を表はすにはこの積極的態度に由らなければならなんだ。彼は鋭いエネルギーを以て遂に打克つた。て、彼は樂天主義者となつた『私の生理的回復はたゞ他の回復の一結果てある』と言つてある通り、彼は先づ靈に克つて然る後肉にも打克つた。『私は再び新しく人生を見出した。私は私に再會した。私は他人が苦心の結果に得るあらゆる善き事細微な事までも味つた。私は私の哲學を回復し生活すべく意志した。まことに誰も聞け、私の元氣の最小極に達した時が即ち私が厭世家たることを廢めた時てある。自己保存の本能が私に困疲と失望との哲學を棄てさせた』と。

八、

斯様にして眞のニーチヱは生れた。

前にも述べたやうに、『悲劇の出生』時代のニーチェの態度は藝術的哲學者てあつた。青春の血に燃えてゐた彼に、ショーペンハウエルの哲學やワグナーの音樂や希臘の文明は美しい夢の世界、華やかな藝術の天地を開けて見せた。目の後彼の思想は進化した、然かし『轉化』はしなかつた。我等は再び彼の晩年の『超人』說に變形した『ディオニサス的』精神を見るてあらう。また彼のその頃の反科學的、反基督教的思想が更に劇しく一層自覺的の形て現はるるを見るてあらう。

然かし斯様な二つの肯定的建設的の時代の間に、丁度二つの山脉を限る谷のやうな否定的破壞的の時代が横はつた。それは丁度彼が青年時代のあらゆる權威から別れ、友から別れ、職業から別れ、剩さへ不治の病に侵はれた時代てあつた。彼は一八七八年、丁度バーゼルの敎職を抛つ前の年に『人情的、餘りに人情的』を公にした。越へて一八八一年には『日の曙』(Morgenröte)を世に出した。その頃は彼の健康の最も危まれた時てあつた。彼はこの書を『體力と健康の最小限』に於て書いたと言つてゐる。是等の書物は何れも消極的懷疑的のもので、その中に現はれた著者は冷酷無殘な破壞者として、凡らゆる宗敎、哲學、道德の信條を

片端から蹈みにじつてゐる。彼は自分を、堅固に築き上げられた邪説の地形を掘りぬく坑夫に譬へてゐる。

彼は既う以前の流曇的厭世家ではない。また狂醉的の藝術謳歌者でもない。夢の多い青春を去らし、病と孤獨の捕虜となつた彼には、美しい幻は跡方もなく消えて行つた。

美は我等の戰の時間に向て與へられたものではない。却てそれは戰の後の靜かな時、過去の蘇り未來の案じられる疲勞の時、倦怠の氣分と共に慰藉の夢の我等に下る時に與へられたものである。生と戰は近き、淨い影の消えうせる時刻には、藝術は再び我等と遠かる。然かしその慰藉は猶ほ朝の露のやうに我等に殘る。………

この一節と『悲劇の出生』を生んだ思想との間には非常な相違がある。最早ニーチェにとつては藝術は生活の要諦でなくて、たゞその準備と慰籍に過ぎない。

この時代に於けるニーチェは鋭い破壞者としてのほかに、一面實證論者の面影がある。甚だ矛盾に聞えるが元來ニーチェは自然科學に對する趣好をも多量に有してゐた。彼は幼少にして化學に志したことがある。また彼の晩年には生物學に非常な注意と研究を拂つてゐた。彼は今日一部の論者からは人種改良學の祖先としても見られてゐる。彼の貴族的道德說、彼の超人說は進化論に其暗示を得てゐる點が多い。ともあれ、その頃の著書に現はれたニーチェは科學者の態度で無道德論を稱導してゐる。猶この事は後に詳しく述べることにする。

彼は斯う言つてゐる。近代人は小兒のときは宗教的で、次第に神と不滅に對する其信仰を失つて來ると、今度は哲學に魅せられ、それから藝術の信者と變る。然かし最後には科學的本能が愈々切實に彼に迫つて歷史と自然との確實な研究に從事させるやうになると。
て、斯樣な科學者、乃ちあらゆる迷信と癖見を取去つた『自由精神』が、一時その頃のニーチェの理想とする人物であつた。斯樣な人間は總ての世間的騷擾を斷ち、因習や法律を超越する。彼はたゞより好く知るべく努める。彼の受くる最高の報酬は宇宙的進化の法則の理解である。『て、あなたは斯樣な目的をもつた斯樣な生活が餘り物憂く、餘り樂みを缺いてゐると思はれるか。

それならば、あなたは未だ斯う云ふ事を知らないのだ。如何なる蜜も智識のそれよりは甘くないと云ふ事を。……あなたは人生の一端に於て同時に老年と智慧に過はれるであらう——これが自然の計畫だ。その時こそ、怒も何もなく死の霧が近づく。あなたはその時光の方へ動く。て、智識の喜の叫があなたの最後の聲である」と。

然かし斯樣に冷靜な科學者の態度は、ニーチェにとつては一時のパニチーに過ぎなんだ。

ニーチェの病氣の頂上は一八七九年から八一年にかけての約三年間であつた。劇烈な發作が百八十日も續いたことがある。彼の强い意志が最も働いたのはその時代であつた。遂々彼は靈と肉とて恐ろしい戰に打克つた。八二年から彼は漸く快方に向つて、以太利のい、ちこちに日を送つた。後年の重要な著作は實にその頃の賚である。一八八二年には『歡びの智慧』(die Fröhliche Wissenschaft)が、八五年には『ヴァラッストラ』(Also sprach Zarathustra)が、八六年には『善惡の彼岸』(Jenseits von Gut und Pöse)が、八七年には『道德の系圖學』(Zur Genealogie der Moral)が現はれた。

一八八八年には復た彼の健康が危ぶまれて來た。その頃彼は自分の哲學を體系的に叙述した『權力意志』(Die Wille zur Macht)なる大著に志して其第一卷だけを書き終つた。同じ年に『ワグナー事件』、『偶像の黃昏』(Götzen-Dammerung)、『反基督』(Antichrist)、『ニーチェ對ワグナー』、自叙傳『この人を見よ』などが現はれた。それは收獲の多い年であつたが、またその最終の年であつた。翌年の正月早々彼の頭腦は異狀を來した。

『歡びの智慧』からニーチェの哲學は一轉化を劃してゐる。彼は矢張恐ろしい懷疑者破壞者であつたが、その懷疑や破壞には再び詩と熱の濕ひが加はり、希望の勝利が輝き始めた。それのみならず、彼は新しい哲學の建設に取掛つた。永い間の病氣に打克つことの能きた彼の身に一陽來復の春が來た。彼は再び自由に呼吸し、再びよき日を夢み始めた。『この書は悲慘と衰弱の

長い時期を超した喜の叫てある。また回復した健康の歌ふ歡樂の讃歌、明日明後日に對する信念、自分に開けた新しい未來と來るべき冒險と新しい海と新しい目的とに急にわき上つた希望である」と彼は『歡の智慧』に就て談つてゐる。彼は最早曩の「自由精神」のやうな消極的態度を以て滿足することが能きなくなつた。彼は健康と樂天とを意志して達した。彼は『踊』らねばならぬ。自由に喜ばしく人生の波の上をはね廻らねばならぬ。勝利の凱歌を擧げねばならぬ。再び人生を全く住み且つ之に醉はねばならぬ。て、彼の眼の前には未來の理想があり／＼と具體的の形を採つて現はれた。『超人』と、それから超人の敵なるが故に最も超人の愛する『永遠輪廻』！。

『ザラッストラ』は斯樣な理想の表現てある。それは人生の讃歌てある。古今無雙の奇體な叙事詩てある。同時に著者の心的自叙傳てある。豫言者ザラッストラは『彼の思想と孤獨を飽食する爲めに』十年間沙漠に隱れてから、彼の『超人』の福音を擴めるために世に下つた。彼はその左右に『偉きな欲望と偉きな輕茂と偉きな憎惡』とをもつ幾人かの偉人を集めて彼の宗教を宣傳した。彼は是等の苦しむ人々に未來の希望を現はして其厭世思想を癒した。て、彼はその智慧の頂上に達し、彼の生の太陽が中天に懸つた『光榮の正午』に於て、其死に由て其の教義の勝利を示した。

ニーチェの哲學は心の貴族にのみ說かれた哲學てある。ネロとナポレオンの哲學てある。戰爭と孤獨の哲學てある。『鐵槌を以て思索した』哲學てある。『山上の空氣の書』てある。その高山の頂をば風吹き雲暴れる。然かし其處に我等はより善くなり深く呼吸する。その空氣は我等の心を淨めるばかりか、一つ時雲霽れば我等はその頂から廣い一面の人界を瞰渡すことが能きる。それはよし我等凡俗の『奴隷』が平常の住家には適はないにしても、尠くとも一年に一度斯樣な山巔を履むことは必要てある。かくて我等は我等の胃を淨め、再び俗界の戰に下るてあらう。

(中付一の一)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

讀賣新聞と讀書會

男女會員大募集

▼會員毎月一回讀書子に有益なる雜誌「讀書之友」を無料で讀む事▲
▼が出來る◉本會は時々適當の新刊書籍を指定して懸賞批評を募集▲
▼し當選者には三十圓乃至十圓の賞金を呈す◉會員は少額の資で文▲
▼章詩歌俳句川柳等の添削を斯道の大家に就て乞ふ事が出來る◉會▲
▼員は定價の一割五分引で何でも希望の本を買ふ事が出來る◉會員▲
▼は定價の半額以下で本會所藏の古本(新刊書籍)を買ふ事が出來る▲
▼會員は一ヶ月郵税共三十八錢で本社の「讀賣新聞」を購讀する事が▲
▼出來る◉會員は讀書家に必要なる筆紙墨文房具を廉價で買ふ事が▲
▼出來る◉會員は讀み古したる不用圖書を本會に托して賣却する事▲
▼が出來る◉甲種會員(讀賣新聞購讀者)の會費は一ヶ月金十錢三ヶ▲
▼月以上前納の事◉乙種會員(讀賣新聞非購讀者)の會費は一ヶ月金▲
▼十二錢三ヶ月以上前納の事◉此際一ヶ年分以上の會費を添へて入▲
▼會したる向へは本會々員徽章一個を呈す◉「讀書之友」見本は一部▲
▼八錢◉規則書入用の向へは端書にて申込次第送る◉速に入會せよ▲

東京京橋區銀座一丁目

讀賣新聞讀書會

振替貯金口座東京六一二番

(中付一の二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新春の本紙

▲見!! 新春の本紙は趣味極て饒かなるを誇とす。岡田三郎助畫伯筆の「今上陛下大禮記念御束帶御眞影」の大附録は燦として楣間に掲ぐべきもの、現代第一流諸名士の肉筆に成る「大正座右の銘」は何れも金玉の文字なり。又春葉氏の長篇「かたおもひ」は愈ゝ佳境に入れり。

東京日日新聞

▲見!! 富士川游氏の「醫學上より見たる史上の美人」石川千代松氏の「虎の歷史」長瀨鳳輔氏の「ピーター大帝の幼時」高濱虚子氏の「大同江の畫舫」さては現代諸大家の繪畫、文章等數ふるに遑あらず。實に新春の東京日日新聞は趣味實益極めて饒多也

(三ヶ月分前金郵税共一圓二十錢)

東京市丸の内 東京日日新聞發行所 振替口座二八〇〇番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

簡易佛教講義録

毎月一回一日發行
一部金十八錢（郵税共）
六冊金一圓（郵税共）

●大正二年四月一日第一號發行

本書は本派本願寺法主大谷光瑞猊下の經營せらるゝ、佛教中學各教師の分擔講義を編輯せるものにして、文章は平易に、而も四號活字總假名附なれば、佛教の大意を知らむとする人は、何人にも極めて能く理解せらるべし、されば現世來世の得脱に煩悶する者は、本書に據て必ず一大慰安を得べし

●發行所
兵庫縣武庫郡岡本村
二樂莊出版部

新刊　近代脚本叢書第拾篇の　新刊

青ひ鳥

■メーテルリング作

■若月紫蘭譯

△象徴主義作家の泰斗として今猶世界の文壇を風靡しつゝある「メーテルリング」の最大傑作を以て稱せられつゝあるのは所謂「青ひ鳥」の一篇にあることは誰か喋々を要せん

○譯者即ち原作者より日本に於ける翻譯發行の特權を得て此の叢書中に加ふ。蓋し渾沌たる我劇界に資するところ尠少ならざるべし。挿むところの原作者より譯者への回答「メ氏」の風貌を想望するに於て珍とするに足る敢て象徴主義の眞髓を解し現代文壇の麒麟兒たる「メ氏」の神秘思想を知らんとする人々に薦む。

■袖珍美装全一冊
寫眞版挿入

■定價各冊四拾錢
送料各冊四錢

■帝國劇場一月上場劇

●●定價毎冊四拾錢送料各四錢●●

第九篇

窓に立てる女

ホフマンスタール作　伊庭孝譯（最新刊）

△シユニツラーと共に墺國文壇の二巨人に數へられつゝ者は「ホフマンスタール」である而して彼が作中最も有名にして最も舞臺切廻の見るべきものは「エレクトラー」を外にしては即本書「窓に立てる女」「白い扇」の二篇あるのみ而も此二篇は彼が最も得意なる單篇劇なれば聊か新春の文壇に資するに足る

ハウトマン作　小野秀雄譯（最新刊）

第八篇

ヘンシエル

▲ヘンシエル（小野秀雄譯）現代獨逸劇壇の明星ハウプトマンの代表的はオライフ・ドラマの一つなるヘンシエルを譯したるものである、ハウプトマンはイブセンやバアカアのやうに、舞臺で作者が說教したり討論をしたりはしない、彼の描く人間は作者の傀儡ではない、眞に生きてゐる人間である、この點が彼の作物の力であつて最も深刻に吾人にアツプイルする所以である、譯者は獨逸文學專攻の學士にして譯文は明快を極む

第六編

海の夫人

イブセン作　草野柴二譯（忽三版）

■帝國劇場一月上場劇■

（中付一の五）

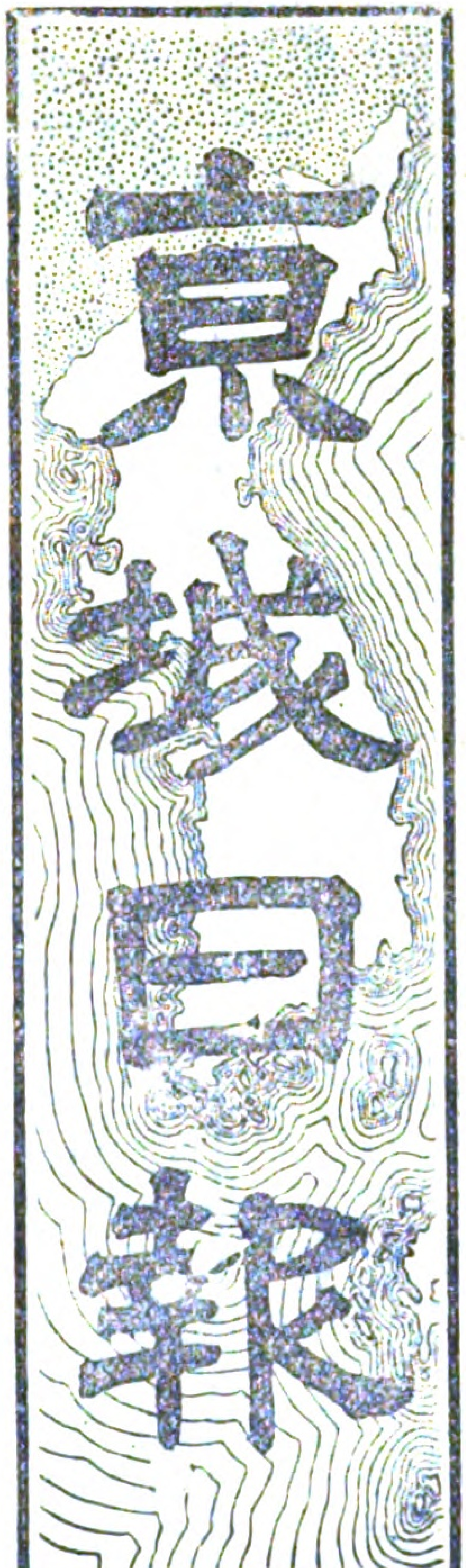
發兌　東京神田區南神保町　振替東京一九二三三　現代社　賣捌　各書林

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

鮮満唯一の大新聞

最新式佛國製輪轉機二臺を以て日々八頁朝刊夕刊に分ち十數萬を刷出し數百の社員は晝夜不斷の活動を續け居れり

印刷部 活版、石版、寫眞、銅版、凸版、製本等迅速確實應需



新聞定價一ヶ月金六十五錢三ヶ月金一圓九十錢凡て前金の事

三ヶ月前金拂込の方に限り當分の間一圓五十錢に割引

苟も朝鮮に於て事業を經營せんとする方は京城日報を座右に供へざれば一日の短あらん廣告の効力亦絶大無限也

代理部 内地書籍雜誌並びに園藝種子苗木の取次販賣を爲す

年中無休

京城大和町一丁目

合資會社 **京城日報社**

振替貯金口座京城三〇〇番

朝刊夕刊

(中付一の六)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載を謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



天賞堂製作品價格一斑

(中付一の八)

また是れ南海の泡沫のみ

竹越與三郎

(一) 何をか南海泡沫と云ふ

昔から經驗は人を賢からしむると云はれて居るが、實際往々然らざる事が少なくない。咽喉元過ぎて熱さ忘れると云ふこともあるが、寧ろ此格言の方が眞理ではないかと思ふ事が屢々ある。是に付て眼前最も適切なる一例は、歐羅巴の人々が『南海泡沫事件』と云ふ苦き經驗を得て、其事たるや歷史上特筆大書せられ、人々口に相傳へられて居るに拘はらず、今現に一の大なる南海泡沫に向つて進むで行く。其有様岌々乎として、盲目馬の深き淵に進むが如き有様である。それは外ではない。即支那に對する各國政策の冥謬である。千八百年代に英吉利のオックスフォード侯が、南米の富世界に冠たり、其土を掘れば悉く之れ黃金であるかの如き考へを以て、所謂サオスシー會社を建てた、而して内外の吹聽に依り、策士の運動に依り、仲買人の付火に依つて、此サオスシー會社の株は拂込より數十倍の價となつた。而して事實に着手すれば何事も無く、恰も國民全體が狐に魅まれた如く、彼等が掴むだのは黃金に非ずして、水の泡に過ぎなかつた。是ぞ所謂サオスシーバップル、即ち南海の泡沫なる語の起つた所以てあるが、今現に歐羅巴各國は、此苦き經驗を知り、見、聞き、其耳目には深く刻まれて居るに拘はらず、又支那に向つて資本を注がんとする。而して其資本を注がしめんとする策士は、極めて愉快なる音樂、極めて色彩ある、極めて面白い言葉を以て勸誘する。而して各國の株主は其株を買ひ、其公債を買ひ、丗年の後ち、報酬を得む事を期して、是に投資しつゝある。而して恐らくは開けて悔しき玉手箱。數年後には必ずや

南海の泡沫を掴んだものに過ぎないと云ふことを覺る時が來るであらう。而して其時は既に近してある。故に余は今警鐘を打つて、歐羅巴人の迷を解き、併せて此狂人を追はんとする不狂人とも云ふべき、日本國民の迷を覺ましたいと思ふ。

（二）道德的破產の後は何か

五國借款團は變じて三國借款となつた、此三國借款團の外には、スコダ借款も出た、吾々は曾て未だ耳にせざる所の資本家が、種々なる名義を以て團結して支那に投資せむとするの多きに驚くものであるが、彼等は何を望むで支那に投資せむとするものなるや。若し五千年の歷史を有する支那が亡びんとし、其亡ぶるに當つて、鮮かなる色を以て印刷したる歷史的の印刷物を殘さんとする、其印刷物を買ふ事、恰も紀念繪葉書若くはスタンプを買ふ積りて、公債を買ふなら、吾々何等の異論はないのである。併しながら若し此公債をスタンプと見ず、繪葉書と見ず、必ずや數年の後には元金も返り、利息も拂ふてあらうと云ふことを信じたならば、是れ即ち迷信であると云はねばならぬ。凡そ古來如何なる國も亡びざるはなく、此大地は王國の墳墓である事は申すまでもない。併ながら何れの國と雖も、起らんとするや、必ずや其國民に旺盛なる精神が充滿して、而して精神的に王國が建つて後ち、物質的の王國が建つのである。國の亡びんとするも亦斯の如く、其亡びんとするに當つては、先づ精神萎靡し、氣力衰退し、道心茲に亡び、所謂「道德的に破產」して而して後ち財政的破產を來し、次て政治的破產をするのが順序である。今や支那は如何なる狀態にあるかと云ふに、國民相信ずるの心なく、政治上自ら振ふの目的なく、國家の存亡は個人の榮辱に非ず、而して政府の交迭は、人民に禍福なく國民の互に相見る事、道路の人の如き有樣て、偶々志を懷いて國家を改革せんとする者あれば、北京政府は惡魔の如き手を伸ばして之を捕へ牢獄に打込みつゝあるのである。佛蘭西のナポオン三世が爲したるクーデターの如き、政治上最も慘虐なる一例としてあるが何ぞ圖らん我々はクーデター

と革命に伴ひたる惨虐を、更にイルミネーションをつけて鮮かにしたが如き惨酷なる所行を眼前に見つゝあるのである。是が爲め僅か殘りし人才も殺され、或は追拂はれ、唯袁世凱の左右に在つて徒黨を作り、一部の權利、一部の利益を得むとする者共が榮ゆるのみである。之を以て國家興隆の兆と云ふことは出來ない。國家滅亡したりと云ふことは出來ざるも、確かに支那の國民が、道德的に破產し始めたものであらうと云ふことは疑ふことが出來ぬのである。而して此次に來るものは何であるか。恐らくは財政的の破產、而して此次に來るものは政治的の破產であらうと思ふ。

(三) 支那の財政

事實は最も雄辯なる證據人である。余は多くを論ぜず、唯事實を語らむとす。六年前余が北京に在りし時、一日大藏大臣載澤公を訪問して、支那の財政に付て數字を得むことを乞ふた、公は快く余の乞を容れて收支の金額、支出の方法等、巨細を書留めて余に與へて呉れた。併ながら其與へられたる物は北京政府の財政であつて、支那政府の財政でない。即ち僅に金額六千萬圓の收支の說明に過ぎなかつた。余は更に支那全國の財政の數字を得む事を乞ふた所、載澤公頗る窮して、支那全體は如何にして支へて居るかと云ふことは、自分にも了解が出來ない。唯是は北京政府、即ち各省の總督を治める中央政府の財政だけであつて、各省が如何なる生活をして居るかと云ふことは、自分にも說明が付かぬ。大藏省の書吏、即ち代々書記方、會計方をして居る者の家には、恐らくは記錄があるか知らぬが政府としては何等の記錄も無い。即ち證據とすべき程のものも無しと云ふ答をしたので、支那の前途頗る寒心に堪えないと思つたのである。而して今日支那は民國となり、其財政果して如何なる狀態にあるかと言へば、寧ろ知られざりし北京政府の時代の方が、安全であつたと言ふべしてある。即ち今年の豫算に依れば歲入は六億四千六百三十五萬元、歲出又之に等しいと云ふことてある。此財政を見れば收支宜しきを得て居るが如きてあるが、併し其內容に至つて如何なる歲入が

あるかと云ふと、實は歳入は文字の上には成立つて居るが、一億五千三百七十六萬元の歳入不足がある。而して之を埋めんが爲に新たに印紙税を増し、鹽税を増し、登錄税を設け、所得税を課すると云ふが如き文字を並立てて居るが、併し何是ても不足であるから、內外の公債一億二千九百八十萬元と云ふものを以て埋めると書いてある。而して此外に外債一億九千九百萬圓を引當にして、內外公債に依つて補足する所の高は歳入の百分の五十一になつて居る。凡そ一家の生活が百圓として、其中五十一圓だけは借金でする政策は、頗る危險なる政策であらねばならぬが、支那の現狀は即ち斯の如してある。而して歳出は如何と云ふに、歳出の中、各省文武の費用を除いて、公債償却に充つるもの、即ち今年拂はなければならぬものが三千二百五十五萬元、それから從來既に償還期限が來ても償還せず、グツ／＼になつて居つて今日之を拂はなければならぬものが、一億三百三十二萬元、合計一億三千五百八十七萬元と云ふものが、歳出中て借金の支拂に充てらるのである。即ち借金を拂ふ高が歳出の百分の四十四、之を一家の生活て言へば、百圓に付て四十四圓を、借金償却に廻はすと云ふことである。之を譬へて見れば、歳入も半分は借金である、歳出も半分近くは借金を返す爲めてあるとすれば、驚くべき財政と言はなければならぬ。

（四）巨大なる支那の借金

而して斯の如き事は果して政府が堅固なる基礎の上に立つと云ふことが出來るであらうか、支那の事を論ずる者、多くは五億萬の人口と云ふ。其富は無限てあると云ふ。是等の誇張したる言葉も、事實に會へば頗る貧寒なる算盤と言はなければならぬ。支那が現に有して居る借金は、幾らあるかと云ふと、十七億五千二百八十六萬九千七百二十元ある。之を細かに割つて見れば、此內て內亂鎭壓の爲め用ゐたるものが、三億九千六百十萬九千二百二十元、鐵道敷設の爲に使つたものが四億四千三百五十三萬二千五百元、雜種の公債が一億七千百九十三萬千六百六十元、地方の政府が募集

したる外債が九千三百八十四萬二千五百元、內亂の爲め各國に賠償金として支拂つたものが六億四千七百十五萬四千八百四十元、是に近頃出來た所の五國借款を之に加へれば、更に增すのであるが、兎に角支那は現に十七億五千二百萬元の大借款を有つて居るのである。英佛戰爭以來支那が有して居つた借金は二十億程てあるが、此四十年間に償却したものは、僅に二億元に過ぎないと云ふことを見れば、恐らくは十七億の借金は今後殖へるとも、減る時はないと思ふ。此外に地方政府が特別の責任と權利とに依つて、外國と約束した物は、支那の破産の時にならなければ形を出さぬのてあつて、一面秘密借款と云ふても宜いのである。恐らくは時期來れば、非常なる形を以て此秘密借款が現はれて來るてあらうと思ふ。吾々の友人中に財政の心得なき者は、高利貸から金を借りるが、其利子は實に驚くべき程高くなるので、友人が驚いて醵金して之を救ふことがあるが、而してそれて最早や宜いかと思ふと、實は彼處にもまだあると云ふ。それを拂ふと、又此處にも有ると云ふが如く、恰も一本の木を拔いて、最早や宜いと思ふと、彼處にも根がある、此處にも根があると云ふが如くなるは、高利貸の禍に罹つた友人の情態てあるが、支那の狀態斯の如して、公けに表はれた借金は、斯の如くてあるが、其返却の時期が來たならば、恐らくは秘密借款が澤山表はれるてあらう。此秘密借款が何程あるかと云ふことは、之を明言すべき材料を有たぬが、恐らくは表はれたる公債の三分の一以下てはあるまいと云ふことてある。而して支那は如何なる財源を有つて居るかと云ふと、輸出は四億萬元內外てある。輸入は六億二三千萬元內外てある。然らば二億二三千萬元の輸入超過てある。凡そ文明國に於て、外國に金を貸し、若し外國に機業を有つて有ると云ふ國に於ては、國家の購買力頗る盛んてあるが故に輸入の多くして輸出の少ないことは有り勝ちの事てあるが、併し其國が農業國てあつて、經濟上の位置甚だ低き時は、輸出が勝つて輸入が少ないと云ふのが、一般の原則てある。然るに今日支那は農業國てあるに拘

はらず、而して其經濟上の位置も甚だ低きに拘はらず、二億二三千萬元の輸入過大であると云ふことは、全國の財政上最も憂ふべき事である。故に今日の輸出入から言へば支那は借金を返すべき力が無いのである。即ち前條に説くが如く歲入百分の五十五は借金で、而して歲入百分の四十一が借金を返す爲であると云ふことである、由是觀之、支那は自分の力に依つて一文の借金を返すのでなく、借金に依つて借金を返しつゝあるものであると云ふことが明白に説明せられるであらう思ふ。

（五）　蛸配當の財政

或は支那を評して四億萬の大衆あり、自然の富があると云ふが、第一四億萬の人口なる者すら既に疑ふべしである。吾々は二十年前地理書を讀むだ時に、北京は人口二百萬あつて、世界の第二若くは第三の大都會であると云ふことであつたが、五年前余が北京に居りし際、肅親王が内務大臣として、北京を調査し其精細な事は分らないが、兎に角十萬の戸數あることゝだけは明白なるを以て一戸、七八人にしても七八十萬人の間であらうと云ふことが分つた。即ち從來二百萬と言はれた事は、誇大であつたと云ふことが分つたが、近頃支那の人口四億萬と云ふことは誇張であつて、寧ろ二億八千萬内外であるまいかと云ふ議論さへある。而して余は此二億八千萬人が、果して事實であるや否やは知らぬが、四億萬と云ふ數は、頗る疑はしく思はれるやうになつて來たのである。各省が共和政府となつて發行しつゝある所の紙幣は、何程有るかと云ふことを政府が調査した所を見るに、上は直隷より下は雲南熱河と云ふやうな邊境に至るまで調査して、二億九百五十六萬七千八百六十五元と云ふ數字を得たのである。勿論支那は此外に銅錢銀錢があるけれども、紙幣を亂發しても此位であると云ふことを見れば、略ぼ四億萬の人口と云ふことと相比して、甚だ少ないものであると云ふことが分る。是等の事が亦以て人口が意外に少ないものであると云ふことが、説明せられるであらうと思ふ。而して此二億九百萬圓の紙幣の形式だけは兌換

銀券であつて、準備金も有つて居るといふ說明になつて居るが、其準備金なるものは四十分の一、即ち五十萬圓內外しか無いと云ふことである。是等の事を見れば、支那が數字上極めて危險な位置に立つて居ると云ふことが分る。今日の會社に、蛸配當と云ふことがある。蛸は生活に窮すれば自分の手足を噉んで生きて居る。而して其手足を噉んで仕舞つた時は、即ち死する時であると云ふが、支那は借金に依つて借金を返し、其外には寸毫も返す力が無いと云ふことが明かなる以上は、支那の財政は即ち蛸配當であつて、四足を食べ終つた時は、即ち死する時であると云ふことは明白であらうと思ふ。勿論四億萬にせよ二億八千萬にせよ、あの大國を以て、二十億の借金は必ずしも不當ではない。併ながら是は政府の基礎固く、人民生を聊し善政の布かれた時であつて、若し善政なく、人民生を聊せぬと云ふ時ならば、一億萬圓も多きに過ぐるであらう。而して今日の支那に善政ありや鞏固なる政府ありや民其生を聊するやと云ふと、何人も頭を振るに相違ない。而して斯の如き混亂、惡政府の許に在つて、二十億の元金は扨置き、利子すら拂ひ得ないと云ふことは又明白と言はなければならぬ。

(六)　歐洲列國に決心ありや

今や第二次革命も既に失敗し、袁世凱はクーデターに依つて成功した。併ながら河南地方には白狼軍なるものが少し頭を出して來たが、此白狼軍なるものは、何等の理想あるに非ず、何等の組織あるに非ず、一見して恐るべきものとは考へられぬが、併ながら支那の歷史に徵すれば、理想も無く、目的もなく現はれたる流賊なる者が、最も恐るべきものである。而して白狼軍は余を以て見れば、支那流賊の端緖ではあるまいかと思ふ。而して主張あり理想ある所の者が、稍や是に投じ、煽動する有樣を示して居る。是は明末の流賊が其勢大となつた時には、土君子相競ふて投じたと云ふ事と全じ徵候であるが、恐らくは此白狼なるものは、支那の『終りの初め』ではあるまいかと思ふ。而して蒙古は頻に南下し、各國は競ふて利權を取り、有爲の

士、志を得ずして山澤に隱る。是等の事實を綜合すれば、先づ明季亡國の狀態が十中七八、備つて居る。如何に袁世凱を最負目に見るも、如何に支那に平和あれかしと望みて見るも、支那の前途に光明ありと見る事は出來ない。然るに西洋各國は競うて此破產せんとする支那に對して、貸金をせむとすることは、果して正氣の沙汰であるか。余は頗る歐羅巴人の心性を疑はざるを得ないのである。併し、西洋各國が、從來支那に對して貸金ありと云ふことは必しも間違てなかつた。それは如何なる惡政府であつても、其政府强固であつて、如何なる惡政を施しても、其國が亡びざるだけの狀態に在つて、兎に角政府に威力あり、又國家も動搖せずして、確かに利子も相當に取れ、元金も相當に返した。併ながら今日は如何なる狀態であるかと言へば、政府自らの借金の利子すら拂へずして、借金に依つて利子を拂つて居る有樣である。而して袁世凱は唯鐵の城門に賴つて、己れの身の安全を守つて居ると云ふ有樣である。此次は財政的破產、其次は政治的破產と云ふ命數の定つた時。是に向つて金を借すと云ふことは、果して算盤の取れる次第であらうか。

（七）破產の時如何にすべきか

各國は借金については大決心を有たなければならぬ。元金の取れざる時、利子の取れざる時は、果して如何にする考へであるか、或は鹽稅を抵當とし、或は鑛山を抵當とし、或は鐵道を抵當として居る。凡そ借金の法則に於ては、元金と利子とを拂はざる時は、其質物を差押へると云ふことであるが、各國が此質物を差押へる力があらば即ち宜し。各國政府自ら此質物を差押へて、流すだけの力ありや、鐵道を押へんとすれば、自ら兵力を以て鐵道を守らざる可らず。鑛山を差押へんとすれば、自ら兵力に依つて鑛山を守らざる可らず。鹽の稅を差押へんとすれば、各地に於て鹽稅を差押へる決心を有たなければならぬが、此鹽稅なるものが、最も安全なるものと思はれるに拘はらず、最も不安全なるものである。一旦事あつて鹽稅を差押へんとすれば、上海附近に於て、海關を押へるばかりては

ならぬ、即ち長江の流域上、下悉く、到る所に稅關を置いて鹽稅を押へ、文武の力を四方に派しなつてはならぬが、各國政府果して之を爲すの決心ありや否や。既に鑛山を占領し、既に鐵道を占領し、既に鹽稅を差押へる、其次に來るものは土地を占領して、其兵を養ふと云ふ決心を有たなければならぬ。各國政府果して其土地を占領するの決心ありや否や。今や佛蘭西は獨逸に對抗するに急にして、セネガルの土兵すらも獨逸の國境に出さんとする時に當つて、一師團の兵すらも支那に送る事は出來ないのである。のみならず獨逸は今や六十六萬の常備兵を増して、八十七萬とする。而して一時五億の臨時稅を課し、年々九千萬の永久稅を課するは何の爲であるかと云ふと、佛蘭西、露西亞に備へる爲であるが、斯の如き危急なる狀態に當つて、其借金を取るが爲に、支那に一個師團の兵を送る餘裕は無いのである。英國固より然り、米國又然りである、而して此間、抵當物を押へるの威力と、實力と、決心とあるものがあるとすれば、それは露西亞と日本の外に無いのである。斯の如く打算し來れば、各國は何の爲めに、誰の爲めに、支那に金を貸すのであるか。即ち利息を取る爲めであるが、其利息すら拂へない時は又、金を貸して拂はせ、其金は誰が貸すかと云ふと、己れが貸すのである。即ち己れが貸した金を返させる爲に、又金を貸すのであつて、此く考ふれば支那に對する貸金は、南海泡沫よりも望みなき貸金であると云ふことが分るであらうと思ふ。

（八）最も笑ふべき借款

今は各國汲々として支那に金を貸す、其金は誰の懷中に入るかと云ふと、支那の官吏の懷中に入り、又は借金支拂に廻され、明かに策士仲買人等の懷中を肥すのである。而して最も驚くべく、最も笑ふべきは、スコダ借款である。此スコダは墺太利のスコダである、此スコダが軍艦兵器を賣る爲に、支那に對して三千萬圓の貸金をする。而して最も善き周旋料を取つた所が、恐らくは七八十萬圓であらうと思ふ。即ち策士が七八十萬の周旋料を取る爲に、三千萬圓の損をするのであ

らう。各國は行掛りあり、歴史あり、餘儀なき事であるが、墺國が今好むで泡沫の中に、三千萬圓の金を投ずるに至つては、頗る驚くべき事と言はなければならぬ。尤も此スコダは即ち獨逸のクルップと同一の會社であつて、スコダ借款は即ち獨逸のクルップ借款と同様なものであるが、併し形式上より見れば、墺太利の貸金である。墺太利は何等貿易上利害なく、何等東洋に關係なく何等殖民地に關係を有つて居らぬ。其ものが、好んで此渦中に投ずるに至つては、其淺見短慮、驚くべき事と言はなければならぬ。

（九）更ふに笑ふべき日本の貸金

以上の如く支那の道徳的破産は、既に來つた。而して財政上の破産は是より來らんとする、即ち政治上の破産が、是より生れむとする。是に對して金を貸すと云ふことは恰も南海の泡沫の如きものである。是に向つて歐羅巴が金を貸すのは、恰も己れの支拂をさせる爲に、己れが金を貸してやると同様で、頗る笑ふべき事であるが、併ながら彼等は迷ひながらも、兎に角一の意見がある。即ち支那に對して發言をすると云ふことは、金を貸したと云ふことが元である。即ち金を貸して發言するのであると云ふことで、發言權を金で買ふと云ふ解釋も出來る。而して日露兩國に至つては、金を貸すも、貸さゞるも、隣國たるの故を以て、何時でも發言するの實力と、權利を有つて居るのである。日本は滿洲を借り、其他海に於ても、陸に於ても、彼と接續する所頗る多い。一毛の金を貸さゞるも、隣國たるの權利に依つて、支那の後始末に付ては、發言する權利がある。而して此權利たるや、十九師の兵力に依り、大艦隊に依つて保障せられたる權利である。それ故若し發言すると云ふことだけであれば、日本は一毛も金を貸さずして宜いのである。然るに日本は此重要なる位置を占めて居りながら、金を貸さずんば權利なく、金を貸して、初めて發言權を買ふ歐羅巴諸國と同様なる位置に立つて、苦しい借金をしながら、其借金を支那に貸さんとするに至つては、其愚や及ぶ可らず。狂人を追ふの不狂人と言ははなねばならぬ、余は

日本政府が先づ自ら其重要な位置を覺つて、支那に向つて金を貸すが如き愚策を改めむ事を望むものである。而してそれと同時に歐羅巴諸國が支那に金を貸すと云ふことは、南海の泡を握むが如きものであると云ふことを覺らしめん事を望むものである。

（十） 醒めよ歐洲列國

余は日本人であるが故に日本の利益を希ふ、併ながら歐羅巴各國が支那の土地を占領するの決心なく、支那の抵當物を差押へる實力なく、是あるは僅に日本及び露西亞であると云ふ時に當つて、汲々乎として支那に向つて金を貸すに迷ふのは、頗る愚かしきものであると云ふことを、速かに覺らむ事を望むものである。假りに獨逸が山東省に於て、更に其權利を擴張するとせよ、英米露佛が鹽税を差押へる爲に、長江一帶の文武の權利を取るとせよ。各國が兎に角差押へる爲に、各々軍隊を屯在せしむるとせよ。其結果どうなるか、左なきだに滅亡せむとする支那は、此一事が切掛けとなつて、流賊蜂起、一大修羅場を現出するであらう。即ち四億萬人にせよ、二億八千萬にせよ。此大衆が秩序なく、警察なく、政府なく、互に相殺戮すると云ふ狀態が出た時は、如何なる兵隊も、山東省を保つ能はず、如何なる軍艦も長江を維持する能はず、如何に精鋭なる武器も、鐵道を維持する事能はず、悉く是れ大波が岸を洗ふ如くに洗ひ去らる時が來るであらうと思ふ。此時に當つて陸軍と接壤の利益とに依つて、能く其利益を保護し得るものは、唯日露兩國あるのみである。歐羅巴諸國に政治家なきに非ず。策士實際家なきに非ず。而して此狀態を考へず、徒らに日露兩國の爲に魚を追ひ汲々として其國民が貯蓄したる金を泡に投ずるは、其愚や及ふ可らず。余は歐羅巴國民が、少數の策士、仲買人の腹を肥さむが爲に、斯の如き愚策を行ふの愚かしき事を、一日も速かに覺らむ事を望むものである。上來の形勢を觀れば、事實は最も雄辯であつて、歐羅諸國が覺る時が來るであらうと思ふ。支那に對する各國の政策一變する時が來るであらうと思ふ。而してこれが爲には日本先つ自から醒ねばならぬ。

國政の中心を速に樹立せよ

林　毅陸

我國現任の政治組織は、一種の下等動物に似て居ると思ふ。即ち神經組織甚だ不完全にして、中樞機關の何處に在るや不明なる下等動物は、正しく現在の我政治組織を代表して居るのである。詰まり國政の中心點が茫漠たる狀態に陷つて居る。而して是は同時に國政の統一の散漫なること、並に又國政の責任の歸する所明確ならざることを意味するのであるから、政治組織としては最も不完全であり、從つて國家のために最も遺憾なりと謂はざるを得ぬ。過渡期の現象として、一時は已むを得ぬとするも、成るべく早く此の過渡期を切上げ、國政の堅實なる中心點を速に樹立し、そして下等動物的生活を善い加減にて御免蒙りたいものだと思ふ。

何を以て國政の中心點茫漠たりと謂ふ乎。それは今更詮儀立てをする迄も無からう。閥族政治半ば倒れて政黨政治未だ樹立せられず、政黨政治漸く興らんとして、閥族の殘壘未だ全く落ちず。斯くて閥族も獨力にて政局を支配するの力なく、政黨も亦單獨にては國政を左右する能はず、國家の政治は玆に中心點を失ふて居るでは無いか。即ち閥族と政黨とは、已むなく双方より多少づゝ歩み寄り、互に幾分づゝ讓歩し、中間の緩衝地帶とも稱すべき地點に於て握手し、互讓と苟合とに依りて國事を經營せるの實狀である。要するに國政の中心何處に在りやとの疑問は、當然起り來らざるを得ないのである。閥族乎、否。政黨乎、否。彼等は孰れも國政の中心勢力では無い。今の山本內閣に於て薩派と政友會と、勢力の優劣如何は、今予の問はんと欲する所では無い。予は唯彼等の孰れもが、單獨にて

國政を支配し得るの地位に在らざることを言ふのである。

今の山本内閣は均勢内閣である。薩派及政友會の二勢力が、相對抗して然も互に牽制し、互に讓り合ひ、そして勢力の均衡を維持せるの内閣である。均勢内閣は、一名氣兼内閣とも謂へる。即ち相互の氣兼に依つて、無事を維持して居るのである。薩派と政友會と、孰れも他を凌いで專横の振舞をする事が出來ぬ。孰れも他に對して遠慮せねばならぬ關係に居る。是は頗る妙なりと謂へば謂はれるかも知れぬ。或は毒を以て毒を制するの妙作用なりとて、之を喜ぶ人もあるであらうと思ふ。山本首相は政友會に制せられて、不本意ながらも文官任用令又は陸海軍大臣の官制に改正を加へ、又二師團增設の實行をも遠慮する其の傍に於て、政友會は山本首相に制せられ、電燈問題に失敗し、又無謀なる積極主義に掣肘を加へられる。如何にも是は面白い妙作用である。

然れども毒を以て毒を制する其の傍には、毒を以て藥を消すと云ふ事のあるのを記憶せねばならぬ。氣兼内閣に於ては、思切つた惡事も行はれぬ代りに、斷乎たる善事も行はれ難いのである。時としては多少の善事を互に助け合ふて爲すこともあれど、又多少の惡事を互に默許して遂行せしむることも起るのである。是は互に弱點を有するより生ずる自然の結果であつて、如何ともする事が出來ぬ。而して之に就て最も遺憾なるは、勢力の中心點不明なるがため、責任の中心點も亦不明となる事である。功あれば、薩閥と政友會と、共に爭ふて之を自分の手柄の如くに吹聽するならんも、罪あれば、彼等互に其の責任を他に嫁せんとすることであらう。甲は言はん、我等之に反對なるも、政黨の事情上、已むを得ず之に同意したりと。乙は言はん、我等之に滿足せざるも、薩派との關係上、不本意ながら之を承諾したりと。斯くて互に責任を他に嫁し他の態度を以て自己の辨解と爲すならば、是は詰まり無責任政治である。無中心政治は結局無責任政治とならざるを得ない。是れ穴勝に人の罪では無い、要する

に仕組が惡いのである。吾人は無中心の政治組織を一日も早く葬らねばならぬ。

泰西學者の言に、「惡政府は無政府に優る」と云ふことがある。予は之を轉じて、惡中心は無中心に優ると言ひ度いのである。藩閥政府でも、其勢力を握れる藩閥政治家が一切の責任を負ひ、一定の抱負と見識とを以て國務に當る場合には、自ら國務に締りがある、政治に統一がある。善きにせよ、惡きにせよ、兎に角統一ある一定の政策が堅實に遂行せられ、國民は何處に導かれつゝあるやを明確に知ることが出來る。同時に之に對する責任の所任點も、常に國民の前に明白である。されど性質曖昧にして勢力の中心點不明なる内閣に於ては、何となく統一と堅實とを缺き、又何となく締りが附かぬ。其の爲す所は、何となく不得要領となり、意義不徹底となり、晦暗となり、矛盾となり、國民をして眞意何處に在るやを知るに苦ましめ、又適歸する所に迷はしめんとするのである。

去三月山本首相は陸海軍大臣官制に關する質問に答ふるに當り、憲政の運用と「支障なきを保し難し」との婉曲至極の名句を吐かれたが、此の一句は其特色を遺憾なく發揮して居るのである。桂内閣の如くに支障なしとも斷言せず、又政友會の主張せし如くに支障ありとも明答せず、中間不徹底の文字を用ゐたるは、如何にも首相苦心の存する所であつたのであらう。それで其後の官制改正並に文官任用令改正の如きは、皆不得要領と意義不徹底の特色を愈々實地の上に證明して居る。又昨今に至り、消極主義の政策を採用してより幾に半年餘なるに、早くも積極主義に復るの色を示さんとするが如き、堅實を缺くの證據ではあるまいか。夫の増師問題の成行の如きも、能く具體的に無中心内閣の弱點を暴露して居ると思ふ。政府は増師の意あるや否や、今以て國民は之を知ることが出來ぬ。何うやら次年度豫算には之を計上せぬ事に極まつた樣であるが、然も或は一年延期の條件附なりと云ひ、或は然らずと云ひ、國民は依然として五里霧中に迷ひつゝある。多分政府も氣象内閣の特色として、明確なる一定の方

針を立つるに窮して居るのであらう。

國民が適歸する所に迷ひ、國政の向ふ所を知るに苦むと同時に、政府が兩勢力自身も、互に其の落着き先きに就て、不安を抱けるの觀あるは、是れ亦己むを得ざるの勢である。均勢內閣の均勢は、何時破れるかも知れぬ。勢力均衡の動揺と同時に、如何なる變動が起るかも知れぬ。政友會は薩派との提携の長く繼續すべきを豫期しては居ない。從つて今の中に其の立脚地を固むるに腐心し、又提携破裂後に處するの方策に就ても、最高幹部間には頭腦を痛めて居るやに察せられる。一方の薩派又略同然であつて、決して政友會を以て永久の同盟とは考へて居らぬ。そして其政友會制御の策には、餘程苦心して居るやうである。要するに合せ物は離れ物である。此道理は双方とも能く承知して居る筈である。從つて双方とも萬一の場合に應ずるの策を怠らない。內輪同志の掛引に忙いやうて、何うして全精力を國事に集中することが出來やう。是れ亦國政中心點の一ならざるより來る弊害である。

更に又國政中心點の一ならざるが爲に、國民は二重の損失を與へらるゝの虞あることを忘れてはならぬ。純粹の閥族政治に於ては、國民は閥族の利便の爲に損害を與へらることがある。又純粹の政黨政治に於ては國民は政黨の利便の爲に損害を蒙ることがある。俗中の俗たる政治に於ては、全然無代價と云ふ事は無理であつて、何れの場合に於ても、多少の犧牲は拂はせらるるのである。併し兎に角國政の中心點が一であれば其一に向つて多少の犧牲又は手數料を拂へば濟む譯であるが、扨て政府が兩勢力の聯合より成り、中心が二つに分かれ、宛も二つの支配者を有するの形となれば自然双方より手數料を要求せられ、二重の損失を蒙らざるを得ざるに至るのである。例へば海軍擴張が極めて安々と行はれ、之がため軍事費の負擔大に重さを加へんとするは、薩閥的勢力の要求する犧牲である。又黨勢擴張の便宜を圖るがため、不急の地方事業に國費を投ずるの弊端、動もすれば現れんとするは、即ち政黨的勢力の要求する犧牲である。閥族的勢力と政黨的

勢力と、互に相牽制して我儘を愼むと云ふ事もあれど、到底双方とも多少の手數料を取るに非ざれば甘んぜざるもの、且上にも言へるが如く、互に弱點を有するより、互に多少の惡事を默許して遂行せしむると云ふ事になり易いのである。政治に多少の犧牲は已むを得ずとするも、少なくも一種類に止めて貰ひ度いと思ふ。二重の手數料は餘りに高價である、餘りに贅澤である。

天に二日ある可らず、國政に二中心ある可らず。吾人は現在の過渡的狀態より速に脫出し、一中心、一責任、從つて又犧牲も一種に止まるに至らんことを期せねばならぬ。下等動物的政治組織は、餘り名譽でも無い。第一國民の不利益は非常なものである。又政治家自身に取りても、均勢内閣の氣兼政治は、餘り面白くもない筈である。即ち民衆政治の新機運に向つて、更に一熱鞭を加へ、速に完全なる政黨内閣を起し、以て國民を基礎とするの政治的新中心を樹立せしむるの外は無いのである。

我國の憲政は幼稚なりとは云へ、實施後既に二十四年、夫の憐れなる憲政黨内閣が、政黨内閣の始めての試みを爲してより、早くも十六年となつて居る。最早少しは氣の利いた事をやつても善さ相なものだ。内閣と云へば、從何位勳何等とか、文武大官の古手や、閥的臭氣の老物を擔いで來ねば、納まらぬ様に思ふは、一種の迷信である。野育ちの政黨員をして、一度土足の儘にて内閣を占領蹂躙せしめよ。内閣の神秘的ヌベルは忽ち破れ、何でも無きものと爲つて仕舞ふに相違ない。英國の憲法論者の言ふ如く、一國の政治には、ディグニファイド、パート即ち威嚴部とも稱すべきものの必要はある。多數人民をして何となく難有味を感ぜしめ、又何となく尊崇心を起さしむる部分のあるは必要である。併し我國に於てのディグファイド、パートは即ち皇室である。別段、内閣が神秘的威嚴の府となるの必要は無い。我國の政治組織に於て、皇室は奥の院である、内閣は社務所である。社務所で俗務を執りお札を賣つたりして居る先生までが、威嚴部を氣取り神秘を裝はんとするは、潜越である、滑稽である。

政黨界の野武士は遠慮なく之に侵入し、內閣は實際の事務の場所であつて、決して呪禁を爲す所では無いことを明白にするが善からうと思ふ。今や時勢は大に進み、機運は大に熟して居る。此點に於て最も責任ある政友會の如き、今少し謀反氣を出し、今少し慾望を大にし發憤一番しては如何であらう。國民は實に曖昧なる無中心政治には倦み切つて居るのである。

極東に於ける 佛國コムミュン亂再現の兆候

福本日南

そら又可笑しい事をいふと笑つちやいけない。目を閉ぢると、瞼の裏に金環が顯げる。それが厭やさに、目を開けば、今度は睫の邊に金粉がちらつく。是こそ人間一期の大事、キ符にならうとする前兆でござるぞ。若も此際精神を安靜にして、沈著なる理性の復活し來るを待たず、觸動する感情の命令に聽き、激發する意思の奔縱に委するが最後、其人は一朝にして命詔著の狂人となり、結局蘆原將軍の司配する王國治下の一民となるの外は無い。

是は勿論個人の上の談であるが、社會公衆も亦當に此一性癖を有する。昨今の日本社會の狀態は如何である歟。就中、此首府東京公衆の精神狀態は如何である歟。由來佛國人と――日本人、立入つて言へば、巴里人と――東京人との間には、酷似類肖した性癖が認めらる。彼に羅甸的熱衷主義を有するが如く、是にも大和的熱衷主義を挾む。從つて彼民族が顯現したのと同一活歷史を此民族も再現し且つ三現しそうな傾向が一にして足らぬ。

靜に此東京の精神狀態を御覧なさい。千八百七十一年に於ける佛國コムミユン亂の金環や金粉が公衆の前にちらついてならぬ。斯かる不祥な事を、元旦早々から前言するは、延喜でもなけれど、古から「靜定工夫忙裏試。平和氣象怒中看」といふ語がある。今自分の言ふ所が幸に國人忙裏の一工夫を促す材料の一つともならば、國に取つて、是ほどお目出たい事はなからうと思ふから、茲にコムミユン亂に就いての一回顧を試みる。

千八百七十一年即ち我明治四年、佛國は獨佛戰爭の餘を承けて、帝國は滅亡する、巴里は圍まれる。爰に國家再造の必要に際會した。此際假攝政府は巴里に在つたが、國家を代表するの資格が無いのみならず、飛行機に乘つて重圍の内から脫出したガンベツタは、檄を全國に移して、共和政體の建立と對獨戰爭の繼續とを全國民に奬奥した。之が結果として、當時比較的靜謐な地位に在つたボルドーに國民議會を召集することゝなつたのであつた。

此際此國政治社會の狀態はと顧れば、巴里の内は假攝政府黨と革命黨との兩派に大分され、地方はガムベツタ黨と非ガムベツタ黨との二派に概別された。彼が如き愛國の國士ガムベツタに、何が故に反對派が現出したかといへば、彼が共和政體建立意見には、何れも大概同意であれど、大戰の爲に重傷を負はされた國民の多數は、最早戰爭を繼續することを好まない。それてガムベツタをして國柄を執らせれば、此上尚ほ戰はねばならぬと看て取つたのである。是が有力なる非ガムベツタ黨の現出した所以であつた。斯くて七百五十名の國民代表者はボルドーに聚合し、茲に國民議會を開いたが、地主派――百姓派が其多數を占めたので、大勢は講和黨の勝利に歸し、當時靜平な平和論者として最も國内に信望あつたオルレアン派の一國士チエールを大統領に選擧して、講和的政府を創造した。之を視てガムベツタ派からは此國民議會を土百姓議會と痛罵したものゝ、最早大勢を如何ともす可からず。仍て其政府を敵と身方との比較的壓迫に遠い威爾塞(ウエルサイユ)に置くこと

ゝなつたので、それまで巴里府中に在つた假攝政府も權力を之に讓り、自然相合するには至つたのである。

以上は戰敗後に於ける佛國の大勢であつたが、巴里の空氣は全く之と別殊の光景を呈した。是より先き獨軍の重圍に對し、府內の各コムミュン（我東京でいへば自ら各區に當る）はそれぞれ區內の住民を起して、國民防禦軍（ナシヨナルガルド）を組織し、方面の防備に當つて來た。是等各コムミュン委員の一半以上は東洋語を以て謂へば、燕趙悲歌の士であつた。從つて新共和政府の講和主義を喜ばぬ。折柄政府は獨逸の要求を容れ、屈辱的講和條件を承諾するに至つたので、彼等は一層憤激の度を高め、相合して、各コムミュン中央聯合委員會を組織し、漸く新政府に反抗の態度を見はし來た。但し此際までは未だ公然敵對行爲にまでは出なかつたのである。が、一方の新共和政府は追々に政府の權力を實行し始めた。

其一は、籠城以來、巴里府內の手形支拂を一時停止し置いたのを、爰に解除したので、是等の契約者は一時に義務の履行に逢著した。」

其二は、籠城の厄難は既に去つたので、各區の國民防禦軍に對し、一に時之が解散を命令した。是が偶然にも大亂の動機となつた。兎いふは、戰餘經濟界の恐慌を來せる場合に、一朝諸契約義務履行を餘儀なくせらるるに至つたので、忽にして一府內に不渡手形十五萬通の多きを生じ、巴里の經濟界は滅亡だとの怨嗟の聲は、西街東陌到る處に囂々する。是と同時に、彼國民防禦軍である。之に屬する兵員の多數は、概ね市內の勞働者―職工の徒であるが、彼等は軍に在つて、日々一法半（フラン）の給料を受取り、それが生命を繫ぐ唯一の資本であつたのに、一朝解除の命令は下り、其日から此資本に離れたのである。而うして荒涼たる戰後の巴里は、未だ何等の事業も興らぬので　彼等は全く無職業、無資本の窮境に陷つた。

それで實業社會からは契約履行の延期嘆願、國民防禦軍司令部からは解除の延期要請が續出されたが、政府としては何時までも巴里を戰時狀態のまゝに放却することを得ぬので、之を聽許せぬ。さらぬだに、

(一)籠城以來、府民は假攝政府の拱手無爲を憤慨し居たのに、其政府は自然新政府と相合したので、一般は新政府を假攝政府の後繼者と認める。

(二)其政府は敵國の强要に伏聽して、屈辱的降伏に出てる。

(三)由來巴里は佛國の首府として立つて來たのに、政府を威爾塞に移轉する。

(四)お負に手形の履行、國防軍の解除を命令する。

爲に憤怨の空氣は巴里の闔府に充滿し來たのである。之を看取して、野心を燃やし出したのが、例の各コムミュン中央聯合委員會の委員連である。此機會を利用して、一國の最上權を掌握しようとの陰謀を企て、一府の有名なるホテル・ド・ヴィール即ち市廳を乘取りて、此を政廳と爲し、國防軍の大砲百七十門をモン・マルトルに聚めて、自ら守り、公々然として新政府に反抗の旗幟を飜へした。

威爾塞政府は之を看て、棄置く可からずと爲し、將軍ルコムト・將軍クレマン・トーマスを司令官として、軍隊を率ゐて巴里に入り、先づ右の大砲を受取らせうと試みた。すると革命運動に巧妙なる巴里府民は、無數の民衆を發して、之を府部に出迎へさせ、其中には老幼殊に婦人が多く雜り、嘆願〳〵と稱して、軍隊に蟻附し、終には隊伍の内にまで混入したので、如何ともすることが出來ぬ。其後ろから革命黨員等は飛出し交渉に藉口して、兩司令官を國防軍本部に拉し來り、遂に之を銃殺した。是に至つて内亂の要素は全く具備したのである。

併ながら巴里市内とて、悉くコムミュナールのみては無い。それに屬せざる各小區の溫和なる諸區長は威爾塞宮とホテル・ド・ヴィールとの間に奔走して、兩者間の調停に盡力し、

(一)手形履行及國防軍解除の延期。

(二)市會の改選。

(三)國防軍司令官の改選。

を提案して、兩者の同意を得、是に由つて、一府を打壞から救出しようと試みた。すると中央聯合委員會は

表面のみ之に讓り、未だ新政府の一令をも待たず、咄嗟の間に、勝手隨意に、大變則を用ゐて、市會及國防軍司令官の改選を實行し、市會も國防軍も悉く自家の黨與を以て之を占領し、巴里を一朝にして全然ジャコピン黨の巴里として了うた。此ジャコピン黨の要素は何々歟。其一は社會組織變革黨、其二はインテルナショナリスト、譯して世界共同黨とも謂はう歟。此二黨の抱合が即ちジャコピン黨である。

斯くて中央聯合委員會と新市會とは左提右携して、實行委員制のコムミュン政府を組織し、デレスクリューズやピーヤットやフェレーの徒之が中堅となり、陸軍大藏・司法・公安・勞働・農商工務・文部・外務等の實行委員を擧げ、宛然たる一政府の體面を具へ、

コムミュン政府の國旗としては、彼等が理想の赤旗を用ゐ出した。

コムミュン政府の正朔としては、亦彼等が理想の共和暦を公示し來た。

同時に徴兵の制度を廢止し、國防上有時の際は、十八歳以上――四十歳までの佛國男子皆出てゝ之に當ると、布告した。

それから威爾塞政府は正當に佛國を代表するものでは無いから、其諸命令は皆無効であり、國民は之に服從の義務は無いと布告した。

而る後コムミュン政府は革命を全國に及ぼさんが爲に、一方にはそれ〲の計畫を立て、又一方には自黨政府の實在を鞏固ならしめんが爲に、國民議會を解散し、大統領チエールを廢し、威爾塞政府を一空に歸せしめんと企て、國防軍を部署して、三軍と爲し、ナンテール・ムードン・ツーの三路から威爾塞に逼迫させた。されど威爾塞には精練の軍を有したので、三路とも逆擊して、コムミュンの軍を打破つた。それでコムミュン政府は悔やし紛れに、新政府に同情を有する巴里の紳董を片つ端から引捕へて、之が報復に充てたのである。犬の糞ての仇討とは、此事であらう。

而うして全國に對する彼等の挑發は良功を奏し、里昂に、クルーゾーに、センテチャンヌに、ツールーズ

に、ナルボンヌに、馬耳塞に、リモージユに、巴里と殆んど同様なる革命運動は一時に竝發し、センテチヤンヌに於ては、府知事までも殘殺した。類燒は佛國を火中に入れんとする。

此際彼等が全國に檄した爲政の方針とも視る可きものは、大要左の通りてあつた。

『巴里は何をか請求する。

第一には、共和制の公認なり。及其保障なり。第二には、通國に於ける各コムミユンの自治權なり。第三には、其各コムミユン合意の聯絡に由り、以て佛國の統一を保つ可し。

第四には、コムミユンに屬する權利は、其コムミユン内の豫算の議定・租稅の賦課・其域内の政治・立法及司法・警察・公安委員の選擧・國民防禦軍の組織・及其軍司令官の選擧なり』

といふに在つた。之に從へば、米國以上の地方分權で統一的佛國は殆んど世界から其影を潛めんとするのであるが、地方黨の短見者流は爭つて之を歡迎した。扨こそ各都市に同一的革命の擧は續發しかけたのてある。

是と同時にジヤコビン黨の二要素なる社會組織變革黨とインテルナシヨナリスト即ち世界共同黨とは、合議して社會改革綱領をも布告した。併し是は彼等政府の運命が餘りに短かゝつた爲に、實行の端を啓かずして終つた。若もそれが實行されて居たならば、佛國社會の被つた損害は啻に一時のコムミユン亂に止まらず、延いて後年にまて及んだてあらう。

威爾塞政府は此横暴を睹て、爰に大に意を決し、强力なる鎭壓軍を雷發して、今度は此方から巴里に押寄せた。是に於て乎、巴里は再度の重圍に陷つた。全體同胞反目・疾視し、激怒・排擠し合ふ場合には、其慘毒は他人・他國との戰爭よりも甚しいものてある。それは明治十年の我西南戰爭に視ても知られようが、彼は山野ての戰爭てあつたから、戰員のみが血戰に仆れたのみてあつたが、是は二百萬に幾き人口を有する都府ての同胞戰てあるから、慘毒の度は九倍・十倍あ

る。戰爭は實に四・五の兩月に連なつた。而うしてコムミュン黨は次第に連戰・連敗して、日々に運命を縮められる。それだけ彼等の憤激は猛烈となり、所謂「科學的戰爭」の擧に出て、石油に點火した火の川を流す。毒瓦斯を磅礴させて、一堂内を焦熱地獄に落とす。それは〳〵目も當てられぬ慘劇を繰返した。爲にナポレオン一世が萬國の帝王を朝會させたチュイルリーの宮殿を初とし、ホテル・ド・ヴィール・司法省・大藏省・會計檢査院等の大宮殿・大建築を破壞・燒毀したるもの、其數を知らず。同時に有名なるボンジャン以下、加特力教の高僧、前帝國の貴族等の無辜にして殺戮せられた者山を爲すといつても、過言では無かつた。殊に五月廿一日から同月廿八日に亘つた所謂「血の一週間」は、大街も・小路も・室内も・屋外も・到る處として血戰ならぬは無く、此間に戰員・非戰員の死者一萬七千人を出した。事果てゝ後、政府軍の手で埋葬した敵・身方の死骸だけでも六千五百餘を數ふるに至つた。

それから後の處分となつても、警察の手で一時抑留し、訊問を加へた者が三十萬人。捕虜として威爾塞に連行かれた者が四萬人。爾後處刑された者が一萬二千人。其中で嚴刑に處しられた者が九百人。太平洋中の一孤島ニュー・カレドニヤに遠流せられた者が七千五百人。而うして是等の處分は千八百七十九年まで繼續したのであつた。

コムミュン亂の顛末は雜と箇樣な次第であつた。それで獨佛戰爭が佛國に與へた損害は固より洪大なものであつたに相違ないが、コムミュン亂の損害も亦決して之に讓らない。殊に其慘酷な點から視れば、寧ろ前者に超越した。今彌次馬の脊に跨つて、高みからの見物として之を觀察すれば、それも人類歷史中の一節として面白いといふ者もあらうが、若も是が吾人の社會で、現實に實現せられるとしたならば、如何に狂險亂を好む與世王の末孫でも、戰栗せざるを得ぬでは無い歟。

以上のコムミュン亂に就いて、吾人が第一に留意せねばならぬのは、彼ジャコビン黨である。其れを構成した二要素の一たる社會組織變革黨は如何なる理想を

懷抱して居た歟。

彼等は現在の社會組織に反對する。

彼等は貧富の懸隔を憤慨する。

彼等は貴賤の懸隔を疾視する。

彼等は成立せる道德觀念に反對する。

次に他の一要素たるインテルナシヨナリスト即ち世界共同黨の理想とする所を看れば、

彼等は國域を桎梏視し、之が解放を要求する。

彼等は愛國主義を以て頑冥不靈の舊思想とし、四海兄弟主義を主張する。

彼等は一國民たるを欲せず、世界の人類を以て自ら期待する。

以上はジャコビン黨の二要素である。是に野心派の一分が加はる。

彼等は權力を得んが爲には、一切の不平分子を煽動する。

最後に無產及失意の一團が加擔した。

彼等は主題の如何に關はらず、破壞とさへいへば、何でも同意する。

コムミュンの大亂を激成した者は、實に此四要素である。が、扨是等の要素は五千里外の佛國――四十年前の巴里の專有物のみであらう歟。五千里內の日本――四十年後の東京に於て、今日公衆の眼前に是等の金粉はちらつかぬ歟。是等の金環は瞬からぬ歟。自分が請ひ問はんと欲する所は、主として此に在る。

且つ抽象的に之を問へば、尙ほそれを危險とする靜平なる理性的判斷の回答に接することを得べきも、以上の理想の一端が實行上、如何にして現出した歟を、事例に由つて詰問する時、果して同一の答案に接し得べきや否やは、自分が甚だ疑問とする所である。

一例を擧げて之を言へば、當年ジャコビン黨中の一首領にして、コムミュン政府の大立物となつたフェレーは元來貧窶なる一畫家で、巴里の東區ヴァンドーム街の有名なるヴァンドーム銅柱の邊に住居した。全體此ヴァンドーム銅柱は、人々の知れる通り、ナポレオン一世が伊・墺・普・露等の列强と戰つた戰勝の記念として、一千

二百門の捕獲大砲を鑄潰し、一大銅柱を造り、上にナポレオンが羅馬のイムペラトールの制服を著けた立像を現出した名譽の一大記念物である。彼フェレーは平素此銅柱の下を徘徊しながら、彼は思考した。伊太利人といひ、墺地利人といひ、普魯士人といひ、露西亞人といび、我佛蘭西人と本源に溯れば、彼我の間に何等の憎怨も無いのである。然るにナポレオン一世の如き覇王の徒があつて、伊を討ち、墺を征し、普を攻め、露を破り、其の奪略物を聚めて、彼が如き罪惡の記念を留めるが故に、伊・墺・普・露等の國民は、今に於ても自然我佛蘭西人を敵視し、寇讐視するのである。斯くの如きは人類の相愛に戻する所以で無い。其等は機會もあらば、何とかして廢棄したいものであると、常に揚言し居た。處に一朝彼が如き内亂に際會し、當年の貪饕なる瘦畫家は一躍してコムミュン政府の大立物となつたので、好機逸す可からずと爲し、左の布告を公示した。

『布告第一號

自今ヴァンドーム銅柱を廢棄す。

千八百七十一年四月二日フェレー』

何が扨、破壞の事業は無い歟と虎視耽々たる連中に、此布告を發したのであるから、ソラ遣つゝけろと、無數の餓虎輩は幾十丈の大綱を幾條と無く取出し來り、蟻の如く群がつて、銅柱の天邊に登り、幾條の大綱を纏い著けて來たから堪らない。乃て幾千のジャコビンは其綱に取縋り、佛蘭西一流の木遣に音度を取つて、さしも堅固な銅柱も見る〲大地に曳倒された。往年自分が巴里に遊んだ際までは、其銅柱の倒れる處を目撃したといふ市民は澤山居た。其人々の語る所を聽いたが、それの倒れる際には、百雷の地に落ちる歟、巨砲の連發せられる歟の如き一大音響を發し、其近傍六七町の間に在る家屋の玻璃窓の板は、爲に悉く破壞されたといつて居た。

自分は深信する。今日極東の巴里に散在するジャコビン團は、必らず之を壯擧とし、偉擧とし、袖を攘ひ、腕を扼して、之に倣はんことを熱望する者の少數なら

ざることを深信する。是れ實に人口二百萬の麗都の前に顚がる金環では無い歟。且つ尙ほ自分は眼前のジャコビンに對し、當年巴里のそれ以上に畏れる所のものがある。佛國人――巴里人の羅甸的熱衷主義は時に大脫線を來すことあるも、彼等は極東のそれよりも比較的理性に富んで居る。從つてヴァンドーム銅柱は曳倒す。チュイルリー宮殿は燒きもする。が、公衆の爲に便宜なる汽車や鐵道までは破壞しようとしなかつた。之に反して、東京のジャコビンは政治問題――外交問題から一轉して、電車の燒討までを敢行せんとする。危なさの要素は果して何れに多しと爲す歟。而うして科學的戰爭の材料は、四十年前のコムミュン亂當時に比すれば、幾倍の豐富を加へ來つた今日であり。且つ我眼中のジャコビンはそれを使用し得るだけの能力を挾有する。彼等は之を使用す可く、居常其準備に怠らぬ。

論じて此に至り、尙ほ我憂言を禁じ得ざるものがある。全體社會なり、國家なり、道德なり、宗敎なり、哲學なり、文學なりに對する近世發出の極端なる敎義若くは新說は如何と顧みたまへ。概ね歐洲の產物で無いものは無い。無政府主義然り。虛無主義然り。共產主義然り。極端社會主義然り。サンヂカリズム然り。世界主義然りである。其他國家主義に對する個人主義といひ、理想主義に對する自然主義といひ、或は自覺主義、或は現在主義等、數へ來れば、比々皆歐洲の產物である。然ればそれの產地たる歐洲の列强社會は、それの流入する極東の一國社會よりも、其影響はより一層强烈なる可き筈であるが、其實は全く反對で、我國に入つて、二層や三層もより多くの印象を無形の心頭に與へつゝあるのである。是は抑如何なる理由から此に至るのであらう歟。

自分が見る所を以てすれば、歐洲列强の國家社會は幾多の辛き經驗を重ね來り、國家社會を建てることの極めて高價なるを痛感して居るのである。一言にして之を蔽へば、苦勞して來た國、苦勞して來た社會である。從つて如何なる詭激の敎義に遭遇し、如何なる極端な新說に出會ひても、多數は之を商量し、之を斟酌

するだけの餘地と量見とを有するのである。それで國家社會の骨子となり、神髓となる可き有識社會は、大抵の新說や、新教義では驚動されぬ。

それも亦其筈である。彼等は皆一再ならぬ辛き經驗を嘗めて來て居るのである。一二の例を擧げて之を言はう歟。例へば近世の初頭に迸發した佛國大革命の理想とした所は、頗る世界主義に接近したものであつた人々の知れる通り、彼等は自由・平等・博愛を世界に擴大す可く唱道して起つたのである。是より先き永き君主專制に疲れたる歐洲列强の社會は、爲に一たび少なからず之に感動した。就中、最も之に隨喜渴仰したのは獨逸國民であつたらう。それで共和軍が當初獨逸に攻入つた時には、各聯邦の政府こそ多く之に反抗したれ、其人民は恰も救世主の神軍が天降つて、暴君を其頭上から取除けて吳れるかの感を爲し、簞食壺漿して王の軍を迎へるといふ有樣であつたのである。共和軍が初期に於て連戰連勝を獲たのは、一つは是が爲であつた。然るに佛國の勢力次第に此方面に伸び、遂にはライン同盟聯邦まで起されるに至つて、民族的・國際的の强壓は意想外に加はつて來た。是に至つて獨逸人は始めて覺り得た、佛蘭西共和軍の唱道する自由・平等・博愛は、ゴーロワ・フランク民族間の自由・平等・博愛て、獨逸民族にまで均霑せしむるものでは無いと大悟したのである。そこで新說に心醉して、暫く拋棄し居た固有の愛國主義を復活蘇生し來らざるを得なかつた。今日獨逸帝國の興隆する大原は實に此愛國主義の復活に在る。

それから佛蘭西自身は如何と顧みれば、彼人民は理想の大革命を斷行し、國王を刎ね、王國を廢棄し、理想の共和政體を創立してみたが、自家の推選したダントンやミュラやロベスピエールやの暴戾は、曩のブールボン家の諸王よりも甚しく、終にはナポレオン一世の帝國を歡迎せざるを得ざるまでに至つたのである。

以上は單に獨・佛二國を例證したのみであるが、其他の列强も皆之に類似した辛き經驗を嘗め來らぬ者は無い。それで歐洲の列强國民は新說に對して取捨の量見

がある。是れ獨り採用する者然るのみならず、主張する者も亦然りである。例へば近く故人となつた獨逸のベーベルは如何であつた。彼は急激社會主義の主張者として、其名を世界に轟かせた一人である。從つてホーヘンゾルレン家一流の國家主義などには、最も大反對の意見を有して居た。それだけ獨逸政府では注意人物視し、危險人物視し、帝國議會の開會中こそ議員の一人であるが故に伯林に入込ませたれ、議會一たび閉會を告げれば、憲兵・巡査に護送させて、毎回府外に追出させたくらゐであつた。それでも彼は獨逸が佛蘭西から割取つたアルザス・ローレンの二州に對し、如何なる意見を公示した乎と問へば、

『アルザス・ロートリンゲンの二州は、獨逸民族が血と勞力と資本とを擲つて贏ち得たる所であるから、報償なしの無代價では、佛國に返還することを得ぬ』

と明言して、是だけは獨逸の國策と一致し來たのである。爰に看る可し、最も急激に最も極端な社會主義の唱道者たるベーベルでさへ、此差別の見地を有したのである。

然るに我日本はと顧みれば、餘りに平和に國を建て來た。國史あつて以來、未だ一日だに國の獨立を失却した事が無い。其間外寇の侵入はと問へば、弘安の元寇と、近くは露國の太平洋艦隊との來寇ぐらゐより外に、國民の記念に深印するものが無い。それとて睡還の一地角・近海の波浪間に出沒し、一擊の下に擊退したのであるから、此國民は多く立國の艱難を知らぬ。同時に立國の價直を知らぬ。それだけ堅確なる自信に乏しいのである。難有さも此に在るが、危なさも亦實に此に在る。

殊に危ないのは有識社會の卵たる青年の讀書社會である。昔は列子素に泣くといふが、我等も亦素に泣かざるを得ぬ。彼等の多くは餘りに單調に餘りに、淺薄である。歐洲のそれは、其素を個人主義にも染めて居るが、同時に國家主義にも染める。世界主義の色合をも喜ぶが、帝國主義の滋味をも賞する。之に反して、我國のそれは、其素を單に一色に染め、其他の諸色の

妙味を知らず。唯だ流行色としいへば、狂奔して其色を追ひ、此他に美妙の色あるを閑却する。一國の危殆は日々此間に胚胎しつゝあるのである。

今其の多くをいふに遑あらず。一二を擧げて、其他を概見しよう。人は個々にして存在する。獨自の立身・立脚を保障せざれば、自家の幸福は期するを得ぬ。土臺の基礎を個人主義に築かねばならぬ。併ながら人は獨自のみにして生存するを得ぬことも亦明白である。獨自は一家の單位であり、一家は社會の複單位である同時に一家・一社會の公利・公益をも圖らねばならぬ。幸福は相互の關係から生出する。それて歐洲の個人主義を主張する者は、之を尊奉すると具に、Un pour tout 即ち一對總の責任を自覺し居る。國家主義を把持する者も亦然りである。社會にはいふまでも無く秩叙を要する。兼ねてはそれの維持及保障を要する。國家社會制は必要缺ぐを得ぬ。而もそれを組織構成する分子は即ち個人である。故に彼の國家主義を主張する者は Tout pour un 即ち總對一の德義を感知し居るのである。從つて彼の個人主義・國家社會主義をいふ者は、Un pour tout, tout pour un の連帶的德義を解得し居らぬ者は無い。それだけ兩主張ともに危なさが尠ないのである。他の愛國主義と世界主義との關係も亦又之と同一である。

處が此個人主義は、我國に入りては、多數の少壯社會に由つて、我利主義と誤解せられ、一轉しては快樂主義となり、凡そ人類生存の目的は、自己を利し、自己を樂ましむるに外ならずと爲し、相率ゐて此方向に走りつゝあるのである。從つて彼等は此短見に照し現在の社會組織に反對し、既成の道德觀念に反對する。即ち彼等は自ら名のらざるも、宛然たる佛國當年の社會組織變革黨に無形の黨籍を入れんとする。

之と同時に、國として歐洲列强の如く艱難を嘗め來らざる國民の少壯社會は、獨立を失ひたる場合の苦痛を知らず、民族的偏見の世態を悟らず、ユートピック世界主義の空論を直ちに眞に承けて、國域を桎梏視し忠君愛國を頑冥視し、亦相率ゐて四海兄弟主義に赴か

んとする。看る可し彼等は亦佛國當年のインテルナシヨナリスト即ち世界共同黨と知らず識らず歩調を一にしつゝあるては無い歟。

而うして今日一國の現狀如何と顧みれば、

我政府は果して當年巴里の假攝政府よりも、より有爲なりといふことを得る歟。

我少壯社會の多數は當年巴里のそれよりも、より失意ならずといふことを得る歟。

我國今日の生活狀態は當年佛國のそれよりも、より困難ならずといふことを得る歟。

是等の不平は土中の瓦斯管の如く、地底から地底に傳はつて、デレスクリューズ・ピーヤット・フェレー等の點火を待ちつゝあるては無い歟。之を念へば、憂慮に禁へぬ。それて此にコムミュン亂の金環・金粉を捕捉して、一國中堅社會の一省察を請求する。

異教思潮の勝利

厨川白村

賢人は唯だ一つの信仰を有す、そは自己なり。
賢人は唯だ一つの諷刺を有す、そは人生なり。
——レミ・ドゥ・グルモン

一

歐羅巴の文明史を繙いた人は誰しも、其根底には明かに人間の本性に基いた二つの異つた潮流が横はつてゐる事に氣がつく。著るしく色調を異にした二つの流れが、そこに一盛一衰、一勝一敗の爭ひの歷史を繰返して來たことに強く注意を惹かれるだらう。これが即ち史家の所謂、人性の異教的基督教的二元論、英語て

いふ the Pagano-Christian dualism of our human nature て、私の論の出發點も亦たこゝにある。

むかしの埃及人は種々さまぐの奇怪至極な神體を彫つた。それらは頭だけが犬猫或は猿鰐などの類で、からだは全くの人間である。なかでもかの女頭獅身のスフィンクスは、一番ひろく世に知られたものだ。それから希臘人もまた同じような事を考へて、半人半獸のパンやセントオルなどを拵へた。これらは果して何をあらはし何を意味するものであらうか。考古の學者の煩瑣な所説はしばらく措いて、これら半人半獸の像ははやく既に古代人類の胸奥に兆した靈肉の鬪爭、神性と獸性との不調和の問題に對するかれ等の極めて幼稚な、また原始的な一種の解決法を示したものだと見ても、必ずしも牽强附會ではなかろうと私は思ふ。

靈と肉と、聖く明るい神性と醜く暗い獸性と、精神生活と肉體生活と、内なる自己と外なる自己と、これら二つの者の間の不調和は、苟くも人類が思索といふ事をはじめてよりこのかた、その苦惱煩悶の素因であつた。如何にかして靈肉の調和を求めたいと焦心るのは殆ど人類一般の本性であつて、之が今日までの人文發達史の根底に伏在する大問題であつた。

バイロンが悲曲『マンフレッド』の主人公は獨りユングフラウの峯に立つて恁う叫んだ。

How beautiful is all this visible world!
How glorious in its action and itself!
But we, who name ourselves its sovereigns, we,
Half dust, half deity, alike unfit
To sink or soar, with our mix'd essence make
A conflict of its elements, and breathe
The breath of degradation and of pride,
Contending with low wants and lofty will.

目に見ゆる此世界の美しさ。その働作もそれ自らも花やかなるかな。されども自ら稱してその主權者なりと云へるわれ等人間は、なかば塵にしてなかばは神、沈まむ事ものぼらむ事も共にかなはず。獸性と神性と二つ相交はれるわれ等が本性は、その要素互に相爭ひて、一は卑しく一は誇りがに、低き慾求と高き意志と相爭へるなり。

またかのテニスンが十二篇の『國王牧歌』に現はした

思想も、要するにアッサア王が地上に建設しようとした神聖な理想の王國が、王妃の道ならぬ戀に起つた肉のけがれに破られる靈肉の爭を中心にしたものであろう。更にこれらとはよほど懸け離れた種類の文學で例を取れば、ドストエフスキイが『罪と罰』の深刻な心理描寫も、畢竟あの個人主義的な自我狂(エゴイニア)のラスコルニコフに於て人間の肉的方面を代表せしめ、また賤しい賣春婦ではありながら心けだかきソオニアといふ女に於て神聖な靈的生活を代表させ、つまりは此二元の爭を描いたのである。唯だ前者が遂に後者ソオニアによつて感化せられ、靈肉合一の生活に入るところまでを書いたのは、此露西亞近世の大作家が他の詩人と異つた點であらう。

この靈肉鬪爭の問題は、歐羅巴では、靈を重むずる基督教思想に對し、肉を貴ぶ異教異想(ペイガニズム)の爭となつた。或はまたこれを冷かな精神的思索的の北歐思潮と、熱烈な肉慾的本能的の南歐思潮との對立と見るも可(よ)かろう。わが國で云へば、『古事記』に現はれた神話時代からの日本人固有の思想こそ、その現世的肉的なる點に於て、まさに歐洲に於ける異教思潮(ペイガニズム)に比すべきもので、後に這入つた儒佛二教の思想は、ちやうど基督教思潮の立場に類するものだと見てよい。

基督教に對する反(アンティ)基督教思想たる異教思想の源は、やはりすべての歐洲文明の源である希臘に發した。だから名づけて希伯來主義(ヒブルイズム)に對する希臘主義(ヘレニズム)とも云へば、或はまた基督崇拜に對して希臘の酒の神、歡樂の神なるダイオニサスの崇拜とも呼ばれ得るのである。

この二大思潮の特色に就ていま詳密の説明をする必要はないが、こゝでは單に兩方を對照してその最も著るしい相異の點だけを擧げるに止めよう。

むかし希臘のデルファイに在つたアポロの神殿に録された名高い言葉がある。それは

Γνῶθι σεαυτόν (なむぢ自らを知れ)

といふのであつた。ところが之に對して基督教の聖書を見ると恁ういふ句がある。

『エホバを畏るる事は智慧の根本(もと)なり、聖(きよ)き者を知る

は聰なり。」　箴言　第九章十節

一は希臘哲學の祖タアレスの語として傳へられ、他はソロモン王の教として今日に殘つてゐる。そしてよく考へて見ると、異教思想と基督思想との根本的差異は、この簡單な二つの文句に盡くされてゐる。先づ「なむぢ自らを知れ」と說くのは、人に向つて個人的に自覺せよ覺醒せよと促がすもの、從つてまた自我中心の思想 egocentricism であり。自由主義の思想である。之に反してエホバの神を畏れよと訓ゆるのは神を尊び其權威の前に絕對の服從を强ゆる所謂教權主義に他ならない。前者は飽くまで人間本位 human の現世主義であるが、後者は未來を云ひ天國を說く神本位 divine の思想だ。

更にまた他の方面からいふと、基督教が天を慕ひ理想にあこがれる靈を重むずるに對して、希臘思想は地上の現實に執せむとする肉の解放を主張した。基督教の如くに利他を說かずして、先づ自我の滿足と個人生活の充實を要求するのがその特徵だ。超自然ではなくして人間の本能を重むずる自然主義こそ希臘人の信念であつた。前者には、從つて、肉慾的分子が多く、後者には禁欲生活の美が貴ばれた。かくて一方が歐洲人の藝術的意識を代表すると共に、他の一つが宗教的道德的意識の中心となつたのはまた當然の成行きであつた。

最後に、思索の傾向から云ふと希臘の方はよほど智的であり、客觀的であつた。從つて自然の精緻なる觀察に長じ、それが遂には歐羅巴近世の科學的精神智識的欲求の淵源となり、素因となつたのである。然るに基督教思想の方では之と反對に、主觀的傾向が主になつて、想像や感情の豐富が、たしかに其大なる特徵をなしてゐた。

以上述べた事を約めて對照の表にして揭げると、

基督教思潮（ヒブルウ 希伯來思想）	異教思潮（ペイガニズム）（ヘレニズム 希臘思想）
靈的、禁慾的	肉的本能的
神を知れ	爾自らを知れ
絕對的服從	個人的自覺
教權主義	自由主義
天國、神本位	現世人間本位
利他主義	自我の滿足
超自然主義	自然主義
宗教的道德的	智識的藝術的
信仰的獨斷的	科學的實驗的
主觀的傾向	客觀的傾向

歐洲三千年の文化發達のあとを溯つて文藝の思潮を歷史的に觀察して見ると、紛糾錯綜したこの現代の暗潮も、歸するところは、遠く希臘の昔に發した異敎思潮の勝利に外ならないのだといふのが私の此の小論文の主旨である。

二

地中海の浪に洗はれた南歐の美鄕、山水明媚の希臘半島の一角にあるアテイカの洲に、光芒燦然たる文化の輝きを見たのは、今から云へばもう二千年にも餘る遠い昔であつた。その豐麗な思想と藝術とがながく百代の民衆を動かして影響感化が遙に現代に及むだゐるといふ事實は、それ自らに於て既に世界文明史上の一大壯觀たるを失はない。

希臘の文化は忽ち他國に遷つた、緣もゆかりもない――否などうかすると敵であつた他の民族をさへ感化した。羅馬人が先づ之を學むだのは云ふ迄もないとして、あの使徒保羅(パウロ)の如き、基督敎思想を提げ來つて希臘人を愚なりとさへ嘲つた者が、なほ且つ希臘の詩文に學ぶところあつたのは面白い。爾後この思潮の勢は一張一弛、時に或はかくれ或は現はれて、複雜多趣なる歐洲人文史の根底を流れた。羅馬帝國亡むで後は、暗黑の中世にかくるる事幾百年、この思潮は遂に猛然として近世文明の淵源である文藝復興(ルネッサンス)期の伊太利にあらはれたのである。それからまた暫くすたれて居たのが十八世紀になつてヰンケルマンの古代藝術史論となり、轉じてまたゲーテに遷つされて殆むどすべての十九世紀以後の文藝に影響した。近代に於てはニイチェの思想こそ最も大膽に、また最も痛快にこの希臘思想を宣傳したものであつた。

ちやうど日本が印度や支那から儒佛二敎の思想を受け入れて之を同化したやうに、眞先(まつさき)に希臘思想をその儘うけついだ者は羅馬帝國の文明であつた。唯だ羅馬人は希臘人のやうな聰明の智力と節制の美德を缺いだ。肉の觀樂を求めて飽くことなく、情熱の奔放に任せては、遂に頽廢靡爛の極度に達しなければ止まない南歐拉甸民族の特徴を、かれ等は遂に遺憾なく發揮す

るに至つた。唯ださへ現世的個人的自然主義的の希臘思潮が、この節制なき羅馬人の生活に移された結果として、羅馬帝政の末路は甚しく荒廢した。文明爛熟期の常として、人は唯だ樂欲の巷に本能の滿足を求め、歡樂の毒酒に醉ふて、また他を顧みなかつたのである。後代の史家が呼むで「羅甸頽廢期（ラテイヌデカダンス）」といふ時代は、即ちこの帝政の末年だ。

人は恁うして肉の歡樂に飽き果て、その生活は疲勞し糜爛し頽廢し盡くして、頻に新しき何物かを求めつつある頃、はるか東方ベトレヘムの空に靈の曙光は現はれた。

かの默示を說き天國を敎へ、禁欲愛他主義を奬めて當時の人の靈的宗敎的慾求を滿足させうとしたのが即ち基督の敎であつた。さしも一代の人心を支配して來た異敎思潮の現世主義も、かくて基督降誕と共に衰頽の第一步に入つたのである。名高い傳說に、基督降誕の夜、タレンタムの岬を過ぎ行くさる旅人が、いづくともなく聞こへる物悲しい聲『大なるパンの神死せり』といふのを聞いた。これが希臘「群神死滅」の時であつた。

しかし歐羅巴文明の最初から、其基礎となつて殆むど幾百年間勢力を占め、人間の自然の儘な肉的欲求に基いた希臘思潮の事だから、如何に基督敎の力を以てしても、さう〳〵右から左に滅ぼされる者ではなかつた。即ち紀元後二三世紀の間、歷史家が所謂亞歷山府（アレクサンドリア）時代は、異敎對基督敎、希臘主義（ヘレニズム）對希伯來主義（ヒブルイズム）、現世主義對天國主義の衝突、換言すれば肉に對する靈の抗爭時代であつた。之を文藝史上の通用語で云へば、古典（クラシック）時代より浪漫的（ロマンチック）の中世へ遷らうとする人文史上最も興味ある過渡期であつた。しかしそれも紀元五世紀の末つかた西羅馬帝國の滅亡からといふものは、約一千年間、歐州は基督敎思潮の全盛期に入つて、歷史家が所謂中世暗黑の世となつた。

大帝國が滅びて統一者のなくなつた後は、勢ひ群雄割據の戰國時代になる。平和の時代には歡樂の美酒に醉ふてすべてを忘じた人たちも、ひとたび戰亂の世

となれば、忽ち現世の幸福を果敢なみ、有爲變轉の世のさまを觀じて、ひたすら墓のあなたの天國をのみ祈願する。我國の鎌倉時代に厭世的佛教が盛になつたと同じわけで、所謂「羅馬の平和(パックス、ロオマナ)」の亡むだ後は、節慾苦行の生活と遁世主義(モナスティシズム)とを中心とした基督教が勢力を逞ふするに至つたのは、まことに當然の成行きである。

紀元二三世紀の頃から既に自我本能主義の異教思潮に對する反動として現はれたこの宗敎的禁慾主義(レリヂアス、アッセティシズム)は、詳しく云へば智識の禁壓と快樂の否定との二つであつた。

現世の生活は當時の僧侶の言葉でいふと、試驗(プロベイション)の狀態にあるので、吾々はこの世で抑損、離行、苦行をつづけ、それによつて來世の安樂と幸福とを得るのである。また、美は陷穽であり、一切の快樂は惡魔の誘惑であるとかれ等は說いて、現在の生命の力や要求を極端に虐げ、靈的生活のために肉的生活を全然壓服しやうとしたので、此點に於ては日本の或る時代の佛教をおもはせる者があつた。また智識の否定に至つては更に甚しかつた。折角希臘羅馬の異教時代に進むでゐた學藝の研究は全く禁壓せられ、從つて個人に自由もなければ自覺もなかつた。唯だもう一向專念に神を祈願すればそれで救はれる、無學文盲こそ信仰の母だと云つて、法王の權威のもとには、遂に聖書を讀む事さへ禁じた程であつた。

嘗て肉に飽いた者が靈を求めたのとは正反對に、中世紀約一千年間の暗い冷たい宗教生活に疲れた果てた人の心は、おのづからまた肉的現世的方面に向つた。そして古代異教徒の美しい文明と花やかな藝術に憧がれて、それを復活しやうとした。この風潮が十五世紀に至つて成熟したのを、名づけて文藝復興(ルネサンス)と呼ぶのである。之を狹義に解すれば單に古學復興であるが、實は中世基督教の因襲や權威を破つて、人心が個人的に覺醒した事を意味するのである。天國の幸福を祈願するよりも、人は先づ現在人生の享樂を求めようとる。殊に批評的實驗科學の精神が獨斷的の宗教信仰に代つた點に於て、近代思想の門戶がここに在る事は今更いふ

迹もない。

中世の間は一意專念に神や天國をのみ祈つて、人は全く「自我」といふものを忘れてゐた。それが今や人心の覺醒と共に、古代の「爾みづからを知れ」といふ思想に歸つた。神本位の思想は亡むで、人間本位の思想が之に代つた。ちやうど當時の陸地發見と同じやうに、つまり今まで忘れてゐた「人」といふ者を新に發見したのであるから、文藝復興期の思想は一にまた人間主義の名を以て呼ばれるのである。享樂耽美の風潮、靈と肉とを合一せむとする努力、肉的本能的生活の肯定、——之を一言にして云へば希臘主義の復活が、この近代思想の黎明期を最も鮮かに色づけたものであつた。

さて恁うして「近代」の幕が切り落されてからといふものは、思潮は益々紛糾錯綜して、到底簡單な說明を許さない多くの事情を生じた。即ち十七八世紀から十九世紀にかけては之を異教思潮と希伯來思潮との混合時代と見、二潮交流の復雜時代と名づけるのが至當であらうと思はれる。即ち先づかの宗教改革の如き、一面から云へば固より眞の靈的宗教的要求から起つた運動ではあるが、他の方面から考へると文藝復興期に於ける異教思潮の眞精神たる個人的自覺の精神、教權破壞主義の當然の歸結に外ならなかつた。恁ういふ風に考へると、十七八世紀の現象である主智的傾向も、啓蒙運動も、また古典主義の文藝も、殊に十九世紀劈頭の浪漫派の勃興も、皆色々の意味に於て基督教思潮と異教思潮との混合であつた。それが前世紀の中頃になつて自然主義に入つてからは、漸く宗教信仰に對する懷疑的傾向となり、物質的機械的人生觀となつて、現實主義、科學萬能の風潮が、尠からず基督教思潮の勢力を破壞した。ところが最近二三十年このかた、自然主義の思想衰へて後の新理想主義の時代に入つてからは、遂に異教思潮のめざましき勝利となつたのである。即ちいま私は新異教主義 Neo-Paganism の名のもとに、最近歐州文藝思潮の著るしき特色を概觀しやうとするのである。

三

英國の名高い說教家フレデリック・ロバトスンは希臘思想の特徴を數へて、第一には小時も休みなき努力、第二にはその現世的なること、第三には美の崇拜、第四には、神でない人間的なものを崇拜すること、この四つを數へた。之等は誰が考へても異議のない點てはあるが、私はこゝて希臘思想そのものに就て論ずるよりは、寧ろそれが如何なる點に於て現代思潮の根底をなしてゐるかを示したいのてあるから、必ずしも此ロバアトソンの說には從はないて、別に異つた四つの方面から說く事にした。

第一には希臘人の抱いてゐた物質論の思想は、決してかの自然主義的唯物觀の類てはなくて、寧ろ最近思潮の一面てある物質卽精神の思想、換言すれば靈肉合一觀てあつた。

古代希臘の哲人はプラトオンにせよアリストオテレスにせよ、みな物質の實在を認めた。かれ等はすべての物質を、單に精神の顯現に過ぎないと見るやうな唯心論的の思想は抱かなかつた。が、またそれと同時に一方には自然主義論者や或は科學萬能論の信者が云つたやうな純粹の唯物論をも說かなかつたのてある。希臘思想の特色は、飽くまて現在の肉的物質生活に執着しながら、同時にまたその基礎の上に建てられた靈的精神生活を否定しなかつた點にある。そして之がまた歐州現代の思潮と、殆むど方向を同じうしてゐると見られる所以てある。かの詩歌的數學の創始者なりと云はれる故ポアンカアレの所說、また物理學者の立場に在つて今しきりに神秘信仰を說くオリヴア・ロッヂの宗敎論、實驗と共に直覺を重しとするベルグソンの哲學そのほか故ゼエムスの實用主義（プラグマティズム）より最近英米の新實在論（ニウ・リアリズム）は云ふまでもなく、オイケンが精神生活の論に至るまでも、その間に程度と色調との相異こそあれ、みな悉く希臘思想の根底たる靈肉一致觀と行きかたを同じうした者てはなからうか。少くとも、其間に一脈の相通ずる所なしとは云はれないてあらう。

最近の反自然主義、非物質主義の傾向は、要するに

肉に對する靈の覺醒 réveil de l'âme であつた。文藝の上では最も廣い意味で云つた新浪漫主義(ネオロマンティシズム)の思想、また其主要な傾向を言ひあらはした所謂象徴主義(シムボリズム)そのものも、畢竟するにこの靈肉一致の世界觀が生み出した文學に他ならないのである。目に見える世界と目に見えざる世界と、物質界と靈界と、また有限の世界と無限の世界との間には、そこに互に相應じ相通ずるところの一致照應(コレスポンデンス)があるのだと云つた佛蘭西象徴派の詩人の如き、即ちまた此思潮の代表だと見られるであらう。

自然と人道と民主々義の詩人であつた米國のホヰトマンが、その死後、ことに最近數年、益々甚しく西歐の文壇に持囃されるに至つたのは、彼の思想が靈肉の調和を根本として、極めて大膽に肉の美を讃嘆したからである。『肉若し靈にあらずむば何をか靈といふ』と彼は云つたが、この態度こそ、即ち毫も靈肉の不調和を感じなかつた希臘思想の特徴ではないか。その作『自我の歌』Song of Myself は、此詩人の人生觀の最も完全なる告白であるが、そのなかに(第四十八節)、

> I have said that the soul is not more than the body,
> And I have said that the body is not more than the soul,
> And nothing, not God, is greater to one than one's self is.
> 靈は肉に過ぎず、肉は靈に過ずと我云へり。また何者も、たとひ
> 神といへども、人に取つて自己より大なる者なし。

また『われはエレキの肉體を歌ふ』I Sing of the Body Electric と題した詩の第九節には、殆ど三四十行にわたつて人體の各部を仔細に列擧し、さて最後に徳う云つた。

> O I say these are not the parts and poems of the body only, but
> of the soul,
> O I say now these are the soul!
> これ等はただに肉體の各部と詩には非ずして、靈のそれなりと、
> われは言ふ。ああ我は言ふ、之等は靈なりと。

肉體を歌ふに當つてホヰイトマンの飾りなき大膽なる詩句は、卑猥の譏なしに之を日本語に移すことの到底不可能なものが尠くない位である。

四

第二には、最近の傾向はたとひ神秘を說き天地の一

大靈氣を信じ、また不可知の世界に思を寄せてゐても、それはかの無智な中世の人や或は昔の浪漫派の詩人がしたのとは違つて、其根底には極めて聰明にして慧敏なる理智の力を失つてゐないといふ點に特色がある。現代の人は最早さきの自然主義時代のやうに直接經驗の萬能を信じ、自然科學が示し得るところを以て唯一最上のものだとは信じてゐないが、それと共にまた科學的研究、批評的精神の重むずべきを忘れず、道理と智識とに對しては、極めて冷靜に、謙讓な眞摯の態度を持してゐるのである。何事に限らず自分の智力が認めて然りとなす所でなくては承知しない。これがやがて異教思想の特色であり、また文藝復興期(ルネサンス)の眞精神でてもあつた。

『智は眞を語るに在り、また意識して自然に應じて行動するに在り』と云つたのは、エフエサスの哲人ヘラクライトスであつた。今日では眞の希臘思想の源流はソクラテスなどよりも、却つて此ヘラクライトスに在りと見られてゐるので、この言葉の如きは眞に希臘古代の中心思想を云ひあらはしたもので、それがまたやがて現代の精神に他ならない。かのプラトオンが、純なる智識を愛する者、事物を有の儘に觀察するもの——即ち φιλομαθής にして、はじめて神聖の生活に達し得べしと云つたのも、また同じ意味ではなからふか。

英國近世の大批評家マシウ・アアノルドは、其名高い論文の一つに於て、希臘思想を希伯來思想と比較し、前者は後者の如く單に神の教を信じて教權に服從する者ではない。自ら正しくまた明かに事物の眞相を見、自己によつて理をさぐり、眞を求めやうとする者であると論じて、さて下のやうに言つた。

無智を脱すること、事物を有の儘に見ること、有の儘を見て其美を見ること、これ即ち希臘思想が人間の前に致したる單純にして興味ある理想である。この理想の單純と妙味とあるが爲めに、希臘思想と、其思想に養はれた人間の生活とが、空靈の安靜を得、明晰と光彩とを得るのである。吾人が呼むで Sweetness と light と呼ぶものに滿つるのである。

——Culture and Anarchy, Chap. IV.

現代に於て英國のバァナアド・ショオの皮肉な嘲笑的

態度の如き、畢竟非常に聰明なる理智を以て、凡ての社會現象の奥の奥まで、裏の裏までを透察したる結果が、遂にあれほどまで冷かな觀察者となり、皮肉屋となり得たのである。彼の作物の如きは、最も嚴密なる意味で云つた智の文學である。また之とは全く趣を異にしては居るが、佛蘭西のアナトオル・フランスなどが書く物も全く沈靜な智力の所産である。現にかれの近業『神は渴す』Les Dieux ont Soif の如き、白刃の鋭さを以て、古今に變りなき人情の機微を穿ちたる好適例である。

希臘人は如何に熱したる感情の高潮に達した場合でも、冷かな理智の力を失はなかつた。情熱の奔放を、智の冷靜によつて仰へることを忘れない民であつた。ペイタアがヰンケルマンを論じた文中の語を借りて云へば、かれ等の特性は「熱情(パッシヨネエト)ある冷靜(コオルドネス)」であつた。そして此傾向が著るしく藝術の上に現はれて、整齊典雅の美となり、所謂古典(クラシック)の嚴正 Severity と明晰 clearness とをなしたのである。レッシングが「ラオコオン」の冒頭に引用したヰンケルマンの言葉に、希臘藝術の特色は「けだかき單純と靜かなる偉大」edle Einoleit und stille Grösse なりといひ、大なる海が、たとひ其面に波たち騷ぐとも、深き底は靜かであるのに似てゐると評した意味も、全くここに在る。

古典藝術の美として何よりも貴ばれる釣合(つりあひ)即ちプロポオションなども、よく考へて見ると決して單なる法則(カノン)や規範ではなくて、つまり事物を有の儘に見て、その眞(トルス)と實(リアリテイ)を摑まうとする理智の顯現に外ならない。或る事件にせよ或る人物にせよ、それを描いてちやんと釣り合が取れてゐないといふ事は、つまり自然そのものの眞を逸してゐるからだと思ふ。かのアリストオテレスの哲學の基礎である「中庸(ミイン)」の說の如き、眞に希臘藝術の根本精神であるが、あれは單に兩極の中間といふ意味ではなくて、つまり究極(アルテイメエト)の眞(トルス)と實(リアリテイ)とを聰明怜悧な理智の力によつて捉へるの謂である。後の十七八世紀の古典主義(クラシシズム)の文藝の如きは全く此眞精神を逸して、單に古典の外形を學び、ことさらにそれを規矩

準縄として摸倣しやうとした結果、かの生氣なき月並の藝術に墮したのである。内容と外形と理智と情熱とすべてに於て不調和といふ缺點を有たなかつた古代希臘の天才は、其自然の儘な天賦の能力によつて、故意にではなく全く自發的（スポンテニアス）に、冷かな整つた、そして明晰な藝術品を作り得たのである。從つてその冷かな所に情熱もあれば、整つたうちにも生氣の躍動が見られたのであつた。熱烈の眞情を端正の外形に包むだる古代藝術の神品は、恁くの如くにして生れたのである。近頃になつて歐州文壇の一角に新しく新古典主義（ニオクラシシズム）の聲を聞くに至つたのも、畢究私がここに言ふ所の異教思潮の一面を復活させる者ではなからうか。

ニイッチェは其『悲劇發生論』Die Geburt der Tragödie のうちに、希臘思潮の本質を二つに分けて、アポロ型 apollinische とディオニソス型 dionysische となした。前者は希臘の美の神太陽の神、また赫耀たる光明の神になぞらへただけに、冷かなる眞と美とを貴び、明晰なる智の傾向を代表する。後者は酒と歡樂の神ディオニソスを思はせるやうな、陶酔と熱情と空想と夢幻との傾向を代表する。從つて廣く之を人間生活の上から云へば、アポロ型の傾向は智識、義務、慣習、形式などの靜的方向に、ディオニソス型は自由、興奮、直覺、戀愛などの動的方面に現はれるのである。そして此二つの者がよく悲劇的調和を得てゐる事が、即ち希臘の思想と藝術が千古に卓拔なる所以に外ならない。換言すれば、ディオニソス型の自由奔放な情熱と空想とを抑制し、限定し、形成する所のアポロ型の精神、即ち智力の聰明を失はない處に、希臘思潮の眞面目が見られる。

さてこの冷靜な智力は、希臘人の人生觀をして希伯來人のそれとは全く異つた特色を帶ばしめたと共に、そこにまた一種の運命觀を生ずるに至つた。此點に於ても私は現代文學の思潮との間に再び明白な類似を見出すのである。

上にも述べた如く、希臘人はすべて有の儘の事實を極めて聰明な頭（あたま）で觀察した。經濟上また科學上の現象

を自然の儘に如實に見てゐた。だから希伯來人のやうに矢鱈に大きい馬鹿々しい希望を抱いて、それが到底實現され得ないからと云つて、天國といふ一つの理想境を別につくつたり、現世を苦患の世界と見て了ふやうな事は決してしなかつた。最初から、さきのさきまて、よく見通しをつけて、ちやんと諦めてゐた。限りありと見た此現世に於て、出來るだけの幸福と光榮とを得やうとする努力が、異教思想の特色であつた。そこにまた希臘人の特有の運命觀もあつたのだ。

希臘の古劇は一種の宗教觀に基いたもので、一面から云へば運命の不可抗力を示した者だと見られる。たとへばソフオクリスのエディパスでも一天萬乘の英邁の君が、一朝運命の數奇に弄ばれては、あはれな乞食とまでなつて了つた、すべてアポロオンの神託その儘の成り行く事を示した一種の運命劇である。人間がいくらじたばたしても、天地を貫く一天靈氣、一大偉力の前には、當然の支配を甘受せねばならぬ事を示したものである。私は現代文藝にあらはれたアンドレイエフやマアテルリンクや、その他新浪漫派の名のもとに呼ばれ得る多くの作家が、明かに此運命の不可抗力を認めた者の多いのを見て、そこに此異教思潮の意義を想はずにはゐられない。

はじめまだ智力の明敏でないとき、人は情意の促すがまゝに色々希望や欲求を抱く、之が希伯來思想の時代で、その希望を理想境にして、神や天國といふものをかれらは作つたのである。之を近世で云へば浪漫派の空想時代憧憬時代に相當するので、さていよ〳〵その慾求の實現されない事を知つた時、そこに所謂現實曝露の悲哀を感ずる自然主義時代が來る。行きつまつた決定論の人生觀も生ずるのである。しかしなほ更にそれが一歩を進めて現代のやうな、深い本當に聰明な理智の力が出來ると、希臘人のやうな運命に對する冷靜な諦めを得て了ふ。徒に現在の人生を悲觀し煩悶することの代りに、限りありと知りつつ、なほも健氣に求めて止まざる努力と奮闘とを續けるのである。その限りある世界に在つて十分現前刹那の享樂を求めて止

まない、これが即ち自然主義以後の思潮の著るしき特徴てはないか。

五

第三には、異教思潮の現世主義、即ち天國や未來を祈願せずに現在當面の生活を享樂して人生の歡樂に醉はうとする傾向、これが即ち現代思潮の一面てあつて、また中世などの基督敎思想と全く相反する點てある。

基督は天國を地上に實現すべしと敎へたにも拘はらず、中世以後の基督敎徒はどこまでも現世を否定して惡魔の巢窟となし、苦患に滿ちたる穢土であると觀じた。地上のすべては空の空 vanitas vanitatum (「傳道の書」)て、無上の幸福は之を來世に求むるの外なき者と信ずるに至つた。然るに現代に現はれてゐる異敎思想は宗敎の上にも道德の上にも、來世とか天國とかいふ考を一切放棄して了つて、ただこの現在の生活に滿足を得やう、充實を求めやうとするので、從つて其結果が自我主義となり、本能主義となり、個人主義となり、現實主義となり、また享樂主義となり、或は倫理上にいふ所の功利說や快樂說を盛ならしむるに至つたのである。世に最近の思潮を呼ぶに新希臘主義(ニオヘレニズム)の名を以てする人のあるのは恐らく此點に着眼したのであらうと思ふ。かの羅馬の詩人ホラティウスが歌つた「未來をあてにはせず唯だ今日を享樂せよ」Carpe diem, quam minimum credula postero といふ言葉は、これまたやがて僞らざる現代人の聲であらう。

佛西蘭の文壇に、いま詩人として批評家としてまた小說家として雄視してゐるレミ・ドゥ・グルモンは、この異敎思潮を代表する最も大膽なる壯快なる思想家の一人である。其肉的快樂說と自我中心の本能主義にはかのニイッチェ等の所說とは稍々方向を異にして、更に深く新人の心を動かすに足る者がある。彼の名作『ルクザンブルグの一夜』Une Nuit au Luxembourg (近頃英譯も出來た)は、神人の對話をかりて巧みに作者の思想を書いたもので、こゝにいふ現世主義は此一卷の隨處に現はれてゐる。

「貧き人間は先づ自己を愛し、自己の本性よりしてそのうちに在る見へての空なる幸福を取り出ださむとする者に外ならず。幸福は空なり、されどそは眞にして、また唯一の眞にてあるなり。人は唯だ一の生を有するのみにして而かもその生は有限なり。思へ、かの葡萄の實を摘む時は唯だ一時あるのみ。朝には酸く、夕には既に甘きに過ぎたり。過去のために嘆き、未來のために嘆いて日を過ごすこと勿れ。なむぢの時を生きよ、爾の分秒を生きよ。歡樂は花なり、雨降らば色褪せむ、また夜半に嵐の吹かぬものかは。」（同書原文一〇〇頁、英譯一〇七頁）

また次のやうにも云つてゐる、

「生れ、現はれ、滅す、唯だこの最後の語を忘れよ。さながら人間は死せざる者の如くに生き、現在の刹那をさながら永遠なるかの如くに味へよ。」（同書原文一六〇頁、英譯一五九頁）

さて恁ういふ現世主義の爲めに、直接最も烈しい變化を受けたものは宗教である。人は多く現代に於ける信仰の衰退を說くが、それは寧ろ宗教その者に對する人々の考へかたの變化、宗教の現世化と見なすのが至當てはなからうか。またかの宗教に對する懷疑の風潮なども、一方から言へば權威の打破であるが、實は近代人の人生觀があまりに現世的になつたために、舊信仰が力を失つたに過ぎないのではないか。此點に就て、はオイケンも同じやうに說いてゐる。即ち現代人の考ては、科學の進步物質文明の力などによつて、吾々は現實界に於ける十分な滿足を得ることが出來る。かの空漠たる天國を夢みるよりも、遙に手近な確實な存在を有する此眼前の生活にこそ努力すべきであつて、また他を顧るの暇はないと、人々は思ふのである。つまり現實感があまりに盛な爲めに、宗教的欲求がなくなり、其結果はやがて宗教を一種の幻覺（イリウジョン）なりと見、anthropomorphism に過ぎないとさへ觀ずるに至つたのだ。之を分り易い譬て云へば、人が年老いて一方に智能が鈍り、他方にまた體力が衰へて、すべての物的肉的願望が少くなると、自ら來世をたのみ神佛を信仰するが、之と反對に歲もわかく理智の力も盛に、またすべての自我の欲求が熾であつて、現世に對する希望や執着が強い間は、現實生活に忙殺されてお寺詣りの餘裕も無いわけてある。

さて恁うして出來たのが、現代のオイケンなどの宗

教觀てある。即ち現在の人生に對して以前の基督教のやうな消極否定の態度を取らずに、どこ迄も人生を肯定して現在に努力しやうといふ熱意に根ざしたる、享樂と活動とを根本にしたる新宗教を鼓吹する人が多くなつたのてある。オイケンは固よりニイチェのやうな極端な自我主義に反對してはゐるが、それと共にまた自己を實現し自己に歸るといふ事を以て神の要求だとして說いて、さて下のやうに云つた。教會を維持して行かうといふならば、最早在來のやうに宗教を救濟所として見る浪漫的な靜寂な考へかたては駄目てある。眞の現世の享樂、充實生活の福音を說く者てなければならぬと彼は云つてゐる。

さてこの異教思潮の現世主義は先づ著るしく藝術の上に現はれた。たとへば中世の基督教を代表するゴシック建築が、凡て高く天に冲する尖塔て成り立つてゐるのは、いかにも地上生活を離れて天國にあこがれる心持を現はしてゐるに對し、かの重々しいどつしりした感じのある文藝復興式の建築は、飽くまて地上現世の生活に執着する希臘思想を表現するものてあらう。この點に就てラスキンは、『近代畫家論』第五卷第九篇に下のやうに云つた。

『希臘藝術の短所も、またその凡べての崇高も、皆現在の人生を重むずるのによるのだ。その領域は全く現世にある。フロレンスの藝術はその本質に於て基督教的禁欲的で、よりよき來世を期待する、從つて希臘の精神とは反對である。だから一たび希臘風が之に强いられては忽ちにして滅びた。二者には到底兩立すべからざる點があるのだ。』

すべて現在生活を中心にして考へられてゐた希臘ては、幸福といふ觀念も希伯來人のそれとは異つて、天上の樂園などは夢みなかつた。現世に於て富を得健康を得、また美しきもの愛すべきものを得ることが、彼等に取つて何よりの幸福てあつた。また秀拔な人物といふ觀念も、基督教ていふ聖者のやうな超越的の者てはなく、希臘人のは飽くまて肉的現世的の英雄てあつた。ホオマアの詩にあるアキリズの如きは智と美と勇とを兼備した點に於て希臘人の理想的英雄てあつた。また希臘人が神話に現はした思想も、全く人間本位、

であつた。かれらには神人の區別といふものが無かつた。プロタゴラスの云つたやうに、「人間は萬物の尺度」ἄνθρωπος μέτρον πάντων であつたが故に、その多くの神々には一として神樣らしいのは居ない。外貌といひ性格といひ、凡べてが地上の人間である。希臘の神々は、嫉妬もすれば怒りもする。亂暴も働けば泥棒もやりかねない。それぞれ明かな確かな個人性を具へた謂はゞ地上の英雄に過ぎない。希伯來の宗敎にあるやうな超自然的な靈性を具へた神さまとは全く性質を異にしてゐる。希伯來人はすべてを唯一至上の神エホバに歸して考へたが故に、森羅萬象一として神意の外に顯はれたる者に非ざるなしと見た。天地山川の美を觀じても美その者を貴ぶにはあらずして、その背後にありと信じたる神の榮光を拜したのである。殊に大なる神の御前に在つては、蠢爾たる人間の如き殆むどいふに足らずとして、ひたすら其至高至大の靈を拜した。「視よもろ〳〵の國民は桶のひとしづくの如く、權衡のちりの如くに思ひ給ふ、島々はたちのぼる塵埃の如し。レバノンは柴にたらず、そのなかの獸は燔祭にひたらず、エホバの前にはもろもろの國民みななきにひとし、エホバはかれらを無きもの丶如く空きもの丶如く思ひたまふ」(以賽亞書四十章自十五節至十七節)とまで云つたが、此點に於て、希臘人が自然を自然そのもののために愛し、また飽くまでも人間性情の美を重むじたのとは異に好個の對照をなしてゐるではないか。

斯くの如くにして、希臘人は何よりも先づ人間自然の本能と、肉體生活の美を貴むだ。愛と美とを代表した女神ヴヰーナスの讃美は、よく此方面の思想を現はしたものである。生命の强さを與へ人生の歡樂を與ふる力として、昔から多くの詩人は此女神に熱意をこめた讃美の歌を捧げた。

さて異敎思潮のこの現世主義を、近代に於て最も大膽に露骨に宣傳し謳歌したる思想家は、獨逸のニイチエであつた。かれが基督敎思想に反抗して本能生活の充實を唱へ、美的享樂に基礎を置いたる個人主義を絶叫した壯快の所説は、確かに現代の人心に最も痛切な

反響を呼び起したものであるが、要するにそれは、三千年の昔の希臘思想を現代に復活したものに外ならないのであつた。かれの思想は既にいくたびか我文壇に紹介せられたるもの、今更私がこゝに繰り返すまでもなからうが、かれは希臘羅馬の、征服者勝利者の道德を以て、主の道德なりとして之を唱道し、被征服者なる猶太人の基督教道德を以て奴隷の道德だと見做した。勝者勇者の道德には「生の喜び」la joie de vivreが溢れ、勇氣と力と誇りとが充ちみちてゐるが、弱者敗者の道德に至つては全く屈從的で、そこには充實したる力と云ふものが見られないと考へた。かくしてかれは基督敎の愛他主義平等主義に反抗して、自我主義不平主義を唱へ、ショペンハウエル等が人生否定の厭生觀に對して、人生肯定の英雄主義を叫むだ。

しかし彼の所説のうちで、現代における異教思潮の要素を最もよく現はしてゐる部分は、いふ迄もなく其超人說である。かれは『ツアラトストラ』に於て、超人は地の意義を代表する、同胞よ、願はくば地に忠なれ。かの天上の希望を說くが如き空漠の言に耳を傾くる事勿れと敎へた。かれは人生に於ける不斷の向上と努力とを說き、自我を中心としたる進化發展に最上の意義を置いた。かく博愛といひ平等と云ふが如きは寧ろ一の罪惡であつて、自我の意力によつて我等は遂に精神的人格的の意味で云ふ貴族であらねばならぬ。さうして出來たものが即ち超人である。おもへば近世の實驗科學と自然主義の思潮は、まさに基督敎の神を破壞して了つたが、それに代つて現はれたものこそ、此地上現世を重むじた超人說に外ならないのである。もはや偉大と崇高を神の中に見出すことの出來なくなつた現代人は、こゝに超人を信仰してそれを望むやうになつた。ダアヰンは吾人に向つて、人間は虫から進化して遂に現在の所までやつて來たのだと敎へた。嘗て進化の道程に通つて來た猿といふ過渡時代があつたやうに、吾々は今この人間といふ一階段にある。この人間の儘に、吾人は向上し進轉して遂に「超人」の域に達すべく努力せねばならぬ。超人は恁かる意味に於て

嘗て昔の希臘人が考へてゐた地上の神であり、人間の英雄なる者に外ならぬてはないか。

私はここに至つてまたショオの『人と超人』(最近思潮の一面を最もよく現はした此名作の精讀を、私はすべての讀者にお勸めしたい。此頃細田枯萍氏の筆になつた正確な日本譯が出た)に現はれた思想を想ひ起さざるを得ない。勿論英國の此戲曲家はニイチェのやうに明確に超人の理想を示してはゐなかつた。ショオの超人はつまり現在の普通人よりも遙に強い健康を有し、すぐれたる腦力を有する者の謂て、それはつまり人種改良(ユウゼニックス)によつて進化が齎らす所の社會的所產であると彼は云つてゐる。が、恁くの如きは即ち異教(ペイガン)の所謂「神」と甚しく類似したる觀念ではなからうかと私は思ふ。ショオはまたイブセンの作『皇帝とガリラヤ人』を批評して、あの戲曲にあらはれた「第三帝國」と、自我を神なりとする人——即ちここに云ふ超人——と兩方を結び付けて、下のやうに論した。

『皇帝とガリラヤ人』は、殺風景な言ひ方だが、しかし適切に、神秘家マクシモスの過誤(あやまり)だと名づけてもよからう。野心と主義と、——異教主義と基督教主義と——「もはや美でない古い美と、もはや眞でない新しい眞」と、これら二つの者のいづれを選ぶといふのではなく、基督とジュリアン自らとのいづれを取るかといふ撰擇を、皇帝に強いた者はマクシモスである。異教の肉感主義の「第一帝國」に今更歸られもしない事はマクシモスも知つてゐた。さりとて「第二帝國」即ち基督教的或は自己否定的の唯心論も、既に根本から駄目になつてゐる。そこで彼が求むる所のものは「第三帝國」——即ち自らの意志の永遠に正確な事を主張する「人」の帝國である。神はオリムパス山上に在るのでもなければ、十字架上に在るのでもなくして自我のうちに在るのだと考へる人、さういふ人こそ此「第三帝國」を建設して、ブランドの靈肉の間の橋梁を造る人である。第三帝國に於ては靈が知られずにあるといふ事もなく、肉が飢ゑる事もなく、また意志が否められ收られたる事もないであらう。

——Quintessence of Ibsenism, pp. 55, 56.

靈肉一致の第三帝國は即ち超人の國を意味する。超人その者は即ち地上の神を意味するのである。

またさきに云つたグルモンも、此點に就て下のやうに云つた、

神は人の如く、我の如く、あるだらう、我は超人である。爾自らを

無限に多からしめよ、さらばそこに唯一の、眞に考へられ得べき全能の神が出來る。神といふ者を完全な人間の形にして想像した宗教や控へ目な哲學は、今日まで尠くとも理屈にかなつた類似の範圍内に殘つた。我は、人々の崇拜する神々の一人であるが、十分神さましい謙遜をして斯う云はう、我は人である、神は人であると。

——Une Nuit au Luxembourg, p. 99.

斯ういふ風に神を地上へ引きづりおろして、人間化して了ふといふ異教の態度は、この此新思想家の作物のいづれにも見られる。

私はいま現世主義を論ずるに當つて、はしなく希臘神話にある巨人アンテイアスの話を想ひ出した。「地の子」terrae filius だと呼ばれたこの巨人は、足が地上に在る間は、力まことに山を拔くばかりであるが、一たび地を離れて空中に上げられると全く力を失つて無能になる。此弱點をハアキユリズが觀破して、遂に見ごと彼に打勝つたといふ話がある。思ふにアンテイアスは心靈を意味するので、此の一寓話は物質界肉界を離れ地上現世を離れては、心靈の殆ど力なき者である事を示したのであらう。

六

第四には美と藝術との宗教、ことに肉感美の崇拜、これがまた現代に現はれた異教思潮の顯著な一方面である。かの享樂主義といひ、快樂主義といひ、耽美主義といひ、藝術至上主義といひ、或は美的個人主義といふ如き種々の名によつて呼ばれる傾向を、今ここに總括して、すべて皆上に述べた希臘の現世主義の當然の歸結たる美の崇拜を根本にして考へるのは、必ずしも無理でなからうと信ずる。

希伯來思想の特色は、既に述べた如く、ことさらに肉的生活の美と快樂に面をそむける禁慾主義にあつた。ちやうど佛教の言葉で色相界の妄執とか、煩惱とか云つたやうに、あらゆる物慾と肉情を否定した。之に反して希臘人の思想は全く現世の美を中心とし、美の極致はやがて自ら善と一致することを疑はなかつたが故に、かれらはことさらに道を說き德を奬める事をしなかつた。私どもが古代希臘天才が遺した作品を讀むに當つて、特に强く注意を惹かれるのはこの唯美

主義の傾向に在る。ホオマアの叙事詩にもサッフオの叙情詩にも、またヘロドタスの歴史にも、アリストフアネスの喜劇にも、誰かそこに慈悲や正義の教を聞く人があらうぞ。かの使徒保羅(パウロ)が自ら語り人に問ひ、聲を高くし涙を灑いて道を說いたのに較べると、哲人ソクラテスやプラトオンにさへも、道學先生臭味は甚だ薄かつたやうに思はれる。斯くの如くにして希臘が千古に誇るべき豐富なる藝術を遺したるに比して、古來の希伯來民族のそれは此點に於て驚くべく貧弱であつた。第一先づ肉體美を寫した彫刻といふ物を、彼等は持たなかつた。唯だ文學の方で舊約書に詩歌や戲曲もあるが、それも皆宗教的なものばかり、僅に『雅歌』の一篇に肉體美の讚嘆を聞くに過ぎない(雅歌第五章自十節至十六節に男性美を、第四章自一節至七節に女性美を歌へる如き例)。元來美感の著るしく發達してゐた希臘人は、美そのものによつておのづから自分の心の清くせられ高められる事を知つてゐたが故に、かれ等は人體美の極致 beau ideal を寫したる神像を造つて之を拜したのである。即ちかの一切の偶像禮拜を嚴禁した希伯來人とは、此點に於て全く正反對であつた。希臘人の宗教的禮拜は、決して神の力に向つて祈り求めたのではなくて、美のそのものを崇拜し讚嘆し渴仰する者に外ならなかつた。ペイタアが名著『希臘(ギリシア)研究(スタディス)』(二九五頁)に云つた言葉でいふと、希臘宗教の中心動機は全く「肉體の崇拜」the worship of the body にあつたのだ。

山水明媚の美鄕に住まつてゐた希臘人は、自然美に對してそれを讚嘆するよりは、寧ろ親しみ馴れてゐた從つてかれ等が熱烈なる努力によつて求めむとしたる美は、主として人體の美であつたとラスキンは云つた(「近代畫家論」第三卷第四篇第十三章自十二節至十四節參照)。そこでさきにも言つた如く、全く靈肉の一致を信じてゐた彼等は、この肉體美を得むが爲めに精神の修養をも其要素だと考へた。換言すれば肉の美を得ることは、やがてこれがまた靈の向上でもある事を疑はなかつた彼等は、「王冠を得むよりは美しき肉體をこそ得まほしけれ」と言つた。かの中世基督教徒等が、五體を臭骸と見なして極力これを

蔑むだのに比すると眞に千里の差てはないか。

女性美は云ふまでもないが、希臘人は、キンケルマンの美術史に詳しく説かれたやうに、殊に男性美を貴むだ。それも顔面ばかりでなくて、四肢五體すべての筋肉姿勢の美しさを貴むだ。かの四年に一度のオリムピア競技の如きも、今の世にいふ體育とやらの俗惡な動機からではなく、肉體の眞の訓練によつて身體各部の整つた美しい發達を見やうといふ催ふしに外ならなかつた。わけて男子が十五六歳の頃、いま漸く成熟期に入らうとする折の美しい血色や姿勢を、希臘の人は何よりも貴むで、美少年に關する多くの物語を後世に遺した。またスパルタ人の母は、自分の部屋にアポロやナアシサスの美しい彫像を置いて、やがて生れやうとする胎兒がそれに似て美しかれよと祈つた。かほどまで肉體の美を貴むだればこそ、男性の美はフィディアス、女性美はプラクシテレスの作品に於て、希臘の彫刻は世界の藝術史上眞に千古の偉觀をとどめたのである。

さてこの肉の美を崇拜する異教思潮の傾向が、如何に力強く現代藝術の根本を動かしてゐるかは、今更こゝに説く迄もなからう。その幾多の實例に至ては到底一々之を擧ぐるの煩に堪えない。かつて自然派時代の人が醜を見た所にさへ、今の新らしい藝術家は、更に深く其の奥に潜む内部の美を見ようとするてはないか。自然のうち眞に全く醜なるものは一つも無いと云つたロダンの如き、卽ち固より此精神の人てあつたらう。彼が彫刻は人體の各部に溢れたる生命の力をとらへて、先人の未だ曾て氣づかなかつた運動の美を、筋肉や關節のうちに表現しやうとした。また之はずつと古い話てあるが、吾々は如何にして、人生の脈膊のうちから、最高の美の感覺を以て見られ得るすべてのものを見るべきだらうかと云ふ問に對して、そは藝術だと答へた英吉利のヲルタア・ペイタアは云はずもがな、このペイタアの哲學を實現し具體化したるオスカア・ワイルドの一生と其藝術も、ひろく讀者の知らるゝ通り、かの耽美運動の源てあつた。ワイルドはあらゆる

肉感の美を求め刹那の享樂を追ふた揚句、遂に獄中の告白錄に、吾はわが生命の眞珠を酒杯のうちに投じ、笛の音を尋ねて花咲き亂るる道を步むだのであると自ら語つたてはないか。またかのダンヌンチオを見ても彼は明かに最も著るしく靈肉の一致を信じた藝術家てある。彼は純然たる生理の根底から人生を解釋し、美を感受する人てある事は、『快樂兒』や『死の勝利』のやうな作を繙いた人の誰しも首肯する所てあらう。アアサア・サイモンズの評語を借りて云へば、ダンヌンチオに取つては、美は現實世界における最も現實的なもので、視たり觸れたり聽たりする所に、また吾々の情熱や渇仰のうちに、または個性の滿足を探求する執着のうちに、美を創造する事が即ち生の最も大切な部分てあるのだ。

なほ最近の例を云ふならば、佛蘭西の詩壇に今、異敎主義の使徒だと呼ばれるピエル・ルイスが、古代希臘の美的生活を追慕して、その la grande sensualité をなつかしむ心も、即ち此傾向の一面てはないか。また露西亞の猶太人て繪畫と舞臺裝飾に「色彩の敍情詩人」と呼ばれ、最近三四年西歐の藝苑を驚かしてゐるレオン・バクストの藝術は、全く彼の希臘研究(特にホオマア研究)から出たものてある。在來未だ嘗て見られなかつたやうな大膽な奇拔な色彩の配合に、躍動する生命の力を托し、觀者をして其強烈な刺戟に醉はしめずむば止まないのが彼の作の特色てある。衣裳や背景に使つた毒々しい色彩が一種のシムフォニイをなして、鋭く官能に迫る特色は、かれが確に最近藝術界に於ける色彩の革命者を以て目せらるる所以てある。

七

現代藝術思潮の特色は之を歷史的に觀察すれば、つまり非督敎思潮に對する異敎思潮の勝利に外ならない。古代希臘の人がしたやうに、現在の生に對する熱烈なる愛慕と執着とを以て、向上し精進しようとする自我の努力が其根底をなしてゐる。さう考へて見るとかつてニイチェが說いた力の慾望、今のベルグソンがいふ生の躍動、ショオのいふ生の力、或はまたオ

イケンの活動說（アクティヴィズム）、これ等は皆所說の內容に多少の差こそあれ、その間互に一脈の相通ずる所あるは否定すべからざる事實であると思ふ。

現代人の心は、レミ・ドゥ・グルモンの言葉で云へば、人生その者のために人生を愛するもの l'amour de la vie pour la vie elle-même である。即ち彼等は飽くまでも人生を肯定せむとするヒユマニストである。ヒユマニストであるが故に個人主義者であり、自我主義者であり、享樂主義者である。殊に靈と肉との合一を信ずるかれらは、精神生活の充實を求むるがために肉の歡樂を求めてやまない。その銳敏な官能の力によつて生活內容を豐富にすべく、絕えず强烈の刺戟を漁り、瞬間の本能滿足を求むるのである。そして恁くの如くして出來た花やかな豐富な生活のリズムを、かつて原始時代の人が試みたやうな自然と無邪氣とを以て、之を言語に或は畫布の上に表現したものが即ち現代の藝術である。まだ血の燃えてゐる心臟を其儘畫布の上へ投げ出したやうなのが後印象派の繪畫だとすれば、ロダンの彫刻も、ストラウスやドビュッシイの音樂も、クレエゲの舞臺裝飾も、ニジンスキイの露西亞舞蹈も、本然主義（ナチユリズム）の詩人ジョルチ・ドゥ・ブウエリエ等の詩歌も、また最近佛蘭西文壇の流行であるロマン・ロラン等一群の所謂「生命派」（レコオル・ドウ・ラ・ヴィ）の小說も、ひとしく皆靈肉合一の生命力が產み出した新藝術ではないか。またマアテルリンクにせよ、エルハアレンにせよ、ユルスにせよ、ゴルスワアシイにせよ、レニエにせよ、現代詩文界の巨匠はみな色々の意味に於て、先づ第一に眞のヒユウマニストではないか。三千年このかた、歐州文明の根底をなしてゐた膨湃たる希臘思潮の奔流が、前世紀末から今世紀にかけて、急にまた力强く色あざやかに顯はれて、そこに之等の新異教主義（ニオ・ペイガニズム）の藝術を出したのである。

最後に一言したいのは、世には現代の享樂主義を目して單なる遊戲衝動に驅られて肉の快樂に惑溺する者だと觀る人が多い。殊にいつも思想藝術の問題に何等の理解なく、徒に聲を大にして風敎を論ずるが如き淺

薄の俗流に、動もすれば這般の誤解がある。しかし眞の意味の享樂主義は、つまり私が右に述べた現代に現はれたる異教思潮の人生肯定說に外ならないのだ。眞に現實の人生を理解し翫味すべく、吾等は先づ人生その者に熱烈い愛を捧げねばならぬ——愛せざる者を理解しようとするのは全く不可能であるからだ。强き屈せざる自我の努力によつて、光榮ある生活の創造的進化を期することそ、眞の意味の享樂主義だと私は信ずるのである。(完)

我は蒙古人種たるを恥ぢず

山路愛山

（一）

昨年北米合衆國に我移民の慰問とやら視察とやら云ふことにて渡航したる或人の論文を讀みしに白人に日本人の嫌はるゝには仔細あり、日本より移住したるもの丶小人數なりし程は、日本人も白人に對し萬事控目にし、風俗なども成るべくは白人同樣にする樣心懸けし故、白人との折合も宜ろしかりしが、近頃は同胞の數も增加したれば追々謹愼を忘れ、風俗、行儀も往々日本流に返ることあるが故に、白人も異樣の感をなし日本人は米國の俗に同化し難きものなりと思ひ、自然毛嫌ひするに至りしものにて米人の心事に立入りて推察する時は是亦尤の次第なりと云へり。又或人の說に日本人が白人に忌まるゝことは理由なきに非ず。たとへば日本人は米國に於て、其小兒を白人の學校に遣し、白人に普通なる敎育を受けしめず、或は受けしむるも必ず別に日本風の學校を設けて特殊の學問を爲さし

む。其教ふる所を見れば日本國本位のものにて海外萬里赤の他人の國に住み、其良民となりながら到底日本國の臣民に仕立てねば已まざらんとするものゝ如し。則ち日本人民は世界を家とし、他人の國に住みながら何處までも他人に同化せざるものにして、徹頭徹尾、日本國民にて押通さんとするものなり。左樣の人民に土地所有の權を與へ、子孫の永住を許すは是れ則ち國の內に更に別國を樹つるものにて國の存在に取りては最も危險なる業ならざるを得ず。米國人民の日本人を疎んずること誠に已むを得ざることなりと云へり。孰れも一理窟ある申條ながら畢竟は實力の優劣に依りて解決すべき問題なり。たとへば日本島に住する白人種も多きことなれども、其言語、風俗、習慣一として日本流に同化したるものなし。されども日本人の起て之を尤めたることを聞かず。その白人の中には日本國に歸化し帝國の臣民となりたるものあれども、日本國は未だ嘗て其人々に向て風を改め俗を易へよと強ひたることなし。此理は米國に移住したる日本人に於ても同樣なるべき筈なり。孔子も言、忠信、行、篤敬なれば蠻貊の邦と雖も行はれんと云へり。世界の良民として正直、勤勉、信義の常道を守り、法律に順ひ、面目を重んじ、他人に害を加へざる限りは風俗、慣習の如きは固有の一流に從ふも仔細なかるべき筈なり。但し其風俗慣習が公衆の惡感を催し、或は惡病の傳染を助くるものならば、是は其國の法律に於て禁斷すべき筈のものなれば、其法律に隨へば則ち可なり。それを白人の日本國に於て白人の俗を守るは善し、日本人の白人の國に於て日本流を守るを惡しとするは白人の俗は優良なり、日本人の俗は劣惡なりと豫め胸算を立てたる僻見に外ならず。日本國民に斯かる侮辱を甘受せずして抗論し得べき實力あらば此種の論は成立すまじきなり。次に外國に於て日本の少年に日本流の教育を授くるは不都合なりとの論も馬鹿馬鹿しき言草なり。外國に出稼したりとて日本國民たる籍を脫せざる上は日本流の教育を受け、日本國民としての義務を學ぶは當然の事にして、白人の子の日本に生れたるも同樣の理由

にて、其本國臣民たる義務を教へられ居ることとなり。更に甚しきに至りては『ミッション、スクール』などに於て日本の少年を教育しながら英國の國歌を歌はせたることなどもなきに非ず。左様の人民も、歸化して他國の民となりたる上は、自然に其俗に同化し、二代三代に至れば純然たる骨までの國民となることとなり。是は何處も同じことなり。獨り日本人のみを尤むべからず。されば左様の理窟は畢竟するに日本人を嫌ふ爲に强て思付きたるものにて、實は左様の理窟あるが爲に日本人を嫌ふには非ず。日本人を嫌ふが故に左様の理窟を付けたるものなり。論者之を知らず白人の口眞似して日本人に筋の惡るきことあるやうに言做すこそ笑止の至りと謂ふべし。假りに論者の言ふ如くにし、風俗、習慣も白人を摸擬し、教育も白人同樣にし、頭から尾まで白人の如くなり了りたりとて、白人は果して日本人を平等に取扱ひ、其嫌猜の情を抛ち去るべきや否や。決して然らず。蒙古人種たる日本人が、一たび死して白人として復活せざる限りは白人の憎惡は已むべからず。根本の問題は則ち此に在り。日本人の蒙古人種たるに在り。他の語を以て之を言へば、日本人の米人に疎んぜらるゝは日本人たるが故のみ。

（二）

我等は此問題は實力の優劣に依りて決すべしと云へり。米人何程、我等の移住を拒まんとするも、我等に於て其無意義に鎖さんとする國門を開かしむべき力あらば米人も亦遂に屈せざるを得ず。四海は同胞 萬國は兄弟なり。まして米國は土地の利源莫大にして人口の密度、比較的に稀薄なる國なり。人口の密度濃厚なる所より、人口の密度稀薄なる所に、利源の少き所より、利源の多き所に人間の流轉するは天の定めたる法則なり。如何なる國と雖も、此意味に於て世界の良民の其國境に入り來ることを拒むを得ず。それを拒むは則ち鎖國の陋習なり。米國は嘗て提督ペリイを我國に渡米せしめ、武力を以て我を壓し、國を開かしめたり我等も亦米國の鎖國的陋俗を曉諭し、我良民の移住を自由ならしむべきのみ。さりながら米國を曉諭するこ

と容易の業に非ず。最後の問題は我實力に在ることなれば此には暫らく論せず。我等は唯だ白人の傲慢、自負を挫き、我等を平等に取扱はしむるには猶ほ篤と我等の實力を吟味し置く必要ありと云ふを以て滿足すべし。それに就きて此に大に論じたき一事あり。世上の識者など云はるゝ輩の中にも、『白人は優り、黄人は劣る』と云ふ惡誹謗に墮ち、自ら侮る輩なきに非ることなり。西洋人の世話になり、其『ポッケット、モネイ』にて洋行したる耶蘇教家などには此種の人物多く、左樣の人の説を聞けば、『兎角、日本人には困る』と惡口を云ひ、『日本人はどうの、斯ふの』と講壇などにて評判すること恰も他國他人の噂をなすが如し。耶蘇教家ならずとも、人品輕薄にして、心に堅き根のなき人物は少し許り洋行して白人の風俗を見れば、白人の外に善き物なきが如く思ひ做し、日本に歸りて後、常の話にも、必ず西洋を持ち出し、西洋に非れは何事も善きものなきやうに吹立てる人物あり。或人西洋より歸りて、毎度演說をする故、我等面白きこともあるべしと

思ひ、時々聽聞したるに、話の度毎に西洋の噂の出てざることなく、西洋話の餘りうるさくて鼻に付きし故後には聽聞に出てさることゝしたり。斯る人物は日本に甚だ多し。先年朝鮮が未だ併合されざりし時、我等或時平壤の領事館を訪ひ、日本字の名刺を差出したるに、受付の男なるべし、更にそれを羅馬字に書直して領事に、示したるを見たることあり。日本人が日本字の名刺を出したるを、日本領事館の役人が、わざ〳〵羅馬字に書換へたることこそ奇怪なれ。左樣に白人がらずとも善さそうなる事なりと思ひし事なり。外交官などは此流儀の人物、唯今も珍らしからず。『願くは此骨を換へ、此膚を變じて白晳人種になりたし』と思ふ程の白人崇拜家もなきに非ずと聞きたり。日本人を變じて白人となす術あらば我等に於ても必しも異存あるに非れども、如何せん鴉は鷺に非ず。日本人は白人に非ず日本人と生れたる上は蒙古人種を以て自ら甘んぜざるべからず。それも蒙古人種と云へば原來劣等の人種にして才幹、力量、白人に劣りたりと額上に極印を捺さ

れたるものならんには多少は悲觀すべけれども、蒙古人種の長短、必しも白人の下に在らず、古今の歴史に於て却て白人を壓倒したる先例乏しからざるを知る時は、我等は却て蒙古人種たるを誇るべき筈に非ずや。此自負心の上に立ちて蒙古人種の特色を發輝すること、白人偏重の權衡を破りて人類の間に平等の觀念を樹立すべき日本人民の使命なるべき歟。

（三）

然らば蒙古人種の白人に優りたる點は如何、承りたきものなりと問ふ人あるべし。さりながら我等は優劣を以て人種を論ずるを好まず。鴨の脛は短く、鶴の頸は長し。此星の榮光は彼星の榮光に同じからず。希臘羅馬の古典時代より現代西歐の文明に至るまで白人種の文學、技藝、制度、文物を見れば誠に及び易からざるものあり。我等は此點に於て勿論、謙遜して彼等の世界に寄與したる貢献を感謝せざるべからず。さりながら之と同時に我等は我蒙古人種が白人の國を樹つる能はざる所に國を樹て、秩序と、制度とを與へたる功業を誇らざるを得ず。たとへば蒙古を見よ、五月も猶ほ凝氷を見るに非ずや。至る所の山は禿げ、草は枯れ地を探る數尺なるも水を得ず、往々數里に亘る流沙あり、馬足一たび之に陷れば、容易に出ること能はざるは旅行者の常に語る所なり。さる所にも蒙古人は大なる帝國を建て、系圖の連綿たる朝廷を有したるに非ずや。印度の熱天、燥地にも蒙古人種は漠北より之に侵入し、先づ其西北を占め、轉戰して所謂五印度を嚢括し、始て一統の王國を建てたるに非ずや。蒙古人種の努力は獨り此に止まらず、絕海の離島たる爪哇の如きも亦其遠征の師を蒙りしに非ずや。今日の白人は威勢誠に隆々たることにて印度は其領域となり、西伯利は其治下に歸し、北球上其節度に服せざるは無きに似たれども、是は科學の成功にして白人種の成功に非ず。白人種は科學の力を假りて僅に其居り難き所に居るものあれども蒙古人種は直ちに身を以て之に居るものなり。車に駕するも、徒歩するも遠きに行くは同じことなれども、其人の脚力は決して同じからず。蒙古人種

の飢寒に堪へ、炎暑を忍び、往く所として可ならざるなきは是れ其身質に固有する彈力にして、外物を假るものに非ず。白人の印度に在りて極熱の時は清涼の地に避暑し、西伯利に在りて嚴寒の時には室內に暖氣を貯へ僅に渡世するものと同視すべからず。尤も露西亞人の中には窮北の寒氣に身を曝らして平氣なるもなきに非れども、此は大抵蒙古人種の血を混ずるものにて、大ナポレオンの所謂皮を剝けば韃靼人たるものに外ならず。眞の露西亞人はやはり非常の寒氣には避易するものなることは其極北濱海の民は「スラブ」人種に非ずして蒙古人種たるにて察すべし。少年の教科書に用ふる地文學を繙きて人種分布の圖を見れば此理は益す明白にして蒙古人種の廣がりは五帶の內に遍きことなれども白人種の相應なる密度を以て廣がりたる所は僅に溫帶の地に限れり。是に依りて之を見れば蒙古人種の皮膚は厚くして如何なる氣候にも堪へ、蒙古人種の努力は烈しくして如何なる土地にも國を建つるを得るものなることを知るべし。此段蒙古人種の天分は却て白人に優れりと云ふも、我等は必ずしも身びいきの僻見に非ることを信ず。

（四）

近頃日本國民性如何などゝ云ふことを論じ、自派を取りて白人種は創造の力に富み、日本人は摸倣に長ずなどゝ云ふ人あり。其講釋には隨分埒もなき愚說もあれども、中には成程と領かるゝもなきに非ず。さりながら創造と摸倣とを別才の樣に論じたるは空論なり。仔細は文明には淵源あり。何の國の歷史を尋ぬるも創造獨發と許すべきものは全く無し。たとへば希臘の文明は白人文明の根原なれども、史學の上より云へば是亦フヱニシア、埃及より流れ來りしものなり。それより更に遡りたらば段々と古きことになり、遂には史前の雲中に入りて捕捉する能はざるに至らん歟。畢竟人の智慧は太古より累積し、先覺のものは、後覺のものを敎へ、次第次第に改正し、進步し、發達したるものにて其有樣を物に譬ふれば鎖を繫ぎ連ねたる如く、最初の鎖は神祕の域に沒して知るべからざる境に在り、其

以下は他人の智慧を學びて更に之に自身の智慧を加へたるに過ぎざれば摸倣と云へば摸倣なり、創造と云へば創造なり。されば摸倣と創造とは要するに差別なきことにて摸倣は則ち創造なりと云はざるべからず。たとへば文字を學ぶが如し。最初は唯だ字形を摸擬する迄なれども幾たびも反復する時は自ら法帖の筆法を自得し、縱横自在なるを得るときは是れ則ち摸倣にして又創造なり。日本人が白人の造りたる機械などを見、忽ち其秘訣に入るは則ち機械を構成する原理を自得したるものにして、之を自得したる上は其造る所は則ち創造なり。創造にして又摸倣なり。創造する力が無ければ摸倣は出來ぬ筈なり。されば日本人に摸倣の力ありと云ふは、則ち日本人に創造の力ありとするに同じものなりと我等などは存ずるなり。但し日本人に斯樣の能力ありや否は別問題として廣く蒙古人種の上に就て論ずる時は、蒙古人種は白人の如く高遠幽渺の思索に耽り、若くは天然と人間に現はれし美を感受することに於て特長を顯はさずと雖も、科學の智識を應用して利用厚生の功を建つることに於ては宏大なる規摸を示し、敏慧なる天才を顯はしたり。そは蒙古人の支那に於て爲したる事業を一瞥すれば明白なり。蒙古人はトレミーの天文學を採用して支那の曆法を改革したり。元の授時曆なるものは則ち是なり。此改革ありしより支那の曆學は頓に長足の進歩を爲したり。蒙古人は大砲を始て支那の戰爭に用ひたり。彼等が世界を横行して到る處に王國を建てたるは此新しき兵器の恩惠に依ること多し。蒙古人は又支那に於ける治河の新法を創めたり。支那にて治河の術の進みたるは元朝を以て最も盛なりとす。蒙古人の天才を發揮したるもの獨り支那のみならず、印度に於ても亦同樣なり。北印度のアカラ(akala)に古城あり。馬建忠の、適可齋記行に曰く

古城、門を闢く十六。蒙古後朝建都の所と爲す。阿串阿王嬖姫あり。歩姐と云ふ。殊色あり。早く夭す。王之を哀み、墓を宮側に築く。上に回廟あり。廟製奇麗なり。玉壁金階にして、高く星漢を捫す。地に

五色の石を用ひ、花文を嵌成す。國内の珍寶を搜括して悉く以て之に充つ。費す所、一萬萬に下らず。雜員工を作すもの日に二萬人、二十二年を歷て乃ち成る。廟内金字の回教高朗經(コーラン)を鐫る。(原文は漢文なり、)

蒙古人が回教の學問、藝術を採用し、印度の土木を飾りたること想ふべきに非ずや。世に土耳古人は蒙古人の近親なり。然るに土耳古人は西歐の文明に對して鈍感なること甚し。蒙古人も亦其類ならんと云ふ人なきに非ず。さりながら土耳古人の西歐文明に鈍感なりしと見ゆるは仔細あることにて決して人種其物の罪に非ることは我等嘗て別に之を論じたり。總じて之を云へば蒙古人種は寧ろ物質的の人民なり。蒙古人の物を見る、常に利用厚生の點に偏す、萬里の長城を築き、世界に比類なき溝渠を造りたる漢人は此點に於て蒙古人の兄弟なり。我等が蒙古人種たる上は其長所は思ふに此に存すべし。大學紀要を見るに科學者としての日本學者の國際的位置は必しも白人種の國に劣るものに非ず。或人嘗て外國にて始て電燈を見、斯様なる文明の利器が幾年の後には日本にも行はれなんと羨ましきことに思ひ、歸來横濱の埠頭に立ちしに忽ち白光の星の如く夜を照すを見て邦人の西洋文明を採用するの敏捷なるに一驚を喫したりと云ふ。論より證據なり。日本人が現代の科學を利用し、世界の智術を極めたる新鋭の武器を以て白人種と戰ひ、毫も遜色を現はさゞりしは十年前の日露戰爭、之を證して餘あるに非ずや。昔しの滿洲人は明人と戰ひし時、明人に大砲ありて滿洲に無かりしかば最初は隨分迷惑したれども、間もなく滿洲人自身大砲を製して逆まに明人を痛擊したり。蒙古人種の科學の應用に銳敏なること常に此の如し。

(五)

さりながら蒙古人種の白人種に對して最も大なる優勝を自覺すべきは他の點に在り。他なし、蒙古人種の生れながらの武人たること是なり。明の太祖の元(ゲン)の順帝を祭りたる文を讀むに、

君の祖宗は、昔し沙漠より起り、弓矢を挾き、我中

國に入り、天下に横行し、九辨八變、悉く皆之に歸したり。天命あるに非れば此に至らず。

と云へり。蒙古人種が世界を征服したるは誠に天命の如きものありき。さりながら其秘密は必しも窺ひ知り難からず。元の時、漢人或時蒙古を旅行し、其風俗を記して云へり。

遇食同享。

難則爭赴。

有命則不辭。

有言則不易。

共同の食膳に就きて敢て個人の利害を言はず、難あれば爭ひて之に赴き、命あれば艱難も亦辭せず、然諾を重んじて毫末も虚言を吐かず、武士道の本色、此に在りと謂つべし。斯樣の人種なればこそ萬里の遠征を試て白人の境に入り、之を征服して王國を建つるを得たるなれ。滿洲の與りたる時代の史を讀むに、滿洲人は手拔精强、口詞謙退を以て貴しとし言語、辭令を重んせず。『然』を『然』と云ひ、『否』を『否』と云ひしのみなりき。其時代に明若くは朝鮮より滿洲に與へたる書翰を見るに、如何にも上手に言ひ廻はし、流石に文明の國たるに恥ぢずと思はるゝもの多けれども、滿洲政府の之に對する拶挨は極めて簡潔にして、文學の雲霧を排し、議論の虚象を破り、直ちに事實の核子に突入して、露骨に其感情を言ひ現はしたる所、頗る殺風景にして面白味なきことなれども此スパルタ風が則ち蒙古人種の特色にして言語を信せずして力を信じ、便服を着、騎射に長じ、士馬精强を以て自ら雄なりしは則ち蒙古人種の武士道なり。近頃は日本書生の間にも雄辯を重んずるの風を生じ、諸學校などにても雄辯會など云ふものも起りたる樣子なれども竊に案ずるに、しやべることや、理窟を並ぶることは必しも日本人種の長所に非ず。人種の特色より云へば我等は寧ろ寡言敏行の側に屬すべきものなり。たとへば文學に就て之を言ふも修辭に屈折多く、微に入り、細を穿ち、枝より枝を生じ、括弧の中に括弧を挿み、面倒なる理窟、繊細なる感情を言現はすは歐文の長所にして東洋の文學は

大抵短句勁節、直截簡明を通例となす、是れ其人氣の相違に基くものなり。或人漢文を讀むに、獨斷の文句多く、恰も法律を讀むに似たりとて之を冷笑す。成程其通りにして我等に於ても異論なき所なれども、其實東洋人の心と雖も必しも獨斷なるに非れども、是は斯く々の次第たりとて分り切つたる理窟を並べる必要を感ぜざるを以て直ちに結論を述ぶるのみなれば獨斷にも聞ゆるなり。是れ則ち言語に於て簡潔ならんとする東洋人の特色にして、東洋人中に於ては割合に多辯、能文の漢人と雖も猶ほ其本性を失はざるものなり。まして日本人の人種的近親たる、東胡、夫餘、遼、金、蒙古の諸族は何れも弓矢を重んじ、戰場の勇者たるを以て誇り、言語を輕んじ、虛榮を惡みたるものなり。日露戰爭の時日本人の此特色は最も善く發輝したりしかば倫敦「タイムス」は深く此事態に驚異し、日本武士道の粹を論じて之を稱讃したり。人は各其長所を以て人生の戰場に出づべし。我等は今に於て蒙古人種の武士道に更に大なる磨礪を加へざるべからざるを感ず。「白人優り、黃人劣る」と云ふ埒もなき卑劣心に捉へられ、何事も白人の眞似をし、白人にもなりきらず、自身の長所を沒し、退化したる弱者となりて地上に彷徨せんとするは卿等眞に遠識なしと謂つべし。

（六）

斯様に言ひたりとて白人文明の渡入を杜絕し、四門を閉ぢ、四聰を塞ぎ馬鹿になれと云ふには非ず。蒙古人種は自身のみ優等の人種なりと自惚れて他人の長所を認めざる夜郎自大の小規模なる人種に非ず。萬里を橫行して智識を世界に求め、他人を師として敢て恥ぢざるものなり。

山路愛山譯　西田敬止校

（徳川侯爵家藏版）（總紙數四千餘頁）

譯文大日本史

本紀及列傳全五冊完成

◎訂正第三版

豫約募集

萬世不朽の大著とし、日本史學の最上權威とし、日本文學の寶庫として我が學界の至寶たる大日本史の邦文譯は、今や無比の廉價を以て提供せらる。提供期間は短し、幸に悔を千載に貽し給ふなかれ。

上製　中村不折氏裝釘意匠　菊判總クロース

一時拂　金八圓五拾錢

月賦拂（五ヶ月間）金九圓五拾錢

並製　意匠同上、菊判、表紙は堅牢なる厚紙に着色印刷せるもの

一時拂　金六圓五拾錢

月賦拂（五ヶ月間）金七圓廿五錢

◎申込期限　大正三年一月末日

◎詳細規定及内容見本は端書にて御申越次第送呈す

發行所　東京神田區小川町一番地　電話本局七百三十二番　振替東京第一八五七二番

國民文庫刊行會（全國有名書店取次）

（中付二の一）

東洋大學學生募集

大學部
專門部
各科學生を募集す

◎入學志願者は成るべく四月一日以前に願書を差出すべし

◎入學資格は中學校、師範學校、文部省指定の宗教學校を卒業したるもの又は文部省指定資格所有者は第一種生に無試驗入學を許し其他は第二種生に編入す別に聽講生の規定あり

◎在學中は徵兵猶豫、卒業者には中等教員無試驗檢定の特典あり。

名譽學長 文學博士 井上圓了
學長 文學博士 前田慧雲

東京小石川區原町 東洋大學

サンデー五周年記念出版

人物研究

口繪寫眞 中繪凸版 二十餘頁

要目

歴代內閣の人物
山本內閣の閣僚
實業界新進人物
外交界の新人物
官界の新舊人物

●世界革命志想家 ●日本富豪家論 ●財界元老論 ●立憲同志會幹部

▼帝大總長論 ▼地方長官論 ▼飛行界人物 ▼陸軍の將星 ▼海軍の雄才 ▼杏林の逸材

■五大銀行總裁論 ■新政黨內の人物 ■政界未成既成品 ■政黨五派の領袖 ■民間五銀行首腦

▼將來の首相的人物 ▼私立大學中心人物 ▼新聞界の中心人物 ▼現代文士七總まくり ▼樂界畫會の新人物

其他藝妓女優役者角力等凡數十篇

朝野數千の人物を捉へて赤裸の解剖を試む蓋し天下唯一品而して廉價驚く勿れ

菊版五百五十頁 僅に金五拾錢

特製總クロース天金箱入頗美本金壹圓 ●郵稅八錢朝韓滿清八錢

發行所 東京京橋築地三ノ十五 サンデー社 振替東京二三九〇〇番

（中付二の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

・新春の絶好讀物・

小川未明著

戸張孤雁口繪
津田青楓裝幀

夜の街まで

青春二度と歸らず、紅き日は、海の彼方に落ちて、夜の街暗く地上に横はる。追懷、思慕は昔日の著者なり。反抗、苦闘は今日の著者なり。此書は『北國の鴉より』の姉妹篇にして、著者獨特の北方的氣分の横溢せるものにして、又著者自から思ひ出多きものと謂べし。

菊半截洋裝美本
著者カリケチユアー入
本文八百三十頁
定價金九十錢
郵稅金八錢

■盛花堂發行■

文藝叢書

第二編

岩野泡鳴著

正宗得三郎裝幀

炭屋の船

酒飲みの炭燒き親子、自分の脛の肉を喰ふ老爺、人を責めて己を省みぬ傳道者、出來そこねの乳兒を壓殺した夫婦等、斯るに著者泡鳴氏が如何に人生を觀たるや

■菊半截形美本・定價金四十錢
■本文三百廿頁・郵稅金六錢

高須梅溪著

竹久夢二裝幀
落合芳麿挿繪

近松の人々

本書は、近代人の眼に映じたる近松劇中の人々、小春治兵衛の幼夢、梅川忠兵衛の情熱、油屋與兵衛の苦悶、おさん茂兵衛其他多情多恨の男女を深刻に、梅溪氏獨特の筆になれる、情趣饒かなる藝術の結晶なり。切に魅力ある詩の夢に醉はんとする人々の一讀を薦む。

四六判頗る美裝
口繪木版十度刷
本文三百十余頁
定價金六十五錢
郵稅金八錢

東京市淺草區 桐書 下平右衛門町

●●振替東京一九〇六五番　電話下谷四二〇四番●●

(中付二の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

浮世繪の鑑賞

永井荷風

一

現代に於ける西洋文明摸倣の狀態は、殊に都市の改築を初めとして家屋什器庭園衣服等時代の趣味一般の趨勢に徵して、轉た余をして日本文華の末路を悲ましむるものあり。

余は初めて芝靈廟の門前に立ちたる明治政廳初期の官吏某の銅像製作を見たりし時、その製作者は何が故に新舊兩樣の美術に對して其の効果上相互の不利益たるべきかゝる地所を選擇せしや全くその意を了解するに苦みき。余はまたこの數年來市區改正と稱する土木工事が何等愛惜の念もなく、見附と呼馴れし舊都の古城門を取拂ひ、猶勢に乘じてその周圍に繁茂せる古松を亂伐するを見、日本人の歷史に對する精神の有無を疑はざるを得ざりき。泰西の都市にありては一樹の古木一字の堂舍と雖、猶民族過去の光榮を表現すべき貴重なる寶物として尊敬せらるゝは、既に幾多漫遊者の見知する處ならずや。然るにわが國に於て歷史の尊重は唯だ保守頑冥の徒が巧利的口實の便宜となるのみにして、一般の國民に對しては却て學藝の進步と智識の開發に多大なる妨害をなすに過ぎず。これ等は實に僅少なる一二の例證のみ。余は甚しく憤りき又悲みき。然れども幸ひにして此の悲憤と絕望とはやがて余をして日本人古來の遺傳性たる諦めの無差別觀に入らしむる楷梯となりぬ。見ずや、上野の老杉は默々として語らず訴へず、獨りおのれの命數を知り從容として枯死し行けり。無情の草木遙に有情の人に優るところなからずや。

余は始めて現代の我が社會は現代人のものたり。余

等の決して吻を入るべきものにあらざる事を知りぬ。こゝに於て、古跡の破棄も時代の醜化もまた再び何等の憤慨を催さしめず。そは却て此の上もなき諷刺的滑稽の材料を提供するが故に、一變して最も詭辯的なる興味の中心となりぬ。然れども茶番は要するに茶番たるに過ぎず。いかに洒脱なる幇間といへども、轎頭轎尾扇子に頭を叩いてのみ日を送る事能はざるべし。余は日々時代の茶番に打興ずる事を勉むると共に、又時としては心ひそかに整頓せる過去の生活を空想せざるを得ざりき。過去を夢見んには殘されたる過去の文學美術の力によらざる可からず。これ余が廣重と北齋との江戸名所繪によりて都會と其の近郊の風景を見ん事を願ひ、鳥居奥村派の畵工によりて衣服の模樣器具の意匠を尋ね、文化以後の美人畵によりては、專制時代の疲弊墮落せる平民の生活を伺ひ、以て身につまさるる悲哀の美感を求めし所以とす。

二

浮世繪は余をして實に渾然たる夢想の世界に遊ばしむ。浮世繪は外人の賞するが如く單に美術としての價値のみに留まらず、余に對しては實に宗教の如き精神的慰籍を感ぜしむるなり。特種なるこの美術は壓迫せられたる江戸平民の手によりて發生し、絶えず政府の迫害を蒙りつゝ而も能く其の發達を遂げたりき。當時政府の保護を得たる日本十八世紀のアカデミー畵派なる狩野家の作品は、決してこの時代の美術的光榮を後世に傳ふるものとはならざりき。而してそは全く遠島に流され、手鎖の刑を受けたる卑しむべき町繪師の功績たりき。浮世繪は隱然として政府の迫害に屈伏せざりし平民の意氣を示し、その凱歌を奏するものならずや。虚僞なる官營の藝術に對抗したる眞正なる自由の藝術の勝利を立證するものならずや。宮武外骨氏の筆禍史は委さに其の事跡を考證叙述して餘すなし。余また多く云ふの要あるを見ず。

三

浮世繪はその木版摺の紙質と顏料との結果によりて得たる特種の色調と、その極めて狹少なる規模とによ

りて、寔に顯著なる特徴を有する美術たり。浮世繪は概して奉書または西之内に印刷せられ、その色彩は皆褪めたる如く淡くして光澤なし。試にこれを活氣ある油畫の色と比較せば、一ッは赫々たる烈日の光を望むが如く、一ッは暗澹たる行燈の火影を見るの思ひあり。油畫の色には強き意味あり主張ありて、能く製作者の精神を示せり。此れに反して、若し木版摺の眠氣なる色彩中に製作者の精神ありとせば、そは全く專制時代の萎微したる人心の反映のみ。余はかゝる暗黑時代の恐怖と悲哀と疲勞とを暗示せらるゝ點に於いて、恰も娼婦が啜泣きする忍音を聞く如き、この裏悲しく頼りなき色調を忘るゝ事能はざるなり。余は現代の社會に接觸して、常に强者の横暴を極むる事を見て義憤する時、飜つてこの頼りなき色彩の美を思ひ、その中に潜める哀訴の旋律（メロデー）によりて、暗黑なる過去を再現せしむれば、忽ち東洋固有の專制的精神の何たるかを知ると共に、深く正義を云々するの愚なることを悟らずんばあらず。希臘の美術はアポロンを神となしたる國土に發生し、浮世繪は虫けら同然なる町人の手によりて、日當り悪しき横町の借家に製作せられぬ。今や時代は全く變革せられたりと稱すれども要するにそは外觀のみ。一度合理の眼を以て其の外皮を看破せば武斷政治の精神は毫も百年以前と異ることなし。江戸木板畫の悲しき色彩が、全く時間の懸隔なく深くわが胸底に浸み入りて常に親密なる囁きを傳る事、蓋し偶然にあらざるべし。余は何が故か、近來主張を有する强き西洋の藝術に對しては、宛ら山岳を望むが如く唯呆然として此れを仰ぎ見るの傾きあるに反し、一度其の眼を轉じて、個性に乏しく單調にして疲勞せる江戸の文學美術に對すれば、忽ち精神的併に肉體的に麻痺の慰安を感ぜざるを得ず。されば余の浮世繪に關する鑑賞と云ひ研究といふが如き、元より嚴密なる審美の學理に因るものならず。若し問ふものあらば余は唯だ特別なる事情の下に、特別なる一種の藝術を喜ぶと答へんのみ。况や泰西人の浮世繪に關する審美的工藝的研究は、既に遠く十年以前全く細微に渡りて完了せられ

たるに於てをや。

四

余は既に幾度か木にて造り紙にて張りたる日本傳來の家屋に住し、春風秋雨、四季の氣候に對する鄕土的感覺を叙述しき。此の如く脆弱にして淸楚なる家屋と此の如く濕氣に滿ち變化に富める氣候の中に生息すれば、嘗て廣大堅固なる西洋の居室に直立濶步したりし時とは、百般の事自ら嗜好を異にするは蓋し當然の事たるべし。余にして若しマロック皮の大椅子に横りて、圖書室に食後の葉卷を吹かすの富を有さば、おのづからピアノと油繪と大理石の彫刻を欲すべし。然れども幸か不幸か、余は今猶疊の上に兩脚を折曲げ乏しき火鉢の炭火によりて寒を凌ぎ、簾を動す朝(あした)の風、廂を打つ夜半(よは)の雨を聽く人たり。淸貧と安逸と無聊の生涯を喜び、酔生夢死に滿足せんと勉むるものたり。曇りし空の光は深き軒先に遮られ、障子の紙を透してこゝに特種の陰影をなす。かゝる居室に適應すべき美術は、先づその形小ならざる可からず、その質は輕からざる可からず。然るに現代の新しき製作品中、余は不幸にして未だ西洋の miniature(ミニアチュール) または銅版畫に類すべきものを見ず。浮世繪木版摺はよくこの欠陥を補ふものならざるか。都門の劇場には拙劣なる飜譯劇出るや、朋黨相結んで直ちに此れを以て新しき藝術の出現と呼び、官營の美術展覽場に賤しき畫工等虚名の鎬(しのぎ)を削れば、猜疑嫉妬の俗論囂々として、沸くが如き時、秋の雨しと／＼と降りそゝぎて、虫の音次第に消え行く郊外の陋住居に、倦みつかれたる晝下り、尋ね來る友もなきまゝ、獨り窃に浮世繪取出して眺むれば、嗚呼、春章寫樂豐國は江戸盛時の演劇を眼前に彷彿たらしめ、歌麿榮之は不夜城の歡樂に人を誘ひ、北齋廣重は閑雅なる市中の風景を遊覽せしむ。聊か以て自ら慰むる處なからずや。

五

近世的の大詩人ヴェルハアンはその鄕土フランドルの古畫に現はれたる生活慾の横溢を稱美して曰く、

Art flamand, tu les connus, toi

Et tu les aimas bien, les gouges,
Au torse épais, aux tétons rouges;
Tes plus fiers chefs-d'oeuvre en font foi.
Que tu peignes reines, déesses,
Ou nymphes, émergeant des flots,
Par troupes, en roses îlots,
Ou sirènes enchanteresses,
Ou Pomones aux contours pleins,
Symbolisant les saisons belles,
Grand art des maîtres, ce sont elles,
Ce sont les gouges que tu peins....

フランドルの美術よ、汝こそはよく彼の淫婦を知りたれ。よくかの乳房赤く肉逞しき淫婦を愛したれ。フランド美術の傑作はいづれかその證ならざる。そは妃を描き夜神を描き、或は紅の島に群れなして波間に浮ぶナンフ或は妖艶の人魚の姫。或はまた四季の眺を形取る肉付のよきポモンの女神。およそフランドル名家の描きし大作は、皆これかの淫蕩なる婦女にあらざるなきを。

この詩の意義を以て直ちに卑猥となさば大なる皮相の謬見たるべし。ヴェルハアンはフランドルの美術に現れし裸體の婦女によりて偉大なる人間の活力を想像し賞讃措く能はざりしなり。彼は清淨と禁慾を主としたる從來の道德及び宗敎の柵外に出て、生活の充實と意志の向上を以て人生の眞意義となせり。永劫の理想に向つて人生意氣の赴く處、ここに偉大の感情あり、悲壯の美あり、崇高の觀念あり。汚穢も淫慾も皆これ人類活力の一現象ならずして何ぞ。彼の學ぶ處は深甚なる意氣の旺盛のみ。

Dans la splendeur des paysages,
Et des palais, lambrissés d'or,
Dans la pourpre et dans le décor
Somptueux des anciens âges,
Vos femmes suaient la santé,
Rouges de sang, blanches de graisse;
Elles menaient les ruts en laisse
Avec des airs de royauté.

絶佳の風景を閉らし、金光燦爛たる宮殿の中、壯麗なる古代の裝飾に取り卷かれて、フランドル畫中の婦女は皆脂肪ゞりて肌白く

血液に滿ちて色赤く、おのが身の健康に堪えずして汗かけり。これ等の婦女は恣にその淫情を放ちて意々揚々いさゝかの羞る色だもなし。

これ歐洲新思想の急先鋒たるヴェルハアレンが郷土の美術を詠じたる最後の一章たり。フランドルはもと自由の國たり。フラマン人は西班牙政廳の羈絆を脱するや最近十九世紀の文明に乘じて一大飛躍を試みたる國民たり。ヴェルハアレンがRubens, Van Dyck, Téniers等十七世紀の名畫を見、その强烈なる色彩に感激したる元より疑むに足らず。翻つて思へば余は白耳義人にあらずして日本人なりき。生れながらにして其の運命と境遇とを異にする東洋人たり。戀愛の至情はいふも更なり、異性に對する凡ての性慾的感覺を以て社會的最大の罪惡となされたる法制を戴くものたり。泣く兒と地頭には勝つ可からざる事を敎へられたる人間たり。物云へば唇寒さを知る國民たり。ヴェルハアレンを感奮せしめたる生血滴る羊の美肉と芳醇の葡萄酒と逞しき婦女の畫も何かはせん。嗚呼余は浮世繪を愛す。苦界十年親の爲めに身を賣りたる遊女が繪姿はわれを泣かしむ。竹格子の窓によりて唯だ茫然と流るゝ水を眺むる藝者の姿はわれを喜ばしむ。夜蕎麥賣の行燈淋し氣に殘る川端の夜景はわれを醉はしむ。雨夜の月に啼く時鳥、時雨に散る秋の木の葉、落花の風にかすれ行く鐘の音、行き暮るゝ山路の雪、およそ果敢なく頼りなく望みなく、この世は唯だ夢とのみ譯もなく嗟嘆せしむもの悉くわれには親し、われには懷し。

六

浮世繪は元より木板畫にのみ限られたるにあらず。師宣、政信、懷月堂等の諸家は板畫と共に多く肉筆畫の製作をなせしが、鳥居淸信專ら役者繪の板下を描き、宮川長春これに對して肉筆美人畫を專らとせしより、中古の浮世繪は稍確然として肉筆派と板下派との二流に分るゝの觀ありき。而して明和二年に至り、鈴木春信始めて精巧なる木板彩色摺の法を發見せしより浮世繪の傑作品は多く板畫に止まり、肉筆の製作は湖龍齋春章、北齋等の或る作品を除くの外、多く賞讃するに

足るものなきに至りぬ。浮世繪肉筆畫の木板摺に及ばざる理由は、專ら其の色彩の調和に存す。木板摺に於てはそが工藝的製作の必然的結果として、こゝに特種の色調を生じ、各色の音樂的調和によりて企てずして自から畫面に空氣の感情を起さしむると雖、肉筆畫にありては、朱、胡粉、墨等の顏料は皆其のまゝに獨立して生硬なる色彩の亂雜を招くのみ。要するにこれ畫家の罪にあらずして、日本畫の物質的材料の缺點たり。今諸家の製作を見るに、木板色摺の未だ進歩せざりし紅繪の時代に於ては、板下畫家は其の色彩の師範を常に肉筆畫に仰ぎたれども、後には全く反對となり、肉筆畫の色彩をば全く木板畫に傚はんとするに至りぬ。ゴンクウルは歌麿が蚊帳美人の掛物につきて、其の蚊帳の綠色と女帶の黑色との用法の如きは、全く其の版畫に則りしが如しと云へり。肉筆畫の木板畫に及ばざる他の理由は布局の點なり。木板畫は春信以後その描かれたる人物は必ず背景を有してこゝに渾然たる一面の繪畫をなし、然らざれば地色の淡彩によりてよく溫柔なる美妙の感情を誘へり。然るに此の如きは全く肉筆畫の企て得ざる處とす。試みに今土佐狩野圓山等各派の製作と浮世繪とを比較するに、浮世繪肉筆畫は東洋固有の審美的趣味よりして其の筆力及び墨色の氣品に關して、決して最高の地位を占むるものにあらざるべし。而してそは全く其の性質と歷史を異にしたる木板摺に至つて始めて動し難き價値を有すとなすも決して過賞にあらず。浮世繪の特色は版畫にあり。版畫の特色は優しき色調にあり。此れが爲めに浮世繪は能く泰西の美術に對抗し得るなり。

七

新しき國民音樂未だ起らず、新しき國民美術猶出でず、唯だ一時的なる摸倣と試作の亂出を見るの時代に於ては、元よりわが民族的藝術の前途を豫想する事能はざるや論なし。余は徒に唯多くの疑問を有するのみ。ピアノは果して日本的固有の感情を奏するに適すべきや。油畫と大理石とは果して日本特有なる造形美を紹介すべき唯一の道たりや。余は餘りに數理的なる西洋

音樂の根本的性質と、落花落葉蟲語鳥聲等の單純可憐なる日本的自然の音樂とに對して、先づその懸隔ら甚だしきに驚かずんばあらず。余は日本人の描ける油畫にして、日本の婦女と日本の風景室内を描けるものに對しては常に熱心なる注意を怠らず、然れども余は不幸にして未だ嘗て、油畫の描きたる日本婦女の髷及頭髮に對し、或は友禪、絣、縞、絞(しぼり)等の衣服の紋樣に對して、何等美妙の感覺に觸れたる事なく、又椽側、袖垣、障子、簞笥等の日本的家居及び器用に對して、毫も親密なる特種の情趣を催したる事なし。余は屢同一の畫家の製作につきて、その描ける西洋の風景は日本の風景よりも遙に優秀なるが如き感をなせり。一步を進めて盲斷する事を憚らざれば油畫は金髮の婦女と西洋の風景とを描くに適するものならざるか。余は決して邦人の製作する現代の油畫を嫌ふものにあらず、然れども奈何にせん。歌麿と北齋とは今日の油畫よりも遙によく余の感覺に向つて日本の婦女と日本風景の含有する秘密を語るが故に、余は其の以上の新しき天才の製作に接するまで、容易に江戶の美術家を忘るゝ能はずと云ふのみ。日本都市の外觀と社會の風俗人情は遠からずして全く變ずべし。痛ましくも米國化すべし。然れども日本の氣候と天象と草木とは黑潮の流れにひたされたる火山質の島嶼存するかぎり、永遠に初夏晚秋の夕陽は猩々緋の如く赤かるべし。永遠に中秋月夜の山水は藍の如く靑かるべし。椿と紅梅の花に降る春の雪はまた永遠に友禪模樣の染色の如く絢爛たるべし。婦女の頭髮は燒小手を以て殊更に縮らさゞるかぎり、永遠に水櫛の鬢の美しさを誇るに適すべし。然らば浮世繪は永遠に日本なる太平洋上の島嶼に生るゝものゝ感情に對して、必ずや親密なる私語を傳ふる處なからざる可からず。浮世繪の生命は實に日本の風土と共に永劫なるべし。而して其の重なる製作品の大部は今や擧げて盡く日本になし。悲しからずや。(完)

學術上より見たる日米問題

（大正二年十二月五日稿）

吉野作造

一

今年の春、北米合衆國カルホルニア州に於て所謂土地法案が議會の問題となつてより、日米關係は再び我が國朝野の大問題となつた。該法案たる、言ふまでもなく、其表向きは何てあるにしろ、畢竟日本人の土地所有權を禁止せんことを目的とするもので、我が邦人は彼地にあると内地に居るとを問はず極力其廢棄に盡力したのてあつた。然し其甲斐もなく、該案は、五月二日二票に對する三十五票の多數を以て上院を、又翌三日三票に對する七十二票の多數を以て下院を通過した。超て十九日加州知事ジョンソンは之に署名して茲に立派な法律となり、憲法の規定により八月十日より實施せらるゝ事となつた。其の以前から米國外務省と交渉中てあつた駐米帝國大使の活動は、今尚ほ引續いて居るとの事てあるから、本問題は外交上未決の事件てはあるけれども、併し法律の既に成立し實施せらるるを見たる以上は、事實上先づ解決は善かれ惡かれ付いたものと見ねばならぬ。從つて内地に於ける操觚社會の議論も、本件について此頃は頗る下火になつたやうだ。

併し加州土地法案問題は、所謂日米問題――一層適切に云へば米國に於ける排日問題――のすべてではない。故に前者の片がついたとて後者の考察を閑却してはならぬ。予輩の考では、米國に於ける排日思想は其根底決しく淺くない。之が色々の場合に種々の形に現るゝので、加州土地法案の如きも其一種に過ぎないと思ふのである。故に今次の加州事件が、假りに日本の利益に解決がついたとしても、排日思想の儼然として

存する以上は、他日また何かの機會に問題が起るに相違ない。故に日米關係の問題は、加州事件の落着如何に拘らず、今後永く仍ほ我々に絕へず困難なる事件を提供して解決を迫るであらう。是れ本問題の愼重なる研究が、吾人に取りて最も緊要なりと信ずる所以である。

尤も今次の加州事件に關連して、排日問題の根本的討究に觸れた議論は少からず新聞雜誌などに見えた。併し多くは問題の一端にふれて全班に通じない傾がある。殊に米國に流行する表面皮相の議論に捉へられて、其裏面に流るゝ大潮流に着目せるものゝ少かつたのは、予の甚だ遺憾とする所である。從つて我々の論難は、彼地に於いて一向要點に當らなかつたのである。蓋し米國に於ける排日思想は、極めて複雜なる要素から起つて居るものである。之を細かに分析して研究しなくては、其眞相は解らないのである。我輩は敢て本問題に通ずるを以て任ずる者ではないけれども、平素多少研究してゐる事もあるから、其一端を披瀝して世の質問に應ぜんとするものである。

二

我輩の觀る所を以てすれば、所謂排日思想なるものは、大體五つの要素から成り立つて居ると思ふ。而して此五つの要素は、自ら一種の段階をなして、歷史的にも、論理的にも、彼此相關連して居ると思ふ。換言すれば、排日問題は、當初或る狹い簡單な形で現れたが、漸次根底の深い要素を含むやうになり、今日に至つては、之等の要素相混交して、頗る複雜な問題となつたといふのである。而して其の玆處に至る迄には、前の五つの要素といふ事と相對照して、予は五つの段階を經たと見るのであるが、以下其次第を簡單に述べやう。

第一段　一體排日思想の實際問題として起つたのは何時頃かと云ふと、今より十二三年前頃からである。而して此頃の排日問題は、其性質をよく研究して見ると、純然たる勞働問題であつた。即ち此時代に於ては在來日本人は、勞働者といふ資格に於て、先づ彼地白

人勞働者の眼底に映じ、彼等は我等を商買敵として排斥せんと決心したのである。例へば一千九百年五月七日、職工組合の主唱に基き、太平洋岸の勞働組合を誘引して、桑港に開ける所謂市民聯合大會の決議‖此會議に於ては、日本人は競爭者としては支那人よりも危險なりとの理由に基き、外交官以外の一切の日本人を排斥するため、法律の制定又は他の適當なる方法を講ずべき事を、中央議會に建議すべき旨の決議をしたのである‖の如き、又一千九百一年、時の加州知事ヘンリー、ゲーヂが、州會に宛てたる敎書の如き、其明白なる證據である。殊にゲーヂの敎書は、當時の排日思想の性質を極めて明白に述べて居る。曰く(前畧)日本勞働者の無制限なる來住に依りて蒙るべき危險は、淸國勞働者より受くべき危險と、同一性質のものなり、其勞働賃銀の低廉なるは、米國勞働者に取りて由々しき大事なるが故に、之を禁止し又は制限するが爲めに、中央政府が新なる法律を作り又は日本との條約を改締するは、合衆國民を保護するに必要なりとす(下畧)。

此敎書の結果として、州會は、日本移民制限の建議を中央議會に致すべきの決議をしたのである(同年ネ‖ヷアダ州會も同樣の決議をした)。其等の事のあつた以前には、實は排日的思潮は餘り世間に現れなかつた。夫れも其筈である。其頃までは、在留日本人の數は至つて少かつた。合衆國移民調査報告に依れば、全國在住日本人總數は、一千八百九十年には僅に二千〇三十九名であつて、其後は毎年千四五百名宛の入國を見るに過ぎなかつたのである。然るに一千八百九十八年頃より、移民數俄に增加し、二千三千を超え、一千九百年には一萬二千を超ゆるに至つた(但し一千九百〇一年には五千に減じ、爾後時々消長はあるが六七千前後といふ計數を示してゐる。)而して此趨勢と共に、排日的思想は、段々頭を擡げたのであるが、前申した通り右排日思想は、先づ勞働問題として現れたのであつた。換言すれば、排斥を叫ぶ者は、主として競爭者たる白人勞働者であつて、其他の者は之に與らなかつた

のである。而して勞働者を中心としての排日の叫は、先づ加州に起つたのであるが（在米日本人の約三分の一は加州に居る）、併し之は加州にのみ止らず、暫くすると、他の方面にも蔓延した。其證據は、一千九百〇三年、シカゴ市に開催せられたる合衆國勞働者大會の決議である。此會では、日本の勞働狀態調査のため、二名の調査委員を日本に派遣することを決したのである。其調査報告の結果は、『日本の勞働狀態は、經濟上未だ工業時代に入らずして、所謂農耕時代を脫せず。從つて體力上の競爭に於ては、合衆國勞働者の遠く及ぶ所に非ず。故に合衆國勞働者の保護の爲め、彼等の來住を防止するは極めて必要なり』と云ふにあつた。又翌一千九百〇四年十一月、桑港に開ける合衆國勞働同盟大會に於ては、遂に從來の支那人排斥の條項を日本勞働者にも適用すべきの決議をなし、正式に日本人の入會を拒むことに決めた。

斯の如く、日本人は、白人勞働者より共同の敵として排斥せらるゝ樣になり、而して米國は勞働者の跋扈する處なるだけ、排斥の聲は盛てあつたけれど。併し此段階に於ては、排斥するものも、排斥さるゝ者も、勞働者だけてあつた。從つて其以外の人々に付いて見れば、排斥どころか、却つて歡迎するものも少くなかつた。殊に雇主側に在つては、日本人勞働者を以て、賃銀低廉にして且勤勉怜悧なりとして、盛に其使用を喜ぶといふ有樣であつた。然るにこの排日思想は、不幸にして永く勞働問題としてのみ止らなかつた。幾くもなくして、之は更に一轉進して、一つの廣い經濟問題となつて現るゝに至つたのである。

第二段　日本の移民が、勞働者として一生を終るものであつたら、排日問題は所謂勞働問題以上に發展する事はなかつたであらう。然るに、幸か不幸か、勤勉にして敢爲なる我が同胞中のある者は、永く勞働者として人に使役せらるゝに甘んぜず、刻苦精勵の結果、多少の貯金を土臺として、遂に企業家として立たんとするに至つた。無論之は主として農業の方面である。人も知る如く、彼地には、茫々たる無開墾地今日なほ

少くない。地主は一手で之を拓き盡すことが出來ないから、借らうと思ふものがあれば、喜んで貸す。予の見聞したる所に依れば、地主は其所有に屬する原野を七年間無賃で貸す。借主は之を開墾する爲めに、最初の一年は若干の資本を之に投じて力役するが、二年目三年目には多少の收入を見、五年目位から相當の利益を得る。七年の期限の盡くる迄には、可なりの利益が出來るのである。七年を經過すると、地面を地主に返すが、地主の方から云つても、ドーセ只遊ばして置く地面だから、無賃で貸しても損はなく、而かも七年の後には立派な耕地として歸つて來るのだから、大に利益のある譯であり、又借主から云つても、最初の一二年食つて行く丈けの貯があれば、七年の後には相當の金が出來、更に之を基として一層廣き新地面を借りて大仕掛けにやる事も出來るから、之も利益である。米國西岸には、今日なほ斯んな地面は幾らでもある。而して日本人は中々農耕に慣れてゐるといふ評判なので、米國人は他國人よりも先づ日本人にならば喜んで貸すと云ふ有樣である。今日排日の聲は八釜しき際ですら、日本人に土地を貸したいから世話して呉れなどと頼みに領事館などに來る者は少くないとの事である。要するに、右の樣な便宜があるので、少し心掛けのよい者は忽ちにして勞働者より一轉進して農業經營者の群に入る事が出來るのである。斯うなつて來ると云ふと、日本人は今度は彼地の農業經營者を共同の敵として有せねばならぬ事になつて來る。於是排日思想といふものは、獨り勞働者間のみの問題ではなくなつて來るのである。此點は最近の排日問題を研究する上に決して看過してはならぬ。最近に於ける排日の聲の最も高く起るのは何所であるか。桑港か。ロスアンゼルスか。シアートルか。否々。斯かる都會地にあらずして、三々五々農家の散在する田舍である。即ち中流の農業經營者が、最も熱心なる排日論者である。無論、都會の雇勞働者も排日を叫ばぬではない。併し之等よりも熱心なる排日論者が田舍に居るといふ事を忘れてはならぬのである。所謂加州の土地法案の如きも、必

竟の目的は日本人の農業經營を覆さんが爲めて、即ち日本人を農業經營の上の商賣敵として起つた事柄てある。此點は、米國西岸に於ける日本人の農業的發達といふ事を見れば、猶一層明である。馬鈴薯王の稱ある牛馬氏の成功、而して同氏が實に米國に於ける馬鈴薯の相場を左右するの實力あるとは言はずもがな、ソンな大仕掛なものてなくとも、五萬十萬位て身上を造り上げて、薯や苺の栽培に從事してゐるものは幾らもある。而して之等の人々は、孰れも其住する狹い範圍に於ては、常々相場を左右する位の境遇に居る。日本人は第一勤勉てあり（殊に農業移民は）、第二に熟練てある。從つて同じ勞働同じ資本ても、其獲る所は概して白人よりも多い。從つて少々位安く賣つても引き合ふ。此點に於て白人は少くとも農業の點に於ては日本人の敵てない。それに日本人は隣同志ても白人とは交際せず、日本人だけ寄り集つて別天地を作つて居るといふやうな事情なども加はつて、日本人は白人事業家から嫉視さるゝに至つたのてある。要するに、今日となつては、白人の農業家は擧つて日本人を排斥するといふ勢に立ち到つたので、之が勞働者の排日の叫と呼應して、近時益々盛になつたのてある。

斯くいへばとて、農業家は悉く日本人を排斥するといふのではない。中には今日なほ、日本人を勞働者として使用せんと欲するものはある。從來日本人の勞働に依つて發達したる砂糖業の如きは、今以て日本人を歡迎して居る。一千九百〇七年二月、布哇轉航の禁止せらるゝや、日本人の來住大に減じたる爲め、一部の事業界は大打擊を蒙り、中部諸州の實業家三十餘名、時の商工務卿ストラウスを追ひて桑港に來り、轉航禁止の解除を迫りしが如きは其一例てある。故に、多數勞働者の來住によりて、開拓事業の進歩をはかりつゝある地方に於ては、事業家の日本人を歡迎するといふ事は今日ても澤山あるが、併し之も日本人の發展の工合て如何變るか分らんので、何時までも當にする譯には行かぬ。日本人が進歩發展すればする程、事業家雇主の側も亦勞働者と一緒になつて、排日の聲をあげる

のは、一つの趨勢であると見なければならぬと思ふのである。是れ我輩が、排日問題は最早單純なる勞働問題に非ずして、モ少し廣い經濟問題でもあると云つた所以である。嘗つて勞働者保護といふ理由のために唱へられた排日問題は、今や其主張の理由の中に、新に産業保護といふ項目を加へた次第である。故に或る一部の論者の如く、加州に於て特に屢起る排日問題は、勞働者及び之に阿ねる一部野心政治家の奸計によりて起れりなどゝいふのは、大なる謬見である。

第三段　排日思想が前申す第二段階で止つて居る中は、つまり我々を排斥するのは、各自の經濟的利己心より之を敢てする勞働者並びに農業經營家の連中のみであるから、問題は比較的簡單である。解決も左まで困難ではなかつたと思はるゝ。然るに此問題は、不幸にしてこゝに止らず、更に一歩を進めて、一種の社會風紀の問題として現るゝに至つた。於是排日思想は、日本人を共同の商賣敵とする連中より擴がりて、段々に日本人と何等利害の交渉のない階級にも及ぶといふ事になつたのである。

之も其緣因を究むれば無理もない事である。それは一千九百年この方、日本人の移住は著しく其數を増して來た。數が殖へて、都會や村落に密集團體の生活を營むといふことになれば、其地方の社會では、最早日本人を無視する譯にゆかぬ。そこで日本人の混住といふことは、一つの社會問題として研究せられざるを得ざる譯になる。今參考迄に一千九百年來の日本人の移入を擧げやう。

一九〇〇年	一二、六二五
一九〇一年	四、九〇八
一九〇二年	五、三二五
一九〇三年	六、九九〇
一九〇四年	七、七七一
一九〇五年	四、三一九
一九〇六年	五、一七八
一九〇七年	九、九四八
一九〇八年	七、二五〇

一九〇九年	一、五九三
一九一〇年	二、五九八
一九一一年	四、二八二
一九一二年	四、九八四

猶此外に布哇よりの轉航といふ者がある。合衆國移民局の調査によれば、一千九百二年一月一日より一千九百五年十二月三十一日迄の四年間、布哇より約三萬〇三百人の日本人が大陸に渡來したとの事である。又布哇移民局の報告によると、同地より大陸に轉航せし日本人の數は、一千九百六年度には一躍して一萬二千二百二十七人に達し、翌一千九百七年度は、聊か減じたるも猶五千四百三十八人を計へたとの事である。斯くて日本人は、アメリカの社會に於て有力なる一分子となり、從つて其風俗、習慣、思想等は、白人社會に何等かの影響を與へずには居ぬことゝなつた。殊に白人等が、日本人の常に同胞相集りて城壁を築き、心を虚にして其の中に來らざるの事實を見るや、彼等は乃ち所謂日本人不同化說を唱へ、日本人の在住は、白人の社會的生活を害するものではあるまいかと考ふるに至つた。換言すれば、白人社會の健全無純の發達を期する爲めには、全然異つたる考を以て生活する日本人を遠くることは、必要であるまいかと考ふるものを生じた。斯うなると、排日問題は、啻に經濟上の競爭者に關するのみの問題でなくして、更に其範圍を廣くすることゝなるのである。之れが證據として、予は一千九百五年五月組織せられたる亞細亞人排斥協會を擧げる。之は設立後無數の贊成加入者を得、本部を桑港におき、支部をシアートル、ポートランド、デンバー等に設け、盛に日本人排斥の運動に力めて居る。其加入者の大多數は勞働者農業家であるけれども、然らざるものも多く、而して會員の範圍は遠く英領地方にまでも及んで居るとの事である。而して其主意とする所は、勞働者保護を標榜して居るけれども、其外猶次のやうなことを言つてゐる。

（前略）二個以上の同化し難き人種は、同一領土内に平和に棲息する能はざるものにして、斯かる異人種

の雜居は、終に身體上精神上其他の生活狀態に不適當なる性質を有する人種の滅亡を來さゞるを得ず。而して我が地方に於ける生活狀態は、結局勞働狀態によりて定るが故に、此狀態に最も適當なる日本人は、終に吾人を滅亡に歸せしむべし(中略)。吾人は北米の土地を、現今及び將來の米國人の爲めに保全し、且つ米國人をして、道德上及び社會上最高の地位を得せしめ、斯くて自由及び自治の最高理想に適する社會を維持存續せしむる爲め、本協會を組織す。

觀るべし、彼等の排日の趣旨は、今や單に勞働保護のみに止らずして、更に米國の道德的社會的品位の保護に在ることを。從つて此協會に加はる者も、今や單に勞働者等從來排日を叫び來つた者のみではない事になつた。牧師もあれば、教育家もあり、苟くも米國社會の健全なる發達を冀ひ、而かも日本人の在住を以て之を妨ぐと考ふる者は、來り投ずると云ふ有樣になつた。一千九百八年の報告によれば、加州のみて此協會に屬する者、十一萬を超ゆるといふ事である。更に一千九百九年五月の加州部會の大會の報告に依れば、團體として加盟せるもの、二百二の勞働組合を筆頭として、十二の市民團體及び二三宛の慈善團體、軍事團體及び政社がありしとの事なれば、以て此問題は、勞働問題經濟問題たるの地位より、更に一轉進して社會問題といふ形態を執り、廣く社會有識の士の着眼を惹いた事が分るてあらう。

第四段　社會的見地より唱導せらるゝ排日思想は、幾くもなくして人種的侮蔑心を伴ひ來り、益々日本人に不利益なる主張を聞くことゝなつた。由來白人は有色人種を劣等なものと見ておる。近來西洋人中にも、日本人の優秀を說くものはある。併し如何に日本人を讚美すればとて、之を自分等よりも優等なる人種なりとは決して考へて居ない。否多くの人々は、結局有色人種は、白人の理想を了解するの能力なく、白人に支配せらるべき運命を有つて居るものと信じてゐる。有色人種は、其如何に高等なるものと雖も、白人に比して其生活の理想が低い、萬事が劣等であるとは、彼等

の信條である。而して此信條に基いて、彼等は排日を主張した。曰く、生活理想の低い日本人の多數來住するは、白人の生活の標準を荒らし、之を低下するの危險ありと。斯かる偏見を加ふることゝなると、排日思想は、更に進んで人種問題といふ形を取つたものと見ざるを得ぬ。

人種的見地から排日を說くものゝ中には、右述ぶるが如き偏見を立脚地とする者の外に、もう一つある。之は必ずしも日本人の劣等と云ふ事を論據とするものではない。不同化といふことを說くのである。此種の論者の言をきくに、曰く、日本人が白人に比して劣等なりや否やは今問ふ所でない。只彼等が吾人の生活關係と同化せぬ點が、彼等の來住を拒まねばならぬ根本の大理由であると。人種が異れば、自然同化は困難であるが、中にも日本人は最も同化の困難なる人種なりとの論據に立つて、彼等は排日を主張するのである。一千九百七年一月九日、加州知事パーデーは、其職を去るに臨み、次のやうなことを言つたと傳へられて居る。

日本人は、支那人よりも同化性に富むが如きも、彼等は國人相集合して離散せず、其取引は彼等同國人間に限られ、白人と來往するを好まず。日常の生活に於ても、徹頭徹尾其故國の習慣を墨守す。要するに、日本人は吾人と人種を異にするを以て、米國に同化すること難し(下略)。

又一千九百九年の加州々會は、其年二月、現行支那人排斥法を擴張して日本人にも適用すべきことを、中央議會に求めんとするの決議を通過したるが、其主意は主として勞働者保護といふことにあるけれども、一面また人種問題にも涉つて居る。次に其全文を示さう。

一國の進歩幸福安寧は、其住民が同一種族に屬するを條件とす。米國民の生活と適應せざる、即ちアングロサクソン人種と同化せざる亞細亞人の流入は、米國民の生活標準を低下し、米國勞働者の賃銀を減少するの結果を來すべし。

現行排斥法の下に支那勞働者を排斥するは、國民の

經濟的社會的幸福を維持するに效果あること、加州の利益は、該排斥法を引續き存續するの外、更に其精神を擴張して他亞細亞人にも適用するによりて最もよく保護せらるゝこと、一般合衆國民をして、亞細亞人問題に關する太平洋沿岸民の眞正なる感情と意思とを了解せしむるの適切なることを認識し、上下兩院は、茲に合衆國中央議會に敬意を表し、現行排斥法を保存すること、幷びに同法の各條項を擴張して全亞細亞人に普く之を適用するに至らしめんことを建言す。

合衆國中央議會に屬する加州選出上下兩院議員は、前記提議の貫徹に全力を注ぐべく、又加州知事は、本決議文を大統領、合衆國中央議會上下兩院議長及び中央議會に屬する加州選出上下兩院議員に通達すべし。

斯んな風て、人種的見地から排日を主張するの論は段々盛になつて來た。此議論にも實は相當の根據はあると思ふ。最も宗教家などの中には（日本に居ると彼地に居るとの差なく）、正義とか人道とかの論據をふりかざして、人種的差別を爲すの不當を論ずるものもあつたけれど、大した反響は無かつたやうだ。又事實を云へば、日本人の在住が米國の生活標準を低下するといふも最もの點もある。無論道德の問題で爭へば、白人にも怪しからぬ奴は多いから、日本人のみを責むるは不都合であるけれども、餘り敎育のない下層の日本人の密集的生活は、白人の社會的生活に、忌むべき印象を與ふるといふ事も蔽ふことは出來まい。本年四月、例の土地法案が加州議會の問題となるや、國務卿ブライアン氏は大統領の命をうけてサクラメントに急行したが、二十八日早朝、其到着を停車場に迎へたる知事ジョンソンは、停車場より己が官邸に趣くに方り、其必要もなきに、故と日本人街に自働車を乗り入れたといふ事てあつたが、此皮肉な知事のやり方も、ツマりは日本人のダラシの無い生活を、先づ國務卿に見せつける爲めにあつたに相違ない。我々日本人は、一人居る時は端然として居つても、多數集ると直ぐダラシ

が無くなるから、之と全く裏腹な西洋人と接觸する場合には、常に誤解を招き易い。

其外佛教の活動も亦人種的の考を深からしむるに與つて力あると思ふ。白人のすべてに熱烈な宗教心ありや否やは今暫く問ふまい。併し自分の信仰の厚薄の如何に拘らず、異教に對する反撥心の强烈なるは白人一般の通性なることは、一點の疑はない。古代に於て十字軍は此精神て起つた。今日バルカン半島て土耳其の窘められてゐるのも、畢竟は歐羅巴人に普ねく此精神があるからてある。然るに今米國――兎も角も基督教主義に基き自由の理想國を設けんことを建國の精神とする米國――の一地方に於て、圖らずも異教が這入つて來た。見慣れぬ伽藍は到る處に立つた。信徒は全然白人の社會と孤立して、伽藍の中にこもつてゐる。白人は之を何と見るてあらう。若し夫れ、日も沈み世間の靜まり返つた時に、佛寺よりゴーンと響く鐘の聲を聞くとき、彼等は異教の劍を以て肺腑をえぐらるゝの思はせぬてあらうか。宗教の異は人種差別の觀念を一層强烈ならしむることは、歷史の證する所、事實の示す所てある。目下加州地方に於て、天主教の僧侶が、特に排日を主張するのは、其主たる理由は玆にある。新教の方は日本人中にも其信徒は可なり多數あるけれど、天主教の方は殆んど日本人と交渉がない。故に天主教の僧侶は、十字軍的熱誠を以て排日を說くのである。彼等は排日の思想を寺の教壇より說く。而して天主教の信徒は、南歐諸國の移民よりなる勞働者を多數とするの事實、及び米國太平洋岸の白人は、新教徒よりも舊教徒の方が遙に多數なるの事實を思ふとき、佛教の活動が、如何に排日思想の有力なる根底をなして居るかゞ分るてあらう。

第五段　以上說く所て、排日問題は年と共に段々深い根底に根ざして來る事は分つた。今日ては、最早簡單な問題といふ事は出來ない。然るに、最近に至つてモ一つ深い根底が、排日思想の成立要素の中に加はり來つた事を我輩は見るのてある。夫は人種の違つた者が、一國內に雜居するは、其國の統一を害するとの思

想てある。從來も異人種の雜居を難ずるの聲はあつたけれど、其場合には之によりて損害を蒙るのは米國の社會的生活のみてあると考へられて居つたのてある。然るに此頃に至つて、異人種の雜居殊に日本人の雜居は、啻に米國人の社會的生活を害するのみならず、米國の政治的存立を危くするといふ考は、段々起つて來た。此事は少しく説明を要する。

一體異人種雜居と國家の政治的統一との關係は、從來米國ては餘り問題とならなかつたけれども、歐羅巴大陸ては、夙に之は學者實際家の研究に上つて居つた。異人種の雜居の爲めに、國力の統一乃至發展の害せられて居る實例は、歐羅巴大陸に頗る多い。先づ土耳其は之が爲めに土崩瓦解した。澳太利匈牙利の萎靡振はざるの一つの原因も之てある。獨逸が國力の發展今日の如く隆々として而かも猶イザといふ時に左顧右眄するのも、三方に異人種を有つてゐるからてある。其他英國も、露國も、白國も、皆此問題には惱んでゐる。之等の諸國の中には、少數なる異人種に對しては同化の政策を執つたが、其成績は先づ失敗てある。人種的我といふものは、中々壓伏し去ることの出來ぬものてあるといふことが分つた。殊に近年著しいのは、從來全然同化されて仕舞つて居たと考へられてゐた人種までが、段々獨立の自覺を喚び起して、自立の要求をなし來つたことてある。ソコて、異人種といふものは一體同化の出來るものかといふことが問題となつて來た。最も開明の程度の非常に差あるものゝ間には、同化が出來るかも知れん。併し最も殖民的天才ある英國人すら、開明の度の頗る低き印度人を、十分同化し得ぬてはないか。況んや多少開明の度に達した人種は、到底同化し得ざるものてはあるまいか。斯んな考は段々起つて來る。從つて、戰勝の結果其他の特別理由て新に領土を增し爲めに異人種を自國民中に加ふる場合は致し方がないが、然らずして異人種が自ら自國内に移住し來り、茲に別天地を作るが如き場合は、大に將來の爲めに考ふべき問題てあるまいかといふ風に、識者の考は向いて來た（以上の點につき、特志の讀者

には、新日本臨時增刊世界民族號所載政治上より觀たる今日の民族競爭と題する拙著小論文を參考せられんことを乞ふ)。斯くて久しく米國識者の研究に上つて居つた移入民問題(Immigration)は、最近著しく其政治的方面に於て、盛なる論究を見ることゝなつたのである。米國の先覺者ルーズヴェルト幷びに其關係するアウトルック誌の本年一月以來の論調は、正に此潮流を代表するものである。試みに其二三を拔萃せんに、一月十日號の社說には、次の樣な文字があつた。

(前略)排日問題の根元は、單なる感情にあらず、猜疑にあらず、又文明の程度低しと云ふにあらず、德育の缺くる所ありと云ふに非ず、安價なる勞銀に甘んずるといふにもあらず、生活狀態劣等なりといふにもあらず。日本人は敢爲の氣象を有し、高潔なる品性を有するに於て、敢て歐洲移民に劣る所なきは吾人の認めて疑はざる所なり。只問題は、米國の文明は歐洲人種によらずして健全なる發達をなすことを得るや否やに在り。日本人は諸種の優秀なる性質美德を有すれども、先天的に歐化せざる國民なり。この點に就ては、日本文明に特殊の研究を加へたるラフカヂオ、ハーンの如き其著書に明記せる所なり。日本人排斥の理由は、實に此同化せざる點に存す。故に此問題は、米國に取つては、單なる勞働問題、經濟問題、人種問題にあらずして、實に國家存立の基礎に關する一大問題なりとす(下略)。

この最後の文字が、何物を暗示するかは、賢明なる讀者の洞察するに難しとせざる所と信ずる。又二月十五日號の社說には

(前略)若し地をかへて日本が我國と同一の地位にありとし、多數の米人日本に來りて同一の權利を獲んとせば、日本は果して如來なる處置を執るであらうか。

といふやうな文字があつた。斯ういふ風に考が向いて來ると、排日問題は、最早社會問題や人種問題といふことではなく、米國々家の存立に關する問題である。斯うなると、假令日本人に同情ある者又は日本人を讃

美する者てあつても、重大なる國家問題としては顧を傾けねばならぬ事となる。斯くて排日問題は、國家の前途を憂ふる識者の根底深き重大問題となつたのてある。

ことに斯の念は、日露戰爭後俄に著しくなつた。戰爭開始の當初、米國人の我に對する同情の熾てあつたことは言を待たない。然るに戰局の進むと共に、日本人の技倆の劣るべからざることが分ると共に、漸く恐怖の念を生じ、之に日本人を侵略國民なりとする感情が加つて、遂に同情は變じて嫉視猜疑となり、奉天大戰爭の頃より、米國の論調は漸く一變した。即ち所謂黃禍論がポツ〱見ゆるやうになつたのである。例へば或る赤新聞の如きは、戰場に馳驅して赫々の功名を立てたる百萬の勇士、除隊の後群をなして加州に來らば、加州は乃ち第二の布哇たらんと云つたやうな記事を連載し、甚しきは日米開戰說をさへ唱ふる者があつた。而して斯かる浮說蜚語が、單に無智なる下層階級にのみ行はれしに非ることは、夫のマグダレナ灣問題之を證して餘りある。一千九百十二年、加州サクラメント在住の日本人某、某會社の勸誘に從ひ、同會社員と共に、墨國下カリホルニアを視察するや、日本政府マグダレナ灣租借の意思ありとの流言は、直に四方に傳はり、日本政府新に六萬の除隊兵士を墨國に入り込ましめたりとの獨逸電報と共に、痛く米國人の神經を刺戟し、四月二日、上院議員ロッヂをして、マグダレナ灣調査の提議を爲さしめ、遂に七月三十日、上院をして、ロッヂの提出せる次の決議案を四對五十一の大多數を以て通過せしむるに至つた。

兩米大陸に於ける港灣若しくは他の地點が、海陸軍事上の目的を以て租貸せられ、而かも其租貸が合衆國の交通及び安全を威嚇するの恐ある場合に於ては、假令右の租借が會社又は組合によりて爲さるゝとも、其會社又は組合にして、兩米大陸以外の第三國政府に、政府的目的のために、該租借地、支配の實權を與ふる如き關係を有する限り、合衆國政府は其會社又は組合の租借に對し、深甚なる注意を拂ふ

ことなくして、之を看過することを得ず。

右の如きは餘りに神經過敏の說ではあるが、併し米國人が我々同胞の行動に對し過敏なればなる丈け、同胞の移住は彼等の懸念して止まざる所である。而して此懸念は、米國の前途を憂ふる所から來るものなる故に、經濟的、社會的、人種的の見解の如何に拘らず、苟くも一片憂國の至情を有する者は、均しく此問題に對しては無頓着で居れぬことゝなるのである。

さて以上五段に分析して述べた所によりて、排日問題の眞相は如何かこうか明白にし得たと思ふ。由之觀之、我國の新聞などで往々唱へらるゝ「排日問題は太平洋沿岸地方に於ける勞働者幷に之を利用する一部野心家の奸策に基くので、米國全體の問題でない」といふ說、「正義人道に訴へて彼地識者の反省を促せば、解決が出來る」といふ說、或は「米國の言論界は、最近に至りて其非を悟り、排日の鼓吹をやめ、漸次日本に好意を表して來た」といふ說の如きは、皆謬りである。少くとも彼國言論界の皮相の現象に迷はされて、根本的考察を怠つた謬說である。斯な考をして居ては、到底解決は出來ぬ。少くとも、米國人の考の要點に適中する見解を立てることは出來ぬのである。

三

排日問題の眞相は先づ分つたとして、サテ次に來る問題は、之に對する解決方策如何といふことである。今根本的解決案として世間に唱へられて居るものを數ふると二つある。一は歸化權の獲得であつて、二はキャンペイン、オヴ、エヂュケーションである。

第一歸化權の獲得　之は慥かに解決の一案である。併し解決の一つの方案であつて、唯一の方案ではない今次の加州土地法案は、歸化權の有無といふことを以て、土地所有權を獲得し得る者と否とを區別したから、少くとも今次の問題は、歸化權の獲得によつて全く解決することが出來る筈である。加之今次の加州土地問題を離れて、一般に抽象的の排日問題といふものを眼中に置いても、歸化權の獲得は我に取りて大に有利である。何となれば、日本移民は之によりて彼地

の政界に新に一勢力となることが出來るからである。加州邊に居て盛に排日を唱ふる者は、多くは日本移民と同じ様に歐洲大陸から流れ込んで來た勞働者である。同じく流れ込みの移住勞働者であるのに、彼のみ獨り主人顔をして我を排斥するといふのは何の譯かと云ふに、畢竟彼は米國市民となり得るに我は之が出來ないからである。而して彼等勞働者は、數に於ては優者なるが故に、其希望は自ら政治上法律上に實現さるるから、從つて我々日本人は、常に法律上政治上頗る不利益なる取扱を受くるのである。今次の土地法案の如きは、僅に其一例に過ぎぬ。然るに若し日本人も亦市民となるの權利を獲たならば、日本人の意思も矢張り政治上に多少重きをなすから、日本人は今までの樣に虐待を受けずに濟むであらう。此點に於て、歸化權の獲得は慥に有利である。併し乍ら、茲に一つ忘れてならぬことは、歸化權の獲得によりて受くる日本人の利益は、只經濟的利益を異にする白人勞働者の壓迫に對抗することが出來るといふ事に止るのである。然るに近頃は、排日思想を抱く者の中には、何も日本人と利害の交渉のない者も少くないことは、前段述べた通りである。故に排日問題が予の所謂勞働問題又は經濟問題たるに止る間は、歸化權の獲得は優に問題の完全なる解決であり得たであらうけれども、如何せん今日の排日問題は、ソンナ淺薄なものでない。是れ我輩が先きに歸化權の獲得を以て唯一の解決策でないと斷じた所以である。又更に思はねばならぬことは、今日歸化權の獲得は可能であるか如何といふことである。排日問題が勞働問題經濟問題たるに止る間は、排日思想は太平洋沿岸一部の人民に限るが故に、米國民全體の思想に訴へて、歸化法を修正せしむることは、必しも不可能ではなかつた。然るに今日となつては、最早排日思想は決して只一部分にのみ流行するものではない。一般の所謂識者の階級にも有力なる主張者を見るに至つたのであるから、目下の模樣では、到底歸化權獲得の望はないと云はねばならぬ。此事は新聞の調子などでも分る。今年の夏、紐育の某新聞は、上院議員

七十餘名に對し、日本人に歸化權を與ふるの可否を質したるに、二三名の可とする者及び答辨曖昧なるものあつた外、大部分は否定論者であつたさうである。

第二キャンペーン、オヴ、エヂュケーション（Campaign of Education）之も解決の一法たることは、前項歸化權の獲得と同一である。米國人の排日思想の要素の中には、吾人の觀て以て最もとする所もあるけれども、中には隨分飛んでもない誤解に基いて居るものもある。之等に對しては十分なる說明を與ふるの必要がある。日本人を以て、到底白人の生活の理想を了解し得ぬ劣等人種と見る考の如きは、最初に辨明せねばならぬ事柄であらう。異教排斥の念の如きも同樣である。彼等が基督教を以て最上の宗教とするに異議はない。併し凡ての宗教は皆均しく神の光である。基督教は神より出づる最大の光であるかも知れぬも、唯一の光ではあるまい。佛教も回々教も大小完不完の差はあつても、皆是れ神の光を人類に輝さんが爲めに生じ來れるものである。斯かる度量は彼等白人に是非持たしてやり度いものである。次に日本人を好戰國民、侵略的國民なりとする思想に對しても、能く其誤りを解いてやり度いものである。由來歐羅巴人は東洋人について一種特別の先入的偏見を持つて居る。そは東洋人中時々武力の優れた人種が勃興し、夫が西進して西洋の文明を蹂躙しに來るとの考、是である。一度びマホメットやサラセンに侵された彼等は、東洋に少しでも勇敢な國が勃興すると直ぐ之を連想する。此點は可笑しい程神經過敏である。而して此偏見は日本の勃興に伴つて直に所謂黃禍說の唱導を促した。黃禍說は獨乙皇帝の首めて唱へたものであるけれども、今や米國に於ても之は輿論となつて居る。是れ實に大なる偏見と誤解に根據するものなるが故、キャンペーン、オヴ、エヂュケーションの事業として是非此事もやつて貰ひたいのである。

併し之も實は根本唯一の解決案ではない。何となれば排日問題に關しては、彼に責むべき事があると共に我に亦幾多の改むべき所があるからである。我に改む

る所なくして、換言すれば、我に附着する排日の原因を除去することなくしては、如何に二三の誤解を辨明しても、排日の思想は動かぬからである。故に誤解の說明とか、日本の實相の紹介とかいふやうな事は、手前の方の改善と相伴ふに非んば、何も實效はないのである。於是問題は一轉して吾人は如何なる點に於て從來の面目を改めざるべからざるかといふことに移る。

四

我々は如何なる點の改善によりて、排日問題の解決に一步を進むることが出來るかといふに、夫れは無論吾々に附着して排日思想の原因を作して居るものを、漸次取り去るに在ることは論を待たない。然らば排日思想の原因を作してゐるもので、吾々自身で如何樣にも處分の出來るものは何かといふに。

第一は米國に移住せぬ事である。米國に移住さへせなければ、何も八釜しい問題は起らない。併し米國移住は、或る意味に於て、我國に取つて國民の運命に關する重大なる問題だから、今更斷念する譯に行かぬ。勞働者から嫌はれても、農業家から斥けられても、ドン〲發展しなければならぬ。此點は外に致し方はないのである。故に移住は已むを得ぬことゝして之を許した上て、少しても排日の思想を和ぐる手段方法を考へねばならぬ。

第二は同胞の品位を高むることである。米國に居る移民中には、多數密集の勢を恃んで、隨分ダラシのない生活を公然と營み、心ある白人をして顰蹙せしめ居る者少くない。之は排日論の直接の原因とならぬまても、少くとも排日論に有力なる口實を與ふるものである。之は何んとかして矯正したいものである。佛敎基督敎の敎師諸氏の奮起を望まざるを得ぬ。

第三に在留同胞が白人社會より絕緣してゐる事も一つの考ものである。白人と交際してゐなければ、白人は一片の風說流傳によりて日本人の生活を解するより外ない。之はツマラぬことて日本人を誤解するの種となる。最も語學の點よりして、思ふやう十分に交際の出來ぬといふ點もあらうが、一體に動もすれば孤立し

たがるのは日本人の弊であると思ふのである。

第四に佛敎敎師に對してはも少し積極的な活動を希望する。我輩は先きに第二項に於て、佛敎徒の活動が人種的偏見を深からしむると云つた。予は必しも佛敎徒の活動を無用有害と云ふのではない。否、却つて佛敎の中には大に白人に敎ふべき眞理があると思ふのである。只當節のやうに、消極的に日本人間に障壁を築き、其中に閉ぢ籠つてゐるのみでは、日本人の健全なる發展に著大な障害になると思ふ。日本人の敎化に盡力するのは大によし、併し彼等に若し果して確實なる信念あらば、何ぞ之を以て白人の間に押し出さゞる。予は佛敎徒にしても少し積極的に活動し、白人の間にも宣敎を試みる位の氣慨あらば、啻に日本人信徒を狹隘なる城壁內に孤立せしめざるのみならず、又佛敎を通じて白人間に東洋文明の眞相を傳へ、彼等をして大に啓發する所あらしむることが出來たらうと思ふ。今のやうでは、全く日本人に對する白人の誤解を增すの用を爲すばかりである。この點は日本住民の發展のためには勿論、佛敎其物のためにも切に考へて貰ひたいと思ふのである。

第五に日本人の米國移住觀を改むることである。是は一番大切な事であると思ふ。我々は米國移住といふことを、利己的動機から考へて居るやうである。嘗て米國は支那人勞働者を排斥する際、次の如き理由を擧げた。

支那人は、我國の文明を享受せんが爲めに來るに非ず。單に只暫く來り止り、相當の財產を作り得ば、再び本國に歸り、安逸に餘生を送らんの目的を以て來住するのみ(ミュンステルベルク氏著「米國」)

而して此非難は、丁度日本人にもあてはまるものではあるまいか。無論在留同胞の中には、米國に永住の考を有する者はある。夫にしても、彼等は米國を以て自分の生命を托する處、又は共同して其發達進步の爲めに盡力すべき處と爲すの氣分は、有つて居ない。他の言葉を以て云へば、米國を以て、我がものとするの感情を有せないのである。之れては米國の方て繼子扱

にするのも無理はない。彼等は、吾々の移住の動機を個人的乃至國家的利己心にありと解する以上、吾々を歡迎するといふ譯には行かぬのである。吾々の方に米國に移住するの必要なければ則ち已む、然らざれば、右の考を改めなければ、到底大和民族は、安全に平穩に米國に發展することは出來ぬのである。

一體米國といふ國は、外人の移住によりて開けた國である。而して今日猶ほ外國人の移住を必要とする國である。故に異人種の雜居といふ問題に對しては、本來歐羅巴諸國の如く心配しては居ず、又經濟の發達の上から、コンな心配はして居られぬのである。此點は歐洲の古い國とは餘程事情が違ふ。建國の當初の如きは、壓制迫害を蒙れる者に、自由の天地を供するといふ意氣込みて、盛に舊大陸よりの移住を歡迎したものだ。只一千八百九十年頃より、露國、澳匈國、伊太利國等よりの下等移民の來る者激增してから、多少品質を標準として移民入國の許否を八釜しく云ふ樣になつた。今統計の示す所に依れば、一千八百六十年から同七十年に至る十年間、米國へ來住したる者、露人は四千、澳匈人は七千、伊人は一萬一千であつたのに、一千八百九十年から一千九百年に至る十年間には、激增して露人五十八萬八千、澳匈人五十九萬七千、伊人六十五萬五千に上つた。之等は從來の移民の大部分を占めて居た英、獨、瑞、諾諸國の人民と比し、著しく品位が劣等であつたから、玆に始めて移民排斥の聲は高くなつたのである。而して排斥の理由は、經濟上よりは寧ろ社會上、道德上であつた。即ち下等移民の來住は、徒らに貧民の數を增し、從つて一般勞働者の生活標準を低下するの事實、救貧院や監獄に收容さるゝ者の割合之等外國人非常に多きの事實、特に無政府主義者の如き危險分子が之等下等人民の來住後、著しく增加したるの事實を擧げて、品質を標準として移民を選擇するの必要を主張したのであつた。併し之は決して移民其ものゝ排斥でないことは忘れてはならぬ。米國の健全なる社會的、道德的生活の保護のため、已むなく八釜しくは云ふものゝ、經濟的發展の上からは、固

より多數移民の來住は、希望する所なのであつた。故に米國の生活の理想を了解する者であつたら、何時でも歡迎せらるゝことを得るのである。

然るに不幸にして目下のところ、日本人はこの所謂「歡迎すべからざる移民」に屬すると見られて居る。具體的の場合を取れば、排日の理由は此外に幾らもあるが、之等の理由を取り去つても、猶ほアトに右申す樣な要素が殘るのである。而して斯種の考は、實に有力なる識者の頭の裡に潜んでゐるのだから、ウッかりしては居れぬのである。ルーズヴェルト氏が、日本人不同化說を以て排日を主張するが如きは、其著しき例であらう。所で然らば、同化といふことは、日本人が所謂歡迎すべき移民に屬する爲めに必要な條件なりやと云ふに、之には少しく疑問がある。我々日本人中にも同化といふことを以て、排日問題解決の一法と唱ふる人が少くない。併し之は同化といふ文字の意味如何によることであらうと思ふ。若し之を外形的に解し、日常の生活の工合をアメリカ風にするといふことであるとすれば、之は何の役にも立たぬ。又之を精神的に解し、全然アメリカ魂になることであるとすれば、之は第一日本國の爲めに好ましいことでない。日本國民は何處までも日本國民として、大和魂を保有して居て貰ひたい。且つ又この意味での精神的同化といふことは可能であるかと云ふに、予は否と答へざるを得ぬ。現に亞米利加に來て、アメリカに歸化しておる多數の外國移民を見ても、之等の者は全く同化してゐるかと云ふに、必しもさうでない。無論其間に程度の差はあるけれども、全然同化してゐるとは云はれない。平時には之を窺ふことが出來ぬけれども、イザといふ時に、故國魂を發揮することは、能く見る所である。例へば猶太人が、時々露國反抗の運動をして米國政府の累を爲すが如き、又愛蘭人が遙に故國同胞の事業を助けて、爲めに米國政府の施設を妨ぐるが如き（在米愛蘭人は、上院議員間に運動して、タフト大統領の英米仲裁條約を廢棄せしめし事あり）、其例である。去れば、永年米國人となり濟まして居ても、獨逸人は獨逸人、

佛蘭西人は佛蘭人としての傑を、何處かに殘して居る故に同化といふことは、完全には出來ない事であると思ふ。

又米國に取つても、この意味での同化は、必しも要求しないと思ふ。米國といふ國は、建國の精神から見ても分る通り、諸方の外國人をかり集め、其協同の力によりて、一の理想國を立てんとの主義を有する國である。故に此主義に於て一致するならば、其外の同化は必しも冀ふ所でない。故に吾々日本人も、此主義をさへ能く呑み込んで居るならば、吾々は日本人として其儘米國の國家的經營に參加することが出來るのである。各自建國の理想の一部を分擔して立つの決心あらば、所謂同化はしてなくども、米國に在住するに差支はない。差別は決して協働を妨げないのである。ミユンステルベルヒは其著に於て、米國の國柄を說明して、

米國人民の活働の眞の動機は、自主の精神に存す。而して彼は外來移住者に、必ずこの自主の精神を鼓吹して、理想を一變せしめ、以て米國に對する眞の愛國心を感得せしむ。……米國人の愛國心は、土地と關係を有せず、又人民とも無關係なり。而かも猶無數の外來移民を同化し、鞏固なる協同一致の精神を有するに至らしむるは、其强烈なる社會的理想に在り（文明協會の譯書による）。

と云つたのは、多少我輩の所見と吻合する所あつと思ふ。要するに、米國人の抱負といふものは、其土地を廣く世界の人民に開放し、其協力によりて理想の天地をひらき、以て世界文明の進歩に貢献せんとするに在る。此精神を呑み込んで來る者は、何人でも歡迎を受くるのである。ルーズヴェルトが、同化云々と云つたのも、多分此精神の體得を意味したものであつて、之か爲めに故國魂までも捨てよといふのては無かつたと思ふのである。

さて然らば、日本人は能く米國の理想を解することが出來るかといふに、殘念なから予は否と答へさるを得ぬ。何故かといふに、日本從來の國民教育の方針が全然この主意に反して居たからである。從來併ひに今

日の國民教育は、子弟に向つて世界文明の進歩に對する日本帝國の責任といふやうなことを教へて居るか。吾々は一個人として知らねばならぬ多くの智識は教へられた。郷黨に對する義務、殊に國家に對する義務は完全に教へられた。併し世界の一員としての責任については、何等の智識をも授けられて居ない。要するに現今の教育は、善良なる國民は作つたけれども、世界の一員としての資格は作つてやらなかつた。故に國民は、日本帝國あるを知つて世界あるを知らぬ。況んや世界に於ける帝國存在の理由の如き、世界文明の進歩に對する帝國の使命の如きは、彼等の夢想にだも上らない問題である。從つて、我々は亞米利加に來ても、其國の精神とは一切交渉なく、單に自分の利益、精々日本の利益を圖る位で終つて仕舞ふ。即ち米國在住の動機は、個人的乃至國家的利己心である。之では米國に於て歡迎せぬのも、當然であるまいか。

依つて我輩は、教育方針の一變によつて、此障害を排除せんことを主張せざるを得ぬ。世間には能く、國家的精神と世界的精神と一致せざるを唱ふる者がある。例へば夫の歸化權の獲得についても、外國に歸化するなどゝ云ふ事は、日本國民としてあるまじき事であると論じた者があつたさうだ。無論國民の忠君愛國の精神は、愛護せなくてはならぬ。併し世界の爲めに盡すは、日本國の爲めに盡すと相衝突すると考ふるが如きは、斷じて排斥せねばならぬ。昔し封建の時代には藩あるを知つて國家あるを知らなかつた。今日は一縣一國の利害と、帝國全體の利害とは、必しも衝突せず又一縣一國の利益が同時に國家全體の利益である場合も多い。否兩者の一致を見當として行くのが政治の要義である。國家の世界に於ける亦同じことである。若し兩者を以て相反すと見る者あらば、之は未だ封建的思想に捉へられて居るものと云はねばならぬ。今日の日本は、最早其國民をして東洋の一隅に跼蹐せしむるを許さぬ。果して然らば、國民に世界的精神を鼓吹するは、最も必要と云はねばならぬ。而して之は廣義狹義の教育の力に待つて期すべきことであると思ふので

ある。

斯くて若し教育の力に依つて國民の世界的精神を陶冶することが出來たならば、我々は日本國民の資格を有し乍ら、若しくは日本國民の本性を失ふことなしに立派に米國に在つて其精神を感得し、其經營に參加することが出來る、換言すれば、米國の經營施設の上に其重要なる一部を分擔することが出來ると思ふのである。彼地に於ける識者の日本人觀も一變するに至るは論を待たない。然るに不幸にして此點に關して、日本の言論界は明白に其說明を與へなかつた。殊に加州事件の際の言論の如きは、餘りに利己的であつた。爲めに却つて心ある識者をして「日本人は國家あるを知つて何物も知らぬ人民」であると叫ばしむるに至つた。あの時我國の言論界は、正義人道に訴へて米國を責めた。而して求むる所は只日本人の利益を害すなといふに過ぎぬ。於是彼等は餘りに日本の要求の利己的なるに憤慨し、遂に五月二十四日のアウトルック誌をして次の放言をなさしむるに至つた。

(一)何人を合衆國領土内に入國せしめ、又何人に歸化を許すべきや、合衆國人民のみ之を決すべき全權を有す。

(二)何人を日本の領土内に入國せしめ、又何人に歸化を許すべきやは、日本人民のみ之を決する全權を有す。

(三)以上の決定を爲すに當り、世界の國民中より之が選擇を爲すの權は、兩國共に之を有す。日本が米人を排し、獨乙人を容るゝも、米國が亞細亞人を排し、歐羅巴人を受入るゝも勝手なり。

是れ明に賣言葉に買言葉である。要するに、米國が日本を以て、偏狹なる利己的國家主義を執るものと見るは其根底決して淺くない。之を打破するのは容易の事でない。而かも之を打破しなくては、日本人の發展は到底期し難いのである。而して之には我國の教育の方針が既に責任ありと思ふから、先づ第一着に我が方面から此點を開發しなくてはならぬと信ずる。若し此點を苟且に附するならば、我が大和民族は、啻に米國に於

てのみならず、世界到る處に發展の進路を塞かるゝてあらう。

附言、本稿を起すに際し、學友在桑港日米新聞記者千葉豊治君の研究の結果に負ふ所甚だ多し。記して深厚なる謝意を表す。著者識。

●次●號●公●論●豫●告●

今後の三十年(廿頁の大論文)……須崎默堂

政黨道德論……松山忠二郎

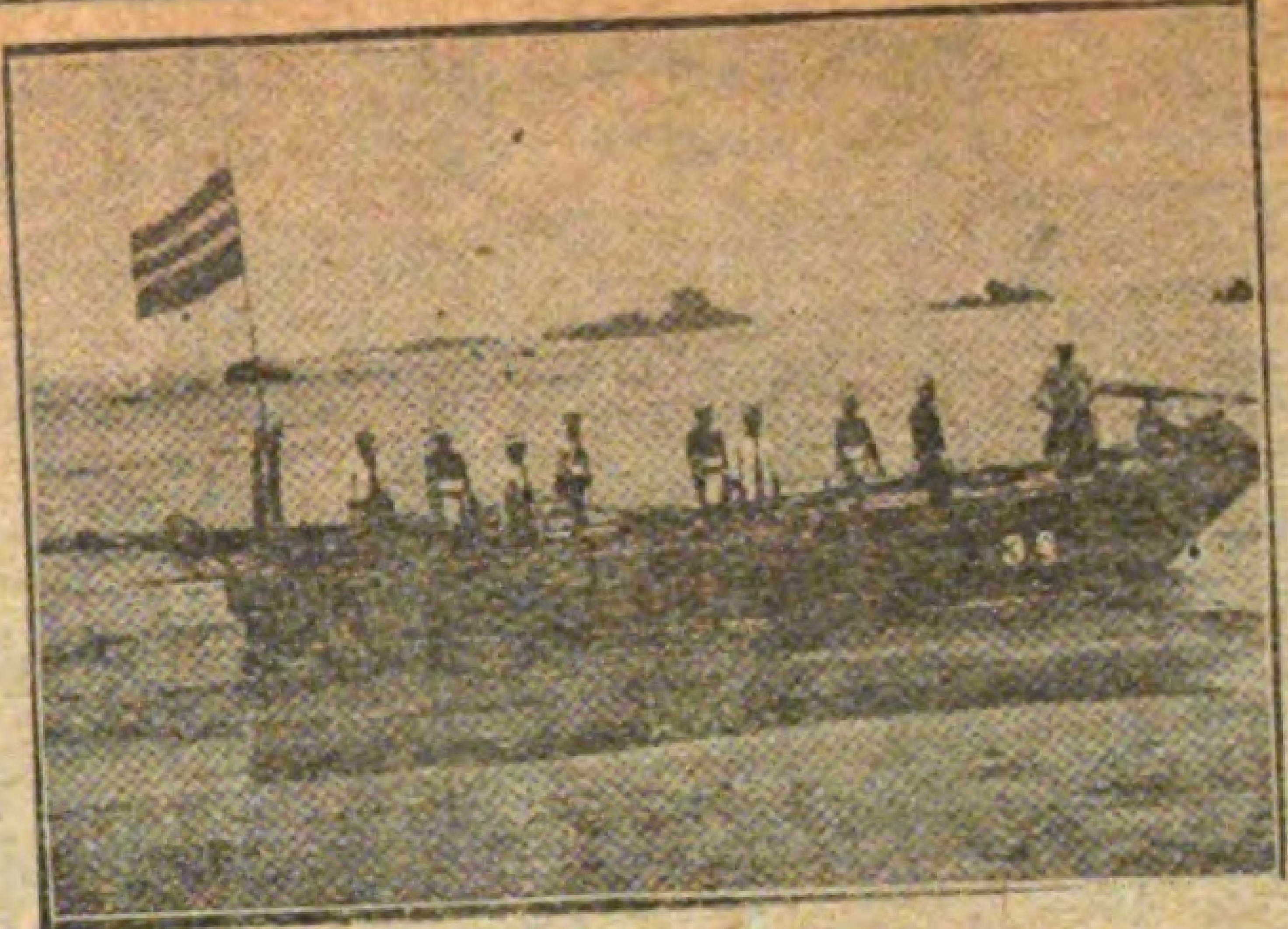
大正時代觀……內田魯庵

一瞥せる朝鮮の地方(廿五頁の大論文)……中野耕堂

右四篇何れも本號の爲めに執筆せられたる雄篇にして二月號の誌上を飾るべく、此外時事問題に就て蒐集せらるべき數篇の論文と共に、次號の本欄は本號に劣らざる光彩を發揮すべし。

肺病患者は憂ふる勿れ

肺病患者は自ら不治の症と斷念し一歩一歩失望的暗黒の淵に陷る者の如し、然れども同情すべき肺病患者よ、肺病は決して不治の症に非ずとは最近醫學の上に闡明せらるゝ所、殊に最近之が適藥の一大發見を實現せる予は、多年遠洋漁業に從事中肋膜炎に罹り困難の折柄偶然にも海中の或る物に含有する一種の靈藥あるを發見し、之に某劑を配合して服用せしに不思議にも平癒せしかば、尚研究の上肺患者を主として貧血症等の人々に服藥せしめしに何れも奏効顯著にして痰咳を治癒する事亦不思議なれば、爰に同病患者を救助せんが爲め今回官許を得汎く世に發賣するに至れるが爾來快癒者の禮狀頻々たり、されば同病者は東京の予が名宛にて返信料貳錢切手封入照會せば喜んで詳細なる事を通知すべし



（小田喜源藏捕鯨部千葉縣安房郡曖町港内ニ於ケル小田喜式捕鯨船ノ圖）

東京市麹町區下六番町二十六
小田喜源藏
電話番町三九一一
電信略號（ヤマカ）又ハ（ヤ）
振替口座東京二三四〇六番

▲海産業之部
本店 千葉縣安房郡館山町柏崎
支店 同縣同郡曖町平館
事務所 同縣同郡同町千倉
捕鯨解剖所 同縣同郡館山町沼區字西濱
第一干鮑製造所 同縣同郡曖町平館

（一〇三四号）

川尻清潭序

芝居見たまゝ

演藝書報記者 歌之助著

口繪 舞臺面、扮裝面 寫眞十葉挿入

新刊

四六判全一冊 五百〇餘頁 ＝正價金八十錢 送料金八錢＝（御注文代金引換謝絶 郵便切手は八錢以下）

本書は何れも當代の名優に依つて演じられた芝居を擇んで書いたものでございます。一度御覧になりました芝居を、あれは、どんなだつたかとお考になることがありませう。然ういふ時に、これを御覧になれば、直にハッキリと解つて參ります。そこで其處に非常な興味があると信じます。それは役者の顏こそ見られませんが、役者の聲こそ聞えませんが、其芝居の氣分が『見たまゝ』に浮動してゐまして、讀むでゐらつしやるうちに、不思議に芝居の世界に引きこまれて參ります。

本書は遠方にゐらしつて、見たい芝居を見られない方に、こんな重寶な本はありません。

本書は素敵に面白い本でございます。またお話の材料にもならうと信じます。何故とならば『見たまゝ』其物が、平易に簡潔に、そして興味のあるやうに、丁度お話をするやうに書いてあるからでございます――しかし、これを芝居の筋書だと思召したら、大間違でございます。著者は何人にも讀まれるやうに、また小説などと同じやうに、何處までも興味中心で書いた讀物だと申して居ります。

發行所 東京市日本橋區鐵砲町六番地 振替口座東京（壹五〇五六番） 磯部甲陽堂

（中付三の三）

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

林喜一先生著

●新春を獨歩すべき怪著現る●

アキレ申候

上は政府の矛盾を剔抉公開し、以下大臣紳士の横暴より貴夫人の墮落、新聞の功罪及女優藝者の正體等巨細數十項に分ち一々事實を根據として大膽に氣の毒な程素ッ破拔き且論難した活社會あらゆる裏面の總まくり吾乍アキレ申候之れを正義の矛なればグーの音も出まいと思ふ、而も痛烈骨を刺す筆鋒言々肺肝より出づ實に無二の毒滅殺菌劑なり、左に内容の一二三を見よ

操と命を交換した昔の女●危險なる哉美人??危險なる哉貞操??●僕の見たる東京市の欠點兩面觀●悲劇巡査の免官●痴劇紳士の色師●賭博原分の奇怪事●藝者泣かせ待合の檢擧と高官の横暴を論難す●行政整理と「矛盾」の說●何故に藝者は役者と密着するか●命賭け御殿女中の役者買の事實●新聞紙の功罪と記者の墮落と詐僞廣告の總まくり●世界を跨に喰ふ大山師（官憲の大狼狽）藝者にモテル法（内部展開）現代藝者の資格を擧く●貴婦人に醜婦多く藝者に美人多き理由●上流家庭の墮落觀（奥様の不過）マダ澤山あれど紙面に限りある故略す。

中判上製頗洋本全一冊
定價金一圓十錢
小包郵送料八錢
市內四錢

（中付三の四）

新刊 勝屋英造先生編

外來語辭典

三六判上製頗美本携帶至便定價金七十五錢郵税六錢我國に輸入され既に邦語となつた歐洲語。及今日盛に社交上、新聞紙上に表はるゝ歐洲語。文學科學哲學は勿論新語六千を撰擇し原語を添へ解釋したるもので

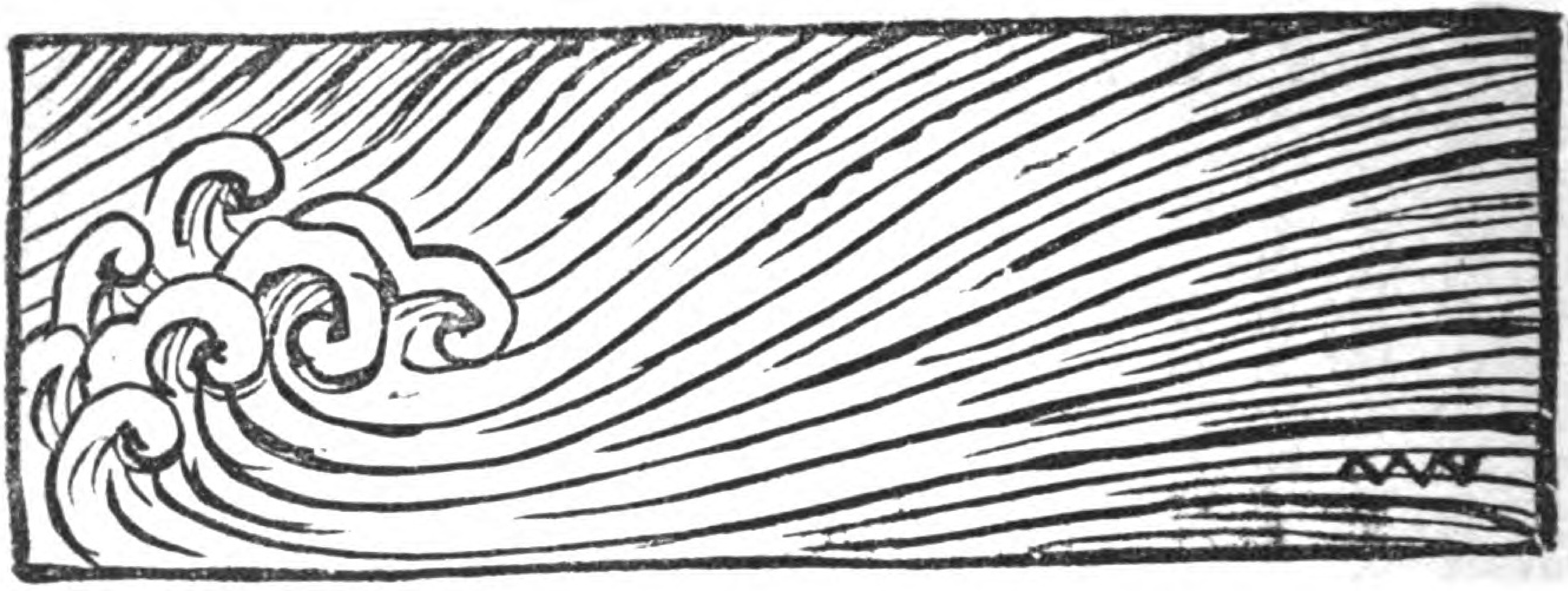
好評 五十嵐力先生編

趣味の傳說

四六判上製無類美本、定價金一圓廿錢小包料八錢著者が多年蒐集した山の如き我國傳說の材料の中より最も興味ある廿が一を摘み地方の人に質し記述せるもの讀者をして趣味の別世界に神遊せしむ。

發行所 東京市神田區錦町一丁目 振替口座東京第三四〇九一 **二松堂書店** 電話本局三七一七

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



亡き妻の骨を抱いて

東京朝日新聞記者 天民 松崎市郎

災厄一時に到れる大惡年、大正二年を永遠に記念すると共に、予をして今日あらしめたる糟糠の妻、亡さく子の名を不朽に傳へんが爲めに、「亡き妻の骨を抱いて」一篇を記す。愚人の愚擧たるに似たれど、愚人には愚人の感慨あり、痛恨あり、告白あり、懺悔あり。欺かず、飾らず、有の儘の事件を有の儘に寫し、有の儘の情懷を有の儘に描いて、江湖讀書子の同感に訴へんとす。題して其の一を「五丁目五番地」と云ひ、其の二を「死を待つのみ」と云ひ、其の三を「哲郎達郎俊郎」と云ひ、其の四を「公孫樹下の墓」と云ひ、其の五を「同棲十三年間」と云ふ。創作に非ず、模倣に非ず、悉く是れ予が汗と涙に依りて成りたる、予が實生活の記錄なり、映書(フヰルム)なり。

一、五丁目五番地

一、先祖から約束事

「今度、中央公論に何か書く時には、お母(かア)さんに宛た手紙風にする積だ」

と、私が眞面目顏で云ふと、お前は何時もムキになつて、私の机の傍に來ては、

「お父さん、そんな事はお止しなさいよ、人が見ると笑ひますから……」

と、能く云つて居たのを、私は未だ昨日の樣に思うて居る。今年の夏八月、十五年振りに歸省して、其の通信を「中央公論」に書かうとした時にも、私は「十五年振りに見た故郷の山川」を瀧田樗蔭君に送り、「十五年振りに逢うた初戀の女」を薄田泣菫君に呈し、「十五年振りに見た故郷の人々」を、お前に宛て書く豫定であつた。

「人が笑うても構はんぢやないか、……歸省した亭主が、留守居の女房に宛て、歸省中の見聞なり感慨なりを書くのに、誰が何と云ふものか。予をして今日あらしめたる內助者、世界に又とあるまじき糟糠の妻よ……と云ふ冒頭で、いろ〳〵の事を書くからね、怒つては不可いよ、お母さん」

「そんな事を書くと、人が馬鹿だと云うて笑ひますよお父さん。それに最う哲ちやんなどは、新聞や雜誌の讀める齡になりましたもの、女の事なんかは最う好い加減になさいよ。子供のためにも好くないし、第一、貴方がいろ〳〵と語解されますよ」

こんな問答は、俊坊を抱いて寢て居るお前と、其の枕頭で夜半の二時三時頃まで、原稿を書いた私との間に、毎度取交された談話であつた。子供の寢返りか何かで眼を覺まして、電燈の明るいのに吃驚して、

「まアお父さん、未だ起きて居たのですか。何枚位書けました、え、最う何時？」

と、お前が云ふ頃には、何時も敷島を三袋ほど空にして、私もボツ〳〵睡くなり初める時分であつた。

私はそんな風にして、「淪落の女」も書いたし、「女八人」も書いた。「十五年振りの歸省」も亦、彼の青山南町五丁目五番地の、俗に云ふ長者丸の平家建、八疊と六疊と三疊と二疊としか無い、その狹い書齋兼客室兼寢室の八疊の壁際で、お前や子供の寢息を聞きながら、夜を徹して書く筈であつたに、今はまア何と云ふ激し

い境遇の變り樣であらう。

宛て書くべきお前はお前でも、最う現世の人では無い。今この筆を執つて居る二階の座敷も、お前の知らぬ間に移轉した四丁目二十二番地の家である。十五年振りの歸省から、僅かに二ケ月餘を過したのみであるのに、人事の變轉は此うも急速に果敢いものであらうか。朝顏の夏が黄菊の秋になり、黄菊の秋が銀杏の初冬になつた僅の間に、恐ろしい運命の潮は、松崎一家の上に寄せて來た。一人しか無い妹が、腸窒扶斯で死て以來、其の一家五人に傳染すると間もなく、お前も腸窒扶斯、二人の子も腸窒扶斯に罹つて、三個の釣臺が相次いで私の家から出た。そして夢にも思はなかつたお前の死が事實になつて、今日斯うして亡きお前の骨を抱いて、限り無い苦しさ悲しさ淋しさを語らねばならぬとは、何と云ふ悲慘な廻り合せであらう。

岡山縣平民、新聞記者、松崎市郎の妻さく子が、齡僅に三十三歲の若い身そらでありながら、大正二年十一月十一日午前六時二十分、日本赤十字社病院分病室に於て、その夫と愛する三人の子を殘して死んだと云ふ事實は、最う何うしても取返しの付かない約束事である。私の家では、曾祖父の久右衛門翁も、祖父の齋三隱居も、父の玄五郎親父も、四十五十の時代に、何れも連添ふ曾祖母さん、お祖母さん、お母さんに死別れた。謂ば女房に夭折されるのは、松崎家先祖からの約束事らしいが、思へば厭な、果敢い、悲しい約束事ではないか。

「お前よりは長命するだらう、お前に死水を汲まれる樣な事はあるまい」

と、私はたゞ何の氣無しに思つて居たが、未だ三十六歲の霜寒い此の十一月、お前に死別れやうとは、夢にも思はなんだ出來事である。私の出世も未だ見屆けず、可愛い三人の男子を遺して死んだお前も、定めて心殘りの事であらうが、何一つとして面白い愉快な月もさせず、夫婦となつて十三年、常に苦勞のみかけたお前に死なれたのは、私にとつても限り無い痛恨事である。遺された三人の子が有つても無くても、お前の死

そのものは、お前のために傷ましく、私のために悲しい出來事であるのに、二人の中には、更に涙の種の三人の子がある。此の子供さへなくば、お前も安心して死なれたらうし、私も一向專念に、お前の冥福を祈る事が出來るであらうに、三人の子を遺して死に、三人の子を遺して死なれただけに、私の悲嘆、私の不幸は、一層身を切られる樣である。

それに、お前は何事も知らずに死んだけれど、今、家に居るのは四歳の俊坊だけで、哲郎と達郎の二人はお前が入院すると間もなく、引續いて腸窒扶斯に罹つて、お前と同じ赤十字社病院に入つた。お前の死んだ室と二つ隔てた左端の二室に、今も尙枕を列べて居るが、二人とも未だ容易に退院出來さうも無い容態である。私は入院中のお前に心配させぬため、子供二人の病氣の事は隱して、

「子供等は三人とも、壯健で遊んで居るよ」

と云つて遂に死ぬるまで、子供の病氣を知らせなかつたが、子供二人も亦、僅に二室隔た隣室で、慈愛深いお母さんが死なれたとは、夢にも知らずに過して居るのである。

お前が死んだゞけでも、私は最う絶え入るほど悲しく淋しいのに、二人の子は病院に苦んで居るし、一人の子は家で淋しさうに遊んで居る。病院へ行つて、哲ちやんや達さんの顏を見ても涙がこぼれるし、家に居て俊坊と遊んで居ても、事に觸れては悲しくなる。

お前の思も、子等の上には殘つて居やう。

二、恐しい運命の潮

子供等の病氣を知らずに死んだお前は、幸か不幸か、十月六日の夕暮に、お前の釣臺を病院に送つてから、一家は引續いての不幸に沈んで、暢氣な私も、二三年の壽命を縮めてしまつた。

お前を病院へ送るまでの間にも、私は人知れぬ種々の苦勞をした。妹睦の死と云ふ序幕から、お前の死と云ふ大詰までの間には、堪え難い悲劇の幾幕かゞあつた。その幕毎に必ず登場して、立役にせよ端役にせよ

相當の科白を演つて退かねばならぬ私は、何んなに切なく、何んなに苦しかつたてあらう。

今から思へば、私が十五年振りに歸省した八月上旬から、睦さんは重い病氣に惱んて居たのてあつた。二階借の忙しい住居に、醫藥の料さへ思ふに任せなんだ、睦さんと其の良人の苦しさは、想像するだに憫れてある。愈々腸窒扶斯と極つて、駒込病院へ送つた九月五日の夕暮に、私は止む無い社命を帶びて、秋田縣へ旅立つた。病院へ着くまては保つまい、と云はれた瀕死の睦さんも、其の後、小康を得たと見えて、私が秋田から歸つて、更に社命を受けて八王子へ出張するまては、其の良人から「キトク」の電報も「シンダ」との通知もなかつた。醫術の進歩した今日、腸窒扶斯位ては死ぬまい、と信じ切つて居たのに、十五日の午後八王子から歸つて、取るものも取敢ず、駒込病院へ電話を掛けて見たら、

「たつた今、左樣てすね、五時二十分に、お亡くなりになりました」

と云ふ、看護婦の落着いた聲が聞えた。私は

「あゝ、左樣てすか」

と僅に云ひ得たのみ、頭の尖から足の端まて、俄に何か重苦しい物を被せられた樣な氣持がして、熱い汗がダラ〳〵と身體中を流れた。

「睦さんが死んださうだ、たつた今……」

家に歸つて、夕餉の支度をして居たお前を玄關に呼出して、私が周章た態度て斯う云つた時、

「え、睦さんが……」

と答へて、お前は涙をハラ〳〵とこぼした。其の時、お前の涙を見て、私は初めて、妹の死と云ふ現實の前に落涙した。大正二年九月十五日、松崎一家の大悲劇は、其の時、幕が開いたのてあつた。

私は、其の足て直ぐ駒込病院へ行つて、睦さんの死骸に永い別れを告げた。翌日は其の遺骸を病院の屍體室に受取りに行つて、其の良人の市川由吉君と、親戚の堀友五郎翁と共に、町屋の火葬場て荼毘に附した。陰慘なる避病院の屍體室……寂寥た町屋の火葬場……

骨肉の死を眼前に見た私は、死そのものゝ前に降服せねばならぬ、弱い果敢い人間たるに過ぎなんだ。

その月の十九日、小石川の力行會に、親しい縁者知己二十餘名が集つて、睦さんの好きであつた讃美歌を唄つて、乏しい葬儀を營んだ事も、雜司ヶ谷に一坪の墓地を購つて、白菊匂ふ軟土の下に骨を埋めた事も、お前は能く知つて居る。

「妾も葬式に行きませう、墓參もしたいし……」

と云つたのを、お前は身體が惡いのだから、行かなくても宜いと、强て思ひ止まらせた時、それでは代理にとて、睦さんには幼い頃いろ／＼厄介になつた哲ちやんと逹さんとを、私が連れて葬式に列なつた。それから四日目の二十二日、睦さんの良人も、その子も、臨時雇の下女も、五人が五人とも腸窒扶斯に罹つて、駒込病院に送られたと聞いた時、物事に驚き易いお前の驚愕は何んなであつたらう。大概の事には吃驚せぬ私も、その日、睦さんの良人を駒込病院に見舞つた時には、突如として一家一族の上に落ちた運命の慘酷さに且つ恐れ且つ慄き且つ涕泣した。

私のためには一人しか無い妹の死と、其の一家五人の入院と云ふ事實は、何んなに私を刺戟したであらう、何んなに樣々の事を考へさせたであらう。折柄、印刷中の「女八人」の卷頭に、「この書の印刷なかば成りたる大正二年九月十五日午後五時二十分、東京駒込病院の一室に於て、不幸不運なりし三十歳の生涯を終へたる妹睦子の靈にさゝぐ」の數文字を刻して、自ら僅に慰め樣としたが、兄として負うた妹への三十年の債務が、何うして此のデジケート位で償ひ得られやうぞ。

十五年振りに歸省した時にも、故郷の人々が異口同音に尋ねたのは、妹睦子の安否や消息であつた。

「睦さんは何ねいしておいでんさるかな、壯健かな、まア／＼壯健で居るのが何よりてがアすけいなア、宜しう云うてつかはさいよ、落合も大分變りましてしやうがな」

その睦さんが、病むこと僅に月餘にして、三十歳の生涯を終らうとは、ほんとに夢の樣な事實である。何

事も運命だと諦めては見るものゝ、其の短い一生涯が不運不幸を極めただけに、兄として兄甲斐のなかつた私には、私だけの悔恨が盡きない。況んや其の良人なる人の感慨は、何んなに切なく、何んなに痛ましく、何んなに遣る瀬ないであらう。

書くべき筈であつた「歸省記」も、そんな風で書くことが出來ず、心淋しい間に九月の空も暮れた。

「お前の氣分が好くなつたら、哲ちやんや達さんや俊坊を連れて、睦さんの墓參りに行つて遣らうぢやないか」

と云つて居る間に、「恐しい運命の潮」は松崎一家の上にも襲うて來た。お前の發病、入院に續いて、達郎の發病、入院、哲郎の發病、入院と、厄難相次いで私の身邊に押寄せた。大概の事には屈托せず、先望せぬ私も、一時は何う成り行くことかと、愁嘆し狼狽した。

三、傳染病室の暗示

夫婦になつて十三年、東京に來た翌年の春、輕い腕部の關節炎を煩つて、一ヶ月ほど病床に就いたのみて、其の他には一度も煩つた事のないお前が、何うして大病に罹つたのであらう。一年に一度か二度、輕微な氣管支加答兒を起して、喘息の樣な容體になる事があつても、安靜一晝夜を經過すると、何時も恢復して了ふので、そんな事はお前も私も、病氣の中には數えずに過して居た。

三人の男の子を產んだ時にも、姙娠、分娩、產後とも壯健で、先づ病氣と云ふものゝ味を知らずに、お前は三十三歲まで壯健であつた。尤も、此の春頃から何うした譯か、事に際し折に觸れると、子宮から輕微な出血を見る樣になつたので、

「早く醫師に診て貰はねば不可い」

と、私が言葉を盡して說き聞かせても、お前は患部が患部だけに、何時も厭な顏をして、

「診て貰はなくても、溫りさへすれば治りますよ、妾は冷え性ですから……」

と云つて平氣で居た。別に何所が痛いとか苦しいとか

云ふので無く、唯、折々出血がある位の事なので、氣分も平生と少しも變らず、全く放つて置いても、自然に全快すると信じて居たのであらう。

それが、睦さんの死ぬる前後から、段々惡くなつて、或る夜の如きは、猛烈な差し込みが起つて、居つても立つても落着かぬほど、悶え苦しむ樣になつた。

「それだから早く診て貰へと云つたんだ。何でも無いと思つて放つて置く間に、病氣は重くなる一方だから、厭でも診て貰はなくては不可い。私が連れて行つて上げやう」

其の後、京橋の池田病院に若い醫學士を訪ねて、お前の症狀を話した時、その醫學士は、

「内診しなくては斷言出來ませんが、未だお齡がお齡だから子宮癌てはありますまい。一度おいてになつても宜し、御都合に依つては、往診して上げても宜しいが……」

と云つた。この事をお前に話すと、

「あの病院は、お父さんの入院した病院だから、極りが惡いぢやありませんか」

と笑つて、お前は依然として、診察を受けやうとしなかつた。萬一、私の病氣した爲めに、お前にそれが感染して、壯健てあつた三十三年の日記の上に、悲しむべき朱點を附する樣な事があつては、實に忍ぶべからざる罪惡てあり痛苦てある。お前の厭がるのは最う問題てない、一日も猶豫せず、强制的に診察を受けさせねばならぬ。

同郷の竹馬の友て武田壽夫君と云ふのが、赤十字社病院の婦人科に勤務して、傍ら麻布笄町に開業して居るのを幸ひ、私は其の武田君を訪ねて、逐一お前の症狀經過を語つた。忘れもしない、睦さんが死ぬ二三日前の夜、武田君の宅へ行くと、訪ねる人は、

「今、お産があると申しまして、病院の方へ參りました、お生憎樣てすね」

とのこと。私は直ぐ笄町から病院下に出て、福田會の背面の暗い坂道を上つた。上つた左手は大きな赤十字病院の一構へて、左側の煉瓦塀の中ほどに、「赤十字社

病院分病室」とある看板を見て、何の氣もなく其のくゞりを入つた。

應接室に通されて、武田君の來るのを待つて居る間に、私は初めてそこが傳染病室であることを知つた。狹い應接室の壁には、黒板に白字で、「傳染病患者見舞人心得」が、細々と書いてある。私はこゝで武田君に面會し、お前の症狀を詳しく話して、診察を依頼した後、

「厭な所へ入つて來ました、こゝは傳染病室なんてすね、ちつとも知らなかつた」

と云つて、何となく不安な氣持になつた。

武田君とは其のまゝ別れたが、私はお前の病氣のために、赤十字社病院の傳染病室の方へ迷い入つたことが、非常に氣がゝりになつた。門を出て、病院下から電車に乘つて、宅へ歸る三四十分間にも、私は傳染病室へ武田君を訪ねたことが、何かの怖ろしい暗示てはないかと云ふ樣な、厭はしい心持がして堪らなんだ。

「お前が若しや傳染病になつたら‥‥」

そんな念が、何となしに私の心を暗くした。

其の翌朝、私はお前を連れて武田醫院へ行つた。お前の病氣は輕い子宮外膜炎と判つて、その日から隔日に通院して、患部の洗滌をして貰ふことになつた。私も喜ぶし、お前も安心して、

「見て貰ひさへすれば、何ても無いだらう」

「こんな事なら、早く行けば宜かつたのに、ね」

と笑い合つて歸つた。それからはお前一人で、七八回通院して、出血も止まつたし、氣分も大分好くなつたとて、お互に喜んだが、今思へばそれも束の間の夢てあつた。

九月の末から頭が重くなつて、氣分が鬱だと云つて居たお前は、十月二日の夜、私が社から歸つて見ると、發熱三十九度五分と云ふ容體になつて居つた。お前は例の喘息が起る徴候か、又は子宮の方のための發熱てせう、と云つたが、一兩日前から便通が無い上に、惡寒を感じて頭痛がする、その上に九度以上の發熱とある。腸窒扶斯で睦さんが死んでから、僅に十六七日、

その一家が入院してより二週間目に、お前の發熱は愛ふべき徵候である。

私の心は、「若しやチブスては無いか」と、たゞ其の事にのみ波立つた。お前に隱れる樣にして、そつと、「家庭百科事彙」の腸窒扶斯の條を開いて見ると、初期の症狀がお前のと少しも違はない。「愈々變だ」と思つて、私は先づ武田醫院に走り、更に芝二本榎に開業して居る同郷の親友、金田醫院の金田善策君をも聘した。

普通の醫師が普通の患者を診察するのと違ひ、この二君とも「同郷の友人の妻」を診ると云ふ、美しい情誼を以て親切に診察してくれた。そして二人とも、

「チブスては無からう、子宮病で能く發熱することもあるから、當分の間安靜にして、經過を見る方が宜いてせう」

と云つた。腸窒扶斯でも無く、入院の必要も無いとならば、先づ安心である。それなら看護婦を一名雇入れやうとて、私はお前にも相談した後、四日から看護婦を雇うて、看病して貰ふことにした。三人の子は皆壯健て、看護婦の來た日の正午には、私も稍安心して、三人を連れて、來合せた兒玉花外君と一所に、近所の西洋料理屋へ行つたほどであつたに、お前の病氣は、なか〱安心どころの事ではなかつた。

四、當世慈愛の天職

「右の者は品行方正にして、慈愛の天職を全うする事を證明仕り候也」

との意味を記した、大關看護婦會麻布支部の紙片を持つて、お前の看病に來た看護婦は、愛嬌と優美とを忘れて生れた樣な女であつた。日給八十錢の二等看護婦だから、何うせ碌な看病も出來ないけれど、私はあんなに無愛嬌な看護婦を見たのは初めてであつた。

お前が床に就いた翌日、口入屋に賴んで置いた若い女中も來たけれど、お前の氣に入る樣なお粥を炊くのは覺束ないと思つた。私は子供の時分から自炊に馴れて居るので、お前が病氣してからは、十何年振りに飯も炊いて見たし、お前のために美味いお粥も炊いて遣

つた。私の炊いたお粥は、朝も晩も、
「あア、おいしい、お父さん、上手ですね」
と云つて居たが、女中が來て、看護婦が來てからは、お粥の方は看護婦に賴み、飯の方は女中に命じて、私は子供の方にかゝつて居た。勿論、女のことだもの、お粥も飯も美味いだらうと思つて居ると、飯は柔軟過ぎて不味くて、お世辭にも美味いと舌皷か打てなかつた。
「お父さん、こんなお粥は食べられません。御飯をお粥にしたのは、不味くて駄目です」
と、お前の方からも小言が出た。その前から、お前は看護婦を嫌つて、私を呼ては小聲て、
「お父さん、あの看護婦は駄目で、不親切で、少しも氣を付けてはくれません。お父さんが此の室に入つて來る氣配がすると、俄に檢溫器を入れたり、脈を取つたりして、如何にも注意して居る樣な風をしますけれど、私が知らぬ顏でウツラ〳〵として居ると、婦人世界ばかり讀て、氷嚢の溶解たのも打ちやつて、坐睡なんかするんですもの。それにお粥を炊くのに、看護婦ともあらうものが、冷たい御飯に湯を注いて、それをちよいと煮てお粥だとは、何と云ふ判らず屋でせう。あんな女は看護婦の資格なんか無いから、それとなく云つて直ぐ斷つて下さい。子供が三人も居れば、お世辭にも坊ちやんと、一語位は云ひさうなものですが、あの風は何うです、子供の居る前を通つても、ものを云へば損が行く樣な顏をして、憎らしいぢやありませんか。今も此のお粥は食べられないと云ふと、お熱がありますからね、と其の突險貪な言ひ樣つたら有りません。ねえ、お父さん、あんな女でも看護婦だと云つて、世間が渡つて行かれるのでせうか。私は不自由ぢやありませんから、あんな看護婦は直ぐ歸して下さい。」
と云つて居たが、不親切な看護婦は斷らなくても、自然に不必要になるべき六日の晩が來た。
お前の熱は、輕い子宮病のためにしては、餘りに頑强だと云つて、武田醫師も首を傾け初めた。私は最初

から入院說を唱へて居たので、武田君に賴んで、赤十字社病院の病室を聞き合せて貰つた末、いよ〳〵十月六日の夕暮、お前は生れて初めて釣臺に乘せられて、生れて初めて病院へ入ることになつた。

誰も病院に入るのを好む者はないが、何うしても入院せねばならぬ容體のお前が、入院を承知しなかつたのには、何のくらゐ閉口したか知れない。それでも私が段々と利害を說いて、病氣の上からも、經費の點からも、小兒等のためにも、私のためにも、入院した方が好いと云つたので、お前は不安ながらも入院を承諾した。私が例の看護婦に向つて、

「いろ〳〵厄介になりましたが、家內も入院させる事に極めました。その方が第一安心ですし、病人のためにも良いから……」

と云ふと、看護婦は重荷を下した樣な顏付て、

「そりや結構て御座います、殊に赤十字病院は、何も彼も行屆いて居ますから、お宅て御治療なさいますより、何の位結構ですか知れません」

と微笑んだ。三日分の看護料の他に、金壹圓を別の紙に包んて、看護婦の前に差出し、

「これは少しですが、取つといて下さい」

と云ふと、看護婦は一應袋を私の方に返して、

「これは何うぞ、この方だけて何ですから……」

と云つて、看護婦料の方だけ取上げたが、

「まアさう云はずに、ほんの少し……」

と笑ふと、叮嚀にお辭儀をして、

「それては、何うも、頂戴いたします」

と云つて受取つた。それからは、昨日までも今の前までも、不愛嬌極つた人が、俄にお膳立の手傳をしだす、俊坊に向つて「坊ちやん〳〵」と言葉を交し初める、掌を覆すとは眞にこんな事てあらう。その上、

「病院まて、お附添申しませうか」

と私にまて、親切氣を見せ初めた。狹い粗末な家に住て居る上に、私と子供と新米の下女ばかりの世帶だから、何うせお祝儀など貰へまいと見くびつて居たのか、或は生活程度の豊てないのを見て、

「厭な貧乏人の所に來たものだ」と逃げ足て居たのか、兎に角、驚くべき態度の變り樣てある。こんな事なら、三日前の夕方來た時に、五十錢銀貨の二つも握らせて置いたら、早くからお世辭も云ふし、お粥も御飯から炊かずに、米から炊いてくれたてあらうものを、私が目先の見えない事をしたばかりに、お前にまて厭な思をさせたのは濟まなかつた。

「あんな看護婦は、市中の看護婦會の派出だから、金さへ出せば何うにてもなるのだ。天職て働かずに金て働くのだから、少し高い女中位に思つて居なければ、お前の樣に腹が立つよ。その代り、お前がこれるから入院する赤十字社の看護婦は、模範と云はれるほどに親切て、万事が行屆いて居るから、少しも心配することは無い、安心して何も彼も病院任せ、看護婦任せにするんだよ。家の事なんかは、何も心配しなくても宜いから……」

十月六日も黄昏れた五時過ぎる頃、赤十字社病院の印絆纒を來た男が二人、釣臺を擔いて門の前に來た。其の釣臺を見た時に、私は何か知ら胸迫るを覺えて、熱い涙が頰を傳つて流れた。

「お母さん、いよ／＼病院へ行くんだよ」

その時、看護婦も女中も居らず、哲ちやんや達さんの心配さうな顏も見なかつたなら、私は聲を上げて、思ふまゝに泣いたてあらう。

五、十月六日の黄昏

「お母さんはね、お家に居ては五月蠅いから、これから病院に入るのてすよ、赤十字社病院へ。哲ちやんも達さんも枕頭に行つて、早くお歸んなさいと挨拶するんだ」

六疊に俊坊と一所に遊んて居た二人は、交る／＼お前の枕頭へ行つて、

「お早うお歸んなさい」

と云つては、頭を下げて逃げる樣に門の外へ出た。二人とも極りの惡る相に、子供らしく笑つては居たが、慈愛深い母上が、厭な釣臺に乘せられて、病院へ送ら

れるのを見ては、子供心にも何んなに不安に思つたてあらう。二日の晩まではお前に抱かれて、乳房を握つて寢て居た俊坊も、三日の夜からは溫和しく私に抱かれて、厭々ながら寢る樣になつたが、生れて初めて母の病氣に逢つて、それを機會に乳房に離れた俊坊は、幼な心にも何んなに淋しく思つたてあらう。

「お母ちやんはね、あんばいが惡くて病院へ行くんてすよ。俊坊、可愛い〳〵から直き歸るの、ね。母ちやんとこへ行つて、失敬して來まちやうか」

俊坊を抱いて、お前の枕頭へ行かうとしたけれど、何か怖い者ても居るかの樣に思ふてか、六疊へ逃げ込んて、隅の方に默つて立つて居た。眼前の悲哀い事件を見聞しても、其の心を少しも動かされず、たゞ不思議さうに眺めて居られるのは、單り幼い者の上にのみ恕された幸福てあらう。

重いお前の病軀を釣臺の上に運んだ後、私は哲ちやんと女中とに留守居を命じて置いて、靜に擔がれた釣臺の後に尾いて、五丁目五番地の家を出た。運ばれて行くお前も、附添うて行く私も、十月六日の其の夕を限りとして、足掛五年の長い間を住馴れた家に、生きて再び還ることを得なからうとは、何うして夢にだも思ひ浮べやうぞ。其の日、その夕を最後として、母も、子も、生別又死別を兼るに至らうとは、何うして現にだも思ひ浮かべやうぞ。

生涯に曾て經驗したことの無い、心淋しい、沈んだ鬱陶しい夕暮の眺めてあつた。青山警察署の通りを右へ、子供等が宜く遊びに行く本尾原を斜に過ぎて、青南小學校の表門前へ差かゝつた時、お前は釣臺の中から、

「お父さん、こゝは何所てす？」

と、釣臺に乘せられた病人にしては、比較的元氣のある聲て、初めて斯う言葉をかけた。

「青南學校の前だ、最う直ぐだよ、病院は……」

私は釣臺の前になり後になりしながら、强て自ら氣分を引立せ樣よ努めた。――病院に入りさへすれば最う大丈夫、長くて三週間か四週間も經れば、人力車か

自働車で迎ひに行つて、面白可笑しく興じ合ながら、家に歸ることが出來やう。そして、釣臺に附添うて行く現在の心持を、過去の夢に語つて、喜ばれもしやう喜びもしやう。病氣入院と云ふ今日の忌はしい出來事も、やがては二人の夫婦としての情愛の上に、更に一層の親しさ懐しさを起させる革命の動機となるかも知れない。十三年の長い間、常に苦勞のみかけたお前のために、初めて苦勞の仕甲斐ある苦勞をする時が來たのは、債務の幾部分を償却せよと云ふ、天の意であるかも知れない。精神上の苦痛も、物質上の打擊も、廣い世界に一人しか無いお前のためならば、甘んじて受けもしやう、喜んで受けもしやう。良人としての誠心を、其の妻の上に現し示すべき機會としては、餘りに悲慘な、餘りに痛ましい出來事でも、私はそれを「悲しい幸福」として、微笑まねばならぬ身の上である。

ーと、思はそれからそれへと錯雜し混亂した。

「未だ病院ぢやないのですか、隨分、遠いのですね」

と云ふお前の言葉は、二度も三度も繰り返されたが、その度毎に、元氣らしい聲をして、

「最う直ぐ、三分の二以上來たよ」

と答へる私の心は悲しかつた。高樹町の電車工事をして居る通りには、最う電燈や瓦斯が點いて、四邊が何となく明るい中に、お前を乘せた釣臺だけは、何んなに暗く、陰氣に見へたであらう。

釣臺が赤十字社病院の玄關に着いて、お前の病軀を婦人科の一室に運び込まれた時、忘れ得ぬ十月六日は暮れて、病院の室々には、薄暗い五燭光の電燈が點いて居た。

四五人の看護婦が一度に來て、お前の手當は瞬く間に出來た。氷に、湯たんぽに、檢溫器に、脈に、何でも無い事ながら、私は其の注意周到な、親切な取扱振りを見て、何んなに安心したであらう。赤煉瓦で圍繞された赤十字社病院の一廓は、人間最終の運命を表徵した樣な、一種陰慘な空氣に充ちて居るけれど、其所に包擁されたお前の行末は、「涙」でなくて「笑」であらうと心を安んじた。

「お安心なさいまし、最う大丈夫ですわ、ね」と、看護婦の或る者は、幼い小兒にても云ふ様に、お前の枕頭で微笑て見せた。

「お母さん、苦しか無かつたかい、最う大丈夫だよ、こゝに來さへすれば、病氣は放といても治る。つまらない事なんか少しも心配せずに、暢氣にして居なくては不可い。何うだ、好い病院だらう、廣い病院だらう、私の入つた病院などとは、比較物にならないほど、大きいだらう、廣いだらう」

お前は默つて仰臥したまゝ、如何にも安心したらしい様子であつた。お前自身よりも、さうして病院の一室に安臥したお前の姿を見て、私は何の位、安心したか知れない。

「哲ちやんや達さんは何ですけれど、俊坊が可愛相です。最うおッぱいと離しても宜い齢ですけれど、今頃は泣いて居るかも知れません。風邪を引かせ無い様に氣を注けて下さいよ、妾が居ないと何かに付けて違ひますから、頼みますよ、お父さん」

一時間ほどお前の傍に居た後、私は重荷の大半を下した様な氣持になので、青山の宅に歸つた。一週間も經てば漸次に快くなつて、子供等を連れて行つても、笑つて興じ合ふことが出來る様になれば、何んなに仕合せであらう。睦さんの様な病氣になつてくれねば宜いが、睦さんの様な重體にならねば宜いが、と一安心はしたものゝ、私の心は依然として、お前の經過をのみ思ひ煩つた。

其の夜、宅に歸つて見ると、看護婦は最う居ないし、若い女中は淋しさうに、長火鉢の前に座つて居た。哲ちやんと俊坊とは、汽車と電車とで遊んで居たが、達さんは羽織を着た不斷着のまゝ、六疊の室に倒れて寝て居た。

「達さん、何うしたの、そんな所へそんな風をして寝ては不可い、風邪を引くよ」

私は病院へ行つた洋服姿のまゝで、寝て居る達さんを起して、試にその前額部に手を當て見ると、たゞならぬ熱があるてはないか。急いて、お前の寝て居た八

疊に蒲團を敷いて、達さんを寢させた後、檢溫器をかけて見ると、三十九度六分と云ふ發熱ではないか。
私の憂苦と驚愕は絶頂に達した。

六、お母様の病院へ

十月六日の夜、病院に入つて、十一月十一日の朝、果敢い最後を遂げるまで、其の三十六日の間、お前も隨分苦しみ悶えたであらうが、私も並大抵でない悲しい苦勞をした。何んな悲しみも何んな苦勞も、お前が全快して歸つて來ると云ふ、唯一つの希望があればこそ、屈托もせず失望もせず、堪え忍んで居たものを、今となつては何も彼も水の泡である。

お前が入院した其の夜から、異常の發熱した達さんの病氣は、二日と經ち三日と過ぎても、重くなつて行く一方であつた。一度は感冒でないかと思ひ、二度はヂフテリヤでないかと憂ひたが、解熱劑を服用させても、氷囊で冷しても、熱は高くなる一方であつた。病院に入つたお前の病名が未だ定まらぬ間に、一難去つて一難また來る達郎の病氣には、實際何の位心配したか知れない。お前でも壯健で居てくれたなら、私の相談相手となるばかりでなく、熱に惱む達さんも、何のくらゐ心強く思つたか知れなからうに……。齡の割にしつかりして居るとは云ひながら、未だ八歲の達さんだもの、口にこそ出さなかつたが、心の中ではお母さんの居ないことを、何んなに賴り無く、何んなに心細く思つたであらう。

遊戲に氣が乘つて居る時には、私が捲莨を買つて來いと云つても、好い顏をせぬ哲郎が、弟の達さんの病氣には、子供心にも心配したのであらう。夜更けてから藥屋にも走つたし、氷屋への使步きにも行つたし、俊坊の機嫌も取つて能く遊ばせた。來てから間の無い女中が居ても、十五六の若さでは、それが何の役に立ち、それが何の賴みにならうぞ。

「二番目の子供が、何うも惡い樣です」

武田醫院へ行つて、斯う云つた私の顏色は、變つて居たに違ひない。武田醫師も心持顏色を變へて、

「え、またですか、それは困りましたなア。兎に角、これから一所に參りませう」

七日、八日、九日と三日の間、達さんの症狀經過を見て居る間に、病院に入つたお前の容體は、日一日と惡くなつた。普通の發熱にしては、高下の躍梅が變だと思つて、試驗をして見た所が、腸窒扶斯とパラ窒扶の反應があつたと云ふ事を、武田醫師から申渡された九日の夜には、達郎も亦チブスの疑ある患者として、病院へ送らるべき運命に落ちて居た。

親戚の堀喜知六君が、勤めて居る會社の方を休んで、憂苦し狼狽して居る私を助けるために、奮然として此の病魔の家に來てくれたのは、九日の正午であつた。喜知六君は三十三歳の若紳士、鼻下に濃い美髭を蓄へて居る好男子であるが、子供等が「叔父さん〳〵」と呼んで懷しがるので、お前も私も「叔父さん〳〵」と呼んで居た。こんな場合に此の堀君が來てくれたことは、私のためにも、子供のためにも、お前のためにも、何の位、心丈夫になつたか知れない。俊坊が泣かうが、新米の下女が頓馬であらうが、堀君さへ居てくれゝば最う大丈夫である。哲ちやんも俊坊も、熱でウンウン唸つて居る達さんも、この「叔父さん」の顏を見ては心から嬉しさうに喜んだ。

明れば十月十日の朝、お前を乘せて行つた釣臺は、再び其の愛し子を乘せて私の家から出た。

「達さん、病院へ行くんだよ、お母さんの居る病院へ。白い服を着た親切な姉さんが澤山居て、叮寧に介抱してくれるんだから、家に居るよりは何の位好いか知れないよ」

さうして病院へ送られても、逢いたいお母さんには逢へず、病室の朝な夕なを何んなに心細く思ふてあらう。たゞ「お母さんの居る病院へ」を唯一の賴りにして、嬉しさうに釣臺に乘せられた笑顏を見ては、私は泣かずに居られなんだ。生れて初めて病氣して、生れて初めて病院へ入るのに、慈愛深いお母さんの介抱を受けることが出來ないとは、何と云ふ不幸な廻り合せであらう。

「達さん、こゝは達さんの學校の前だよ。早く快くなつて學校へ行つて、大に勉强するんだ、ねえ。お母さんも此の道を通つて行つたし、達さんも同じ道を通つて行く。病院も同じだし、病室も隣り合せだから、快くなつたらお母さんに逢つて、いろ〳〵のお話をするんだ、ねえ。何ちらが早く快くなるてせう、お母さんと競爭して、達さんの方が早く快くなつたら、御褒美は何にしやう、空氣銃？活動寫眞機？大砲？飛行機？何にしませうか、え、達さん」

こんな事を云つてる間に、達さんの釣臺は、赤十字社病院分病室の「患者通用門」を入つた。四五人の看護婦が出て、達さんを白毛布の中に包んで、二人て抱へて、病室の中に運び入れたかと思ふと、最う氷嚢や湯たんぽの手當が出來て、達さんは病床の上に仰向けになりながら、珍しさうに四邊を見まはして居た。

「お家よりは好いだらう、お父さんは毎日一度づゝは來るけれど、何時も附添うて居ることは出來ないから、しつかりして居るんだよ。何も遠慮することは無い、あの白いものを着て居る姉さんに、痛ければ痛い、苦しければ苦しいと云つて、快くなる樣にして貰ふのだよ。大丈夫、達さんさへしつかりして居れば、病氣が逃げて行つてしまう」

私が笑顏て斯う云つた時、達さんは、

「お母ちやんは何所に居るの……」

と、たゞそれだけ尋ねたのみてあつた。

お前が普通の病室から、傳染病室へ運び込まれて、達さんの隣室の病床に横つたのは、それから二時間の後てあつた。愛し子の一人が、壁一重隔てた隣室の病床に、自分と同じ病氣て惱んて居るとは知らず、

「子供は三人とも、皆ぴん〳〵して居るよ」

と云つた私の言葉を、死ぬるまて信じ切つて居たお前は、子供等よりも仕合せてあつたと云へやう。子供等の病氣をお前に隱したのは、苦勞性のお前に心配させては、第一病氣のために好くないと思つたからてあつた。自分の病氣やら家の事やらて、いろ〳〵と心配して居るお前に向つて、何うして子供等の病氣を話され

やうぞ。お前さへ壯健て居てくれたなら、心配も二人てしやうし、苦勞も二人てしやうし、介抱も二人てしやうものを。お前の病氣て頭を痛めて居る上に、引續いて子供の病氣て、實際私は心配もし苦勞もした。その心配苦勞も、お前が快くなつたら語りもし聞いても貰つて・

「まア、さうてしたか、大變な事て、いろ〳〵心配をかけましたねえ」

と、たつた一言云はれるのを、何よりの希望とし、何よりの慰藉として居たものを。云うて返らぬ愚痴言ながら、そのお前は最う一塊の白骨と化つてしまうた。

七、一種異樣の臭氣

私は病院から歸ると直ぐ、青山警察署へ出頭して、

「眞に申譯の無い事ですが、腸窒扶斯患者を二人出しました。病院から屆け出があつて、それから消毒に來るのてせうが、念のため私の方からもお屆け致します。勝手な事を申して濟みませんが、成るべく早く消毒に來て下さの樣に……」

と、係官の前に屆け出た。自分の家から傳染病患者を出すと、兎角隱蔽したがるもので、殊に消毒の施行を受けるのは、決して心持の好いものては無いが、私は最う一刻も自分の家に、ジッとして居られぬ樣な氣持がして、出來る事なら、何處かへ逃げて行きたい樣な、不安と恐怖の念とに驅られて居た。

「それは何うも、御念の入りましたことて、病院へ問合せた上て、至急に何しませう」

と、係官は私の住所姓名を記入した後、早速病院へ電話を掛けたり、赤坂區役所を呼出したりして居た。

警察署から歸つて見かると、堀君は淋しさうに笑ひながら、

「女中が居なくなりましたよ、逃げたのてせう。ちよつと其所まて行つて來ると云つて、一度出て行つてから、三四十分すると歸つて來ましたが、旦那樣は未だお歸りてはありませんか、と云つて居たかと思ふと、また居なくなつて了ひました。一度も二度も

釣臺が出ましたから、吃驚したのでせう」

と云つて、おんぶした俊坊を六疊の室に下した。哲ちやんも傍から心配さうに、

「叔父さんと俊坊と三人、裏の庭で遊んで居た間に、逃げて行つたんだよ。逵さんの病氣が怖かつたのでせう、お父さん」

私は仕方が無い成行だと思うた。未だ十六の肩揚げある人摺れのせぬ小娘だが、人柄も卑しくはないし、何處かに愛くるしい面ざしのある女中であつた。お前にも氣に入るし、私も此の位ならと思つて、

「今は奥樣が病氣中だけれど、全快したら何も彼も爲なくても宜いのだから、當分の間だと思つて辛抱しておくれよ。その代りそれだけの事は、私から御禮をするからね」

と、あれほど堅く云つて居たものを、私が逵さんの釣臺に附添うて、病院へ行つた居る留守中に、無斷で逃げるとは隨分ひどい。未だ看護婦が居た時にも、臺所の隅の方で、お前の病氣が傳染病ぢやないか、と尋ねて居た樣な氣配であつたが、雇はれて間の無い小女にとつては、逃げて出たのも無理はない。因緣の淺い主家の難儀に殉ずるよりも、自分の身に差迫つた傳染の心配を免れる方が、彼にとつては賢い急務であつたに違ひない。あのまゝ辛抱して居てくれても、萬一傳染して病氣にでも爲られやうものなら、それこそ心配でもあるし迷惑でもあるし、氣の毒でもあるし不憫でもある。引續いて起つた災厄に、氣も心も轉倒して居る時、あんな女中でも味方の一人に數えて、多少は賴みにして居たものを、「逃げた」と聞いては心細く、情なく思つたけれど、やはり逃げて呉れた方が宜いのであつた。

赤坂區役所と靑山警察署から衞生係が來て、大消毒の施行を受けたのは、十一日の夕暮であつた。三四年前の正月四日、事情あつて家に同居して居た睦さんが、猩紅熱に罹つて入院した時にも、消毒法の施行を受けたが、決して心持の好いものではない。屋内に漲る凡の病菌を殺して了ひ、居心地好く住心地好くして貰ふ

のであるのに、あの石炭酸の強烈な臭氣や、昇汞水の溶液や、石灰の生白い色などを見ると、何となく氣が滅入りさうになる。

「お母さんとお子供衆と二人とは、實にお氣の毒ですなア、お察し致しますよ」

と云つて、警官も區吏も同情を寄せてくれた。三人の人夫は命ぜられるまゝに、室内から器具、臺所、便所と殘る隈なく掃除をして、更に寸分の手落がない。その上、お前や達さんの不斷着は勿論、私が駒込病院へ着て行つた洋服も、私の蒲團も座蒲團も、大概の物は殘らず人夫に渡して、消毒所の方へ廻して貰つた。出來ることなら、私も哲ちやんも俊坊も、石炭酸水の中に入つて、二三日を過したいと思ふほどに、私の心は病毒の恐しさに怯えて居た。

風采瀟洒たる若い檢疫醫も來て、私や堀君の健康らしい顏を見診した後、ニコ〳〵しながら、哲ちやんと俊坊とを診斷してくれた。

「兄さんの方は感冒ですね、氣管が少し惡いけれど、先づ心配ないでせう。幼い方は大丈夫、なか〳〵好い身體ですよ」

この檢疫醫は、國民新聞記者渡邊利喜松君の知人とかで、親切さうな好紳士である。お前や達さんが腸窒扶斯に罹つた原因に就いて、警官と共に種々調べられたが、何うも私の家で特發したものではなく、他から傳染したのであらうと云つて居た。傳染と云へば、妹と妹一家の入院や死亡の際、度々駒込病院に行つたし妹の家にも出入した私に、先づ第一に傳染せねばならない。或は睦さんの葬儀に列して、妹の子等と一所になつて戯れた、哲ちやんや達さんに傳染せねばならぬのに、それが先づお前に傳染して發病したのは、何う云ふ譯であらう。檢疫醫は私の顏を見て、

「貴君（あなた）が菌の携帶者で、貴君が病毒を持て歩いたのかも知れませんよ。貴君は壯健ですから、チブス菌が入つても、思ふ儘に生育出來ないが、弱い者に傳染すると、忽ち症狀を起してしまう。兎に角、系統は妹さんと妹さん一家の病人から來て居るのでせう」

と云つた。何處から何う云ふ風にして、傳染したにしても、誰を咎め誰を恨むことも出來ない。お前や達さんが、忌はしい病氣に罹つて、相次いで入院する樣になつたのも、不幸不運と諦めるより仕方が無い。

　消毒が濟んで、私はやれ〳〵と思つたけれど、消毒液の臭氣が室内に張り渡つて、其の氣味の惡るさと云つたら無かつた。寢具用の香水を買つて來て撒いたり、牛肉を取寄せて食つたりしたが、何の座敷も皆ジメジメして、襖を開閉する毎に、何とも云へぬ異臭が鼻を衝いて、夜一夜安らかに寢られなんだ。

　社の薄井君と國民の渡邊君が、見舞に來てくれたのは、恰度、消毒の眞最中であつた。酒に醉うて蒼白い顏をした兒玉花外君が、パンやら饅頭やらを入れた大きな紙袋二つを持つて來て、門の中で淋し氣に遊んで居た哲ちやんと俊坊とに與へ、

「二人とも怜悧だ、温順くして居るんだよ。叔父さんと相撲を取らうか、え、え」

と言つたのも、其の日の黃昏頃であつた。

八、其の刹那の悲嘆

消毒が濟で一段落を告げたけれど、哲ちやんの感冒が氣がゝりで、又一つの苦勞が增した。

「哲ちやん、しつかりしなくては不可いよ。お前がまた病氣にでもなると、お父さんは何の位心配するか知れない。何とも無いだらう、大丈夫だらう」

こんな無理な事を云つて、强て哲ちやんから、

「え、何ともありません、哲ちやんは强いから、達さんの樣な病氣なんかにならない」

との返事を聞いて、僅に自ら慰めねばならぬほどに、私の心は落着いて居なかつた。

　それにしても、僅に三日を隔て二個の釣臺を出したり、區役所の消毒を受けたりしたので、近所界隈の人々は、何んなに思つて居るであらう。私の家から、厭な傳染病患者を出したと云ふことは、向三軒兩隣は勿論、青山南町五丁目五番地の凹地、長者丸の一廓に住む人々に、何んなに不氣味な、厭な、不安な、一種の

恐怖心を起させたてあらう。もとより、お前も達さんも、意あつて招いた災厄てはなく、突如として一家の上に落ちた悪運の業て、私一家には何の責も何の罪も無いとは云へ、私は何だか近所の人々に對して、相濟まぬ様な氣がしてならなんだ、申譯の無い様な氣がしてならなんだ。

殊にお向の安藤大尉の奥さんや、お隣の中島さんの奥さんは、お前が病氣してからも、達さんが寢込てからも、ちよい／＼玄關まて見舞に來られ、時には「お子達へ」と云つて、菓子や果物などを頂戴した。お前は心易く交際して居たが、私は途中て逢つても、碌に挨拶もせず過して居ただけに、それだけ一層濟まない様な氣がしてならなんだ。消毒を受けて間も無い場合だから、此方から出掛けて行つて、「氣味の惡い思をさせまして、何とも申譯がありません」と、一々挨拶する譯にも行かず、十二日終日は、ほんとに何の位、肩身の狭い思をしたか知れない。

十二日は、そんな氣苦勞て過ぎたけれど、悲しむべき十三日は、またお前の留守宅を襲うて來た。檢疫醫に診て貰つた時、氣管支に異常のあつた哲ちやんは、其の朝、飯を食べ終るや否、忽ち便所て嘔吐したとて顏色を變へて六疊へ驅け込んだ。

「お父さん、叔父さん、寒氣がする、苦しい、哲ちやんは寢る、蒲團を敷いて……」

と早や泣き聲になつて、如何にも苦しさうてある。

「しつかりしなくては不可いよ。何だ、泣き聲なんかして、馬鹿、しつかりしろ」

不憫なとも、可愛想なとも思ふ暇がなく、私は斯う聲高く叱り罵つて、氣の弱い哲郎に氣勢を付けやうとした。三人兄弟の長兄てありながら、氣も弱く心も優しく、私が琵琶歌の石童丸を、拙い節て微吟するのを聽いても、涙を流すほどの哲ちやんだもの、母病み、弟病むだ後、自分も亦病むだと自覺しては、嘆き悲しむのも無理はない。「しつかりしろ」と叱るお父さんの方が、何の位無理てあるか知れないものを、私の心も其の刹那には、「また哲郎が病氣した」に、周章し、狼狽

し、轉倒して居たのであらう。

また武田醫師を聘して、十三、十四の兩日間、氷嚢て冷しながら經過を見たが、三十八度五分の發熱は、三十九度となり、三十九度五分となり、時には四十度を超えるやうになつた。堀君が牛乳を買つて來たり、粥湯を炊いたりして、力を盡して介抱したけれど、寒いと云ひ、便通が無いと云ひ、素人の私にも、お前や達さんと同じ病氣である事が知れた。

重ね〴〵の事に、武田君も暫時の間は。私の顏を凝視るのみであつた。

「何うします、宅でこのまゝ治療しますか。それともまた病室を問合せて見ませうか」

私は何の顧慮する所なく、哲郎も亦、赤十字社病院へ入れることに極めた。お前一人の病氣でさへ、心配もすれば金にも困るものを、其の上達郎を病院へ送つて、更に心配と困難とを感じて居る處へ、また〳〵哲郎の發病とは何と云ふ不幸の極であらう。けれども一刻も愚圖〳〵して居る時では無い、病人のためにも、家に居る俊坊のためにも、私自身のためにも、近所界隈のためにも、速に病院へ送つて、安全な治療と親切な保護とに、信頼するより他に無い。金に困らうが困るまいが、睦さんの死んだ駒込病院へ送ることは、睦さんの落ちた同じ徑路を辿る樣で、何としても私の心が肯ぜなかつた。

お前は、宅に殘つて居る子等の上を思ひながら、後ろ髮引かれる念で入院したらうが、達さんは、「お母さんの居る病院へ」を何よりの心頼みにして入つた。哲ちやんもまた「お母さんも居るし、達さんも居る病院へ」を、寧ろ幸福に思ふ樣な風で、十五日の朝十時頃堀君に附添はれて入つた。お前にも達さんにも、私が附添うて行つたから、哲ちやんにも附添うて遣りたかつたが、私は最う悄氣て怯えて、釣臺を見るのと、赤十字社病院の彼の煉瓦塀を見るのとが、何よりも苦しく何よりも悲しく、何よりも恐しく何よりも怖かつた。

哲ちやんの釣臺を門外に送つた後、私は表の三疊で給本を見て居た俊坊を抱きしめて頬ずりしながら、父一

人子一人となつた其の刹那の淋しさ悲しさに、心ゆくまで咽び泣いた。お前が病氣で寢た十月二日の晩までお前の乳房を戀しがつた俊坊が、お前を病院へ送つた後は、二人の兄を母とも思ひ友とも思つて、淋しさうな顔ながらも、何かにまぎれて遊んで居たものを、兄二人相次いて釣臺の人となつてからは、幼な心にも何んなに淋しく思つたてあらう。

「お母さんも病院、兄ちやんも病院〳〵へ行つたの。お母ちやんも、達さんも、兄ちやんも、みんなあんばい惡いの。俊坊おりこうだから、あんばい惡くないね、海軍大將になるんだもの……。叔父ちやんが歸つたら、お饅頭買いに行きまちようか、好いべゝ着て、靴をはいて、電車〳〵乘つて、活動寫眞行きまちようか。俊坊、おりこうねえ、强いねえ、海軍大將なるんだもの、萬歳〳〵云ふの……」

强て元氣を出して、强て笑顔をして、こんな事を云つて見ても、親の心を讀む幼兒の眼は敏くて鋭い。何時もなら此の位云ふと調子に乘つて、

「あア、行きまちよう、電車〳〵乘つてね、ちりんちりん動きまアす、あかつアか見附、お乘換はありませんか、とをかは稻荷さん、お聲がないと、とウまアりイません」

などと剽輕な身振りをして、室内を飛だりはねたりする俊坊も、其の日から四五日間と云ふものは、ものに怯えた樣にきよと〳〵して、室の隅の方へ行つては、默つて立つて居ることが多かつた。

病氣になつたお前も哲郎も達郎も不幸てあつたが、壯健な俊坊や私の上にも、決して幸福は來なかつた。

九、背負切れぬ重荷

傳染病室に移されてからのお前は、腸窒扶斯患者に通有性な我儘を云つて、何の位、私を困らせ私を苦しめたてあらう。睦さんが腸窒扶斯て死て、未だ間がなかつたので、それと明らさ樣に「腸窒扶斯だ」と云つたなら、定めて神經を起すてあらうと思つて、

「お母さん、熱は大分ある樣だけれど、睦さんの樣な

病氣では無いのだよ。たゞ腸窒扶斯に似て居るだけのことで、お前のは極く輕いのだから、いろんな事を心配しないでね、早く快くなるんだよ」

と、私は毎日午前か午後、見舞に行つた度毎に、必ずさう云つてお前を慰めて居た。けれども、生れて三十三歳の秋になるまで、一度も病氣に罹つたことがなく一度も醫師の藥を服んだ事の無いお前は、第一病氣そのものに氣敗けをして居た。病院から供給する滋養物と云ふ滋養物は、悉くこれを排けて、牛乳も、スープも、おも湯も、藥も、お前の咽喉には通らなんだ。

「あんな厭なものは飲めません、あんな水の樣な物ばかり飲て居ては、身體が弱くなつて、痩せて骨と皮になるばかりです。お父さん、一生のお願ですから米のお粥を食べさせて下さい」

と云ふかと思ふと、或る時はまた

「林檎とバナヽをね、宅で皮を剝いて、半紙か何かに包んで、そッと持つて來て下さい。看護婦さんの居ない時に、樂んで食べますから、明日は乾度ですよ、え、忘れない樣にね」

と云つて、何の位私を困らせたか知れない。お粥も食べさせて遣りたかつたし、果物も持つて行つて遣りたかつたが、如何にお前が不憫でも、私にはそんな愚な無謀な眞似は出來なんだ。

「果物を持て來るのも、お粥を食べさせるのも、何でもない事だけれど、今は最も大切な時だから、そんな物を食べては不可いさうだ。牛乳でも、スープでも、おも湯でも、病院で出す物を飲まなくては、第一身體が弱る一方ぢやないか。厭でも辛抱してね、自分の身體のためだと諦めて飲まなくては不可いよ。病氣になつたんだもの、その位の辛抱がなくては、困るぢやないか」

私が斯う云ふと、お前は頭を二三度橫に振り動かして、子供の樣に聲を立て泣いた。

「お父さんは薄情だから、妾の云ふ事を聞いてくれない。厭です、厭です、厭です」

腸窒扶斯患者の我儘を可愛相だと思つて、醫師に隱

れてパンやカステラを食はした爲めに、輕症の患者が瀕死の事態に陥つた事や。恢復期に向つた患者に、茹卵や果物を食はした爲めに、遂に死亡したなどゝ云ふ前例を知らなかつたならば、私もお前に果物を持て行つたてあらう。そして其の喜ぶ顏を見て、私も何の位喜んだか知れなからうに、なまじ恐しい前例を知つて居ただけに、お前には怨まれても、私は甘んじて「薄情な良人」になることが出來た。

そんな風に、お前に我儘を云はれる度毎に、私の心は掻きむしられる樣に苦しく悲しかつた。明ら樣に腸窒扶斯だと云つて了へば、自分の病氣に就て何の自覺も無いお前ても、少しは合點し諦めて、我儘も云はず藥も服むし、滋養物も食べたてあらう。然し、氣の弱いお前に同じ病氣で一ヶ月前に死んだ睦さんの事を思ひ起させて、「妾も睦さんの樣になりはしないか」などと心配させるのは、私の忍び難い苦痛てあつた。

「我儘を云つては不可い、お前ばかりてはなく、此の隣の室には、逹さんも入つて居るし、哲ちやんも入つて居る。十二の哲ちやんが、何も彼も承知して、可愛相に、我儘も云はずに辛抱して居るのに、お母さんのお前が、そんな我儘を云ふとは何事だ。それに逹さんは八歳の弟てあるのに、淋しいとも何とも云はず、看護婦さんも温順いお子さんだと云つて、感心して居る位ぢやないか。二人とも別々の室に入つて、お父さんかお母さんかの附添がなくては、淋しがつて泣く齡てあるのに、能くも辛抱したものだ。二人の子が不憫だと思ふなら、自分の病氣位は我慢して、我儘を云つては不可いよ」

斯う云つて、お前に我儘を云はせず、厭な牛乳もスープも飮ませ、嫌な藥も服ませるのは、何ても無い事てあつたけれど、腸窒扶斯病てある事さへ知らせなかつた私が、何うして子供二人の病氣入院の事を語られやう。お前を責めるのてもなく、お前に誇るのてもないが、たゞ心配させまい、神經を起させまい、安んじて治療を受け、一日も早く全快させたいと思へばこそ總の事を秘し隱したのてあつた。そんな事とは知らう

筈の無いお前が、生れて初めての大病のために、苦しみ悶えて我儘を云つたのは、眞に無理の無いことで、可愛相なとも不憫なとも思うたが、其の間に立つて、憂愁に沈んで居た私の苦しさ、遣る瀬なさは何んなであつたらう。

病院へ行つて、お前の顔を見るのが苦しくなつた。病院へ行つて、哲ちやんや達さんの姿を見るのが悲しくなつた。妻子三人、枕を並べて重病に惱んで居るとの事實は、私一人の受くべき負擔としては、餘に重く餘に痛ましく餘に慘酷ではないか。人情と云ふものが無かつたならば、世間體と云ふものが無かつたならば、道徳と云ふものが無かつたならば、私は若干の金を懷中にして、此の悲哀の境を出て、此の苦痛の家を逃れ、此の暗黒の鞭を脱けて、歡喜を追うて行つたであらう、快樂を求めて走つたであらう、光明を探ねて急いだであらう。

大阪に居るお前の實弟、渡邊新太郎君に電報して、其の上京を促したのは、十六日の夕暮であつた。醫師が何と云つても、看護婦が何と勸めても、私が何と叱つても、堀君が何と說いても、滋養物を吸收しないお前の容體は、日一日と險惡に傾く一方であつた。せめて大阪の新ちやんでも來て、血を分けた肉親の弟の口から、事由を盡して話して貰つたなら、藥も服むやうにならうし、滋養物も食べるやうにならうと思つて、それで電報を打つたのであつた。一つには、お前や子供のために憂ひ、お前や子供のために悲しみ、お前や子供のために苦んでくれる人を、私自身の他に求めて、此の背負ひ切れぬ重荷の幾部分を、其の人の前に投げ出したい爲めでもあつた。

お前一人だけの何では無いもの、一時は何うしやうかと、全く途方に暮れてしまつた。

十、あゝ四の二二へ

「汽車中でも、新聞廣告を注意して見ました。若しや死亡廣告が出てるのや無いかと思ひましてなア、ほんまにえらい心配しましたわ」

新ちやんが來てくれてから、私は何の位力強く思つたか知れない。俊坊は最う堀君に馴れて了つて、御飯を食べるにも、風呂へ行くにも、寢るにも、起きるにも「叔父ちやん、叔父ちやん」と云つて、能く遊びもしたし、能く食べもしたし、能く眠りもした。

「それでも、俊坊が堀さんに馴れてますから、餘ッぽど容易てすなア。この子にお母ちやんお母ちやん云はれたら、ほんまに何ないしまんね」

新ちやんを初め、大阪のお父さんや叔父さん、姉さんや妹達も、お前の病氣に就ては、一方ならぬ心配をされたさうな。新ちやんと私とが、お前を見舞に行つた時、お前の喜悦は何んなであつたらう。

「松崎さんも種々心配してはるさかい、しつかりせんとあかへんて……。そら病人やさかい、藥も美味ないし、牛乳やかて何やろけど、辛抱して飲みなはれや。可愛い男の子が三人も有るのやないか、姉の身體やかて、姉一人の身體や無いて……。氣丈夫に持つといて、治る、治る、直き治る、大阪のお清(姉)ちやんやかて、あんな大病が全治つたやないか。氣の持ちやう一つやさかいな、何も心配することあらへん、厄年も糞もあるかいな、そんな弱いこと云ふさかい、こんな病氣になつたんやがな」

斯う云つた新ちやんの言葉には、姉を思ふ弟の誠心が籠つて居た。お前は嬉しさうに、

「まア遠方を難有う、三十三の厄年やもの、死ぬるかも知れませんと云ふと、お父さんは、馬鹿そんな事があるものか、今度の病氣か厄落しだと云ふの。ほんとに厄落しやらうか、新ちやん、大阪の皆にまで心配をかけて、ほんとに濟みませんねえ」

と云つて、淋しさうに笑つたが、其の笑顏を私は今に至るも忘れることが出來ない。隣室の哲ちやんや逵ちやんも、新ちやんの顏を見て、

「大阪の叔父ちやんが來た、大阪の叔父さんが來た、叔父さん、何時までもおいてよ、ね、ね」

と、何の位喜んだか知れなんだ。

新ちやんが來る前から、堀君と相談した居た移轉の

話が新ちやんの上京と共にまた持上つた。お前に「轉宅しやうと思ふ」と云つたら、「入院していろ〳〵金が要るのに、移轉なんかしなくても宜しい」と云つて居たが、お前は賛同しなくても、私は至急に轉宅を斷行し樣と決めた。お前や子供が傳染病に罹らぬ前から、最少し室數のある家へ轉宅したいと思つて居たが、最う愚圖〳〵して居る時では無い。兎に角、忌はしい病人を相次て出した「チブスの家」から、一日一刻も早く逃れ出て、鬱々した氣分を一掃しなければ、私は安心して寢ることが出來なんだ。

轉宅するにしても、哲郎や達郎の學校の關係があるので、青山南町四五丁目の間を探した。思へば三十九年十一月上京して、赤坂一ツ木町に一年半ほど住て後、青山南町五丁目五番地に移つたのは、四十二年の夏も暑い盛の頃であつた。足掛五年も住て居れば、たとへ其の家が粗末で狹くとも、家そのものに對する種々の思ひ出が生じて、いざ轉宅するとなれば、何とも云へぬ一種の哀愁を覺える。殊に長い間には、近所四隣にも馴染が出來て居るし、界隈の空氣にもシックリ同化して、「第二の故郷」と云ふ樣な親しい感が起きて居る、そんなに思ひ出の深い家、そんなに馴染の淺からぬ土地を離れて、お前の知らぬ間に、お前の知らぬ新しい土地に移り、お前の知らぬ新しい家に住むのは、如何にも心無い事であるが、家でも轉じて生活の外形なりとも一變しなくては、何を思ふにも何を爲るにも、到底、遣り切れさうもない有樣であつた。

青山南町四丁目二十二番地に、二階建五室湯殿付の空家が在つたのを幸ひ、早速借用の約束をした。上方風の妾宅擬いの建方が、何となく厭だけれど、二階は八疊と三疊で、冬は日當りが好く、夏は風通しが好さ相なので、辛抱する事にした。敷金も從來の倍以上要つたし、家賃も今までよりは高いけれど、そんな事を彼是と云つて居る時ではなかつた。

「鬼門には當つて居ないが、四丁目二十二番地の四二二が厭だ。三人も病人があるのに、死にに行くのは何だか變ぢやないか」

氣も心も屈托して居る時には、こんな愚な御幣までも擔ぐ様になるものか。

「そんなこと云うたら、四丁目二十二番地に居る人は皆死なにやならへん。構ふことがありますかいな、四と二二が續いてるのや無いいし、しと讀まずによと讀んだら何うだす」

新ちやんも斯う云ふし、堀君も

「そんな馬鹿な事がありますもんか、鬼門でさへ無くば、宜いぢやないですか」

と云つたので、いよ／＼十月二十日、私と堀君と人夫二人に、新ちやんと安田さんの弟とが手傳つて、今住て居る此の家に移轉した。「子供があるから二階家は厭だ」、とお前は能く云つて居たけれど、建物もさう粗末てはないし、楷段も急斜面には爲つて居ないので、俊坊も此の頃は一人て昇降して、朝寢の私を驚かす様になつた。

哲ちやんや達さんには、二階の日當りの好い家に移つた事や、四角な据風呂を買つた事などを話して、退院後の樂みにさせて居るが、お前には家を轉つた事までも、病氣に障るのを慮つて知らせなんだ。たゞ退院して歸つた時に、「何時の間に轉宅なのです」と吃驚させやう、「好い家がありましたね」と安心させやう、「まア据風呂まで買つて」と喜ばせやうと、其の日その時が來るのを、私は何んなに待つたであらう、何んなに待遠しく思つたであらう。

けれども、待設けた其の日が來ない間に、待設けもせぬ十一月十一日が來た。待設けた其の日は、終に永遠に來らずして、夢にも現にも、待設けなんだ十一月十一日が、松崎一家の上に來た。松崎市郎と云ふ、暢氣と云はれ、頓興と笑はれ、多感と憫まれ、放縦と罵られた良人を遺して、其の日、午前六時二十分、お前は妻としての生涯を終へた。哲郎、達郎、俊郎と云ふ行末長い三人の幼い子を遺して、其の日、午前六時二十分、お前は母としての生涯を終へた。

あゝ、四の二二へ、轉居するのではなかつた。――

――大正二年十二月一日、お前の三七日の夜六時より記し始めて、翌朝六時に記し終る――

新年の家庭學校を飾る大日曆

學校家庭 日曆

四六倍判新式装釘
毎日鮮麗珍奇の
寫眞版挿入
定價金七拾五錢
送料申し受けず

此日曆は富山房の新しい試で、その體裁は獨逸國に有名な大日曆に標つたものでありますさうして我邦の家庭學校の實用に適するやう斬新な考案を凝したものでありますその特色の二三を吹聽しますならば古今東西歴史上の事蹟、偉人賢哲の逸話等を日々に掲げて鮮麗珍奇な寫眞版を加へて説明してあるのは特に誇るべき點であります。なほこれ迄のカレンダーに有りふれた七曜、大祭、干支などの事はいふ迄もなく月齡、時令、季節料理、種蒔、栽培、古哲金言、和歌俳句その他いろいろ面白い記事を掲載しました。各種の點に於てこの位行届いたアップツーデートのカレンダーの出來たるは我邦の家庭や學校の喜でありませう。現在作年のクリスマスや年末の贈答品に『本當に氣が利いてゐる』といふ感謝の言葉を獨占したのは實に日曆であります。

(大正三年) ポケット 大正日記

定價十六錢
郵稅二錢

●これ亦年末の贈答品として氣がキイテ體裁がよく實用向でこの位人に喜ばれる物はありますまい。

日記界始めての新形を具へた日記、和服にも洋服にも適した實際便利至極の懷中日記、用紙は舶來上質、製本は最上更紗のシナヤカで高尚で氣がキイテゐます。

年頭の最良贈物 ●家庭學校訓話の絶好資料

(中付四の一)

發行所 東京神田 (振替五〇一番 電本四一〇三六) 合資會社 富山房

澁川玄耳先生著

新刊發賣 藪野椋十 鈍語

最近我儘の一篇を著はして讀書家の度膽を拔き併せて出版界を震駭せしめたる玄耳先生は、今度更らに本書を公にするの任を弊堂に托せらる。縱橫無碍に斬捲くる筆鋒の鋭さは世既に定評ありて茲に喋々を要せざる可し。此書果して鈍語なりや或は叉痛快極まりなき鋭語なりや敢て江湖の批評を俟つ

裝訂意匠 名取春僊畫伯
中判總クロース製函入美本
紙數三百五十
定價金壹圓
郵稅八錢

增補縮刷特價 藪野椋十 世界見物

三六版特製函入紙數六百餘頁、裝訂及見返シ春僊、口繪及挿畫不折、未醒、春僊、孟郎、樂天の諸大家、外寫眞版澤山、定價金一圓三十錢送料十錢 特價金壹圓拾錢

好評如湧 賣行如飛 六版 藪野椋十 わかまゝ

中版洋裝紙數三百五十
定價金壹圓
送料金八錢

玄耳先生最近の著遠處勝の世の中に痛快を極めたる我儘勝手の時事評論、天下一品の快著、發行後未だ幾何もならざるに既に六版を重ぬ

增補改裝 藪野椋十 日本見物

（內容）
東京見物
鎌倉見物
京都見物
奈良見物
大阪見物
朝鮮見物

挿畫 春仙 百穗 柏亭 畫伯

三六版洋裝函入紙數五百頁、裝訂及見返シ春僊畫伯案
定價金壹圓
送料金八錢

發行所 東京神田區錦町一丁目十九番地 誠文堂書店 振替貯金口座東京六二九四

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新年雜誌界の權威＝論壇文壇の偉觀

大隈伯爵主宰

新日本

▼新年號 本號に限り四十錢郵稅三錢普通號郵稅共廿八錢五厘 三月分八十四錢半年分一圓六十五錢一年分三圓十八錢

財政整理の根本的方針を論ず 大隈伯爵

▲對支外交の根本義……永井柳太郎

▲教授棄場論……樋口龍峽

▼政治的氣象論……竹越與三郎

▼墨國の時局と日本人……高橋法學博士

▼御即位式畫物語……辻博士

▼國家主義に祟られたる日本……高橋秀

▼日本郵船會社の事業と人物……鎌田榮吉

▼東洋汽船會社の事業と人物……佐藤紅浪

▼日本人の南米發展……次郎冠者

▼ロイドジョージ……戸田海市

安部磯雄

▼歐米に於ける戴冠式見聞錄……山崎直胤

▼國民的大祭設定の議……有賀博士他諸家

▼文人の見たる政治界時人論……秋聲、三重吉、信綱、紅綠、綺堂、白星、仙潮、天外、霞亭、南翠、紫紅、下村宏、角田浩々、安部磯雄、煙山專太郎、高島米峯、若宮卯之助、吉野臥城

▼歐米に於ける勞働者の自助運動……小野義一

▼ニイチェ論……生田長江

▼新女優論……楠山正雄

▼婦人職業問題……平塚明子

▼大隈伯九州巡遊記……高踏生

▼現代各方面に於ける新傾向新運動 土方伯、江木、加藤、岩村諸氏

▼世界思想 其他數十件

新年附錄

▼小說一篇……森鷗外

▼小說 赤い郵便函……上司小劍

▼小說 第二蒟蒻本……泉鏡花

▼小說 左樣なら……巖谷小波

▼史劇 仲麿……小山内薰

▼小品 昔ばなし……田村とし子

發兌 東京神田裏神保町 富山房 振替五〇一一番 電話本局四一三〇

(中付四の三)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◀◀泰西文學の寶庫▶▶

善良なる家庭の最好讀み物

文學博士 坪内逍遥先生校閲

世界文學物論

袖珍美本装幀堅牢　七百八十四頁　定價壹圓廿錢　郵税拾貳錢

世界の日本國民として、現代の教育ある紳士淑女たらんとするものは、一通り泰西文學の嗜無かるべからず。然るに其の名著傑作の名のみ知られて、其の實質の味はれざるは好適なる譯述書の無きによる。本書はこの缺を補はんために、世界に名だゝる傑作中の萃を選び、各編者の腦裏に消化し、更に特有の筆致を以て其の精髓をなだらかに書き流したるもの、何人も讀んで原著の面影に接し、感興極りなきの好讀物、青年學生に取りては、課外休暇の唯一伴侶たり。

收容書目

- ミルトン 失樂園物語　繁野天來先生編
- 沙翁 マクベス外二篇　杉谷代水先生編
- イリアット物語　正宗白鳥先生編
- バイブル物語　中村春雨先生編
- モリエル（燥急漢 人嫌ひ）　繁野天來先生編
- イブセン（ブランド ギント）　坪内鋭雄先生編

發兌元　東京神田（振替五〇一番 電本四二〇三六）　合資會社 富山房

（中付四の四）

新聞總まくり

澁川玄耳

こんな仰山な標題でなく、新聞に對する雜感を書く積であつたが操作が出て了つたから致方ない。主たる材料は大正二年十月廿一日より廿七日に至る全國二百餘種の新聞である、此が調査並に諸多の事情の探究に就いて、友人阪元雪鳥上野一也兩君を煩はし、本篇の若下部分は兩君の起稿に係る、三人共著ともすべきであるが其も又業々しいから此に其旨を斷るに止める。

自ら新聞事務にたづさはつて居た間は其日〳〵に追はれて、新聞界全體に關する問題などは滅多に念頭に浮ばない。休みの日、旅行の際などに、纔に批評家になる位のものである。『病によつて閑を得る也た惡しからず』とかて、病牀に在ること數旬にも及べば、全然讀者の地位になつて、しみ〴〵新聞の將來など考へることもあつた。

そこで、新聞記者には一年に少くとも一二月全く實務を離れて休養をさせ讀書を爲せる外に、此の局外的批評を逞うせしむる爲め讀者の地位に置くことが亦た太だ必要であると感じた。

自分は全一年新聞社を離れてゐるが將來出來得可くんば、自ら一新聞を思ふさまに經營して見たいといふ希望を有つてゐる。て、此迄從事者たりし經驗と現在の讀者たる感想とをちやんぽんにして筆に任せて書き列ねて見よう。

▲非難多き新聞

有識者具眼者と言はるゝ程の人は概して今の新聞を非難する。主人自ら讀む可き新聞も、子女に讀ますべき新聞と共に適當なものが無いと攻撃するのである。

では、どう言ふ點が惡いのでせうと伺つて見ると其攻撃點は區々で、或は記者の無學、下劣、貪欲を數へる。まづ其一々に就いて考へて見よう。

記者の無學を攻撃する人にも二種ある、新聞に現れたものに就いて、學問的に見て内容と文章との誤謬とを氣付いた人と、新聞記者の訪問を受けて問拔な質問を受けたり其談話の筆記が間違つて居たりするので新聞記者を攻撃するものとがある。訪問記者は各社共に二流以下の者を驅使する場合が多い、之を以て新聞記者の代表的と速斷するのは受訪問者も輕卒だが、新聞社の方も出來得るだけ人選して其向き〳〵に立派な人を向ける事に改めなければなるまい　二流以下の者を遣はす場合にも指揮者にして少し注意を拂へば今少しへマサ加減を少くすることも出來る。併し新聞記者が或る專門の事項に疎いからとて直に無學無識なりとして受訪問者が輕蔑するのも無理だ、新聞記者には或一科の學問に就いて相當の智識を備へた者も少くないが時と場合で人繰りの已むを得ぬとき、文學者を法律上の事項に就き——工學者を農政上の事項に就いて訪問させる場合もある。問答中トンチンカンを生ずるも免れ難い事である。此んな時には記者の方でも知つたか振をせず丁寧に承ることゝし、受訪者の方でも少し親切に注意して話してやれば、專門的の事と雖も或る點迄は常識で理解されるものである。其れに加へて編輯者が平生百科全書に親しんで大間違ひの無い樣な見當を有つて居れば、刷り上つた新聞に餘りヒドイ馬鹿なことは免れ得られるものだ。

記者の下劣を攻撃するのは、記者と接觸する側のいふ事である。此も第二流第三流と下るだけ外部の接觸が頻繁であるから起るのである。新聞社に限らず、下級には上品な人が少いもので致方が無い、特に困るのは今の新聞經營は甚だ財政困難で、他の官廳會社などに比して俸給が少い、高士義人はかりを集めてある譯てないものだから、窮して濫する記者も幾分か多いのであらう。吾等の見聞、徴すると記者が下劣を働きかけるより先方から働きかけられて下劣に陷る場合が多い樣に思はれる、近來新聞の勢力が一般に認められて來て、記者買收、記者籠絡といふことが激しくなつた樣だ、記者の操守は今後益々困難を加へるであらう。

記者の貪欲も之と同じ原因から生ずる。誘惑の爲めに墮落して、遂には働きかけるまでに仕上げられて了ふ氣の毒な記者も多い。新聞社員が金錢關係に依つて雇はれる主因は別に又有る、即ち廣告勸誘である。廣告勸誘には極端な手段が屢弄せられる、其勸誘員は普通に、記者よりも尙ほ無學で下劣で貪欲な手合が多くて、年一年と其醜惡が甚しくなつて來る。廣告に關しての卑策陋習は項を改めて記さう。

▲猥褻と誹毀

新聞の攻擊せられる個條はまだ澤山ある。其一は猥褻な記事の多い事である。

如何にも日本の新聞には猥褻の記事が多い、此點に於ては支那の新聞にも劣つて居る、藝者女優の情事が麗々しく書かれて居るし、姦淫の顚末が事細かに報ぜられて、親子の間に顏赧らめる事が殆ど毎日の樣である。併し世間のお歷々の方すら唯今の處甚だ猥褻であらせられて而かも之を口にして憚らせられぬ間は此種の記事は當分絕滅しまいとおもふ。若し家庭の風儀が肅清せられて苟も猥褻記事の載つて居る新聞は「明日より配達御斷り」と御門に貼紙をなさる樣であつたならば、新聞の方で何も讀者の減少を冒して藝者女優の記事を載せるほど熱心な筈は無い。攻擊する程の紳士ですら「ウン出て居たか、どんな事か。」と聞きたがられるのだから駄目だ。

人身攻擊の記事の多いことも亦日本の新聞が紳士に依つて非難せられる點である。之も日本の現代の風尙が誠に下品で、人の美を濟すことを喜ばずして人の惡を訐くことを好み、平氣で他人の秘事密事を曝する傾きがあるから、其れに材料を供給する新聞が人氣を有つのである。斯ういふことは社會の反影であつて强ち新聞をのみ尤めることは出來ない。

併し之を矯正することは摯實なる風儀を作る爲め極めて必要である、家庭でも學校でも濫りに人の非を語ることは戒めねばならぬ、心ある新聞記者は此の意を體して弊風の排除に助力せねばならぬが、其より何より肝心な司法官が奮起するが一番捷徑である。

現行の法律に於ても猥褻な記事や誹毀の記事は制止すべきものである。特に誹毀罪に關しては歐羅巴に劣らぬ嚴重な法文があるに拘らず、誹毀の告訴の起つた場合に、我が裁判官は甚だ被告に寛大であつて告訴者に對して同情の念が薄い。名譽上の損害は被害者に取りて死よりつらい場合が有るものだのに、我國に於ける判例の課罰は甚だ輕く、賠償金額も甚だ少い。外國に於ては名譽毀損の賠償として五萬十萬の支拂を命ずるのは珍しからぬ事である、彼に比して我が國に於ては極めて猛烈露骨重大なる誹毀が連日起りつゝあるけれども若し一萬圓の賠償を請求して、迚も之を認めてやる裁判官は有るまい。此んな場合に日本の裁判官は恐ろしく被告の懐加減を酌量して甚だしみたれた直切りかたをする慣習てある。誹毀記事の連載せられる場合に之が續行を防止した例が幾何あるてあらうか。若し此の例を毆打の場合に替へて見たが好い、一つ現に毆つて尚ほ續けて打たんとする暴漢を制止せぬ警察官や檢事が何の頼みになるものか。

若し、ビシ／＼裁判所が誹毀事件に重刑・重賠償を課する樣になつたら、新聞社は一縮みになつて了ふ事恰も歐米に於けると同樣なるべく、延いて社會一般に妄りに人を誹毀せぬ良風を促進することも出來よう。新聞社といふものは他社に載せられた記事が自社にのみ脱漏するのは恐るゝけれども各社一統に載せられぬとなると一向平氣なものだ、埋草は幾何も出來る、却つて新方面の開拓に勉めて新聞の發達を催かすてあらう。

▲賣れない新聞

上品な新聞を欲しがつて居る人も隨分ある、去りとて此人々の好尚に適する樣新聞を作つたならば、今の東京て到底三千とは賣れまい、一枚賣り十錢一月二圓としても實收入五千圓には上らぬ、賣高が少いから到底廣告料が千圓に上らぬ、合計六千圓以下の收入て碌な新聞が出來よう筈が無い、材料があがらぬ、どうせ面白くない新聞に極つてゐる、折角上品な新聞を欲しがつてゐた人も開いて見る氣遣は無い、慈善の爲め新

聞を購讀する者は少いものだから、到底維持は出來ない、維持しても何の勢力も無い徒勢だ。

やはり俗な新聞でなければ成り立たぬ。唯それにしても今の新聞よりは少しばかり行り方に考へる餘地が有りさうなものだ。今の俗惡の甚しく尖つた部分をちよい／＼角を圓めて、善良なる風俗の指導へと少しばかり舵を向けたいものだ、各社が歩調を揃へたなら數年にして化導の效が擧るてあらう。たとひ一社にもせよ之に盡したなら相當の功を成すてあらうと思ふ。

別の言葉を以ていへば、人氣を窺つて其の人氣に投じようといふのが今の新聞經營家の狙ひ處だ、併し之ては何處までも人氣の尻を追駈けるもので上手なやり方に過ぎない、未だ以て名人高手の着眼といふ事は出來ない。新聞に限らず多數を相手とする仕事では到底人氣を無視するわけには行かない、併し人氣は立つのを見て追駈けてばかり居ずとも、人氣を誘ひ、人氣を立て、人氣を導くことも出來る。同じく人氣を重視する中にも人氣の後に付かず、人氣の先に立つことが出來る筈である、人氣の後に附くものは人氣の趨く所に狂奔せねばならぬ、人氣の是非正邪を選んでは居られない。人氣の先に立つ者は己の欲する所に人氣を導き去ることが出來る。新聞事業を以て社會の木鐸だの何のといふには此の人氣の先きに立つことが出來無くては空言である。其れには大なる覺悟が要る、洗練されたる人格が要る、不斷の勇猛心が要る、堅固なる操守を必要とする、卓拔なる見識泰然たる態度が缺く可らざるものである。

さういふ人は昔から拂底だ、なか／＼新聞屋なんかに爲るまい、新聞はやはり俗惡なる商品と化し去るの外はないか。

▲迂濶なる外國通

新聞の批評を爲し、新聞の攻擊を爲す人は大抵外國智識を有した人て、其批評は多く歐米新聞に較べての不滿である。處が此種の批評も隨分見當外れが多い。どうも日本婦人の服裝はじみて可けない、日本の食物には肉類が不足だと攻擊する類のものである。何故日

本の新聞が西洋のと違つてるかの理由を知らないのである。此の手合が西洋式を丸寫しにやつた新聞に成功した例は先づ無い、一時は有つたとしても持續しない。

亞米利加の新聞を見慣れた人は、彼地の新聞が遊戲勝負事の記事に多くの紙面を費すのを見て、日本の新聞も亦宜しく彼が如くならざる可らずとし所謂運動記事を獎勵して見る、併し其は日本では駄目だ、少くとも此處數十年は駄目だ。日本人の衣食住の狀態から考へて、彼地の樣に運動が必要でない、少さい時から慣らされて居ない、普遍的な國民遊戲といふものが無い、勝負事を卑む風がある、日本人は成人と子供とが一緒に遊ぶことを好まない、女がはしやがないから人氣が立たぬ、日曜日の習慣が違ふ。此外考へればまだ〳〵幾何も運動の盛ならぬ理由があらう。

佛蘭西の新聞を見慣れた人は、彼地では新聞の最も重要な面に大きな見出して堂々と相場記事が載つてある、日本では株式なんかの記事は小さい字で不景氣な面に押込めてあると不平をいふ。是も佛蘭西と日本と雙方の國情を考へ合はせぬからのことだ。佛蘭西は歐羅巴一等の勤儉貯蓄國だ、子供を生まない工風をして資本を溜める國だ、利息勘定に巧者な國民だ、斯樣な國では公債や株券の上り下りといふ事は、利害關係を感ずるもの丶多い興味ある問題だ、新聞の種として最も尊重せらるのは當然だ、日本は貧乏國、金貨本位國て一生金貨を見ない國、株券債券公債證書などを有つてる者が新聞讀者の百戸に一戸もあるものでない。其よりは九星判斷が新聞政策としては重要記事である。

此んな類は、廣告にも、論說にも、小說にもある、歐米の新聞の例が矢鱈に日本に當てはまるもので無い。例へば支那の新聞て、日本の新聞を學んて見たとする、到底可けない、傍訓の無い支那新聞は日本の如く無學社會には讀まれることが出來ない、隨つて採錄する事項が日本の新聞を其のまゝは眞似られない。地方の新聞が東京の新聞を眞似るのにも鵜吞みの不消化なのが屢々有るやうだ。

新しい新聞を作るには日本の現狀を知悉することだ。

▲急激なる變遷

考へて見ると大昔の樣な瓦版や讀賣もつい四五十年前のことだ。其四五十年間の最も手近な十年前の日露戰爭當時の各新聞を披いて見ても、間拔切つた此んな新聞だつたかいと吃驚させられる。工夫に工夫を凝らして居るつもりの今の新聞も、又十年經つたら、やはり、こんな新聞だつたかいと吃驚させられるだらう。醫學は進歩が早いの、經濟書はすぐ古くなるのといつて、新聞くらゐ進歩の早いものはなく、新聞ぐらゐすぐ古くなるものはあるまい。日に變る、月に變る、年に變る、時には又或時期を劃して革命的に大變化大進歩をする場合もある。さういふ時だ、世の物識りと黑人仲間の多數は、一二先鞭を着けた新聞を目して、あの新聞は近來墮落して來た、調子が變になつて來た、血迷つて來たと甕味噌にいふ。焉んぞ知らん、夫子又一二年後には、世變調子を尊び、好んで血迷ふに至らんとは。

最近に於ては日露戰爭一寸前、此變調子血迷ひの革命時代があつた。爾來十年を經た。モウそろ〳〵新なる革命があつても好い時分だ。

今の新聞の書く事、書き振には、讀者はモウかなり飽いて居る。心ある黑人仲間は更に〳〵飽き〳〵して居る。讀者はも少し眞面目な、モ少し實のある、そしてモ少し面白い新聞を見せて呉れといふ。心ある黑人仲間はモ少し變つた、モ少し新しい、モ少し書き榮のする新聞を作りたいと焦慮つて居る。此要求と努力とが結合凝固したものが何かになつて現はれて來ねばならぬ。そして何になるかに早く着眼し、早く覺醒し、早く幟をあげた者が、來るべき時代の勝利者になる。

言論を新聞の唯一生命とした言論偏重時代に、一日早く古裝を脫ぎ捨てゝ、通信機關の完備に全力を傾倒した朝日は當時の勝利者であつた。政治記事偏重時代に、一朝目覺めて、當時三面記事と蔑まれた社會記事に一社の主力を注いだ報知、國民は又當時の勝利者て

あつた。と同じく今雲霧混沌たる中に吾船の正しき針路を見定め得るものが來るべき時代の勝利者、時代の寵兒となるのである。

▲深みを要す

新聞通信機關の發達に依つて、吾々は今かなり廣く、又かなり早く世の出來事を知り得るやうになつた。併しながら、單に廣く知り得るとばかりでは、モウ吾々には滿足しにくゝなつて來た。早く知り得るといふことは愉快なことには相違ないが、其が噓であつたと後に知るに及んで、曩に愉快であつたゞけに層一層不愉快の種となる。挑發的に巧に揑ねあげられた記事は一時、恰も吾々が幻想に依つて得るが如き一種の感興を享け得るには相違ないが、醒めての後其馬鹿々々しさを感ぜずには居られなくなる。時には甚だしき惡感を催さずには居られないこともある。

讀者はモウ五人殺事件といふやうな記事を多大の興味を以て讀むことが出來ぬ。刑事が八方に驅けたり虛の犯人が捕つたり、眞犯人が巧に逃げ果せたりした、といふやうなこと、平々淡々たる記事を二段三段一頁に渉つて細叙連報して與れても、外に吾々の根本要求が充たされぬ以上、其はたゞ吾々をして嫌厭と煩はしさを感ぜしむるのみだ。鹿兒島縣に十人斬があつても、たゞ十人斬があつたのみでは吾々の感覺はピクともせぬのである。廣さを有つのみで深みを有たぬ記事は讀者を動かすことの弱いものである。

全部を書く事、精しく書く事、早く報ずる事はリポーターの職務である、此の諸多の材料を取捨選擇することは編輯の伎倆である。今の新聞紙は史料編纂委員の樣なやりかたを重大なる役目として居る。或は廣からず、精しからず、早からずとも可いから、或一事件に就いても一個の見識に依つて統一されたる書き方をして與れねば駄目だ。資料の排列では讀むべき歷史は出來ない。

警察記事にしてもだ。單に『某は人を殺したり』『某は詐欺取財の罪に依つて懲役何ケ年に處せられたり』とだけでは某と社會人生との間に何等の關係交渉も見

出すことが出來ない。社會人生との交渉なき記事は、門前の婆子が屁を放つた程の興味もない。要不要の無い記事である。まして其捕はれた狀況や、逃げた顚末や、吾々には何等の知る要なく、少しも興味を起さしむるの要件で無い。

よく毎日の新聞記事中に斯ういふ文句がある『性來手癖惡しく云々』『家庭の不和にて云々』『病苦を苦にして云々』『夫の酒癖を苦にして云々』極めて無雜作に觀察され、若くは一顧晒だに拂はれず、たゞ漫然と書流されて居る。斯うして無雜作に取扱はれて居る點に事件と社會人生との深い大きい交渉關係が潜んで居るのではあるまいか。事件の主眼點は寧ろ彼にあらずしてこゝに在るのではあるまいか。單に興味といふことのみを以て觀察しても記事の山はコヽにあるのではあるまいか。犯人の逃げたり、捕つたり、處刑されたりしたことや、刑事の苦心談や、畢竟附錄景物で、眼目は從來閑却され、看過され、書流しにされた此點にあるのではあるまいか。

要は事件と社會人生との關係交渉の深淺輕重が記事の大小輕重とならねばならぬ。事件の內部に深く鋭く立入つて深刻精緻に觀察解剖された記事で無ければ、今後の讀者は滿足せまいと思ふ。其をせぬ位なら、竊盜何件、强姦何件と統計を擧げた丈で足りる。

▲新聞の態度

一個の先生には一個の態度が無ければならぬ。新聞にも亦然り。今の新聞には全紙を通じた人格の支配が無い、社會といふ大舞臺を對手とする態度の統一が缺けて居る。亂調子で行き當りばつたり其時其場合の出來心といふのが多い。政黨が騷げば新聞も騷ぐ、警察が刑事を八方に散らせば、新聞も記者を八方へ飛ばせる。犬が吠えれば新聞も吠える。狆が噓をすれば新聞も噓をする。要するに材料の出所の重大事件とする所のものは新聞も亦重大視し、たゞ材料供給者の態度進退に追隨して、はぐれまいが精一杯である。無論多くの場合に於て、政黨の重大事件とし、警察の大事件とする所のものは、新聞としても亦た重大視し得べき事件

てあらうが、又必ずしもさうで無く案外詰らぬことゝて騒いで居る場合が有るといふことに氣付かねばならぬ。と共に普通に小事件小問題として閑却看過されたものゝ中に、新聞としては極めて重大視せざるべからざる好材料が潜在して居ることに格段の注意を拂はねばならぬ。記者も今より精選されねばならぬ、組織が一層工夫されなければならぬ。

▲無用なる硬派軟派の別

例を市政記者に取つて言へば、東京には市政記者と稱して市役所に出入する新聞通信記者(政治部所屬)が約三四十人程ある。此三四十人中眞に東京市を理解し研究して居る者は極めて少數に過ぎまいかと思ふ。市會議員の黨爭とか、議員と營利會社の結托とか、役所内の暗流とか、さういふ事柄には、相當に頭を絞り、眼を光らせ、隨つて表裏の消息にも通曉して居るが、肝心の東京市其ものに就ては甚だノンキデて、一般市政のことにすら通じて居ない。市豫算の内容如何と問ふて立所に解答し得る者が何人あらうか。豫算の總額をさへ知らぬ者が多いといふ。況して市民生活の眞相、之と市政現狀との關係とかいふ問題に對しては寔に疎濶に打過ぎてゐる。が其は兎も角として、渠等の日夕出入する市役所には、渠等の所謂市政記事以外、觀察すべく書くべき記事は山程ある。特に所謂三面記事として渠等の書くを屑しとせぬものゝ中に興味あり、價値ある材料(假に都市記事とでも名付くべきものか)が隨所に轉がつて居る。近來東京朝日外一二社が所謂市政記者以外一二の社會部記者を派して材料探索に當らしめて居るが、兎角社會部記者は一般市政に通ぜず、所謂市政の裏面消息にも疎く、書く手はあれど、觀る眼なく頭なく、興味ある問題を空しく逸失しつゝある憾がある。兩者共に不具である。

要するに新聞の發達と共に、此無用有害なる硬軟區劃の扉は先以て撤廢せねばならぬ。財政記者も軍事記者も市政記者も警察記者も、硬なく軟なく、たゞ獲たる材料次第に如何樣にも書くべきである。要は如何に觀察し如何に記述すれば、興味あり價値ある記事たる

へきかと問題である。硬派記者軟派記者なる區別は日本に於ける特殊なる歷史的のもので決して興趣多き新聞を作り得る所以ではない。況んや同一の材料出所に二重三重に人を派することの新聞經濟上尠なからざる不利あるに於てをや。手不足勝の地方の小新聞までが依然舊慣を墨守(ぼくしゅ)して無用の人と財を靡して居るのは笑止千萬である。

▲鐵道と電話の競爭

東京大阪新聞と地方新聞との競爭が段々激しくなつて來た。其爲め必度儲かつて居ると信ぜられて居る中央の某々大新聞の如き、案外内所が苦しいさうである。東京で儲かつて地方で損して居るのである。地方の大新聞も亦新聞が良くなつて讀者は殖えたが同時に借金も殖えた社が少くない。

中央、地方新聞の爭は鐵道と電話の爭である。地方版と東京電話との競爭である。最近全國の鐵道は六千餘哩に延びた。汽車の速力も著しく速くなつた。東京大阪の新聞を大抵の都會では其日に讀み得られる。電話は人口一萬以上の都邑には必らず架設されてあるこ東京大阪と直通電話の無い處、でなくとも中繼に依つて通話し得られぬ處は東北の一部北海道位のものである。そこで此鐵道と電話の利用に依つて、東京大阪新聞は地方版に依つて、地方新聞は東京電話に依つて、互に其領域の爭奪攻守に今惡戰苦鬪して居る。廣軌鐵道問題と新聞電話料輕減問題は今一頓挫の姿であるが、若此兩者が實行せられた曉は、中央地方兩個の爭は一寸觀物だらうと思ふ。

併し自分は地方版發行といふことに餘り重きを置かない。今の處で其勝敗は斷言し難いが、東京に對する埼玉縣、大阪に對する京都其他一二を除くの外は、東京大阪新聞が地方新聞に必ず勝つて居るとは認め得られぬ。地方版の發行は畢竟地元(ぢもと)新聞と東京新聞とを併讀するの要なく、一中央新聞に依つて中央地方の兩事實を知悉し得るといふ點に發行の理由があるのであるが、事實中央新聞のみを見て、地元新聞を讀まぬ讀者は前記二三地方を除くの外は極めて少ない。少くも其

數は地方新聞のみを讀む讀者と到底比較し得べきで無い。

地方版と地方新聞との競爭は地方版の配達時間にあらずして、地方版編輯〆切時間にあるのだ。然るに此點に於て地方版は到底地方新聞の敵ではない。又地方色を極度に地方版に漲らしむるといふことも不可能の事である。で地方版なるものは現在極めて愚劣なものと相場が極つて居る。恐らく地方版編輯の十人が十人迄、實際毎日興味を以て眞面目に編輯して居る人はあるまい、況んや地方人が興味を以て愛讀して居るなどと思ふたら大篦棒だ。今日の各部の販賣部が今少し智識あり遠識あるものに更つた時は本紙を割いて地方版に供するといふことは廢せられるてあらう。

併し地方版の面白からざると同樣に、地方新聞の東京電話も亦一向面白くない。多くは砂を嚙むやうな骸骨記事、そして大抵は噓八百電話である。新聞もかなり噓の名人てあるが、通信社は今少し其上を越して居る。新聞に取捨される丈の餘裕を見て早くする仕事だから其丈不正確の度が多い割てある。然るに地方新聞の東京電話なるものは、すべて此通信社の通信に係るものである。稀に東京に支局支社を設置せるものが無いては無いが、多くは廣告募集の爲めの支局支社で、記者を常置するが如きものは極めて少く、常置記者あるも其數は大抵一人若くは二三名、五名以上を置くものは滅多に無い。地方關係の特殊記事以外、到底中央の出來事をテキパキ速報し得べきもので無い。結局日本の通信社が根本的に改善せられるか、若くは大阪朝日に於ける東京朝日、大阪毎日に於ける東京日々の如き分身新聞を東京に設けざる限り、何千金を電報電話に投ずるも、優良の中央記事を以て紙面を賑はすことは望み難い。

故に東京大阪新聞が地方版發行以來其地方に多少の勢力を贏ち得たとすれば、其は地方版愛讀者のあるが爲めて無く、販賣上の努力に依つて本紙の愛讀者が殖えたことを意味し、地方新聞が電報電話の利用以來多くの新讀者を得たとすれば、其は電報電話の爲めのみ

て無く、新聞全體が良くなつたことを意味するのである。地方版や東京電話を勢力擴張の獨參湯の如く解する者あらば、其は桁違ひの算盤と評せねばならぬ。

▲地方新聞の本領

地方新聞には本來獨自の立脚點がある。地方新聞は第一要件として、其紙面に地方の特色を漲らしむべきてある。地方の特色無き地方新聞は存在の意義無き新聞てある。東京は東京料理を以て誇とすべきてあるが、地方は又地方々々の獨自の料理を以て誇りとすべきてある。若九州に於て、北海道に於て、東京料理に眞似得たることを以て誇りとし、其特産の調理に顧みる處が無かつたら、お客は必ず失望する。

此記事の爲めに自分は二百有餘の地方新聞の最近七日分に就き、かなり精しく目を通して見た。其結果に依ると千に近い論文中、地方問題に就ての論議は其三分一だも無かつた。墨西哥の動亂や、世界の金融や、帝國財政の將來や、外交の無能や、增師問題や、さうしたことには仲々利口氣の口を利いて居る者が多かつたが、地元の問題に就て、徹底した議論、親切な議論、眞面目な議論と認め得べきものは十指をだも屈し得られなかつた。偶々地方問題に關する論議があれば其は多くは政黨政派の事、若くは立論の基點を政黨政派の手に置てあると認めらるゝもののみてある。そして其雜報欄は其硬と軟とを問はず、無數の所謂玄關種中に觀察の爲ように依つては、研究心ある記者の手にかゝたつならばと惜まれる、隨分興味あり、價値ある記事が空しく枕を並べて死討して居るのてある。東京の流行界の模樣を報じて居る新聞は大分あつたが、折柄時節物の田舍の出來秋を面白く書いた新聞は一ッも無かつた。東京の貧民窟記事などを麗々と轉載して居つた新聞はあつたが、縣下の水吞百姓が此秋にどれ位の收獲を得たか、借金をどう始末するかに觀察の眼を放つたものは一ッも無かつた。結局二百有餘の新聞の其悉くが、等級の高下こそあれ、たゞ粗惡なる東京若くは大阪型新聞たりとの外何等の感じをも自分には與へなかつた。毫も其地獨自の氣分が紙面に現はれて居なか

つた。斯くの如き社會の木鐸を有する地方人は幸か、不幸か。

▲誤れる記者選擇法

地方の新聞經營者の氣が知れないと思はれることがある。其は記者の撰擇と、待遇方法だ。主筆や編輯長や社會部長に七十圓百圓の月給を拂ふのは可い。けれども肩書を尊んで無經驗の學校出のホヤ〳〵を採るは考へものだ。斯うした人を主筆とし社會部長として一社の樞機を握らせ、下に七圓十圓の記者を働かせて、其て經つた新聞を作らうとするのは無理だ。地方新聞が學校出のホヤ〳〵を直に主筆社會部長等の要職に置くの不可なるは勿論、地方新聞の經驗無き東京大阪記者も又不可てある。良地方新聞記者を得んとせば相當學歷ある壯者を先づ其社に於て一人前の記者に仕立上げ、然る後中央の一流新聞に依賴して一年乃至一年半見學記者として、其社の各方面の仕事に無給で使つて貰ふのだ。詰り社費を投じて記者を東京に留學せしむるのだ。此が最も要を得たる地方新聞記者養成法だと思ふ。地方新聞は東京新聞とは又別個の人才を要する、斯くして良記者を得たならば、良記者をして安んじて其職に樂しまし得べき程の待遇をしてやらねばならぬ。

▲悲慘なる記念號

今度目を透した二百餘種の新聞七日分にさへ二十七種の記念新聞がある。五百號記念、千號記念、何千號何萬號記念、發展記念、本社新築記念、支局新設記念、共進會記念、開市何百年記念、電話開通記念、道路開鑿記念、よくまあ斯う記念すべきものが考へ付いたものと思ふ。七日間に二十七の記念があれば、一年には千四百四ッの記念があつて、一日四ッ位の記念がある勘定になる。そして記念々々て其の都度、氣の弱い地方人は尠からぬ喜捨金(?)を捲き上げられるのだ。世に恐らく坊主と新聞位煩るさいものはあるまい。記念もいゝが、廣告を搾り取らずに記念する工夫はあるまいか。地方に餘り新聞の數が多いから、比較的良い新聞までが記念せなければならぬやうになるだら

う。

▲地方新聞の編輯振り

新聞記者として地方へ出張すると、屢其土地の新聞社を訪問する。或年東京から汽車で七時間ばかりを要する某市へ行つた。豫て個人としての知人が其地の有力な新聞に筆を執つて居たから、夜に入つて到着した私は翌朝其私宅を訪れた。新聞記者は朝寢坊で十一時頃からノコ〳〵と出掛ける者だとばかり考へて居たから、或は安眠妨害の慮もあつたが八時頃其家へ着いた。スルト意外にも主人は既に出勤した後だつた。大變夙起な記者ですねト笑つて妻君に訊ねると、玄關に跪づいて居た妻君は、東京だと朝寢が出來るから早くアチラへ歸りたいと絶えず申しますですよ、朝は何時も早いのでございます、尤も夕刻は早く用が濟むらしいのでございますが、夫でも何だ彼だといつてはお酒にして夜更しを致します、ト心安立に笑つて居た。

奴さんズルク立廻つて樂な晝勤ばかりにして、夜勤をやらないのだらう、夫にしても午前七八時に出勤するとは恐ろしく手廻しの宜い社だなどゝ考へ乍ら、車を其社へ走らした。刺を通ずると知人は直ぐ出て來て、今大車輪の所だから少し待ち給へと、匆皇應接室を出て行つた。少からず面喰つた私は窓から瞰下す町々を眺めて居ると、給仕の蛇茶が暖かい紅茶と縣治一覽、市制要覽、某溫泉案内、郷土歴史地理などゝいふ印刷物を卓上に並べ立てゝ、東京の大新聞の記者先生をチラ〳〵觀察し乍ら出て行つた。調べたい事もあつたしするから印刷物を素見し加減に拾ひ讀みし乍ら、ポケツトに忍ばせてあるウヰスキーを紅茶に注いで嘗んで居た。

小一時間も經つとヤレ〳〵といふ貌で知人は這入つて來た。夫から改まつた挨拶一通りあつて、一體馬鹿に早くから忙がしいではないかト訊くと、奴さんエヘヽト笑つて、東京の新聞が何時に此處へ來ると思ふかいト云ふ。さればね、上野の十時ので二版を送る筈だから五時か六時だらう。ソレ見給へ、僕の卓の上に積み上げられた東京新聞と、鋏とソウして糊とかあれば、

昨日書いて置いた社說と合せて、先づ第一面だけは綺麗に出來ようといふものだ、職工の隙な時間に一面を作つて置けば大に樂だよ、だから九時か十時迄には一面を作つて、夫から一切り隙になるのさ、夫て午後になつてポツ〳〵仕事があつて暮方には社の編輯には當直が居る位、皆歸つてしまふのだ。へエー妙な仕事もあつたものだね、僕等は夜の九時か十時かは宵の內だと心得てるが此處ては夜半だね。まアそんなものだ。身體には宜いね。はゝゝ痛み入つたる讃辭だねエ。

「僕が切抜をした殘りが今度は二面の東西南北だの焉哉乎矣だの近事片々だのといふ埋草になるし、其餘りを三面の大將大に艶筆を揮つて燒直したものを捏ち上げるさ、何の事はない骨までシャぶるわけだよ、是て朝日や時事の電報欄が地方版には載らないといふ日になると面白いぜ、先づ地方の中以下の新聞はガラリと其體裁から更るね、」「イヤ左樣いふ例なら何も斯んな田舍へ來なくても別つてる、東京とは目と鼻の或市て、其頃は未だ輪轉も持たない社だつたが、矢張友人が居たから見物に行くとね、マサか朝でもなかつたが矢張り頻りに鋏を使つてたよ、而して曰くさ君の新聞のお影て斯うい ふ電報が僕の方にも載るのだと一日後れを平氣て組ませてたよ」「何處ても同じだね」「東京の新聞のねらひ處ばかり覗つてる樣に思はれるが、地方新聞は一體に其地方に對する職責を盡して居ない樣だね、眞何か問題といへば黨爭の具として取扱ふばかりて、眞に縣治の利害の上から研究するといふ事が缺けて居る樣にばかり見受けられるてはないか」「イヤ全く左樣だ、所で眞に利害を研究し所信を憚からず論ずる樣ては、先づ地方の記者は勤まらないよ、殊に政黨の機關紙てゞもあらうものなら夫は〳〵滑稽な物だよ、例へば中央の本部でやつて居る行動が、何の點迄は眞實て何の點からは一時の駈引だといふ樣な事が中々地方ては見分けられない、穿き違ひをして飛んでもない時分に飛んでもない人を攻擊して見たり、或は正反對の議論を立てゝ見て誤魔化すのに弱つたり、夫は滑稽なものだよ、東京ての機關新聞てさへ時々は調子の狂つた

事を書きはするがね」「夫は毎度の事だよ、猫の眼の様な政黨の態度に附合ひきれないで調子外れを仕出來す記者は多勢居るだらうよ、何も夫は地方新聞の特色ではない、僕のいふのは尙少し地方種の記事がある可きだといふのだ、多少硏究論評に値する事が縣治の上ばかりでなく、社會的に見ても幾らもあるだらうと思ふね。斯うして遠方から來て見ると色々の事が目に附く、夫は無論皮相の見て淺薄な觀察に相違ないが、夫でもナアに書けば讀みもの丶十日や廿日分は立處に出來ると思ふがね」「夫は面白い、一つ書いてくれ給へ僕の所へ載せるから」「串戲ぢやない、ソンな悠長旅行ではないんだ今度は……」

私等は用談の外に斯ういふ會話を交した、是は旣に四五年前の事で、其間に多大の進步變遷がありはするが、然し尙ほ此一場の會話が今日交はされたとしても大した不都合はない樣に思ふ。

地方新聞は斯ういふ式の編輯法で出來るのが極めて多い。無論有力な新聞では電報電話料を惜まないから、通信社或は支局からの通信で早く報道するし、東京或は大坂の新聞が到着した上で切拔をする必要は全く無い。唯緊急な時事問題でない閑文字、笑話などは常に轉載されるが夫は已むを得ない。現に東京でさへ他紙の記事を頂戴する事は毎度見受ける。夜の內に他社の地方版を(明日の新聞)を取寄せて見て特別記事が載つて居ると、忽ち夫を燒直して知らん貌で翌朝の東京版に載せて、アレかアレは僕の社でも分つて居たよといふ貌をする卑劣行爲も數年前には度々あつた事を聞いて居る。夫に比べると土地の人が旣に東京の新聞で讀んだ記事を更に一日後れて載せて喜こんでる地方新聞は中々無邪氣であるともいへる。

極めて僅少の除外例はあるだらうが、關東信越東北ならば東京、關西一圓は大坂の各大新聞から何等かの影響を受けないで出來てる地方新聞は先づ絕無であらう。夫も中央の政界財界或は學界の事情といふ樣な記事を轉載するものは恠しまないが、紙面の態裁、記事の色取り、口吻語呂に至る迄模倣し盡してるのが澤山

ある。近き例でいへば九星判斷、姓名判斷などいふ衆愚を賊するものが全國の新聞界に競つて載せられて居る樣なのも夫である。新聞を作るといふ事に對して何等の主義も信念もない、偏に時流に媚びるものと嘲けられても、一言の申譯が無いものが澤山あるであらう。

序に關西の或市で記者をしてる友人の日記を揭げて、地方記者の生活を覗ふ便としよう。但し縣廳所在地でない某市の新聞社であるから其心で讀んで貰はなければならぬ。(此項雪島)

▲地方記者の一日

某月某日　昨夜△△吳服店賣出し前の御馳走で少し過したので頭が痛いけれども七時半頃ブラリと出る。二丁目の角で××新聞の○○に出逢ふ。豫て緘默を守る申合せの△△村長收入役共謀の公金費消事件を今朝の同紙が素破拔きたゝ不都合を詰る。陣笠代議士に煽てられて書いた事は見え透いて居るが、ヒヨロ〳〵新聞の癖に生意氣だと癪に障つたから散々に油を取る。結局今夜、、亭ノ謝罪の宴を催すとまで降參したから、其際今後の事に就いて申合規約を定める口約をして別れる。本町の交番で篠て樂の回つて居るK巡査部長が見えたから目禮すると、僕を呼留めろから何かあつたのかと立寄ると、部長は聲を潜めて、君は○○屋(市内有數の酒屋)の强姦事件を知つてるかといふ。初耳だ、何時です。一昨夜半の事だとニヤ〳〵してる。說明を聞くと下らない種を明かして今度の非番には一杯有り付く積りらしい。之だから田舍の巡査はイヤになる。碌ならしいから書かない事と胸に決して社へ出る。大阪朝日と同毎日との外國電報が特に多いから、夫を材料に例の海外時事評論を二段の餘に捏ね上げる。是で今日も社說なしで出來る。夫から萬朝や東京朝日や國民などから寄せ集めて「噂の噂」を細工し、俳句の選をやる。解らないで新傾向の口眞似をした奴が今日も二三人居る。別にお家流の見事な手で大時代の句を沒じたのもある。是は城内の老士族に相違ない、氣の毒だから一句だけ取つてやる。職長が來て今日の一面の小說の挿繪は餘り木版が磨滅してるがどうしようと相談する。十社以上も巡回した來たのだから無理もない。見つとも無ければ脫く外はないが、左樣すると早速一段から空地が出來る。大きな輸入廣告の取つて置きのは無いかと階下に聞きにやる。横三段といふ誂向きのがあつたからヤレ〳〵大助かりと、外に二三政黨消息の短かいのを入れて一面の編輯を濟ます。夫から三面記事になる東京大阪種を四五の新聞から切拔いて殘りを全部二面へ引渡す。同主任は大分シャブリ精だなアと笑ひ乍ら夫を讀んで居る。縣會が夜にならないと本當に樂だがね、朝早くからやれば至急報でなく電話が取れるんだのにねと頻りに愚痴を溢して居る。だつて縣會のお陰で君は駈擠り回らなくて紙面が作れるぢアないかといつてや

る。

宅から辨當が屆けて來たから早速あけて見ると、珍らしく鰻飯の上等なのが這入つて居る。先頃近日内に甦ると東京のS君からいつて來てたのが着いたのだなアと思ふ。道理で先刻出入の酒屋が電話をかけて「今日は御宅からお辨當をお屆けになります相です、奥樣からのお賴みですからお知らせします」といつて來たのだつた。久し振りで小石川の自炊生活時代を思起し乍ら食ひ了る。M君が頻りに羨しがるから今夜分配する約束をする。

十二時十分過ぎに出て市役所を覗く。老課長慰問する（此人の話の對手になつてやる事を記者仲間で慰問といつて居る）例により賴山陽を友達扱ひにして話す。あなたお幾歳ですかと訊くと、熊坂の長範と同年で六十三だよと笑ふ。シテ見ると山陽が歿してから十七八年經つて生れたんですね、惜しい事だつた、モウ三四十年早く生れてると山陽と交際されたかも知れなかつたのに、トいつてやる。到頭變挺な七絶を三首頂戴仰付けられて課長室を出る。但し此年末に多少吏員に陶汰があるらしい消息を洩らして呉れたので、課辨の生活難といふ題で少々書けるなアと思ふ。ト木保を一寸覗くと先達の××橋掛替工事不[illegible]事件の素破抜きが餘程コタえたと見えて、皆が變な顏をしてヂロ／＼見た。お愛想を一[illegible]ふ・て

一[illegible]加[illegible]文に關するヒン[illegible]て[illegible]歸る。

警察種は泥棒、喧嘩、萬引など七八件、火事二件何れも平凡を極めて居る中に、後備大佐と渾名されて居る老探訪が、お濟當見たいに書いて來た種だけは馬鹿々々しくて振つて居た。是は是非とも喜劇風に書いて、第一段を飾る可きものだと考へて、盛に尾鰭をつけて書處る。事實は某縣會議員が〇〇（縣廳所在地）に外妾を置いて、夫に子が生れたと聞いて子を生んだ事のない本妻が自分の子にしようと夫の旅行中にワザ／＼人を遣つて皆々盜み出させた。而して立派な着物なぞ拵らへてやつて大喜で可愛がつて居ると、主人が歸つて來て之を不審がるから妻君は事情を話すと、實は今日も妾の所へ一寸立寄つたが子はチヤンと居たといふ。大騷になりてヨク／＼取調べると、盜み出しに行つた奴が飛んでもない穢多といはれて居る或革商の妾の子を奪ひ取つて來たことが分り、警察へ訴へて大騷ぎしてる處へ散々謝罪つた上衣類金品をつけて戻しに來り、一方本當の妾の子を引取る談判中だが、妾が中々手放しないトいふ筋である。

新參のAといふのが遊廓の遊客數だの線香數だのといふものを調べて來る。××新聞で毎日載せて居る種だ。Aを呼付けて本紙は君が見る通り地方新聞として餘程上品だと言はれて居るンぢアないか、斯んなものを載せられるかいト怒鳴りつける。十二圓がフイになるかとブル／＼もので謝罪つたから、以後を嗜み給へといふ樣な事で許す。而して是から●●町の某へ行つて今夜[illegible]能く深く觀察して來い、明日の二番で歸れば宜い、と汽車、バスと一泊分の旅費手當を出してやる。Aは大喜で飛出した。此試驗に落第すれば奴さん首になるのだ。

四時に全部原稿出し切り、顔や手を洗つて居殘りに大組の注意をよく言置いて社を出る。一旦宅へ歸つて和服に換へ朝の約束で○○亭へ行く、此方が二人（二面のB君と）××から二人、藝妓が大小三人。又散々油を絞つて今後兩社の申合に背いた場合にはどうするかといふ問題は結局德義上の事で、制裁を規定しても無益だといふ此方の主張を先方では有り難く思つた様だつた。其僞か眞半ばに藝妓を二人程贔負した。××社のが浪花節をやつたか、、珍らしく劍舞をやつて見せた、大喝采だつた。考へて見ると此地へ就職してから始てだつた。

十時頃歸宅今日到着の校友會雜誌を讀んで學友の消息を面白く思ひつゝ眠る。――一日の日記了――

▲輪轉機と新聞の勢力

新聞の印刷は必らず輪轉機で行つて居る樣に思つてるのは、東京や大坂て新聞社の工場を覗いた人の事て、地方新聞の多數はまだロールを使つて居る。發行部數の多い新聞は到底間に合はないから輪轉機を据付けるのだが、此機械の分布といふ事も注目に値する。

東京の十六新聞は合せて五十臺の輪轉機を据ゑて居る。大坂は七社て廿五臺を有する。名古屋は四社て九臺ある。其他の地方を輪轉機の數から見て勢力の强弱をトする事が出來る。先づ奥羽六縣廿五新聞ある中に河北に二臺、東奥に一臺ある外には一つもない。然るに九州七縣三十新聞に對し實に十六臺の同機を据付けて居る。九州の割合て言ふと奥羽には十二三臺は無くてはならぬのに僅々三臺といふので、此兩地方の新聞なるものゝ大體は玆にも表はれて居る。就中福岡日々は一社て三臺を据ゑて居るが東京、大坂、名古屋の外に一社三臺を有する地方新聞は一つも無い。九州日報、九州日々、鹿兒島新聞が各二臺づゝを持つて居るが、二臺といふのも東京大坂名古屋を除けば、前記の河北の外に神戸新聞、山陽新聞、北海タイムス、小樽新聞があるのみてある。

電報通信社が有名な新聞、信用と勢力とある新聞として全國から廿四新聞を選んだのを見ると東京十五、大坂四の外に新愛知、福岡日々、河北、北海タイムス、小樽新聞の五社を地方から取つて居る。此五社は何れも二臺或は三臺の輪轉機を持つて居る。又同通信社が地方新聞中より（東京大坂を除き）三十六の大新聞と

して、選んでるのを見ると、上述の五社は勿論、横濱貿易、いばらき、下野、北越、信濃毎日、山梨日々、富山日報、北國、静岡新報、名古屋、扶桑、名古屋東海、伊勢、京都日の出、高知、神戸、又新、山陽、中國、廣島中國、九州日報、門司新報、長崎日々、九州日々、九州新聞、鹿兒島新聞、函館毎日、新潟東北、岐阜日々、秋田魁、上毛を數へて居る。此内輪轉機の備へなきものは二三社に過ぎない。夫々比較的優良なロールを使用して居るのは當然である。此以外に輪轉機を有する社は尚二十社を數へ上げられる。此地方新聞中の三十六大新聞は合せて四十七臺の輪轉機を据ゑ付けて居る。而して輪轉機の設備なき日刊新聞は全國に一百五十餘社もあるのである。新聞の勢力を見るには輪轉機が一等早分りする様に思はれる。

茲に一場の笑話がある。某地方新聞が輪轉機を据ゑた、所が今迄は宵から曉方までガタン〳〵機械を動かしてたのが、宵の間チョイと動くばかりで更に運轉しないものだから、市民は發行部數が減少したのに相違ないと考へて夫が評判になつて實際少なからず紙數が減つた事がある。今はモウそんな馬鹿げた話はあるまい。

▲社長と記者

大阪を除く他の地方新聞の持主或は社長といふものは若干の實業家を除けば政治家（？）である。現に代議士に出てる者或は曾て出た者が地方だけでも三十人位はある様だ。是から機會が熟したら出ようと思つてるものは數限りもない。新聞社長になるのは代議士に出る捷路だといふ様に思はれて居るらしい。

社長で中央に名を知られて居る人を少々擧げて見ると、武藤金吉（上野）持田若佐（野州）矢板武（下野）飯村丈三郎（いばらき）高橋嘉太郎（岩手毎日）寺井繁司（陸奥）坂口仁一郎（新潟）小坂順造（信毎）降旗元太郎（信日）濱田國松（三重日々）雨森菊太郎（京都日出）川崎芳太郎（神戸）小田知周（香川）林有造（土陽）岡崎運兵衛（松陽・江副靖臣（佐賀）庄野金十郎（福日）大原義剛（九日）毛里保太郎（門司）山田

珠一（九州日々）抽木慶二（鹿兒島）東武（北海タイムス）鈴木天眼（東洋日出）など隨分ある樣である。主筆として中央に名を知られて居る人は夫程多くない。其社會では注目されてる人も隨分あるだらうが、普く世に知られるのは何うも東京大阪の樣な譯には行かぬ。代議士になるとか或は他に物質上の利益があるとかいふ見込が無ければ、地方新聞の主筆になつて行くのは世間から忘れられに行く樣なものである。況して主筆ならぬ平記者として地方へ行つたら先づ前途の光明は極めて薄い。

主筆として聞えて居るのは早速整爾（藝備）桐生悠々（信毎）青柳有美（扶桑）安藤和風（魁）町田柳塘（石川）梅田又次郎（北陸）富田幸次郎（高知）社會部長として加藤眠柳（小樽）等の數人に過ぎない。實力からいつても、又一部の人の信用からいつても申分ない立派な記者は澤山あるのであるが、不幸にして地方から中央へは容易に評判が出ない。地方の讀者には執筆者が誰であるかに就いて興味を持たないのも、記者の名の表はれない一因かも知れぬ。併し將來の大記者は地方から現れようと思はれる。

▲地方新聞の廣告

東京新聞の廣告料！

廣告が無くては新聞は成立たない。東京の新聞の賣上代金といふものは紙代と印刷費とに足らぬ場合が多い。だからして紙數を多く賣れば賣る程損になる場合が生ずる。そんなら何も安賣の競爭までして販路擴張に力めなくても宜さ相なものであるが、新聞事業の唯一の財源たる廣告が、賣れない新聞では集められない、廣告依賴者は中々機敏なもので各新聞の發行數を略鑑定して居る、夫を楯にして廣告料を値切り仆す、だからして高い廣告料を取るには勢ひ紙數を多く賣らねばならぬ。賣上代に少くない損をして廣告料で大に儲かる方が結局は得である。廣告といふものは全然新聞の死命を制して居る。

然し是には說がある。

或論者は新聞を善く作つて高く賣り、廣告料を成だけ廉くするといふ意見を持つて居る相だが、之は多く

の廣告を集めるといふだけの手段で、永久に利益を收める所以のものであるかどうかは疑はしい。現在でさへ日本の新聞は外國に比し高價過ぎて居る。私は新聞經營の理想としては、廣告料を高くして最も少ない紙數を賣る。といふ意見である。是は甚だ都合のよい意見で空論視せられるか知れぬが、廢されたら私は現に實例があるではないかと息捲くかも知れぬ。ロンドンタイムスの發行部數は比較的僅少であるが其信用は絕大である。日本でも時事（東京）の如きは其發行部數は朝日、國民、報知、萬朝等に比して決して抽んでゝは居ない。然し乍ら十分に重ぜられて居る。廣告料も表面の規定は朝日（東京）國民、日々、都、中央、讀賣、二六、やまと、日本などゝ同格であるが最少ない割引で應ずるので結局前記諸紙より高い廣告料を取つて居る。のみならず此一列より高い規定を標榜して居る萬朝、報知よりも數次高い料金を同一廣告から收めて居る。又別に都といふ新聞は地方擴張に不熱心で專ら東京にのみ賣込んで居るが、讀者が動搖しないので有名である。而かも部數は決して多くは無いが廣告料は報知の壘を磨する程度に收めて居る、而して算盤を取つて最も引合つてる新聞は久しい以前から都だと稱せられて居る。信用さへあれば部數は少くても結構高い廣告料が取れるし、從つて立派な營業になるといふ事は是等の例でも十分に察せられる。但し廣告料が一行六十錢の規定だから新聞一段百十行として六十六圓取れるものと思つてると大間違で、極小さい廣告に對してゞも先づ一割は必らず割引する、夫が二割となり三割となるのはまだしも、東京で一行六十錢を標榜してる新聞で其廣告が賣藥か化粧品ならば一段六十六圓の規定に對し唯の十圓で應ずる社が二社や三社はある。甚しきに至つてはタッタ五圓位でも喜こんで（？）引受ける社が一二見えて居る。一段五圓といへば一行四錢五厘强にしか當らぬ。までも規定六十錢で候と構へて居る。但し賣藥と化粧品は大きい廣告はするが、あらゆる廣告の內で最低廉なものと定つて居る。

東京の新聞が既に然りだから地方新聞が廣告料から

如何ばかりの收益を得てるかは寧ろ氣の毒な問題である。

地方新聞の廣告料！

地方新聞の廣告料は云ふ迄もなく色々ある。馬鹿々々しく高く吹いてるのもあるし、此新聞で是位かと怪しむ程廉いのもある。地方といつても大阪や神戸などは是に論じないつもりである。但し振合を見る爲めに示せば日本で一等高い廣告料を定めて居るのは大坂朝日の一行七十五錢である。（但し各紙共普通面の相場で特別廣告ではない）次が萬朝、神戸又新の七十錢、大阪毎日、報知、神戸新聞の六十五錢で他は皆六十錢以下である。

斯ういふ大勢の中で全國の新聞を見渡して見ると、名古屋の四新聞（新愛知、扶桑、名古屋、新報）が六十錢、東海（名古屋）が五十錢で嶄然頭角を露はして居るが、是は中京といふ名に對しても標榜したい所であらう。茲に意外なのは東京、大坂、横濱、神戸、名古屋以上五市を除いて全國で一等高い率を協定してるのは、徳島の日々、公論、毎夕三新聞で各六十錢である、而して同市で唯一の輪轉機を備へて居る毎日は却て五十錢である。時事や朝日や國民などゝ同じ率の新聞が此市にのみあるといふのは珍らしい。島根か宮崎邊に七八十錢の新聞があると尙面白いけれども島根は廿五錢均一、宮崎は十五錢均一といふ茶氣のない正直な値をつけて居るので話にならぬ。

此外には空威張りした新聞はない――が五十錢といふのは餘程ある。靜岡新報が東海道に一つ、北陸に福井日報が一つ、中國に播磨毎日と岡山の山陽と民報、東北に河北と山形の三新聞（山形新聞、同日報、同新報）北海道に北海タイムス、小樽新聞、膽振日報以上十二社がある。斯ういふ調査をして意外に感じたのは九州の各新聞が皆安い價格を定めて居る事である。人文開化の度、生活の度何れの方面から見ても九州の北西部は東北などゝ比べられないものであるに拘らず仙臺や山形の様な廣告料を取る新聞は一つもない、輪轉機の三臺も据え、毎日平均十段以上の電報電話を取つて居る福岡日々は地方新聞中第一に位す可きものであ

るが、廣告料は三十五錢である。熊本國權黨の機關として古く根底を定めて居る九州日々は廿五錢である。是等の大新聞が斯うであるから他は推して知らるゝが長崎日々と鈴木天眼氏の東洋日の出のみは傲然として四十錢を稱へて居る。

山形の三新聞が協定額五十錢としてるのは既に擧げたが、是と面白い對照は盛岡の三新聞（毎日、日報、公論）が廿四錢と協定して居る事である。秋田は皆廿錢である。山形の高いのが德島の高いのと同じく目に付く。其他同一縣下或は同一市内にある新聞は大抵同額に定めて居る 例へば和歌山三新聞の四十五錢、水戸三新聞の四十錢、千葉三新聞の三十六錢、栃木（三）廣島（三）奈良（三）の三十五錢、長野（六）群馬（五）香川（三）の三十錢、新潟（七）山梨（五）石川（三）熊本（四）の廿五錢、佐賀（四）秋田（四）鳥取（三）高知（三）の廿錢など皆ソウいふ傾向がある。

扨又翻つて何の位迄安い廣告料があるかといふに、沖繩の三新聞と弘前新聞とが各十錢で天下に冠たるものである。但し是でも一厘の割引もしないとなれば實收は地方新聞の第一流になるのだから面白い。他に十二錢、十五錢といふのもチラ／＼ある。

其所で今の地方新聞は先づ大體二十錢から五十錢迄の廣告料だと見做す可きである。

廣告の分量と其種類

全國の新聞に就いて其紙面の記事と廣告との段數、比例等は詳細調査して見たが、夫を一々列擧するのは何の面白味もない事だから罷めるが、比較的重な新聞百餘種の平均を取ると記事七に對する廣告三であつた。無論時としてはまだズット廣告が增してる事もあるが少ない場合も多い。所で全紙面の三割に當る廣告は重にどういふものかといふに、先づ夫を大別して東京及び大阪種と其他の地方種との二つとされる。其二種の分量の割合は同じく精細な調査の結果、東京大阪種が六十八に對して其他のもの三十二といふ百分比例になつた。先づ是も七分三分と見て宜い位である。

然らば此七分の東京大阪種は如何なる廣告かといへ

は、新聞社の方で一等有難いのは新刊書の廣告である、是は總ての廣告の中で常に最少ない割引をする事になつて居る。書籍の廣告といふものは概ね出版當時に限るもので賣藥や化粧品の如く連續するものでないから割引しないのである。然し此第一に有難い書店の廣告は有力な新聞でなければ全然依賴しない、地方新聞で東京の新刊の廣告が出るのは其土地で信用ある證據と見ても宜い。

此有難い新刊廣告は右の通りだが東京大阪種の內分量からいつて一等多いのはいふ迄もなく賣藥と化粧品である。現今盛に廣告してるのは、クラブ、ミツワ(御園)仁丹、ライオン、美顏水、ラベル、ホーカー液等で花柳病藥も中々多い。其他に種類は違ふが目に立つて廣告してるものは味の素とゴムのタイヤ類である。

斯ういふ大廣告は大抵半年或は一年繼續の契約で一ケ月幾段幾圓と定めて置く、依賴者の方では每月其範圍內で大小長短種々の原稿を作り印刷に附して配附する。最少ない契約で一ヶ月三段五段、多くは八段十段十二段などいふ程度である。ミツワの如きは廿段以上契約してるものが澤山あるらしい。是は除外であるが、ミツワは常にミツワ文庫と題する文章廣告をやつて居る。而かも夫が新式ポイント活字で一面に記述されて居るので、地方新聞の舊式活字で組むと三段に納つて居る原稿がどうしても三段半にはなる、體裁が惡くなるのは勿論の事新聞社では大に困る、料金は契約の三段分しか取れないのに三段半或は四段近くも紙面を塞がれる。然し別に苦情も云はないのは廣告を廢されるのが何より辛いからで、甘んじて踏付けにされて居る。小新聞は泣く々々笑顏で之を迎へて居る。

廣告の契約と其實收

地方新聞も大きな社は東京大阪に支社があつて、其處の廣告部で事務をやつて居るが、多くは通信社で取扱つて居る。前項の如き大廣告主等は廣告の一日も忽がせにされない事を熟知して居ると同時に、地方新聞が自家の廣告を打捨てゝ置かない事も知つて居る、其所で高くとまつて新聞社が泣付くのを待つて居る。所で地方で信用を博し

立派に暮しを立てゝ居る新聞になると、廣告は無論欲しいが然し此新聞に廣告しないては居まいトいふ自信がある。斯ういふ睨めつくらが存外方々にある。口を出した方が必ず不利を蒙るのは見え透いて居るからてある。所が小新聞の悲しさは手を磨り足を磨りして泣付いては散々値切仆されて居る。現に最近の話ては有力な廣告主が聯合して全體の新聞に對して脅迫的に廣告料の大低減を申出ようと奔走してるといふ事てある

是を聞いたら地方新聞は泣くてあらう、東京の堂々たる新聞ても慄々ものだといふ事てある。然し乍ら是は廣告主は貪り過ぎといふ可きてある。而して斯ういふ脅迫に恐れる様ては新聞の意氣地無さ言語同斷てある。有力な新聞が五六社同盟して筆鋒を向けたら、根が空評判て賣れて居る化粧品や賣薬は立所に叩き潰される。自分の方には百も二百も弱點があり乍ら、増長して廣告料値下を脅迫しようなど は隨分身の程を知らぬ輩てある。而かも現在が既に極端に低廉な料金しか拂つて居ないのてある。

扱通信社なり支社なりの廣告係が廣告主と交渉を始めたとする。モウ宜い加減に一つ買つて下さいと下から出る。私の店ては今の所入りませんが御相談次第ては買ひませうト上から答へる。廣告は依頼するのてはない、單に買ふといつて居る。即ち紙面を買ふ譯てある。所て其御相談なるものが中々一度や二度ては濟まない。其内には其店の芝居總見の切符の五枚や十枚は引受けてもやらねばならぬ。而して散々足を運び愚弄された揚句に十段何程といふ相場が立つ、其所て廣告主の方から「時にコミは幾段です」と來るコミといふのは契約以外のお愛想に餘計載せる事てある。例へば十段百圓といふ契約をして實は十二段載せさせる、料金は無論十段分しか拂はない。是は地方新聞てなくても東京てもある事てある。て結局無料て二三段位の廣告を背負されて、まア左樣しときませうと泣寢入る。

斯うして泣寢入つた値段が何の位の所かといふと、初めて聞く人は先づ呆れ返る、一段(百十行)十圓以上を取る地方新聞は多くて七八社、十社とは斷じてあ

るまいと思ふ。或は廣告主によりては契約社百社位の内十圓以上出してるのは二三社に過ぎまい。先づ一段五圓といふ新聞は可なり聞えた新聞である。社の名を擧ぐるに忍びないが、一行六十錢と號して居る新聞で、一段五圓、三圓甚しきに至つては驚く勿れ一圓五十錢にしか當らぬ廣告を取つて居る社まである。新聞社仲間で一錢廣告といふ通用語があるが、夫は一行一錢に當るので一段一圓か一圓十錢位の値段である。此一錢廣告が最低の廣告かといふと、サにあらずだから驚く、五圓、四圓五十錢、四圓などゝいへば一段の値としては申分が無いが、夫が實は十段の値だから悲しくなる。一段五十錢、四十五錢、四十錢といふに至つては沙汰の限りである。一行四厘にも當らぬ廣告が有らうとは誰あつて門外の人の覗ひ得ようぞ。其一行四厘て應じて居る新聞が、實は一行四十錢との規定を標榜してるから百倍の掛直てある。天下に斯ういふ奇蹟が又と有らうか。

談が岐路に亘るが、玆に挿話として記して置く事がある夫は紙面買占策である。

先づ特に秀でた地方新聞があるとする。其縣下のみならず四隣へ手を延ばして隣縣の新聞を窘めて居る、左様いふ勢力のある新聞に對して或廣告主が紙面の買占をやる、夫は新聞が信用があり勢力があり販路が廣いから其廣告の有効な事は申までもない。所が買占の目的は又別に一つある。夫は競爭者の廣告を擊退する策である。即ち思切つて多くの段數を思ひ切つた高價に約束してしまふ、新聞は無論大喜て應ずる。若し競爭者が其新聞に紙面を買はうとすれば、先約者と同じ價格を請求する、夫は餘りだと値切れば、紙面の餘地がないからと反對に新聞から刎付けられる。廣告主は常に新聞を見縊つて居る者だから左様いふ場合には面喰つてしまふ。ヨク聞いて見ると既に自分の競爭者が買占めてる事が分つて忌々しがるが、其上を越して買ふ勇氣はない。大きな奴が買占を方々て盛に始めた日には群小競爭者は木葉微塵である。是は人に聞いた話であるが、現に東京の某化粧品商は某新聞（地方第一の

稱ある)に一ヶ月六十段からの廣告を契約してる相だ。半頁大の廣告を一日置に載せる割合になるが、斯ういふ花客は新聞社に取りて又と他に望めない。而かも其料金が高いと來ては之を驅逐する事は全然不可能といつても差支ない。仁丹がゼムを壓倒したのも全く此傳だつたといふ話てある。

安廣告を甘受する理

上述の通り地方新聞なるものは賣藥商や化粧品商に踏附にされて居るが、計算にならぬ計算も泣々立てゝ居るには其所に夫だけの理由がある。而かも一つならずの理由がある。

第一に輸入の大廣告は體裁がよい。東京からも廣告があるンだぞといふ景氣にもなる。小い市や別に事業といふ程の事も無い土地ならば唯お體裁になるだけだが、若し土地にも廣告させるに足る事業があれば、其に對して廣告を誘致する種になる。東京の廣告に對して如何程割引しても土地の廣告には決して割引をせぬ。而して斯んなに高い廣告料を拂つてあんな大きな廣告をしなければ商賣は繁昌しないものだと土地の商人に思ひ込ませる。廣告料を惜んで居たら今に東京の商品ばかりになるだらうと恐れしむる。乃ち土地の商人も已むを得ず廣告を始める。而して魂膽を知らぬから百分の一に値切るなどいふ事は出來ぬ、多少の割引はあつても結構高い料金を取られる。如何なる場合にも廣告の効はあるものだから商人も利を得るが、夫に增して新聞社はホク／＼する。益盛に東京の媒鳥的廣告を載せる。其缺損は地方商人が埋めてやる。

次に小新聞にあつては大廣告の輸入などを引受けると職工が大變樂になる。鉛版から活字迄添へて原稿を送つて來るだのから、文選植字の勞は至て輕い。半頁或は全頁といふ樣な輸入廣告の代りに若し記事で埋めるとなると差詰め職工の七八人は增員せねばならぬ、夫は大變に辛い話てある。だから職工七八名の賃銀を出さなくて濟む上に五圓なり十圓なりの金が這入れば、小新聞の會計として出入が可なり違つて來る。第一記事で埋めようにも記事が無い場合も地方なら有り得る。斯ういふ消極的の理由も伏在してるのてある。

未だある。地方の小新聞は東京の通信社に少しづゝでも通信を依賴し同時に廣告も取次て貰つて居る。通信社では大抵安くても廣告を取つてやる。而して其收入は通信費と相殺する。だから夫では餘り安いなど、新聞社の方で苦情をいふと、通信社では、夫では相談にならぬから廣告取りは止めるが通信料をキチン〳〵送つて貰ひたいと答へる。小新聞先生忽ち閉口してしまう。廣告から一文も現金は這入つて來ないが前述の通りの消極的利益がある上に、通信料が其一部にせよロハになるのだから、小新聞では結構夫て承知する事になつて居る。廣告主に踏付けられる通信社は又小新聞を踏付ける。下積になつた新聞社こそ泣きの涙である。

米國の或家庭雜誌に廣告料を問合はせたら裏表紙一頁（彩色刷）て一萬八千弗、奥附が六號一行八弗、但し十行以下を受付けずといふ返答を得た事がある。憫む可きジャップは目を回してしまつたが、斯ういふ話を地方新聞に聞かせたら羨ましさに涙が出るてあらう。啻に地方のみならず東京大阪の大新聞も涎を流さぬ者はあるまい。

▲各紙の小評

地方新聞の全部を評する事は到底紙面が許さないが、目星しいものを若干擧げて短評を試みよう。是非見たいと思ふもので二三は最近の紙を見る事が出來なかつた。

東京と大阪との二中心を除いて、どうしても第一に指を折らなければならぬのは、

▲福岡日々新聞 である。同縣に於ける政友會の機關て、熊本と佐賀とに別に各日々新聞を發行する勢力を有して居る。由來福岡縣は平岡浩太郎一派の獨占て、第一期二期頃の代議士は二三・自由黨員を辛ふじて選出するのみて大多數は國民協會系統、近年の進歩黨系統（國權黨、中央派には趣らなかつた）の人ばかりてあつた。其間に立つて自由黨の機關として經營して行く福日は頗る難澁てあつた。然し今ては反對に政友會全盛の地となつて玄洋社の系統甚だ振はないと同時に同紙は隆々たる聲名を博して居る。創刊以來三十五年

の歴史は一種の成功談として傳へられる。同紙が平岡浩太郎の福陵新報（今の九州日報）を明かに凌駕するに至つたのは日清戰爭に戰爭記事の豐富敏捷だつた爲てあつた。而して夫は同縣に於ける舊自由黨今の政友會の隆盛を來す一の便宜となつた。同紙は三臺の輪轉機を据ゑ付け、毎日平均十段以上の電報電話を取つて居る。帝都を去る三百里の地に在り乍ら、其設備といひ規模といひ將た記事材料、發行紙數といひ、現今の地方新聞で此右に出づるものは絶對にないといつて差支あるまいと思はれる。支那朝鮮の通信に至つては東京の新聞中一も匹敵し得るものは有るまい。九州帝國大學の智識、巧に利用されて居る。同紙は堺枯川、高橋光威などを經て今の主筆猪俣爲治氏も好評を博して居る。

▲九州日報　福日の事をいへば勢ひ昔の福陵新報今の九州日報を思はざるを得ない。同紙は玄洋社の機關であつて二十年前は全盛を極めて居た。其後といへども比較的趣味に饒かに上品な新聞として歩武を進めては居るが政黨の關係から縣下獨占の力は無論無くなつた。夫でも輪轉機臺二を据ゑ毎日八段以上の電報電話を取つて居るから、どうしても地方新聞の第一流を下る事はない、如何せん敵手に地方第一の福日を控へて居るので實質の割に光つて居ない。福日が政黨趣味に耽つてる間に此新聞は福本日南、白河鯉洋、古島一雄などいふ文名嘖々たる人を迭迎して居る。現今でも較大阪朝日式に落付拂つて文藻の見る可きものが多い。編輯振りも中々上手で、事故の記事にも一昨日などゝいふ腐つた材料はない。概して尨大で引締まらないのが九州の大新聞の通弊であるが、同紙は其點から見ても餘程引緊つて居る。

福岡の二新聞をいへば直ぐ想起するは北海道の二新聞である。

▲北海タイムス　本土との電話の便がなく全部電報で東京種を取り乍ら、夫が毎日九段十段あるといふ費用を惜まないのが同紙の勢力ある所以の一因である。而して政友會の人も同志會の人も同じく同社の出資者で

あるから、政黨以外に專ら北海道發展に資する積りの努力をしてる。北海道第一のみならず東京より北東に於て亦第一の新聞である。編輯法は時とすると整頓を缺ぐ如き傾向もあるが、夫は一面に大新聞たるを立證する編輯長山口政民の精力は全紙に溢れて居る。

▲小樽新聞　勢力はタイムスに劣るけれども、材料も編輯振りもタイムスより巧者な處がある。何方かといへば沈着の態度で、タイムスを福日に比すると小樽は恰も九州日報に當るのである。矢張り決して第二流には下らない立派なものである。

　九州と北海道とを擧げたから今度は中央の名古屋を見なければならぬ。同地は東京大阪の挾撃に逢ふ所で中々容易な事では新聞は成功しない所である。然し其割に良い新聞がある。

▲新愛知　福日と肩を並べ得る新聞であるが、編輯法は未だ工夫の餘地が大分ある樣に思はれる。是といふ特色もない樣で、十分の勢力があり廣告などにも堂々たるものが多い。名古屋で第一たるのみならず嶄然東西に抽んでて居る。是次にぐものは、

▲名古屋新聞　で同じく三臺の輪轉を有し七段內外の電話種がある、新愛知の勢力には及ばないが編輯は却て勝つて居る樣に見受けられる。大新聞といはれるものが同じ土地に併立して居る場合には、其內で少しく勢力劣つて居る方が其編輯法は巧であるといふ珍現象が福岡にも北海にも名古屋にも見えてる。大朝と大每とにも左樣いふ傾向が仄見える樣である。是は尙深い研究を要する事である。

▲河北新報　は奧羽唯一の新聞である。優に大新聞の態を備へて居るが、由來東北の地は群小新聞の蠢めき合つてる地なのだから餘計に引立つて見ゆるといふ幸運を持つて居る。九州の樣に良新聞の多い地方では此聲名は得難いかも知れぬ。

▲山陽新報　曾て小松原英太郎の經營した新聞で中國の重鎭である。縣知事から新聞記者になつた當年の嘤鳴社員關新吾が今の代表者であり、曾て同縣の敎育界に重きをなした野崎又六を取締として居るのに見て

も、同紙の態度が堂々たる事は察せられる。大阪さへ近くなければと歎じて居るであらう。

此他に九州日々、新潟毎日、鹿兒島新聞、北國新聞、信濃毎日、いばらき、函館毎日など注目に値する、就中九州日々と信濃毎日とは硬派記事に秀いて居る。前者は小早川秀雄、後者は桐生悠々が主筆で共に中央の文壇に出しても一地歩を占むべき人である。

一體地方の現状を見ると新聞が多過ぎる。小い田舍町に四五社もある抔は寧ろ滑稽である。新聞の創立といふ事が醇な意味で無く企てられるのではあるまいか倘地方新聞に限らず東京大阪の新聞に對しても、不平を並べたい事は色々あるが夫は他日に譲つて置く。

オルガ

楚人冠

一、女の書分

九月の中頃とおぼえてゐる。或る日突然、次のやうな書面が、亞米利加から「東京朝日」の編輯局へ屆いた。差出人はマサチユセッツ洲の何がし町の女である。

『今年の二月二十二日、六歳になる私の最愛の娘を連れ出して、私の良人は私を棄てゝ何處かへ飛び出して了ひました。色々尋ね合せて見たところ、四月の二十九日に日本に逃げて行つたといふ事だけは知れましたが、日本の何處に居るか、何いふ變名を使つてゐるか、丸で分りませぬ。若し二人の居所が知れましたなら、甚だ御手數をかけて相すみませぬが、何か至急に私の所まで知らせて下さい。私は今一所懸命に可愛い娘の行衛を探して居るところであります』と先づ書いて、其の次に、其の不埒千萬な亭主の事を書いてある。

『私の良人は結婚以來何につけかにつけ私に辛く當り

まして、隨分私をひどい目に遭はせました。中にも去年などは、私を精神に異狀あるものとして、或る夜遲く私を無理無體に州立の癲狂院へ叩き込んだことさへあります。私は氣狂ひでも何でもありませんが、良人の親友で、而かも良人から何時も金を借りてゐる二人の醫師が、良人の命ならば、惟れ命惟れ從ふといふ調子なので、到頭私を氣狂ひにして了ひました。所が幸にして、私の兄が事情を知つて州の副知事に訴へ出たので、其の盡力に依つて、やつと私は病院から釋放さるゝことになりました。

『其の以來、私は到底良人と同棲して夫婦の樂を受くることは出來ぬと悟りまして、裁判所の手續をすませた上、私等夫婦は別居することになりました。而して二人の間に出來た娘は私の方で引き取つて敎育することに定まりました。良人は養育費として毎月三十四弗を私の方へ支拂ふ約束で、又時には娘に逢ひに來てもよいといふことになつて居りました。所が彼は娘に逢ひに來るといふ口實で私の家へ出入してゐるうち、いつしか娘を誘拐して何處へか行つてしまつたのであります。私の悲しさつらさに十分にお察し下さることゝ存じます。

『良人は娘を連れて出たとて、之は唯私を困らせたい許りなので、眞實娘を愛してゐるのでも何でもありません。其の證據には只娘を連れてゐるだけで、何の世話もしないばかりか、桑港のホテルで、娘が痲疹に罹つて大熱が出て、ひどく惱んで居りました時など、醫者にも見せず、捨て置いたといふ一事を見ても察せられます。』

『夫に良人には、其の娘の母と稱する一人の女がついて居ります。』

などゝ事も細かに書いてあつた。——而して此の書面に添へて、マサチユセッツ州の某警察署から發した「誘拐犯人逮捕依賴狀」といつたやうな一枚刷の印刷物があつて、之には其の男と娘との寫眞を載せた上、二人の人相書も詳らかに書き加へられてあつた。

二、其の姓

此の書面をよんだ一同は孰れも此のたよりない女の身の上を不憫と思はぬはなかつた。同時に、此のふりすてゝ逃げた男を不埓と思はぬはなかつた。苟も六尺の男子が、かよわい女を虐待して、剰さへ無理往生に之を牢獄同様の癲狂院に投じ、尚夫に飽き足らずして、手頼りの少い女房を振りすてゝ、何も知らぬ娘を復讐的に連れ出し、おまけに自分は他し女と一所になつて其處等をさすらへ歩くなど、聞いた許りて、腸の煮えかへる思がする。男は憎むべく女は憐れむべし。知らぬ間は兎も角、斯うと知つた上は、草を分けても、男の行衛を探し出し、ふん縛つてつき出せぬまでも、何とか計らつてやらうぢやないかと、義憤は期せずして人々の頭に起つた。

其處で、さし當り先づ第一の手段として、事件の大要を新聞に出さうといふ事に決したが、端なくも此に一寸一問題が起つた。といふのは、此の書面の差出人の名前が何と發音するのか分らぬのである。Eills と書いて、其がイールズとも、アイルズともよめる、エールズともよめばよめないことはない。佛蘭西流に發音すれば、エイー位でよいのかも知れぬ。色々評定の最中、偶々僕が其處へ行き合せたので、僕までが社會部の編輯長から御下問を蒙つた。

一體斯んな事件は、社會部限りていづれとも決するものなので、此の發音問題さへ起らなければ、無關係な僕などは、丸で斯な書面の來たのも知らずに濟んで了つたのかも知れぬ。丁度行き合せて尋ねられたからこそ、僕までが此の事件に與かることとなつた。――其處が又不思議の緣であつた。

僕は尋ねられて、イールズかアイルズの中だと思つた。何だか殊にアイルズとよむやうな氣がした。さう思つて一應さうは答へて見たが、何だか氣になる。英吉利には地名人名に途方もない發音をするのがあつて、飛んでもない失策をした覺が、僕等も屢々ある。地名で Sydeaham の「シドナム」、Llangollan の「ランゴスラン、」Cirencesterのシシスターを初め、人名では Cholmondeley の「チヤムレー」、Bailod の「バイヨー」、

Colquhoun の「コフーン」Strachan の「ストローン」Beauchamps の「ビーチャム」Vaughan「ヴヲーン」などの類が随分ある。うかと出鱈目を言つては相すまぬと思つて、念の爲に、相手が亞米利加人だけに、亞米利加人の某英字新聞主筆P君に電話で問ひ合せた。

此の問ひ合せの電話が又、思ひがけず異常に此の事件を發展せしめた。

三、此處にゐる

『Eills を何と發音するかを汝は親切に語るであらうか』といふやうな質問に對して、P君の返事は全く意外のものであつた。『それはアイルズと發音するのだが、君がそれを尋ねるのは、もしやジョン、アイルズ君のことを亞米利加邊から何か言つて來たのでないか』と折返し反問して來た。如何にもさうだ。僕は少し驚いて思はず『何うして君は夫を知つてる』と尋ねた。

P君の口氣を察するに、彼は豫てより此の「不埒千萬な」男を知つてゐて、現に今其の居る所も心得てゐるらしい。夫れならばわざ／＼新聞に書き立てる迄もなく、此處で男の行衛を突き止めて、早速女房の方へ知らせてやることも出來ると、僕は一寸嬉しかつた。

人の悪い話だが、僕は新聞學のインタービューの法則(?)に依つて、何食はぬ風で色々尋ねた。尋ねるに隨つて、P君は無邪氣に何もかも言つて呉れた。其の言ふ所に據れば、アイルズ君は今高等商業學校の英語の教師をして、傍らジャパン、アドバータイザーの事務を手傳つてゐる。娘も一所にゐる。亞米利加から何と言つて來てゐるか知らぬが、彼は米國で立派な大學の教育を受けた立派な人物で、日本に來てからも、相應に内外人の信用を得てゐる。P君なども日夕親しく附き合つてゐる。細君との間には頗る入り組んだ事情があつて、一概に細君のいふことばかり聞いてゐては、迚も事實の眞相を得られない。一應よく本人に逢つて、其の話を聞いて呉れてはどうだらうか』といふのであつた。

『一體其の男は今何處にゐる』と、僕は問うた。

『今とは？』とP君は問ひ返した。

『今とは今さ、現に今さ。』僕がいふ

『今なら此處にゐる。』P君がいふ

『此處とは？』

『此處とは此處さ。此の私の部屋さ』

早速一矢相酬はれた。草を分けても尋ね出すべかりけるジョン、アイルズ君は、丁度其の時P君の部屋にゐたのである。古い言草だが、成程世界は廣いやうで狹いと、僕はつく〴〵思つた。

右の次第を逐一社會部の諸公に復命すると、一同の面上に閃めいてゐた「義憤」は、少からず拍子拔がして、さういふ譯なら、明日此處へ來て貰つて、兎も角一同で逢はうぢやないかといふことになつた。

四、男の言分

アイルズ氏が翌日社に來ての物語は、頗る僕等の最初の考と違つた。物語ばかりか、彼れの樣子までが頗る僕等の最初の考と違つた。其の日は秋雨のじめ〴〵と降る薄暗い冷たい日であつたが、アイルズ氏は、長い防水マントを着て長靴を穿いてゐた。髭も何もない柔和な丸顔の人で、之を憎さげな荒くれた男のやうに想像してゐた僕等は、先づ意外の感に打たれた。

所で其の物語なるものが、根本的に細君の書面の趣とは違つてゐる。根本の相違は姑く後に說くとして、試みに其の二三點を例に擧げるなら、一には細君を無理に病院に入れたといふけれど、州の法律にはむづかしい規定があつてさう容易に人を氣違ひ扱ひに出來るものでない。次に變名を用ひてゐるだらう書いてあるが、何等恐るゝ所なきア君は來朝以來堂々と常に本名で通つてゐる。次に桑港で熱のある娘を打ち捨ておいたとあるが、其の節は薄暗くした部屋の中に娘と二人きりで籠つてゐたとはホテルも醫者も娘も知つてゐる。次にア君には娘の母と稱する女がついてゐるなどゝ言ふが、之も中傷の言であつて、丸で無根の言ひがゝりであるといふ。

之は細君の書面に就てのア君の辯明であつたが、ア君は更に進んで、何もかもあけすけに一家の事情を打明けてしまつた。僕は今之を一々此に書き立てる勇氣

もないが、かい摘んで、其の要點をいふと、――
アイルズ君夫妻の關係は、痛ましくも不幸なものであつた。元來ア君と其の細君とは初から信仰が違つてゐる。ア君は然るべき大學の教育を受けた人で、さうした人には能くある通りユニテリアンの教徒であつた。而してユニテリアン教會の牧師まで勤めてゐたとがある。其父はといふは、元は愛蘭出の新教徒、しかも殊に愛蘭北部の極端な羅馬教嫌ひであつた。同じ羅馬教嫌ひでも、愛蘭のは其最も頑なるもので、彼の昨今一部の愛蘭の民が愛蘭自治案に反對してウルスター附近に殆ど一揆に齊しい激烈な運動をやつてゐるのも、其元を糺せば新教徒の羅馬教徒に對する反抗てある。それ位つよい羅馬教嫌ひの血の通つたユニテリアン教徒なるアイルズ氏の妻なる人はどうかといふと、之は又羅馬教の中でも頑冥て聞えたジエジユイツト派の教徒である。之ては夫婦が折れ合ひよく收まる理窟がない。妻は娘のオルガを羅馬教徒に仕立てようとする。夫は新しいユニテリアン風に教育しようとする。衝突せざるを得ない。其の上、マサチユセッツ州は羅馬教徒の多い所で隨つて政治上にも羅馬教徒の勢力は非常に强い。羅馬教徒たる細君の親戚の辯護士ウヲルシユ氏が、州の副知事に選擧せられたのも、主として斯ういふ宗教關係に由るので、此等の事情か何かにつけてア君を不利の地位に立たせたとは一再に止らなかつた。

信仰が斯く違つた上に相手の細君といふが又大變な女であつた。最初から甚しい神經質の人とは承知してゐたが、それが次第に嵩じて、時には丸で氣ちがひ同樣になるともあつた。斯な氣質の女にはよくある通り、時々下らぬとを言ひ出しては、燒餅をやく、むか腹を立てる、泣きわめく、良人に喰つてかゝるが常て、不和な打ち解けた日とては、只の一日もない位てあつた。之と七八年連れ添ふ間に、女が死んで了ふとて騒いだことが三たび、亭主を擲つたとが二度、七十にもなる良人の老母を、死に損ひの、業つくばりのと、良人の目の前で口汚く罵つて、到頭出て行けと迄怒鳴つたとが一度ある。娘のオルガを連れて家を飛出したとも

兩三度あるが、其の度毎に男は娘の可愛さに、胸を撫でゝ女を呼び戻した。此の外に最もア君の心を惱ませたのは、ア君がユニテリアンの牧師を勤めて、人の敎導に與かる身の、之ばかりはと、百方留めたのも肯き入れずして、女は或る性の惡い高利貸の手代に使はれて、日步月倣（ひぶつきなし）の催促に步いた事であつた。夫も二人の住んでゐた町の內だけを回るといふならまだしも、遠くピッツバークだの、ボルチモーアだのいふ處を件の高利貸の男と連れ步いては幾日も〳〵家を明けた。良人が娘と二人で淋しく不在を守つて家政を整へて行く間に、妻は件の男とホテルで食事を一所にしたり、打連れて芝居を見に出たり、それは〳〵亂行を極めた。

亂行が餘り募るので、確實な醫師三人に見せたところが、いづれも精神に異狀があるといふ。乃ち相當法廷の手續を經て、妻を州立の病院へ入れた。入れた間もア君は屢々尋ねても行き、又娘のオルガも連れて行つては、母に逢はせた。夫人の手紙には腹心の醫師を語らうて、無理無體に入院させたやうに書いてあるが前にも一寸言つた通り、マサチユセッツ州の法律では、確かな醫師二名以上の診斷書を添へて、裁判所の許可を得た上でなければ、精神病患者として入院させることが出來ないのである。

所で入院させると間もなく、今までは丸で與り知らざるものゝ如く棄ておいて顧みなかつた細君の里方の方で、俄に辯護士を雇つて、ばた〳〵と十七日目に退院させて了つた。此の辯護士といふは今州の知事に選擧された男で、多少政治上に有力な所から、裁判所の命令も待たずに退院させたのである。退院後何したかといふと、今度はあべこべに裁判所にア君を訴へて、娘のオルガは妻の方に引き取り良人は時々逢ひに行つてもよろしといふやうな判決を受けた。英國で新聞社と俗人と訴訟で爭へば、大抵新聞社の敗訴となるさうなが、米國では男と女とが爭へば、殆ど盡く女の方の勝になるといふ。

せうことなしに、ア君は裁判所の命令を奉じて、判決通り實行してゐるの外なかつたが、此の間も妻の仕

打は依然として無茶苦茶なものであつた。或時例の如く娘に逢ひに行くと、人を戸口に立たせたまゝ何しても中へ入れない。入れないばかりか、家宅侵入だとか何とかいふ廉で警察へ訴へ出て、あはや自分を捕縛させやうとしたことさへある。幸にして其の時通りがゝりの人が二人證人に立つて呉れた爲、嫌疑はやつと霽れたが、あんまり忌々しいから、其の由裁判所へ訴へて、救濟を求めた。すると何事にも女の勝つに定つた米國の裁判所では、自分が娘を尋ね行くべき時間に、新に制限を加へて、何日何時にのみ之れを許すといふ判決になつた。其の定められた時間といふは、丁度自分の仕事の都合で、何しても出て行けぬ時間であつた。それに又子供は只の一晩も父の家に泊ることを許されない。そんなら一切外泊は許さぬのかといふと、妻にも自分にも丸で關係のない阿伽の他人の家には、平氣で泊らせておくやうな意地の悪いこともした。こんな風ではたとひ定額の養育費を送つても、娘の教育に使ふなどは思ひもよらぬことと思つた。實際又ア君の仕送りして來た金は、たはいもないことにばかり使つてゐたらしかつた。

夫やこれやで、マサチユセッツは到底愛兒の行末を托すべき地でないと悟つて、ア君は遂に子供を連れて逃げ出した。百方計全く盡きての上の覺悟であつた。人の父たる者の權利を保護し得ざるが如き國に一刻も居たくなかつたのだといふ。さういふ國は愛することも出來ない。又そんな國の爲に力を盡す氣にもなれぬといふのである。アイルズ氏は今こそ其の國籍が米國に在るが、元はカナダに生れた英吉利人で、十歳の時米國に來たのである。米國を去つて、カナダへ行けば道も近いが、之れから再び英國臣民の籍に入らんには、五個年英國の領土に居住する必要がある。夫よりも豫て人にも聞き書物でも讀んで、父の愛情の遙に能く理解されてゐる日本——女ばかりが裁判に勝つとは限らぬ日本にこそと思ひ立つて、急に日本に來ることゝなつた。

幸にして日本へ來て以來、內外の先輩友人の手厚い

待遇を受けて、P君は自身も然るべき職業を得たし、娘も無事に學校に通はせてゐる。誘拐といへば誘拐に相違ないが、一人娘の可愛さに斯ういふ事情て企てた誘拐であつた。逮捕依頼の印刷物の如きは、妻が副知事を說いて、急に警察から回付させたものに過ぎないといふことであつた。

『今若し夫人の方へ貴下の居所を知らせたら何うなるてせう』と、僕は聞いて見た。

『私は裁判所の命に背いて出て來たのだから、米國に居れば、無論法廷侮辱の罪に問はれるてせうが、日本に居れば先は安全と思つてゐます。唯心配なのは、何處までも連絡の强い羅馬敎徒のことて、何時手を廻して、娘を引攫つて行きはせぬかと思ふだけてす』と左も薄氣味のわるさうにアイルズ君は答へた。

戶外には、斯な沈んだ物語に似つかはしい秋雨がまだしと〳〵と降つてゐた。

五、捕縛

『アイルズが昨晩捕縛されたよ』と、瀧山町の角で行き會つたP君が突然僕の顔を見るなり敎へて吳れた。右の物語があつた後彼此一月も經つた後のことてある。さういふことのないやうにと心私かに祈つてゐた僕は、愕然としてP君の顔を見上げた。

どうしてと問へば、『何してだか丸てくわしいことは分らぬ、友人共孰も心配してゐる許りだ』と言つた儘忙しさうに、さつさと行つてしまつた。

六、さま〴〵の噂

追々とアイルズに關する事が、新聞にも出れば、人の口にも上つた。

アイルズ氏は日米罪人引渡條約の正文に依つて、正式に合衆國政府から米國大使の手を經て、日本へ引渡を要求して來た爲捕へられたのだといふ。罪名は僞證罪といふことて兒女誘拐や法廷侮辱ては引渡條約に依つて引渡を請求する譯に行かぬから、斯くは急に僞證罪として來たのだらうといふ噂もあつた。尤も本人は毛頭僞證罪などした覺はないと言つてゐたさうだ。

本人が捕縛せらるゝ前、娘のオルガは、男爵神田乃

武氏の手に引き取られて、男爵の懇なる世話を受けることゝなつた。本人は就縛の後市ヶ谷監獄に拘禁せられてゐるが、拘禁とはほんの名目で、獄内では居室寢具を初め、日々の食事にも出來る限りの行屆いた世話を受けて、左ながらお客にでも行つたやうに暮してゐた。典獄を初め監獄の吏員一同深く氏の境遇に同情を表して、氣の毒がらぬものはなかつた。ア君を知つた某子爵某々男爵其の他の人々も心配して、親切に色々の面倒を見て呉れた。高等商業の學生の中にも、可愛らしいもので、彼此と先生の爲に世話をやいた者が大分ある。其の外見ず知らずの人から慰問狀の來たことは、其の數を知らぬ位、中には、知りもしないに、書物や衣類の差入までして呉れた者が一人二人でなかつた。

獄中のアイルズ君は、讀書と執筆の他に餘念はなかつた。主としては、他日いよ〳〵米國へ引渡された後、裁判所に出て辯論すべき折の材料を集め、片手には又盛に手紙を書いて諸方へ送つた。僕の處へも二度ばかり來たが、其一つは、米國で裁判を受くる時の用意にとて、或る種類の材料を求て來たので、今一つは、何にかして引渡されずにすむやうな方法がないものだらうかとの尋ね合せであつた。彼が如何に獄中に煩悶したかを察するに足りる。其少し前彼が獄中で娘の名のオルガを題にして作つた詩一篇を公けにした。彼が子を思ふの至情言外に流露して、讀む人の袖を絞らせた。

兎角する中引渡が大分問題になつた。初から此の事件に關係した堀江辯護士などは大分盡力したやうだが、何にも引渡は拒めまいとのことであつた。本人は僞證なんどをやつた覺はないから、たとひ引渡されても二週間ほどの刑を食つて又日本に歸るまでだと言つてゐたさうな。蓋し夫は口先に平氣を裝うた迄で、最愛の娘を日本に殘して米國に歸り行く心中の苦悶は推察に餘ある。――但し此の頃は十中の八九迄引渡は免れまいとの噂であつた。

外字新聞の間にも引渡論は隨分戰はされて、ファー、イーストが、引渡條約の明文を擧げ來つて、引渡すに

及ばぬと論じたに對して、ジャパンメールが其の然らざる由を論駁したなどは一寸人目を惹いた。僕も氣がゝりだから、彼此法律家の意見を聞いて見たが、孰れも、米國が條約の條文に遵據して、正當に引渡しを請求して來た以上、日本で拒むことは出來ないといふに一致してゐた。唯本人に取つて一縷の望は、係つて米國から送り來るべき引渡請求の書類の上にある。若し夫が不備のものならば、引渡さずにすむと言ふのである。併し、大抵そんな都合のいゝことはあるまいとも大抵の者は言つた。

七、切迫

僕等の力には何して見やうもないが、併し何うか出來ぬものかと氣はあせつた。其の中に次第に日は經つて、米國政府から引渡請求の書類はいよ〳〵着いた。之が當局者の手に渡つて審按の最中に、米國政府から罪人引取の爲とて、政府を代表して、辯護士ジャッド、デユーッエー氏が警官フレッド、フリン氏と共に横濱に着くべき日取りも追々に近づいた。之が着いたら無論請求通り引き渡されて了ふに違ひない。いよ〳〵アイルズの命は旦夕に迫つた。引渡請求の書類がどう受理されたか、罪人受取の爲に來る人は何時到着するかと、アイルズ君を知つた者は、皆片唾を呑み眼を睜つた。

所が意外！わが親愛なるジョン、アイルズ君は十一月七日の夜突然司法大臣の命に依つて、市ヶ谷監獄から釋放せられた。

釋放せられた其の日に、米國から受取りに來た二人はエムプレッス、オブ、インデア號で横濱に着いた。釋放と聞いて宜しく呆氣にとられた。彼れの先輩友人は皆手を拍つて祝し合つた。僕までが小躍りせん迄に狂喜した。早速アイルズ君に祝辭を送つて、是れ實に貴下の勝利、日本の勝利、又ラヴの勝利也と言つてやつた。實際僕は之が米國に對する日本の勝利であるやうな氣がしてならなかつた。當の本人の喜は今更此に書き立つる迄もない。彼は取るものも取りあへず早速神田男爵の處へ驅けつけて、久しぶり父子相抱いて泣いたといふ。

八、晩餐

呆氣に取られた米國の吏員二人は、取り敢へず本國へ電報して、其の訓令を待つたが、日本政府で引渡の義務を認めずして之を拒絶した以上、今更如何ともすることが出來難い。日本で斯く小氣味よく拒絶したのは、彼を條約に規定した罪人と認めなかつた爲ともいふし、又僞證罪の意味が日米其の解釋を異にして、日本では本人が本人の爲に虚僞の申立をしたのは僞證にならぬ爲だともいはれたが、何れにしても、日本が正々堂々の理由に依つて拒絶した以上、二人は素手のまゝで、米國に立ち歸るの外はない。

いよ／＼立ち歸るに先つて、二人はアイルズと帝國ホテルで食事を共にし、打解けて相語つた後、問題になつた娘のオルガも見せて貰つて、快く分れて去つたといふ。

僕は羅馬史を讀む毎に、ビユーニック第二役の後、前日鎬を削りあつたカルタゴの大將ハンニバルと羅馬の大將シピオとが、兩人とも政爭の結果本國から放逐せられ、偶然小亞細亞の何處やらで落ち合つて、隔てなく打ち語らつた後、睦しく一所に晩年を送つたといふ段に至つて、何等ビユーニック第二役の好幕切(カーテン)ぞやと思はざるはないが、今此のホテルの對酌を聞くに及んで、又其の感に堪へぬ。

アイルズ君は多年の理想通り、愛兒と共に樂しい月日を送つてゐる。偶ま人がオルガに向つて亞米利加と日本とどちらが宜いかと尋ねると、何を馬鹿なことを尋ねるといふやうに大きい可愛い眼を見はつて、無論日本だわと答へるさうな。

附言

△早くから本題を明せば屹度故障がはいると思つて、態と十二月號の廣告には「○○○○」とのみしておいたにも拘はらず、突然故障がはひつて大かた脱稿といふ頃に○○○○は遺憾ながら見合せることとなつた。其の埋め合せにと書いた

本編は、急ぎのこととて、僅か六七時間に一度に書いて了つたので、字句も整はず説明も盡して居らぬ。之を澁川玄耳、松崎天民及亡命客諸公の雄篇の間に入れるのは何だか非常に氣はづかしい。前のてあつたならといふ愚痴か出る。謹て大方の寛恕を祈る次第である。

△五年前此處て愛讀を賜はつた「變な女」の女主人公たる變な女は昨年十一月二十七日に産後の惱みて敢なく此の世を去つた。十一月二十七日といふは、丁度岸の爲に强姦されたと言ふ月日に當るので、樣子を知つた者の中には天罰だといふもあれば、流石に其日と知つて良心の苛責に堪へなかつたのだらうといふ者もあつた。何れにして此の女が死んて了つたので、彼が岸を陷るゝに至つた心事は、長へに人間界に分らなくなつて了つた」

（大正二年十二月二日の午前四時了）

問題の人・噂の人

鐵拳禪

▼現下の政黨にて問題になつて居るのは、政友俱樂部と亦樂會との合同である。政俱の尾崎行雄君と亦樂の花井卓藏君の提携談を試みたのは事實であるが、まだ合同と云ふ所まで進んで居ない。が、此の二派は政黨組織ではなく、單に代議士の團體であるだけ、議會に一黨派として認められんが爲めの合同なら、輙く纏まるであらう。亦樂會の現在數は二十五名以上ではあるが、疑問の人物が四五名あるので、議會開會中に脫出せずとも限らぬ。若し退會者を出せば、是れ迄通り議會に特に一室を占める事が出來なくなると云ふ懸念があるから、矢張合同を利としてゐる。花井君も近來は政治趣味を解して來たから、尾崎君の力瘤の入れやう一つて、早晩ものにならうとの事だ。

▲花井君は有名な一人一黨主義者で、法律一天張で押通して來たが、近時の政界に對して餘程考へる所があるらしい。彼れが少時の理想は、二

十歳で辯護士となり、三十歳で代議士となり、四十歳で大臣になるにあつたさうだから、前の二つだけは都合よく行つたに附けても、後の一つを達する手段を講ぜねばならぬ。大正政變後は、政黨員でなければ大臣になれぬやうな傾向になつた。其の時勢の幾微を解するの機敏があらば一人一黨主義の非を悟るのは當然である。花井君の尾崎君と提携しようとするのは、少くとも彼れの進歩である。

▲尾崎君は、政倶の微力で何等成すあるに足らざる位は知つてゐる。何とか發展の途を取らねばならぬと、苦心焦慮して居たのである。けれども時機が既に去つたので國民黨と合同が出來ず、さればとて同志會と公然の提携も出來ず、自分で自分の將來が分らぬやうな風であつた。輕井澤に悠々として避暑はして居たが、其の頃から政倶の前途に對して尠からず頭を痛めて居たやうであつた。政倶の蹶起連は、尾崎君の優游して居るのに業を煮やして電報を頻りに打つたものだが、容易に朝霧の冷たき山を下らうとはしなかつた。

▲尾崎君の輕井澤滯在中に、後藤新平男と江木翼君は、遊説の序に其の地を過ぎつた。後藤男は世間體を憚つたものか、自身で尾崎君を訪問しなかつたが、江木君は尾崎君と膝突き合せて、時局談を試みて居た。或記者は丁度其處に行き合せたが、江木君とは知らずに、能く要領を得た突込んだ質問をする人とのみ思つて居たさうだ。不審に思つて名刺を交換して見て、始めて其の江木君なる事が分つたと云つて居た。敏辣な江木君の事であるから、無意味の訪問とも思へぬが、輕井澤では同志會との提携談や何かは無かつたさうである。

▲政倶の澤來太郎君は、憲政擁護の跡仕末を附ける意味で、政倶を何うかせねばならぬと云つて居たが、過般愈よ代議士會を開いて貰つて、三個の提案を以て、小手調べを行つたさうである。其の提案の第一は、政倶を政黨組織に改め、之に伴ふ黨費を準備し、活動を開始すること。第二、若し之を不可とせば、退黨當時の宣言に鑑み、擧つて政友會に復黨すべきこと。第三、之も行り得ずとせば、從來他の唱導し來つた非政友合同と云ふが如き無意味の行動に傚ふことなく、眞に大正の新氣運に順應すべき新運動を敢することと云つた風のものであつたが、第二と第三は其の時期に非ずと云ふ理由の下に否決し、第一は全會一致の賛成で、固く現狀維持を圖り、少くとも議會前に實現の端を啓くと云ふ事に決したさうだ。

▲斯うなると、亦樂會との合同は一寸難かしくなる。議會だけの提携では滿足せず、合同した上に、更に政黨組織と云ふ順序にならねばならぬ。若し政倶が政黨組織とならねば、退會者が續出するに決まつてゐる。既に政黨組織とすれば、地方に支部を置くとか、遊説するとか、所謂黨費の準備が必要である。澤君の提案は愛黨心から出たので、後藤男の新政黨に對する啖呵とは違ふが、黨費の準備を吹き掛けた處は、幾分似寄つてゐる。議會前に政黨組織が實現されねば、或は脫出するでは無からうかと、尾崎から睨まれてゐる。

▲福澤桃介君は、政倶の維持費として毎月六百圓づつ寄附して居た。夫

れに憲政擁護費の殘金があるので、今日まで黨費に缺乏を來すやうな事は無かつたが、今後政黨組織にするとせば、福澤君の懐ばかり當てにする譯にも行くまい。尾崎君なり、菊池武徳君なり、軍資金の調達をせねばならぬのだか、諸君には國民黨の犬養毅君のやうな辛辣な腕は揮へまい。未成年者團體が、なまなか大人的團體にならうとして、却て危機に瀕するではないかと觀測してゐる向もある。

▼長閥が薩派に降したやうに取沙汰されてゐるが、却々さうではない。山縣有朋公の樞密院議長を辭せんとしたのも、寺内正毅伯が朝鮮總督の職を去らうとした下心のあつたのも、皆是れ薩派に對する一種の反抗に外ならぬ。薩派の山本伯が、如何に政友會を味方とし、着々自派の勢力を扶植しても、茲で長閥に反抗されると困るので、山縣公を百方慰撫して辭職を思止まらせ、其の結果寺内伯も辭意を飜したのであるさうな。

▼後藤男は、近來頻りに長閥の有力者と往復してゐる。田中義一君が洋行すると云へば、其の出立の間際まで色んな打合をしてゐる。寺内伯が上京すれば、夫れを訪問して何か畫策するやうな態度を見せる。彼れは斯の如くして、自分の名の活字から消え去らないやうに努めて居るが、誠心誠意官僚の再興を祈つてゐるか否かは疑問である。都下の新聞紙は仲小路廉の脱黨を以て、官僚系再興の噂を傳へたが、事實さうでは無かつた官僚系は既に死滅に歸したものである。其の死滅に死したものを蘇生させるやうな、一種の空氣を作るのは宜しくない。後藤男の一擧一動を見て、何等か政治的意味のあるやうに解するは、畢竟するに彼れを除りに買被つた者である。

▼山縣公は、原敬などは感服もしないが、星亨だけは偉い人物だと云つてるさうだ。彼れは有名な政黨嫌ひではあるが、明治三十一年の交に、彼れが最後の内閣を組織した際には、何うしても憲政黨と苟合し、星亨と握手せねばならなかつた。夫れは誰も知つて居る通り、地租增徴案を通過せしめねば成らなかつたからである。其の際の策士は、國民協會の領袖元田肇であつたさうな。

▼元田は、山縣公の命を含んで星亨を往訪した。と、其の座には片岡健吉を始め、憲政黨の諸星が列つてゐた。元田が秘密な要件であるから御人拂を願ひたいと云ふと、「星が諸星に向つて横柄に口を開くと、皆の者が不平な顏もせずに退いて了つた。之を見た元田は内心、星の魔力あるに驚いたさうだ。で、星に對議會策に就て山縣公が、君と相談したいと云つてゐる。公自ら往訪すべきや、或は場所を定めて會見すべきやと云ふと、星は即座に『僕が直ぐ是れから公を往訪しよう』と答へた。其の間に何の考慮も要さなかつた。元田は更に驚かざるを得なかつた。

▼元田は腕車で、星は馬車である。一刻も早く山縣公に注進せねばならぬのだから、元田は途中から網曳を附けて、大急に急いで首相官邸に駈け附けて、此の由を話すと、山縣公は非常に喜んださうだ。間もなく星がやつて來たので、元田は次の間に息を殺して、山縣公と星との會談を聞いて居たが、『夫れ程にお困りなら、國家の爲めに援助して上げよう亨一人では憲政會を自由にすることが出來ぬが、自分の乾兒が三四十人

もあるから、夫れだけは纒めて贊成する事に致しませう。時に貴下の乾兒は幾人ありますか」と反問された時は、山縣公も顏色が無かつた相である。此の數時間の會談で、地租增徵案は議會を通過したのであるが、夫れ以來山縣公は星の手腕に傾倒したさうである。

▼政友會の武藤金吉君は、選擧區の關係で、田中正造翁の提灯を持たねばならなかつた。田中翁の葬儀の前日、態々上京して政友會本部に村野常右衞門君を訪ひ、『義人田中正造君を敬弔す、政友會』と云ふ電報を打つ事の相談をした。傍に居た遠藤良吉君は、其の電報を取り上げて見て『義人の義は、人偏の僞の誤りではないか。夫れに、政友會の名を以て弔詞を發するのは怪しからぬ』と揶揄つたので、遂に沙汰止みとなつたさうである。

▼高橋藏相は、反對黨の憎惡を買つて居るが、政友會では可なり人望がある。一體彼れは鄙吝で、同郷人から招待されても、招待の仕返しをした事のない男であるが、政友會に對しては此の鄙吝性を露出しないさうだ。曾て政務調査會が無事に結了した際などは、高橋男の喜悅一方ならず、ウヰスキーを御馳走して、外の見る目も氣の毒な程政友會員の御機嫌を取つて居たさうだ。彼れは然う惡い人物ではないが、一事毎に何數と屁理窟を比べて、他の言葉に耳を傾けないので、嫌はれるのである。此の屁理窟を云ふ癖さへ改めれば、人心が收攬し得るであらう。

▼今回の海軍大更迭で昇進したのは、山本首相愛婿の財部彪君で、中將となつた。これで海相になるの下地が出來たが、急に齋藤海相の更迭を見るとは思はれない。若し山本内閣が來年まで繼續して居れば、或は齋藤男が辭して、其の後釜に財部君が据はるだらうとの事である。出羽重遠君や、松本和君も、一度は海相になるべき人物と見られて居たが、今回の番狂はせの爲めに、到頭ならずに終るかも知れぬ。

▼海軍の將星中では、最も注目に値する人物であるが、上泉德彌、川島金次郎、大澤喜七郎の諸將は、待命仰付けられることとなつた。上泉少將は山形の出身で、骨硬な人物である爲めに、薩派からも毛嫌されてゐた。鎭海灣の經營者で、當時は大に鳴らしたものであるが、其後は詰らぬ役廻りを勤めて居た。此の程佐世保水雷隊司令官になつた許りであるのに、直ぐ其の職を去るべく餘儀された。川島提督は南淸革命當時は第三艦隊司令官として南淸の警備に當つて居たが、肝付中將の後を襲つて水路部長となつた。圓轉滑脫で交際が旨く、海軍外交家とでも云ふべき一種の手腕を持つて居るのであるから、水路部長の適任者ではないが有爲の將官であるから、待命はちと酷過ぎるやうである。

▼寅の年生れか何うかは知らぬが、人間の虎もだいぶ居る。代議士には長崎の横山寅一郎、滋賀の村田虎次郎、吉田虎之助、福島の鈴木寅彦、德島の中島虎之助等がある。横山君は醫部、中學校長、縣會副議長を經て今日に至れるもの、村田君は大津市長、吉田君は常盤村長となつた經歷を持つてゐる。鈴木君は早稻田の出身で、日鐵に入つて手腕を鍛ひ上げた男である。中川君は砂糖屋であるが、論壇に立てば辛い事を云ふ人物である。虎の中でも最も吼えるのは此の男だが、安政六年の生れであ

るから、齢は仰いでゐる。次回の寅の年まで吼え續けるか何うかは疑問である。

▲寅彥には、なほ脚本家の右田と、洋畫家の相田とがゐる。虎次郎には洋畫家の兒島と、文博の內藤とがゐる。內藤君は京大教授で、操觚時代には湖南と稱して、可なり氣焰を吐いた男である。虎之助には、豫言者の宮崎、寅之助には小說家の後藤がゐる、後藤君は宙外と號し、非自然主義などを唱へたが、虎性を發揮する點に於ては、宮崎君の獰猛、熱烈に及ばぬ。畫家の川端虎三郎（玉雪）、手紙研究者の杉谷虎藏（代水）、獨逸大使の杉村虎一の三君も亦、同じく虎ではあるが、其の這り口を見ると、猫に類するやうな處がある、女性のとらに至つては、餘りに多過ぎるから茲には舉げない。

▼中村不折君は、洋畫の方よりは六朝風の書で持てゝ居るが、此の頃又支那から珍本三冊を手に入れたので、毎日手習をしてゐるが、遠からず草書の書體を一變すると云つてゐる。此の珍本は、支那から某骨董屋に之を不折君か、山本悌二郎君かに賣つて吳れと云つて來たのであるが、不折君は直樣千二百圓に買取つて了つた。其の翌日山本君が買ふ積りで見に行つたが、既に賣れたと聞いて非常に殘念がり、不折君に二千四百圓で讓つて吳れと云つてるさうだが、彼れは珍本を玩弄する者には渡すことが出來ぬと威張つてゐる。

▼澁澤榮一男の道樂は、ハチ〱で、誰れが何と諫めても之を止めようとせぬ。毎月一週間は何處かに雲隱れするさうだが、何人も其の行方を知る者がない。斯の人にして斯の道樂あるのは、洵に慨嘆に堪へぬと、某實業家は云つて居た。

伏見宮殿下と閑院宮殿下

文學博士　三宅雪嶺

伏見宮殿下と閑院宮殿下とは、役柄でいへば明治天皇に於ける有栖川大宮及小松宮といふやうなところであつて、宮中にも、社交的にも、重きを成してをられる。今年薨去せられた有栖川威仁親王は年齡に於いて二殿下の間に在り、先帝も大に慈まれ、今上陛下も深く御信頼あつたとの事であるが、何分多年の御病氣で

劇務に與からるゝ事が六ヶ敷かつた。今の處兩殿下が何かにつけ親王を代表せられる形がある。御兄弟であつて、年も僅か七ッ違ひながら、容貌も性格も色々と違ふ。素と御兄弟の數が多く、大分年齢の違つた小松宮、北白川宮等は兄に當たられ、東伏見宮殿下は弟に當たらるゝのであつて、中に別の御血統のやうに考へられたのがある。伏見宮殿下は物柔わらかで御叮嚀であり、人をして畏れ多いやうに思はしめられる事もある。小松宮北白川宮等もさういふ處があつたが、閑院宮殿下は聊か趣きを異にし、頗る豁達であつて、相應の官吏でも貴様呼ばはりにせられる事があり、決して横柄なのではなく、貴様呼はりの間に親しみの情が現れるのであるが、時として顔を片附けて濟まして居る官吏が面喰つたりする。それだけ軍人として普通の軍人らしいところがある。宮様だとして三月の内裏様のやうに思ふと、事が間違ふ。これまで大將中將になられた親王は名譽官でなく、實に相當の職務に堪へられたのであるけれど、自ら陣頭に立つて指揮せられるやうな事は、周圍の人よりして成るべく御遠慮申上げる事になつてをつた。素より必要な場合には危險を踏まれるのであり、伏見宮殿下も南山に於いて猛烈なる敵彈を冒され頗る危險であつたのである。が、閑院宮殿下は司令部で策戰計畫を掌られるよりは、自ら闘將として進むのを望まれる方である。佛國のサンシルレコール及び其他で騎兵の御修業あり、御歸朝後も常に騎兵の方面に當たられ、若し歐洲大陸の如く戰場に大騎兵團を必要とするならば、殿下は此方面で大に功を表されたであらう。日本では騎兵がさる位置を占めず、殿下が往々大突撃を欲せられても事情が許さず、御勇敢の割合に十分に勇敢を發揚せられる場合が尠かつた。然し師團長とし、軍司令官としては騎歩砲等の差別がない。御出身が如何にあつても、今は將に將たらるゝのである。只歐洲に於ける如く騎兵を以て大功を立てられる機會が無かつた事は惜しき心地す。

現に伏見宮殿下は內大臣であらせられ、閑院宮殿下は尙容易に現役から離れられる事がなからう。有栖川

大宮は戰役毎に重職に當られても、左大臣になり、元老院議長になり、軍事以外の事に携はられたが、小松宮は殆ど全く軍人で通された。大隈伯が國會開設を上奏したのは實に左大臣の宮を通しての事であつて、是れに他の閣員も少からず當惑した。近く桂内閣が議會で行詰つた時、陛下より政友會總裁西園寺侯に御沙汰があり、侯は解し難き節あつて内大臣の宮に御伺ひしたりした。斯かる邊になると宮殿下も餘程御配慮あることと思はれる。今後も樣々な事件が起らう。桂公の如く辛辣な手段を敢てする者も少からうが、何處から何事が起らぬとも限らぬ。偏へに宮殿下の聰明に俟たねばならぬ。閑院宮殿下は恐らく官職に於いて軍事を專らにせられ、往く／＼は參謀總長にもなられるであらう。これまで位を重んじながら割合にこれに拘泥せず、有栖川大宮も三條相國の下に左府となられ、後參謀總長になられても、山縣大將が其の職に當つたり、川上大將が其職に當つたりした、其後位の尊くない者が其職に居る。軍人たる親王は昇進の年限が來れば第一に昇進せらるゝに極つて居つても、漫りに昇進することが出來ぬ。職に當るのも能力を認められての事である。是れ親王も常に努力せねばならず、又情實多き國政の中で希望を繫ぎ得る所以である。閑院宮殿下は親王でなくても參謀總長と爲られる方であらう。

有栖川大宮と小松宮と並んで重きをなされた頃、小松宮は御旅行などで世間から何かの噂があつた。有栖川大宮はさうでなく、威仁親王の如き、歐洲御旅行中でも頗る嚴肅であつた。閑院宮殿下は佛國で何かと取沙汰する。豁達なる御性質として興あることゝ言はれる。

立入つた事は抜きにして、今のところ、伏見宮殿下は前年の德大寺公といふやうな位置に居られ、閑院宮殿下は皇族軍人の先進者として重きを成されるのである。均しく軍人であつても文武に分れ、今上陛下を輔佐せられつゝある。明治年間に聰明なる親王があつたやうに、大正年間にも聰明なる親王があつて心强く感ずべきである。皇室と人民と懸け離れて意志の疎通

を缺いては容易ならぬ事である。皇族が其中間に立たるべき順序とし、別當等が早く其邊に氣附き、相應の取圖ひするがよからう。明治維新の詔に、「表は朝廷を推重して實は敬して是を遠け、億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能はざる樣計り成し、遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果て、其が爲今日朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて朝廷は倍々衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し、かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや」とある。大正年間は當時と大に違ふが、益々圓滿にするが爲めに其れ相應の事を要する。

女優十名家感想錄

この感想錄は大體「女優の誇と屈辱」といふ題意の下に、現在女優の十名家に委囑して、蒐錄したところのもので、中に全然題意に拘らないものゝあるのは、この題以上に適當な感想として發表せられたものである。そしてその人選はあらゆる各劇壇の女優を代表的に網羅したものであることをも序に斷つておく。（一記者）

△女優の屈辱と誇

藝術座女優　松井すま子

私は女優としての誇りよりも屈辱の方をより多く感じて居ます。迫害せられて居ます。全體『女』と言ふものは何の場合にも人に媚を呈さなければならないものでせうか。何時も默つて人の言ふなりにばかりなつて居なければならないものでせうか？　之が昔から此日本の女の習慣となり美德となつて居ます。其ために私たち女の仕事なり藝術なりが侮辱されてる事はどれ程だか知れません。女も男と同じ人間で有ると口には立派に言ふ人でもいざと言ふ場合に、何か事件が起つて男と女の重大な爭ひとなるともうだめです。女の方が正しと分り切つて居ても、女で有るから男には一歩を讓らなければならないと言ふ事になる。何の故を以て女は男に從がはなければならないかと口惜し涙を流しながら、夫でもやつぱり私自分も此呪ふべき美德や習慣から全く逃れる事は出來ず、胸をさすり涙を吞みながら泣き寢入りに目を瞑つて了はなければなりません。そしてやつとの事いろ〳〵に心を持ちなほして胸が靜まると、すぐまた新しい問題が起ります。其度毎に掻きむしられる樣な思ひをくり返します。けれどそんな事はまだ〳〵小さな事です。もつと〳〵大きなそして許しがたい大きな侮辱を受ける事が他に有ります。たとへば男と女が共有して作る藝術です。男の藝術が上にたち女の藝術が次に立つ場合は夫で結構に治ります。けれど何うかして女の藝術が上に立つ時が有ると其時程此習慣を呪ひたくなることは有りません。私の事業から申せば劇の稽古の時です。役の精神を舞臺の上にあらはす技藝の點に於ては幾ら女だつて私には私自ら信ずる處が有つて進みます。少なくとも或種類の男の俳優よりは私が上だと信ずる場合が幾らも有ります。その時自分

の信ずる所に向つて進まうとすると『女のくせに生意氣で有る』とか、『女が言ふ意見に從がふのは不見識だ』と言つて夫に反對する。今度のサロメ劇の如きでも動きについてはローシー氏の指導を受けたのですが、ローシー氏が敎へられる身體の動きについての心理、私にははつきり夫が分ります。そして夫が先生がたの御意見と解釋に相違しない限り私は私の信ずる技藝で夫を演じ活さうとたゞ夫ばかりに熱中する。けれどローシー氏の心理を呑み込み得ない人が有つた時が騷ぎです。其人が自分自ら解釋を下して私を夫に從はせ樣とする。そして私が夫に對して不快な顏色をしたり、從はなかつたりすると、すぐ例の生意氣だといふ態度で來る。私はこんな事を思うても口惜し涙に瞼が濡れます。そして內しよでそつと涙を拭く事が有つても素早く見付けて『女の涙を持つて訴へる卑劣な奴』とのゝしられる。全體男は何の果報が有つてそう勝手な事が言はれるのでせう？　女は何がためにそうまで男に迫害されなくちやならないのでせう？　女にも血が有り魂か有るかぎりそう何時までも屈辱され迫害されて居られるものでは有りません。あきらめの早い藝術家ならスッパリと藝術を捨てるでせう。外に慰安を求めるでせう。けれど私の樣に親を捨て姉妹を捨てまでしてすがつた藝術——世界のあらゆるものに代へたたつた一ツの寳で有る。此藝術にはなれるよりはむしろ死を選んだ方がましだと思ふ位ですから、飽くまで此苦しみと戰ひながら何時までも藝術の道に引ずられて行かなければなりません。けれど何んと言つても弱い女の心が、どの程度まで夫に打勝つ事が出來るか、夫ともまけて氣狂ひにでもなつて了ふか？　私はそんな事を思ふと言ひ知れない悲しい涙が頰を傳ります。有名な聲樂の天才の環さんは、帝劇のオペラ部へ入ひられて其處の明星で有つたにも拘らず何に苦しんで遠い南洋へ落ちて行かれたでせう？　而もオペラがだん〳〵物になり掛つて來た時を選んで何のために我から望んでそんな事をされたのでせう？、其邊の事も私にはよく察しがつきます。そして人傳にも聞いて居ます、內外から恐しい壓迫を加へられて夫に堪えなかつた事を。斯う言ふ樣にして何時の世に日本の劇界にサラベルナールは生れる事でせう。只々人事なら ず寒心に堪えられません。幸福なのは自分一人で作る事の出來る藝術家です。人にはかけかまひない自由な藝術家です。ですから此方には、ずゐぶん日本にだつて與謝野さんはじめめい〳〵其道の天才が自由に發展されて居られます。けれど〳〵女優だけは現在の日本の有樣ではとてもとても自由に發展すると言ふ樣な事はむつかしいと思ひます。こんな事を申しては又『女のくせに生意氣な』とお叱りを受けるかも知れませんが、他の場合はとも角も、藝の上から丈けは『女』と言ふ一割も二割も損な名詞を永久に取りのぞいて頂きたい望みでございます。

女優としての誇り、こんな事はまるで感じた事が無いと言つていゝ位です。只西洋には女優と言ふものが早くから有つて、どんな粗雜な女本位の芝居でも立派にし活して居るにも拘らず、日本の芝居にある女は、皆女形と言ふ男優が扮するので有つて、夫には型と言ふものが出來て居る。そして其型は大てい、表情のないのを美德とする日本在來の御型的

なもので有つて女の個人性を發揮する樣な芝居はあまりなかつたため、男優でも長年の練習によつては立派に演こなせた。演こなせた位でなく全部男のものになつて居た。けれど西洋劇には女本位の芝居が多いため、いろ〳〵な個人性の特色ある芝居が多い。斯した女になると多年の練習の結果で出來上つた女形は第一番に骨にしみ込んだ、日本の心のかたを破らなければならず、さん〴〵の苦心でやつと夫を打破つた時はもう、とかく大童(わらは)の地の男になりたがる、只々夫を見た時だけ私たちは幸福を感じます。どんなに突込んで演じた處でそんな事の有りやうはづはないのですもの。まあこんな事が女優の誇りと言へば誇りとも言へませう。其他は苦しい事だらけ、前に申した樣な苦しみの外にもまだ〳〵かぞへられない屈辱が有ります。

△女優生活に入つてから

帝國劇場女優　村田嘉久子

私が女優生活に入りましてから、それでも、もう足掛五年になります。――お稽古の間が二年と、舞臺に上るやうになりましてから三年と。ですけれども藝は一向未熟で、何時まで經つてもお恥しい次第で御座います。

こんな特殊の生活に入りましてからは、いろ〳〵と異つた經驗も味ひますするし、謂はゞ世間も廣く、到底も此樣な生活に入らねば得られないやうな事まで知る事が出來ますけれど、その代り又他人(ひと)樣の想像も及ばないやうな苦い經驗のかず〳〵をも味はつて、苦しい思ひを致す事も御座います。

何と申しましても、女優として立つて行くには、舞臺の上が大事で、つらい事も御座います代りに、それと同時に面白味もそこにあるので御座います。

お世辭にもせよ、見物の方が手を拍つたりなどして下さいますと、矢張り嬉しくて、又一段と氣が乘つてまゐるもので御座います。尤も見物の方は餘り當てにはなりません。此方で一生懸命に演(や)つてゐても左程に酌んで下さらない事もあれば、また端役かなんかの通らないところで喝采して下すつたりなんかして、羞しいやうな擽つたいやうな感じのいたす事も御座います。ですから此頃では、そんな事を餘り氣に懸けないやうにして、内部の方に「今日は能く出來た」と一言云はれるを此上ない樂しみにいたしてをります。

初めのうちは舞臺に出ましても、殆ど無我夢中で、何でも彼でも無意識に、只教はつた事だけをそのまゝ演(や)つてゐたやうなものですから却つて氣骨が折れませんでしたが、此頃では何だか獨りで突き離されたやうな、それと共に責任が重くなつたやうな氣が致しまして、どんなにか辛い思ひを致します。それに教へられた事を能く覺え込めない時程辛い事は御座いません。

辛いと言へば、苦心談などと被仰る方も御座いますが、私共はまだ苦

心談などゝ申上げる程の苦心をした事も御座いません。ほんのちよつと上つ面の苦心に過ぎないので御座いますが、舊劇と新劇とでは何方か…と申せば、舊劇の方が私どもにとつて演(や)り難う御座います。と申すのは新の方にはこれといふ一定の型が無いからで御座います。尤も型が無いから、それを自分で新たに工夫して演るのは中々六ケしい事で御座いまして、却つて型をそのまゝ演る方がどんなにか演り易い場合も御座いますが、まア何方かと言へば、一般に舊劇の方が私共には六ケ敷いやうに思はれます。

㊂

それに、御承知の通り此帝劇では替り役と言つて、一芝居の中に何人も替つて一人の役を勤める事が御座います。現にこの興行にも、今は私が政岡を演つてをりますが、明後日からは律子さんがお替りになるといふやうに、これも大勢居るから仕方が無いので御座いますけれど、何よりも是れが辛う御座います。誰しも他人(ひと)に負けまいとする氣が御座いますものですから、それを列べて批評されるとしてみますと、中々迂濶(うつかり)はしてをられません。一芝居をずつと續けて演るよりはどんなに頭を惱めるか、それこそ身體を不良(わる)くするやうな事もあるので御座います。今度など仕合な事には私が最初に政岡を演つたので御座いますから、比較的に氣樂で御座います。どうしても後になればなる程演り難う御座います。私もまだ八汐や沖の井を替つて勤めるのですが、政岡を演つて了つたのでホツと呼吸(いき)をつきました。もうそれは〳〵芝居が濟んでお湯に入つた時の嬉しさつたら、それこそ譬へやうも御座いません。

私も斯うして女優に成つたので御座いますから、どうかして一生懸命勉強して、いつまでも演つて行き度いものだと思つてをりますが、女優の生活には普通の方に知れない辛い事や悲しい事が隨分御座いまして、いろ〳〵の目に遭つておくのも、經驗になつて良い事では御座いませうが、社會から女優といふ者をいろんな目で以て觀られるのには全く弱り切つて了ひます。時にはつく〳〵素人の方をお羨しいと思ふ事も御座います。例へば芝居一つ見に參るにしても、又一寸何處其處へ出掛るにしても、素人の女ならば何の氣もなし平氣で行かれ處でも、女優をしてゐるばつかりに、餘計な氣兼や苦勞をするかと思ふと情なくなる事が御座います。何だか下らない事をお喋舌りして相濟みませんでした。

△汽車の窓より

近代劇協會女優　山川浦路

舞臺における誇などと申しますことは、それは決して私などのとやかう申し得るものでは御座いませぬ。ほんとに誇りなど申す緊張した氣持がありますれば、私どもの拙劣な藝ももつと進歩することでせうと思ひますけれども、常々芝居はみな大勢の方の集まつて完成する藝術だからどんな場合でも極て謙遜した心で、どんなことでも忍耐して忍耐して忍耐し徹すのを唯一の道と心得て居れと聞かされて居りますので、只

此の忍耐が徹された時に、藝術の前に謙遜であつたと感ずるのが謂と申せば自矜位なもので御座います。たとひどんなつまらない些末な藝でありましても、極謙遜な心で、その役に沒頭しますと、いつしか自分の身體が舞臺の上にあり、觀客の眼の前にあると云ふことを全く忘れてしまひまして、ただただ藝の世界に遊離して居ますやうに感ずる瞬間が御座います。斯麼場合には私は何時でもこれが自分の一番氣持のいゝ愉快な刹那であらうと感ずるので御座います。そして斯う云ふ刹那が度々閃いて訪れて來ます折りは痛切になりましても恍惚として居ます。

女優と云ふものが、はじめから社會の罵倒や嘲笑を豫期して立つた以上大抵な侮辱は客觀してしまつて、侮辱と感じながらも苦にしないで居られますが、舞臺の上で、自分が藝を演じて居ると云ふことを忘れて、其の芝居以外にたゞ自分の感情の動く儘に、演出以外に一寸でも笑つたりした時は、まだ藝術と申す程の事ではありませぬながらも、何だか自分の藝術を蔑視したやうな氣持がしまして一番すまぬ樣な心持が致します。

以上は極々貧弱な私の經驗の中から申しあげましたことどもでおたづねの御返事々々申すには相應ひますまいが旅先のこと故あしからず思しめしてくださいませ。

△舞臺の上と樂屋の裏

舞樂協會女優　林　千歳

舞臺生活をする者の半面には、必ず樂屋生活といふ一面を有つて居ります。いつも俳優や女優の舞臺の華やかな生活を御覽になつてる多くの方々の中には、優人の樂屋生活もまた舞臺のそれと同じやうに華やかであるやうに、一種の美しい幻想に包んで御考へなさる方が比較的澤山御座いますが、私自身には舞臺生活と樂屋生活とは殆ど正反對であるやうに思はれます。すべての感じは非常に現實的で雜駁で、一口に申せば藝術離れがして居るといふことをよく感じることが出來るやうに思はれます。

舞臺へ出ます前の五分十分の間に、自分自身の鏡裡に映る扮裝の姿や顏は我れながら厭に思へてなりません。舞臺に出れば目の醒めるほどお美しいお友達の女優方のお顏や姿も樂屋では半ば技巧に塗りかくされて、生きた美しさを失つて、まざ／＼と噓であり、假面であるのですもの。それに舞臺の背景を一重隔てた裡は、何處も彼處も、極めて現實的なそして始終動いて騷いで、乾き切つた空氣より外、探さうとしても何もありません。私はいつもさう思ひます、俗にうら、おもてといふことを申しますが、これほど烈しく、強い差異が何處にあらうと思はれます位で御座います。

斯ういふ空氣の中で私は何うかいたすと、大變しんみりした氣持になります。樂屋入りをして部屋に這入りますと生々して居た前夜の花が褐色に萎れて饐えた花の香に包まれた時や、其夜の劇が終へて、手早く扮裝を洗落しながら遠く聞える大道具を取こわす、槌の響を耳にする時などは、何とも云へぬ靜かな、寂しい心持になります。

形と表面の外には心とか氣持とかいふものゝ添はない樂屋の空氣を私は全然無意識に呼吸して居ることが出來ないので、それでつひ暗然とした氣になつて了ふことがあります。心持の添はない生活が時には厭はしくも寂しくも思はれます。

けれども舞臺に一歩踏み出した時は、私は非常にうれしく思はれます。せめて或程度の滿足を自分に丈でも藝術上に得たいと思ふのです。いろ／＼な階級やいろ／＼な社會や、またいろ／＼の性格に扮して其人々の生活に或時間の間丈でも這入つて見得られる舞臺の生活は、ピンからキリ迄の人と人の世の研究をするといふ興味――其興味といふ意味に於て舞臺の生活を歡びと希望に滿ちておくることが出來るので御座います。

△好きな芝居と好きな役

新劇社女優　酒井よね子

元々芝居が好きで役者になつたのですから、どんな芝居が好きの、こんなのはいやだのと、撰好は致しませんが、それでも自づと好きな芝居とまた左程でもないのとが御座います。

それは廣く讀みませんし、また年はも行かぬ小娘の事故、わからないせいもありませうが、私の趣味とか性格とかいふものから申しますと、何れかと言へば理屈ッぽいものや、喜劇はあまり好みません。しんみりした氣分劇のやうなものや、しみ／＼と身に徹へる世話な芝居が私は好きで御座います。

そして私がこれ等を演じますには、それ／＼その芝居の味によつて多少手心も變りますが、唯極く素直に、お芝居をしずに、生活そのものの味を一呼吸々々々の間にも現したいと願つてゐます。

それから氣分劇と申しましても、社會劇で練つた上で、私は演りたいと思ひます。今迄に皆樣のなされたやうな妙に非現實的な、フワ／＼したものではどうかと私は思つてゐます。こんな事を申しますと益々六かしくなつて、私などには當分まだ演じられさうに御座いません。ゆく／＼はせめてメーテルリンクの「ペレアスとメリサンド」を研究的な態度でやつて見たいと思つてゐます。此芝居は私が大好きな芝居で御座います。

何しろ劇は自分の既往の經驗を土臺にして、解釋し、表現する外はないのですから、ある一役をとりました時は、いはば自分のといふ流れの吐口を得たやうなものだと思ひます。ですから餘計なものは取捨てて、身の内に潜んで居る生活の心をさぐり求めて、それを思切つて力強く、

そして適當な形式で押出す外はないと信じて居ります。

これ故自分の經驗になく、自分の思想、性格に遠い役に扮する事は餘程困難でもあり、且ともすると嘘になり勝です。

「單なる想像のみでは解釋は出來にくい事ですし、また柄（から）の關係もありまして、私の今日では年輩（ねんぱい）の役はやりにくう御座います。

で今日のところ私に嵌（はま）つて居て、最も接近したものは、森先生のお譯しになつたシュニッラアの「戀愛三昧」に出て來るクリスティネといふ樂師の娘です。

私は元來この芝居が大好きで愛讀して居りますが、淡々しいなかにオットリした人情の味は何とも云へぬ興味を感じます。

一寸した些細の科にも、一言一句の白にも、人によつては何とも感じない捨白にも、しみ／＼としたなつかしさを覺えて、嬉しくつて堪らないのです。

伊庭孝一座の春興行はこの狂言を一番目に据える筈でしたが、都合によつて一時見合せになりまして、イプセンの「社會の礎」を伊庭さんが日本の事に改作なすつたのと、ショウの「馬泥坊」につき直りました。

近い將來、――春風（はるかぜ）が吹いて接骨木（にはとこ）の花の咲く頃までには是非ウインの少さな戀愛悲劇をさせて頂く積りでせがんで居ります。

そして娘形（むすめがた）しか出來ないなんて勝手な事ばかり云つてはゐられません。殊にはそんな不自由な事では大に差支へますから、お正月は一つ年增に扮して見ようと思つてゐます。生れて初めてですから甘く行きますかどうか心配で御座います。

何に致せ一番難しい道を撰んで行きたいといふ子供の癖に生意氣な試見ですから、伊庭さんにミッチリ採んで頂いて――新劇社の稽古といつては、それは火花の散ると申しませうか、實に猛烈極まるのですから――ほんとうの一人前の女優になりたいとたゞそれのみを祈つてゐます。

△山も河もある女優の前途

帝國劇場女優　森　律　子

女優としての誇には、表と裏とから二つの種類が有ると思ひます。得意な役に扮して得意に演じてゐる時に、皆樣の喝采を博するなどは表面的な女優の誇といふもので御座いませう。

裏面には、これでも私ども女優の持つてゐる誇といふものが御座います。それは世の中がすべて分業的になつて、在來のやうに男が女に扮するのでは、何處かに不自然な處があつて、是れは必ず女が女に扮するのでなくてはならないといふ處から、女優といふものゝ必要が認められて來た時に、昔のお國歌舞伎とも違つた、まづ新らしい女優といふものゝ第一歩を踏出したのが我々であるといふ事で御座います。

今日西洋では、同じ役者でも、ドラマの役者もあれば、オペラの役者もあり、コミック・オペラの役者もあるといつたやうに、すべてが專門

的になつてをります。専門になると、責任が重くなつてまゐりますから完全といふ譯に行かなくつても、完全に近いものを演ずる事が出來ます。

私どもが今日演つてをりますうちに、仕舞を舞ふ場があつたり、鼓を鳴らす場があつたり、ちよつと茨器を操つたりする處があつたり致しますが、それを只ほんの眞似をしてゐるといふのではなく、それ〲の専門家に就いてお稽古をするやうでなくては、良いものは出來ないので御座います。ですから私どもにいたしましても、それは一通りや二通りの苦勞では御座いません。頭腦や身體を使ふ事は恐ろしい程で、それが爲めには病氣にならないばかりで御座います。

それに女優といへば、目の敵のやうにして、些細な事でも脱すまいとして、監視をでもされてるやうな氣がいたしまして、四面楚歌の聲を聞くやうな今の狀態で御座います。こんなにして世間から責められてゆく私ども女優の行途には、まだ〲山もあれば河もあり、谿もあれば殿もあつて、遙かに〲遠いのを思ひます。せめては皆樣の御同情に浴して、二十年かゝるものなら十年で何とかものになるやうになりたいものと常に心に願つてをるので御座います。

△思つたまゝ

近代劇協會女優　衣川孔雀

舞臺といふものに經驗も淺く、然うした生活にも未だ馴染まず、私には舞臺で科を喫く事さへ氣後れがします。それに驚く程の事もありません。明るい舞臺とか幾百の人の前とかいふ晴がしい事を殆んど知らずしてファウストの稽古に、初役のグレエトヘンで帝劇の舞臺に立つた時、觀客席の椅子が皆そゝり立つて、四方から迫つて來る樣な、たまらなく恐ろしい心持になりました。けれどもいよ〲初日となつて其空椅子は一ぱいの觀客で滿たされてゐるのを觀た時、私は稽古の時のやうな恐怖心には少しも襲はれませんでした。私にはどうしても觀客を他人とは思はれません。幾多の觀客は皆知己としか思はれないのです。そして幾百の知己の前に立つて肉體も心持も共にグレエトヘン其者になりきつた私のよろこぶ時、私の知己は共に喜び、私の悲しむ時、私の知己は共に悲しむものと思はれたのです、舞臺に立つた時私は始めて世の中へ生れ出た自分を見出します。何の躊躇も何の拘束もない自分を始めて見出すことが出來ます。そしてたとへやうもない輝やかしい心持て、何の恐怖もなく私は私の知己である幾多の觀客の前に立つことが出來ます。けれども、此心持は今迄舞臺に立つた人から聞かされた「誇」といふものとは思はれません。私にとつては誇では無いのです。私の喜びです。衷心から湧

立つよろこびです。

最近にかういふ事がありました。私共の協會の五回興行で、十一月二十一日から十日間大阪近松座で「ヴエニスの商人」と「人形の家」と「秋夕夢」とを開演しました。私は「人形の家」のノラと「秋夕夢」の侍女との二役に扮しました。九日間無事に打ちつゞけて、いよ〳〵千秋樂といふ三十日に私は舞臺で演出中突然卒倒したのでした。「人形の家」の三幕目、ノラ覺醒以後の肝心な處で、私は一句々々に熱を籠めた臺詞を辿つてゐましたが、餘り興奮し過ぎたせゐか、眼は暈み、四方が眞暗になつて、息づかひは忙しく、如何に焦燥つても强い息が出來ません。それでも無理に〳〵ヘルメルと三四語は交しましたが、パッと立上るキッカケと同時に前後を知らず私はそこに倒れてしまつたのです。冷たい水で氣がついた時には幕は下され、舞臺指揮は既に觀客に事の由を告げて解散を乞ふた後ださうで、觀客席は非常にざはついてゐました。私はいつもより明瞭(はつきり)した氣分になつて後をつゞける事を賴みました。ベルが鳴り響いて、幕がスル〳〵と引上げられた時、觀客席からは割れるやうな拍手でこれを迎へて下さるのでした。私はほんとに淚のこぼれる程のよろこびを感じく後をつゞけました。併し「人形の家」をともかく終ると、私は再び前後も知らずになつて、「秋夕夢」では役をつとめる事が出來ませんでした。殘念です。今考へても、一人で寐かされてゐながら、「常々舞臺監督から聞かされてゐる「舞臺は戰場だ」といふ聲が痛烈に聞えて、はつとして立上らうとしてはまたふら〳〵となるのでした。思ひもかけなかつた失望をもとおめず、同情を以つて迎へて下さる觀客を、私はほんとにうれしく思ひます。歸京後多くの知己に見ゆる日の早く來るのを私は待つてゐます。(岡山より)

△淡い哀愁

無名會女優　秋元千代子

女優の誇と屈辱――かうしたことを申上げますのが、私に取りましては眞に誇でもあり、又屈辱でもあるやうに感じます。

未熟な經驗の淺い私のやうなものが、第一女優などゝ口はゞつたいことが申せませうか。でも世間では、舞臺に立つか立たゞに女優々々と囃し立てゝ下さいますし、それだけ世間の興味を以て迎へられて居ます職業かと思ひますと、そら怖しいやうな、それで居て酷つと華々しい生活の誇といふがやうなものを感じ い譯でもありませんが、それ丈けの誇りが何になりませう。それが誇と云へますなら慘めな誇です。じつと考へますと終ひには泣きたくなることもあります。

世間が興味を以て見て下さいますたつて、中には隨分と卑げすまれるやうな口吻を聞く ともありますが、そうした場合には淺ましい反感から新しい時代の藝術家 どゝ誇つて見たい氣にもなります。でもそうした誇のすぐ裏に自分の足らはぬ力を嘲笑(わら)はれますやうな屈辱――寧ろ

苦痛と申した方が適當かも知れません――を感じますのでございます。此頃よく私共の仲間で「淡い哀愁を感じる」と云ふ言葉が流行いたしますが、事に觸れ物にふれ、全くそうした感慨に打たれることが度々でございます。

しかし斯うして女優になりました以上は、只々何時までも新しい藝術家になれますやう、覺束ない詩を未來に賴んで努力して居ります。が却々にその藝術へ手が屆きそうにございませんのが一番の苦痛に思ひます。

只一つ今の私が、女優として誇りたいと思ひますのは――他の二三の方もさうでせうが――坪内先生の御薫陶に預つたことでございます。お尋ねに對して僞らない有のまゝを。

△猜疑と嫉妬の中に埋れて

舊有樂座附女優　一條潮路

女優としての誇など私には御座いません。どつちかと言へば寧ろ實際以上に世の中から蔑まれ、賤まれて、到る處で一種の壓迫といふやうなものを感じてゐます。これは私のひがみかも知れませんが、電車に乘れば乘つたで、さしてけばけばしい裝ひをしてゐるといふでもないに、乘客からは一種異樣の眼を以てヂロヂロと睨められ、新らしい着物の一枚でも身に着けると、それは待合入りでもして拵へたものではないかといふやうに解られます。成程普通の人達よりは、美しい物を着、華美な生活をして、上流の社會にも入る事が出來るのですから、どれ程か美しい境遇のやうにも思はれるでせうが、實際のところは中々さうはまゐりません。外見には思ひも寄らぬ出費の嵩む事も御座いますし、朋輩衆や贔負の方にも遠慮や氣兼に心を苦しめねばならぬ事も御座いまして、普通の人には想像も及ばぬやうな事が御座います。

舞臺の上でも、よい役に當つて、それが思ふやうに働ければ嬉しくも思ひますが、どちらかと言へば、嬉しい事よりは苦しい事が多う御座います。日頃は仲のよい友達でも、舞臺の上では、時に江戸の敵を長崎と言つたやうな卑劣な事も遣り兼れません。そんな場合には、自分はどんな端役でも辛棒して、さうした嫉妬から免れたいと思ふ事も御座います。何時かも、私の總見のあつた時に、故意に出入口の處へ椅子を列べたりなどして、私の失策に手を拍つて笑はうとした朋輩さへ御座いました。そんな時にはつくづく女優といふものが厭やになります。何を言つても女の寄集りですから、着物一枚作つてもそれだけ人の嫉みを買ふといふやうな譯で、猜疑や嫉妬に埋もれて苦しい日を送らねばならぬので御座います。ですから新たに女優に成らうとなさる方は此邊のところをよくよくお考へにならねばならぬかと思ひます。それに收入と支出の關係から申しましても、決して女優といふものが、そんなに好ましいものでないといふ事を申上げたいと存じます。いづれそんな事は段々世の中に知

れて、ほんとの女優生活といふものが解り、それと共にほんとに女優存在の意義といふものが認められる時がいつかは來るだらうと思ふので御座います。

△弱い女の弱い商賣

帝國劇場女優　初瀬浪子

何と申しても女は弱い者で御座いまして、その弱い女が、弱いものゝ中でも最も弱い役者といふ商賣を致してをるのが私ども女優で御座います。われ〲でもそれ相應な考へは有つてゐるつもりで御座います。ですけれど、少しく自分一個の意見とか見識とかを備へようとしても、それは却つて傲慢の謗を受けることになりませうし、されぱと言つて卑屈な意氣地のない生活をしてゐれば、女の中のくづとして世の中から棄てゝ顧みられなくなつて了ふで御座いませう。

私どもは、女優として極めて中途半端な者に生れついたの御座いますそれは私どもの生れた時代が時代だつたせいで御座いませうが、在來の女役者といふものとも違へば、さうかと言つて、今演つておいでのやうなサロメの松井須磨子さんのやうに、純藝術的に行からとする行方とも違つた、何とも附かぬ過渡の波に漂つてゐるので御座います。藝術的な行き方にはチヤンと行くべき目的地が定つてをりますから、傍見をせずに一心に勵んで行く事も出來ませう。そこへ行くと私どもは中途半端だけに何うしてよいのか解らない處も御座いますが、もう斯うなつた以上は、個人々々で傑出した女優に成ろといふ事も必要ですが、それよりも當分皆樣と一緒に女優といふものゝ全體を高めたいと思つてをります。中には已に森さんのやうに洋行なすつた方もありますが、私などは洋行どころか、此間中神戸の方へ行つたゞけでさへも、もう懲り〲したので御座いますから、洋行などは思ひも寄りません。せめて一生懸命勉强して皆樣のお援助を藉りたいと存じてをります。口では威張つた事を申しましても、思ふやうにはゆかぬ弱い女の事で御座いますから、直接間接に皆樣の御援助を願はねばなりません。でないまでも皆樣の御保護を受けて遣つて行き度う存じます。さうかと言つて、無論不良い處はお叱言を蒙らねばならぬので御座いますが、新聞社の方の中には隨分酷いのも御座いまして、宛で人身攻擊をなさるなどの事も御座います。皆樣の庇護の下に立つてゐる弱い女優といふものを勵まし育てゝ下すつて、何とかものになるやうにいたしたいもので御座います。

次號說苑欄豫告

亡命の記（續篇）……………一亡命客
家庭體操の話……………永井道明
御卽位式……………黑頭巾
第三黨論……………鵜崎鷺城
女優生活の告白……………某女優

△亡き妻の骨を抱いて

松崎天民

次號に掲ぐべき「亡き妻の骨を抱いて」は、其の二「死を待つのみ」の長篇なり。病院窓下、たゞ死を待つのみの幾夜寒より、霜冷き晨の終焉、代々幡の茶毘の煙、涙の通夜に至るまで、天民氏一流の筆路、惻々讀者を泣かしめんとす。記實と情懷と相錯綜して、小說以外、雜報以外、實感を描いて讀者を魅するもの、正に天民氏獨歩の壇場たり。これ單り本誌本年上半期に於ける、絕好の讀物たるのみならず、また文壇特種の一大產物たるべきを疑はず。（編者しるす）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正出版界の二大名著

大町桂月先生著

人の運

◎新春絶好の讀物　好評如湧忽八版

▼四六判特製美裝　▼紙數四百餘頁全

◎定價金壹圓貳拾錢　◎郵稅八錢清鮮廿錢

批評一班

◎萬朝報　運不運も大部分は其人自から之を招くさらは如何にして不運を避くべきか著者は暢達の筆を馳せて自在に之を說き一々面白き例を擧ぐ

◎日本及日本人　桂月氏がその波瀾多き世路の經驗と幾多先哲の言行とによりよく不運を轉じて好運を迎ふるの手段を記述す行文の流暢にして讀誦すゝや既に快感禁ずべからざるものあり

帝大教授和田垣法學博士著

兎糞錄

◎出版界を震動せる破天荒の快著忽拾八版　發賣

▼四六判特製美裝　▼紙數四百頁全

◎定價金壹圓貳拾錢　◎郵稅八錢清鮮廿錢

◎萬朝報　時に應じ折に觸れて二つ三つ宛飛び〳〵に讀んで見やうと思ひしに一氣呵成に讀んで了ひぬ著者が得意のウイツトとユーモアの人を魅するものあればなり

◎道　よくまあ當代名者の間に之れだけの人物を生じたかと疑はしめる師ー公も之を讀まれたならば作品は机の下へ敷くされるであらふ蜀山は苦笑するであらう

◎二六　英譯樂兒行一篇は純文學として好技神に入る

（中付九の一）

◎發兌　東京日本橋區本石町三丁目　至誠堂　電話本局六六六番　振替東京一七四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稲田大學教授文學士 内ケ崎作三郎先生新著

ロイド・ヂョージ

長原止水君裝幀

世界的政界の中心人物

新時代は新人物を要求す、今やあらゆる社會に於て新人物を要求するに急なりと雖も政治社會に於てその最も然るを見る、政治の改革は唯夫れ新人物の政治的巨腕に俟つべきのみ、大英帝國は既に斯の如き偉人を現代大藏大臣ロイド・ヂョールヂに於て發見しぬ、この發見はかのラヂウムの夫れに優ること數十等、彼は「內政改革」の主張者にして實行者たり、彼は「財政即ち政治、政治即ち財政」の一新樣式を最も巧妙に最も鮮明に經緯せる一大巨人也、彼は正に政界刷新の一大曉鐘、その轟音は殷々として四海を壓す、彼の獅子吼は世界萬人の耳に徹す、三寸の舌刀と渾身の勇氣は彼の生命也、彼は英國政界の大流行兒にして彼の在るところ、風雲幾卷舒す、彼や素とウェルス山間の一寒村に呱々の聲をあげたる一貧童、年齒將に五十、其半生苦楚の官歷は寔に數奇を極む、斯書「一寒村より大臣街へ」の主人公を傳ふ、一面乃ち好箇の立志傳たるべく、他面乃ち英國最近政界の波瀾史たるべし、時は進むで政治の季節に入る、特に政治に志す者、政治に與る者、斯書を得て、即ち一大光明に接するの感あらむ。

四六版五百五拾餘頁
總クロース函入
肖像其他寫眞數葉
定價金壹圓參拾錢
內地小包料金拾貳錢
普通郵送費拾八錢

屈山 小室重弘先生著

實驗雄辯學

訂正九版

文明社會の戰は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、不辯舌は竟に社會競爭の上に於て劣敗者たるを免かれず、本書は著者が多年の實驗に基き、談論の秘訣雄辯の妙用を講述せられたる者なれば唯に雄辯術のみならず、亦文學にも創見する所尠からず故に學生諸君は勿論、苟も大正の國民たる者は一本座右に備へ自己の運命を向上發展せられよ。

菊判洋裝
定價四拾五錢
郵稅六錢

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番地 振替東京四一〇九 電話京橋三七七 前川文榮閣

（中付五の三）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

恭賀新年

大正三年一月元旦

圖書出版
書籍雜誌
卸賣專業

價格低廉
發送迅速
取扱親切

東京市京橋區尾張町二丁目

東海堂書店

電話新橋（長）二〇一五番
一九一一番
振替貯金口座東京八六七番
電信略號、荷印〇カ

中央公論特約大販賣所

新聞
雜誌
書籍
卸業

賀正

特約大賣捌店

東京京橋
西紺屋町

（中付五の六）

（中付五の八）

るから、齡は傾いてゐる。次期の寅の年まで吼え續けるか何うかは疑問である。

▲寅彦には、なほ脚本家の右田と、洋畫家の相田とがゐる。虎次郎には洋畫家の兒島と、文博の内藤とがゐる。内藤君は京大教授で、操觚時代には湖南と稱して、可なり氣焔を吐いた男である。虎之助には、豫言者の宮崎、寅之助には小說家の後藤がゐる、後藤君は宙外と號し、非自然主義などを唱へたが、虎性を發揮する點に於ては、宮崎君の獰猛、熱烈に及ばぬ。畫家の川端虎三郎（玉雪）、手紙硏究者の杉谷虎藏（代水）、獨逸大使の杉村虎一の三君も亦、同じく虎ではあるが、其の遣り口を見ると、猫に類するやうな處がある、女性のとらに至つては、餘りに多過ぎるから茲には擧げない。

▼中村不折君は、洋畫の方よりは六朝風の書で持てゝ居るが、此の頃又支那から珍本三冊を手に入れたので、毎日手習をしてゐるが、誰からか草書の書譜を一變すると云つてゐる。此の珍本は、支那から某骨董屋に之を不折君か、山本悌二郎君かに賣つて吳れと云つて來たのであるが、不折君は直接千二百圓に買取つて了つた。其の翌日山本君が買ふ積りで見に行つたが、既に賣れたと聞いて非常に殘念がり、不折君に二千四百圓で讓つて吳れと云つてるさうだが、彼れは珍本を玩弄する者には渡すことが出來ぬと威張つてゐる。

▼澁澤榮一男の道樂は、ハチ〳〵で、誰れが何と諫めても之を止めようとせぬ。每月一週間は何處かに雲隱れするさうだが、何人も其の行方を知る者がない。斯の人にして斯の道樂あるのは、洵に怪嘆に堪へぬと、某實業家は云つて居た。

伏見宮殿下と閑院宮殿下

文學博士　三宅雪嶺

伏見宮殿下と閑院宮殿下とは、役柄でいへば明治天皇に於ける有栖川大宮及小松宮といふやうなところであつて、宮中にも、社交的にも、重きを成してをられる。今年薨去せられた有栖川威仁親王は年齡に於いて二殿下の間に在り、先帝も大に慈まれ、今上陛下も深く御信賴あつたとの事であるが、何分多年の御病氣で

劇務に與からるゝ事が六ヶ敷かつた。今の處兩殿下が何かにつけ親王を代表せられる形がある。御兄弟であつて、年も僅か七ッ違ひながら、容貌も性格も色々と違ふ。素と御兄弟の數が多く、大分年齢の違つた小松宮、北白川宮等は兄に當たられ、東伏見宮殿下は弟に當たらるゝのであつて、中に別の御血統のやうに考へられたのがある。伏見宮殿下は物柔わらかで御叮嚀であり、人をして畏れ多いやうに思はしめられる事もある。小松宮北白川宮等もさういふ處があつたが、閑院宮殿下は聊か趣きを異にし、頗る豁達であつて、相應の官吏でも貴樣呼ばはりにせられる事があり、決して横柄なのではなく、貴樣呼はりの間に親しみの情が現れるのであるが、時として顏を片附けて濟まして居る官吏が面喰つたりする。それだけ軍人として普通の軍人らしいところがある。宮樣だとして三月の內裏樣のやうに思ふと、事が間違ふ。これまで大將中將になられた親王は名譽官でなく、實に相當の職務に堪へられたのであるけれど、自ら陣頭に立つて指揮せられるやうな事は、周圍の人よりして成るべく御遠慮申上げる事になつてをつた。素より必要な場合には危險を踏まれるのであり、伏見宮殿下も南山に於いて猛烈なる敵彈を冒され頗る危險であつたのである。が、閑院宮殿下は司令部で策戰計畫を掌られるよりは、自ら闘將として進むのを望まれる方である。佛國のサンシルレコール及び其他て騎兵の御修業あり、御歸朝後も常に騎兵の方面に當たられ、若し歐洲大陸の如く戰場に大騎兵團を必要とするならば、殿下は此方面て大に功を表されたてあらう。日本では騎兵がさる位置を占めず、殿下が往々大突擊を欲せられても事情が許さず、御勇敢の割合に十分に勇敢を發揚せられる場合が尠かつた。然し師團長とし、軍司令官としては騎歩砲等の差別がない。御出身が如何にあつても、今は將に將たらるゝのである。只歐洲に於ける如く騎兵を以て大功を立てられる機會が無かつた事は惜しき心地す。

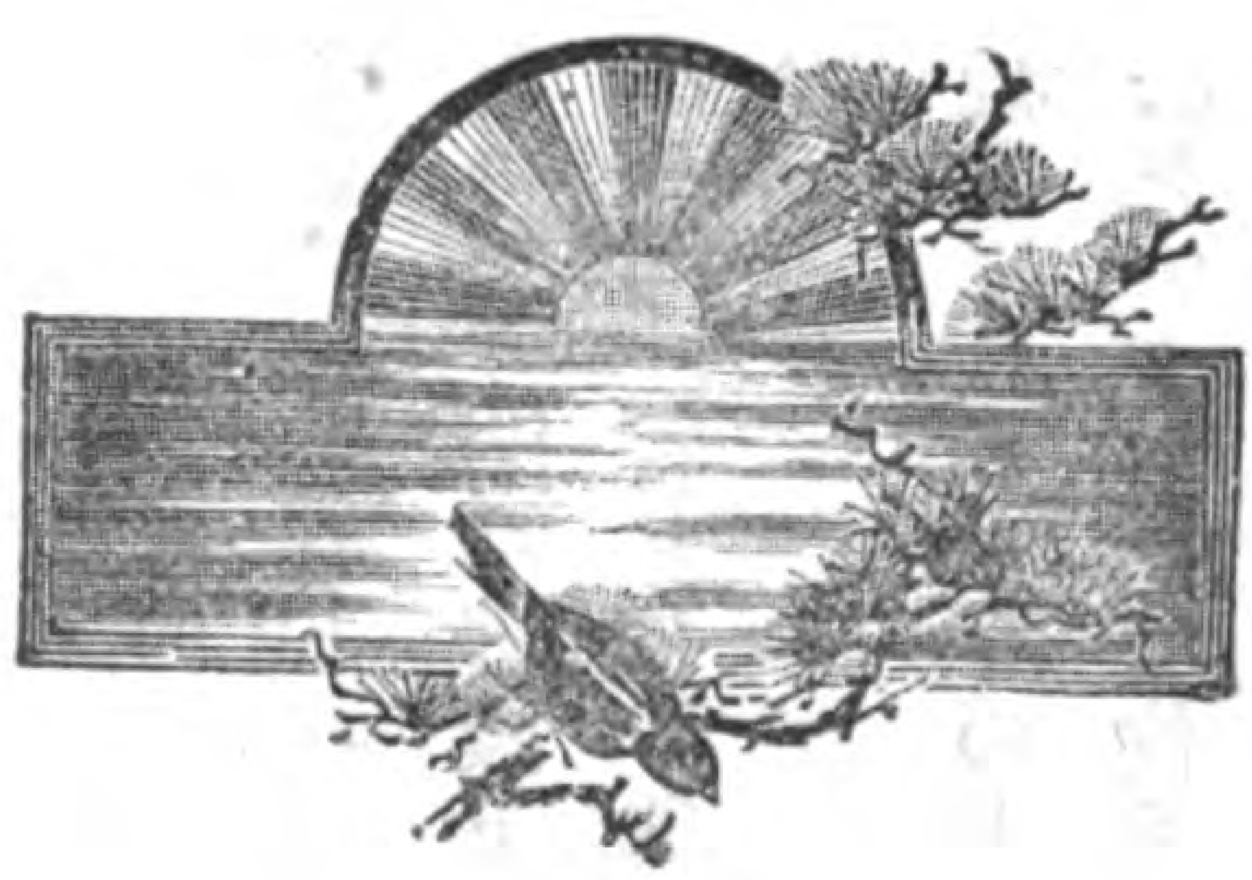
現に伏見宮殿下は內大臣であらせられ、閑院宮殿下は尙容易に現役から離れられる事がなからう。有栖川

大宮は戰役毎に重職に當られても、左大臣になり、元老院議長になり、軍事以外の事に携はられたが、小松宮は殆ど全く軍人で通された。大隈伯が國會開設を上奏したのは實に左大臣の宮を通しての事であつて、是れに他の閣員も少からず當惑した。近く桂内閣が議會で行詰つた時、陛下より政友會總裁西園寺侯に御沙汰があり、侯は解し難き節あつて内大臣の宮に御伺ひしたりした。斯かる邊になると宮殿下も餘程御配慮あることと思はれる。今後も樣々な事件が起らう。桂公の如く辛辣な手段を敢てする者も少からうが、何處から何事が起らぬとも限らぬ。偏へに宮殿下の聰明に俟たねばならぬ。閑院宮殿下は恐らく官職に於いて軍事を專らにせられ、往く〳〵は參謀總長にもなられるであらう。これまで位を重んじながら割合にこれに拘泥せず、有栖川大宮も三條相國の下に左府となられ、後參謀總長になられても、山縣大將が其の職に當つたり、川上大將が其職に當つたりした、其後位の尊くない者が其職に居る。軍人たる親王は昇進の年限が來れば第一に昇進せらるゝに極つて居つても、漫りに昇進することが出來ぬ。職に當るのも能力を認められての事である。是れ親王も常に努力せねばならず、又情實多き國政の中で希望を繫ぎ得る所以である。閑院宮殿下は親王でなくても參謀總長と爲られる方であらう。

有栖川大宮と小松宮と並んで重きをなされた頃、小松宮は御旅行などで世間から何かの噂があつた。有栖川大宮はさうでなく、威仁親王の如き、歐洲御旅行中でも頗る嚴肅であつた。閑院宮殿下は佛國で何かと取沙汰する。豁達なる御性質として興あることゝ言はれる。

立入つた事は抜きにして、今のところ、伏見宮殿下は前年の德大寺公といふやうな位置に居られ、閑院宮殿下は皇族軍人の先進者として重きを成されるのである。均しく軍人であつても文武に分れ、今上陛下を輔佐せられつゝある。明治年間に聰明なる親王があつたやうに、大正年間にも聰明なる親王があつて心强く感ずべきである。皇室と人民と懸け離れて意志の疎通

を缺いては容易ならぬ事である。皇族が其中間に立たるべき順序とし、別當等が早く其邊に氣附き、相應の取圖ひするがよからう。明治維新の詔に「表は朝廷を推重して實は敬して是を遠け、億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能はざる樣計り成し、遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果て、其が爲今日朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて朝廷は倍々衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し、かゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや」とある。大正年間は當時と大に違ふが、益々圓滿にするが爲めに其れ相應の事を要する。



女優十名家感想錄

この感想錄は大體「女優の誇と屈辱」といふ題意の下に、現在女優の十名家に委囑して、蒐錄したところのもので、中に全然題意に觸らないもの丶あるのは、この題以上に適當な感想として發表せられたものである。そしてその人選はあらゆる各劇壇の女優を代表的に網羅したものであることをも序に斷つておく。（一記者）

△女優の屈辱と誇

藝術座女優　松井すま子

私は女優としての誇りよりも屈辱の方をより多く感じて居ます。迫害せられて居ます。全體『女』と言ふものは何の場合にも人に媚を呈さなければならないものでせうか。何時も默つて人の言ふなりにばかりなつて居なければならないものでせうか？　之が昔から此日本の女の習慣となり美德となつて居ます。其ために私たち女の仕事なり藝術なりが侮辱されてる事はどれ程だか知れません。女も男と同じ人間で有ると口には立派に言ふ人でもいざと言ふ場合に、何か事件が起つて男と女の重大な爭ひとなるともうだめです。女の方が正しと分り切つて居ても、女で有るから男には一歩を讓らなければならないと言ふ事になる。何の故を以て女は男に從がはなければならないかと口惜し涙を流しながら、夫でもやつぱり私自分も此呪ふべき美德や習慣から全く逃れる事は出來ず、胸をさすり涙を呑みながら泣き寢入りに目を瞑つて了はなければなりません。そしてやつとの事いろ〱に心を持ちなほして胸が靜まると、すぐまた新しい問題が起ります。其度毎に掻きむしられる樣な思ひをくり返します。けれどそんな事はまだ〱小さな事です。もつと〱大きなそして許しがたい大きな侮辱を受ける事が他に有ります。たとへば男と女が共有して作る藝術です。男の藝術が上にたち女の藝術が次に立つ場合は夫で結構に治ります。けれど何うかして女の藝術が上に立つ時が有ると其時程此習慣を呪ひたくなることは有りません。私の事業から申せば劇の稽古の時です。役の精神を舞臺の上にあらはす技藝の點に於ては幾ら女だつて私には私自ら信ずる處が有つて進みます。少なくとも或種類の男の俳優よりは私が上だと信ずる場合が幾らも有ります。その時自分

の信ずる所に向つて進まうとすると『女のくせに生意氣で有る』とか、『女が言ふ意見に從がふのは不見識だ』と言つて夫に反對する。今度のサロメ劇の如きでも動きについてはローシー氏の指導を受けたのですが、ローシー氏が敎へられる身體の動きについての心理、私にははつきり夫が分ります。そして夫が先生がたの御意見と解釋に相違しない限り私は私の信ずる技藝で夫を演じ活さうとたゞ夫ばかりに熱中する。けれどローシー氏の心理を呑み込み得ない人が有つた時が騷ぎです。其人が自分自ら解釋を下して私を夫に從はせ樣とする。そして私が夫に對して不快な顏色をしたり、從はなかつたりすると、すぐ例の生意氣だといふ態度で來る。私はこんな事を思うても口惜し淚に瞼が濡れます。そして內しよでそつと淚を拭く事が有つても素早く見付けて『女の淚を持つて訴へる卑劣な奴』とのゝしられる。全體男は何の果報が有つてそう勝手な事が言はれるのでせう？　女は何がためにそうまで男に迫害されなくちやならないのでせう？　女にも血が有り魂が有るかぎりそう何時までも屈辱され迫害されて居られるものでは有りません。あきらめの早い藝術家ならスッパリと藝術を捨てるでせう。外に慰安を求めるでせう。けれど私の樣に親を捨て姉妹を捨ててまでしてすがつた藝術――世界のあらゆるものに代へたたつた一ッの我で有る。其藝術にはなれるよりはむしろ死を選んだ方がましだと思ふ位ですから、飽くまで此苦しみと戰ひながら何時までも藝術の道に引ずられて行かなければなりません。けれど何んと言つても弱い女の心が、どの程度まで夫に打勝つ事が出來るか、夫ともまけて氣狂ひにでもなつて了ふか？　私はそんな事を思ふと言ひ知れない悲しい淚が頰を傳ります。有名な聲樂の天才の環さんは、帝劇のオペラ部へ入ひられて其處の明星で有つたにも拘らず何に苦しんで遠い南洋へ落ちて行かれたでせう？　而もオペラがだん〳〵物になり掛つて來た時を選んで何のために我から望んでそんな事をされたのでせう？、其邊の事も私にはよく察しがつきます。そして人傳にも聞いて居ます、內外から恐しい壓迫を加へられて夫に堪えなかつた事を。斯う言ふ樣にして何時の世に日本の劇界にサラベルナールは生れる事でせう。只々人事ならず寒心に堪えられません。幸福なのは自分一人で作る事の出來る藝術家です。人にはかけかまひない自由な藝術家です。ですから此方には、ずゐぶん日本にだつて與謝野さんはじめめい〳〵其道の天才が自由に發展されて居られます。けれど〳〵女優だけは現在の日本の有樣ではとてもとても自由に發展すると言ふ樣な事はむつかしいと思ひます。こんな事を申しては又『女のくせに生意氣な』とお叱りを受けるかも知れませんが、他の場合はとも角も、藝の上から丈けは『女』と言ふ一割も二割も損な名詞を永久に取りのぞいて頂きたい望みでございます。

女優としての誇り、こんな事はまるで感じた事が無いと言つていゝ位です。只西洋には女優と言ふものが早くから有つて、どんな複雜な女本位の芝居でも立派にし活して居るにも拘らず、日本の芝居にある女は、皆女形と言ふ男優が扮するので有つて、夫には型と言ふものが出來て居る。そして其型は大てい、表情のないのを美德とする日本在來の類型的

なもので有つて女の個人性を發揮する樣な芝居はあまりなかつたため、男優でも長年の練習によつては立派に演こなせた。演こなせた位でなく全部男のものになつて居た。けれど西洋劇には女本位の芝居が多いため、いろ〳〵な個人性の特色ある芝居が多い。斯した女になると多年の練習の結果で出來上つた女形は第一番に體にしみ込んだ、日本の心のかたを破らなければならず、さん〴〵の苦心でやつと夫を打破つた時はもう、とかく大童の地の男になりたがる、只々夫を見た時だけ私たちは幸福を感じます。どんなに突込んで演じた處でそんな事の有りやうはづはないのですもの。まあこんな事が女優の誇りと言へば誇りとも言へませう。其他は苦しい事だらけ、前に申した樣な苦しみの外にもまだ〳〵かぞへられない屈辱が有ります。

△女優生活に入つてから

帝國劇場女優　村田嘉久子

私が女優生活に入りましてから、それでも、もう足掛五年になります。──お稽古の間が二年と、舞臺に上るやうになりましてから三年と。ですけれども藝は一向未熟で、何時まで經つてもお恥しい次第で御座います。

こんな特殊の生活に入りましてからは、いろ〳〵と異つた經驗も味ひまするし、謂はゞ世間も廣く、到底も此樣な生活に入らねば得られないやうな事まで知る事が出來ますけれど、その代り又他人樣の想像も及ばないやうな苦い經驗のかず〳〵をも味はつて、苦しい思ひを致す事も御座います。

何と申しましても、女優として立つて行くには、舞臺の上が大事で、つらい事も御座います代りに、それと同時に面白味もそこにあるので御座います。

お世辭にもせよ、見物の方が手を拍つたりなどして下さいますと、矢張り嬉しくて、又一段と氣が乘つてまゐるもので御座います。尤も見物の方は餘り當てにはなりません。此方で一生懸命に演つてゐても左程に酌んで下さらない事もあれば、また端役かなんかの蹈らないところで喝采して下すつたりなんかして、羞しいやうな擽つたいやうな感じのいたす事も御座います。ですから此頃では、そんな事を餘り氣に懸けないやうにして、内部の方に「今日は能く出來た」と一言云はれるを此上ない樂しみにいたしてをります。

初めのうちは舞臺に出ましても、殆ど無我夢中で、何でも彼でも無意識に、只教はつた事だけをそのまゝ演つてゐたやうなものですから却つて氣骨が折れませんでしたが、此頃では何だか獨りで突き離されたやうな、それと共に責任が重くなつたやうな氣が致しまして、どんなにか辛い思ひを致します。それに教へられた事を能く覺え込めない時程辛い事は御座いません。

辛いと言へば、苦心談などと被仰る方も御座いますが、私共にはまだ苦

心役などゝ申上げる程の苦心をした事も御座いません。ほんのちよつと上つ面の苦心に過ぎないので御座いますが、舊劇と新劇とでは何方か申せば、舊劇の方が私どもにとつて演り難う御座います。と申すのは新の方にはこれといふ一定の型が無いからで御座います。尤も型が無いから、それを自分で新たに工夫して演るのは中々六ケしい事で御座いまして、却つて型をそのまゝ演る方がどんなにか演り易い場合も御座いますが、まア何方かと言へば、一般に舊劇の方が私共には六ケ敷いやうに思はれます。

(三)

それに、御承知の通り此帝劇では替り役と言つて、一芝居の中に何人も替つて一人の役を勤める事が御座います。現にこの興行にも、今は私が政岡を演つてをりますが、明後日からは律子さんがお替りになるといふやうに、これも大勢居るから仕方が無いので御座いますけれど、何よりも是れが辛う御座います。誰しも他人に負けまいとする氣が御座いますものですから、それを列べて批評されるとしてみますと、中々迂濶はしてをられません。一芝居をずつと續けて演るよりはどんなに頭を惱めるか、それこそ身體を不良くするやうな事もあるので御座います。今度など仕合な事には私が最初に政岡を演つたので御座いますから、比較的に氣樂で御座います。どうしても後になればなる程演り難う御座います。私もまだ八汐や沖の井を替つて勤めるのですが、政岡を演つて了つたのでホッと呼吸をつきました。もうそれは／＼芝居が濟んでお湯に入つた時の嬉しさつたら、それこそ譬へやうも御座いません。

私も斯うして女優に成つたので御座いますから、どうかして一生懸命勉強して、いつまでも演つて行き度いものだと思つてをりますが、女優の生活には普通の方に知れない辛い事や悲しい事が隨分御座いまして、いろ／＼の目に遭つておくのも、經驗になつて良い事では御座いませうが、社會から女優といふ者をいろんな目で以て觀られるのには全く弱り切つて了ひます。時にはつく／＼素人の方をお羨しいと思ふ事も御座います。例へば芝居一つ見に參るにしても、又、何處其處へ出掛るにしても、素人の女ならば何の氣もなし平氣で行かれ處でも、女優をしてゐるばつかりに、餘計な氣兼や苦勞をするかと思ふと情なくなる事が御座います。何だか下らない事をお喋舌りして相濟みませんでした。

△汽車の窓より

近代劇協會女優　山川浦路

舞臺における誇などと申しますことは、それは決して私などのとやかう申し得るものでは御座いませぬ。ほんとに誇りなど申す緊張した氣持がありますれば、私どもの拙劣な藝ももつと進歩することでせうと思ひますけれども、常々芝居はみな大勢の方の集まつて完成する藝術だからどんな場合でも極て謙遜した心で、どんなことでも忍耐して忍耐して忍耐し徹すのを唯一の道と心得て居れと聞かされて居りますので、只

此の忍耐が徹された時に、藝術の前に謙遜であつたと感ずるのが誇と申せば自矜位なもので御座います。たとひどんなつまらない些末な藝でありましても、極謙遜な心で、その役に沒頭しますと、いつしか自分の身體が舞臺の上にあり、觀客の眼の前にあると云ふことを全く忘れてしまひまして、ただただ藝の世界に遊離して居ますやうに感ずる瞬間が御座います。斯樣場合には私は何時でもこれが自分の一番氣持のいゝ愉快な刹那であらうと感ずるので御座います。そして斯ういふ刹那が度々閃いて訪れて來ます折りは痛切になりましても恍惚として居ます。

女優と云ふものが、はじめから社會の罵倒や嘲笑を豫期して立つた以上大抵な侮辱は客觀してしまつて、侮辱と感じながらも苦にしないで居られますが、舞臺の上で、自分が藝を演じて居ると云ふことを忘れて、其の芝居以外にたゞ自分の感情の動く儘に、演出以外に一寸でも笑つたりした時は、まだ藝術と申す程の事ではありませぬながらも、何だか自分の藝術を蔑視したやうな氣持がしまして一番すまぬ樣な心持が致します。

以上は極々貧弱な私の經驗の中から申しあげましたことどもでおたづねの御返事ゝ申すには相應ひますまいが旅先のこと故あしからず思しめしてくださいませ。

△舞臺の上と樂屋の裏

舞臺協會女優　林　千　歳

舞臺生活をする者の半面には、必ず樂屋生活といふ一面ヶ有つて居ります。いつも俳優や女優の舞臺の華やかな生活を御覽になつてる多くの方々の中には、優人の樂屋生活もまた舞臺のそれと同じやうに華やかであるやうに、一種の美しい幻想に包んで御考へなさる方が比較的澤山御座いますが、私自身には舞臺生活と樂屋生活とは殆ど正反對であるやうに思はれます。すべての感じは非常に現實的で雜駁で、一口に申せば藝術離れがして居るといふことをよく感じることが出來るやうに思はれます。

舞臺へ出ます前の五分十分の間に、「自分自身の鏡裡に映る扮裝の姿や顏は我れながら厭に思へてなりません。」舞臺に出れば目の醒めるほどお美しいお友達の女優方のお顏や姿も樂屋では半ば技巧に塗りかくされて、生きた美しさを失つて、まざ〳〵と醜であり、假面であるのですもの。それに舞臺の背景を一重隔てた裡は、何處も彼處も、極めて現實的なそして始終動いて騷いで、乾き切つた空氣より外、探さうとしても何もありません。私はいつもさう思ひます、俗にうら、おもてといふことを申しますが、これほど烈しく、強い差異が何處にあらうと思はれます位で御座います。

斯ういふ空氣の中で私は何うかいたすと、大變しんみりした氣持になります。樂屋入りをして部屋に這入りますと生々して居た昨夜の花が褪色に萎れて饐えた花の香に包まれた時や、其夜の劇が終へて、手早く扮裝を洗落しながら遠く聞える大道具を取こわす、槌の響を耳にする時などは、何とも云へぬ靜かな、寂しい心持になります。

形と表面の外には心とか氣持とかいふもの丶添はない樂屋の空氣を私は全然無意識に呼吸して居ることが出來ないので、それでつひ暗然とした氣になつて了ふことがあります。心持の添はない生活が時には厭はしくも寂しくも思はれます。

けれども舞臺に一歩踏み出した時は、私は非常にうれしく思はれます。せめて或程度の滿足を自分に丈でも藝術上に得たいと思ふのです。いろ〱な階級やいろ〱な社會や、またいろ〱の性格に扮して其人々の生活に或時間の間丈でも這入つて見得られる舞臺の生活は、ピンからキリ迄の人と人の世の研究をするといふ興味――其興味といふ意味に於て舞臺の生活を歡びと希望に滿ちておくることが出來るので御座います。

△好きな芝居と好きな役

新劇社女優　酒井よね子

元々芝居が好きで役者になつたのですから、どんな芝居が好きの、こんなのはいやだのと、撰好は致しませんが、それでも自づと好きな芝居とまた左程でもないのとが御座います。

それは廣く讀みませんし、また年はも行かぬ小娘の所故、わからないせいもありませうが、私の趣味とか性格とかいふものから申しますと、何れかと言へば理屈ツぽいものや、喜劇はあまり好みません。しんみりした氣分劇のやうなものや、しみ〱と身に徹へる世話な芝居が私は好きで御座います。

そして私がこれ等を演じますには、それ〱その芝居の味によつて多少手心も變りますが、唯極く素直に、お芝居をしずに、生活そのものの味を一呼吸々々の間にも現したいと願つてゐます。

それから氣分劇と申しましても、社會劇で練つた上で、私は演りたいと思ひます。今迄に皆樣のなされたやうな妙に非現實的な、フワ〱したものではどうかと私は思つてゐます。こんな事を申しますと段々六かしくなつて、私などには當分まだ演じられさうに御座いません。ゆくゆくはせめてメーテルリンクの「ペレアスとメリサンド」を研究的な態度でやつて見たいと思つてゐます。此芝居は私が大好きな芝居で御座います。

何しろ劇は自分の既往の經驗を土臺にして、解釋し、表現する外はないのですから、ある一役をとりました時は、いはば自分のといふ流れの吐口を得たやうなものだと思ひます。ですから餘計なものは取捨てて、身の内に潛んで居る生活の心をさぐり求めて、それを思切つて力強く、

そして適當な形式で押出す外はないと信じて居ります。

これ故自分の經驗になく、自分の思想、性格に遠い役に扮する事は餘程困難でもあり、且ともすると嘘になり勝です。

單なる想像のみでは解釋は出まにくい事ですし、また柄の關係もありまして、私の今日では年輩の役はやりにくう御座います。

で今日のところ私に嵌つて居て、最も接近したものは、森先生のお譯しになつたシュニッラア の「戀愛三昧」に出て來るクリスティネといふ樂師の娘です。

私は元來この芝居が大好きで愛讀して居りますが、淡々しいなかにオットリした人情の味は何とも云へぬ興味を感じます。

一寸した些細の科にも、一言一句の白にも、人によつては何とも感じない捨白にも、しみ／＼としたなつかしさを覺えて、嬉しくつて堪らないのです。

伊庭孝一座の春興行はこの狂言を一番目に据える筈でしたが、都合によつて一時見合せになりまして、イブセンの「社會の礎」を伊庭さんが日本の事に改作なすつたのと、ショウの「馬泥坊」につき直りました。

近い將來、――春風が吹いて接骨木の花の咲く頃までには是非ウインの少さな戀愛悲劇をさせて頂く積りでせがんで居ります。

そして娘形しか出來ないなんて勝手な事ばかり云つてはゐられません。殊にはそんな不自由な事では大に差支へますから、お正月は一つ年増に扮して見ようと思つてゐます。生れて初めてですから甘く行きますかどうか心配で御座います。

何に致せ一番難しい道を撰んで行きたいといふ子供の癖に生意氣な量見ですから、伊庭さんにミッチリ採んで頂いて――新劇社の稽古といつては、それは火花の散ると申しませうか、實に猛烈極まるのですから――ほんとうの一人前の女優になりたいとたゞそれのみを祈つてゐます。

△山も河もある女優の前途

帝國劇場女優　森律子

女優としての誇には、表と裏とから二つの種類が有ると思ひます。得意な役に扮して得意に演じてゐる時に、皆樣の喝采を博するなどは表面的な女優の誇といふもので御座いませう。

裏面には、これでも私ども女優の持つてゐる誇といふものが御座います。それは世の中がすべて分業的になつて、在來のやうに男が女に扮するのでは、何處かに不自然な處があつて、是れは必ず女が女に扮するのでなくてはならないといふ處から、女優といふものゝ必要が認められて來た時に、昔のお國歌舞伎とも違つた、まづ新らしい女優といふものゝ第一歩を踏出したのが我々であるといふ事で御座います。

今日西洋では、同じ役者でも、ドラマの役者もあれば、オペラの役者もあり、コミック・オペラの役者もあるといつたやうに、すべてが專門

的になつてをります。專門になると、責任が重くなつてまゐりますから完全といふ譯に行かなくつても、完全に近いものを演ずる事が出來ます。

私どもが今日演つてをりますうちに、仕舞を舞ふ場があつたり、鼓を鳴らす場があつたり、ちよつと英語を操つたりする處があつたり致しますが、それを只ほんの眞似をしてゐるといふのではなく、それ〲の專門家に就いてお稽古をするやうでなくては、良いものは出來ないので御座います。ですから私どもにいたしましても、それは一通りや二通りの苦勞では御座いません。頭腦や身體を使ふ事は恐ろしい程で、それが爲めには病氣にならないばかりで御座います。

それに女優といへば、目の敵のやうにして、些細な事でも脫すまいとして、監視をでもされてるやうな氣がいたしまして、四面楚歌の聲を聞くやうな今の狀態で御座います。こんなにして世間から責められてゆく私ども女優の行途には、まだ〲山もあれば河もあり、谿もあれば嶮もあつて、遙かに〲遠いのを思ひます。せめては皆樣の御同情に浴して、二十年かゝるものなら十年で何とかものになるやうになりたいものと常に心に願つてをるので御座います。

△思つたまゝ

近代劇協會女優　衣川孔雀

舞臺といふものに經驗も淺く、然うした生活にも未だ馴染まず、私には舞臺で何を書く事さへ氣後れがします。それに書く程の事もありません。明るい舞臺とか幾百の人の前とかいふ晴がしい事を殆んど知らずしてファウストの稽古に、初役のグレェトヘンで帝劇の舞臺に立つた時、觀客席の椅子が皆そゝり立つて、四方から迫つて來る樣な、たまらなく恐ろしい心持になりました。けれどいよ〱初日となつて其空椅子は一ぱいの觀客で滿たされてゐるのを觀た時、私は稽古の時のやうな恐怖心には少しも襲はれませんでした。私にはどうしても觀客を他人とは思はれません。幾多の觀客は皆知己としか思はれないのです。そして幾百の知己の前に立つて肉體も心持も共にグレェトヘン其者になりきつた私のよろこぶ時、私の知己は共に喜び、私の悲しむ時、私の知己は共に悲しむものと思はれたのです、舞臺に立つた時私は始めて世の中へ生れ出た自分を見出します。何の躊躇も何の拘束もない自分を始めて見出すことが出來ます。そしてたとへやうもない輝やかしい心持で、何の恐怖もなく私は私の知己である幾多の觀客の前に立つことが出來ます。けれども、此心持は今迄舞臺に立つた人から聞かされた「誇」といふものとは思はれません。私にとつては誇では無いのです。私の喜びです。衷心から湧

立つよろこびです。

最近にかういふ事がありました。私共の協會の五回興行で、十一月二十一日から十日間大阪近松座で「ヴェニスの商人」と「人形の家」と「秋夕夢」とを開演しました。私は「人形の家」のノラと「秋夕夢」の侍女との二役に扮しました。九日間無事に打ちつゞけて、いよ／＼千秋樂といふ三十日に私は舞臺で演出中突然卒倒したのでした。「人形の家」の三幕目、ノラ覺醒以後の肝心な處で、私は一句々々に熱を籠めた臺詞を辿つてゐましたが、餘り興奮し過ぎたせゐか、眼は暈み、四方が眞暗になつて、息づかひは忙しく、如何に焦燥つても强い息が出來ません。それでも無理に／＼ヘルメルと三四語は交しましたが、パッと立上るキッカケと同時に前後を知らず私はそこに倒れてしまつたのです。冷たい水で氣がついた時には幕は下され、舞臺指揮は既に觀客に事の由を告げて解散を乞ふた後ださうで、觀客席は非常にざはついてゐました。私はいつもより明瞭した氣分になつて後をつゞける事を賴みました。ベルが鳴り響いて、幕がスル／＼と引上げられた時、觀客席からは割れるやうな拍手でこれを迎へて下さるのでした。私はほんとに涙のこぼれる程のよろこびを感じて後をつゞけました。併し「人形の家」をともかく終ると、私は再び前後を知らずになつて、「秋夕夢」では役をつとめる事が出來ませんでした。殘念です。今考へても、一人で寐かされてゐながら、「常々舞臺監督から聞かされてゐる「舞臺は戰場だ」といふ聲が痛烈に聞えて、はつとして立上らうとしてはまたふら／＼となるのでした。思ひもかけなかつた失態をもとがめず、同情を以つて迎へて下さる觀客を、私はほんとにうれしく思ひます。歸京後多くの知己に見ゆる日の早く來るのを私は待つてゐます。（岡山より）

△淡い哀愁

無名會女優　秋元千代子

女優の誇と屈辱——かうしたことを申上げますのが、私に取りましては眞に誇でもあり、又屈辱でもあるやうに感じます。

未熟な經驗の淺い私のやうなものが、第一女優などゝ口はゞつたいことが申せませうか。でも世間では、舞臺に立つか立たずに女優々々と囃し立てゝ下さいますし、それだけ世間の興味を以て迎へられて居ます職業かと思ひますと、そら怖しいやうな、それで居て誇つた華々しい生活の誇といふがやうなものを感じ　い譯でもありませんが、それ丈けの誇りが何になりませう。それが誇と云へますなら慘めな誇です。じつと考へますと終ひには泣きたくなることもあります。

世間が興味を以て見て下さいますたつて、中には隨分と卑げすまれるやうな口吻を聞く　ともありますが、さうした場合には淺間しい反感から新しい時代の藝術家　どゝ誇つて見たい氣にもなります。でもさうした誇のすぐ點に自分の足らぬ力を嘲笑はれますやうな屈辱——寧ろ

苦痛と申した方が適當かも知れません――を感じますのでございます。此頃よく私共の仲間で「淡い哀愁を感じる」と云ふ言葉が流行いたしますが、事に觸れ物にふれ、全くそうした感慨に打たれることが度々でございます。

しかし斯うして女優になりました以上は、只々何時までも新しい藝術家になれますやう、覺束ない望を未來に賴んで努力して居ります。が却々にその藝術へ手が屆きそうにございませんのが一番の苦痛に思ひます。

只一つ今の私が、女優として誇りたいと思ひますのは――他の二三の方もさうでせうが――坪内先生の御薫陶に預つたことでございます。お尋ねに對して僞らない有のまゝを。

△猜疑と嫉妬の中に埋れて

有樂座附女優 一條潮路

女優としての誇なぞ私には御座いません。どつちかと言へば寧ろ實際以上に世の中から蔑され、貶まれて、到る處で一種の壓迫といふやうなものを感じてゐます。これは私のひがみかも知れませんが、電車に乘れば乘つたで、さしてけば／＼しい裝ひをしてゐるといふでもないに、乘客からは一種異樣の眼を以てヂロ／＼と眺められ、新らしい着物の一枚でも身に着けると、それは待合入りでもして拵へたものではないかといふやうに解られます。成程普通の人達よりは、美しい物を着、華美な生活をして、上流の社會にも入る事が出來るのですから、どれ程か羨しい境遇のやうにも思はれるでせうが、實際のところは中々さうはまゐりません。外見には思ひも寄らぬ出費の嵩む事も御座いますし、朋輩衆や贔屓の方にも遠慮や氣兼に心を苦しめねばならぬ事も御座いまして、普通の人には想像も及ばぬやうな事が御座います。

舞臺の上でも、よい役に當つて、それが思ふやうに働ければ嬉しくも思ひますが、どちらかと言へば、嬉しい事よりは苦しい事が多う御座います。日頃は仲のよい友達でも、舞臺の上では、時に江戸の敵を長崎と言つたやうな卑劣な事も遣り兼ねません。そんな場合には、自分はどんな端役でも辛棒して、さうした嫉妬から免れたいと思ふ事も御座います。何時かも、私の總見のあつた時に、故意に出入口の處へ椅子を列べたりなどして、私の失策に手を拍つて笑はうとした朋輩さへ御座いました。そんな時にはつく／＼女優といふものが厭やになります。何を言つても女の寄集りですから、着物一枚作つてもそれだけ人の嫉みを買ふといふやうな譯で、猜疑や嫉妬に埋もれて苦しい日を送らねばならぬので御座います。ですから新たに女優に成らうとなさる方は此邊のところをよく／＼お考へにならねばならぬかと思ひます。それに收入と支出の關係から申しましても、決して女優といふものが、そんなに好ましいものでないといふ事を申上げたいと存じます。いづれそんな事は段々世の中に知

れて、ほんとの女優生活といふものが解り、それと共にほんとに女優存在の意義といふものが認められる時がいつかは來るだらうと思ふので御座います。

△弱い女の弱い商賣

帝國劇場女優　初瀨浪子

何と申しても女は弱い者で御座いまして、その弱い女が、弱いもの丶中でも最も弱い役者といふ商賣を致してをるのが私ども女優で御座います。われ〱でもそれ相應な考へは有つてゐるつもりで御座います。ですけれど、少しく自分一個の意見とか見識とかを備へようとしても、それは却つて傲慢の謗を受けることになりませうし、さればと言つて卑屈な意氣地のない生活をしてゐれば、女の中のくずとして世の中から棄て丶顧みられなくなつて了ふで御座いませう。

私どもは、女優として極めて中途半端な者に生れついたの御座います。それは私どもの生れた時代が時代だつたせいで御座いませうが、在來の女役者といふものとも違へば、さうかと言つて、今演つておいでのやうなサロメの松井須磨子さんのやうに、純藝術的に行かうとする行方とも違つた、何とも附かぬ過渡の波に漂つてゐるので御座います。

藝術的な行き方にはチヤンと行くべき目的地が定つてをりますから、偏見をせずに一心に勵んで行く事も出來ませう。そこへ行くと私どもは中途半端だけに何うしてよいのか解らない處も御座いますが、もう斯うなつた以上は、個人々々で傑出した女優に成るといふ事も必要ですが、それよりも當分皆樣と一緒に女優といふものゝ全體を高めたいと思つてをります。中には已に森さんのやうに洋行なすつた方もありますが、私などは洋行どころか、此間中神戸の方へ行つただけでさへも、もう懲り〱したので御座いますから、洋行などは思ひも寄りません。せめて一生懸命勉强して皆樣のお援助を藉りたいと存じてをります。口では威張つた事を申しましても、思ふやうにはゆかぬ弱い女の事で御座いますから、直接間接に皆樣の御援助を願はねばなりません。でないまでも皆樣の御保護を受けて遣つて行き度う存じます。さうかと言つて、無論不良い處はお叱言を蒙らねばならぬので御座いますが、新聞社の方の中には隨分酷いのも御座いまして、宛で人身攻擊をなさるなどの事も御座います。皆樣の庇護の下に立つてゐる弱い女優といふものを勵まし育てゝ下すつて、何とかものになるやうにいたしたいもので御座います。

●次●號●說●苑●欄●豫●告

亡命の記(續篇)……………………一亡命客
家庭體操の話……………………永井道明
御即位式……………………黑頭巾
第三黨論……………………鶴崎鷺城
女優生活の告白……………………某女優

△亡き妻の骨を抱いて

松崎天民

次號に揭ぐべき「亡き妻の骨を抱いて」は、其の二「死を待つのみ」の長篇なり。病院窓下、たゞ死を待つのみの幾夜寒より、霜冷き晨の終焉、代々幡の荼毘の烟、涙の通夜に至るまで、天民氏一流の筆路、惻々讀者を泣かしめんとす。記實と情懷と相錯綜して、小說以外、雜報以外、實感を描いて讀者を魅するもの、正に天民氏獨步の壇場たり。之れ單り本誌本年上半期に於ける、絕好の讀物たるのみならず、また文壇特種の一大產物たるべきを疑はず。(編者しるす)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正出版界の二大名著

大町桂月先生著

人の運

▼四六判特製美裝
▼紙數四百餘頁全
◎定價金壹圓貳拾錢
◎郵稅八錢滿鮮廿錢

◎新春絶好の讀物 好評如湧忽八版

帝大教授 和田垣法學博士著

兎糞錄

▼四六判特製美裝
▼紙數四百頁全
◎定價金壹圓貳拾錢
◎郵稅八錢滿鮮廿錢

◎出版界を震動せる破天荒の快著忽拾八版 發賣

批評一斑

◎萬朝報 運不運も大部分は其人自から之を招くさらは如何にして不運を避くべきか著者は暢達の筆を馳せて自在に之を說き一々面白き例を擧ぐ

◎日本及日本人 桂月氏がその波瀾多き世路の經驗と幾多先哲の言行とによりよく不運を轉じて好運を迎ふるの手段を記述す行文の流暢にして讀誦すゝや既に快感禁ずべからざるものあり

◎萬朝報 時に應じ折に觸れて二つ三つ宛飛び〳〵に讀んで見やうと思ひしに一氣呵成に讀んで了ひぬ著者が得意のウイツトとユーモアの人を魅するものあればなり

◎道 よくまあ當代學者の間に之れだけの人物を生じたかと疑ゝしめる靜山公も之を讀まれたならば夜話は机の下へ蹴くされるであらふ蜀山は苦笑するであらう

◎二六 英譯棄兒行一篇は純文學として好技神に入る

◎發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付ろの一)

早稻田大學教授文學士 **内ケ崎作三郎先生新著**

ロイド・ヂョールヂ

▲長原止水君裝幀

四六版五百五拾餘頁
總クロース函入
肖像其他寫眞數葉
定價金壹圓參拾錢
内地小包料金拾貳錢
普通郵送費拾八錢

世界的政界の中心人物

新時代は新人物を要求す、今やあらゆる社會に於て新人物を要求するに急なりと雖も政治社會に於てその最も然るを見る、政治の改革は唯夫れ新人物の政治的巨腕に俟つべきのみ、大英帝國は既に斯の如き偉人を現代大藏大臣**ロイド・ヂョールヂ**に於て發見しぬ、この發見はかのラヂウムの夫れに優ること數十等、彼は「内政改革」の主張者にして實行者たり、彼は「財政即ち政治、政治即ち財政」の一新樣式を最も巧妙に最も鮮明に經緯せる一大巨人也、彼は正に政界刷新の一大曉鐘、その轟音は殷々として四海を歴す、彼の獅子吼は世界萬人の耳に徹す、三寸の舌刀と渾身の勇氣は彼の生命也、彼は英國政界の大流行兒にして彼の在るところ、風雲幾卷舒す、彼や素とウエルス山間の一寒村に呱々の聲をあげたる一貧童、年齒將に五十、其半生苦楚の實歷は寔に數奇を極む、斯書「一寒村より大臣街へ」の主人公を傳ふ、一面乃ち好箇の立志傳たるべく、他面乃ち英國最近政界の波瀾史たるべし、時は進むで政治の季節に入る、特に政治に志す者、政治に與る者、斯書を得て、即ち一大光明に接するの感あらむ。

屈山 小室重弘先生著

實驗雄辯學

訂正九版

菊判洋裝
定價四拾五錢
郵稅六錢

文明社會の戰は言論を武器として、輸贏を決せざるべからず、不辯舌は竟に社會競爭の上に於て劣敗者たるを免かれず、本書は著者が多年の實驗に基き、談論の秘訣雄辯の妙用を講述せられたる者なれば唯に雄辯術のみならず、亦文學にも創見する所尠からず故に學生諸君は勿論、苟も大正の國民たる者は一本座右に備へ自己の運命を向上發展せられよ。

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番地 振替四一〇九 電話京橋三七七七 **前川文榮閣**

(中付五の四)

新春劈頭の快著

最新刊

大阪毎日新聞社長本山彦一氏序
雜誌(現代)主筆横山黒頭巾氏序
東京日々新聞記者角田浩々氏序

大阪毎日新聞記者 平野秋來氏著

兵兒の國(薩摩氣質)

中版三百餘頁上製
寫眞版數葉挿入箱入美本
定價金九拾五錢
送費八錢

薩南俊傑傳

長閥衰へて薩派起る、今や薩派の全盛時代にして、薩摩出身者の一擧一動は我が國民注意の焦點たり、薩州人の複雜なる性格は研究の値なくんばあらず、況んや彼等政柄を執り兵權を握る今日に於てをや、著者薩南に入りて苦心慘憺、史籍に徴し地理を調べて彼等の過去を説き現在を描く、材料極めて豐富、筆致頗る瑰麗、一讀海南の一奇國讀者の眼前に浮び再讀赤裸々の隼人讀者の脚下に横はらん、書中載する所現首相山本權兵衞、元帥東郷平八郎を始め多くは各社會の代表的人物のみ、而して「**奇傑花大人**」「**二尺七寸の豪傑**」の兩長篇に至つては**小說以上の珍奇**なる事實は文章の絶妙なると相待つて讀者をして駭心驚目せしめずんば止まず、薩摩觀察記にしてまた同時に海南俊傑列傳たる本書を讀まずんば未だ以て現代の人物を語るべからず、薩州の天下を談ずべからざる也。

内容目次

隼人の解剖、山本首相、東郷元帥、奇傑花大人、鬼邊見の遺子、二尺七寸の豪傑、故乃木夫人、大迫大將、奈良原男、玉利博士、絶島の南州、三州聞書

▲到る所の書店にて販賣す若し品切の時は直接弊店へ御申越あらば着金即時送本可仕候

(中付五の五)

發行所 東京市本郷一丁目大通 電話下谷四三六二 振替東京一二五五八 **日東堂**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正三年の時事新報

新年大附録大額面用油畫

アートタイプ原色版

‥花さして女と‥

西洋畫大家白瀧幾之助氏筆

大正三年の初頭を飾る

艶麗無比の名畫

直に讀め！

天下に新聞紙多しと雖も記事の豐富にして清新に且つ高潔に而も趣味横溢する點に於て我時事新報の如く遠慮なく何人にも推奬し得べき新聞紙何處にかある

直に讀め！

三十有餘年間の經驗と最新研究の新聞編輯法に基き今日の新聞界に一歩を先じ面目を一新したる我が時事新報が大正三年に於て更に如何に活躍するかを見よ

千萬言を費さんより切に一讀を俟つ

時事新報社

東京

（中付五の六）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

德富猪一郎氏の三新著

大正二年は著者に取りて近來比類なき多産的の歳なりき左記三著は何れも著者最近の快心の大文字也

山水隨緣記

是れ蘇峰子が昨夏秋日本好景の隨一なる瀬戸内海及び富士山下を平福百穗畫伯と相携へて逍遙したる遊記にして眞率多趣の文字は百穗畫伯の輕妙清新の寫景と照應して一種の美觀をなす特に印刷製版には餘力を吝まず蓋し近來稀覯の珍籍たる也其中二百五十部は特製にして號數を記し蘇峰百穗両氏の自筆證明あり蓋珍中の珍之を天覽に供し之を名山に藏し而して其の剩餘百五十部を江湖の同好に頒つ（定價特製金四圓上製金參圓郵税各金拾六錢）

政治家としての桂公

著者が桂公を說く猶モルレー卿が虞翁を說くが如し眼の達する所筆之に從ふ近古大疑問の政治家桂公を知る只此書にあり（定價金壹圓郵税八錢）

時務一家言

是れ著者が滿腔の心血を注ぎて稿したるもの『將來之日本』以後著者に取りて最も豪蕩、奇恣、雄放、痛快の作也二十世紀の治安策と云ふも溢言にあらず（定價金壹圓郵税金拾貳錢）

發行所

東京市京橋區日吉町

民友社

振替口座一三一〇〇

（中付五の七）

和歌三百首

砂上

與謝野晶子

君を刺し死なむとぞ思ふ何處まで沈むこころぞ昂るこころぞ
うち見には時を忘れて飛ぶに似ぬものを見棄て來しかたちして
身の中に悲みの湧く筋などのあるここちして手を眺め居ぬ
うつそみの左より來て右に行く風さへ聲は殘るとぞおもふ
この鳥に鐵網を張る彼の鳥に鐵網を張るにくき仕事師
一足も休まずて行く旅人を心の中に見いでつるとき
若き日は寢顔を人の見ると云ふ恐しきこと氣づかずて居し
春寒し邸の上の薄雲の襟の中までおつるここちに
まぼろしに鋭きものもはたありぬうつつもはかなわれを見給へ
われに來て共に泣くもの君に行き泣くものそれはもとよりあれど

わろ者にならず君としいさかふはいささかだにも難くぞありける
いやはてに別れ別れになりたらば美くしき戀しつと思はむ
はしたなき戀ばかりかな人見るははた表面にて二人が見るは
淡やかに夜話などをすることの堪へがたきまで悲しかりけれ
雨ふれり戀のはかなし身のはかな行末よりも今の唯今
わが悶へ淺き理をさへなさざりとさめしここちのするもひと時
嘯云ひぬ人目に缺るところなきわれとなりつるわざはひにより
目を開かむその前にするふためきと人の生るる時にたとへむ
まだかつて燃えざる炭か灰なるか何と聞かむも悲しけれども
雨の日も何をして居むとし思ふ愁は知らぬわれなりけらし
いつなりけむこぢれてやがて暗き道歩めるものと心をなしぬ
わがすなる作りごとにもよろこびを胸の底より排ひ給ふや
二つまで手を取り君は語らへどおちゐぬ心もつ人は誰れ

半の身いと宜しくて半の身いとくるしやと思ふことかな
噴水と花の廣場のありたらばもの思ふ時まろく歩まむ
かばかりもなよなよとせる心をば浪華育ちの傷におもへり
酔ならず氣を失ひてありぬらんかく思ふよりわびしきはなし
あさましき終りとならばいかならん癲癇病の倒るるがごと
何となりあらはれぬべき夜ともなく明き日とすく物の思はる
ふと氣づくわれを眺むる心さへなしと自ら見下げたりけむ
なごやかに泣かしめよなど泣きて云ふわれ恐しき病になりぬ
籠にあるは雄か雌かわかぬ二羽の鳥酔へるあはれさ君もおのれも
唯事によろこぶ人と唯事に悲しむ人とことなるのみか
折ふしは他界を覗き折ふしは友染の切れとなれるたましひ
時にふと冷きことをわれ云ひぬ耳に聞かぬを頼みとするや
やるせなさこれは女のやるせなさ男の云へるそれに似たらず
悲みを戀とむすびて思ふこと生れし日より持てる病ぞ
寺に行くいと弱しとて昔より知れることをはまた泣かむため
走ることはやし彼處にいたる時蛇のかたちをなすべき心
二日ほど重き思ひを忘れ居ぬ身のおとろへを夜も夢に見て
實の戀内心にまだ備へねばかにかく涙おつるなるらん
變ること少しありつと色もなき味もなきことを見かへる
憎み居ぬ初めも今日も魔薬にて心を飼へる人ならねども
哀れにも物うき日には手と足のもとも要なきここちするかな
死なむなどもの思ふ時時計なり忙ばしくも心はれ行く
戀するに何も殘さずとぞ知りしその頃見つる君を除さず
火のさがのわれに自ら暖まり日をおくるかなありがひなしに
告ぐることありと云ふ聲心よりするを恐れて逃げもさまよふ
運命のわれ見る瞳運命の手なりとおもふこの君のこと

山海經

北原白秋

その一　狐のかみそり

しんしんと寂しき心起りたり山にゆかむとわれ山に來ぬ
この心斷崖の上にいと赤き狐のかみそり見れど癒えずも

狐のかみそり血の出るやうな思して踏みてゆかねば入日が赤し

狐のかみそり斷崖に赤し然れどもつくづくと見れば風吹けりけり

狐のかみそりしんしんと赤し然れどもかたまりて咲けば憤ろしも

毒ある赤き狐のかみそりは悲しき馬に食ましてしかな

註、馬この花を食らへば死す

ただひとり惡しき事すと憚らずわれは踏み藉く狐のかみそり

淫らにして恒心なき子はあはれなりそこにもここにも狐のかみそり

八月は斷層面に朱の如き花光りゐつつ寂しくありけり

赤き日の炎々たるを丘に見てこらへかねつつ走りくだる我は

その二　海光

海にゆかば寂しき心忘られむ海にゆかめとうちいでて來ぬ

涙ながしわれただひとりかくありと金色の海に聲放つなり

われと櫓をわれと禮拜む心なりひとすぢに水脈を光らしてゆけば

金色の飛沫つめたく耳をうつ大海の波は悲しかりけり

一心に舟を漕ぐ男遙に見ゆ金色の日がくるくると射し

朱の大きなる波なだれ落ちたちまち舟は消えにけるかな

金色の波のなだれとすれすれに思ひきや青き蝶とびてゆく

海面にしみじみ尻を向けしかば隆吉が糞は輝きにたり

尿すれば金の光の一絲がさんさんと落ちて彈きかへすも

海に來てわれがこの世の現身の愛惜しき魔羅を悲しみにけり

大きなる人あらはれて目の前に不意に舟漕ぐうれしさうれしさ

炎々と入日の目の前大きなる靜かなる帆に燃えつきにけり

躍り入りひとり泳げばしみじみと寂しき魚の臍突きに來る

泳げば底より足をひくものあり人間の足をひくもののあり

朱の色の大きなる浪のあひだより野菜爽かに積みて舟來も

海にゐて地上の野菜嗅ぎしなりうれしき涙ながれざらめや

あかあかとなだれ落つる波の頂きより盛に魚の飛びゆく飛びゆく

飛の魚強くはばたき一列飛びて翔れりくるしきか海が

わだつみの鱗の宮の底ふかくあるべき魚の水いでて飛ぶ

はてしなき海の凹みに舟うけてあるにあられずわれは烏賊釣る

我は烏賊釣る鼠子の如輕卒しく悲しき烏賊を夜もすがら釣る

わだつみの鱗の宮を押しとかす夜の汐どきとなりにけらしな

夜の海に金無垢の月いとほそくかげろうつす時となりにけるかな

その三　ある時は

ある時は熱心に顔をかがやかし大きなる薔薇をうかがひにけり
ある時は麥藁帽子かぶりて一心にキャベツの葉をもぎて居り
ある時は血さへ滴るべきこれやこの斷層面を悲しみにけり
ある時は狂ひ廻らむとせしかども鳥籠に卵うまれてありけり
ある時は赤々と日のそそぎやまぬ首縊りの家を見恍れてゐたり
ある時は感に堪へつつ路のべの赤馬の尻毛を觸りてゐたり
ある時は遠眼鏡もてつつましく對岸の鳥を凝視めてゐたり
ある時は黒き花瓶の側面にしみじみと赤き日のさすを見つ
ある時は狂氣かと思ふわが父を赤き日に見てふと恐れたり
ある時はおのが家内を盗人のごとく足音をぬすみてあるも
ある時は誰知るまいと思ひの外赤き通草が此方向いて居たり
ある時はたださんさんと泣きてゐたりたとへしもなき寂しさに我

その四　曼珠沙華

斷崖のあまりに赤き曼珠沙華赤き曼珠沙華取りて捨ちよやれ
二人見て來むぞ眞赤な曼珠沙華松の小蔭にちよと入て來むぞ
花赤き曼珠沙華の上にしみじみと人間の子が寢たりけるかも
こち向け、牝牛供養の石が立てり曼珠沙華の花赤き路ばた
われふたたび涙ながして坐りたり曼珠沙華に赤き花あらずけり

（相州三崎にて）

まぶたのうち

柴舟

帳のごと目蓋をおろす疲れたる眼よ安らかに眠に落ちよ
やはらかき褥のやうに今わが眼まぶたの下に横たはるかな
まなぶたを下す刹那にうつりたるこの世の形貌おもむろに消ゆ
現世のものの形貌を呪ふにはあらねどわが眼見せ過しかな
居るにうきこの世界よりのがれ來しわが魂もしばし安らへ
よく眠れたゞよく眠れ終日飽かずものをばうつしゝ瞳
茫として見ゆるものなし閉ぢしわが目蓋の中に何物もなし
夢に近く現にとほき一つ國あゝこの國にあるはたゞわれ

現より呼ぶともいかで歸らめや夢の女の來てさそふもの
度に過ぎてつよき光になやみたる瞳いさゝか遊びたはるゝ
闇といふはいまだし光さし止みしこの一時を名づけ知らなく
烏羽を千枚葺きたる深き闇眞中にひとりわれ恐ぢず立つ
虚無といふ境にわれは入りえぬやほの見えそめぬ影か光の
つと闇は二つに裂けてもそろ〲燃えのぼるなり何の炎ぞ
大海の波のごとくに捲きかへしところ〲のかぐろき炎
渦まけるものは煙か音もなく炎の舌のひらめく中に
何の狡兒何の惡徒ぞわがまもる一つの國に火をつけたるは
天つ日の中に燃ゆてふ紅焔のいつか落ちけむまぶたの底に
うちかへしうちかへしては燃ゆる火の裡に猶立つわれぞ猶立つ
にはかに炎消ゆればあな不思議眞白になりぬひろき天地
燃えつきて影一つだにのこらぬや蕩然として見ゆるものなし
わが理想いま描がかまし白紙に似てひろがれるこの空間に
手も借らでおのが心の描がくらむ眼二つぞあらはれにける
見つむれは白き面ざし長き眉しらざる夢の人ぞよりくる

うちとけて物言ふらしき吻かれや口かれや額と見えわかるれど
續きても續きてもなほよりくるや人も獸も馬も車も
ひまもなく手ふり足ふり首ふるこや悲しさがあせる仕業か
うち笑ふものだにもなし手をは振り足をば振りて立つと見ゆれど
導けばみちびくまゝに聲立てず一列長うあゆみてぞゆく
いにしへの館の壁畫のまへに連りてゆく十も二十も
この世界領するは誰ぞかく問へどふりかへりゆく何人もなし
顧みて知りてありてふ風もせぬ人の數多をわれいかにせむ
半裸の子半馬の人の列をなすこの世界には住むべくもなし
さま〲の物よ形貌よ整然とゆくかと見ればつと亂れ散る
さわぎ立ち亂れあへどもこはをかしこの世界には音なかりけり
氣づきては顧みて問ふ「今見るはいつかくありしわれの心ぞ」
憧憬の眼をみはれどもやゝすこし狂へる心まとまらぬかな
此處にてもたゞ美しうものを見す眞實に遠きわが心の眼
距離もあらで重なる物と物「かつてひとたび君にまみえし」
しみ〲と見る間なけれど再現の物よりをこるわが悔心

わが前生かゝる世界にありけるかいなまたありやわれの後生
現在の世に容れられざるにあらねども求めてもなほ背き顔する
拙なくてありてわびむは何かせむたゞ美くしう背きてあらむ
背きてはつひにいづこの世にゆくか今見る世にも住すべきなし
わが思ふ思ひのまゝになりぬともなほもつきせじ思ふ心は
悶えても遂に何をも求め得ず今見る世にもまた求めえじ
新らしき火よ燃えあがれ現在のわがつたなき心亡さむため
まなぶたの中の炎も人も馬もあはれや現在のまぼろしにして
いづくまで行けども心はなれえぬこの現在の世をまたやたのまむ
うつくしき玉を抱けるわが想ひくだけなばまたあつめて行かむ
靜やかに眠れわが眼よ明日の日のひかりさやかにうつさむがため

綠酒行

(大正二年十一月、京阪地方に遊びて作れる)

吉井勇

一旬をちかひて君と別れたるわれと思へばかうべ垂るるも
東京のあわたゞしさに倦き果てて西へいそく、とわれ在りにけり
なにゆえに旅にや出でし君思ひその夜はやくも悔ひにけらずや
あはれなる秋の女とわかれ來し旅ゆゑ身ゆゑ涙落ちにき
旅びとはあまりにわるし旅まくらしつゝも夜ごと君が夢見る
かりそめの旅にしあれど惜しまるる別れを君に告げて來りし
君とわかれ旅に出づるも秋風にふとわがこゝろさそはれしため
鳥が鳴く東をさかりゆくほどにやうやく暗しわれのこころは
ああ旅愁いやすすべなく杯を手に取りしこそ悲しかりけれ
醉泣をする日もあらむうち日さす都のことを忘れかぬれば
大阪に着きてはじめて見たる空その空いたく赤かりしかな
空を見てものを思へば大阪の空もなつかし赤しはかなし
秋の日の道頓堀のにぎはひのなかにあれどもなぐさますけり
たそがれの角座の幟はたはたと吾を紅燈の街にさそへり
はしけやし南地どよもすおさらひに猩々をしもをどりし子はも
京なまりうれしと云ひしひとのためあやうく君を忘れむとせし
ただ一夜いとうつくしく西鶴に書かれむほどのことをなせども

いと古き人の情をしみじみと感じなげくと君に知らゆな

かのひとの情ありげの目づかに心うごきぬあはれたまゆら

かなしげに水を凝視むるひとありて南地の夜は更けがたきかも

くちづけを悲しやひとに見られけり難波をんなの下司の垣間見

君へ送るわが大阪のせうそくに書きがたきこともありにけるかな

富田屋の文づかひする下男雨に濡れつつ街をはしるも

雁童の死をかたりつつうるみたる目をなせる子もいとしかりけり

をどけつつ吾八をどれり秋の夜は戀がたりなど聽かましものを

近松の世話淨瑠璃のなかに住むひとともならばうれしからまし

世を厭ひさすらひ出でしわかうどは南地にひとり酒を飲み居り

しくしくとこころ痛みて堪へがたし七日のあひだ君の文見ず

宇治に來て醉ひて寢ぬれどしかすがにこのかしみの棄て難きかな

月夜よし寢じなと云ひしひとのため宇治の一夜は忘れがたかり

別れ來し君が身のうへしのびつつ宇治の河原におもひ草摘む

黄檗の寺の鐘の音しんしんと君おもはせてねむりかねつも

われはまづ愛宕おろしの寒さよとかへり來し子の手を取りにける

いかがせむ君にちかひし一旬ははやくも過ぎて冬のちかづく

一力のおあさに聽きしはなしよな身につまさるる戀がたりよな

酒に醉ひ舞姫に醉ひ正體もなやとおあさは笑ひけるかな

醉ひつかれ雜魚寢の人の寢しつまる頃ともなれどわれは寢られず

かたはらにわが舞姫は寢たれども君をおもひてわれは寢られず

舞姫の木履のおとしんしんと更けたる秋の夜半にきこゆる

口紅はあまりに濃かり舞姫のそのくちびるは吸ふよしもなし

わかうどが祇園の秋の夢はいとさめやすきものとかはしる

戀がたりなかばならぬにやさしくも涙ぐみたるおれんおもへば

はしきやしおれん思へば秋の夜のかなしみなどはすべて忘れつ

ほのぼのとうつくしき目を瞬きてものを云ひたるおれんおもへば

かなしみは蓬の香よりきたるなりおれんな往きそ加茂の河原に

南座の顔見世ちかし澤瀉屋來とうれしげに云ふは誰が子ぞ

加茂川の水をながめてもの思ふさすらひびとにものな問ひそね

かなしみに身も世もあらぬここちして繩手いそげば降る時雨かな

隅田川ともにながめし水のいろ目にこそうかべ君にかへらむ

かなしみに身も痩すと云ひうらわかきこの旅人はかへり來(きた)りぬ

街の歌及び夜の歌

前田夕暮

朝、街を行けば悲しき勞働者その勞働者にわれもまじりて
朝、街を行けばあたたかく日は照れりまことに吾ぞ強く生きなむ
初冬はこころよしわが新らしく生きなむとして心張れるも
新らしくわが生くる日にあかあかと初冬の太陽は街にのぼれり
わが生くる日の朝の街、初冬の陽の舗石に光りしたしき
わが思ふかたに歩むべし新らしく生きむとすなる力きたるも
街角に立ちてわがみる初冬の街の横顔、空さ青なり
冬の朝の空の青きにゴシックの高き建物を觀るはかなしき
日にむかひてたてるまはだかの建物の窓より窓に眼をうつしみる
白き石造の最上階の窓はみな日にむかひけり、窓かけの色
日にむかへる彼の石造の建物の冷たく光る朝の街ゆくも
わが行くは初冬の朝のまはだかの街の舗石、しろき舗石

夏よりはやや肥えたればわが肉體(からだ)の重さこころよし朝の街行く
我が肉體の肥ゆるはこころよかりけり初冬の朝の光にふるる
白きボアをあしたの街にみてしより冬はこのもしその白きボア
こころよき初冬の朝の食慾の健やかなれば街を急ぎし
やはらかき朝餐の麵麭の味のよきこの初冬のうえここちはも
燒林檎ましろき朝の皿の上ひとつかなしき、初冬(しよとう)の日光

×

妹が腹を割きたる病院のかべしろくみえ大河ひかる
冬されば空は青みつ水光り空は青みつ煙突黒し
汽笛鳴るかたをしみれば空青み煙突立てり煙突立てり
空青み浚泄船を古濠にうかべてふゆの夕日(ひ)はあかあかと
青空の方にこころをひたに惹く彼の煤煙の生けるが如し
冬の夕日はまことに赤く大きかり町の煙突、黒き煙突
煙突のくろき街行き大河の濁れる色をみるは悲しも
青空はわれの心のまうへなり彼の青空に煤煙なびく
大空は青くにじみし濡紙のごとしこころは深く呼吸する

この身内のたぎる力に街をゆき煤煙をみる、空うす青し
うす青み消ぬがにしてはただよへる暮れのこる空、街の上の空
冬草の青きが這へる古濠の堤の斜面日光ながる

×

力よ内に籠れと念じ我が事業を成し遂げむとして生命あらは也
我が生命をあらはになして公衆の前に叫ばむとする心かなしも
樫の青葉風に鳴る夜ぞ酒を煮て我等が生くる日を悲しみぬ
風鳴るは青ゆづり葉か樫の葉か今宵をわれら酒くみかわす
今、酒はさめて行きつつ全身のひきしまり來つ事業を思ふ
酒さむればしら〴〵として瓦斯ともり心ぞ冬の夜に對ふなり
酒さむれば新らしき力身に湧きて冬の夜深くわが生命生く
見迴せばまはだかになりし籐椅子のやや痩せて部屋の隅に横たふ
酒まつたくさめゆきて冬の夜深み我が心澄み我がいのち燃ゆ
我がいのち冷たく燃ゆる冬の夜の深むがままに深むがままに
我がいとしさこの冬の夜にわがこころまなかひにしも對ひてあれば
ねもやらで物をおもふはこの生命削るにおなじねよといへども
魂を吸ひこむやうな冬の夜の深きためいき身ぢかにぞきく
ムンヒの「臨終の部屋」をおもひいてぬいねなむとして夜の風をきく
「臨終の部屋」のベツドの我が皮膚にふるゝにあらじ眼を閉にけり

×

夜の樹木はみなよろめきて影黒しそのかげわれの心にうつる
夜のものとり散らされしそのなかにわれの生命の脈うてるなり
わがいのちに火を點ぜよ油そそげかし鋭き冬の夜は深みけり
わがいのちのびしめよはた肥えしめよ冬きたり地に霜しろく敷く
わがいのちさむしいのちはまはだかに生れしままに夜にむかふなり

秋かぜの海及び燈臺

若山牧水

伊豆下田港より神子之島に渡る、島といへど一木なき岩礁なり。

とびとびに岩のあらはれ渦まける浪にわが帆はかたむき走る
荒瀬なす岩礁原を過ぎも來て眞帆は濡れつつ光るなりけり
やうやくに帆に馴れ浪に馴れにつつこころゆるめば海の悲しき

泡だてる岬をややに離れ來れば沖は凪ぎゐて雲に陰れり

舳なるちひさき一帆裂くばかり風をはらみつ浪を縫ふなり

舟子だちの若きはねむり老いたるは風のはなしをわれに聞かする

あはれこは潜水夫の舟にありにけり泡だつ沖の浪に舟居り

しらしらと浪の穗がしらみだれたる沖邊に機械つかふ潜水夫等

ほうほうと聲を合せつ空氣を送る舟のうへなる潜水夫等の妻

空氣送る潜水夫の舟の機械の音疾風の海に斷えずひびけり

海底に三時四時を過しつつあさらう貝を買はましものを

海蟲のやや大きなるかたちして潜水夫は浪にあらはれにけり

潜水夫いま舟に手を寄せ舟の中の妻等あらそひ抱きあげむとす

笛のごとわがちさき帆の鳴りはためき沖を馳せつつ潜水夫を見たり

みだれ吹く風にうかべる落葉ともさびしく舟を見て過ぎにけり

あるときはうねりにかくれ或時はうねりの嶺に叫ぶその舟

風の海やむらだつ浪にかくれつつ聲のみぞする潜水夫等の舟

しばらくも搖れのやまざる沖にしてをんなの聲を聞くは悲しも

遠ざかる潜水夫の舟をさびしみてわが帆を見れば濡れてゐにけり

飛沫ちりわが帆のなかば濡れたるに雲を漏れつつ日のさしにけり

いろ赤くあらはれやがて浪に消ゆる沖邊の花を見て走るなり

その島にただ燈台たてり、看守K――君はわが舊き友なり。

友が守る燈臺はあはれわだなかの蟹めく岩に白くたち居り

おほいなる岩のいただき黑礁と見えつつ友はものを振り居り

われも突立ち答へをせむとひしめけど舟搖れに搖れ這ひて布振る

やとさけぶ聲かもすがた目には見えいまだまつたく聞えざるなり

切りたてる赤岩岸のいただきに友は眼遠鏡を振りてゐにけり

友が呼ぶ赤き斷崖見あげつつ舟を着けむと浪とあらそふ

岩赤く崖もひとしく濁血の赤かる島のべが燈臺

岩赤きその島にしも近づけば浪はひとしほ荒れて狂へり

赤岩の十丈にあまるきりぎしを這ひつつややに友の下り來る

むらだてる赤き岩々とびこえて走せ寄る友に先づ胸せまる

赤き斷崖くづれて入江めきたるに舟子等帆おろし舟漕ぎ入るる

碎け立つ浪のすきまに鯊のごと眞赤き岩にとびうつりけり

顔も蒼みひとに餓ゑたる鐵心地火のごとき手をとり合ひにけり

あはれ淋しく顔もなりしか先つ日の友にあらぬはもとよりなれども

別れゐしながき時間(あひだ)もみゆるごとさびしく友のかほに見入りぬ

たづさへし我がおくりもの秋の園のダリアの束(たば)はまだ枯れずあり

ダリアの花につぎつつ舟子等(かこら)とりいだす甁きは友よ酒ぞこぼすな

歩みかねわが下駄ぬげはいそいそと友は草履をわれにはかする

友よ先づわれの言葉のすくなきをとがむなこころ何かさびしきに

うつつともなく浪にもまれし身を運ぶ赤ききりぎしの岩(いは)の階段(きざはし)

相逢ひて言葉すくなき友どちの二人ならびて登る斷崖(きりぎし)

見かへれば舟子等いづれもつら赤め舟流さじと叫び狂へり

石づくり角(かく)なる部屋にただ一つ窓あり友と妻とすまへる

その窓にわがたづさへし花を活け客をよろこぶ若きその妻

語らむにあまり久しく別れゐし我等なりけり先づ酒酌まむ

友醉はずわれまだ醉はずいとまなくさかづきかはしこころを溫(あたた)む

石室(いはむろ)のちひさき窓にあまり濃く非の蒼ぞらうつりたるかな

過ぎ去りし彼が昨日も眼の前に石と靜けきそが顔も見ゆ

石室(いはむろ)の靜けかれはかもの馳れぬ場所(ところ)なればか涙し下(くだ)る

次號の詞藻欄には

イーリアス絶唱……土井晩翠

掲載せらるべし。右は「天上の爭」といへる章の譯にして、著者が數年の努力によつて、希臘原語より譯出せる七五ダブルライン一聯の雄渾の調は原詩の面影を傳へて餘蘊なし。

俳句三百句

四季五十句

内藤鳴雪

春十三句

蓬萊を捧げて眉のかくれけり
飾蝦嶄然として齒朶の中
呼びつれて霜の大路の初荷哉
六日はや睦月は古りぬ雨と風
切凧の落ちなんとして又上る
戀猫の妻も籠れり竈の下
爲朝の弓弦はづすや春の雨
曇る日や深く沈みし種俵
倶利迦羅の雪やなだれん歸る雁
道盡きて松明振るや雪解川
菜の花のゆきとまりなり法隆寺
流れ木のだぶり〱と春の川
睨め合ふ三井の仁王の日永かな

夏十二句

灌佛のはや黑々と瘦せ給ふ
白丁や桐の花掃く門の內
水吹て植木涼しき夜店かな
大團扇祭りの兒をあふぎけり
伐木や螢飛び出てし時鳥
望一の手探りに焚く蚊遣かな
水堰くや捨てし菖蒲の二三本
大刀根の泡や流れて雲の峯
短夜や旭浴びたる旅合羽
出陣や明易しとて肱枕

景清の蚕とり兼ぬる鎧かな
夏羽織有か無かの水色に

秋十三句

星月夜唯相模川流れけり
露吹くや小藪の中の芋畑
綿取に金剛山の道問ひぬ
湖を瀧に落すやむら紅葉
草深く蟲取る人の紙燭して
男郎花白きはものゝ哀なり
夢に入る故山の秋や柿の味
隠家や紙砲乾く菊畑
夕嵐囮の鳥も逃げてなし
水汲の水こぼし行く花野かな
から尻や倒に乗る今日の月
行秋や鼠の喰ひし古錦
稲塚に傘も干したる夕日哉

冬十二句

荻窪や野は枯れ果てゝ牛の聲
初冬の襟にさし込む旭かな
新宿や馬糞の上に朝の霜
山茶花や稲荷を祭る庫の陰
有明や鴛鴦の浮寝のあからさま
緋威や雪に出立つ三千騎
凩に抱き合ふ雌松雄松かな
古塚や冬田の中の一つ松
煤掃の庭で魚焼く焚火哉
病む冬の命なりけり衣配
吹曇り／＼年は暮れにけり
殘月や見付出づれば餅の音

近詠五十首

碧梧桐

辛き芽吹く槻の洞鼠又た見る日
磧渡りす松に桜の芽摘みこぼし
十和田上りの人をこの爐に明日寒ぐ
孤つ松そも見ぬ日爐塞いてあらん

橋脚なりし汐ぬくと穴目溫む水
六甲下りしを夜燕れ花菜に漁火惜しぞ
蘭の風の花菜に螢追ふ夜なる
谷三郷山畑躑躅蠶に燃えて
第一日は試足雲雀に驟雨來て
里指せば押し隔つ山を鳴く雲雀
花菜上りせしお山杉に裏越えす
花菜曇り梨畑に雨の落ち初めて
山ぬけの水さゞら若葉逆木なる
祭提灯垂る淋し笛草の穗に
煙枯れを名殘る縦高桐の咲く
鯉虱とりし盡螢夕雨に
誰が日傘忘れある蜂屋音のして
菜種(タネ)殼焚く宵構へ淸水寄りしたり
從峰の群晴れに雷名殘して
箱根古道紫陽花に瀧離れせり
石に煞らつく魚ジヽと蠅のとまり据う
蚊遣して軒雫珠と音を落つ

簸立てす筍の遲速夏草に
草茂る山掃除坊も笹刈りて
木苺の色染むに病葉の白

大臺原山

山墓に水白し苺壘む雨
江差までの追風(オヒテ)こそ峰蹴上ゲ月
寮生活の草•埋れ無月年々に
豫期の下山測量半ば秋晴れて
秋晴れの日暮るゝ背ろ明き水に
子をあやす登山人花野泊りしたき
花野の花束ね挿すかくも溫泉溢れに
奈良の宿りの柿戀ひぬ遲々と淡路旅
簸がくれす柿とのみ吉野下りたり
鬪牛も秋風に興行の里
豆を干す蕎麥を干す赤子よろ〳〵と
松に百舌鳥來る壁蔦の染むを庭作り
杉菜青きに茨いらつ時雨あとなき日
磐梯雪晴れ彌彥時雨の旅とこそ

油井の共涸れす時雨鳴る出ある
鴫誘ふ田と寒し茨杖に觸れて
櫻山なれば入口芝も浮寐鳥に
砂ざれに堪ふ松や冬日江を壓す
窓冬日猫貰ふなど暇あれば
敷地とりし山茶花に櫻植え溜り
廢港の柳山茶花散る水に
溫室映りす書齋の灯冬の夜となり
芒枯れて溜る水磧いや高に
松は植林小春人尾根を煙らせり
滿足な無言爐灰の魔映りす

舊々作冬五十句

虚子

冬夜讀書何か物鳴る腹の底
兄弟の心異なる寒さかな
町と共に衰へし寺や除夜の鐘
雜炊に魂入るや寒の内

木枯に人住める家や水のへり
雪掻ぐや行人袖を拂ひ過ぐ
傾きし木部屋悲しさや雪の家
掃きすてし今朝のほこりや霜柱
茶畑に時雨日和や宇治近し
下駄の雪たゝきの上にころがれり
雪模様枯木の中を通りけり
走るやうに枯野を通る灯かな
氷りたる佛の飯を盜みけり
遠山に日のあたりたる枯野かな
ランプさげて人送り出る冬田かな
泉水は氷りて開けぬ雨戶かな
寺近く燈心植うる冬田かな
冬川や石切る山の屑沈む
高き木に梯子かけたり冬構
親猿の赤い頭布や叱られし
したゝむる旅の日記や褶明り
靑き色の殘りて寒き干菜かな

小說に己が天地や爐火をこゝろ
古頭布師走の市をうと〳〵と
日光をあびて休むやすゝ拂
壅の水あすはこぼれんけしきかな
赤本に死したる紙魚や爐にはたく
消炭のすぐをこり立つ淋しさよ
書中古人に會す妻が炭ひく音すなり
何やらがもげて悲しき熊手かな
緞子織る機を休めて亥の子かな
頸卷なして使者を見る冬の陣
西日あたる窓をたのしむ冬籠
冬籠襖のしみを畫に見做す
納豆汁も富みて嗜めば奢かな
村の名も法隆寺なり麥を蒔く
煤掃きや襖の松の深みどり
宇治山に殘る紅葉や網代守る
湯婆無く寢る古妻を憐れめり
河豚くふや短き命短き日
牡蠣船の低き天井にランプかな
牡蠣の酢の濁るともなき曇りかな
掃き寄せし落葉に雨の降り出しぬ
茶の花に暖き日のしまひかな
宿り木のあから樣なる冬木かな
煮ゆる時蕪汁とぞ匂ひける
茶の花に通用門也黃檗寺
岡の邊に刈り殘す髮の冬木かな
冬枯の道二筋に分れけり
胃の底に酢羊羹や冬籠

五十句

青々

故園淋しく賣りし田を行く秋祭
こけてゐる案山子おこすや朝鳥に
露べと〳〵に上りて草地舟は遣る
逃げし怖れに氣拔けて二人稻妻を
麥を採り山蔭に住めと妹し言はゞ

戀妻を人と寢せつ生死秋の風
この野山鳥影ほのか野菊たつ
門柿にくらく顔見し夜學の子
捨もならぬ蟲毛氈に後の雛
柿は無し澁柿が藪に少し見ゆ
柚の垣内柚味噌つくれと人の强ふ
別後一人黍の撓みてあるを見る
夜學寺父も學びし簀子かな
山間を隣村へ客冬構
酒を喚びつゝ此家憐む冬構
泊るべきに障子もあかず冬構
冬構の椿茶屋に座敷あけさせつ
藁火あがる木蜜柑の玉冬構
門柚の木に鶺鴒とんで水の音
清の遺臣のそれか冬野を挽歌行く
酒にしくもの無しといふ暮や歸花

堺南宗寺牡丹花肖栢之墓

瓦塀の紅葉しめりに墓を訪ふ

舊知の一週忌に

死にし人も生けるも霜の一年や
南天の崖家借り住むに水涸るゝ
岩底の水も涸るゝか鳥噪ぐ
峯聳ゆ岩に屐齒の水涸や
海邊小山登り口窄み茶の花が
蓑蟲の枯らしゝ木よりみそさゞい
椿などのくらき庭出て大根引
布團をも出すに任せて知己を泊む
石に木をわたして納屋や水仙花
しぐるゝや畑に染まる庭の花
茶の花を入り込み窪に井は湛ふ
前茶畑の冬を里出の娘連れ
水鳥の來ぬに餌を賣る茶店かな

延命寺門前なる阜千里の居を思ひて

鬼住の宿は紅葉に炭團かな
干炭團かげろひて我世暇ある
人の夜を問ひありき果牡蠣船に

岩角の潜むべきなくさゝ鳴す
山莊夜る跫音のぼる御講かな
冬の空を徒歩て旅來し父と兄
非ずとも父子とも言ふ三碑薄枯る
佛法の陵夷に寺は爐開す

近代劇協會に在る小野益太郎兄は俳人鞭下なり近松座の果てに相携へて小酌數年の舊を語る

牡蠣船出て何か思ひのある夜かな
針を投けて物思ふ布團針あらん
溺るといふ紅き布團に寢る故に
氤氳と身香こもる布團かな
紅布團の中のうつろを不老門

芭蕉翁像賛二句

生涯を時雨に了り淋しさよ
長明と共に祀らん翁かな

新作五十句

大谷繞石

引きし福に因む句皆に乞ひもして
蕗の薹も書添ふ古墳見取圖や
二日灸點師が慈眼子の睨む
夜に入つて微雨初蛙と日記の末
琴に伐りし桐の根株や春の雪
下女が荷の蒲黄風呂敷暖かに
造林の杉は苗なる蕨かな
過ぎて早瀬を船に見返る燕とぶ
雉子啼くや木を伐り落す谿急に
蜂去來溫室の蘭見てあれば
推敲の一偈一日落椿
春雨の明日立つ京を降りそむる
牧場仕切る堀割並木若葉照り
岩あるに夜を休む渡舟夏柳
馬賣りて久しき厩栗の花

蓮を見て鐘を見て僧を訪ねけり
竹稔るにも年の凶云ふ旱雲
流謫の師送る濱や時鳥
山蟻や的の矢番の藁草履
變る瀬に簗修理翡翠遠とべり
桐畠へ買人案内や蟬時雨
蛇や矢に塗る毒の草摘めば
繪日傘をたゝみて文箱持ち更へし
轉の句の一つ讀めぬ字紙魚の跡
嫁入荷の中休む茶屋や心太
古瓦鍍りし坐右の硯や今朝の秋
野飛々に山と積む乾草や秋はれて
弓と外る船橋も大河稲妻す
初心一人交じる夜長の歌仙行
鐵筆巻換の膝浸す鉢秋の水
樹帶過ぎて猶ほ霧鈴を朗ら振る
いつも葉震ふポプラ並木や朝の月
洛外の此處も小寺や木犀花

鯨曳きし卷轆轤濱の花芒
公案を解せず詩を得し芭蕉かな
コスモスの咲く家と貸家敎ふるに
川中洲並め干す布や赤蜻蛉
囮にかゝる鳥も捕り漆掻きもして
頼む句もあらねど子規忌連りぬ
今朝の冬玉と透く薤皿も賞づ
死鯨濱遠しつゞく沖曇り
笹鳴や宇治は茶の木の丘の家
奥の院鎖しに上る落葉かな
賛句みな木枯や龍飛十二勝
寒梅や煤けて在す夫子の像
見臺の置忘れ珠數水仙花
擱坐船見も珍ら凪浮寢鳥
畫室爐あるも石像に寒し霰にも
竹草履橋の長さを辷りけり
貼る上に貼る護符柱榾明り

陽塵

高田蝶衣

餅やいて吹く灰も塵陽に舞ふ冬至
冬至來て貯の木の實飯に足す
母家の小言をしば喰ふ分家冬至處す
屋根を落ちし天水桶や冬至寺
冬至訪て療法に絕食の事もきく
布施による讀經長短も冬至かな
氷中に堅果の活ける冬至かな
愚者智者に商ひ勝ちぬ冬至市
頃と拷ぐ柑あり冬至まつる神
書畫を長節に擔ぎて辭すや冬至客
耕人に得し敎訓や冬至野に出てゝ
貝化石鋲めく蜼や冬の山
山脈の眠れるを俘虜が國唄す
この國を表裏つくりて山眠る
惡行の猛者足塞へぬ冬の米

紡ぎ歌まねぶ狸や冬山家
子にも讓りおしむ田畑やの年くれ
餞ばなれよくて人望や年の暮
藥禮に添ふる鯋や年のくれ
雪掻くや無理乞ゆりて弟子となり
雨に來し白馬のよごれ寒う見ぬ
冬の野や互市に紅布も張る見えて
風折れの大洞樹神去なれけむ
印刀をとぐ硯の裏や冬籠
儲口を報ず走狗あり冬こもり
垂天の雲に面摩す蒲團かな
使者大儀やすめと蒲團出されけり
水天の間分け入る如くねる蒲團
拾子なりし自らをおもふ蒲團寒む
弓場通ひの晝ぬくう手袋を袂にす
手袋や今日應募せし機織子
漁夫の一揆にあふ埋立や冬の雁
燈臺小屋に殺人犯や冬の雁

風崩れの白蛙や寒雁の海
渡り買人に鳥税課すや冬の雁
營園半ばを移封の命や冬の雁
坑夫にも堪へてまた去る冬の雁
法會前夜の長起きや鴨濠に來る
土手干の柴楯めけり浮寢鳥
千鳥なくや主君仇家の女を戀す
槍鎌の杣等兵めけり冬木立
年木樵振る斧雲につかへけり
滯船に木の葉降るや横雲岬のよに
寮室に火氣ゆるされず冬の梅
嫡子庶子の反目を枇杷の花咲けり
凍死つぐ邊境の報や枇杷の花
水仙や塾風一の虛飾なき
畑に冬瓜あり天に團雲轉び馳す
利子惚れに貸して貧しぬ冬瓜汁、
冈の練武や馬蹄火を發す

評論

文藝時評

評壇に上るに當つて先づその態度を明かにす

中澤臨川

私は一昨年から昨年にかけて、この誌上でトルストイとニーチェを評傳した。十九世紀後半が產した代表

的二大偉人として、新舊の精神的世紀を分つ時代に生れたラトスマンまたは先驅者としての彼等の生活に或る意義を發見すると云ふことに非常の興味を感じたからてある。て、私は尠くとも私の最善(ベスト)を盡して其事業に從つた。

曩にトルストを評傳した折に私が世間から受けた批難のうち、私の心に殘つてゐるものが二つある。それは私の紹介したトルストイが眞實のトルストイてなく唯だ著者即ち私の勝手に造り上げたトルストイてあると云ふことと、私が何もかも彼の生活と事業に同情して殆んど盲目的に彼を受け入れたと云ふことてある。此度のニーチェ論に就ても恐らく同じやうな批難が世間から起ることと思ふ。由て私はここに聊か自分の採る態度を辨明して置かなければならない。

私が今日批評家否な人間として立つ態度は廣義の「行爲主義者(アクテイヴイスト)」てある。世の中に絶對の眞理とか至上(カテゴリカル、)命令(インペラチブ)とか云ふもの丶あるやなしやを私は知らない。知らうとも思はない。寧ろそれを無益の詮索だと思つてゐる。路傍の石塊(いしころ)一つても若しもそれが私の今日の生命に利益(やく)だつならば、タイモン、オブ、アゼンスの抱いて泣いた石のやうに、それが人生の情(なさけ)なり道理なりを私に教えて呉れるならば、私はその石を何よりも尊重したいと思ふ。ウイリアム、ジエームスは天上に安座まします神様の事を一種の無頼漢(ごろつき)だと言つた。またローマン、ロランは斯樣な神樣を、自分は金(かね)屬の高樓に椅りながら自ら火を點けた町の燃えるのを見てゐる暴君ネロに譬へてゐる。我等の實生活と密切な交渉のない「絶對」や「眞理」は我等に用事のないばかりか却て我等の生活に害をなすものてある。ニーチェの言つてゐるやうに、人間の本能には善い本能と惡い本能とがある。それと同じく我等の感情にも正當な感情と邪しまな感情とがある。例へば感傷的(センチメンタル)な心の働きは確かに病的感情て世紀末の徴候と見做すとが能きる。更に一步を進めて觀ると、我等の理性にも善い理性と惡い理性とがある。人間の生命に切實な關係のない思想は、一種の過勞的理性の遊戲て、これまたデカダンの徴候

と見る外はない。空虚な『絶對』や『眞理』がそれてはないか。かくて人間は本能に於ても感情に於ても理性に於ても過敏過勞に失する結果が、潑溂たる生命と遠かり、その原始的意志を磨消し、その創造力を減ずることとなる。

斯樣な意味から、私は在來の所謂客觀的眞理を無視するばかりてなく、之を輕蔑し呪咀し唾棄しようとする。我等が眞にその影響から免れる爲めには我等は平氣てはゐられない。之に對する強い輕蔑を我等の持藥とせなければならない。なぜなら、我等自身がその慢性病に罹つてゐるのだから。

私は絶對の眞理を斥けて行爲主義を主張する。今日現在我等の生命に有用なものを何よりも尊重し愛惜する。昨日の眞理は最早今日の眞理てなく、今日の朋は或は明日の敵てある。親兄弟の眞理も私の眞理てはない。私の『眞理』てさへ私の眞理てはない。

て、眞理は個々人の專有物てある。また眞理は絶對の自由を要する。その自由に向ての誠意、努力が偉人や天才の事業てある。彼が現在と自己の眞理の自由な所有者てある爲めには、彼は愛惜する過去を棄てねばならない、天賦の自我を研かなければならない、彼の最も愛する隣人――その親近、朋友、愛人――に背かなければならない。否な、彼は或は是等の物を冷遇し侮蔑し排斥しなければならない。トルストイやニーチェの解脱の道に斯樣に苦しい經驗を必要とした。更にあゆらる天才の一生の過程が何よりも先づ這般の努力に於て窺はれるてあらう。

その人の性格はいかなる眞理を必要としたか。彼はいかなる形式に於てその眞理を獲得しまた發表したか。彼はその爲めに奈何云ふ經驗と戰を重ねて其處に到着したか――と云ふことが批評家の先づ見なければならない要點てある。

然かしまた或る藝術乃至哲學から其『眞理』を拾ひ出すのが批評家の役目てはない。彼は矢張彼自身を其處に發見するのてある。言ひ易ゆれば彼自身の眞理を天才の事業を通じて見るのてある。即ち批評家は二重

の鏡に照して彼の姿を見るのである。彼の事業は確かに第二義である。然かし彼はその爲めに卑下さるべき理由を有たない。要は鏡の善惡に由るのであるから。

『「この書に觸れる者は一個の人間に觸れるのである」と言ひうる者はワルト、ホイットマンばかりではないあらゆる偉大な哲學者の書物は凖なその數だけの人間と等しいものだ。それ等の一々の書物の、獨特な然かし言ひ現はしにくい根本的の香ひに對する我等の感じが、即ち我等自身の完全な哲學的敎育の最微妙な成果である。』と、ウイリアム、ジエームスが其著『プラグマチズム』の中で言つてゐるのは至言である。批評家が或る藝術乃至思想の中に求めなければならない物は第一にその作家の『香ひ』であり、また彼が讀者に傳えなければならないものは矢張彼自身の『香ひ』である。易言すれば、彼はたゞ或る作品を通ほして得た彼自身の心靈の物語をすれば可い。即ち彼は奈何(どう)してその中に彼自身を發見したか、どの點で彼自身の心の平和に達する光を見附けたかと云ふことを忠實に語ればよい。斯うして彼は其讀者に同じ熱情を頒ち、彼等自身を同じ興奮のもとに發見させるが任務である。

如上の理由で私の紹介したトルストイやニーチェが私自身だけのトルストイやニーチェであると云ふ批難は當らない。唯だどれだけ私が批評家としての任務を盡し得たかと云ふ點が問題である。

第二の批難は私が餘りトルストイの事業性行に同情を有ち過ぎて、その一切を稱揚し肯定した傾のあると云ふことである。

私の態度を根本的に語れば斯うである。私は何よりも誠實(シンセリチー)の德と云ふ物を人一倍に重く見てゐる。實際、世の中の人は誠實が天才と比肩することの能きるほど尊く且つ稀な德であることを知らない。誠實には奥底がない。勇氣も信念も、一切の強いものはみな誠實から出る。天才とても誠實と相待つたものでなければ完全に發達した例(ためし)がない。て、思想藝術の健全性(サニチー)の證據は著者の誠實の度合に據る。その著者に若し眞正の勇氣と信念がなく、誠實の德に據て立たなんだならば、

その事業は彼の狹隘な偏見の爲めに壞はされ、彼の人生に對する恐怖心または安易な樂天觀の爲めに汚されることてあらう。なぜなら、彼の弱點が何てあらうと、彼の人生に於ける失敗が何てあらうと、それが必然彼の思想藝術に感染しなければ已まないからてある。古來、何れだけ多くの天才がこの德を缺いた爲めに汚さ（スポイル）れたてあらう。近い例はオスカー、ワイルドがさうてある。

誠實が健全な男性的天才（マスキユーリン、ジニアス）を產む。否（い）や、女性的天才と稱ばるべき天才は無い筈てある。なぜなら誠實と天才とは殆んど同意義てあるから、天才の生活のほかには眞正の誠實は求められないのてあるから――ダンチやビートーベンやトルストイやニーチェのやうな生活のほかには。

斯の世には誠實の生活を除いた勇氣（ヘロイズム）の形はない。誠實はあらゆる代價を拂つて現實の世相を觀る。在るが儘に運命に向ふ。「泣きも笑ひも怨みもせずに」唯だ觀じ、そして其運命を愛する。ニーチェの所謂 Amor fati は誠實のみ知る勇氣てある。その所有者は安逸な樂天觀には滿足しないてあらう。彼は現在の自己を最も憎むてあらう。てあるから誠實の行く道は戰と開拓の道てある。常に屈せざる不斷の努力てある。

誠實のある所には何物も許されなければならない。失策も蹉跌も矛盾も、罪惡すらも。私の觀たトルストやニーチェの一生は偉大な誠實の連續てあつた。彼等の生活と思想とはその爲に何時（いつ）も必ず justify せらるべきものてあつた。突飛とも見える彼等の敎義も行動もその人には必須の理由から產れた正當な徑路てあつたのだ。

私の思想は之からいろ／＼に變つて行くてあらう。私はその事を望んてゐる。私の書いたあらゆる物は私の過去てあり、別れる者に對する私の感謝てある。然かし私の根本の態度だけは依然として棄てずに行きたい。

中澤臨川氏は今後每月本誌の爲めに文藝時評の筆を執らるゝのみならず、「ニーチエ論」の續稿として「超人の福音」なる長論文を寄せらるゝことを快諾せられたり。

海外近事評論

懷沙隱客

一

ウェルタ將軍

方今西半球に在りて最も注目を惹くものを、米國大統領ウエルソン氏と墨西哥大統領ウイクトリアノ、ウエルタ氏となす、前者は少焉らく論せず、後者が北隣の大國の强烈なる壓迫と威嚇とに抵抗して、昂々然屈せず撓まず、拉丁亞米利加人の爲めに萬丈の氣焔を吐く處、洵に近來の偉觀たらずとせず、知らずウエルタ氏は如何なる人ぞや。

彼は剛毅不屈の資質と猛烈火山の如き感情と周密精緻の科學的頭腦とを兼備する墨國空前の良將軍なり、寧ろ或は恐る、亦た其の最後の良將軍たらんことを、蓋し彼や西班牙血統と言はんよりは、寧ろ東洋種のインヂヤンなり、六十年前を以て生れ、少時チヤプルテペク陸軍學校に入り、二十一歲の時卒業し、陸軍少尉として軍務に從へりき、然かも生來數學、天文、工學等科學的知識を好み、頭腦また精微を極む、老デイアス氏、レルドー執政を破りて、自ら政權を掌握するや少壯のウエルタ氏は工兵大尉として、陸軍參謀部組織計畫を起て、人をして彼の英才に驚かしめき、やがて彼の建策は容れられて、墨國陸軍參謀部一八七九年を以て始めて成る、彼が衷心の欣喜果して如何ばかりぞや、此一事は亦た以て彼の材能、尋常一樣の武辨にあらざるを見る可き也。

次て彼れ參謀本部に在り、約八年間事實上に於ける之が中心たり、其間少佐、中佐に陞任し、一八九〇年陸事大佐に任命せられ、翌年始めて參謀部を去り、歩兵の司令官としてヤクイ土人征伐に從つて功ありき、當年の作戰と其活動振りとを顧みれば、眞に彼の果斷剛毅の雄材たるを思はしむ、況んや昨年陸軍少將としてオロズコ等の叛軍を征伐し功を樹てたる勇氣、推賞を値ゐするものあるに於てをや。

科學的頭腦、剛毅果斷の資質、已に斯くの如し、若しそれ其猛烈火山の如き感情は、今春マデロ執政顛覆に於て現はれ、更らに最近米國に對する反抗的態度に於て現はれたり、亦何ぞ多言を要せんや。

左もあらばあれ、此快男子、好將軍も、結局沒落の外無かる可き乎。

二

何ぞや、墨國政府は米國政府の承認無き限り、軍資を得るの途無きに反し、叛軍には米資の後援と米國々境よりする武器供給に助けられつゝあれば也、而して其軍兵は遲緩ながら勢力を擴張し、漸次南下の勢を示しつゝあれば也。

殊に既往と周圍との實例を見よ、一九一一年米國の意を損じたる老大統領ディアスは、三十年持續したる元首の位を抛つて歐洲に去りたるにあらざる乎、又た南隣のニカラグア共和國に在りては、一九〇九年末、約十五年間大統領として、中米聯邦組織に腐心したるゼラヤも、米國の爲めに其位を逐はれたるにあらざる乎、固よりウエルタはウイルソン大統領に於て容易ならざる强敵ならんも、然かも要する所、墨國々力の微弱を奈何せん。

思へば、七億五千萬圓を投ぜる巴奈馬運河の竣工は中米諸國殊に墨西哥に執りては、死を告ぐるの寺鐘也之が爲めに偏僻の地に在りたる中米は世界貿易の通路に接し、米國も亦た止む無く自衛的に之が併呑を策するに至る、何等の恨事ぞや、而して目下痛恨最も深きもの、恐らくはウエルタ將軍の胸中なるべし。

佛國政界難

佛國バルツー內閣、十二月二日新發行公債の免稅問題に關し二百九十對二百六十五の少數を以て代議院に敗れ、直ちに辭職す、次てリボー氏、內閣組織を企てて成らず、本文を草する迄、未だ後繼內閣の成立を見ず、以て政局の困難を極むるを知る可し。

抑もバルツー內閣は三月二十一日ブリアン內閣の後を承けて成れるもの、在職八月半、不幸短命と雖も、

前ブリアン内閣の二箇月にして仆れたるに比すれば猶長しと言ふ可し、然らば其顚覆の理由は如何、第一、該内閣は第二流政事家の内閣として貫目足らざりしこと、第二、バルツー氏が、選擧法改正と軍備案に關して急進派の意見に背きたること、必らずや重きに居らん、然かも眞成の根本的理由に至ては、本年大統領選擧の際、共和黨中の急進派と溫和派とが分裂したる事實にあらん。

由來急進派は溫和派が往々緩和政策を執り、時としては、王黨、羅馬教會とさへも相和せんとする態あるを見て、苦々しく感じたること一再のみにあらず、而して此感情は、今春大統領選擧の際、ポアンカレー氏がクレマンソー、モニー等の候補辭退勸告を拒絕し、王黨及び僧侶派の聲援さへ求めて當選したるが爲め、明かに破裂したりき、今回溫和派内閣たり、ポアンカレー、ブリアン系統たるバルツー政府を顚覆したるは何等異とすべきものにあらざる也。

然りと雖も、急進派も、溫和派も自力のみにては、到底確固の内閣を組織するを得可からず、從つて何人が新内閣を組織すとも、其永續を期す可からず、唯だ此形勢を救ふもの一あり、曰く來年五月擧行せらる可き總選擧是れ也、換言すれば同選擧に於て孰れの派かと優勢を占むること是也。

露西亞、獨逸、土耳古

獨逸の對土陸軍顧問（事實上の司令官）供給は、露國に執りて容易ならざる打擊也、然るに露國首相コヽフツォフ、之が抗議に力めて成らず、英佛の援助を乞ふも英佛肯んぜず、何等の苦境ぞや。

吁嗟弱國土耳其に對してすら斯くの如し、頃日コヽツォフの名聲失墜し、往々更迭說を聞く、怪むに足らざる也。

印度と英國

十一月中旬より下旬にかけ、南阿ナタール州に於て印度人の暴動を見、レディスミスにては警吏對印度人

の大衝突あり、ターバン鑛山の印度人五千名は政治的意義を以て同盟罷業を斷行し、南阿の天地、一時人種戰爭の巷たる可きを思はしめき。

吾人は之を見て米國加州に行はるゝと同一の人種的迫害が、天涯地角、到る所實現しつゝあるを悲嘆せずんばあらず、蓋し今回印度人暴動の原因は、和蘭血統のボーア人及び英人が黃色人種を迫害する新移民法を制定したるが爲めにあらざる乎、顧みるに一九〇九年南阿聯邦創設以前、トランヴァール、ナタール、橘果自由邦等皆な印度人を排斥し、或は土地所有權を禁止し或は營業權を制限したりと雖も、本年八月一日實施の移民法の如く苛酷ならず、況んや新法は一九一一年聯邦政府と印度人との間に成立せる妥協（即ち聯邦は新移民法制定に際し、印度人と明記せずして排斥方法を講ずること、從前以上に排斥程度を進めざることを約せりき）に違反するに於てをや、見よ、新法には印度人を指名して排斥せる舊橘果自由邦法律を是認せり、是れ印度人を指名せざる可しとの協定を無視せるものなり、又從來喜望峯には割合に自由に入國し得たりしに今回同地も亦た他の部分同様印度人の入國を嚴禁し、聯邦成立せるに拘らず印度人が一州より他州に移るを禁止し、印度宗敎の儀式に依りて行はれたる結婚は、一夫一婦の主義に違反せざるものと雖も、之を無效としたるが如き、滔々苛酷的待遇を倍加したるものならざる無し、誰か印度人の憤怒を至當とせざるものぞや

是に於て南阿印度人會頭は九月十二日附を以て南阿內相に移牒し、印度人聯合以て反對運動を開始する旨を聲明し、爾後該法律を無視し、或は白晝公然隊を成してナタール、トランスヴァール等各州間の境界を越へんとして捕縛せられ、投獄せらるゝもの數を知らず、而して最近益險惡の勢を示し、政治的罷業をさへも發生するに至れる也。

此經過を耳にするもの、白人の偏頗不正を咎めざるはあらざる可し。然かも吾人は更らに問はむとす、印度は英國の領土にして、印度人は其治下の良民也、然るに同しく英國旗下に在る南阿に於て、英國治下の良

民を排斥す可しとせば、英帝國の統一は孰くにか在ると、而して又更らに問はんとす、若し斯くの如くにして印度人の心、英國を離れ、印度本國に於ける革命熱獨立熱を挑發し來らば、其罪は寧ろ英國の政事家にあらざるかと。

勃牙利王の窮境

勃牙利國王フエルヂナンド、ソフキア府を出でゝ維也納に遊び、久しく歸らず、謠言あり、曰く王退隱の志あり、萬乘の尊を捨てゝ、衣を千仭の岡に振はんとすと。

吁嗟人間、王者となること勿れ、古人の言、豈我を欺かんや、フエルヂナンド王、一八八七年勃牙利王に選定せられてより星霜玆に二十有六、夙夜國運の向上に腐心したる崇高雄大の姿は、洵に欽仰するに餘りあり、一八九六年皇太子ボリス親王の希臘教尊信に依りてスタンボロフ以來不和なりし露國との舊交を溫め、露國及び列强をして王及其政府を承認せしめたるが如き、一九〇八年墺地利と結托して勃國獨立宣言をなし翌年明かに土耳其の羈絆を脱するを得たるが如き、何ぞ其効績の赫々たる、宜なるかな昨年八月古都チルノウオの同王即位二十五年祝祭、未曾有の盛儀を見たることや、然るに圖らざりき、最近巴爾幹戰役の結果、形勢勃牙利に可ならず、其領土擴張も僅々一萬六千基米に止まり、爲めに民心俄然國王を離るゝに至らんとは。

蓋し巴爾幹戰役外交の失敗は、前首相ダネフ及び軍人派の罪たり、又た勃牙利人民が兵力徒らに强く、經濟力之に伴はざりしも與つて力あり、何ぞフエルヂナンドを之れ咎む可けん哉、臥薪嘗膽せよ、臥薪嘗膽せよ、而して王と民と互ひに責むるを止めて、唯協力國運の昌榮に力む可きのみ。

アサルス、ローレン

獨逸帝國領アルサス州ザベルンに軍人對人民の衝突事件の起るを見る、亦何の怪む可き所ぞや。

昨年五月アルサス州議會が獨逸政府の親佛派壓迫を非難するの決議案を可決せる一事、已に同州に於て獨佛系統の軋轢が如何に激甚なるかを明示するにあらずや。

思へば故ビスマルクのアルサス、ローレン割讓は、決して賢明なる策にあらざりき、遮莫、今に至て如何ともする無し、唯要は獨逸官憲が一九一一年兩州憲法修正以上にアルサス、ローレンス人民の權利を保障し之を獨逸治下に悦服せしむるの方法を執るにあらん、知らず宰相ベートマン、ホルウエルヒ、果して之を斷行する勇氣ありや否や。

新刊批評

△愛山史論
山路愛山著
大元社發行

「活きたる心を以て活きたる古人に達せんと欲し」「活きたる古人を其活きたる儘に寫さんと欲す」とは著者の序文の一節也。以て氏の史論の目的とする所を見るべく、又氏の史論の面白き讀物たると同時に、資料編纂等に重きを置く所謂大學派の歷史家等と其趣を異にするを知るに足るべし。此論に收むる所「甲越兩雄論」「德川家康論」「山鹿素行論」外九編にして、概して論述たる人物よりも其人物を産める時代が明瞭に分る心地す。殊に其文章の暢達自在にして、言はんとする所を悉く言ひ盡したるの觀あるは著者の獨擅場にして、恰かも麻姑を以て痒ゆきを掻けるが如き快感を起さしむ。(定價金八十錢)

△表象派の文學運動
岩野泡鳴譯
新潮社發行

アーサー・シモンズの "Symbolists' movement" を譯したるもの也。此書が、文壇に於ける此新運動の紹介及び促進に與つて力あるの名著たるは何人も知る所の如し。譯筆亦一言一句忠實を主としたるの跡歴然たれば、充分なる安心を以て讀み得べきも、只文の調及び句が知らず識らず泡鳴式になれるは是非なしと云ふべし。(定價金一圓)

△縮刷努力論
幸田露伴著
東亞堂發行

露伴氏の「努力論」は青年をして志を立て、身を起し、眞に自主獨立の人たるの精神を振起せしむるに足るべき、力强き著作にして、有り經れたる成功談や立志論などゝ其選を異にするものたるが、今、東亞堂創業滿十年記念出版として其縮刷を見、低廉なる價を以て之を求め得べく且つ携帶に便なるに至りしは讀書家の爲めに賀すべきなり。(定價金一圓)

△アナテマ
伊東六郎譯
泰平館書店發行

アンドレーフの戲曲を譯したるもの也。全篇を一貫せる思想趣旨には多少晦澁に失したる處あるも、譯者が歐洲に普遍せる淺薄なる基督觀を

冷罵せる所は深酷を極む。又劇そのもの（ヘンドルング）取扱方に於ても處々天才的面影を認め得べし。（定價金五十五錢）

△ロイド・ジョールヂ　内ケ崎作三郎著　前川文榮閣發行

現在の英國政治界に於て第一人者の觀あるロイド・ジョールヂの傳記にして、叙事簡淨を缺き、評論抑揚の妙に乏しきを憾むも、著者が英國滯留中より蒐集したる材料は、此傑物の面影を偲ばしむるには足れり。我が國の政治家及び政治に志ある青年は此書によつて益する所蓋し尠少ならざるべし。（定價一圓三十錢）

△戀を知る頃　谷崎潤一郎著　植竹書院發行

昨年五月の本誌に出でたる脚本「戀を知る頃」を卷頭に脚本「誕生」小說「あくび」「恐怖」を收めたり。氏の作は、之を好むと好まざるとに拘らず、氏獨得の藝術境を擅有せるの事實は、何人も之を拒むことを得ざるべし。（定價金五十錢）

△人と超人　堺利彦譯　丙午出版社發行

バーナード・ショウの代表作 Man and Superman を譯したるもの也。附錄「革命家必携」「革命家座右銘」は此劇に含蓄せらるゝ社會主義思想と共に、ショウの人生觀及び社會觀を窺ふに便に、松居松葉氏の「私が倫敦で見た人と超人」は此作の劇としての價値を知るに便利なり。（定價九十錢）

△詳註和譯碧巖錄　加藤咄堂譯註　東亞堂發行

碧巖錄は禪文學の白眉なるも、處々に難解の語句ありて、初學者には近き易からず感ぜられしものなるが、今此書出でゝ何人にも閱讀と理解との便を與へられたりといふべし。（定價一圓八十錢）

△煤煙（第四卷）　森田草平著　新潮社發行

「煤煙」は草平氏の處女作にして同時に其唯一の傑作なり。氏の其後に於ける諸種の作は何れも皆此作に劣り、或意味に於ては氏の文名は繫つて此一作にありといふも過言にあらず。氏が此作を單行本として再び世に出すに當つて、更に訂正に訂正を加へ、今日に至つて第四卷を出して辛く其完成を告げたるは、氏も亦如何に此作に重きを置くかを見るに足るべし。（定價金八十五錢）

△近代思想と實生活　岩野泡鳴著　東亞堂發行

思想家、論文家としての泡鳴氏も、矢張り作家としての泡鳴氏と同じく、多少獨斷的にして小疵小瑕の拾ふべきもの多々あるも、大體に於て進步的にして、よく大勢の觀察を誤らざる所珍とするに足る。此書、近代思想、婦人問題等に關する論文を蒐集せるものにして、一讀に値するも、只定價の餘りに高過ぎるは出版書肆の爲めに惜むべし。（定價一圓八十錢）

新刊批評數十種は紙數超過の爲め不得已之を次號に讓る事とせり。寄贈者諸君の諒察を俟つ。

虚僞の生活を排して

「意義ある眞實の生命に觸れんとするの士は必見よ」

岩野泡鳴先生著

（新刊特賣）

近代思想と實生活

▲洋裝新式美製本 ◎五千部限り 壹圓五拾錢（送費拾貳錢）

▲正價壹圓八十錢

近代思想の由來せる根源を解剖して、吾人が實生活上に於ける堅實なる新立脚地を明かにせるもの新たなる時代の空氣に意義ある生活を營まんと欲するの士の必讀すべき新修養論也

東京神田今川橋
（振替東京一七二）

東亞堂

（中付六の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士森鷗外先生序
文學博士上田敏先生序
與謝野晶子女史著
中澤弘光先生彩畫

新譯源氏物語

版極彩色源氏繪卷五十七葉挿入正價毎冊參圓

■特價壹冊金貳圓五拾錢

■小包料壹冊各拾八錢

◎歐洲の藝術史が何等の作物をも有せざる十世紀に於て既に純藝術家の觀照的態度より書かれ且つ近世の寫實主義又は印象主義の文學と筆致を同じくする『源氏物語』を有するは日本文明史上の誇にして又世界藝術史上の奇蹟に非ずや。唯原作が一千年前の古典にして曠世の女詩人紫式部の遒麗なる文章にかゝり難解の嘆あるや久し。本書は即ち此名著の現代語譯にして現代の紫女たる與謝野晶子女史の明治大正の兩期を通じたる努力の結晶也。譯者は原作者と性を同じくして『源氏物語』の理解に於て先づ男性に優越し、而して平安朝の文學と歷史に精通して當時の生活氣分に味到して兼ねて詩壇最高の位に居る。譯文の明確にして詩味豐かなるは既に序に於て森鷗外、上田敏兩文學博士の推讃を得たり。文學を語るものは必ず本書を見ざるべからず。本書裝幀の高雅、木版の美麗、用紙の善良印刷の鮮明、校正の正確、製本の堅牢なる近時出版界の異數たるを失はず幸に淸鑑を玉はらんことを。

■上卷（自桐壺）廿一帖
■中卷（自玉鬘）十八帖
■下卷の一（自御法）十帖
■下卷の二（自東屋）五帖

鳥子紙繪卷物風極彩色金文字入ギルト附箱入頗美裝本

內容見本呈進　給入要郵券貳錢

外遊記念

與謝野晶子女史著
藤島武二先生畫

夏より秋へ

三色版挿畫四葉
毎頁着色カット入二度摺
〇晶子夫人自畫二葉入
表紙箱帙の裝畫何れも多趣優麗
正價壹圓八拾錢
小包料金八錢

近く歐洲旅行より歸られたる與謝野夫人は其外遊記念として旅中其前後の感懷を叙されたる短詩長詩を此六百頁に亘る大冊に編み、高華、幽婉警拔の趣を盡せる新詩集を出されたり。畫伯藤島武二先生は特に與謝野夫人の爲に深大の感興を以て先生が曾遊の追懷を傾倒し神遠適麗なる挿畫と集中のカット及裝幀一切を寄せらる。

發兌元　東京市麴町區平河町五丁目五番地　（電話番町二〇九三番）（振替東京三八一七番）　金尾文淵堂

（中付六の二）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

記事も意見も、穩健にして而も縝密なれば、何の事件に關しても、最も信賴して讀む可き新聞紙なり。

本局 東京市京橋弓町 電話京橋 編輯 四〇一 四〇四 營業 四〇二 四〇三

朝報社 振替八千番

日刊新聞

朝報

(永世無休日)

定價 一枚一錢 百枚九十錢
郵税 一枚二厘 百枚二十錢

一年三百六十餘日、日々味いて飽きる事無し、新聞紙中の米の飯也、人は一日も此新聞に離る可からず。

（中館大の圖）

中央公論新年號創作

捨てられるまで（小說）……谷崎潤一郎

朽ちる體（小說）……小川未明

初旅（小說）……正宗白鳥

わしも知らない（戲曲）……武者小路實篤

醫局の窓（小說）……長田幹彦

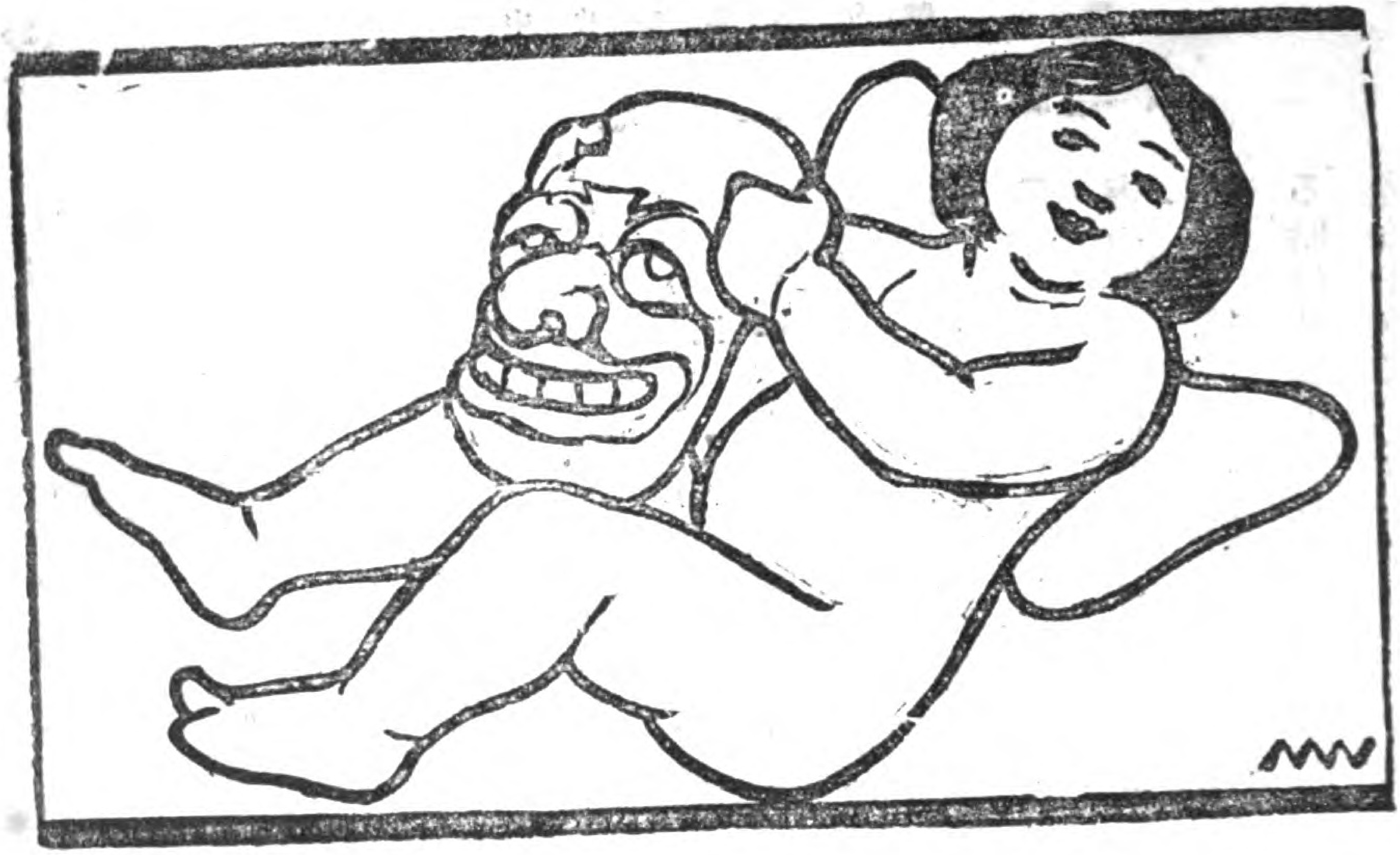
書の暴虐（小說）……田村俊子

一握の藁（小說）……田山花袋

仝じ事（戲曲）……小山內薰

大鹽平八郎（小說）……森鷗外

わなゝき（小說）……德田秋聲



捨てられるまで

谷崎潤一郎

一

其れは寒い冬の晩であつた。十二月があと一週間しか殘らない歳の暮れで、銀座通りには賑かな市が立つて居た。幸吉は服部の大時計の四つ角に佇んで、通行人から顏を見られぬやうに外套の襟を立てゝ、長い間戀人の來るのを待つて居た。戀人？　と呼んでいゝか惡いか、――まだ充分に惚れたとも意識しないうちに、事件がどんどん進んで來て今夜が丁度二度目の會合である。今四五年若い時代なら、此のくらゐの事で激しい戀に落ちるのは容易であつたが、現在の物事に無精な彼の心はさう譯もなく熱度を增して來なかつた。尤も今夜あたりから、そろ〳〵ほんたうの戀が起るであらうと、彼

は内々豫期して居る。豫期と云ふよりは寧ろ翹望して、成る可く自分の感情を煽動するやうに努めて居る。

大時計の針が五時半を過ぎて、日脚の短い空は眞暗であつた。もう約束の刻限が近づいたけれども、女はなか／＼姿を見せさうもない。彼は電車停留場の柱の周圍を彷徨しながら、いろいろと目下の事件に就いて思案に耽つた。彼は必ずしも悧巧な女を要求しない。唯悧巧らしく見える女ならば澤山である彼は又必ずしも美貌の女を要求しない。唯淺はかな悧巧を意味ありげに表現し得る假面を持つて居れば滿足する。かう云ふ考へを以て、今度の女の特徴を調べて見るのに、全く彼の注文通りであるばかりか、其の外にさま／＼の美點さへ備はつて居た。女は都下の一流の藝妓と比べてもヒケを取らない程、すつきりした容姿と端正な瓜實顏とを持つて居る。丈が高く、手足が西洋人のやうに長く、筋肉が充分に引き緊まつて、見るから健康らしい體格である。○○女學校を卒業して、會話の間に氣の利いた英語の名詞を挿むぐらゐの、間に合はせな智識を用意して居る。さうして、中流の家庭の令孃として、得意のCoquetry を行ふ間にも相當の品威を保つ事を怠らない。此れだけの條件を數へて見るのに、彼の女は幸吉の相手として勿體ないやうに考へられる。殊に彼の女のあの魅力ある眸――一體幸吉は、圓い眼よりも細い眼の方に餘計惹き付けられたが、――或る時は長い睫毛の陰にぼんやりと眠つて居るやうな、或る時は油斷のならぬ陰險な計劃を廻らして居るやうな、或る時は人を人とも思はぬ驕慢な睥睨を湛へて居るやうな、針の如く閃々と輝く細い眼の光に想到すると、彼は二度と再び此のやうな誂へ向きの女に

出遇ふ機會はあるまいと思はれた。

女は充分に自分の價値を知つて居ながら、その周圍に群がる多くの男を見渡して、格別優越な地歩を占めて居ない幸吉に心を寄せたのである。不思議にも自分の方から、熱心に執拗に心を寄せたのである。初めての會合の夜、彼の女は男の顔を電燈のあかりの下でつく／＼と打ち眺めつゝ、例の細い眼をぱちぱちやらせて、「どうぞ私を捨てゝくれるな。」と何遍も拜まぬばかりに繰り返した。彼の女は幸吉を非常に買ひ被つて居るらしかつた。世間の女は幸吉に對して、誰でも自分と同樣な愛着の情を惹き起すものと信ずるやうに見えた。彼の女は自分の美貌が、幸吉の心を動かすに至らないのを知つた時、それは幸吉の無精が原因するのだと云ふ事實を悟らなかつた。却て反對に、幸吉は自分ぐらゐの女では滿足しない程、恐ろしく鑑識の高い、自信の強い男であると考へた。彼の女は平生の高慢にも似ず、出來るだけ自分の身を下して彼の歡心を得ようと努めた。

いろ／＼の方面から觀察して、此のやうなFemmeは二度と再び幸吉の生涯に降つて來ようとは思はれない。此の女に、此れ程までにされて、戀に落ちる事が出來なければ、彼は此の後永刧戀を味ふ時がないであらう。是非共惚れて了はなければならない。――幸吉は我れと我が心を勵ました。さうして恰も創作家が或る小說の布局を考案するやうに、此れから幕を開けようとする芝居の筋書に就いて、さま／＼に趣向を廻らした。結局、女が自分の奴隸となるか、自分が女の奴隸となるか、二つのうち孰れか一つの場合にまで、極端に事件が進行しなければ面白くない。彼の恐るゝ所は、事件が其處まで進まな

い間に、熱情を起して飽きて了ふ事である。其れを飽きないやうにするには、主として相手の頭腦の働きに待たなければならないが、其の點に就いて今度の女は先づ安心である。彼は顧慮する所なく、どしどし自分の設計を實現して行けば宜しい。さうして、いよ〳〵極端の大詰まで押し進む事が出來たら、彼は頗る幸福である。女が自分の奴隷となり終せた時、彼は暴君の威嚴と悅樂とを貪ぼる事が出來る。自分が女の奴隷となり終せた時、彼は殉教者の狂熱と迷信とに生きる事が出來る。女を殺しても、女に殺されても、其處まで行けばどちらでも幸福である。

服部の時計が六時を打ち出した時、彼はチヨッと舌を鳴らした。時計の音が塔の頂邊からかん……かん……と冴え返つて、高い高い天空にきらきらとまたゝいて居る星の世界まで響きさうである。懷に入れた兩手の先は、脂汗に煖まつてぬらぬらと襦袢の胴に着いて居るが、袂の中の肩先や肘のあたりは凍え切つて居る。丸の内の廣ッ場を吹き通す木嵐が、數寄屋橋の方から遠慮なく此の四つ辻へ舞ひ込んで來る。わざ〳〵懷から手を出して觸つて見る勇氣はないが、彼の頰ッぺたは瀨戶物のやうに冷めたくなつて居るらしい。夕方、床屋へ行つて髮を剃つた折の、剃刀の刃の感覺がまだ皮膚に殘つて居て、薄荷を振りかけたやうにひりひりして居る。鼻の下を蔽うて居る外套の襟の、獺虎の毛皮が息の爲めに濕ほつて、生溫く唇に觸る。砂埃が、ペーブメントに渦を卷いて、ひゆうッと五六尺の高さに舞ひ上つて、眞面に眼の中へ吹き付ける。彼は時々齒を喰ひしばつて胴顫ひをした。事に依つたら、女が來る迄に自分は此の時計臺の下で、凍え死に死んで了ひはしないであらうか。

「よく待つて居て下さいました。今こそ、あなたはほんたうに私の戀人です。」――から云つて、彼の女は冷めたくなつた幸吉の屍骸に勝ち誇つた微笑を投げはしないであらうか。――さう云ふ場合になつたら、人が見て居ても居ないでも、隨分此のくらゐの壽辭は云ひかねない女である。出來るものならば、俗惡な喜劇の筋によくあるやうに、女が來た時密に死んだ振りをして、其の言動を見てやりたいやうにも思ふ。

女は芝の愛宕下から、嫂や女中に連れられて、歲晚の景況を見物かた〴〵、今夜銀座へ買ひ物に來るのである。さうして、此の四ッ角で電車を降りたら、雜沓に紛れて嫂と女中をはぐらかした上、幸吉と一緒に何處かの横町の夜の闇に隱れようと云ふ手筈になつて居る。彼の女が同伴者をはぐらかして了ふまで、幸吉は成る可く顏を見られぬやうに尾行して行く。――こんな苦しい手段を擇んだのは、獨りで夜遊びに出る事を禁ずる女の家庭の嚴しい所から、已むを得ず案出した詭計であつた。何も此れ程の思ひをせずとも、晝間ならば自由に會へるのだが、恐らく物好きな彼の女の性質がそれを案出したのであらう。

「誰も居ない、靜かなところで、一と晩ゆつくりと話がしたい。」

から云つて、今夜の事は女の方から幸吉をそゝのかしたのである。

自分でそゝのかして置きながら、女は散々男を待たせた。勿論家の首尾もあるから、自分の勝手には行かないとしても、五時から六時の間に必ずと云つたのが、もう三十分以上も過ぎて了つて居る。丁度

六時半になつた時、男はひがんだ根性から、自分が女に試されて居るのではあるまいかと思つた。一時間も二時間も辛抱して、漸く女がやつて來るとしたら、その辛抱したといふ事實が、男に取つては既に七分の弱點である。もう其の時は、女の我が儘が男を征服して了つた時である。今直ぐに女が來るとしても、彼は約束の刻限から半時間讓歩した譯である。多分彼の女はどんなに遲くなつても、必ずやつて來るに違ひあるまい。結局今夜のうちに、間違ひなく女に會ふものとすれば、一分でも餘計待たされる程先方の勝味が殖える事になる。かうして、此の四つ辻の寒風に吹かれつゝ、默つて佇んで居るうちに、彼はだんだん相手の策略に陷つて壓倒されて行くやうな氣がする。

若し、此の芝居をほんたうに面白く、ほんたうに複雜にさせるには、今夜此のまゝ幸吉が歸つて了ふに如くはない。女は今から五分あとにやつて來ても、男がどのくらゐ待つて居たかを知らないで了ふ。

「約束の六時が鳴つても來ないから、僕は直ぐにあきらめて歸つて來た。どんな用事があつたか知れないが、人の氣も知らないであんまり勝手過ぎるてはないか。」

こんな文句を書いて送つたら、女は口惜しさと戀ひしさと恨めしさとに心を焦ら立てる。其の時、男は倒しまに女を征服する事が出來よう。

それにしても、もう十五分待つて見よう。――彼は自分で自分に云ひ譯をするが如く、腹の中で呟いた。とうたう其の十五分が過ぎて七時が鳴つた時、更にもう十五分……と彼は思つた。會はずに歸ると云ふ事が、彼に取つて何も左程の苦痛とは考へられない。是非とも今夜逢ひたいと云ふ、痛切な慾望が

ある譯でもない。それにも拘らず、彼不は思議に其處を立ち去る氣になれなかつた。此れは丁度、煙草をそれ程好まぬ人でも、卒然禁煙すると云ふ事が、なか〳〵容易でないと同樣な心理現象で、格別自分が、女に惚れて了つた證據とするには、少し早計のやうに彼は思つた。

女の乘つて居る電車は、數寄屋橋の方面から此の四つ角へ來る筈である。丸の内の暗闇から絕え間なく駛走して來る車臺の中を、幸吉は一々念入りに檢べてはやり過ごした。冬の夜の寒空とは云へ、流石歲の暮だけあつて、彼れか此れかと乘客の顏を見定めるのが紛らはしいくらゐ、電車はどれも一杯である。背の高い彼の女は、普通の女より一二寸抽んでて居るのだが、それでも此の群衆の中からいち早く見出すのには可なりの注意と努力とを要する。幾臺も幾臺も續いて來る電車の内部は、電燈が暖かさうに灯つて、多勢の乘客の顏は皆赤く輝いて居る。幸吉には其れ等の見知らぬ人々が、悉く彼の女の到着を豫報する前驅となつて、長い長い行列を作つて居るやうに想像された。立派なオバーコートに體を包んで、いかめしい八字髯を生やした紳士も、粋な銀杏返しに乘り合ひの人目を欹てゝ居る。それ者らしい女も、官吏も商人も夫人も令孃も、列べて車臺に充ち溢れた乘客の群は、彼の女の出現を莊嚴にし、神秘にする爲めの行列の一員のやうに見える。幸吉は彼等に對して一種の Pride を感ずる事を禁じ得ない。彼等は凡べて愚直に、凡べて忠實に、さうして悉く二人の芝居の下廻りとなつて働いて居るかに考へられる。平生見馴れて居る銀座通りも、今夜の幸吉の眼には、自分を主人公とする美しい舞臺の背景のやうに感ぜられる。戸々の商店の燈の光、鋪道の上を往來する下駄の音、風の響、人の影、——一つ

一つがみんな現實を離れた、夢幻の世界のやうに、不思議に神秘に色彩を含んで居る。

ふと、幸吉は又こんな事を考へた。——今、自分の眼界の届く範圍に、幾百人幾千人の女が動いて居る。或る者は夫に隨ひ、或る者は情人に誘はれ、或る者は親兄弟に伴はれ、或る者はたつた一人で、電車に乘つたり降りたり、往來を往つたり歸つたり、蠢々として動いて居る。其の女たちの中には、美しい人も醜い人も富める人も貧しい人もあるであらう。彼等のうちにはさまざまの隱れたる戀があるであらう。現在の男に滿足して居る者、現在の男を捨てようと企てゝ居る者、架空の人を胸に描きつゝぼんやりと憧れて居る者、——種々雜多な情緒や慾望が、彼等の一つ一つの頭の中に潛んで居るに違ひなからう。けれども其れは、第三者たる幸吉の眼で見破る事は出來ない。どの女も、みんな一樣に貞操らしい、溫順らしい、興味のない顏つきをして、甚だコンヱンショナルな、在り來りな態度を裝つて居る。彼等は色慾の衝動を、未だ嘗て經驗した事がないやうに澄まし込んで居る。さうして、此の平凡な女の群衆に打ち交りつゝ、今に幸吉の相手はやつて來るのである。幸吉のみに取つては極めて明確な、敵ふ可からざる野心と詭謀と邪念とを提げてやつて來るのである。恰も忍術に依つて人目を晦まして居る魑魅魍魎が、或る特定の神通力者にのみ見えるやうに、彼の主觀には假面を脱いだ女の姿がありありと映る。其の時の彼の女は、人間の動物的本性を曝露した、恐ろしい惡魔の形とも見る事が出來よう。……

此れは多勢の男の中で、唯一人幸吉ばかりが彼の女に對して持つ事の出來る特權である。其の特權は普通の夫婦關係や、お客と藝者の間柄などには、決して生じて得ない。彼と彼女のやうな境遇に置かれて、

而も今夜の如き變則な、秘密な會合に於いてのみ生ずるのであつた。

こんな考へが、暫く彼の頭に組んづ解れつして居たが、やがて彼は再び遣る瀬ない待ち遠しさを覺えて、焦れつたさうに足を蹈み鳴らした。

「何ぼ何でもあんまり長い。」

と、腹の底で愚痴をこぼした。けれどももう其の時は、此のまゝ會はずに歸らうと云ふ計劃を、夢にも實行する事は出來なくなつて居た。彼は大盤石のやうな重みで、此の四つ辻へ壓さへ付けられて居るのであつた。さうして、千里眼婦人が遠隔の物象を凝視するが如く、やがて此處に到着せんとしつゝある女の容姿を、さま〳〵に心のうちへ現像しようと努めて見た。彼の女が、娘と女中に連れられて芝の自宅を出る光景から、電車に乘つて、長い長い愛宕下の大通りを通過して、今しも日比谷公園のあたりにさしかゝつた樣子などを、いろ〳〵と心に浮べようとした、もう櫻田本郷町を過ぎた、もう内幸町を通つた、もう日比谷の乘換へ場に來た、などゝ云ふ風に、大凡その時間を計算して、恰も實際にあて篏まるものゝ如く信じて見る。幸吉には其れが一概に迷信であるとは斷定出來なかつた。現在、自分が斯うやつて憧れて居るやうに、女も途中電車に乘りながら、一圖に此方の事を考へて居るに違ひない。さうだとすれば、彼が專念に精神を集注した場合、二つの靈魂は暗々裡に感應するかも判らない。二人の肉體が解逅する以前、すでに二人の靈魂は何處かで解逅して居るかも知れない。此れが可能であるとしたら、彼の頭に現像された光景は實際にあて篏まる筈である。彼は連想の緒を手繰りつゝ、紙鳶を手繰

り寄せるやうに、確實に彼の女を此處へ引き寄せる事が出來る。

「もう數寄屋橋へ來る時分だ。」

さう思つた時、不思議にも其處まで追從して來た彼の連想は、もはや其の先を考へる事が出來なかつた。電車が數寄屋橋の對岸の停留場から此の四つ辻へ到着するのに、二三分かゝるか、四五分かゝるか、それとも十分ぐらゐかゝるか、彼には更に見當が付かなかつた。彼は成る可く時計を見ないやうにして、一心に走り來る電車の列を眺めて居た。

それから大分長い時間が過ぎた。長いと云ふのは彼の主觀に訴へた氣持ちで、實際どのくらゐ過ぎたかは明瞭でなかつた。考へように依つては五六分のやうにも思はれ、二三十分のやうにも思はれる。橋の袂の、外濠線の交叉點で稍暫く混雜して、やがて又動き出した「九段兩國行」が、四つ角から半丁程手前へ近づいた頃、彼は車臺の硝子窓を徹して始めて彼の女の姿を認めた。彼の女は電車が止まらないうちにすつくりと腰掛けを立つた。さうして、しづかに前方の出口の方へ歩いて行つた。車室の中の電燈が、まざまざと彼の女の顏を照らして居る。彼の女の眼はまだ幸吉を見付け出さない、しかし、男が直ぐ戶外の暗闇に必ず待つて居る事を知つて、明かに一種の輝きを增して居る。電車から降りると、彼の女は幸吉を眄に見て、娘と何事か打ち語らひながら、右の手を庇髮の鬢のあたりに翳した。男も同じやうに手を擧げて、帽子の鍔をつまんだ。それはお互ひに發見した時合圖をする爲め、豫め定めて置いた暗號なのである。

女の一行は大通りを向う側へ渡つて、カフェエ、ライオンの角から新橋の方へ歩いて行つた。二人の間隔が五六間離れた時分、男は始めて長い長い彳立の狀態を免れて、魂を吹き込まれた人形の如く不意に動き出した。女の影に附き添ひながら、同じ人道を一二間後ろから見え隱れに追つて行くのであつた。

兩側に並ぶ商賈と露店から、燈火の光が煌々と照つて、路は晝間のやうに明るい。幸吉は今迄に四五度彼の女の家を訪ねて、娘にも女中にも知られて居るので、萬一顏を見られたらもう其れ限りである。彼はますます外套の襟を立てゝ、丁度眉間のあたりまで鼻を埋めて、俯向き加減に足を運んだ。往來は可なり雜沓して居る。彼の左右の肩を掠めて、澤山の通行人がぞろぞろと流れて行く。見知らぬ女の白い顏や、派手な色彩が、水に浮ぶ花片のやうに折々眼先へちらちらしては通り過ぎる。彼と彼の女との間には、凡そ十人ぐらゐの人數が遮つて居る。彼の女は最初、娘と女中の間に挾まつて居たが、それでは甚だ都合の惡い事に氣が付いたと見え、極めて自然に自分の位置を取り換へて、一番右の端へ出て了つた。

さうして、幸吉が自分を見失ふ事を恐れるやうに、幾度か後ろを振り顧つた。其の動作が、初めのうちは極めて用心深く行はれたが、しまひには大膽になつて、あまりしげしげ無雜作に振り顧るので、男は却てハラハラした。娘も二三度つり込まれて後ろを見た。しかし好い鹽梅に何も氣が付かないらしい。

人ごみの中へ這入つても寒さは相變らず烈しかつた。木枯が雜沓の巷を分けて、人々の着物の裾を掬ふやうに吹き捲くつた。ところどころの四つ角を通り越す時、横さまに吹き付ける風の勢が、海のまん中へ出たやうな凄じさを感じさせる。折々、露店のかんてらの炎が黑い心を露はして、はたはたと搖め

いて居る。幸吉はあまり俯向いて歩くので、どうかすると彼等の一二尺傍まで近寄つて行く。三人は嫂を中に挾んで、女としては少し早い速度で、言葉少くなに歩いて居る。姉妹は千代田草履を穿いて、女中は吾妻下駄を穿いて居るのだが、後ろから見ると、彼の女が一番背が高い。お召のコートを着て、青い駱駝の襟卷に顏の下半部を深く包んで居るせゐか、常から意味有りげな眼の色が、何となくミステリアスな光を帶びて居る。嫂と云ふのは二十五六の若い夫人で、彼の女より一つか二つ年上ださうである。芝の家へ嫁いたのは三四年前であるが、極めて病身な、Consumptive な體質で、いまだに子供が一人も出來ない。遞信省の技師を務めて居る工學士の夫が、今年の春官命を帶びて獨逸へ立つてからは、始終義妹の遊び友達になつて呑氣に暮らして居る。目下の芝の家庭は、舅と姑と彼の女と義妹と四人暮らしで、我が儘な妹が一人娘の寵を恃んで威張つて居る中に交りつゝ、何人とも衝突する事なく、圓滿に快活に、而も極めて自由に振舞つて居る。勿論相當の教育もあるし、妹と違つて裁縫や料理の方にも明るい所から、內實は兎に角、表面では妹よりも兩親に評判がいゝ。殊に他人の着物の柄を見立てゝやる事が上手で、妹が吳服屋へ註文する時など、いつも彼の女の選擇を煩はすと聞いて居る。從つて奉公人の人望も、妹とは比較にならない。一見すると妹の方が悧巧らしいけれど、實際は此の夫人の方が餘程上手な、ほんたうの悧巧者だらうと幸吉は思つて居る。さうして、訪問する度毎に夫人から他意なく話し掛けられるにも拘らず、內々城壁を設けて警戒して居る。容貌も十人並以上で、人に依つたら妹よりいゝと云ふ者もあるか知れない。美しい富士額と眼元口元の愛嬌とが、面長な淋しい顏を彩つて、姿もス

ツキリして居て、小綺麗に痩せた女である。此の娘を持つた彼の女も、彼の女を戀人に持つた幸吉も、或る意味に於いて此の夫人と智慧競べをしなければならない。

三人は方々のショウ、キンドウに立ち止まつたり、唐物屋で買物をしたりした。女中は大分嵩張つた品物を二つ三つ持たせられた。天賞堂の前へ來ると、彼等は又ぞろぞろと中へ這入つて行つたが、其の中娘が女中を顧みて、

「お前大變だらうから、包みを一つ持つて上げようか。」

から云ふ聲が幸吉の耳に留まつた。

「姉さんあたしが持つわ。」

丁度娘が、女中の手から品物を受け取つて了つた頃合ひに、彼の女は云つた。

「まあよくつてよ。其の代り後でうんと重い物を持たせて上げますからね。」

「いゝわ、何でも持つわ。今夜は姉さんに奢つて貰ふ約束なんだから。」

から云つて彼の女は笑つた。

其の時分から、彼の女はそろ〳〵と同伴者をはぐらかす機會を窺つて、始終娘の視線の赴く所へ注意して居た。天賞堂を出て再び新橋の方へ歩いて行く途中、彼の女は成る可く人ごみの中へ割つて這入り、次第次第に押し流されるやうに努めた。けれども其の割りに、彼の女と娘との距離は少しも隔らない。暫くの間、彼の女は娘と二三尺離れたりくつ着いたりする事を繰り返して居た。幸吉の眼には其れが非

常に歯痒く感ぜられた、嫂がショウ、ヰンドウを覗き込んで居る時や、人雪崩に押し返されて居る時や、いくらでもはぐらかす機會はあるやうに思はれた。

しかし、當事者たる彼の女の身になれば、なか／＼そんな容易な仕事ではないかも知れない。彼の女は今、其の戀人を見物人にして、小ひさな犯罪を決行して見せようとするのである。かうなると女は案外細心に、巧緻に、ジリジリと氣長に押し進んで、必ず効果を擧げなければ承知しない。男子の到底思ひ及ばぬやうな、陰險、卑怯、執着、不潔、――あらゆる手段を採用して憚らない。一般に、教育のある女は教育のある男よりも良心の缺如を示して居ると、幸吉は不斷から信じて居る。若し、世の中に微妙な丹念な技巧を以て、絶對に何等の痕跡をも殘す事なく、或る重大な犯罪――たとへば殺人などを行ふ事が出來るとすれば、其れは男よりも女の方が適任であらう。ドリアン、グレィの狡計に依つて五體を溶解された畫家の如く、さう云ふ女の手にかゝつて秘密に此の世を去る事が出來たら、ベス井アスの噴火口に飛び込んだ哲學者より幸福であらう。幸吉はそんな事を考へて、探偵小説を讀むやうな興味を覺えながら、彼の女の暴動に注目した。彼の女は微薫を帯びた人のやうによろめき加減の足取りで、行くのだか戻るのだか、急ぐのだかゆつくりするのだか、極めて不得要領な歩き方をしつゝ、今度はなるたけ嫂の後になるやうに努めて居る。時々うしろから駈け出して、追ひ付いたかと思ふと又一二間後れる。むやみに露店へ立ち止まつたり、人ごみにうろついたりする。丁度新橋の角まで來た頃、彼等の距離は最も隔たつて、五六間になつて居た。嫂と女中は委細構はず向う側へ渡つて行つたが、彼の女は相變ら

ず此方側の露店の前にうろうろして居た。其の時男は殆んど言葉を交さんばかりに密かに彼の女と肩を並べた。

彼の女は顔を上げて向う側の街路を見た。さうして、娘たちが三銀の店先で餘念もなく買ひ物をして居る様子を、ゆつくりと凝視してから、同じやうに電車路を越えて彼等に追ひ付くやうな風をしながら、博品館の角を土橋の方へ折れて了つた。

暗い、淋しい河岸通りを一二町辿つた時分、飼ひ犬の如く跡を追つた來た男は、始めて彼の女に聲をかけて、

「三千子さん。」

と呼んだ。

「もう彼れ此れ八時よ。……」

彼の女は男の肩に擦り寄つて、囁くやうに云つた。

「姉さんがぐずぐずして居るもんだから、出掛けるのが大變遲くなつちやたの。あなた餘つ程待つたでせう？」

「僕も差し支へがあつて、あなたより少し前にやつて來たんです。」

幸吉はこんな負け惜しみを云つた。

「さう、それぢや遲く來て却て宜かつたわね。」

「此れから何處へ行くのです。」

「何處へてもあなたの御自由に。」

二人は土橋を芝の方へ渡つた。女は豫定の時間が遲れたから、それ程ゆつくりする譯に行かない。十時ごろまでには歸宅したいと云つた。それで、二人が一分でも長く會はうとするには、彼の女の家から近い所に Rendezvous を求める必要があつた。男は咄嗟の間に、芝浦の方面へ行かうと思つた。

「電車は人目が多いから俥にしませう。」

と、幸吉が云つた。

「俥だつて、……」と、女は首をかしげて、

「明るい所を通ると、誰かに見られやしませんか知ら。」

「そんなら歩く積りですか。」

「まあ歩いて居れば大丈夫だわ。成るたけ淋しい所を通るやうにして。――都合が惡ければ、孰方でも好ござんすけれど。」

二人の囁きは、闇の夜路に胡散らしく、ひそひそと聞えた。

「困りますね。此れから一緒に歩く度每に、電車にも俥にも乘られなくツちや。」

「さう云ふ譯ぢやないのよ。今日は特別の事情があるから云ふのよ。」

「特別の事情はいつ迄立つても特別の事情でせう。別段今夜に限つた譯ぢやありますまい。それとも近

いうちに、僕と結婚して下さるんですか。」

幸吉は彼の女に物を云ふのに、いつも成る可く意地の悪い、皮肉な言葉を撰ぶやうにした。彼は自分を實際よりも冷酷な人間の如く裝うて見た。其れが戀と女とをよく味ふ最良の手段だと彼は思つて居る。

「そんなにいろ〳〵の事を一度に仰つしやらなくつてもいゝわ。特別の事情ッて、其の意味て云つたんぢやありませんの。今夜はいつもと違つて、姉さんをはぐらかしたんだから、用心しないと困るのよ。初めからあなたと御一緒か、それともあたし一人で出掛けて來たのなら、若しも見られた所で、何とか言譯が出來ますけれど、今夜はさうは行きませんわ。今夜斯うやつて居る所を見られたら、どうしたッて姉さんをはぐらかしたんだと思はれるわ。人をはぐらかしてまで、あなたに遇ふ必要があるとすれば何も彼も知れて了ふぢやありませんか。——おまけに、行く先が内と同じ方角なんですもの。」

彼の女はわざ〳〵自分の立てた計劃に自分を苦しめて、それを喜んで居るやうに見えた。

「しかし歩いて居たら、時間が無くなつちまふぢやありませんか。それとも今夜は唯話をしながら散歩でもしますか。」

「えゝ、それでもいゝわ。」

かう云つて、彼の女は俯向いて居る。

「ではさうしませう。」——此の言葉は、その時幸吉の頭の中に浮かんだだけて、とうとう口へは出ずに

了つた。女の男を戀ひする程度が、男より優つて居るとしても、斯う云ふ事で意地を張れば女はなかなか屈しないに極まつて居る。それが女の弱味であると同時に强味である。男は自分の最も不得意とする武器を以て、女と競爭するやうなものである。それに彼の女の心配して居る今夜の事情は、幸吉も充分に認めなければならなかつた。

「それぢや斯うしたらどうてす。あなただけ電車へお乘んなさい。僕は俥て行きますから。――さうすれば見付かつたところて差支へない。」

彼は眞面目に方法を考へた後、こんな事を云つた。

「いゝわ、そんな面倒な事をする位なら一緒に俥へても何ても乘るわ。――時間がないのにちよいとても別々になるのは何だかあたし嫌だから。……」

かう云つた時、あまりの我が儘に男が少し怫然として、不機嫌らしい溜息を洩らしたので、彼の女は惶てゝ附け加へた。

「……ねえ、あなたは嫌だと思はなくつて。そりや、あなたは勿論あたしの半分も思つて居て下さらないんだから。……」

男はそんな諂諛の言葉を齒牙にもかけぬと云ふやうに、わざと返答をしなかつた。さうして全く別の事を云つた。

「いゝ事がある。――新橋の停車場へ行つて、あすこから自動車て出掛けるとしたら。無蓋車(オープンカア)てなけれ

ば誰にも見られないし、時間も經濟だから。ね、そんならいゝでせう。」

女は默つて笑ひながらうなづいた。

それから十分ばかり後である。二人は密閉された硝子扉の箱の中の、狹隘な、秘密な世界を樂しみながら、發動機の響きに搖られて居た。芝口の大通りと並行する停車場の横の、暗い溝のある路を車は眞驀に走つて居る。二人の眼に入るものは、行く手の闇を押し除けるやうな、警戒燈の熾烈な光線ばかりである。その光線に照らし出された區域の地面は、急流の水の如く後方へ奔馳して、布のやうに引き裂かれはしないかと危ぶまれる。先まで眼の前にちらちらして居た銀座通りの雜沓――服部の大時計も、天賞堂も、三銀も、娘も、女中も、飛礫の如く背後へ投げ付けられて、刻一刻に遠く遠く隔つて行く。

「何處か、不思議なところへ連れて行かれるやうですね。」

かう云つて、彼は女の方を見た。彼の女は幸吉と相對して向ひ側に腰かけて居た。

「あなたが惡者で、あたしを拐して居るやうだわ。」

「惡者かも知れませんよ。……」

女はにやにやと笑つたやうであつた。女の顏を見馴れて居る男には、闇を透して其の表情を虚空に描く事が出來た。

車はもう新錢座のあたりを疾驅して居るらしい。うしろを振り顧ると、賑かな大通りの火氣が遙かな空に反映して、ぼんやりと紅く濁染んで居る。二人は冥路に落ちて行く亡靈か、過去の世界を彼世から眺めるやうに其の火を望んだ。

「あなた、……今夜あたしはあなたから、此れまでの女の事を一切打ち明けて頂きたいと思ふの。さうしなければ安心出來ないから。」

彼の女は不意にこんな事を云つた。

「此の間すつかり話したぢやありませんか。」

「あれですつかりなの。外に何もないの。」

「すつかりと云ふ譯ぢやないけれど。……」

「だつて此の間は、外に何もないと云つたぢやありませんか。私に對してなぜそんなに嘘をおつきになるの。これから何でも一切隱さないで下さいましな。」

彼の女の言葉は稍命令的に響いた。

「あなたが嘘をつく間は、僕も嘘をつかうかと思つてるんです。何も隱す程の價値はないけれど、たゞあなたと對抗するために。……」

「いつあたしが嘘をついて?」

「いつと云ふ證據はありませんよ。自分の事は分らないけれど、現在僕の居る前で、あなたはいろ〱

の男に嘘をついて見せたぢやありませんか。其の時分のあなたの顏つきを僕はよく覺えて居るんです。僕と話をする場合でも、其の顏つきが見えた時には、キッと嘘だなと感付くんです。」

「そんな事があるもんですか。外の人は兎に角、あなたに對して一度も嘘をついた覺えはなくつてよ。」

彼の女は此の問題が、自分の不利を招きさうな形勢を示したので、いゝ加減に切り上げて了つた。さうして、又すぐ次の問題に移つた。

「それからあなたね、もう私以外の人とは決して關係しないやうに誓を立てゝ下さいましな。たとへ一と月も二た月も、お目にかゝれない場合があつても、……」

「えゝ」

「キッとですか。」

「えゝ。」

男はわざと曖昧な返辭をした。

「あなたはいつか、男と云ふものは長い間愼しんで居る事は、生理的に出來ないと仰つしやつたわね。」

「そりや云ひました。」

「それだのに、あたしの云ふ事が實行出來て？」

「つまり、外の女と戀をしなければいゝんでせう。」

「いゝえ、そんな事は當り前だわ。私の外に、一切女を近づけないやうにして頂きたいのっ」

其れは彼の女として當然の要求であつた。又幸吉の立ち場から云つても、彼は當分、少くとも彼の女を戀して居る間、外の女に肌を許す心はなかつた。彼はたゞ、女があんまり自尊心の强い態度で、勝手に男を束縛しようと試みるのが氣に入らなかつた。

「成る程、あなたの云ふ事はよく解りました。ところで若しも、僕が誓ひを立てなかつたらあなたは一體どうなさると云ふんです。」

男は冷やゝかな眼を光らせて、少し傲然たる調子で云つた。

「どうするッて、……どうする事も出來はしませんわ。あたしの心は、もうすつかりあなたに見られて了ッたんですもの。」

女は暫く男の顏を視詰めて居たが、やがてさも空々しい、殊勝げな聲で言葉を續いだ。

「……あなた、怒つて居らつしやるのなら何卒勘忍して下さいな。あたしは此れから、あなたに對して決して勝手な事なんか云ひませんから。ね、だからいつまでもあたしを忘れないで居て下さいな。あたしはあなたにどんな無理を云はれても、とても反抗されなくなつて了ひましたわ。」

氣のせゐか、男には女の唇に皮肉な微笑が泛かんで居るやうに感ぜられた。背中をたゝいてむづかる子供を欺すやうな慰撫と輕蔑とを、頭から注ぎかけられる心地がした。自分が威張れば威張る程、いよいよ女の得意の舌先に飜弄される事を恐れて、彼はそれきり默つてつ了た。

車は今杉橋を渡つて、二三丁先を左へ曲つて踏切りを越えた。二人は明るい家の門前に停まつた。

其の晩の幸吉の胸の中には、女に對する一種の危惧と不安とが始終附き纏はつて居た。丁度運の惡い賭博者が勝負にかゝらぬ前から不思議な氣後れがして敗北の暗示を感知するやうに、彼は何等の根據もない、漠然たる疑惑に兇はれて居るのを覺えた。「現在の自分の地位は、たしかに女に打ち勝つて居る。」――さう思ひながらも、いつか自分は彼の女に魅せられ、彼の女に欺かれ、彼の女に捨てられる時が來るやうに邪推された。

「あたしを忘れないで居て下さいましな。」

と、彼の女は云つた。けれども、「いつまでもあなたを忘れません。」とは云はなかつた。此の戀の繼續する期間に就いては、成る可く明言する事を避けようとする素振がありありと見えた。

「一體二人の狀態はいつまで續く積りなんです。案外短いものぢやありませんかね。」

たま〳〵男は相手の本意を搜るためにこんな事を云つて見たが、彼の女は搜られて居るのだと知りながら、格別其の言葉を否定しようとはしなかつた。たゞ、通り一遍の挨拶として、

「あなたさへ變らなければ、そんな事はありませんわ。」

と云つた。さうして、例の、「嘘をつく時の顏つき」をした。

「現在あたしはあなたを戀して居る。あなたもあたしを戀して居る。此れだけが疑ひのない事實である。將來の結果を考へたところで、現在の事實は變更する譯に行かない。兎にも角にも、われ〳〵は目下の戀を樂しんで居れば差支へないてはありませんか。」――彼の女の意中を正直に發表したら、こんな事て

あらうと、幸吉は思つた。

「此の戀が續くか續かないか。それは聞くだけ野暮な話だ。お互ひに自分の心を信用する事は出來ないのだから、未來の事は考へない方がいゝでせう。」

女の眼は斯う云ふ意味を語つて居た。彼の女は寧ろ、其の意味を男が推量してくれるやうに望むで居るらしかつた。

幸吉は此れまでの女に對して、いかにも移り氣な、浮薄な態度を示して居た。彼は不熱心な、無精な飽きつぽい人間であると見られて居た。けれども彼は、決して自分の此の態度に滿足する者ではない。相應な相手さへあれば、自分はいつまでも極端まで進む事の出來る性分だと信じて居る。其の性分がどうやら今度の女を得て、充分に發展しさうになつて居る。彼は是非とも、女の魂に桎梏を嵌めて、自分の手元から一歩も動き出さぬやうに努めなければならない。然る後、殘る所なく歡樂の美酒に飽滿して何等の未練もなくなつたならば、始めて魚(さかな)の骨を捨つるが如く女を捨てよう。……

若し、自分が女を捨てるより先に、女が自分を捨てゝ了つたならばどうであらうか。その場合には、幸吉の性質としてますます執拗に女を追ひかけ、いかなる侮辱にも甘んじて戀人の袂を放すまいと焦るであらう。外の女の愛情よりも、戀人の侮辱の方に、まだしも甘味を感ずるであらう。哀れな幸吉は、其の時完全に女の奴隷となつてしまふ。さうして、女がどうしても男の手を振り切つて、之に近づく事を厭ふやうになつたなら、彼は死ぬより外に途がないのである。

女を慕うて死ぬと云ふ事は、いろいろの死に方のうちで最も樂しい死に方であるから、彼は寧ろ、彼の女に捨てられた方が餘計幸福であるかも知れない。けれども、目下の幸吉はそれ程死を急ぐ氣にはなれなかつた。樂しい「死」よりも、先づ樂しい「生」を擇びたかつた。そこで彼は全力を盡して彼の女を征服する必要に迫られた。要するに、早く捨てた方が勝ちを制するのである。彼は當分、自分の方から女を捨てる勇氣がないとしたら、せめて女に捨てられないだけの用心をしなければならない。

彼の女の美貌に戀する男は幾人もあらう、反對に幸吉を戀する女は彼の女の外に一人もない。——其れが幸吉の非常な弱點であつた。さう思ふと、彼は堪へ難い嫉妬の念に驅られた。而も、其の嫉妬を表へ現せば、却つて女に乘ぜられる事を恐れて、彼は飽く迄も平靜を裝つた。自負心の强い、度量の廣い男の如く見せかけて居た。

女は又、些細な事にも嫉妬を起して、怒つたり口惜しがつたりした。男が平靜にすればする程、彼の女はいよいよ嫉妬深かつた。けれども其れは眞の嫉妬でなくして、男に嫉妬を起させる方便のやうに感ぜられた。

「あたしは此れほど嫉妬(やきもち)を燒くのに、どうしてあなたは燒かないのです。」

彼の女の行動の裏には、斯う云ふ謎が含まれて居た。

品川沖を通る汽船の笛が、ぼうッと淋しい音を立てゝ居る。木枯はますます強くなつたと見えて、芝浦の埋立地の方から、板戸を鳴らして吹きつけて來る。をりをり、靜かな座敷を地震のやうに搖がせて、門前の踏切を汽車が走つて行く。

あまり戸外が寒さうなので、二人は歸り支度の身拵へをしたまゝ、暫く默つて据わつて居た。男はすてに外套を纏つて帽子を戴きながら、火鉢の傍に畏まつて身を顫はせて居る。

「あなたそんなに寒いのですか。」

と、女が鈍い聲で云つた。さうして首をかしげて微笑しながら、まじまじ男の瞳を見入つた。男は眩めッくらに負けたやうに、俯向いて、袂の中の巻煙草を捜つて、其の先を眞赤な炭火の頭へ着けたまゝ、容易に吸はうとはしなかつた。

「あたしは此の頃太つたせゐか、あんまり寒さを感じなくなつたわ。」

から云つて、彼の女は火鉢の縁に兩手を翳しつゝ、自分の指の、長い美しい、蠟のやうな光澤を喜ぶ如く、幾度も拳を固めたり伸ばしたりした。其の手はしなやかであると同時に、いかにも健康らしい血色を持つて居た。

健康な彼の女の體力、——其れに對する恐怖と呪咀と憎惡とが、今、幸吉の胸の中に蟠まつて居るのてある。「己はもう、すべての假面を剝がされて了つた。己は己の醜い所を、すつかり彼の女に見破られてしまつた。」——と、彼は心の底て打ち呟いた。兎に角、今夜は一刻も早く別れた方がいゝ。

「さあ、歸りませう。」

と云つて彼は立ち上つた。さうして、重々しい足取りて、女と一緒に玄關へ步いて行つた。

「あなた明日内へ遊びに來て下さらない？」

金杉橋の袂て別れる時、女はこんな事を云つた。

「明日？」

「えゝ。もう一日も會はずには居られないわ。今夜だつて、いつまでも斯うして步いて居たい位だわ。」

「大概行けるてせう。」

「駄目よ。きッと來て下さらなくつちや。……」

「けれども少し都合があるから、……」

「都合なんぞどうにてもなつてよ。何もそんなに考へる事はないぢやありませんか。ね、きッと來て下さいな。……それともあなた、あたしをうるさいと思つて居らッしやるの。」

「そんな事はありませんよ。しかし、何か用事がないとも限らないから。……」

「そんならいゝわよ。左様なら。」

から云つて、彼の女はどんどん步き出した。多分男が何とか聲を掛けるてあらうと豫期して居たらしかつたが、幸吉は無言のまゝ棒のやうに佇んて居た。女の姿は間もなく闇に消えて了つた。痛快なやうな、便り無いやうな、不思議な感情を頭に疊みながら、男はやがて電車に乘つた。

二

幸吉は妙な意地張りから、芝浦で別れた明くる日女の家を尋ねなかつた。女の方からも、何とも云つて寄越さなかつた。今までの習慣に依れば、かう云ふ場合に、大概彼の女の方から折れて出るのが普通である。

しまひにはきッと女の方から、脆くも膝を屈して、例のお世辭を浴びせ掛ける。それが今度は、少しく在來と異なつた形勢を示して居た。

「明日は手紙を寄越すだらう。……そのうちには何とか云つて來るだらう。」

さう思ひながら、幸吉は一日二日を空しく過した。三日目あたりから、彼は終日二階に閉ぢ籠つて、手紙の到着を待ち詫びるやうになつた。今か今かと思ひ憧れながら、門前に郵便配達夫の影が見えると胸を躍らせた。外出す可き用達を控へて居ても、何となく部屋を離れる事が出來なかつた。四日、五日と日を經るにつれて、彼は漸く事態の重大な事を感じ始め、居ても立つても溜らないやうな不安が、頭の中に充滿した。

兎に角、如何に事件が惡く運んでも、此のまゝ別れたきりになる事はない。簡單な「意地張り」と云ふ心理現象が、そんな恐ろしい、途方もない結果を作り出す筈があらうか。五日立つても十日立つても、結局自分が彼の女か、どちらかゞ腰を折つて手紙を出すに違ひない。兎に角此の次ぎにモウ一度會へる

事だけは確かだ。モウ一度會へるとすれば、たとへ今日少しく相手の感情を害したところで。其の時元の通りに恢復する事は容易な話だ。

幸吉は其處まで考へた上、今暫く辛抱して見よう、剛情を張つて見ようと決心した。さうして、多分女も自分と同樣な目算を立てゝ居るのだらうと推量した。

けれども此の決心は、全然確固たる安心を以て實行する譯には行かなかつた。彼は子供の頃、弟と二人で往來を歩きながら、丁度此れに類する意地張りをやつた事がある。兄は自分の持つて居る風呂敷包みを弟に持てと云ふ。弟は持たぬと云ふ。散々押し問答を繰り返した揚句、「お前が持たなければ此處へ置いて行く。」と云つて、兄は包みを路上へ捨てた。弟は少し當惑したが忽ち憤然として、「あたいは知らない、兄さんの勝手にするがいゝ。」から云ひ放つてスタスタと歩き出した。今度は兄が當惑した。包みの中には母親に命ぜられた買ひ物の品が這入つて居る。此のまゝ家へ歸れば、兄は勿論弟よりも餘計叱られる。しかし、一旦路上へ捨てた以上、どうしても故なく其れを拾ひ取る譯に行かない。弟は幼少の事だし、母親を恐れる程度は自分より甚しいから、今に降參するだらう。そのうちにどうにかなるだらう。――さう思ひながら、兄もスタスタと歩いて行つた。時々二人は顏を見交はして笑ひ合つた。五六町來た時分、二人の笑ひは漸く不安の色を帶びて、折々恐ろしさうに品物の方を振り顧つた。お互ひに後悔して、アハヤもとの場所へ戻つて行かうとしながら、やつぱり剛情を張つて居た。それでも兄は、あまり事件が馬鹿々々しいので、まだ何とかなるだらうと樂觀して居た。とうたう二人は横町を曲らな

ければならなくなつた。

「あゝ、あッ、大變だ。内へ歸るとおッ母さんに叱られるから。」

兄はおどかすやうに云つた。

「あたいばかりぢやないよ。兄さんだつて叱られるよ。」

弟も負けずに云ひ返した。さうして二人は横町を曲つた。

もうお互ひに一言も口をきかなかつた。

「飛んでもない事になつた。」と今更案じ煩ひながら、默つて泣き出しさうな顔をして家へ歸つた。案の定母は大いに二人を叱り、再び品物を取りにやつたが、誰かに拾はれたと見えて遂に見附からなかつた。

幸吉と彼の女は、惡くすると又こんなハメにならぬとも限らない。少くとも彼の女は、幸吉が終日書齋へ立て籠つて憂慮して居る程、此の事件に惱まされては居ないらしい。相變らず彼の女を取り卷く男だちを相手に、笑ひさゞめいて居るであらう。女が俄かに斯かる强硬な態度を示して來たのは、どうしても芝浦で會合した晩の、幸吉の醜い擧動が原因をなして居るやうであつた。それまで言葉を以て打ち勝つ途を知らなかつた彼の女は、自由に男を縛め、撻ち、繰つて、容易に其の假面を引き剝がす事が出來た。彼の女は幸吉がいくら眼を瞋らしても、冷淡を裝つても、譯なく彼を昏惑させ、壓迫し得る事を悟つた。「ほんたうの意味に於いて、自分の方が强者である。自分はいつ何時でも、一擧手の勞で男を膝下に跪かせる事が出來る。」――彼の女はさう信じて了つたに違ひない。

戀と云ふものは、一方の愛情が增せば必ず反比例に一方が減退する。丁度一定の重量のある物體を、二人して持ち上げる場合と同じく、前者が餘計腕力を出せば、後者は僅少の腕力で事を濟させる。後者に取つては、それ以上の力を出す事が不要でもあり、無駄でもある。若しも馬鹿正直な前者が、いよく精を出して、有りたけの腕力を絞れば、後者はたゞ其の物體へ手を觸れて居るのみで安心して居る。彼の女は幸吉が眞實自分をどのくらゐ戀ひして居るかを觀破した。さうして、相應の手加減をし始めたに違ひない。

幸吉の心は或る樂しみを「待ち詫びる」と云ふ氣持ちから、次第々々に便りのない、取り付く島もないうら淋しさに變つて行つた。此のまゝにしてあまり長い時日を經過したら、遂には手紙を出すのもバツが惡くなるであらう。若しも彼の女が幸吉を捨てる意志があつたなら、今程適當な、自然な機會はあるまいと考へられる。

まあ何にせよ、もう一日待つて見よう。今日中に手紙が來なかつたらば何とかしよう。——そんな工合に、彼は又一日二日を送つた。丁度別れてから一週間目の大晦日の朝であつた。

「芝の植田さんから電話でございます。」

かう云つて、女中に呼び覺されて、彼はムツクリ蒲團を撥ね起きた。手紙ならば歡喜のあまり押し戴いて封を切る可き所であるのに、不思議にも彼はホツト安心するや否や、

「フン、」とうたう我慢がしきれないと見える。」

こんな嘲弄の言葉が頭に泛かんだ。

「あなた、なぜあれッきり入らッしやらないの。」

電話口へ出ると、彼の女は挨拶もせずにかう詰つた。

「……何か怒つて居らッしやるの。」

「いや、少し忙しかつたものだから、……」

かう云つて、彼は又直ぐ附け加へた。

「だから此の間、用事があるかも知れないッて、斷つて置いたぢやありませんか。」

「そんなら手紙ぐらゐ下すつてもよからうと思ひますわ。」

「どうも濟みません。ほんとに忙しかつたんです。」

「いつになつたら、お目にかゝれますの。」

幸吉はハタと返答に行きつまつた。さうしてモヂモヂしながら答へた。

「何ですか、……あなたは何日頃なら御都合がいゝんです。」

「あたしは何日でも宜うございますわ。」

彼は再び言葉に窮したが、咄嗟にうまい口實を見付け出した。

「あなたは今何處に居るんです。お宅から電話をかけて居らつしやるんですか。」

「いゝえ、新橋の自働電話なの。今日お目に懸りたいと思つて出掛けて參りましたの。それともいけな

くつて？」

「別段今日は差支へありません。是非お待ち申します。」

電話を切ると彼は急いで二階の部屋へ駈け上つた。始めて、手を額にあてゝ雀躍したいやうな喜ばしさが、胸に溢れた。

其の頃の彼の住所は、神田の駿河臺の旅館であつた。彼は東京に實家がありながら、大學へ通ふ便宜の爲めに二三年前から此處へ引き越したのである。來年の夏、卒業して文學士になるまでは、當分居を改めない積りで居る。讀書をするのに都合がいゝやうに、北向きの少し薄暗い部屋を選み、長らく其處に起臥して居たが、今度の女が出來てから暫く勉強の出來ない事を悟つて、一つにはまた四五日來の寒氣に辟易して、つひ此の間南向きの明るい坐敷へ引き移つた。便所と梯子段が遠い代りに、めつたに前の廊下を往來する人もない。

彼は兩親の仕送り以外に、外國文學の飜譯などを試みて、多少の收入のある所から、普通の學生より稍贅澤な宿屋暮らしが出來るのであつた。下宿屋と違つて、さゝやかな次ぎの間の附いた、幾分か居心地のよい坐敷である。讀まない迄も本箱だけは一と通り飾つて、買ひたてのセゼッションの机を据えてきらきらと日あたりの好い窓の障子を眺めつゝ、毎日々々うとうとと過して居る。

女は以前にも度び度び訪問したが、今度の部屋になつてからは今日が始めてである。其の日はいつになく風が穩かで、窓の外には空が青々と冴え渡つて、暖かい日光が家々の瓦屋根に、シッとりと泌み入

るやうに照つて居た。

「ほんたうに結構な大晦日でございますこと。」

と、宿の上さんは遇ふ人毎に挨拶して居る。

幸吉は南と東の窓をカラリと開け放つて、拭ふが如き碧空の光を充分に坐敷の中へ吸ひ取らせた。今朝の彼の心持ちは、丁度此の天氣と同じく爽やかに晴れて、俄に明るくなつて居た。

時計を見ると八時半である。九時頃までには女がやつて來るであらう。……彼は急須の茶を搾つて、湯呑茶碗の面から立ち昇る靜かな湯氣を視詰めながら、いろ／＼の空想に耽つた。自分は今迄女に對して、あまり僻んだ觀察をしたやうである。やつぱり彼の女は自分を熱心に戀ひして居る。此の一週間の「意地張り」の間、彼の女は自分と同じやうに惱まされたに相違ない。其の證據には、今日の電話の言葉遣ひが、いかにも荒々しく腹立たしげであつた。いつものやうにお世辭を云つたり、詫つたりしなかつた。それだけ彼の女は眞面目に困惑し、憂慮したに違ひない。「一旦此方から折れて出ても、會へさへすれば再び男に打ち勝つて見せる。」――或はそんな自信を持つて居るのであらうが。何にしても彼の女は幸吉と無關係で生活する事は出來ないのである。

幸吉は机の上に立てかけてある鏡を眺めて、意地の惡さうな笑ひを洩らした。それからついでに抽出しから櫛を取り出して、綺麗に分つて居る頭髮を、再び念入りに丁寧に分け直した。彼の顏はどちらかと云へば圓い方で、子供のやうにクリクリして居る。脂肪の質の爲めに、頬から額の邊がいつもぎらぎ

らと脂を浮べて、どす黒く光つて居たが、冬になるとサッパリして見違へるやうな色白になる。顔の輪郭と同様に、體つきもふつくり肥滿して居る。それで外見はいかにも丈夫さうに思はれるけれど、其の實筋肉が柔かで骨が細くて、案外虛弱な質であつた。

「君は相撲でも取らしたら、嘸强いでせうなあ。」

こんな事を人に云はれて、幸吉は時々おかしくなる事があつた。藝者などを相手に腕相撲を試みて、十人のうち五人には負けるくらゐ彼の腕力は乏しかつた。つまり彼の太り方は、十七八の田舍娘や飯炊き女の體質にそつくりで、殆んど女性的であつた。殊に臀部の周圍や兩股の脹らみ加減、踝の太い塩梅など、腰から下は全く女の姿と異らなかつた。彼はいつぞや「男女と天才」を讀んで、ワイニンゲルの所說を聽いてから、いよ〳〵自分の體質にWの特長の多い事を感じた。湯上りの際、赤裸々のまゝ鏡の前に佇んで、ジッと兩脚の恰好を視詰めて居ると、彼は自分の性が次第々々に女性の方へ轉化して行くやうに覺えた。ワイニンゲルの說くが如く、世の中に完全なる男子や完全なる女子が存在して居ないとすれば、從つて世間の男女の間に絕對的差別がないとすれば、此の理屈を或る一個人の心理作用にも應用する事が出來るであらう。幸吉はどうかすると、自分が全然女のやうな感情に支配される時がある事を發見した。其時の彼は實際女になつて了つて居るのだ。

例へば今、彼は鏡に向つて化粧して居る。お白粉こそ使はないが、髮を分け、髯を剃り、油を着け、化粧水を塗る。そうして、其れは戀人に媚びんが爲めなのである。彼は少しても多く自分の顏を美しく

しい愛らしくしやうと努めて居る。綺麗になつた自分の皮膚や、唇や、髮の毛に對して、包み切れない一種の喜びをさへ感じて居る。女が男を待つ時と少しも變らないではないか。

やがて幸吉は鏡の前を立ち上ると、押し入れの行李の底から、一と揃ひの新調の衣類を引き出して、一つ一つ絹糸の仕つけを解いた。細かい絣の對の大島に、更紗の胴着、羽二重の長襦袢、緞子の角帶まで、みんな自分が柄を見立てゝ春着の料に拵へたものであつた。彼の女性的氣質は此處にも働いて、幸吉は不斷から書籍を買ふより衣類を作る方に多くの金を費して居た。彼が反物の色合や縞柄に對する愛着の情は、贅澤とかお洒落れとか云ふ單純な言葉で到底說明する事は出來なかつた。彼は自分の着て居る衣類を、殆んど天稟の皮膚の一部分であるかのやうに考へて居る。家に居る時も、外出する時も、彼は自分の所有する最も美しい着物を纏つた。一旦心に適つた衣類は、飽きて了ふ迄片時も肌から放すのが嫌であつた。其の結果、餘裕さへあれば傍から〳〵衣類を新調して、一年の内に着殺して了ふのが常であつた。

「お前ぐらゐ、着物をぞんざいにする人間はない。」

彼の母親はよくかう云つて幸吉を批難したが、實は全く反對の動機から、さう云ふ風になつたのである。

「お客樣が御出てゞございます。」

丁度彼が衣類を着換へて、スッカリ坐敷を片附けて、机の鏡の前に据わり直つた時、女中は彼の女を

案内して來た。

「今日は、」

と、先づ花やかな調子で云つて、彼の女はむづ痒いやうな笑ひ方をした。さうして、坐敷の中央に立ち停つたまゝ、けろりとしながら明け放たれた兩方の窓の青空を眺めた。男は相變らず机に凭れて、默つて相手の姿を見上げて居た。

「あゝ、とうとう來てしまつた！」

女中が去ると、徐ろに襟巻とコートを脱いで、彼の女は崩れる如く男の傍の坐蒲團に据わつた。桐の火鉢の上に翳された左手の中指には、白金で梅の花を刻んだ黄金の指環が光つて見えた。

「へえ、此の指環は始めてですね。」

男は空々しい感嘆の聲を放つて、體を女の手の方へ屈ませた。

「あたしは少し、あなたに伺つて見たい事があつて參りましたの。」

から云つた女の顔にはいつの間にか先の薄笑ひがあとかたもなく消え失せて、眦を凜々しく吊り上げて居た。

「あなたはね、若しもあたしが電話を掛けなかつたら、どうなさるお積りでしたの。此まゝいつ迄も、打ッちやつて置くお考へでしたの。」

「そんな事はありませんよ。忙しかつたから、用事の濟むまで御目に懸らない積りで居たんです。」

「だつて、伺つて見れば此の通り何も用はないぢやありませんか。それに學校はお休みだし、別段お忙しい筈はないわ。」
「けれども、學校ばかりが僕の用事ぢやないんだから、……」
「外にどんな用事があつて?」
「或る本屋へ、飜譯物を出版する約束をしたんです。」
「誰の飜譯をなすつたの。」
男は此處で、成る可く女の聞いた事のない名前を云はうと苦心したが、急に適當なものを考へ出せなかつた。
「ウォルター、ペーターです。」
「ペーターの何を。」
女は明らかにペーターの名を知らなかつたらしく、二三度眼瞬きを續けて、口早やに追求した。
「マリウス、ゼ、エピキュリアン。」
と、彼は言下に答へた。さうして、ゆるやかに煙草を吸つた。
「そんなら原稿があるでせう。ちよいと見せて頂戴。」
「原稿なんか一枚もありませんよ。書き上げる傍から、郵便で送つて了ふんですもの。」
「いつまで其の飜譯をして居らつしつたの。」

「昨夜まで」

「そんな事はみんな嘘だわ。出鱈目にきまつて居るわ。ほんとにした所で、用が濟んだら、電話を掛けて下すつてもいゝぢやありませんか。手紙を書く暇ぐらゐお有りになつたでせう。」

「どうも濟みませんでした。詫ります。」

かう云つて、彼は笑ひながら頭を下げた。

「此の間から、あたしはどれ程氣を揉んだか判りませんわ。もうキッと、あなたに捨てられて了つたのだらうと思ひましたわ。口惜しいから、一層何にも云ふまいと決心して居たんですけれど、つひ〳〵堪へられなくなつて、電話をお掛けしたんですの。後生ですから、此れからあんまり心配させないで下さいましな。其の代り、あたしもあなたの仰つしやる事は、何でも聽くやうにしますから。」

「僕は何も好んであなたに心配させる氣はありませんよ。正直を云ふと今度の事は少し僕の方が惡かつたやうです。あんまり意地を張り過ぎたやうです。しかし、それはもと〳〵あなたの方に罪があるかも知れないと思ふ。」

幸吉は眞面目な態度で口を切つた。

「どんな罪があつて?」

「僕はあなたの言動に就いて、大分不滿足な點があるんです。――僕は御承知の通り我儘な人間です。成る程あなたの眼から見れば、幼稚なだゞッ兒のやうに見えるかも知れません。けれども來年は二十五

になるのだから、滿更子供ではない積りですよ。だからあんまり子供扱ひにして貰ひたくないです。」

「あたしがいつ子供扱ひにして？あたしの方があなたより一つ歳下ぢやありませんか。」

かう云つて、彼の女はにやりと笑つた。いかにも得意さうに、「勿論子供扱ひにして居ます。」と云はんばかりににやりと笑つた。所謂悧巧な女と云ふ者は、かう云ふ場合に、大概得意の色を隠し切れないものである。

「たとへば今、あなたは何でも僕の云ふ事を聞くと云ひましたね。それは子供に向つて、『お前には何でも買つてやるよ。』と云ふのと同じ意味ぢやありませんか。今迄あなたは度び度びさう云ふ事を仰つしやつたけれど、一つも實行された事はありませんよ。又實行される筈がありませんよ。到底實行出來ない事を約束して、僕の感情を和げようとするのは、子供扱ひに違ひないでせう。僕はいつでもあなたに欺されて居るやうな、一杯喰はされて居るやうな、不安な氣持から逃れた事がありません。だから從つて、意地を張るやうになつ了ふんです。」

「でも、此度はほんたうに其の積りなんですもの。」

「ほんたうなら面白い。」

と、男は肩を聳やかした。

「何でも云ふ事を聞くとなれば、あなたは大變ですぜ。一切僕の命令に服從しなければなりませんぜ。僕が靴の紐を解けと云へば解かなければならない。足に接吻しろと云へば接吻しなければならない。僕

らん。」

が五六日手紙を上げないてさへ、直ぐと腹を立てるあなたに、そんな眞似をする事が出來ますまいか知

「そりや無理だわ。けれども、あたしはあなたに弱點を握られて居るんですから、いづれさう云ふ時

が來るかも知れませんわ。」

「ほら御覽なさい。實行するとなれば、忽ち『無理だわ。』になるてせう。」

男は如何にも口惜しさうにダメを押した。彼とても本氣に實行を迫る積りてはなかつたらしいが、此

の際になつて、女が平氣て矛盾した返答を吐く事が、恐ろしく癇に觸つたのてある。

「しかしね、あたしは今迄あなたに對して、負けまい負まいと思つて居た事は事實てすの。それに今日

から本當に改めようと決心しましたわ。此の一週間の間にいろ〳〵考へて見て、どうしてもあたしの方

が餘計あなたを思つて居るんてすから、意地を張るだけ損だと云ふ事が解りましたの。――てすから、

もう怒らないて下さいましな。」

「えゝ、もう怒つちや居ませんよ。」

男は仕方なしに、押し出されたやうな挨拶をした。

第三者の眼から、今日の幸吉の態度を觀察すると、彼は女の行爲に就いて、大分不滿足に感じて居る

らしい。現に自分ても「不滿足だ」と公言して、皮肉を云つたり、憤慨したりして居る。所が不思議な

事には、彼は決して不滿足を感じて居ないのてある。幸吉はそも〳〵彼の女と戀に落ちた時から、成る

可く彼の女を自分の嗜好に適するやうな性格に陶冶したいと望んで居た。丁度彫刻家が木や石を材料として自己の藝術を創造するやうに、彼は彼の女の肉體と靈魂とを土臺にして、其處に自分の幻覺(イリユージョン)を表現させようと努めて居る。つまり、彼の女を能ふ限り非自然的な、非現實的な、非習慣的な、若しくは演劇的な性格に作り上げる事が、差しあたつての彼の仕事なのである。さうして、此の仕事はすでに着々と相當の効果を齎して居る。

彼の女の言動は幸吉と交際し始めてから、日に増し技巧的(アーティフィシャル)となり、エクセントリックとなつた。此の現象は、少くとも彼の女が幸吉の感化を受けて、だんだん藝術的に改造されて行く端緒と見なければならない。彼の女が幸吉の理想通りな藝術品となる迄には、まだなか〳〵の距離が存するであらう。しかし兎に角、彼は自分の創作が徐々に完成されるのを眺めて居る。自分の彫つて行つた鑿の痕を、彼の女の姿態に認める事が出來る。彼が彼の女の狡猾に對し譎詐に對して批難の聲を放つのは、一時的の感情か、然らずんば寧ろ相手に刺戟を與へる爲めなのである。決して不滿足を感じて居る譯ではない。さうして見ると、幸吉が先(さつき)、――「自分が片意地になつたのは、みんなあなたのお蔭だ。」と云つたのは、全く事實と反對な言葉である。

女を陶冶すると云ふ事は、一面に於いて女に武器を與へると同然である。彼の女は與へられたる矛を逆しまにして、其の恩人を征服しようとする。男の不安と危惧とは、彼の女の心が成長するに隨つて、ますます度を强めるであらう。けれども其れを恐れて居たならば、幸吉は生涯ほんたうの藝術を味ふ事

が出來ない。

一戀愛は藝術である。血と肉とを以て作られる最高の藝術である。」――幸吉は斯く信じて、一生懸命に自分の戀人を創作しようと努めて居る。同時に、其れが藝術家たる彼の生活の、主要なる唯一の目的と考へて居る。さうして、此の目的の遂行に伴ふ一切の言語、動作、衝動を以て、悉く藝術的と判斷して居る。

斷つて置くが、彼の女の改造と云ふ事は、勿論其の性格に就いてのみ云爲するのではない。彼の女の全體――例へば容貌、表情などにも、幸吉は明らかに其の後の變化を認める事が出來た。彼は自分の幻覺(イリュージョン)が、だんだん彼の女の目鼻立ちに反映して行くやうに覺えた。彼の女の容貌は、幸吉の雰圍氣を呼吸してから、一層其の美しさを洗錬し、増加したやうに感ぜられる。元來、女の性格と云ふものは、其の容貌から獨立して藝術的價値を所有する事は出來ない。此の二者は女性に於いて殆んど同一の物の如く密接して居る。若しも藝術的な女性から、その美貌を除き去つたならば、彼の女は單に俗惡な、不道徳な人間に墮落して了ふ。之に反して、天稟の美貌を持つて生れた婦人は、其の性格の如何に拘らず、既に幾分か藝術的である。少くとも藝術的たり得る資格を備へて居る。さうして、其の美貌が性格の發展に從つて心理的の影響を受け、いよ〱光彩を發揮するに至るのは當然の事である。

幸吉の眼には、今朝の彼の女は殊に美しく妖艶に映つた。彼は面と向つて話をしながら、始終彼の女の容貌から來る快感が、泉のやうに頭の中へ湧き出づるのを禁じ得なかつた。彼の舌がいろいろの言葉

を喋舌つて居る間に、彼の視覺はいつも彼の女の唇や、眦や、頬の曲線の、刹那刹那の限りなき變化の上にさまよつて居た。實際彼の女の容貌は、あまり美し過ぎて對話の妨げになるくらゐであつた。單に輪廓のみを擧げたら、彼の女ぐらゐな顔立ちはまだ〳〵世間にあるであらう。しかし、彼の女の貴さは、美しい上に健康の體格と充分な肉附きとを備へて居る事である。其の肉附きや骨格が、毫もすツきりした風姿を損する事なく、却つて「美」の印象を强め、「美」の分量を豊富にして居る點である。少しく誇大に形容すれば、彼の女は獸と神との美しさを一身に具有して居る。

歌麿の美人畫を見た時、誰でも第一に氣が付くのは、あの長い長い、心行くまでに伸び伸びとしたなよやかな線であらう。眺めても眺め盡せぬ程餘裕のある目鼻立ちと背恰好であらう。あの美人を一見すると、いかにも弱々しく痩せて居るやうに感ぜられるが、一と度び仔細に注目すれば決してさうでない事が判る。あの顔立ちは面長とは云へ、頬のあたりなぞたつぷりと肥え太つて居る。手でも足でもまことに豊艶である。健康でないまでも、必ず大柄な體格でなければならない。從つて、あのなまめかしい衣裳の裏に包まれた四肢の筋肉は、必ず立派に發達して居なければならない。それでこそ始めて、あのやうな餘裕のある曲線が出來上るのである。――彼の女の美しさは、恰も此の美人畫の特長に類して居た。たゞ、あれ程の婉麗を缺く代りに、あれよりもつと健康らしく、もつと生き生きとして、稍强い鋭い線から成り立つて居た。而も此の頃は、其の强さ鋭さが、幸吉の感化を受けてます〳〵著しくなりつゝあつた。一つ幸吉の氣に入らないのは、あまり血色が好すぎる爲め、いつも顔が櫻色に上氣せて居る事で

あつたが、それさへ今朝は眞白に冴え返つて居た。

「今日はあたし、大變顏の色が青いやうだわね。——えさうぢやなくなくつて？」

彼の女は机の上の鏡を視詰めて、そんな事を云つた。

「女が自分の顏色の青い事を云ふ時には、大概得意を感じて居るやうですね。」

幸吉はお世辭のつもりで、答へた。

「うそよ。あまり心配させらたせゐよ。」

かう云つて笑ひながら、彼の女はやつぱり鏡の中を覗き込んで居た。

二人は丁度九時頃から二時間ばかりの座談を續けて居た。

「あなた、御飯でも喰べに何處かへ行かなくつて？」

女がとうとう斯う云ひ出したのは、十一時過ぎであつた。天氣は好し、時間はあるし、散策旁々大森迄出掛ける事に話がきまつた。

「お召し物が大さうよく似合ひますこと。」

坐敷を出る時、男に外套を着せてやりながら、彼の女は云つた。

三

幸吉が年始の歸りに彼の女の家を訪れたのは、正月二日の午後三時ごろであつた。どんよりと曇つた

空が雪を含んで、きびしい寒さに大地は凍て切つて居たが、朝のうちから方々で酒を强ひられた彼は、いゝ工合に暖くなつて居た。

彼の女の父は長い間其の邊に開業して居る醫者であつた。もう年頃は五十幾つの、古い時代の醫學士であるが、五六年前に家を擴張して「〇〇醫院」とか云ふ看板を揭げ、若手の代診を二三人雇つて相應に繁昌して居る。門を這入つて、木造の西洋館に添うて裏へ廻ると、其處に家族の者の出入する母屋の格子戸がある。患者以外の來客は、多く此の格子戸を潜る事になつて居た。

幸吉はまだ、彼の女の父にも母にもしみじみと會つた事はなかつた。折々話をするのは例の娘だけであつた。彼はいつも格子戸から上つて、母屋と西洋館の間を接續する窮屈な廊下を通り、狹い裏梯子を昇つて病院の二階へ案内される。從つて、女中や看護婦の外には家族の者と顏を合はせる機會がない。彼は母屋の間取がどうなつて居るのかさへ知らなかつた。

案內される二階座敷は、もと／＼入院患者を收容す可き病室なのである。けれども其處が他の病室と離れて居る爲めに、暫く娘夫婦の居間となつて居たらしい。さうして兄が洋行に出かけてからは、娘と彼の女とが住まつて居る。尤も娘の方は殆んど寢るだけの事で、晝間は全く母屋に暮らして居る所から、自然と彼の女が其處を占領して了つて居る。

部屋の廣さは八疊程で、ドーアと壁を除いた部分は、押し入れでも床の間でも疊でも一切日本風に作られて居た。其處へ案內される人々は、大概彼の女と娘とに共通な友達で、外の家族に挨拶をする面倒の

ない結果、三日置きに一人ぐらゐは誰か知ら遊びに來て居た。來客の多くは女學校時代の同窓であるが、中には五六人の若い、未婚の男子も交つて居る。彼等は兄の舊友で、兄が洋行する以前から親しく往來して居た人々である。彼等が再々兄の留守宅を訪問するのは、單に舊友の夫人を慰めると云ふ親切ばかりではあるまいと、幸吉は邪推して居る。

しかし、邪推は邪推として、彼は決して彼等を憎む譯には行かない。なぜと云へば、幸吉が彼の女の家に出入する事が出來るやうになつたのは、抑も「彼等」の一人が紹介してくれたお蔭なのである。丁度去年の十月ごろ、幸吉と同じ學校の文科のK——氏が、花柳病に罹つて二週間程此の病院へ入院して居た。其の時分、彼が折々見舞ひに行くと、いつもK——氏の病室に彼の女と姨の姿が見えた。二人の女はいかにも世馴れた調子で、K——氏の花柳病の原因を探索したり冷やかしたりして居た。幸吉は始め、彼の女達ちは二人とも何處かの夫人であらうと思つて居た。するとK——氏が、

「あなた方は此の男の名前だけは御存知でせう。よく下らない雜誌へ飜譯物なんかを載せて居る人間です。」

かう云つて、二人の女に彼を紹介した後、更に幸吉を顧みて自分と此の家の子息——植田工學士との關係を說明した。

彼の女が未婚の婦人であると聞いた時、幸吉は聊か意外の感にうたれた。彼の女の物馴れた態度や、自由な表情や、引き締まつた體つきは、どうしても男を知らぬ女とは考へられなかつた。

「妹の方は未婚なのかい。」

彼はかう云つて、密かにＫ――氏に尋ねた事があつた。

「うむ、……今のところは獨りだよ。……」

Ｋ――氏の答は頗る曖昧であつた。

「どうも處女(ヴァジン)ぢやないらしいね。何かあるんぢやないか知ら。」

と、彼は重ねて訊いた。

「そんな事はないだらう。……尤も、あの女の過去に就いては多少面白くない事があるんだが、あんまりお喋舌(しゃべ)りをすると惡いから……」

Ｋ――氏は眉をひそめながら、こんな事を云つて口を噤んだ。

幸吉は其の後いろいろの方面から、所謂「面白くない事」の眞相を詮索して見たが、どうもハッキリと判らなかつた。たゞ、彼の女が嘗て半年ばかり、或る男――杉村と云ふ醫科大學生と同棲して居た事實と、其の男はすでに病死して了つた事と、此れだけが朧ろげながら確かめられた。其れ以上の詳細(ディテイル)は人々に依つてさま〴〵に傳へられて居た。或る人は、彼の女が或る女の戀人を奪つたのだと云つた。或る人は、彼の女は評判の色魔に欺かれて弄ばれたのだと云つた。其の男の死は病死でなくつて、自殺したのだと云ふ說もあつた。男の方が却つて彼の女にだまされたのだと云ふ說もあつた。中には其の男が病氣で死ぬ時、彼の女の名前を呼び續けにして、

"Now, I shall die with her name on my lips."

と、流暢な英語で譫語(うはごと)を云ひながら息を引き取つたなどと云ふ、甚だ信を置けない風說もあつた。其の外、彼の女は兩親に結婚を强ひられて、いやいや同棲したのだとも云ふし、兩親の意志に背いて二人で勝手に逐轉したのだとも云ふし、法律上の結婚はしなかつたとも云ふし、殆んど千差萬別であつた。

要するに、彼の女の過去には、何か非常な不面目な事か、或は不道德な事かゞ潛んで居るらしかつた。彼の女が幸吉に心を寄せるやうになつた時、幸吉は第一に此の事件を質問した。すると彼の女は、

「それを聞いて何になさるの。もう死んだ人の事なんか、どうでもいゝぢやありませんか。」

と云つた。けれども幸吉は承知しなかつた。たとへ過去の事實にせよ、自分に對して秘密を守るのは怪しからぬと云つて、執拗(しつこ)く追求した。

彼の女の答は至極簡短で、又非常に嘘らしかつた。彼の女は決して杉村を戀ひしては居なかつた。けれども彼の女の兩親は馬鹿に杉村が氣に入つて居た。彼の女の家と杉村の家とは、舊くから關係があつて、お互ひに往復して居たのだと云ふ。今から考へると、杉村は始めから彼の女と結婚したい野心があつて、一生懸命で彼の女の兩親に取り入つたものらしい。一日、彼の女は突然兩親から杉村と結婚す可き相談を受けた。無論彼の女はキッパリとはね付けた。杉村は一と方ならず失望して、さま〴〵に彼の女や彼の女の兩親を口說いた。杉村の母もわざ〳〵九州の國許から上京して、懇々と賴んだ。人の好い彼の女の兩親は、杉村母子の熱心な言葉に心を動かし、到底其れを拒絕するだけの勇氣がなかつた。今

度は兩親が共々彼の女に懇願した。杉村と杉村の母と、自分の兩親と、彼の女は三方から拜み倒されて、退引(のつぴき)ならぬハメに陷り、到頭結婚を餘儀なくされた。――此れが彼の女の云ふ所である。

「拜み倒されて往生するやうなあなたでもなさうだが、……」

かう云つて、幸吉は詰つた。

「その時分は未だ子供だつたんですもの。」

と、彼の女は辯解した。ついでに彼の女は杉村の自殺說をも否認した。當時、杉村はあと半年ばかりで醫學士になるところであつた。大學を卒業してから本式に結婚するつもりで、二人は暫く千駄木の借家に同棲して居た。そのうち、杉村は腎臟病に罹つて、二た月ばかりの間に死んで了つたのださうである。

「どうもいろいろ嘘があるらしい。僕にはあなたが其の男を嫌つて居たとは思はれない。隱さずに本當の事を云つたらいゝぢやありませんか。」

幸吉にかう云はれても、彼の女はやつぱり其れが事實であると主張した。さうして、其れ以上の事を一つも語らなかつた。

K――氏の紹介に依つて彼の女を知つた幸吉は、最初から何となく二人の間に或る因緣が結ばれるやうな氣がしてならなかつた。彼は彼の女を取り卷く多くの男が、自分よりも皆優越な武器を持つて居る事を知つて居た。彼の女がいかに自分自身を高く評價して居るかをも知つて居た。彼は自分の方から、進んで握手を求めるだけの資格はないとあきらめて居た。それにも拘らず、彼は『或る因緣』をたよりにして、

彼の女から遠ざからうとしなかつた。又遠ざかる事が出來なかつた。彼の女も娘も文學好きな女らしかつた。K——氏が二週間の入院中、幸吉は屢々小説や演劇の談話を試みて、相應に彼等をチヤアムさせた。退院の後も、K——氏は二三度彼を誘つて病院を尋ねた。其の度毎に、「どうぞ此れから遊びに來てくれ。」と彼の女は云つた。けれども娘の方は何とも云はなかつた。彼は暫く、娘の思はくを憚つて、單獨の訪問を試みる決心になれなかつた。彼の女は時々、電話や端書で「何々の本を拜借したい。御暇でしたらお遊び旁々持つて來て頂きたい。」などゝ云つて寄越した。幸吉は漸くK——氏から獨立して、自由に彼の女を訪問し得る情實を捕へた。出掛けて行けば娘も嫌な顏はしなかつた。さうして、いつの間にか幸吉が迷信して居た「或る因緣」は結ばれて了つたのである。

「事に依つたら、もう娘に感付かれては居ないだらうか。」——さう云ふ疑念は、隨分幸吉の胸に起つた。娘は密かに兩親の内意を受けて、彼の女を監督して居るのではあるまいとか思はれた。彼は今日になつても、未だ安心して彼の女を訪問する事は出來なかつた。

「それにしても、今日は年始に行くのである。別に不思議はない。」

と、彼は自分で辯解して見た。幾分か醉つて居る爲に、彼はいつもより大膽な意氣ぐみになつて居た。例の二階へ通されると、彼の女を始め娘にも何等窮屈を感ずる事なく、極めて自然にスラスラと新年の祝儀を述べた。

「先日はまた三千子さんがお邪魔に上りまして、大さう御馳走して頂いたとかつて。……どうも毎度御厄

介になつて相濟みません。」

嫂がエルモットを進めながら、かう云つて頭を下げた。

「どうぞちと、あなたも御一緒に遊びに入らしつて下さい。」

彼の女は如才ない男の挨拶振りを、横から默つて眺めて居た。彼の女は顏の何處かで妙に笑つて居るらしかつたが、醉つて居る幸吉には、其の表情が不斷のやうにハツキリと印象されなかつた。唯笑つて居るのだと云ふ事だけが感ぜられた。それが丁度、舌のたゞれて居る時に美味を味ふやうな不滿足を覺えさせる。幸吉は從來彼の女と會合の際に、一度も酒を用ゐた事はなかつた。戀と云ふものが、命懸けの精力と智謀とを要する仕事であるとしたら、今後も酒を用ゐてはならない。彼はそんな事を思つた。

「山本さんは大分御機嫌で居らつしやいますのね。今日は何處かの人もエルモットを飲過ぎて少うし醉つて居りますのよ。」

「うそよ姉さん、もうスッカリ覺めて了つたわ。」

「どうだかまだ怪しいもんだわ。さつきなんか、醉つてる癖に五目をやつて、私に散々負けたぢやありませんか。これで二番借しがあつてよ。」

嫂は火鉢の縁に兩手をあてゝ、ピアノを彈くやうに手頸を振りながら、無邪氣な調子でからかつて居る。

「姉さんはコスイから駄目よ。」

「あら、自分こそ『待つた』ばつかりして居た癖に！」
「そんならもう一番讐討ちをしませうか。」
「いゝえ、もう澤山。山本さんが入らつしたら、急に氣が强くなつたわね。」
幸吉の氣のせゐかも知れぬが、此の言葉と共と娘と三千子は眼を見合はして、意味ありげな、暗合のやうな微笑を交換した。殊に三千子の笑ひ方には、嬉しさうな表情が稍露骨にほの見えて居た。醉つて居る彼の女は、娘の口車に乘せられて、何かつまらぬ言を喋舌つたのではあるまいかと推せられる。
「醉拂ひを相手にしても仕樣がないから、今夜ゆつくり返り討ちに遇して上げるわ。」
「もう醉つて居やしなくつてよ、姉さん。」
から云つたけれど、彼の女はまだ明らかに醉つて居るらしかつた。
「あなたは姉さんに何か摑まれたんぢやありませんか。」
娘が行つて了ふと、幸吉は包み切れない不平の色を眉宇の間に洩らして云つた。
「大丈夫よ。いくら悧巧でも、まだ姉さんにそんな眞似は出來やしませんから。」
二人きりになつたので、安心した結果俄かに醉が發したのであらう、彼の女の息は苦しさうにはづんで居た。さうして、男の不機嫌などには、一向心付かないらしかつた。
「一體あなたは姉さんを馬鹿にし過ぎますよ。あの人はあなたの考へて居るより、もつと悧巧な女なんです。」

「あなたがあんまり憶病過ぎるんだわ。」

「馬鹿を仰つしやい！　あなたは醉つた勢て、何か姉さんに喋舌つたに違ひないてそう。悧巧な人々馬鹿にすると、却つて此方が馬鹿になりますぜ。」

男の憤怒に氣が付いたのか彼の女の顏は見る見る曇つて、充血した細い眼元に恨めしさうな淚が浮かんだ。

「あたしはどうせ馬鹿な人間だすわ。あなたはあたしが醉つて居るので、愛憎を盡かしておしまひになつたのね。もう今日かぎり見捨てゝ了ふお積りなのね。――それだのにあたしは今朝からあなたの事を考へて居て、嬉しまぎれにこんなに醉つて了つたんだわ。」

何と云ふ俗惡な態度てあらう。何と云ふ陳腐な物の云ひ方てあらう。孔雀のやうに驕り慢つた平生の彼の女の美しさは、今日は何處にも認める事が出來なかつた。彼の女の擧動は娼婦のやうに醜く、淺ましく、愚かてあつた。幸吉は今迄此の女の上に築き上げた幻覺が、一朝にして破壞し盡されるのを感じた。彼はどうなる事かと危ぶみながら、焦ら立たしさと口惜しさとに唇をわなゝかせて、狂ひじみた女の樣子を憎々しく凝視した。「うれしまぎれにこんなに醉つて了つたんだわ。」――此の言葉から推測すると彼の女は正しく娘の舌先に煽てられて、何か秘密を洩らしたに相違あるまい。酒と云ふものは、これ程殘酷に人間の魂を寸斷して了ふのだらうか！　彼は酒の力を憎むと共に、其の力の陰に隱れて彼の女を操らうとした娘を憎んだ。さうして、誰よりも、此の二つの者に魂を蹂躙された彼の女の腑がひなさを最も

憎んだ。

「己は勿論此の女をほんたうに悧巧な人間だとは思つて居なかつた。しかしこれ程馬鹿だとも思つて居なかつた！」

かう云ふ惡罵が腹の中に漲つて、彼の口腔をムヅムヅさせた。

彼は又、ふと下のやうな事を考へた。――かう云ふ時に男は其の情婦を殺したくなるのではあるまいか？　彼自身と雖、女がいつまでも斯かる態度を改めないで、執念深く附き纏はつて來たならば、恐らくそんな氣持ちになるであらう。嫉妬の爲めに女を殺すのは、或る意味に於いて、男が女よりも弱い事を示すのである。女は男の妬刄（ねたば）に斃れて、いよいよ其の美を發揮し、其の價値を大にする。男は反對にますます其の愚を曝露し、其の醜を顯著にする。寧ろ密かに、獨りで自殺して了つた方がいゝ。嫉妬から來る憎惡の裏には、それと矛盾した愛着、憧憬、崇拜――と云ふやうな甘い（スヰート）感情がまだ充分に潜んで居る。之に反して、ディスイリユウジョンから來る憎惡の裏には、憎惡の外に何物もない。たゞ眞暗な憎惡ばかりである。斯かる場合の男の心は、一點の血も涙もない、少しも人間らしくない、獰猛なマリシャスな狀態に誘致される。子供が蛇を殺す瞬間のやうな、無邪氣な無鐵砲な、偶發的な危險性を帶び易い。其の時に相手の女が執拗な態度を改めなければ、男の憎惡は更に積極的となつて、如何にして彼の女の靈魂と肉體とを最も完全に虐待し除去す可きかを考へる。但し、勿論男が其處に至るのには、餘程强いディスイリユウジョンの加工を待たなければならない。憎惡する前まで、是非共深い愛情が二

人の間を結び付けて居たのでなければならない。さうして、上述の心理現象は、男と女の位置を交換しても、略々同然であらうと思はれる。

幸吉は今、自分の頭が多少其れに似寄つた現象を呈して居るやうに覺えた。若しも彼の女がもう五六分間醜しい醉態を續けて居たならば、腕力に訴へても手を振り解いて突き飛ばしたかわからない。とこ ろが丁度いゝ鹽梅に、入口のドーアをこつこつ叩つ者があつた。

「どなた」

彼の女は立ち上つて、戸口から顏を半分廊下に出したが、

「紹介して上げるからお這入んなさいな。」

かう云つて、一人の青年の手を曳きながら席に戻つた。

「三千子さんは醉つて居るんですね。」

青年はいかにも人の好い、正直らしい容貌を持つて居た。彼は呆れたやうな、怪しむやうな、おどおどした眼を輝かして彼の女を見たが、直ぐと其のまゝの眼を幸吉に轉じた。

「此の人はね、いつかあなたにお話したした杉村の弟なの。不斷からあなたの飜譯物を愛讀して居るのよ。」

「どうぞ御別懇に願ひます。」

青年は學校の制服のまゝ畏まつて、慇懃に頭を上げた。今年二十二歲で、醫科大學に籍を置いて居るのださうである。柔かい、眞黑な、羊の毛のやうに渦を卷く頭髮を、額のまんなかからしッとりと分け

て居る調子が、子供々々した愛らしい圓顏によく篏まつて居る。色は淺黑いけれど、何處となく純潔な溫和な目鼻立ちてある。去年までは本郷に下宿して居たのを、暮れの休暇に植田の家へ同居して、當分此處から通學する積りだと云ふ。

「才ちやん、ヹルモットを召し上れな。」

「えゝ有りがと。今日は方々て飮まされましたから、もうあんまり頂けませんけれど、……」

「このくらゐなものが飮めない事はなくつてよ。」

彼の女にかう云はれると、杉村は大人しく酌を受けて、コップの端へ脣をつける。

「それぢや年始を濟まして來たの。」

「えゝ、五六軒廻つて來ました。これて大概濟んだつもりてす。」

彼の女は怖げに机へ凭れて、酒を飮む男の樣子を眺めて居たが、やがて、

「あたしにも一杯注いて頂戴。」

と、懷ろ手をしたまゝ、頤の先て盃の上に伏せてある今一つのコップを指し示した。

「大分飮めるんてすね。あんまり醉つちやいけませんよ。」

杉村は自ら鄭寧にコップを起して、波々と注いてやつた。

それから彼の女は「急須に湯を注いて、山本さんとあたしに茶を入れてくれ。」と云つた。杉村はやつぱり其の通りにした。

「ほんとに杉村さんは感心ね。何でも云ふ事を聞いてくれるから。」
「あなたに憎まれると、恐ござんすもの。」
かう云つて、杉村は平氣で笑つて居る。
「才ちやん、濟まないけれど肩が凝つて仕樣がないから、少うし揉んでくれなくつて?」
「承知しました。」
杉村はやをら立ち上つて彼の女の背後へ廻つた。かたかたと洋服のカフスの音を立てながら、彼の女のしなやかな頸筋の周圍を、忠實に按摩し始める。
「この節は大變うまくなつたわね。」
「さうですか、本職よりも僕の方が餘つ程上手になつたでせう。」
「ほんたうよ、何でも才ちやんに限るわ。――あたしがいゝと云ふまで、止めちやいけなくつてよ。」
「えゝ宜ござんす。」
不思議な此の場の光景は、大分長い間繼續した。彼の女は容易に杉村を許さなかつた。肩が濟むと背筋を撫でさせたり、腰を叩かせたりした。さうして、櫻色に染まつた、眠さうな細い眼元に、恍惚とするやうな薄笑ひを浮べた。「自分の一言一句に服從して居る、此の哀れな青年の樣子を見てやつてくれ。」――さう云はんばかりに、彼の女は時々幸吉の方を眄に見た。
杉村の言葉遣ひには、何處か甘つたるい、惡く云へば薄鈍い調子があつた。幸吉には此の青年が馬鹿

なのか、陰險なのか、乃至は恐ろしい擦れ枯らしなのか、ちよいと判斷が出來なかつた。彼は彼の女を死んだ兄の妻たりし人——義理ある姉として尊敬して居るのか、それとも自分が死んだ兄の敵手(ライバル)となつて、彼の女の歡心を得可く努めて居るのか、どうも其の點は明瞭でなかつた。尤も、彼の女が彼の亡兄と千駄木に借家して居た頃、杉村は其處に同居して若夫婦の監督を受けつゝ中學へ通つて居たさうである。彼の女は其の時分から、嫂の權威を振り廻して、杉村を書生のやうに使役したのかも知れない。兎に角彼の女の杉村に對する我が儘な、暴君的(タイラニカル)な、侮辱し切つた態度は、醉つて居る結果とばかりは思はれない。これ程激しくないまでも、恐らく平生から斯う云ふ風な習慣にしつけたものと推せられる。さうして、少くとも彼の女の方では、此の青年の親切を、道德的觀念から割り出された行爲とは認めて居ないらしい。多分彼の女の解釋は正當であるかも知れないが、……

彼の女が幸吉の前で、杉村を使役して見せるのは、幸吉に嫉妬を煽り立てる計略ではなささうに見えた。將來は知らず、今日の樣子では、傲慢な彼の女がよもや此のやうな生温(なまぬる)い青年と戀に落ちようとは思はれない。彼の女は此の青年に戀ひするよりも、寧ろ此の青年を傀儡の如く操る事に餘計興味を感じて居る。彼の女の目的は、此の青年の痴態を介して、自分の魔力のいかに偉大なるかを、幸吉に納得(なつとく)させようとするのであるらしい。

「どうぞあなたもあたしの價値を認めて下さい。價値を認めて、それに相當する愛情を持つて下さい。」

かう云ふ意味を、男に酌み取つて貰ひたいのである。

彼の女の此の目的は、或る程度まで成功したやうであつた。幸吉の抱いて居た憎惡はだんだんと別な感情に變化して行つた。女の美しさは杉村と云ふ薪を得てから、彼の眼に新しく鮮かに燃え上つた。毒々しい、强い油繪具で描いたやうに燃え上つた。杉村の擧動は彼の女の價値をエムファサイズすると共に、間接に幸吉自身の價値をもエムファサイズして居た。つひ五六分前の女の醜しさと、現在の杉村の哀れさとを對照して見て、幸吉は自分自身がいかに强者の地位にあるかを自覺せずには居られなかつた。彼の女は杉村を傀儡にしてますます自分の美を發揮しつゝ、實は男に媚びて居るのであつた。此の媚び方は、いかに頑な男の心をも動かすだけの力があつた。彼の女の醉が激しくなればなる程、彼の女の我が儘が突飛になればなる程、男はいよいよ興を催した。

そんなら幸吉は全く嫉妬を感じて居ないかと云ふに、決してさうは行かなかつた。自分の地位は杉村に對して、充分安心が出來るであらうか？ 現在は大丈夫としても、此の後長く杉村を見下す事が出來るであらうか？ 威張つて居る者が卑屈な者より强いと云ふ事は、斷言は出來ない。よもやと思ひながら、ひよツとしたら此の青年の親切が、幸吉の傲慢に打ち克つ時がありはせぬかと危ぶまれる。目下のところ、此の青年と戀に落ちようとは、彼の女自身も想像しない事であらう。しかし、想像しないだけに、彼の女も幸吉も油斷し切つて居るだけに、その隙を狙つて杉村はあつかましく、せゝこましく、少しづゝ女の心に喰ひ入つて行くであらう。彼の女は今、明らかに杉村を輕蔑して居る。けれどもそれは冷淡や嫌惡から來る輕蔑ではない。寧ろ彼の女は杉村を自己の裝飾品として愛用して居る。彼を傀儡の

如く弄ぶ事に異常な得意と誇とを感じて居る。彼の女のやうな虛榮心の强い、浮氣な、悧巧振つた女には、此の裝飾品は可なり必要である。杉村よりも更に柔順な、更に卑屈な、更に愛す可き青年が出て來ない限り、彼の女は容易に此の裝飾品を捨てる事が出來ない。幸吉と云ふ戀人を捨てゝ、第二、第三の戀人に移つて行つても、彼の女は依然此の裝飾品を愛用する。斯かる意味に於いて、杉村の地位は幸吉よりも遙かに安全である。そのうちに此の青年の諂諛の力は、知らず識らず彼の女の魂に繁殖して行く。彼の女は次第々々に此の青年を忘れる事が出來なくなつて、杉村を極端に弄ぶのが、「戀愛」よりも何よりも愉快な仕事となるか知れない。「戀愛の快樂と暴君の快樂と、孰れか一つを撰べ。」と云はれた場合に、幸吉は自分の性癖から判斷して、彼の女が猶豫なく後者を撰ぶだらうと想像して居る。現在の彼の女は、まだ暴君の境遇がどれ程樂しいかを充分に實驗して居ないのである。一旦それを心行くまで實驗する事が出來たなら、到底其の快樂を拋つ事は出來まい。世の中にネロの境遇を羨む人は甚だ稀であるが、それは彼の境遇を經驗しないからの事で、一と度び其れを經驗する事が出來たなら、多くの人はネロと同樣な歡樂に沈湎したくなるであらう。然るに杉村の擧動は、だんだん彼の女を此の境遇へ誘惑して行くかと思はれる。彼の女は今迄知らなかつた新しい歡樂の境地に向つて、漸く眼を開かうとして居る。彼の女はやがて、戀人を作る事を止めて、忠實な奴隸を思ふがまゝに使役する興味を專一にするかも知れない。さうなつた時、杉村と云ふ裝飾品は、一轉して缺く可からざる日用品となるのである。彼の女は杉村を弄ばずには、一日も生活する事が出來なくなるのである。斯くして遂に、此の女王と奴隸

とはシッカリ結び着いて、二人とも凡人の夢想し難い幸福に生きるてあらう。

杉村は果してそんな所まて考へて居ないのかも知れぬ。彼は案外何等のプロットをも持たない、單純な俗惡な、價値のない封間てあるかも知れぬ。そんな恐ろしい境地を作り出す勇氣や情熱は有りさうにもない。けれども若し幸吉が杉村てあつたら、始めから豫期しないまても、しまひには必ず其處へ到達するに違ひなからう。さう思ふと幸吉はやつぱり不安てあつた。

三十分ばかり按摩をさせて後、彼の女は漸く杉村を免したが、再びコップを手に把つて、

「さあ、もう少しお酌をして頂戴。」

と、云つた。さうして、勢よく續けさまに二三杯傾けた。彼の女の態度はますます粗暴に露骨になつた。

「三千子さん、そんなに醉つていゝんですか。」

杉村はヱルモットの罎を持ちながら、眼を圓くして躊躇して居る。

「いゝからお酌して頂戴よ。どうせ好きな人に嫌はれたんだから、いくら醉つても構はないわ。」

彼の女はしどけなく膝を崩しながら、意地の惡い眼つきをして、ぢつと幸吉の顏を眺めた。

「あはゝゝゝ、なかなか盛んてすねえ。」

かう云つて、杉村は氣が付いたのか付かないのか、唯如才なく笑つて居る。

幸吉の胸の中には、女の醉態を蔑む心と、杉村に對する嫉妬と、嫉妬から來る愛着と、三つの感情が

渦を巻き始めた。
「三千子さん、僕は此れから會があるから失敬します。」
彼は帶の間から時計を出して見つゝ、かう呟いて立ち上つた。
「あらさう、まあ宜しいぢやございませんか。」
平生ならば慌てゝ引き止める可き筈であるのに、彼の女の言葉は案外物靜かな、寧ろ冷かすやうな句調であつた。男が殊更憤然として、獨りで荒々しく外套を纏つたり、襟卷を着けたりする間、彼の女は、やつぱりしどけなく机に凭れたまゝ、以前のやうな意地の惡い眼つきで面白さうに眺めて居た。酒の爲めに無神經になつたのか、それとも醉に紛れて相手を焦らす積りなのか、いづれにもせよ、其の落ち着いた、大膽な素振りを見ると、幸吉は片時も座に居たたまれない腹立たしさと危惧とを感じた。
ばたん、とドーアを強く締めて、裏梯子の中段まで幸吉が降りて來た時、忽ち又ばたんと云ふ音がしてドーアが開いた。彼の女は廊下に駈けて來て、幸吉に追ひ縋つた。
「ちよいと、今度はいつお目にかゝれますの。」
男は默つて、「覺えて居ろ。」と云はんばかりにまじまじと彼の女の顏を視詰めて居たが、やがてだらしなく自分の肩へしなだれかゝる女の體を突きのけて、
「知りませんよ」
と云ひ放つや否や、捕へられた外套の袖がちぎれさうになるのも構はず、ずる〳〵と梯子段を降りる

と云ふよりは滑べり落ちて行つた。彼は戸外へ出て了ふまで、一度も彼の女の顔を振り顧つて見なかつた。

「僕は此れから會があります。」——これは本當の話なのである。夕方の四時半から紅葉館に新年會がある筈なので、幸吉はもと／＼愛宕下から其の方へ廻るつもりであつた。尤も、彼の女に會つた時の都合て、何か面白い事件が發展しさうになつたら、會の方は缺席しても差支へない。さう思つて居たのが、悉く豫期に反して、彼はやつぱり會場へ赴くより外仕方がなくなつた。

戸外へ出て、俥へ乘つて見ても、腹立たしといまいましさは容易に收まらない。今日の彼の女は馬鹿なのか悧巧なのか、美しいのか醜いのか、執拗いのか冷淡なのか、殆んど譯がわからなかつた。唯凡べての擧動が毒々しくて、嘔吐を催させる程俗惡であつた。さうして、前後の樣子をいろいろ考へ合はせて見るのに、結局彼の女はまだ充分幸吉に惚れて居ると云ふ事だけは明かであつた。

若しも幸吉が、彼の女を捨てゝ了ふ氣があるならば、今が一番容易い時である。彼は自分の胸中に沸き騰つた憎惡の情を利用して、比較的未練や後悔を感ずる事なく、彼の女を振り捨てゝ了へさうである。兎に角、今日の態度から判斷すると、彼の女は幸吉が最初に豫想したよりもつと淺はかな、もつと薄つぺらな、もつと愚かな人間らしく感ぜられる。それだのに彼は、どうしても彼の女を捨てる程の決心になれなかつた。なれないばかりか、俗惡だと卑しめながら、淺薄だと蔑みながら、嫉妬を起したり、危惧に襲はれたり、憎惡の蔭から盛んな愛着の火の手を煽り付けられて居る。嫌らしいやうな、恐ろしい

やうな、それで居て又惹き付けられて居るやうな、―― 何しろ、全體から云つて如何とも名狀し難い不愉快な氣分が頭一杯に充滿して居る。

紅葉館ではもう宴會は始まつて居た。幸吉が席へ就いてから三十分ばかり立つたと思ふ頃、

「山本さんと仰つしやるお方へお電話でございます。」

から云つて、女中は彼を廊下の外へ呼んだ。云ふ迄もなく、それは彼の女が掛けたのであつた。

「先程は失禮、大さう怒つてお歸りになつたのね。あれは一體どう云ふ譯なの？」

「あなたはまだ醉つて居るんですか。」

幸吉は叱りつけるやうに云つた。

「えゝ醉つて居るのよ。あれから又飮んだんですもの。――いけなくつて？」

「結構ですよ。」

「あのこれからね、」と云ひかけて、彼の女の聲は急に低く皺嗄れた、胡散らしい、低い調子になつた。

「……あたし芝浦の方へ行かうと思ひますの。あなた直ぐに來て下さらなくつて？」

「いま何處から電話を掛けて居るんです。」

「內から……　……」

「そんな馬鹿な眞似をしていゝ積りなんですか。誰かに聞かれたらどうするんです。」

幸吉は顏まで眞靑にして怒つた

「大丈夫なのよ。廊下に誰も居やしないし、電話室の戸を堅く締めてあるんですもの。誰にも判りやしなくつてよ。」

かう云つたけれど、男は少しもそれを信用する事が出來なかつた。却つて女の無智をますます嫌忌する心になつた。

「ねえ、あなた直ぐに入らしつて下さいましな。會なんかどうだつて好いぢやありませんか。」

「さうは行きませんよ。」

「行かない事はなくつてよ。」

二人は暫く押し問答をした。女の聲が再びだんだん高くなつた。幸吉は「行く、行かぬ。」よりも、此の押し問答が彼の女の家族に立ち聽きされる事を最も氣遣かつた。

「そんならあなたの勝手になさい！」

とうたう彼は憤然と電話を切つた。

電話はそれから五分と立たぬ間に再び掛かつた。二度、三度、四度、……と、いくら斷つても彼の女は承知しなかつた。いつそ電話口へ出まいかとも考へて見たが、さうすれば殆んど前後の分別を失つて居る今夜の彼の女が、どんな突飛な行動を取らぬとも限らないと思ふと、幸吉は餘計恐ろしかつた。捨て置けば置く程、電話の回數が增せば增す程、彼の女の家族はいよいよ怪しむに違ひない。彼はいつまでも彼の女と「馬鹿」の競爭をして居る譯には行かなかつた。

「よござんす。一時間ばかり立つてきつと行きます。その代り、あなたも其れまでに醉を覺ましてくれなければ困りますよ。」

彼は餘儀なく、四回目の電話に斯う答へた。

「もう醉つて居やしなくつてよ。」

彼の女はまだそんな事を云つて居た。

一時間の後、會場を辭した幸吉は、芝浦へ急がせる俥の上で、今宵の彼の女にどんな態度を示してやらうかと案じ煩つた。顔を見たらば散々罵り耻かしめて、何等の滿足も與へずに席を蹴立てゝ逃げて來ようかとも考へた。けれども其れが原因となつて、又いつかのやうに此の後長く會へなくなつたらばどうであらう。……彼の女の醉は一時である。醉が覺めてから、男の無禮と自分の醜態とを回想して、再び幸吉に近寄らなくなつたらばどうであらう。………

「己は始めからあの女を悧巧な人間だとは思つて居なかつた。あの女はたゞ悧巧らしく見せる事が上手だつた。己は其れで滿足して居たのだ。ところが今日になつて、彼の女は醉つて居る爲めに平生の假面を取り落した。たゞ其れだけの話なのだ。此の後酒を愼むやうに戒めさへすれば差支へない。」

こんな風に幸吉は心の中で辯解して見た。

彼は今迄の經驗から、讃美す可き肉體を持つた多くの女を知つて居た。しかし、價値のある頭腦を持

つた女には一人も出遇つた事がなかつた。(たま〳〵出遇ふ事があつても、さう云ふ女に限つて、到底戀の舞台に登場する事の出來ない、非藝術的な婦人ばかりであつた。)結局、彼は自分の夢にあて篏まつたイリユウジヨンを與へてくれる女があれば、其れて滿足するやうになつた。彼は彼の女を得てから、成る可く相手の頭腦の缺點を見ないやうにして、次第々々に自分の幻覺を築き上げて行つた。こゝて彼の女を捨てゝ了ふのは、創作の原稿を半途に燒いて了ふのと同樣てある。而も原稿は書き直す事が出來るけれど、彼の女は再び歸つて來ない。さうして、彼の女に匹敵する程の美貌と肉體とを持つた女は、容易に二度と彼の手へ落ちて來ない。やつぱり彼は今日の彼の女を戒めて、落した假面を取り回すやうに敎育するより外はないのてある。不愉快な今宵の印象を一日も早く忘れ去る事が出來るやうに、完全に男の眼を欺く事が出來るやうに、其の假面をしてますます光輝を發揚させなければならないのてある。……幸吉は一方に激しい憤怒を抱きながら、恰も商人が冷靜な利害の打算を試みる如く、此れだけの事を秩序立てゝ計劃した。

それにしても、心懸りなのは、先刻の彼の女の輕々しい電話の掛け方てあつた。どうしても家族の人に樣子を感付かれたに違ひない!惡くすると、取り返しの付かない事になつたかも知れぬ。彼の女に會つたら、幸吉は第一に此の事實から詰問して、向後絕對に酒を止めさせなければならない。

彼の俥が例の家の門前に停まると、彼の女は尾行して來たやうに直ぐその後から這入つて來た。二人は玄關て一緖になつて、坐敷へ通つた。

「さッきはあたしが惡かつたから、なんにも仰つしやらないで下さいな。怒られるのは解つて居たけれど、今夜お目に懸れないと捨てられて了ふやうな氣がしたから、……」

　彼の女の醉はもうさめかゝつて居るらしかつた。

「捨てゝも捨てないても、二人は今に會へなくなりますよ。あんなにうるさく電話を掛ければ、大概内中へ感付かれて了ひますからね。」

「うそよ、内から電話を掛けたんぢやないのよ。實はあゝ云つて、あなたを威嚇かして見たの。」

　幸吉はほッと安心させられたが、忽ち又疑念が起つた。彼の女の言葉は何處までほんたうだかアテにならぬ。少くとも初めの一二回は、〝内〟から掛けたのに相違あるまい。彼の女は男の狼狽と憤怒とを見て取つて、早くもこんな狡猾な遁辭を思ひ付いたのであらう。

「三千子さん、僕にはあなたがほんたうにえらい女なのか、或は下らない女なのか、未だによく解りませんよ。けれどもあなたは、自分をえらく見せる事が上手な人です。僕にはあなたのつまらない嘘が、一々意味ありげに聞えます。やさしい言葉がみんな皮肉のやうに取れます。下手に出らゝれば出られる程、却つて此方が不安を感じます。だからやつぱりあなたはえらい女だと思つて居る。たとへどんなに器量がよくつても、どんな經歴を持つて居ても「あなたが普通の女に復つて了つたら、僕の戀は消えて了ふかも知れません。……」

「そんならあたしが、もう普通の女に復つて了つたと仰つしやるんですか。」

「少くとも酒に醉つて居る間は、あなたはたゞの女です。卑しい、無智な、世間普通の女です。僕はさッき、もうあなたとは今日ぎり別れて了はなければならないのかと思ひました。どんなに僕は口惜しかつたでせう。どんなに悲しかつたでせう。…後生だから此の後酒を止めて下さい、僕はあなたをいつ迄も立派な、完全な、えらい女だと思つて居たいんです。酒さへ止めて下されば、あなたは僕に對してどんなにでもえらくなれます。神にも、惡魔にも、暴君にもなれます。あなたと別れると云ふ考へが、僕には既に死ぬよりも悲しい事になつて了つたんです。」

幸吉は相手の醉を戒めながら、自分も非常に醉つて居る事を意識した。彼は其の日の午前中から飲み續けて、紅葉館でも腹立ち紛れに大分多量のやけ酒を呷つた。其れが今になつて一時に發して來たのである。アルコールの力は知らず識らず彼の心を不思議な狀態に誘惑して行つた。女の行動を批難する筈であつた彼は、長い間喋舌つて居るうちに、いつしか口を極めて相手を讃美して居た。彼は已れの弱點をさらけ出して、彼の女に對する僞りのない自分の感情を、正直に、寧ろ誇張的に懺悔し始めた。傲慢な罪人が良心の苛責に堪へかねて今しも神前に平伏する如く、彼は珍しくも女の膝下に跪いて、始めて哀れな、打ち負けた、歎願的な態度を示した。

「三千子さん、僕は今迄あなたに向つて强い事ばかり云つて居ました。『强者』の假面を被つて居ました。しかしあれはみんなウソです。負け惜しみです。其の實あなたにどんな事をされても、僕は怒る事もどうする事も出來やしないんです。ほんたうの弱者なんです、だから僕を可哀さうだと思つて下さい！」

此の言葉と共に、彼は今日までの心の苦痛が快く流れ去るやうに感じた。此の言葉と共に、二人の地位は今日から轉倒して、彼は自分に相當する弱者の椅子に就く事を覺悟した。彼は小ひさな意地を捨て眞實の哀れな姿のまゝに、自分の命を女の掌中に委ねようとするのであつた。彼は俄かに安心した。同時に女は、無上の權威と崇嚴と美容とを具へて彼の眼に映つた。其の指先の一片の爪、生え際の一本の毛の貴さにも、自分の肉體の凡べてを抛つ價値を認めた。斯くてこそ始めて、彼は彼の女に完全なイリユウジョンを形作る事が出來るやうになつた。彼は自分の身を卑しくすればする程、いよ〳〵相手の美に打たれる事を知つた。

女は男の言葉を少しも疑はないらしかつた。却つてさうなるのが當然だと云ふ風に、默つて笑ひながら其の顏を視詰めて居た。

「あなたは杉村君を可愛がつて居るんですか。」

暫く立つてから、幸吉は激しい嫉妬を眼に泛べて訴へるやうに云つた。

「あんな者を心配しないでもよくつてよ。まるで子供ぢやありませんか。」

と、彼の女は冷やゝかに云つた。

四

その明くる日も、その明くる日も、彼の女は駿河臺の旅館を訪れた。

幸吉は二日の晩の事を、醉が覺めてから考へて見ても後悔する氣にならなかつた。丁度夢の中の幻が、眼を覺ました後まで繼續して居るやうに、あの晩の彼の女に對する崇拜の情は、今も猶ほ彼の胸に巣喰つて、日增しに強く露はになつた。彼は戀人の前にひれ伏して了つた現在の自分を、昔の自分よりも餘計幸福に愉快に感じた。

彼は戀人に體現せられた女性の美しさを渴仰する餘り、いつの間にか其の美を模倣するやうに馴らされて來た。女性の所有する美しさの外には、彼は何物の美をも認める事が出來なかつた。女性の表情、女性の血色、女性の體格、女性の言語、――彼はそれ等の凡べてを美望した。彼の靈魂と肉體とは、彼の女に接近する每に美しい感化を受けて、だんだん異性的色彩を帶び始めた。性の倒錯――そんな現象が、彼の全部を改造して行くやうに覺えた。知らず識らずのうちに、彼は女性の嬌態を會得し、諂諛に長じ、嫉妬を愛するやうになつた。

幸吉は女性的生活のみが眞の藝術的生活であると信じて居た。さうして、自分は戀愛に依つてのみ、其の生活に到達する事が出來ると信じて居た。若しも戀愛の結果が、女性的感化を男性の上に齎さなければ其の戀愛は虛僞である。――彼はさう思つて居た。果して彼の所信は、今日漸く實現されつゝあるので

ある。彼は彼の女の手に縋つて、不斷から夢想して居た生活を織り出ださうとするのである。

しかし、彼の女性的態度は、たゞ其の戀人に對する時ばかり發現されるのであつた。彼は二人の世界と、一般の世界とを全然區別して、前者に於いてのみ高尙な眞實な生命を見出した。技巧に充ち、幻覺に充ち、假面に充ちた前者の世界が、後者の世界よりも彼には餘計眞實であつた。餘計命がけであつた。彼は全力を盡して二人の世界を絢爛にし、豐饒にす可く努めた。

其の世界に於いて、彼は先づ戀人に女王の寶冠を捧げた。さうして、其の寶冠に適しい絶對の權力と威嚴と、勇氣と、品位とを具備するやうに彼の女を導いた。バビロンや、埃及や、羅馬や、支那や、――さう云ふ古代の國々の傳說に、罪惡の花を咲かせて居る偉大な女王や后妃の性格を、彼は戀人の魂に打ち込まうと試みた。勿論彼の女が幸吉の理想に從つて、恐ろしい變化を完全に遂行するまでには、長い時日を要するらしかつた。幸吉は全く杉村と同樣な卑屈な態度で、甘味ある毒酒の醉の少しづゝ五體に浸潤するが如く、陰險に、徐々に、女の心に諂つて行つた。現代の人間の慾望を束縛して居るいろいろの桎梏、――習慣や、常識や、禮法や、儀式や、窮屈な社會の制約を、彼の女は次第に二人の世界から剝ぎ取つて行つた。少くとも幸吉に對する時、漸く彼の女は柔弱な怯懦な女性の類型から遠ざかつて自然のまゝの、雄大な素朴な、原始的性格を閃めかすやうになつた。幸吉が女らしくなればなる程、彼の女はだんだん非女性的になつた。

二人は相互の間に絶えず現はれる變化と影響を樂みつゝ、殆んど每日顏を合はせたが、丁度正月の半

ばごろ、どう云ふ譯か彼の女は二三日訪ねて來なかつた。其の時分、男は一日も彼の女を見ずには暮らせない程になつて居た。すると、三日目の夜遲く、彼は戀人の手紙を受け取つた。

手紙には意外な事實がしたゝめてあつた。彼の女は此の頃、兩親から杉村と結婚す可く迫られて居る杉村も其の積りて居る。此れにはさま〴〵の込み入つた事情があつて、一と通りの手段では彼の女も容易に拒絶する事が出來ない。第一、兩親は杉村の兄の氣の毒な最後に對して、非常な同情を持つて居る何とかして杉村家に謝さなければならないと思つて居る。其の上彼の女の兄は工學士であるから、父は是非とも適當な養子を彼の女に迎へて、病院の經營を委托したいと望んで居る。ところが彼の女の過去に暗い經歷がある事と、彼の女の性質が我が儘放題である事と、彼の女の品行の不評判な事と、いろ〳〵の缺點に想到して、父は到底立派な養子を迎へる事が出來まいと悲觀して居た。かう云ふ氣兼ねやら、必要やらが生じて來た際に、杉村は彼の女の家へ同居するやうになつた。一見したところ、彼は柔順で正直て、勤勉家て、且我が儘な彼の女の性質をよく呑み込んで居た。學校の成績も惡い方ではなかつた。若しも此の青年を婿にする事が出來れば、父は凡べての心配を一掃し得て、こんな仕合せはないと思つた。密かに意向を尋ねて見ると杉村は直ぐに承諾した。彼の女に云はせれば當然の結果であるが、父は杉村の返辭を聞いて意外の喜びに打たれた。さうして、一昨日の晩、始めて其の事を彼の女に打ち明けた。

父の相談を受けた時、彼の女は殆んど寢耳に水の驚きを覺えた。問題が此れ程進んで來るまで、自分

が全く除け者にされた事を何よりも不愉快に感じた。舊弊な父が自分を度外視して、勝手に事件を運ばうとしたのは未だしも恕す可き點がある。最も憎らしいのは杉村であつた。疾うに父から話を持ち込まれて、立派に承諾を與へて置きながら、彼の女には少しも其れを洩らさなかつた。洩らさないばかりか相變らず猫のやうなやさしい態度で、彼の女の機嫌を伺つて居た。たとへ口止めをされたにしても、父とグルになつて、彼の女を出し拔かうとするなどは卑屈千萬なやり方である。それが平生奴隷の如く蔑んで居た杉村であつたゞけに、彼の女は餘計憤つた。

性急な父は、杉村の卒業を待つ迄もなく、直ぐにも結婚させたいやうな口吻であつた。彼の女は父に向つて、一應抗辯して見たが、深くは反對しなかつた。反對したところて、唯徒らに父の怒りを買ふより外、何の効力もない事を知つて居たからである。又、自分の爲めに心配してくれる老境の父を、哀れとこそ思へ、憎む氣にはなれなかつたからである。彼の女は一圖に杉村を憎んだ。さうして、何とかして、手ひどい復讐を與へてやりたかつた。

彼の女は反對に杉村を出し拔いてやる計略を考へた。此の結婚をいやいや承諾した風を裝ひつゝいざと云ふ間際に姿を晦まして、幸吉と共に暫く何處かへ出奔して了ふ。――父にはいかにも氣の毒であるが、それが一番痛快である。一擧にして婚約を破壞し、杉村を氣死せしむる事が出來る。

出奔するまでには、まだ一と月ぐらゐの猶豫がある。其の間に自分は勿論、幸吉にも相當の旅費と衣類とを用意して置いて貰ひたい。少くとも二箇月間は支へ得る程度の準備が必要である。尙詳細の事は

明朝駿河臺を訪問するから、其の時打合せをしたい。――

大略斯う云ふ事柄が、こま〳〵と書き綴られてあつた。「出奔」と云ふ文字を見た時、幸吉はふと、去年の暮れの自動車を想ひ出した。二人はまだあの自動車に乘つて、何か知ら遠い所へ運ばれつゝあるやうな氣がした。「出奔」に依つて、二人は正しく完全に二人の世界を作る事が出來る。」――彼はそんな事を思つた。

けれどもやがて此の妄想は、悲しく淋しく彼の胸に消えて行つた。出奔！其の行動はいかにも勇ましい、いかにもロマンチックである。しかし、出奔の後に來るものは何であらう。美しい死か、荒凉たる生か、二つのうち孰れかでなければならない。彼等は果して、相抱いて、安んじて死ぬ事が出來るであらうか？彼の女は杉村の狼狽を見んが爲めに、復讐の手段として暫く出奔するのだと云つた。

さうして見れば、幸吉は其の手段に使用される道具に過ぎない。殊更幸吉を擇ばずとも、杉村以外の男なら、誰と出奔しても復讐の目的は達せられる。到底彼の女が輕々しく命を捨てない事は明かである。斯くて二人が一と月なり二た月なりを經過した後、どんな結果に到達するであらう。彼等の世界はいつまでも完全に、破壞されずに繼續するであらうか。兩親の干涉、社會の制裁、さう云ふ物が忽ち彼等の生活を妨害して、彼等は無理やりに、再び枯淡な現實の世界へ引き戻される。さうなつてから、二人は萬難を排して飽く迄も同棲する事が出來るであらうか。たとひ同棲するとしても、出奔以前のやうな緊張した戀愛を味ふ事が出來るであらうか。彼の女は旣に復讐の目的を達した。充分に面白い美しい夢

を見た。道具に使用された幸吉は、もはや彼の女に何の必要もない。何の感興も與へない。斯くして、幸吉の捨てられる時が來るのだ。……思ふがまゝに行動して、思ふがまゝに我意を徹して、彼の女は嘸愉快であらう。しかし、幸吉に取つては、我から戀の最後を急いて、わざわざ破滅を招くやうなものてある。一旦杉浦に打ち勝つたところて、やがて自分も同じ運命に陥るのてある。

けれども、若し彼が出奔を承知しなかつたら、彼の女は何と云ふてあらう。事件は更に急轉直下しないてあらうか。……幸吉は其の晩とうとう眠られなかつた。

明くる日の朝、彼の女は例になく俥を飛ばして尋ねて來た。部屋へ這入ると、袂のかげに隱して居たメリンスの風呂敷包みを靜かに疊の上へ置きながら、

「手紙を讀んて？」

と云つた。

男は其の包みを見ると、今から直ぐに出奔するやうな遽しさに襲はれた。

「手紙は讀みました。ほんたうに逃げるんてすか。」

彼の女は苦い水を嚥下するやうに、唇を歪めて深く頷いた。

「ほんたうに？」

「うそぢやなくつてよ。いろいろ考へて見たけれど、それが一番いゝと思ふわ。さうすれば杉村だつてあきらめるだらうし、あなたと結婚する事も出來ますから。」

「結婚なんて、……そんなことを今まで仰つしやつたことはないぢやありませんか。」

「一緒に逃げる以上は、どんな事があつても結婚するわ。さうして、杉村を驚かしてやるわ。」

彼の女の眼は美しい想像に充ちて、得意らしく輝いて居た。結婚？　彼の女は恐らく本當に結婚する積りなのであらう。現在のところでは、決して男を欺す氣はないのであらう。しかし、其の氣持ちがいつまで續くか、彼の女自身も確實に保證する事は出來まい。

「だけど、若しも結婚する事が出來なかつたらどうするんです。」

「出來ない筈はなくつてよ。さうなれば兩親だつて、仕方がないから承知するに極まつて居ますもの。」

「けれども、萬一承知して下さらなかつたらどうするんです。」

「そんな筈はなくつてよ。大丈夫よ。」

「僕には其れが不安心でなりません。若しも結婚が許されなかつたら、あなたは僕と一緒に死んで下さるでせうか。」

「えゝ、死んでもいゝわ。」

彼の女は恐い物を見せられたやうに、伏し目がちに俯向いて了つたが、やがてまた顏を擡げて、

「だけど全くそんな心配はなくつてよ。もう必ず承知するにきまつて居るんですもの。二人で逃げ出して一緒になれたら、どんなにあたしは仕合せだか知れませんわ。」

「出奔するのは結婚の爲めなんですか、杉村へ對する面當の爲めなんですか、一體どつちが本當の目的

なんてせう。」

「なぜそんな事を仰つしやるの？　あなたさへ居なければ、あたしは兩親の云ふなり次第に誰とでも結婚しますわ。何もこんな騒ぎをして、杉村に面當をする必要はないぢやありませんか。あなたは此の頃、餘つぽど疑ぐり深くなつたはね。」

「だつて、みんなあなたがこんなにさせてしまつたんです。」

彼の女が少しでも強さうな態度を示すと、幸吉は直ぐにおどおどして、媚び諂らつたり、訴へたりする。——それが近頃の習慣になつて、格別二人とも怪しまなかつた。寧ろ二人は此の習慣を痛切に喜んで、恰も芝居を演ずるやうに、機會さへあればそんな眞似を繰り返した。

「疑ぐり深いのも時によるわ。それともあなたは一緒に逃げるのがお嫌なの？」

「さうぢやありませんけれど、………」

「きッとさうだわ。さうに違ひないわ。あたしが杉村と結婚したつて、あなたは何とも思はないのね。」

聞くより早く幸吉は眼を潤ませて、恨めしさうにぢッと相手の顔を睨んだ。さうして、さもいぢらしく打ち委れて、憐れみを求める如く女の膝へ手を載せながら、

「後生だからそんな事を云はないで下さい。杉村と結婚したら、あたしは生きて居られませんから。……」

「嫌なものを無理に逃げて下さらなくつてもいゝ事よ。ななたの方にもいろいろ御都合がお有りですわね。」

彼の女は細い眦を凛々しく吊り上げて、男の泣き顔を冷やゝかに睨み返したが、其の表情は忽ち崩れて、直ぐに嬉しさうな、勝ち誇つた微笑が眼元にも口元にもこぼれて來た。二人は明かに自分達の擧動が芝居じみて居る事を感じつゝ、お互ひに泣いて見せたり怒つて見せたりした。殊に、わざとらしい男の諂諛には不思議な魔力が籠つて居て、彼の女は到底其の誘惑を制する事が出來なかつた。丁度人間に馴らされた猛獸が、一旦生血の味を覺えると、忽ち今迄の習慣を忘れて獰惡な野性を發揮するやうに、彼の女はだんだん意地のわるい、殘酷な遊戯を喜ぶやうに變化して行つた。幸吉は時々、自分の刺戟がいかに有力に、いかに根本的に、彼の女を變化させつゝあるかを考へて、竦然とする事があつた。

「あたしだつて逃げるのは嫌ぢやないんです。けれども何だか、其れがあなたに捨てられる前兆のやうな氣がしてならないから、……………」

「捨てる積りなら逃げやしなくてよ。そんな事を云つて、あたしと結婚するのがお嫌なら、どうても勝手になさるがいゝわ。」

彼の女はほんたうに怒つたらしかつた。出奔すると云へば、一も二もなく喜んで、自分の命令通り動くてあらうと見くびつて居た男の心が、案外にも冷淡で頑固である。少しぐらゐ怒つても威嚇かしても、口先ばかり柔順を裝つて居る。それが彼の女には口惜しかつたが、以前のやうに下手に出ようとはしなかつた。やつぱり何處までも威嚇して、散々泣き顔を眺めた上、思ふ存分に屈服させて了ひたかつた。

「あなたがさう云ふ考へなら仕方がないわね。――そんならあたし、もう歸るわ。」

「三千子さん、待つて……」

男はあわてゝ袂を捕へたが、彼の女は其の手を邪慳に振り拂つて立ち上つた。それでも幸吉は執念くおづおづ追ひ縋つて、今度は兩手で裾のまはりにからみ着いた。さうして、相手の鼻息を窺ふやうに、と美しい立ち姿を見上げた。

「何か逃げるのが嫌だつて云やしないぢやありませんか。もうどんな事でも云ふ事を聞きますから、歸らないで下さいな。」

「云ふ事を聞くなら此の手を放して頂戴。」

「放しますから、歸らないで下さいな。」

さう云ひながらも、幸吉はまだしがみ着いて居た。

「あなたはまるで女見たいね。嫌なら嫌で男らしくキッパリとさう仰つしやいな。どつちにしても、あたしはもう此處に居る必要はないと思ふわ。」

彼の女は徐ろに手を廻して、背後にしつかりと組み合はされた男の指先を、一本一本解いて行つた。さうして、それ程激しい抵抗も受けないのに、恐ろしい力で指を撓めながら、ところどころにわざと鋭い爪を立てた。

「逃げるのは少しも嫌ぢやないんですよ。たゞ逃げたあとで、若しもあなたに捨てられたら大變だと思ふもんですから、……………」

「だからよくつてよ。あなたの心はすつかり解つてよ。何でもあたしの云ふ事を聞くなんてみんな口先ばかりだわね。」
「いゝえ逃げます。きツと逃げます。あなたが逃げろと仰つしやれば、何處までゞも附いて行きます。」
「もう澤山だわ。無理にお願ひするんぢやないんですから。」
彼の女の眼元には、再び驕つた微笑が浮かんだ。
「逃げますよ、逃げますよ。あたしは本當に、あなたの云ふなり次第になつて了つたぢやありませんか。――ですからもう勘忍して下さいな。ね、ね、」
かう云ひながら、幸吉は彼の女の袂を引き付けるやうにして、强ひて自分の傍へ据わらせた。
「承知して下されば結構だけれど、あなたは其の實、逃げるのをちつとも嬉しいと思つて居らつしやらないのね。」
「逃げたが最後、いづれあなたに捨てられるにきまつて居るんですもの。」
「まだそんな事を云つて居るの。」
「ねえ三千子さん、逃げろと仰つしやればいつでも逃げますから、其の代り、必ずあたしを捨てないてね。」
「大丈夫よ。」
「それさへたしかなら、いゝけれど……………」

から云つて幸吉は、始めて嬉れしさうに眄を與へながら、又例の訴へるやうな調子で、

「でも何だか心配だから、若しかどうしても結婚する事が出來なかつたら、一緒に死んでくれませんか。それさへ約束して下されば、あたしも本當に安心しますから、………」

「そんな事は約束するまでもないぢやありませんか。」

「それでも兎に角約束して下さいな。」

彼の女は默つて頷いて見せた。

「ほんたうに死ねるでせうか？」

「死ぬなんて、あなたが念を押す程むづかしい事ぢやなくつてよ。いざとなつたら、あたしの方が餘つぽどたしかだわ。」

幸吉は彼の女の約束が一向あてにならない事をよく知つて居た。けれどもどうせ逃げるものならば、捨てられる前に彼の女を煽てゝ、一緒に死んで了ひたかつた。

一緒に死ぬ？、彼の奸計がうまく成功して、首尾よく彼の女を誘惑する事が出來るとしても、實際其れを遂行する勇氣があるだらうか？、幸吉は彼の女の決心を疑ふ前に、先づ自分の勇氣を測量して見なければならない。彼は常人以上に憶病である。どう考へても死の恐ろしさを忘れ得ない人間である。かりに忘れる事が出來るとしたら、それはやつぱり戀人の助けを借りるより外はない。

幸吉は不斷からこんな事を考へて居た。――人間は是非共一度死の恐怖に遭遇しなければならぬ。殊

に自分のやうな男は、老齡になつてから青年時代の惡業の報いを受けて、いかなる心身の苦痛に惱まされるか判らない。其れ故、若し何等の恐怖を感ずる事もなく、阿片に醉うて眠るやうに、一種のエクスタシーへ導かれながら死んで行く機會があるとしたら、さう云ふ時に早く死て了はう方が得策である。斯くて始めて、彼は自分の生の歡樂を完全にする事が出來る。彼は死の恐怖を知らないで死ぬ事が出來る。依然として生の歡樂に執着し、沒頭しつゝ死ぬ事が出來る。エピキユラスの言葉を借りて云へば、彼は永遠に「死」に遭遇しないで濟む。彼は絕對に幸福である。

このやうな幸福な境地は、容易に獲得する事が出來ないと同時に、全然不可能であるとは信じられない、若し、其の境地を開拓し得る機會が到來したならば、何を措いても其れに向つて猛進す可きである。さうして、幸吉は今や其の機會が近づきつゝあるやうに感ぜられた。手を延ばして其の機會を摑むか、空しく自分の身邊を素通りさせるか、其れは彼のやり方次第である。云ひ換へれば、彼の女と自分の間に生じた戀愛の炎を、成る可く強り煽り立てゝ、死に對するあらゆる恐怖、顧慮、逡巡を燒き捨てゝ了つたらどうであらう。いかに臆病な幸吉でも、其處まで行けば安樂に、恍惚として死ぬ事が出來るだらうと想像される。

戀愛と云ふものに、眞實其れ程の價値があるかどうかは疑問であるが、少くとも死を決行させる魔力だけは存して居るやうに思はれる。彼の女も幸吉も、眞面目になつて芝居を演ずる習慣に馴れて居る。眞實よりも幻影を貴び、自然よりも技巧を喜ぶ性癖に傾いて居る。今一歩を進めたら、幻影の爲めに生

命を捨てるのは、必ずしも不可能ではあるまい。斯くて立派に死に終せた時、世間は決して二人の行爲が「芝居」であつた事實を觀破することは出來ない。人々は生前の彼の女がいかに美しかつたか、いかに多くの男を惱ましたかといふ事などを語り合つて、二人の幻覺をいよいよ眞實にするであらう。二人は死んだ後までも、猶美しい假面を被つて、世間を欺き、欺かす事が出來る。萬一、誰か知ら事實の眞相を觀破したところで、世間は二人の「芝居」を嘲けり、「幻影」を罵る權威を持たない。何となれば、彼等は二人の幻影に勝る可き何等の價値ある「眞實」をも所有して居ないからである。――

　幸吉は是非共彼の女を唆かして、其の境涯へ突き落として了はうと思つた。彼は先づ大人しく彼の女に屈服して、徐ろに誘惑して行く手段を擇んだ。

「逃げるときまつたら、あたしもそろそろ支度して置きませうね。」

　かう云つた彼の女の調子は、「死」を覺悟した人間の言葉のやうではなく、いかにも樂しげな、他意のない口吻であつた。

「えッ、さうして頂戴よ。あたしも着換への着物がなくッちや困るから、知れないやうに少しづゝ此方へ持つて來るわ。」

　彼の女は先の風呂敷を解いて、大島お召の綿入を取り出した。嵩張るものを無理に小ひさく疊み込んで、その間に天鵞絨の指輪の箱が二つばかり潜ませてあつた。

　お金を澤山都合する譯に行かないから、こんな物を有りつたけ持つて行く積りなの。――さうしたら、

二三百圓はどうにかなるわ。」

と、彼の女は寶石を掌に載せて見せながら云つた。

「そんな物を持ち出して、内へ知れやしませんか。」

「知れやしなくつてよ。あたしの簞笥なんか、誰にも手を付けさせやしないんですもの。」

男は其の衣類を膝の上にひろげて、女の肉體を眺めるやうに、暫く柔かな糸の光りに見惚れて居たが、やがて押し入れの行李の蓋を明けて、自分が嘗て愛用した縞お召の下着と羽二重の長繻絆の間に其れを挾んだ。さうして、上からふつくらと鬱金の布を蔽ひ被せた。彼は二人が永劫に結び付く可きまぢないを行つたやうな心地になつた。

程なく二人は、いつものやうに連れ立つて旅館を出た。

「三千子さん、どうぞあたしの命をあなたの自由にして下さい。あたしはどんな目に會はされても、あなたに捨てられさへしなければ仕合せです。幸福な人間です。……」

其の日の午後の事である。男は熱に浮かされた病人の如く、其の唇から燃えるやうな言葉を續けざまに吐いては身を悶えて居た。

「どうぞあたしを非道い目に合はせて下さい。出來るだけ泣かせていぢめて下さい。あなたの手なら、

打たれても、縛られても、殺されても構ひません。……」

「今朝のやうに解らない事さへ云はなければ、いつまでも可愛がつて上げますわ。」

彼の女は子供をなだめるやうな調子で云つた。

五

二人は出奔の準備に忙がしかつた。

一週間ばかりの間、彼の女は隔日に男の許を訪れて、其の度毎に何か知ら預けて行つた。平生から派手作りな女の衣裝には、色合と云ひ、模様と云ひ、縞柄と云ひ、華やかな物が多かつた。或る時は眼の醒めるやうな縮珍の丸帶が運ばれた。或る時は精巧な友禪の長繻絆が持つて來られた。

男は其れ等の品物が、次第次第に殖えて行くのを樂しくも恐ろしくも眺めた。折々密かに行李の蓋を開いて、なまめかしい絹物を一つ一つ檢べて見ながら、最後の時にはあの繻絆を着せて、あの裾模様を纏はせてと、果てしもない想像に耽つた。彼の眼には、二人の「死」がさながら此の衣類のやうに美しく見えた。舊劇の舞臺に演ぜられるいろ〳〵の男女の道行きの服裝が、幾組も幾組も彼の頭に泛かんだ。

「どうしたらば一番安樂に、苦痛なしに死ねるであらうか？」

彼は又そんな事を思つた。

匕首、剃刀・短銃、毒藥、……瀧壺、噴火口、湖水、溫泉、寢臺、……あらゆる兇器と方法とが、一と通り彼の考慮に上つた。彼は冷酷な自然に包まれて死ぬよりも、やつぱり贅澤な室内の裝飾を背景にして死にたかつた。血を見ないで死ぬと云ふ事も、彼には何となく淋しく感ぜられた。夥しい鮮血に彩られて、それ程苦悶の姿を遺さずに、明かるい電燈の光の下で眠る事が出來たら、それが最も望ましかつた。

ふと彼は、手頸の動脈を切つて、奏樂の音を聞きながら靜かに死んで行つたクヲー、ヴヂスのペトロニアスを想ひ出した。あの死に方が何等の苦痛をも伴はないと云ふ話は、前から度び度び聞かされて居た。

「あの方法が一番いゝ。あれならば自分の望み通りだ。」

と、彼は獨りて頷いて、そッと手頸の脈搏を抑さいて見た。何か鋭利な、ひやりとした刄物て、一と思ひに此の血管を斷ち切る事は、さほどの難事とも覺えない。それても萬一、自分て切る事が出來なかつたら、互ひに手と手を出し合つて、切り違へればよいのてある。

男は斯う云ふ決心を抱いて、半月ばかりを過ごしたが、彼の女の結婚問題は豫想した程に急迫して來なかつた。彼の女は最初の誓言にも似ず、十日程かゝつて二た組の二枚襲の衣裝を運んだきり、其の後はあんまり荷物を持つて來なかつた。

「三千子さん、まだ羽織が一枚も來て居ませんね。」
或る時幸吉は、こんなことを云つて其れとなく催促した。
「えゝ足りないものは澤山あるけれど、包みにすると嵩張るもんだから、なかなか持ち出しにくいの。」
「だつて指輪やなんかなら、そんなに嵩張りやしないぢやありまんか。」
彼の女は寶石類を有りッたけ持つて逃げると云ひながら、まだ二つしか届いて居なかつた。
「そりやさうだけれど、内に居る間はやつぱり時々入用な事があるの。……逃げるまでには少し間がありさうだから、そんなに急かなくつても大丈夫だわ。」
「いざとなつてから、一時に持ち出すのは尚大變ぢやありませんか。指輪にしろ、笄にしろ、夏にてもならなければ入用のないものが澤山有るでせう。斯う云ふと勝手な樣ですが、若しもの時の用心に成るたけ金目な物を持つて逃げるやうにして下さいな。」
幸吉はいくら工面しても、自分の力で二百圓以上の金額は到底調達出來さうもなかつた。さうかと云つて、二人の旅行は飽くまでも花々しい、誰に見せても耻かしからぬ體裁を保ちたいと思つて居た。結局彼は、どうしても女の所持品に頼るより外仕方がなかつたのである。
「まあ追ひ追ひに持つて來るから、心配しなくつてもいゝ事よ。」
「金」と云ふ實際問題に行きあたつて、俄かに不愉快を覺えたらしく、彼の女は男の言葉を強ひて壓さへつけて了つた。

「追ひ追ひに持つて來る。」——この返答は其の場限りで、一つも實行せられなかつた。幸吉が焦れば焦るほど、彼の女はだんだん落ち着いて來た。斯くて約束の一ヶ月は空しく過ぎて、二月の半ばとなり、方々の梅が咲き綻びる季節になつた。

彼の女は屢々幸吉を「梅見」に誘つた。向島や、龜井戸や、木下川筋や、大森蒲田や、どうかすると汽車に乘つて鎌倉邊まで出向いて行つた。女の男を愛撫する事は、少しも昔と變らないのみか、日を趁うてますます深くなるやうであつた。それにも拘らず、彼の女はもはや「出奔」の計劃を忘れたやうに呑氣になつた。

「あなたね、たまにはあたしの內へも尋ねて來た方がよくつてよ。」

百花園の梅を見た歸りに、大河の水のほとりの小座敷で晝飯をしたゝめた時、女はふとこんな事を云ひ出した。

「あたしの方から尋ねて行つたら、都合が惡かないんですか。」

出奔の相談が成り立つて以來、幸吉は杉村に感付かれる事を恐れて、あまり愛宕下の家を訪問しなかつたのである。

「別段構やしなくつてよ。姉さんなんか、此の頃山本さんはどうなすつたんだらうなんて、頻りにさう云つて居るんですもの。ちよいちよい內へ遊びに來た方が、戶外で誰かにぶつかつた時にも、却つて具合がいゝと思ふわ。」

「だつて、此の人が何とか云やしないの?」

から云つて、幸吉は火鉢の灰へ「スギムラ」と片假名の名前を書いて、あわてゝ、其れを掻き消した。

彼の所業(しよさ)や言葉遣ひは、その頃全く女のやうになつて了つて居た。

「何を云つたつて構やしないわ。——それにね、杉村は此の頃すつかりあたしに欺(だま)されて、結婚するものと信じ切つて、成るだけ機嫌を損じないやうに遠慮して居るらしいの。だからなんにも云へる筈がないわ。」

「あたしゃ杉村によく似て居ますね。」

「それでもあなたは可愛くつてよ。」

と、彼の女は笑つた。

こんな樂しみに打ち紛れて、幸吉もあまり出奔を催促する事が出來なかつた。もと〳〵彼の女は出奔と云ふ花やかな芝居を夢みて、大した必要に迫られてゝ居ないのに、殊更波瀾を起して見たかつたのではあるまいか。所謂結婚問題も、相手に嫉妬を催させる計略であつて、あとかたのない虛構の事實ではあるまいか。果してさうだとすれば、今暫く樣子を見ながら、時節を待つた方がいゝ。——さう思つて、男も割合ひに安心して居た。

六

幸吉は久し振りて愛宕下の家を尋ねた。二月の末の、珍しくうらうらとした、春らしい日和の午後てあつた。

「まあ、お珍らしいこと！」

玄關に出て來た嫂は、元氣な聲て、吃驚したやうに反り返つたが、

「さあどうぞお上り三千ちやんは此の頃出てばかり居るんてすけれど、今日は好い鹽梅に宅に居りますの。」

から云つて、彼を二階へ案内して行つた。

「ほんとに御無沙汰致しました。」

「いゝえ私共こそお尋ねしようと存じながら、ついつい御無沙汰しちまつて。――妹ても伺へば宜かつたんてすが、あの通り氣紛れな人だもんてすから。……」

梯子段を上りながら、彼の女はこんな言ひ譯をした。幸吉は何と答へていゝかわからないので、唯「いゝえ、いゝえ、」を繰り返した。さうして自分に對する不祥な空氣が何となく家の中に行き亘つて居るやうに感じた。

「三千ちやん、珍らしい方がお見えになつてよ。」

彼はドーアの前に立つて、把手を掴みながら聲を掛けた。

「どなた？、お這入んなさいな。」

と室内の返辭は直ぐに聞えた。

扉を明けると、中には彼の女と杉村とが少し離れて坐を占めて居た。今しがた學校から歸つて來たばかりの男は、制服のまゝ窓に腰かけて居たが、幸吉を見ると立ち上つて、慇懃に手をさし伸べつゝ、

「さあこちらへ。」

と云つた。それから鄭寧に畳へ兩手をついて、

「どうも暫らく御無沙汰しました。」

と、切り口上で挨拶をした。それ等の擧動が、凡べてビジネス、ライクな、そつけない顔つきて、云はゞ會社の應接室で取り交はす禮儀のやうに冷めたかつた。三千子をさし置いて自分が先に挨拶する工合や、獨りて客を饗さうとする素振りや、杉村の態度にはもはや以前のおづおづした調子がなくなつて、何となく近き將來の「夫」を以て自任して居る風があつた。

「三千子さん、今日は。」

から云つて、幸吉は訴へるが如く彼の女を見た。「せめてあなたから優しい言葉を掛けて下さい。」——そんな意味が、便り無げな彼の眼つきにありありと溢れて居た。

「今日は。」

と答へたきり、再び堅く結ばれた彼の女の唇には二人の男の對照を興がるやうな薄笑ひが漂つて居た。

男は其の唇に兩手の指を分け入れて、貝の蓋を開くやうに、無理にも口をきかせてやりたかつた。

「三千ちやんも隨分暫らくお目にかゝらなかつたでせう。お正月に入らしつた切りだわね。」

「いゝえ、あたしは二三日前に會つたばかりだわ。」

彼の女は嫂を尻目にかけて投げ付けるやうに云つた。

「あらさう。いつお尋ねしたの。」

「この間一緒に浦田へ梅見に行つたの。たしか姉さん御存知の筈ぢやなくつて。」

「いゝえ、知らないわ。そんな話を、あたし三千ちやんから聞いた覺えはなくつてよ。」

「あたしが云はなくつても、知つて居る筈よ。ほんとに姉さんは空ッ惚けるのが名人ね。」

「いつあたしが空ッ惚けて?」、名人はお門が違ひましよ。」

二人は互ひに知らじらしい顏をして、冗談半分に云ひ爭つた。

「もうわかつたから、仲直りしませうね。」

嫂が斯う云つても、彼の女はなかなか承知しなかつた。

「知らないわよ、あたし姉さんのやうな嘘ッつきは大嫌ひ!」

「そんならたんとお嫌ひなさいよ。三千ちやんに嫌はれたつてちつとも恐かないわ。」

妹は少しムキになつたが、姉は何處までも落ち着いて、にやにや笑ひながらあしらつて居た。

「あたしが居ると喧嘩になるから、またあとで來ませうね。――山本さん、それではどうぞ御ゆつくりなすつて。」
「まあ姉さん逃げなくつてもよくつてよ。もつと話して入らつしやいよ。」
娘の出て行つたあとを眺めて、彼の女は甲高い聲で云つた。さうして、
「ほんとに姉さんは陰險だわ。」
と呟きながら、獨りて怒り散らして居た。あとの二人は互ひに氣まづい胸を抱いて、默つて火鉢に手をかざした。
梅見の一件をどうして娘が「知つて居る筈」なのか、何故に彼の女は憤慨するのか、幸吉にはさつぱり理由がわからなかつた。兎に角、自分も彼の女も、此處の一家族の人々から既に「注意人物」として取り扱はれて居る事だけは、ほゞ明瞭のやうに感ぜられた。
「山本さん、此の間二人て大森へ行つた時ね、……」
彼の女はやがてせいせいしたやうに、物柔かな調子に戻つて、
「……あたし達ちが品川の電車へ乘るところを、此の人が見たんてすつて。」
から云ひながら、指先て杉村のカフス釦をぽんと彈いた。
「見た事は見たけれど、其れを姉さんが知つて居る筈はない。」
「うそよ。あなたのおしやべりが云ひつけない筈はなくつてよ。」

「冗談でせう。……」

と云つて、杉村は追窮を避けるやうに横を向いた。

「うそをつかない方がよくつてよ。云つけたか云つけないか、姉さんの顔色で大概あたしには解つて了ふから。」

「もうお止しなさいよ。山本さんに對しても失禮ぢやありませんか。」

「その失禮な事をあなたがしたんだわ。」

杉村は少し狼狽へて、頰のあたりを耻かしさうに赧く染めながら、

「しかし僕だつて、人の迷惑になる事を喋舌りやしませんよ。」

「喋舌られたつてあたしはちつとも迷惑ぢやないわ。何も惡い事をしたのぢやないんだから、云つけたら云つけたて差支へないわ。――それをあなたが變に隱すから可笑しいと思ふの。どうぞ御遠慮なく云つけて頂戴な。」

「三千子さん、僕を誤解してくれちや困ります。僕はあなた方の事を何とも思つて居やしないんです。――たとへ姉さんに云つけたところで、僕に取て何の利益もないぢやありませんか。」

「どうだかわからないわ。少しはあなたの利益になるかも知れないと思ふわ。」

「そんなに邪推された日には、てんで話にならない。」

彼は煮え切らない、薄氣味の惡い苦笑ひをした。

「三千子さん、もう解つたからいゝぢやありませんか。」

と、幸吉は自分の勇氣を引き起すやうに口を開いた。さうして、何處までも厚かましい心になつて、わざと爽やかな、快活な辯舌で言葉を續いた。

「……あなたの仰っしやる事も立派にわかつて居るし、杉村君だつて僕等を誤解して居る筈がないぢありませんか。」

「あはゝゝ」

と、杉村は輕く笑つて、

「もうほんとに止しませう。山本さん、どうぞ惡く思はないで下さい。三千子さんのやうに云はれると、僕は全く立つ瀨がありませんよ。」

「一體女と云ふものは邪推深くつていけませんね。そんな下らない事をいつ迄も喧嘩して居られると、第一僕がお宅へ伺へなくなつて了ひます。」

「いゝえそんな事はありませんよ。そんな事をなすつちや、却つて僕が困りますから、どうぞ此の後も是非お遊びに入らしッて下さい。わからない癖に、僕も文學の話は好きな方ですから。」

「山本さん、此の人の云ふ事なんかあんまりあてにしない方がよくつてよ。」

「あはゝゝゝ」

と、彼はもう一度同じやうに笑つて、

「どうも大變風の吹き廻しが惡るござんすね。――どれ、着物でも着換へて來よう。」
かう云つて外の廊下へ出て行つたが、其の顏つきには氣の毒な程面喰(めんくら)つた色が見えた。
「梅見の事がわかつてから、大分杉村はをかしいのよ。」
彼の女は囁くやうに云つた。
「……其の癖外の人が見て居ると、いやに空ッ惚けて、負け惜しみばかり云つて居るから、ほんとに癪に觸つちまふわ。」
「やつぱりさうなの？、――そんならあなた、もつといぢめてやればいゝのに。」
女の態度に力を得たのか、幸吉の眼は嬉しさうに輝いて、誰れ憚からぬ差し向ひの時機を待ち焦(こが)れて居たものゝ如く、忽ち平生のやさしい言葉遣ひに復(かへ)つた。
「だつてあなたが餘計な口を出して、仲裁なんかするから惡いわ。」
「仲裁したんぢやありませんよ。わざとあゝ云つてからかつてやつたんですよ。――今に又やつて來たら、うんと困らしてやりませうね。」
「あなたが歸つて了ふと、今夜はまた大變よ。此の間の晩だつて、梅見の事を根掘り葉掘りして、嫉妬(やきもち)を燒いたり、泣いて賴んだり、大騷ぎだつたわ。」
「毎晩そんなに杉村と話をなさるの？」
男は直ぐに聞き咎めて聲を曇らせた。

「話ぐらゐしたつて仕方がないぢやありませんか。何も心配な事はなくつてよ。」

よもやとは思ひながらも、やつぱり幸吉は杉村の事が氣に懸つた。自分が此の坐敷へ這入つて來た時、二人が靜かに對坐して居た樣子だの、表面だけでも杉村が威厳を保たうとする素振りだの、疑ぐつて見れば際限のない不安に襲はれる。

「……だけどさうして居るうちに、だん／＼杉村が良くなつて來やしませんか知ら。」

其の時こつこつとドーアを叩く音が聞えた。

「どうも先程は失禮いたしました。山本さん何もございませんが、お茶受けの代りにお一つ召上つて……」

から云ひながら、嫂が餡の皿を持つて這入つて來たのである。

七

愛宕下へ尋ねて行けば、嫂も杉村も如才なく幸吉を歡待する。それにも拘らず彼は何となく氣が咎めて門の前まで行きながら、三度に一度は引き返した。

「杉村は疑つて居るけれど、姉さんは『まさか』と思つて居るらしいの。だから遊びに來たつて構やしないわ。」

彼の女は頻りに其の心配を打ち消したが、幸吉はどうしても油斷がならないと思つて居た。

「山本さんと杉村さんと、御亭主にしたらどつちが優しいだらうか知ら。」

二人の居る前て、嫂は時々こんな事を妹に聞いた。

「山本さんは大分道樂をなすつた方ね。どんなに濟まして居らしつても、遊んだ方は何處となく判るから不思議よ。――ねえ山本さん、ちつと藝者の話でもお聞せなさいな。」

などゝも云つた。彼の女は次第に幸吉に近づいて、すつかり馴れて了つた。

或る時、彼の女は歌舞伎座の「連中」の切符を二枚持ち出して、

「三千ちやん、此れが餘つて居るんだけれど、明日山本さんと御一緒に入らッしやらなくつて？　あたしは少し用事があつて出られないから。」

かう云つて、わざと杉村の事を何とも云はなかつた。

「えゝ行くわ。」

と、三千子も無雜作に答へた。

「なんてせうね、山本さんと三千ちやんと芝居なんかへ出かけると、好い御夫婦のやうに見えるてせうね。」

「ほんとよ、よく人にさう思はれるのよ。あたしにやちつともそんな氣がしないんだけれど。」

「なんかんて、其の實大いに嬉しいんぢやなくつて？」

こんな事まで嫂は云ふやうになつた。

一概に陰險な婦人だと思ひ込んで居た幸吉には、だんだん嫂の性格が解らなくなつて了つた。彼の女はどうしても二人の關係を知り拔いて居るやうに見える。若し本當に妹の身の上を案じて、品行の監督をして居るのなら、何とかして幸吉を遠ざけるのが至當である。いくら妹が我が儘でも、默つて捨てゝ置いたら、姉の義務が濟まない筈である。それだのに彼の女は、をりをり皮肉を云ふぐらゐで少しも干渉しないばかりか、どうかすると油を掛けて唆かすやうな態度を取る。惡く云へば、妹の不品行を面白がつて居るかとも思はれる。彼の女は案外物のわかつた、度量の大きい婦人かも知れない。他人の事は他人の事として靜かに傍觀するやうな、覺め切つた女かも知れない。——幸吉は自分の都合のいゝやうに解釋して、知らず識らず安心して了つた。

二月が暮れて三月になつた。二人の行動は公然許されたものゝ如く日増しに大膽になつた。

「事に依ると杉村の婚約が破談になるかも知れなくつてよ。」

彼の女がかう云つて幸吉を喜ばせたのは、其の月の十日ごろの事である。

「尤も其れはよくわからないけれど、大概うまく行きさうなの。——あの人はね、今迄隱して居たけれど、實は花柳病をやつて居るらしいの。あれて道樂をしたのかと思ふと、ほんとに驚いちまふわ。」

其の話に依ると、一昨日の晩彼の女が杉村の机の抽き出しを明けた時に、中から妙な藥の壜が出たのださうである。今迄正面から父に反對す可き口實に窮して居た彼の女は、此の事實を成るだけ大袈裟に

吹聽して、是非とも杉村を放逐してやろと云つた。

幸吉は單純な、無邪氣な、思慮のない娘のやうに唯譯もなく嬉しがつた。さうして、其の後彼の女が駿河臺を訪れる度毎に、

「杉村の病氣の事はどうなつたの。いよいよ本當なの。」

と、執拗く念を押した。

「えゝもうたしかよ。やつて居るに違ひないわ。」

「ずだお父さんに云つけないんですか。」

「其のうちに折を見て云つけてやるわよ。」

「なぜ早く云つけないの。今夜歸つたら、直ぐに云つけておやんなさい。ね、ね。」

「あたしのお父さんは機嫌買ひだから、いゝ折がないとなかなかむづかしいわ。近いうちに云つけてやるから、もう少し待つた方がよくつてよ。」

こんな事を云つて、彼の女は再三幸吉を宥めた。

男の手許に預けてあつた冬の衣裝は、其の頃少しづゝ彼の女の家に運び返された。此の調子なら出奔の必要もない、あつたところでもう綿入は不用であらうと云ふ事に、二人の意見は一致した。着物が運ばれ、帶が運ばれ、長襦袢が運ばれて、最後の荷物が持つて行かれる時、それでも男は淋しさうな顔をして、何か殘してくれろと云つた。

「そんな此れを置いて行くから、誰にも見せずに始終持つて居て頂戴な。結婚するまで預けて置くから、決して人に見せるんぢやありませんよ。」

から云つて彼の女は指輪を一つ殘して行つた。男は其れを布に包んで紙入れの底へ收めた。さうして、何處へ行くにも肌身放さず持つて歩いた。

かゝる間にも、二人は平穩無事な戀愛に滿足する事が出來なかつた。女は男を完全に絶對に征服して、忠實な自分の奴隷として了はなければ承知しなかつた。どんな重大な、又どんな輕微な事柄でも、一々自分の言葉通りに動くやうに男をしつけた。何處まで男が自分の命令を遵奉するか、それを試して見たいやうな好奇心に襲はれて、屢々意地の惡い戯れをした。幸吉の前で殊更杉村と仲よくして、嫉妬に燃ゆる男の泣き顔を眺める事が、彼の女には最も愉快な遊びらしかつた。彼の女の「芝居」は漸く殘酷に、突飛に、狂暴に流れて行つた。二人は全く生れ變つたやうに、白痴の如く、蠻人の如く非常識になつた。

「杉村さん、あしたの晩二人で帝劇へ行きませうね。」

彼の女にこんな事を云はれると、「おどかし」とは知りながら、嫂や杉村の前をも憚らず、幸吉はすぐに涙ぐんだ。

「山本さんも此の頃はすつかり三千ちやんに頭が上らないのね。」

と、嫂は嘲るやうに云つた。

「あたしは山本さんを泣かすのが名人よ。ほら、ほら御覽なさい。もうそろそろ涙が眼に一杯溜つて來たわ。

から云つて彼の女は幸吉の顏を指さしたりした。

男は自分の醜態を意識しながら、其れを制する事が出來なかつた。彼の女の爲めに自分が此れ程白痴になり、盲目になり得たかと思へば其れが樂しくてならなかつた。さうして、彼の女が自分と同じやうに次第々々に荒んで行くのが、何よりも痛快であつた。

八

二人の關係は、もう嫂にも杉村にも明かな筈であるのに、彼等は相變らず幸吉を疎まなかつた。再び堪へ難い不安が幸吉の胸に萠して來た。彼の女は散々自分を弄んだ末、近いうちに杉村と結婚する默約があるのであるまいか、されぱこそ、嫂も杉村も目下の我が儘を見逃して居るのではあるまいか。

「三千子さん、杉村の病氣の事はどうなつたの?、心配だから早くして下さいな。」

から詰つても、彼の女はいつも同じ挨拶を繰り返すばかりである。

飜弄されると知りながら、幸吉は燃えるやうな嫉妬を抱いて、三日にあげず愛宕下の家へ、彼等の樣子を窺ひに行つた。彼の顏を見さへすれば、彼の女はわざと杉村を呼び寄せて自分の傍へ据わらせるやうにした。

或る日の事であつた。彼の女は幸吉を前に置いて、そ知らぬ風で二三十分杉村と話をした揚句、

「杉村さん、あたし此の頃千里眼になつたのよ。」

と云つた。

「さうですか、そんなら僕の懐ろに何があるかあてゝ見ませんか。」

と、杉村が云つた。

「それがね、あたしを何とか思つて居る人の物でなくつちや中たらないの。あなたはあたしを嫌つて居るから駄目よ。」

から云つて彼の女はぢろりと幸吉を見ながら、

「山本さんはあたしを思つて居てくれるわね。――あなたの懐ろにあるものを云ひますから、中つたらどんな物でも此處へ出さなくつちやいけなくつてよ。」

幸吉はギヨッとして僅かに頷いた。

「あなたの懐ろの紙入れの中に、たしか女の指輪が這入つて居る筈よ。それを此處へ出して頂戴な。」

「そんなものありません。……」

彼は俯向いて、小ひさな聲で云つた。

「ない筈はなくつてよ。――それともほんとにないのなら、あなたは此の間の約束を反古にしたのね。いゝわ、そんならあたしにも考へがあるから。」

「だつて外の人には誰にも見せるなッて約束なんてすもの。」

「何でもいゝから、あたしが出せと云つたら出したら宜かないの。それとも云ふ事を聞かない積りなの。」

「それぢや又あとで返して下さいな。」

「まあ鬼に角此處へ出すのよ。」

彼の女はわなゝく男の掌から、光る物を指先に摘まんだ。さうして、

「ちよいと此れをあなたに借して上げませうね。」

から云つて、杉村の右の中指を捕へて、其れを揉み下ろすやうにしたが、大柄な彼の女の指輪は、男の手にも比較的樂に箝まつた。

「随分あなたの指は太ござんすね。」

「杉村さんに丁度いゝわ。暫く貸して上げませうか。」

「えゝどうぞ願ひます。」

杉村は冗談のやうに云つたが、それでも嬉しさうな色が見えた。

ぽたり、と、涙が幸吉の膝に落ちた。見る見る彼の脣は顫え、眉根は戰いて恰も子供が泣き出さうとする瞬間のやうな、哀れな、意氣地のない表情になつた。その歪んだ顔つきを、彼の女はにこにこ笑ひながらつくづくと眺め廻した後、とうたう溜らなくなつて兩手を口にあてゝ、ぷッと吹き出して了つた。

「杉村さんに上げようと思つたけれど、あたしやつぱり返して了ふわ。あなたなんぞよりもッと大事な

人があるんだから。」

何と思つたか、彼の女は再び杉村の手頸を捕へて、わざ〳〵邪慳に指輪を奪ひ取つた。

「考へて見たら、あなたなんぞに指輪をやるのは嫌な事たわ。正直を云ふと、あたしはあなたが大嫌ひなの。だから、さッさと此處を出て行つて頂戴よ。」

杉村は吃驚しながらも、相手が何處まで眞面目だかわからないので、

「おやおや。」

と、頭を掻きながらまごまごして居た。すると彼の女はいきなり彼の肩先を摑んで、

「さあ、出て行つて頂戴よ。」

と、無理やりにドーアの外へ突き飛ばした。

「三千子さん、もう指輪を返して下さいな。」

さし向ひになると、幸吉は堪へ兼ねたやうに云つた。

「まあ二三日預かつて置くわ。」

「さうして杉村にやる積りなの？」

「大丈夫よ、あんな人にやりはしなくつてよ。いやに氣取つて居るから、さッきはちよいと欺かしてやつたの。」

「そんなら返して下さいかねえ。」

「あなたはどうしてそんな泣き蟲になつたの。ほんとに面白い顏をするのね。」

彼の女は暫く幸吉を焦らしたが、それでもやがて指輪を返してやりながら、

「心配しなくつてもいゝ事よ。あたしはやつぱりあなたの方が可愛いのよ。」

と云つた。

彼の女の惡戯はさし向ひの場合よりも、杉村や娘の見て居る時の方が、却つて餘計甚しかつた。

「杉村さん、此の人はあたしの云ふ事ならどんな事でも背かないのよ。ほんとに感心よ。」

から云つて、いろ〳〵と馬鹿氣た事を云ひつけたりした。

其の癖彼の女は幸吉を嫌つて居るのではないらしかつた。

「又あした遊びに入らッしやいな。きッと來なくつちやいけなくつてよ。あたしはあんまり駿河臺へ行かれませんから、若しも會ひたかつたらばあなたの方から尋ねて來るのよ。」

などゝ云つて、只管彼を弄ぶのを喜んで居る風があつた。しかし、例の指輪は其の後何度も取つたり戻したりした揚句、とうとう最後に取り上げて了つて、再び返さうとはしなかつた。

或る日の夕方、彼の女は珍しくも駿河臺を訪れて、變に嬉しさうに笑ひながら、こんな事を云つた。

「今日はあなたにお願ひがあつて來たの。――今夜一つ探偵になつて、杉村の樣子を搜つて貰ひたいの。」

「杉村がどうかしたんですか。」

「なんても此の頃何處かの女學生と關係して居るのよ。此の間女文字の手紙が届いたから、變だと思つ

でそッと讀んで見たら、今夜の八時ごろに日比谷公園の藤棚の下でお目にかゝりたいッて書いてあるの。だからあなた濟まないけれど、其の時分に出かけて行つて、様子を搜つてくれなくつて?」

「へーえ、ほんとに驚きましたね。今度は杉村を追ひ出す事が出來るんですね。」

幸吉は飛び立つやうに喜んで云つた。

「證據が上ればそりや無論だわ。――一體女學生と云ふのは何處の女だか、それを第一につきとめて貰ひたいの。それから二人が藤棚の下で落ち合つて、一緒に何處へ出掛けるか、そんな事もよく調べて、――あした内へ知らせに來て頂戴な。」

「承知しました。――だけど杉村は馬鹿な男ですねえ。見す見すあなたに嫌はれるやうな事をして、――」

「きッとあたしなんかより、其の人の方がいゝんでせうよ。」

「いゝえ馬鹿ですよ。此の世の中にあなたよりいゝ人はありやしませんもの。」

かう云つて、幸吉は今更のやうに惚れ惚れと彼の女の顔を眺めた。

「そんならあたし用があるからこれで歸るわ。あした間違ひなく來て頂戴よ。うまく證據を握つて來たら、此の間の指輪を返して上げますから。」

「きッと返して下さいな。」

「えゝきッと返して上げるわ。それからね、杉村はさッき内を出る時、制服で角帽を冠つて出掛けたやうだから、氣を附ければ直ぐに判つてよ。」

彼の女の歸つたのは六時過ぎてあつた。

程なく幸吉はいそいそとして駿河臺を出た。いつぞや服部の時計臺の下で彼の女を待ち受けた時のやうに、同じ外套の襟を立てゝ、帽子を眼深に顏を隱しながら、丸の內の公園の夜の闇に紛れ込んだのは、大方七時半頃てあつたらう。月のない、眞暗な生暖い晩て、ところどころに靑く燈つて居る電燈の灯影を避けつゝ、幸吉は盜むが如く噴氷の響きの方へ近づいて行つた。果して！藤棚の下の、最も暗い陰に蔽はれたベンチに凭れて、角帽の男と今一人の女が睦まじげに腰を掛けて居た。双方の距離が四五間になつた時分、二人は人の近寄るけはひに心付いたのか、靜かに立ち上つて反對の暗い細い路の方へ歩いて行つた。

彼等の距離は更に一間ばかり短くなつた。其の時、先の女は杉村の手を捕へて、ぴたりと立ち停まつた。さうして、

「あたし達ちは後を附けられて居るやうだわね。」

と、心持ち高い、かすれた聲て、わざと聞えよがしに云つた。

男は何とか答へたらしかつたが、それは幸吉に聞き取れなかつた。

「いゝえさうなのよ、あたしには誰が後を附けて居るか、ちやんとわかつて居るのよ。あなた吃驚しちやいけなくつてよ。後ろに居る人は山本さんなの。」

其の言葉を聞いた幸吉は危く卒倒しさうになつて、底の知れぬ恐怖に五體を激しく打ち顫はせた。女の聲は意外にも彼の女だつたのである。

幸吉は一目散に逃げようとしたが、一歩も兩足を動かす事が出來なかつた。殆んど立つて居る事さへ覺束ない位に、體中の關節がガクガクと顫へて居る。彼は生れて始めて、このやうな激しい戰慄に襲はれた。

夜目にも白い彼の女の顏は、やがて後ろを振り顧つた。

「山本さん、もうわかつたから此方へ入らッしやいよ。」

から云つて、彼の女はからからと笑つた。

「おう、山本さんてしたか。」

と、杉村は怪しげに眼を光らせた。其の男の顏にも同じやうな驚駭と恐怖とが溢れて居た。

「何だつて山本さんはあたし達ちの後を附けたりなんかするの。一體あたし達ちが此處へ來る事を誰に聞いたの。ほんとに氣味の惡い人だわねえ。」

彼の女はしらじらしく幸吉を睨み付けた。

「誰にも聞いた譯ぢやないんですよ。たゞ公園へ散歩に來たんですよ。」

「そんならあたし達ちの邪魔をしないで歸つて頂戴。これから二人でちよいと用達しに行くんですから。」

「歸りますから、今夜の事は勘忍して下さいな。」

「歸りさへすれば勘忍して上げるわ。さうして、あした內へ詫りに入らッしやいよ。——それぢや今夜は左樣なら。」

彼の女は杉村の手を引いて、つかつかと五六歩駈けて行つたが、
「山本さん、あしたきッと入らッしやいよ。さうしたら指輪を上げるかも知れませんからね。」
と、晴れやかな調子で叫んだ。間もなく愉快さうな笑ひ聲が、再びからからと木立の奥の闇の中から響いて來た。
漸く戰慄の止まつた幸吉は、脇の下から胸の周圍へぴッしよりと冷汗を掻いて居た。

明くる日の幸吉は一層哀れであつた。娘と杉村を前に置いて、彼は散々彼の女から耻ぢしめられ、嘲けられた。
「三千子さん、どんなにあたしをいぢめても、昨夜よりもつとひどい目に遇はしても宜ござんすから、後生だからあたしを捨てないで下さいな。」
二人きりになつた時彼は云つた。
「若しも捨てたらどうするの。」
「捨てられゝば死んで了ひますよ。」
「ふん」
と、彼の女は鼻で笑つて、

「あなたも杉村の兄に似て來たわね。あの人もよくそんな事を云ひ〳〵したつけ。」

「それぢや自殺したんですか。」

「病氣で死んだのだけれど、實はあたしが殺したやうなものだつたわ。」

彼の女はそれから、自分に關する二三の男のさま〴〵な逸話を誇りかに物語つた。失戀の結果放蕩に身を持ち壞して、田舍廻りの壯俳に墮落した高等學校の生徒の事や、彼の女の家の藥局生が病死する時、息を引き取るまで「三千子さん、三千子さん」と呼び續けにして居た事や、〇〇と云ふ有名な婦人科專門の醫學博士が、醉に乘じて密かに彼の女の手を握らうとした事や、彼の女の偉大なる魅力を證據立てる材料は、其れから其へと、殆んど際限なく豐富であつた。

「あたしは今迄可愛がつて貰へたゞけでも勿體ないと思つて居るんです。ですから捨てゝ下さるなとは云ひませんけれど、捨てるくらゐなら、いつそ「死ね」と云つて下さいな。さうしたら私は今でも死にますから。」

「捨てやしませんから、死なゝくつてもいゝことよ。」

と、彼の女は云つた。

九

けれども幸吉が死なゝければならない時は間もなくやつて來た。

獨逸へ行つて居た彼の女の兄が歸朝したのは、丁度四月の一日であつた。兄は愛宕下の家へ落ち着くと、昨今の妹の樣子を細々と嫂に聞き糺した。さうして、非常に心痛し立腹して、嚴しい强壓手段を取つた。

幸吉に對しては、最初に彼を紹介したK――氏との關係上、兄も俄かに往復を禁ずる譯に行かなかつたが、彼の女の外出は餘程窮屈な束縛を受けた。彼の女はたま〳〵駿河臺を尋ねても、三十分か一時間でそこ〳〵に歸つて行つた。二人は手紙のやり取りさへ安全に出來なくなつた。

彼の女は當分、例の惡戲に沒頭する機會がなかつた。そこで惡戲の道具として愛用された幸吉は、だんだん彼の女から疎んぜられるやうになつた。

「此の頃は兄がやかましいから、あなたもあんまり尋ねて來ない方がよくつてよ。來年あたりは兄も別居するさうですから、又其の時分に入らつしやいな。」

「それぢや杉村と結婚するんですか。」

「えゝ、兄も父と一緒になつて、今度は馬鹿に性急な事を云つて居るの。だけどあたしはどうしても結婚なんかしやしないわ。無理に責めればほんとに出奔して了ふわ。」

「出奔するくらゐなら、早い方がいゝぢやありませんか。」

よもやとは思ひながら、それでも幸吉は一縷の望を抱いて、こんな事を云つた。
「それでもまあ、もう少し樣子を窺つて考へて見ようと思ふの。」
「いつかの杉村の病氣は嘘だつたんですか。」
「嘘ぢやないのよ。だけど今ぢやすつかり直つて了つたんですつて。」
こんな會話が交されてから、其の後ふつつりと彼の女は姿を見せなかつた。端書を出しても、返辭さへ寄越さなかつた。
「自分がみんな惡いのだ。自分が勝手に彼の女を强者にさせて、揚句の果てに捨てられて了つたのだ。」
と、幸吉は腹の中で呟いた。
それでも彼は彼の女を憎む事が出來なかつた。やつぱり彼の女の奴隷となつて。慘忍な、奸譎な女王の足下に自殺をして了ひたかつた。
今一と目、彼は彼の女に會ひたいと思つた。さうして再三再四端書を出した。
「あたしは事に依ると杉村と結婚するやうになるかも知れません。いづれ身の上が極まつてから、ゆつくりお目にかゝりませうね。」
こんな返事が、恰も五本目の端書に對して報いられた。
彼はいよいよ死なうと決心した。彼の女の爲めに破滅する男が、一人でも餘計あればある程、ますます彼の女の歷史を飾る所以である。自分は最も彼の女の爲めに花々しい犧牲となつて死んで見せよう、

自分の死に依つて、彼の女の美を一段も二段も引き立てゝやらう、それが彼の女に一番忠實な、一番柔順な、自分の取る可き最後である。――幸吉はさう考へた。

彼の女は大概狂言の變り目毎に、帝劇へ行くのが習慣となつて居た。幸吉は其の折を狙つて、劇場の廊下に彼の女を擁した上、いきなりピストルを自分の蟀谷にあてゝ、づどん！と一發、花やかな群衆に取り巻かれながら、彼の女の眼前に斃れて見せたかつた。

「それにしても大丈夫死ねるだらうか？死ねる死ねる、死ねるに違ひない。」と、彼は獨語した。

ぼかぼかした、うらゝかな天氣が每日續いた。四月の上旬は眠いやうに暖かであつた。上野淺草の櫻が綻んで、世間はお花見に忙がしく、滿都の人々は春に醉つて居た。（大正二年十一月作）



朽ちる體

小川未明

一

日が暮れると殆んど毎夜のやうに、街を散歩するのが習慣となつた。淸吉は其れを自分で惡いことゝは思つてゐなかつた。終日二階にゐて昵としてゐる體にとつては、これ位の運動は却つて缺かすことが出來ないと思つたからだ。

彼は机に向つて考へ込んだ、思想の浮んで來るのを待つてゐる時があつた。幾たびかペンを取つては下に置いたりした。幾たびか書きかけては紙を引裂いた。まだ思想が熟して來ないのだと思つたりした。障子の線を睨んで、重い責任を果さないまでは、二たび休息は得なれないといふやうに、氣は急いで來るに從つて苦痛は益々募り、遂に病んだ人間のやうになつて、がつかりとした。

晩秋の日は眠つてゐるやうに靜かであつた。生温かな、うす黄色い日の光りが、南向きの窓の障子に當つてゐたが、いつしか音もなく氣の付かぬ間に消えてしまつて、うら寒い灰色に變つてゐた。兎も角今日も暮れに近づいたのである。

清吉は坐つてゐながら、いろいろの音に耳を傾けた。毎日、此時分になるとこんなやうな、何の音色とも分らない物の響きが、都會の空遠く、また近くに當つて、起るのを聞いたのであつた。工場の退ける汽笛の音は、多くの疲れた勞働者に、休息を與へる時が來た知らせてあるだけに、一際高く勇ましげに夕空に響いて來た。獨り、黑い煙を上げてゐる工場の硝子窓の下で、埃と汗に塗れて働いてゐる勞働者が幸福であるばかりでなかつた。頭の疲れた何となく氣持の遠くなつた、眼の底に痛みを感じてゐる清吉にも休息の時が來た如く愉快に感ぜられたのであつた。

窓を開けて眼の下に開けた街の生活を望んで、暫らく瞑想に耽けることがある。燈火の數は刻々に多くなつて、乳色の夕靄は柔かに都會の建物を包んでしまつた。空は青硝子の如く冴えて、月の光りが淒く枯れた木の上に懸つてゐる。單調な景色の中にも變化があつた。變化ある如く思はれる自然の中にも一貫した眞相のある如く感ぜられた。

清吉は、靜かな自然に對して獨りかうして眺めてゐると、益々胸が騷いて來る。此の自然は、どんなことを自分に語らんとしてゐるのであるか？、いかにしたら、自分は正しい意味を此の自然から聞くことが出來るであらうか？、と惑ふのであつた。清吉は、明滅する燈火を見詰めて窓際に立つてゐた。北の

燈火の一つ一つの下で、異つた生活が營まれつゝあるのが、不思議な色彩を施された繪となつて、想像するまゝに眼前に展けられて見る如く感ぜられた。しかしこれは嘘だ。これは自分の乏しい經驗から描かれた繪に過ぎない。幼稚な空想にしか過ぎない。なんて自分には其の眞の生活が分るもんか。かう淸吉はまた思ふて悄然とするのであつた。

身に降りそゝぐ月光を浴びて、窓際に立盡した彼は、やがて二階から下りて、街に出てさ迷うて見るのであつた。

青白い世界を黑い影が往來してゐた。たとへ晝間のやうに明るくあつても、其の世界には溫かみがなかつた。人工的の瓦斯の光りは自然を欺くことが出來ても、淸新なる生命と生氣ある輝きとを造ることが出來ない。眞晝の太陽の下を歩く人々には明るい快活な光りが媚るけれど、瓦斯の光の中を行く人には暗い秘密の影が附き纏うてゐた。けれどこの陰濕な寒い光の底には、日陰に茂る毒草のやうな紅い快樂が求められるのであつた。

賑だけれど靜かな、明るいけれど冷たい夜の街を淸吉は歩いてゐる。彼は地上に動く自分の小さな形を見た。たとへそれが小さく貧しく哀れに見えても存在してゐるといふことは事實である。影を地上に投げる或者が現に此處に存在してゐるといふ事實を疑ふことが出來ない。自分で自己の存在を否定することが出來ない。自分は現に疑ひもなく生きつゝあるのであつた。けれど忽然として、この影が地上から消える日がある。永遠に消えてしまふ日が來るのである。

ふと清吉は死といふことを考へたのである。而して現在の自分を思ひ、同時に生を思つたのであつた。小さな哀れな影が、雜沓の中に動きつゝ進んだ。地面の上に落ちてゐる塵埃の上を越えて行き、彼方から來た人の足に踏れて移りつゝあつた。自分の影ばかりでない多くの影がさうであつた。其の一つの影の裡には一つ一つの我がある。自分が何事か考へ、なしつゝあるやうに、他も亦何事か考へ、なしつゝあることを知らなければならない。

清吉は多くの我が地上で叫び、動き、爭ひ、笑ひ、訴へてゐるのを見た。何のためにかういふやうなことをせなければならぬのか？たゞ生きてゐるからである。生きてゐるからだといふより、別に言ふことが出來なかつた。何の爲めに生きてゐるかといふことは、不思議にも生きてゐる自分が答へることが出來ない。また何のために、互にかうして苦しい生活を營んで行かなければならぬかといふことも分つてゐない。すべての人生といふものが分らない。けれど誰にでも分らない人生ではあるが、なほ苦しみにも、悲しみにも、あらゆる迫害にも撓まず前へ、前へと進んで行く力が誰の體にも宿つてゐることを否むことが出來ない。社會を形造り、この世界を形造る多くの我が、みんなこの力に支配されて戰ひ、爭ひ、働きつゝある。たゞ其れは盲目の生の力である。人生が此の偉大な力のために活動をつゞけてゐる。無終に活動をつゞけつゝある。大きな灰色の漠然とした一箇のスヒンクスが、この機關の力によつて進行をつゞけて行く。

二

清吉は、かうして生きてゐる自分といふものを不思議のもの丶やうに考へた。けれどもこの生きてゐる自分が何時か此の地上から何處へか消えて無くなるといふことを考へると、更に死といふものを不思議のもの丶やうに考へた。

いろ〳〵に斯の如く工夫を凝らして店頭を飾つたり、幾つとなく電燈や瓦斯を點して物賣る家が前を明るくしてゐるのも、其れは何等の關係ない人々のために遊覽場を造るのではなかつた。たゞ物を賣つて自分等の生活を立て行く爲めであつた。街の片側に露店を出して、茫然として其の前を往來する人を眺めてゐる、色の黑い頰の窶れた女の顏にも、たへず他の生活と自からの生活とを比較し、冷然として顧みずに行く者に對して呪ひ、憎む表情を認めることが出來た。

『みんな苦しいんだ。』と清吉は心で言つた。是等の貧しい人々は、皆な自分の同胞である如く感じた。不幸の人々は、皆な自分と同じい人生に呼吸してゐる如く感じた。けれど彼は曾て幸福な生活を營んでゐる人々の家庭を想像したこともなければ、富んでゐる人々に對して曾て何等の憐れみと優しみとを持たなかつた。正當に働き、正當に暮らしてゐる者なら、此の社會では、多くの忠實なる勞働者の生活に比較して、より甚しく富める理由を見出すことが出來ないからであつた。

清吉の眼の前にある世界は苦しい世界である。苦しい人生である。其日、其日の生活のために戰ひ、理由なき壓迫と迫害とに對して、反抗して行く人生である。彼はこのどん底の人生のために力を盡して、共に泣き共に戰ひ、斯くして當然得べき幸福を得やうと欲した。清吉は、自分の藝術は、畢竟この感情

の上に立脚してゐる。かう思ふと、始めて自分の生が無意義でないやうな氣もしたが、同時にいろいろの疑問も生じて來たのである。突飛にも、『人間と獸物とは何處が違ふんだ。何處が違はなければならんのだ。』と彼は自分で言つて、『覺えず道の上に歩みを止めたのであつた。

一歩街を出ると物凄い月の光りが地上を晒らしてゐた。瓦斯の光りにくらべて、月の光りは一層青白く寒げであつた。全く荒寥として水氣の絶えた死んだ世界から落ちて來る、この雪のやうな白い光りには、細い悲しみの刺があつて、奇異な感覺に見る者を誘ふものである。淸吉は音もない、色もない、默つた寂しい死の國といふものを想像したのであつた。

夜は更けて行つた。どうかすると机に向つてゐて、書物を讀んでゐながら、ふと書物から心があらぬ方へと外れて、茫然りとして瞳をうす暗い、灰色がゝつた壁の方へ向けて、默想に耽る時がある。其時しみじみとして、淋しい、遠い世界が眼の前に音もなく浮いて來る。其れはまだ若い日に見た世界であつた。

淸吉は、親友のNと其の街を歩いた。見るものがすべて懷しい光りに包まれてゐた。自由であつた。麗はしい笑ひがあつた。其の世界は靜かで、色彩の奏調があつた。

また自分には希望があつた。未來があつた。憧がれてゐた戀があつた。まだ見ない領土があつた。だから自分は勇氣があり、快活であり、而して常に何となく心が嬉しかつた。

其の永遠に失はれてしまつた街が見える。彼の遠い故郷に歸つてしまつた。親友のNの顏がありあり

と浮んで見える。

默想するたびに同じい街、同じい顔が浮んで來た。やはり清吉は机に向つて默想に耽つてゐた。遠い灰色の空が切れて、間からうす青い色が微笑むやうに、いよ〳〵あり〳〵としてあの時代のことが繪の如く現はれて來た。

「もう失なつてしまつた世界だ。もう永遠に二たび歸つて來ない青春だ。」と清吉は言つて、しばらくの後に現在の自覺に返つた。何もかも色の褪せたやうな感じがする。何もかも目に映るものが、樂しみのない疲れたやうな氣持を與へる。書箱の中に並んでゐる背皮に金文字の入つた書物も、壁にかゝつた風景を描いた水彩畫の額も、見飽きたもので一樣に埃がかゝつて鬱いてゐるやうな顔付きをしてゐた。

遙かに、東の方の街の空に當つて、氣笛の聲が聞えた。其れは短かい、圓味を帶んだ。可愛らしい聲であつた。清吉は高架線を走る電車の鳴らした笛であると思つた。耳を澄すともなく、夜更けた街からたま〳〵起つて來る物の音色を聞いてゐると、だん〳〵病的な陰鬱に氣持が重くなつて行くのであつた。

三

曇つてゐても、風が吹いても、晴れてゐても、太陽が東から上つて西に入るのに變化がないやうに、しかも其の歩む路は單調の一筋であるやうに、清吉の生活も日々に異つた氣分で一筋の道を歩むのであつた。しかも人生のためであると自から思つて慰むる以外に誰も慰めてくれるものもなかつた。ちやうど

明るい空の下で、光の中に泳ぎながら、草や、木や、建物は、空虚で無關心でゐるやうにも等しく感ぜられた。

清吉は毎日のやうに、同じい時刻には同じい街を散歩した。遂に、彼は何等かの變化を求めた。こんなやうなことがあつた。

汚ない店があつた。一見して何うして生活してゐるだらうと思はれるやうな、貧しげな家であつた。店頭には垢染みた破れた古着や、紙の煤けた行燈や、古靴や、鋸や、壞れた膳などが並べてあるといふよりは、ごつちやに置かれてあつた。最初、清吉はどうしてこんな店頭に立つたかといふに、よくある古い支那燒の酒壺がかうといふやうな處では、價ひもなく轉げてゐるものだから、其れを探し出さうといふ考へで足を止めたのであつた。

彼が思つたやうな、心の目に見えるやうな青味がかつた、圓い壺は見當らなかつた。其の代り高い棚の上に幾つも黒くなつた佛像が載せられてゐるのを見た。其の中には幽かに金光りを放つてゐるのもあつた。彼は端から二番目に兩腕の取れた不具ではあるが面白味のある一體に心を惹き付けられた。けれど此のうす暗い光線の裡では、はつきりと遠く距離があつては認めることが出來なかつた。

「あの、佛樣を見せてくれませんか」と清吉は奥の方に向つて聲をかけた。店には誰もゐなかつたらだ。

二度目で、漸く障子を開けて、女が顏を障子の外に出して、

「今留守で分りませんから、夜來て下さい」と厭々らしい樣子で言つた。其の女の顏は、色が生白くて

眼の大きな、表情に乏しいのが冷酷を思はせるやうな四十ばかりの年格好であつた。

陰氣な家であると思つて、清吉は其處を去つた。日が暮れてから、二たび街へ散歩に出た時にこの店へ立寄つて見た。脊の低い、頰骨の出た男が煤けた五分心のランプの下に踞(うづく)まつてゐた。細いくねり曲つた針線(はりかね)の釣手(つりて)が異樣に思はれた、子供の時分に見ただけて、此の都會に來てからあまり見なかつたからであつた。しかも隣の家から、明るい瓦斯が點されてゐるのに、たゞ一軒この店ばかりがランプを使つてゐるのも不思議に思はれた。

清吉はゴーゴリの作に出て來る家のやうだと思つた。此處に立つた自分は作中に動く人のやうだと思つた。

『彼處の棚に載つてゐる佛樣を見せてくれませんか』と言つて、彼はうす暗いじめじめした店に坐つてゐる男に聞いた。

男はちよつと此方に顏を向けたぎりで起ち上らうとはしなかつた。て言つた。

『夜て分りませんから、晝間來て下さい』と氣乘りのしない返事であつた。

清吉は重苦しい陰氣と不快を感じて其の店を去つた。男も女もどういふ生活を營んでゐるのだらうと考へた。けれど彼はどういふものか兩腕の取れた佛像が眼に殘つてゐて、其れが偶然にも不朽の名作であるやうな殘惜しいやうな氣がしてならなかつた。

作者も分らず、其の時代すら僅かに鑑定が出來る位にとゞまつてゐる、古い藝術品と雖も生命が殘つ

てゐれば、其れからやはり喜びも、悲しみも、また鋭い刺戟をも受けることが出來るものだ。彼れは、朽木の中に、若しくは煤けた紙の中に、時と空間を超越して宿る天才の光り、藝術の力といふものを考へて、神秘の感に打たれた。

彼は明る日また其の店に來た。女が昨日の如く、顔を障子の外に出して、

『今留守ですから夜分來て下さい』と言つた。其の聲は前の時よりも厭々さうな言ひ方であつた。

清吉は直覺的に此の家族には迷信があると感じた。それであの佛像は祭つて置いて賣らないのだと思つた。たゞ先方の心をためして見る氣で、鋭く言つた。

『あの佛像は賣らないのかね』と淸吉は言つて女の白ちやけた顔をきつと睨んだ。

『さういふ譯でもありませんが　』と女は極めて曖昧な言ひ方をした。淸吉は激しい憎惡　感じを抱いて、其儘此の店頭を立去つたのであつた。

道すがら、彼は無智で、しかも執念深く迷信に捕へられてゐて、自から幸福を排して、不幸な生活にゐる彼等をみじめな者と思つた。ちやうど萬物に惠みを垂れる太陽の光りを怖れて、土深く穴の中に潜んでゐる痴鈍な蛇のやうなものだと思つた。

しかし其等の迷信も、畢竟生に對する不安からである。此の世界に、物好きのために慘ましい宗教を信ずる人は一人もない譯である。すべての人は生きてゐるために苦しみ、また生きるために苦しいことをも忍んでゐる。

あの店の人々は瓦斯の光りよりランプの光りを安心だとしてゐる。其れは保守主義からである。かならずしも經濟の上からであるとは思はれなかつた。また幾何の金を得るよりは佛像を棚に祭つて置くことに幸福を感じてゐる。其れが其の人々の宗教である。それによつてあの家族は生の安慰を得つゝある。けれど果して安心が得られるだらうか。周圍が其れを許さない日が來るであらう。あの時代後れの家族が此町から追ひ立てられて、其の跡に奇麗なすべてを現代的にした店が出來ることが近い間であると思つた。

『宗教や、自信が何んの役に立つのだ』と淸吉は、獨りて言ひ、獨りて疑つて見た。

四

衰弱、疲勞、倦怠、思想の不統一、其等は身體の病的に原因してゐるといふことが分つた。

ある朝、淸吉は床から起きると四肢が著しく腫れ上つてゐた。彼れはしみ〴〵と太くなつた鉛色の手の指を見詰めて、指を曲げて見たり、伸して見たりした。いつとなく、知らぬ間に朽ちて行く體といふことを考へて悲しくなつた。

何時人間は、いかなる病ひが原因となつて死なないとも限らない。彼は痺れた足を引摺りながら室の中を歩いて見た。また梯子段を上つて見た。昨日まで感じなかつた困難、疲れ、息苦しさが明らかに體に感じられた。

淸吉は二階に上つて、いつもの如く机に向つて坐つた。曇つた朝の光線が鈍く灰色に障子を染めてゐ

る。此時彼は死といふ日頃考へてゐる問題よりは、直に醫者に罹ると金の入用であるといふことや、此の様子では當分何も背けぬといふことなどが考へられて、其れがために氣が暗く滅入つて來た。

朝飯が出來たといふので下へ來た。而してまめ〳〵しく働いてゐる妻の前に立つて、

「さつと性質の惡い病氣だと思ふ。己はこれて死ぬかも分らない、」と自分でも心からそんなやうな氣がしたので、鋭く言葉に力を入れて、皆んなの身の上にも等しく怖しい運命を宣告するやうに言つた。

妻は手をやめて、其處に突立つたまゝしばらく夫の顏を氣遣しさうに見守つた。而して直には何と言つて返答することも出來なかつた。男には、それが哀れにも思はれ、また無同情のやうにも思はれたのであつた。

「醫者へ行つてゐらつしやいまし」妻は小さな聲で言つた。分りきつてゐることを言ふものだと男にはこの言葉が癪に障つたので、

「金がないよ。何處にそんな金があるんだ」とたゞ腹立しまぎれに女に喰つてかゝつた。

「だつて、さうするより仕方がないてありませんか」と烈しい感情のために女の聲が慄えた。男は平常なら、女も理窟を言つて、互に喧嘩をする處だと思つた。

けれどそんな元氣は二人ともなかつた、我儘な感情を壓伏するに足る、目に見えないけれど必然的な暗い、怖しい影が、泥と默つて二人を見てゐたからだ。

淸吉はこんなになつても、他の有名な病院へ行く氣にはなれなかつた。やはり行き慣れた近所の小さ

な醫者の許へ行つた。幾分なりと自分の性格を知つてゐる醫者の方が、結局氣が措けず、話し好いやうに思はれたからであつた。三十分ばかり後には、其處の診察室に來て立つてゐた。大きなテーブルの上に藥罎だの、メスだの、鋏だのが載つてゐた。テーブルの下には黄銅の心臟形の金盥だの、汚れたコップなどが置いてあつた。一つの金盥の中には生々しい血の附いた綿が、黄色な油紙や、ガーゼと共に固められて入つてゐた。

まだ此の醫者が開業してから三四年にしかならなかつた。彼は實力以上に機械や、風彩て、何にも知らぬ世間の人々に偉い醫者だと信じさせやうとするやうな考へがなかつたから、極めて其の診察室などは貧しく、淋しかつた。白い埃がテーブルの上にあつたニッケル製の吸入器の上にも、硝子のコップの中にも溜つてゐた。白い壁の上に、銅製のコッホ博士の肖像がかゝつてゐる外には何の裝飾もなかつた清吉は常にこの灰色の氣分の漂つてゐる室に來ると氣の靜まるのを覺えた。醫者がしばらく奧に入つてゐてたゞ獨り腰を掛けて待つてゐる時には曾て經驗しなかつた一種の靜寂に襲はれて、哲學的の瞑想に耽るのであつた。

彼はいつとなしにこの診察室の氣分を愛した。他の虛飾に滿ちた醫者の診察室にはない氣分である。この氣分が自分を此處に導くのであることを知つた。

清吉は窓の硝子を透して、木の葉が落ちて遠い青い空が、枝の間から覗かれる、木を眺めてゐた。未練らしくも、黄色く蝕ばんで散り殘つた葉が、今宵も知れず、風が來るまでの、僅かの命であるのに、細

い黑い針線のやうに痩せた枝にしがみ付いてゐるのを見て、人間もこれと同じい運命を抱いてゐるものも少なくないといふことに思ひ至つた。

神經質な鋭い眼付をした醫者が、注意深く彼の四肢に觸れて見た。次に淸吉は藥の染みや、何やら分らないものゝ染みが處々に着いてゐる白い床の上に仰向けとなつた。醫者は窓の方に光つた眼を向けて經驗の力と學理の力とを應用して、目に見ることの出來ない場處に起つた病源を探るために全意識を悉く手頭に集めて淸吉の腹部に觸れてゐた。淸吉は醫者の問ひに答へながら、醫者の顏付きを見て、此の刹那、彼の全神經は手頭と腦の働き以外にすべての作用を止めてゐることを感じた。

臨床的の診察が終つてから、醫者は椅子に腰をかけて、しばらく默つて考へてゐた。淸吉は、醫者が心臟病といふか、腎臟病といふか是れ二つ以外には言はなからうと思ひながら、たゞ其の一つの宣告を到ち受けてゐた。

「あなたが激烈な痲病にかゝつたのは何時でしたかね」と醫者は淸吉にとつて意外に感ぜられたことを聞いたのである。

「あれは、もう一年半、餘りになります」と淸吉は言ひながら、心で當時の光景を思ひ出した。けれど其れと同時に、痲病の內攻から來る腎臟炎の怖しいものであるといふことを聞いた記憶が、目醒めると電氣に觸れた如く全身を戰(おのゝ)かした。

空想であつた死が、いよ／＼事實になつたと思はれた。急に彼は太い棒で頭を擲られたやうに、意識

が遠くなつた。しかし醫者が眞に心からさう思つて言つたのかと疑ひながら、尚ほ幾分の望みを繋いで醫者の顔色を見た。青褪めた顔には、人情を超越した、科學上の眞理(ツルース)といふものが精神を支配してゐることが分つたので、氷に觸れた如く、全く胸の感情が冷却せられた。

「腎臓に來たのですか」と淸吉は頻りに心細くなつて來て急込んで言つた。何となく自分にまで其の言つた調子が、訴へるやうに聞えたのであつた。

「兎も角も尿の試驗をして見ます」と醫者が言つて、直ちに椅子を離れて、仕度に取りかゝつた。

二本の試驗管の中に注がれた尿は、透明な濃い飴色をしてゐる。醫者は窓際に行つて、其れを光線の射し込んで來る方に翳(かざ)して見てゐた。淸吉も後方に立つて其れを眺めた、細い白絲を刻んだやうな纖維が、其の中に漂つてゐた。

「まだ、黴菌がゐますね。こんなに白纖維があるからご覽なさい」と醫者が言つて、一寸淸吉の方を振向いた。

「濁つてゐますでせうか」と淸吉は怖れながら聞いた。

「どうです、あなたは普通より、少し濁つてゐるとは思ひませんか」と却つて醫者が淸吉に問うたのであつた。

淸吉には分らなかつた。たゞ默つて醫者のすることを見守つてゐた。醫者はテーブルの傍に來て、其處にあつたアルコールランプに火を點した。而して一本の試驗管を熱して、其の中の黃色な液體を沸騰

さした。好い加減な時を見計つて、ランプの火を消して、二たび窓際にやつて來た。而して沸騰さしたものと、最初の儘の液體とを較べて光線に透して見た。すると著しく火に熱したものが濁つてゐた。

「こんなに濁つてゐます」と醫者は、試驗管から眼を放さずに言つた。

淸吉は、やはり默つて其の後方に立つて、其の濁つた方の試驗管を見詰めた。醫者は更にテーブルの傍に返つて、それに靑い色の水藥を注した。今度は明かに白い輪が試驗管の底の方に沈澱して、靑い色付いた液體とくつきり區別せられて目に入つて來た。

「やはり腎臟が惡いやうです。其の原因は、今直には分りませんが、もう二三日お出下さい」と醫者が言つた。

「腎臟炎でないでせうか」と淸吉は言つたが、不安が既に四邊を暗くした。自身の體内に起りつゝある變化を見ることも聞くことも出來ないのが怖しく思はれた。

彼は病氣について考へ醫者に言つてゐるのでなかつた。死について考へ言つてゐるのであつた。

「腎臟の惡くなる原因は、よくちよつとしたことから起るものです、酒を飮んだことや、風を引いた位のことが原因するものです。だから麻毒性の腎臟炎などゝ考へるのが、却つて今の處空想といつてもいいので、もしそんなことでもあつたら、其の時は私の力では及ばないから專門の醫者を御紹介いたします」と醫者は淸吉に安心を與へるやうに言つた。

淸吉は、悄然としてうす赤い色のついた水藥の罎を下げて家に歸つて來た。

五

しばらく用心して、醫者の處への往來の外は散歩にも出なくなつた。戶外には日にまし秋の老けて行くことが風の音と窓を通して、遠近の落葉する木立を見るにつけて身に染みて感ぜられた。

彼は同時に重い神經衰弱に罹つたと思つた。ハガキを書くにも字を間違へたり、一行の文字すら紙に書くのに非常な苦しみを感じた。其れて、何もせず暗い漠然とした氣分に包まれて机の前に、半日、また半日といふやうに終日坐つてゐる。やはり街の方からは、いろ／＼の音色や、物音が、遠くかすかに聞えて來て靜かに、淋しく日は流れて行つた。

彼は日暮方になつても、散歩に出る氣にもならなかつた。たゞ呢として、體を動かさないやうにつとめてゐた。朽ちた體である。動かせば崩れるやうに思つた。

醫者にかゝつた日から、毎月三合づゝ牛乳を飲むことにした。

「腎臓病と心臓病には牛乳が藥りになります。運動するのが一番毒だといひます。」と妻はたゞ／＼同じいことを言つた。

彼はまた妻から、ある女が夜中に便所に行かうとして立ちかけて、床の上から轉げて、其儘心臓痺て即死した話を聞かせられた。其等の智識や、實話などは、子供が猖紅熱に罹つて病院に送られた時に妻が從いて行つて、しばらく其處に居た時に見たり、聞いたりしたものである。遂に子供は腎臓病を併發した爲めに豫期したより退院の日が長引いた。そんなことで淸吉の妻は、腎臓病に對する看護の法を心

得てゐた。當時彼女は毎ゝ子供の尿の分量や、色の濁り加減を氣にして、喜んだり、悲しんだりしたのであつた。其の床から轉げ落ちて、心臓痲痺で死んだ女も、やはり猩紅熱で入院して來て、直ぐ隣の室にゐたのが腎臓病を併發して、醫者が立つことを禁じてゐたのを起きたのであつたといふ。

清吉はこの話を聞いてから、急に家の裡を歩くのですら、體に應へるやうな氣がして怖しくなつた。賑かな街の中を散歩する樂しみなどは、全く忘れられてしまつて、日が暮れると早く寒さの冒さないうちに戸を閉めてしまつた。

やがて月末に近づいて來た。彼は病氣にかゝつてからは一枚も原稿を書かないので、机の上にはいつとなしに原稿紙の上に白つぽい埃が溜り、ペンの尖にもインキの滓が付いたまゝ乾いてゐた。この貴金屬の放つ鈍色の黄色な光りが、灰色の光線の中に物悲しく染んでゐた。

其れを見て、清吉は金の心配を促せられるやうな氣持になつた。未來といふ妄想の貌を目に描き、それに絡んだ不安に浸されて、しばらくとりとめもないことを思ひつゞけた。而して結果はやはり無から有が生ずるものでないといふ、分りきつた、つまらない哲學が眞理であるやうに考へられて來た。

清吉は、此時雜誌や新聞に出した舊稿を集て見やうと思つた。其れが纏めて出版するに足りる位であつたなら、其れを賣る方に力を盡した方が、あてもないのに金を借りるといふやうなことを空想したり格別品物もないのに、其れを要用の價格までに入質しやうといふやうなことを考へるより、寧ろ當然の手段であり、また多くの望みを置けると思つた。それで、早速机の前から立ち上つて、押入れの中や、本

箱から古雜誌と古新聞を引摺り出して來て、机の傍に積み上げたのである。

何となく、がつかりとして其處に坐ると、遠く、街の方から、細い音色が聞えて來た。其れに耳を澄してゐると、淸吉はいつとなしに其の音色に心が引き入れられて、淋しく、悲しくなつて來た。

自分ばかりでない。其日、其日、生を營みつゝある多くの人々は、多くの思ひと多くのしかけてゐた仕事とを殘して、死んで行くのである。我が藝術は、其日の生活の叫びである。人生に對する疑ひである。要求である。自分が死んでしまへば、この叫び、疑ひ、要求は永遠に此の叫び、疑ひ、要求する人を失つてしまふ譯である。自分の死後に於て、我が藝術に幾何の權威があらう。假りに誰かが權威ありと言つてくれて、また社會が幾分なりと要求を與へるやうに思想が變つて來たとしても、其れが何になるのだ少なくも死んでしまつた自分にとつて、其れが何になるのだ。淸吉は、かうして疑ひ、叫び、疲れて行くものゝ生活を憐れみ、我が眞に頼りない生活を顧みて、また自から憐れまざるを得なかつた。

二たび醫者に向つて、自分の病氣を問ひ詰めることをしなかつた。淸吉は醫者にはすべてが分つてゐるやうな氣がした。けれど醫者が口に出さないのは、自分に不安を與へないと思ふ慈愛心からであると感じてゐた。また淸吉は病名を明かにするために强ひてこれを聞くことが怖しくて出來なかつた。

毎日のやうに夕暮の街を散歩するのを止めてから、彼は夜だけは多く二階に上らずに、家族の者と共に下の長火鉢の傍で話に時を移すやうになつた。かうなると今迄氣の付かなかつた、電燈の球がなくなつて、暗くなつたのが氣になつて、早く新しいのに取りかへて家の裡を明るくしたくなつた。

彼はハカキを出すのが手間取るやうに考へられたから、其夜直に妻を近所の自働電話にやつて、電燈會社の出張所に電話をかけた。しかし其夜は間に合はなかつた。

うす暗い燈火の下に坐つてゐる妻が淸吉の顏をしみ〴〵見て、

「まだ少し腫れが退きませんやうですが、やはり腎臟病なんてせうか。今の醫者が分らないやうなら、他の好い醫者に早く見てもらつた方が安心ではありませんか。」と言つて、彼の女は幼兒に乳を飮ましてゐた。

淸吉にも不安と恐怖が一日心を暗くしてゐた。けれどたゞ默つて、忘れるやうにつとめてゐた。其れが姑息てあるやうにも思はれてゐた。

「腎臟炎になつたんだ。この病氣はなか〳〵癒らないといふから困つたもんだ。いつたい己が死んだら後はどうなつて行くものだらう。」と淸吉は力なく言つて、考へ込んだ。

目に見えてゐるのは現在だけてある。明日は旣に灰色の雲の中に隱れてゐる。未來といふものを思ふ時には、いつも窮り果しもない灰色の雲を望むやうな氣持がして頭の中が昏く亂れて來るのてあつた。

「早く好い醫者に見てもらつたらいゝてありませんか」と妻は慌てたやうに、淸吉に決斷を促した。

「何んだか、知らぬ醫者に行くのは厭だ。無法に高い診察料を取つたり、其上威張りやがるんだからな。さうして見ると貧乏人は病氣に罹れや、みす〳〵死ぬんだね。」と淸吉は言つて、さながら自分の言葉に感激したやうな樣子てある。

『いくら金がかゝつたつて、命には換へられないぢやありませんか。』と妻が言つた。彼女は心のうちで何もかも賣つてしまつてもといふことを思つてゐるのが淸吉には分つた。

淸吉は贅澤な品物とては、何一つない淋しげな室の裡を見廻した。而して心がいつか遠くに走つて、故鄕の荒れた光景が目に浮び、其處に自分が死んで後に殘つた妻や、子供が全くの田舍者となつて、道を歩いてゐる姿や、外に遊んでゐる樣子などがあり〳〵と見る心地がした。次に其のやうな生活が現在に於ける生活と比較して、妻や子供等にとつて、何方が幸福であらうかといふやうなことを考へて見た。

『お前の實家へも手紙を出さなけれやならんよ。誰とても喧嘩をしていゝことはないのだから、まして親子の間柄で感情を惡くしてゐては、いくら互に不快な日を送らなければならないか知れん。人間といふものは互に弱いものだ。强いものは一人もない。』と淸吉は妻に對して言つたのであつた。

彼女と遠く隔つて田舍にゐる彼女の母親とは少しの事件の行違ひから、互に感情を傷つて、旣にしばらく手紙の遣取りも杜絕えてゐた。其れを淸吉は、心のうちで當然であるとも思ひ、また不思議であるとも思つてゐた。親と兒の愛は、無自覺の愛であつた。動物的の愛であつた、離れると其れが著しい憎惡の反感に變ずる例も少なくない。彼は人間の經驗するすべての感情のうちで、骨肉の間でもやゝ似てゐるが、親と子の感ずる憎惡より、最も忌はしく、怖るべきものはない。

淸吉の言つたことを聞いてゐた妻は、いつしか眼に淚ぐんでゐた。

『いゝえ、私はどんなことがあつても、實家へは歸りません。親とも思ふな、子とも思はぬと言つて來

た親の許へは歸られません。私はとつくに自分の家といふものは、ないのだと心に思つてゐました。」と妻は言つて、眼の涙を袖の端で拭つた。

淸吉は默つてゐた。やがて其處から立上つて、二階に上り、其日の新聞を疊んで、自分の故鄕に送るために包んで上書を認めた。何か餘程の差障りがなければ、雨が降つても、風が吹いても、これだけは毎日缺かさずに日記を付けない代りとしてやつて來た。

二階を下りて來て、妻に新聞を渡すと、彼女は直にこれをポストに入れに家を出て行つた。淸吉は、物憂さうにして、茶棚の上に乘せてある時計を見て、まだ眠むくもなかつたが、何も讀みたくもなく、話したくもなかつたので床に入つた。

淸吉は床に就てからも、しばらく眠らずにいろ〳〵の空想に耽つてゐた。また、明日書籍店に舊稿の出版を問ひ合す手紙の文句などを考へたりしてゐた。口語體以外に自分の手紙文を書き得ないことなどを思つたりしてゐた。そのうちに頭が非常に疲れて來た。彼は強いて瞼を閉ぢて眠りに陷らうと力めた。

六

陰氣なうす黑い電燈の球が、無色の冴え〳〵しい球にとり換へられたのは、明る日の夕方であつた。淸吉は水のやうに冷かな靑白い光りの裡に坐つて新しい悲しみの湧くのを感じた。かうして室の中に呢としてゐるのが堪へられなくなつて、久しぶりて夕暮の街に出て散歩したのである。

木枯か街頭の燈火を掠めて過ぎた。さながら多ゝの光りは磨かれたやうに輝きを放つた。夜の鼠色の

空氣は寒さのために戰へてゐる。星の光りが、飛びさうに見えた晩であつた。

淸吉は、冬に向ふにつれて、日毎に夜の街を散歩する人の影が、次第に減じて行くのを知つて、何となく、長い暗い陰氣な冬の前途に横はつてゐるといふことが、氣持を欝がしむるのであつた。

冬は寒い、けれど死はもつと寒い。冬は暗くて陰氣だ。けれど死は全く暗黒だ。こんなことも淸吉は思つたのであつた。

其の晩は、いつになく好い氣持で眠込んだ。彼はやはり適當の運動が體には必要であることを、今更のやうに感じたのである。

彼はこのことを醫者に話した。すると醫者はたゞ微笑して聞いてゐたが、其れを好いとも、惡いとも言はなかつた。寧ろ普通の話の如くに思つてゐて、彼には何等の興味も惹かなかつたらしい。たゞかう言つた。

「やはり腎臓が惡いんですから、あまり運動をなさらん方がよろしいでせう。」とさも眞理を言つて聞かせたやうな様子であつた。

淸吉は、この醫者には自分の心理や、言つた話の意味が分らないのだと思つた。今迄で却つて醫者に聞くのを氣の毒に思つてゐた自分の病氣について、突詰めたことを聞いて見る氣になつた。

「私の病氣は根本が何處になるのですか」と淸吉は言葉を改めて、質問するやうに醫者の顔を見詰めた。

靑白い醫者の顔には、笑ひが跡もなく消えて、冷かな凄味すら感じられたのである。

『腎臟に來た原因は分りませんが、心臟にも異狀がありませんし、胃も、腸も、體の其他にも異狀がないやうです。』と醫者は答へた。けれど此の答へが事實にしても淸吉には不安なしに聞くことが出來なかつた。

『痳毒の內攻ではありますまいか。』と淸吉は何となく始めから自分はさう信じてゐたといはぬばかりに醫者に向つて言つた。

醫者はしばらく考へてゐたが、額際から眉の間にかけて、暗い不安の影が現はれてゐるのは、疑ひもなく彼の力では、何れとも診斷しかねるといふことを告白したものであつた。けれど彼はやはり此場合に於ても、患者をして徒らに悲觀させるものでないといふことだけは忘れずにゐた。

『あなたは膀胱加答兒にお罹りでしたか、痳は多く膀胱を冒してから腎臟に來るものですが、恐らく他の源因からであらうと思つてゐます。』と醫者は頭を傾けながら言つた。

淸吉は、醫者が原因を明かにすることが出來ないだけに不安が深かつた。而して獨りで痳毒の內攻であらうときめて絕望的の氣分に引き入れられて鬱ぎ込んだのである。

彼は醫者の言ふことを信じなかつた。妻の言ふことも信じなかつた。室の中に凝としてゐるより、散步に出た方が、どれだけ心を樂しましめるか知れないと思つた。淸吉は妻が止めたのも聞かずに其日の午後から郊外散步に出掛けたのであつた。

しばらく逢はなかつた彫刻家のBを郊外に訪問して見やうと思つた。常に癒し難い病に惱んで來たB

に對して、始めて眞に同情することが出來たからである。清吉は久しぶりでBの窶れた顏を見ることが出來たなら、きつと今迄に感じなかつた深刻な意味を其の言葉の中に解せられるであらうと思つた。

狂人の瞳のやうに、氣味惡いまでに空の色が青く冴え渡つてゐた。黑土の上に新築の貸家が建てられた、停車場の附近に來ると、靜かな空氣を渡つて、木や、鐵(かね)を叩いてゐる槌の音が、何處か遠くて刎ね返るやうに、しかも尖つてゐて鼓膜を刺す如く響いて來た。

清吉は、青い色で塗られてゐる停車場の橋を渡つた。いつとはなしに風が持つて來て遺して去つた埃りが欄干の上に溜つてゐた。其の埃りを何處からともなく、空の一隅から吹いて來る風が消しつゝあつた。清吉は向ひ側に降りた。其處には幾人も茫然として空の下に立つて、電車の來るのを待ちつゝあつた。清吉は其等の人々を眺めてそれ〴〵の生活を異にした階級と貧富の懸隔といふやうなことについて考へて見た。大きな風呂敷包を抱へて立つてゐた女があつた。二十三四である。派手な羽織を着て、新しい白足袋を穿いてゐた。是れから落付く處を探さなければならぬと思案してゐるやうにも其の樣子が見られるのに、一陣の風が無殘に裾を吹いてゐるのも寒げである。

清吉はしばらく其の女を見守つて、此の都會の中にはかういふ種類の街から街へ流浪してゐる女の群があることを思つた。

やがて此處で西へ、東へと兩方から來た電車が交叉した。而して其等の人々は散り〴〵に別れた。清吉は窓硝子を透して、寂寥とした田や圃を見た。遠近の景色が淋しく胸に迫つて來た。鉛色の地平線が重

若しく感覺を押へ付けた。

彼は自からの肉體の秋を思つたのである、餘毒が腦を冐し、胃腸を冐し、あらゆる機關を冐して、此の冷たい鉛色の景色の如く、銀色をした神經の荒んで行く日のことを考へたのである。

いろ〳〵の女にも觸れて見た。まだ彼方の空の下には遊んだ街がある。其處には天井張の低い二階があつて、其のうす暗いやうな室には、生活に疲れた女がゐる。或る者は飯を食べずに眠りを貪つてゐる或る者は自棄になつて唄をうたつてゐる。白粉と脂肪に汚れて特有な女の匂ひに染んだ、色彩のどんよりとした艶めかしい着物が、うす黄色い粗末な塗方をした壁にだらりと生々しく搖下つてゐる。其處の窓からは、彼方の家根が見え、また白壁などが見えた。

無爲に、物憂く、ただかうしてゐても時間は流れて行く。同じい世界には、働く者、働かぬ者、いろ〳〵である。煙突から黑い烟の出てゐる、家根の下には、幾人か忙しさうに働いてゐる有樣が目に浮んで來る。淸吉は。よく女と共に此窓際から、他の家や、街の往來などを見てこんな空想に耽つたことがあつた。而して、やがて夕日の光りが、弱々しく燐の燃えるやうに白壁の上にほんのりと映つた時、何思ふともなく、女と二人が默つて其の白壁に向つて立つてゐたのであつた。

ある時は瞼の邊が黑ずんだ女の顏を、厭々した心持て横目に見やりながら、なんて自分はこんな馬鹿げたことをしてゐるのだらうと思つたことがある。

けれど出來るだけ多くの女を知りたい。これが自分の願ひであると思つたこともあつた。此の地上

に男といふものと、女といふものと兩性に別れてゐるといふことが最も否定し難い事實であればと思つた。

ある時は、何によらず、すべてを知ることは不可能だと思つた。女をなんて好むか。美を愛するからである。また自分で問ふて見た。しからば藝術をなんて好むか。やはり美を愛するからであつた。藝術が永遠に生れ新たなる如く、女の美を追ふことは無窮を究めやうとするに等しい。

また死は一切を無にするものだ。自分は死と共にすべての快樂を捨てなければならない。同時に此世界で受けるあらゆる苦痛を忘れてしまふであらう。死を思ひ、虚無となる時を考へた時には、其處に幸福も快樂も苦痛も悲しみも喜びも、畢竟此の生にとつては無差別の、同じい無價値な極めて刹那的の幻影に過ぎないものであるといふやうな感じがした。

生の裏に死がある。生と死は同接する。今日生きてゐるといふことが偶然であれば、また今日死なずにゐるといふことも偶然である。生きてゐるものは、死なずにゐる」ふことを不思議だと思はなければならない。同時に生といふことを考へなくてはならない。

すべて生きてゐる者は、生を愛護せなければならない。死はすべての者の終局である。いかなる快樂も、生を危うするものであつたならば、眞の快樂ではなかつたといへる。生を愛護する心が、即ち幸福の意識であり、生を力つけるものが、即ち快樂でなければならぬ。

清吉は、自からの生を樂しまんために、體を壞したことを思つて、獨り後悔をしたのである。見覺え

のある痩せた女や、また愛くるしい眼付きをした、肉付きの豐かな女の顏や貌などがあり〳〵として眼に浮んで來るかと思ふと、忽ち消えてしまつた。

清吉は、電車の窓から覗いて、たゞ白く光つて、空の光りを受けてゐるレールが果しもなく、淋しい野の中を走つてゐる行手を眺めてゐた。「枯れた木立の葉が黄色くなつてゐた。

七

清吉はN停車場で下車した。停車場は崖の下にあつた。坂を上つてから振向くと遠くに市街が見えた近路を取るために、彼は墓場を横切らうとした。

此處で、思ひがけなくBに出遇つた。清吉は直に眼の落窪んだ、頬にも大分髭の延びた何となく此前見た時よりは著しく窶れて來た彼の貌に注意した。

「此の頃は體がいゝかね」と清吉は友の顏を覗くやうにして言つた。而して心の中で充分彼に同情したのであつた。

「あゝ、あまりよくもないが、惡いのが平常のだから、何とも思つてやしない」とBは自身では、あまり氣にしてゐないやうな様子であつた。

此時Bは、ちやうど其日から開場になつた△△展覽會へ行く處であつた。其の會にはBの製作した塑像が出品せられてゐたので、昨日招待會があつた時に一度行つて見てゐたにかゝはらず、此日も行つて見るのだといふことを聞いた。其時清吉は、他人の作品を見に行くのでない。Bは自身の作品を見に行

くのだと思つた。其の事は、彼の話て分つた。

Bは歩きながら、多くの出品について批評した。一言すれば其等のものは力の缺けてゐる、形ばかりを作つたものだと言つた。而して其の人々の名すら擧げて、其等の人々を罵倒することを何とも思つてゐなかつた。

清吉はBの批評を聞いてゐるうちに、幾たびか却つてBの言ふことに對して反感を抱かざるを得なかつた。さうBの言ふやうに、多くの作家が無自覺の者ばかりであるとは思つてゐなかつたからだ。

『君の作は、自分てはどう思つてゐるんだね。此度の出品についての感想を聞きたい。』と清吉はBに言つた。

二人は濕っぽい、うす暗い、墓場の路を右に曲り、左に折れて歩いてゐた。路の上に轉がつてゐる墓石もあれば、深く穴の中に落ち込んでゐるのもあつた。また昔からあつた石地藏などが、今ても草深く埋れてゐて、僅かばかり青苔の生へた面が、路に向いてゐて、通り縋りに目に付くやうなのもあつた。そんなものを見ると、清吉には、既に自分等の前に此の地上から去つて、何處にか影も形もなく消えてしまつた人々のあることを考へずにゐられない。而して、陰氣な氣持を惹き起したのてあつた。

黄色く色づいた葉が、此處ても木から腐れて落ちるやうに、靜かな、いつか曇つて來た灰色の空氣の裡て、心なく散つてゐる。其れを見て、今、二人はこんな話をしてゐるが、いつか何方(どちら)かゞ先に此の世界から去る時があるのだらうと思つた。さう思ふと清吉は、熱心になつてBが藝術のことなどを語つて

ゐるのがつまらないことだと考へられた。

此時Bは、自分の作品を説明してゐたのである。而して、自分は何か摑んでゐるものがあるつもりだと言つた。Bはまた獨り作家についてばかりでなく、批評家にも物の分らない人々が多いと言つた。最後にかう言つた。

『どうせ己の作品などは、生きてゐる間はよく言はれつこがないよ。見てゐたまへよ、己が死んでしまつたら、其時己の作品が何と世間から言はれるだらうか。死なくては分からない。』とBは、自分の死が即ち此の冷淡な社會に對する最後の反抗であると信じてゐるらしい。

淸吉は考へた。Bの思つてゐるやうな事實が、此の世間に幾らもあるのも事實である。死と共に其人に對する反感が消滅して、却つて其人を懷しむに至るやうな場合が少なくない。寧ろ其れが人情の常であらう。ちやうど何人でも自分より弱い者はこれを憐憫に感ずる如く、これを人生の殘忍な遊戲の一つとして見做すことが出來る。此の意味からいへば、淸吉はBの考へに一致することが出來なかつた。

『君は、死後のことを何うして知ることが出來るか』と淸吉はBに聞いたのであつた。

『自分の生命は作品に宿つてゐる。自分は信仰を持て作品に從事する。この感情とこの至誠とが、何時か人生を動かさずに止むものでない。』とBは靑褪めた顏に、紅を濺いで興奮した語氣で答へた。

淸吉はこゝに始めて、二人の藝術家が歩きつゝある路の相違點を見出した。一人は信仰で步いて行く一人は信仰を持たずに步いて行く。一人は理想が即自分である。一人は現實が即自分であるといふことと

てあつた。

清吉は、此時に心に堪へかねてから言つた。

「自分は藝術を認めてもらひたいとは思はない。自分のすべてを表現する、この生きてゐる間の人格を認めてもらいたい」と憤る如く叫んだ。

「死後は？」とBが清吉を見て言つた。

「虚無ぢやないか」と清吉は答へて、Bの顔を見守つた。

二人は展覧會場を慌しい心持て一周したのである。非常な盛況て、其日は幾千の人が入場したのであつた。二人は雜沓の中を押し別けて歩いた。外界の煩はしいいろ〳〵の刺激のために心が亂れて、清吉は多くの作品に對して瞑想することも出來なかつた。Bは特に注意するものもないといふ風て先に立つて早足で歩いた。而して、自分の作品の前に來た時歩みを止めた。彼れはしばらく自分の作品を凝視してゐた。後に立つてゐる清吉を顧みて、

「まだ物足りない處もあるけれど、力だけは出てゐるつもりだ」と言つて、ぐる〳〵二度ばかり作品の周圍を廻つて、尙ほ眼を自作の上から放さなかつた。

「面白いね」と清吉は言つて、同じくBの作品を見守りながら、眞に力の跡を認めたいものだと心が焦つた。けれど專門の智識がなかつたので其の價値が分らなかつた。

二人は其の作品の前から離れたが、Bは尙ほ後に心が惹かるゝやうな樣子てあつた。清吉は、誰しも

同じいやうに我が作品に對する愛着の念を發することが出來た。

Bは二三歩來かゝつた時、

「この甚い塵埃の中に、いつまでもゐては肺に害るだらう」と獨言のやうに言つて、鼻を掩うて立止りながら、後れて來つゝあつた淸吉を促すやうに言つた。

淸吉は默つてBの後に從いて場内から外に出たのであつた。

「どれが賞に入るだらう」と淸吉は自ら考へながら、Bに話しかけた。

「作品が優れてゐるからではない。始めから誰にやらうといふことが決つてゐるんだ」とBは冷かに言つて、現今の美術界に暗流となつてゐる黨派的の暗鬪、嫉妬、猜疑、といふやうなものを露骨に語つて聞かせた。其等の中心人物には、淸吉の如き局外にゐる者は、立派な人であらうと豫想したことのあつた、智識ある人々の名も擧げられたのである。淸吉は心のうちで私に、そんなやうなことがあり得べきかと疑はざるを得ない卑劣な事實もあつた。もつとも何の方面の社會にも其れに似たやうな事實がある淸吉は、自分に最も關係のある社會についても稍々其れに似たやうな例を數へることが出來た。

公園を歩いて、赤い大きな建物の下を通る時分から、雨が降つて來た。二人は雨に濡れながら、格別急ぐ樣子もなく、互に別々のことを考込んでゐて默り勝ちに、來た時と同じい墓場の路を辿つたのであつた。

黃色な葉が、拔髮のやうに、音もなく落ちてゐる。陰氣な重々しい常盤木に雨がかゝつて、濡れた葉が光つてゐた。

八

Bのアトリエは低地に建てられてゐたので、平常ですら日の光りが前になつてゐる建物に遮ぎられてよく當らなかつた。地面は濕氣に滿ちて、草は自然に生へて伸びるに委してあつた。清吉は此處に來る毎に、不健康地であつてBの體によくないと思はぬことがなかつた。

雨はます〳〵強く降り出した。室の裡がだん〳〵暗くなつて來た。殊に火の氣もないがらんとした大きなアトリエは、うす黑い冷たな空氣が占領してゐて寂然としてゐた。彼方の壁には製作の時に白い土の刎ね上つた跡が際立つて見えてゐる。此方の隅には臺の上に頭を切り取つた女の裸體像が置いてあつた。

清吉はBと對ひ合つて腰を掛けてゐた。二人は互ひに興味を惹くやうな話にも出遇はなかつた。清吉は目下本屋と交渉してゐる、舊稿の出版が纏るやうな話になつた曉には、Bに裝釘を賴みたいと思つたので、其のことについて話した。其の後はまた沈默がつゞいた。「もうこんなに暗くなる時分だらうか」とBが言つて起ち上ると、彼方に行つて壁の下の方に付いてゐた窓の戶を開けた。隣家と境になつてゐる垣根の處に小さな竹が五六本生へてゐる。其れに雨風が吹き當て、悲しげに搖れてゐるのが窓を透して見られた。清吉は、何となくこんな處に、かうしてたゞ獨りで住んでゐる病めるBの上を賴りないもの、やうに思はれて、淋しく感じた。彼は雨のために歸る機會を外して、つひ遲くなるまでゐたのであつた

Bは胸が痛み出して來たと言つて次の間に入つた。而して黑い色の塗藥の罎を持つて來て、清吉のゐる

前て兩肌を脱いて、筆の頭に其の黑い液を浸して胸の痛むあたりに塗つてゐた。これを見てゐる清吉はいつしか言ひ知れぬ暗い氣持がして來た。

「もう己もどうせ長くはないよ」とBは兩肌に脱いだ着物を被せながら言つた。

「今頃の天氣は分らぬものだなあ」と清吉は他のことを言つて、返答に苦しく感じた其場をまぎらした

二たび死のやうな沈默が二人の間に入つて隔てを置いた。

此時、不意にアトリエの扉を叩く音がした。二人は其方に默つたなりて瞳を向けた。

小さな叩き音がつゞいてした。

「お入りなさい」とBが言つた。

清吉は誰れか來た、どんな人かと思つて瞳を凝らしてゐた。扉が開いて入つて來たのは女であつた。頭髮の縮れた、色の白い、弱々しさうな女であつた。紫色の袂の長い羽織を着て、若々しい黑味勝の眼の中に、人を射るやうな激しい感情の閃めきを含んでゐた。

Bは、訪ねて來た女が繪を書く人だと言つて清吉に紹介した。

女が來ると共に清吉は、心が自分を急立て歸るのを促すやうに感じた。彼はしばらく苦しい沈默を守つてゐた。Bと女とは展覽會の作品などについて語り合つてゐた。

清吉は、是れから獨りて歸る郊外の暗い路筋などを考へてゐが、いよ〳〵歸らうと思つて別れを告げた。此時Bは、三人て街へ出て食事を共にしやうと言つた。清吉も、同意せざるを得なかつた。

三人は雨を冒して停車場に來た。構内の燈火は闇剪いて地上に達し、レールの上が氣味惡く照らされてゐた。うす暗い扣室には威外套を着た人や、雨傘を携げた人々があまり口も聞かずに體を動かしてゐた。中には默つて片隅の方に獸物が踞まつてゐるやうに、腰を掛けて眠としてゐるものもあつた。Bと女は並んで、其時ほんのりと遠い空が明るくなつてゐる街の方から。暗い此方に向つて走つて來た電車の火を見守つてゐた。やがて其の電車が構内に入つて來ると家根から雨の雫が滴つてゐるが、燈火の光りに映つて水銀の球を連れたやうに美しく見えた。

『顏を知つた人に見られるといけないから、彼方へ行つてゐらつしやい』とBが、小さな聲で女に囁いた。女は逃げるやうにして、扣室の内に隱れた。

いくつかの顏を乘せて、其の電車が去つてしまつた。やがて暗い、淋しい方から擂れ違ひに電車が入つて來た。三人はこれに乘つたのであつた。

清吉も、Bも降りる時まで立ちつゞけてゐた。女一人だけが、漸く腰をかけることが出來た程に、其の電車は滿員であつた。

明るい街に、しと〳〵と暗い空から銀のやうな雨が降り注いでゐた。電車から降りた三人は多くの人々と共に此の廣い賑かな巷に吐き出されたやうに、泥濘を拔足して、前後して歩いた。低い下駄を穿いてゐた清吉は殊に足許にばかり注意がとられて、傍を過ぐる電車や、自動車の音を夢心地に聞きながら歩いてゐた。

三人は、電車通りに出て、片側のちつよとした食物店に上つて食事をした。此時、淸吉は女に話しかけて、住んでゐる町などを聞いたのであつた。恐らく、二たび此の三人か食事と共にするやうな機會がなかつたらうと思はれた。殆んど一年に一度Bと顏を遇はすか遇はさずに來たことを思へば、此の次にBと遇ふ日も何時であるか分らないのである。

三人は此店を出てから、四角の處にあつたカフェーで珈琲を飮んで、其處から出るといよ〳〵淸吉は二人と別れることになつた。彼方ではイルミネーションに輝いた白塗の活動寫眞館から、たへず樂隊の奏する賑かな音色が聞えて來た。

「今夜、どうも胸の具合が惡いようだから、醫者の許へ行かなければならない」とBが立止つて淸吉と別れる時に獨り言のやうに言つたのであつた。

「また遇はう、體を大事にしたまへ」と淸吉はBに向つて言つた。而して別れた。

淸吉は、獨り、前から來る人を避け、後から來た車に道を開いたりして、下を向いて考へながら歩いて來た。やがて五六間來た時分に振向いて見ると、今迄其處に立つて自分を見送つてゐたらしい二人が並んで反對の方角に向つて行きつゝあつた。

淸吉の歩いて行く前には、寂寥と闇とが、はてしもなく橫はつてゐるのであつた。

(をわり)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●中央公論讀者直接注文送料不要□二冊以上直接御注文一割引送料不要●

新春發賣好評小說書類

森田草平
藤井達吉裝

踊（をどり）

小說七篇
定價金壹圓也
送料金八錢

久しく著書を出ださざりし著者の最近の努力よりなる小說七篇を收む。著者の最も自信ある踊及名取弟子には女の心の宿命を描き、彼及博徒の群に於て男の運命を描けり。

ストリンドベルヒ著
松本武雄譯

戯曲 罪

定價七拾錢
送料金六錢
長篇三幕

ストリンドベルヒ氏の「ガスタアブ・アドルフ」を譯述せるもの。異國の女性の不安を描く、長篇三百枚

長田幹彦
日高島助裝

旅役者

長篇三篇
定價金壹圓也
送料金八錢

かの天鵞絨の手觸りに似たる東山と、暖かき春の雨を含む寺々の鐘の響く京都を捨て、吹雪に暮るゝ北海の原野に放浪せる旅役者の群に投じ、華の如き彼等の生活より得たる三長篇

鈴木三重吉作
津田青楓裝畵

桐の雨

定價金壹圓
送料金八錢
小說四篇

たとへばナスタアシアムの花の如く美くしくて果敢なき女の宿命よ、若き生涯を色彩りゆくローマンスよ。著者が命を削る思ひ之を描き出せる四長編

後藤末雄
藤井達吉裝

素顏

小說七篇
定價金壹圓也
送料金八錢

素顏に現はるゝお妻とおぬひ。面影のお袖とお浦。死繪に出づる繪草紙屋のお艶。若き乙女達の痛み易き胸には絹絲よりも細き私語の聲も泌々と刻まれるであらう。娘達の戀物語七篇

長田幹彦著
中澤弘光裝畵

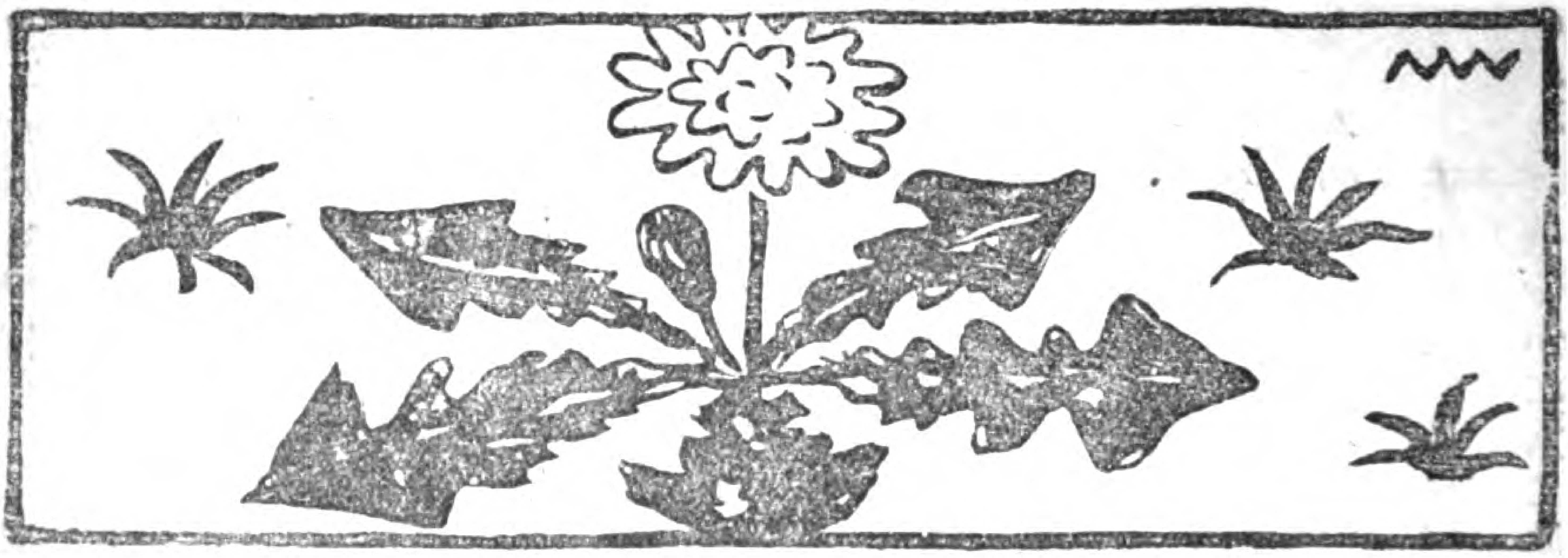
祇園

定價金壹圓
送料金八錢
小說十二篇

優雅なる舊都の風光を叙し、紙燭ほの暗き祇園の夜を寫し、花の如き舞妓の美くしき十二篇の物語を集めたる本書を京都を愛する讀者及京都を知らぬ讀者に勸む。

發行所
東京市日本橋區通二丁目九番地
振替貯金東京口座二四六二三番
濱口書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



初旅

正宗白鳥

櫓は棹に代つた。油を流したやうな水の上を、二挺櫓で荒く亂した。私は舟に乘つた時から絶えず陸の方へ身體を向けて、埠頭場や自分の家の二階を見詰めてゐた。夜具や食物を舟へ持込んで呉れた下男は暫く岸に立つて見送つてゐたが、その顏も見えなくなつた。

四五人の小さい影や大きな影が、やがて埠頭場に現はれたが、その中には弟や妹がゐるのに違ひないと思はれた。誰れかの手で高く差上げられてゐるやうなのが妹らしかつた。「二人とも大きな聲で泣いてゐるだらうな」と可愛相さうに思つたが、付纒つてゐた二人を甘く騙して駄菓子を買ひにやつて、その間に祖母を急立てて家を立て來たことが、さも自分の手柄のやうにも思はれた。もう少し遲か

つたら追付かれて困るんだつたらう。

人影は消えて、自分の家の白壁も見えなくなつた。小高い寺の鐘突堂も見る〳〵島に遮られた。赤い岩の突出た島の角を廻ると、私は見馴れた村から全く離されてしまつた。左右の山の麓の麥畑や藁屋などが新たに目に映つた。村の裏山の絶頂から見下したことのある鍋の形をした小さな島が、直ぐ鼻先に現はれた。

私はふと弟や妹が懐かしくなつた。これまで知らなかつた淋しさが胸に湧いた。先つきから船頭と頻りに話をしてゐた祖母の方へ向直つて、「此所は何所なの」と聞くと、片手で櫓を操つてゐた喜多次は、「あれが大多府だ」と指差しゝて教へて、「坊ちやんは船に酔ひなさらんか知らん」と氣遣はしさうに云つた。

「船なんかに酔ふものか」

私は健氣にさう云つたが、船旅の經驗はまだ記憶になかつたのである。三四歳の頃、母に抱かれて和船で内海を横切つて、母の故郷へ行つたことがあるさうだが、その時の光景は全で忘れてしまつてゐる。魚を釣つたり泳いだりして、海には絶えず親しんゐたけれど、静かな入江から他郷へ漕出したことは、その後一度もなかつた。……十二歳の大阪行が、私に取つては眞の初旅のやうであつた。

正午過ぎに村を出た船は、四五里を隔てたW—といふ港でその夜を過ごすことゝなつた。初夏の日はまだ華やかに水に映つてゐた。檣の高い千石船や漁船が群つて、荒々しい呼聲が船から船へ響いてゐた。

歩板を撓らせて大きな石を船の中へ運んでゐる赤裸の四五人は身體から汗を滴垂らせて喘いでゐた。見てゐると、その人達は夕日を背に浴びて燃えてゐるやうだつた。

「祖母さん、あれを御覽よ。重たさうだな。何所へ持つて行くんだらう」と、私は聞いた。

「あんなのが石碑になつたり、お宮の玉垣になつたりするんだ。×村の八幡樣の鳥居もこの邊から持つて行つたんだよ」

「あの大きな鳥居が……」私は自分達の船がその大船の側を掠めて通る時に、よく氣を付けると、成程お墓になりさうな石が幾つも積まれてあつた。

近所の石の出る島の話を聞かせながら、船頭の多喜次は、棹を執つて船の間を分けて岸へ寄つた。途中で幾度も海の中へ釣るしては水を變へた商賣物の鰻籠を開けて、上つた魚を抓み出して、後はまた海へ浸した。多喜次は晩の食料に二三尾を殘して、後の上つた魚を手桶に入れて、「こいつを賣つて酒を買つて來るから、貴樣は飯を仕掛けて置け」と、子分の勘造に言付けて陸へ上つた。

私も町を見たかつたけれど、祖母は大儀がつて動かないし、一人で行くのは恐ろしかつたので、仕方なしに船に留まつて、この町の話など聞いてせめてもの心遣りとした。小學友達のKさんの生れた家はあの邊だとか、子供時分から耳に觸れてゐる漢學者のS先生の家は其方だとか、祖母に敎へられて、その方向へ目を注いだ。日は次第に薄らいで、快い涼しい風がそよ〳〵と沖から吹いた。柔しい波が船端に觸れて、眠りを促がすやうにゆるやかに船を動かし出した。陸にも船にもちら〳〵燈火が點き出した。

石を積んだ船に一番大きな燈火が點いた。廣い帆を低く上げてゐたが、その高い帆柱の先では白い鳥や薄黒い鳥が屢々羽を休めた。やがて船は薄明りの中を微かに動き出した。

「あれはもう出て行くんかい」と私が聞くと、釜の下を燃付けてゐた勘造は、火點つた顏を上げて。

「なあに、もつと沖へ出とくだけだな」と答へて、目を顰めて空模様を見ながら、「少し空模様が變だな」と呟いた。

私はふと氣に掛つて空を見廻したが、何所にも雲の片影さへ見えなかつた。星は遥かな沖の方にも光つてゐる。て、一先づ安心したけれど、星の光や左右の微かな燈火には夜を照らす力がなくて、刻々に迫つて來る闇は見詰めてゐる私の心を脅かした。晝間面白さうに見てゐた海も、黒く怖さうになつた。

私は竈に燃えてゐる火の光や、逞ましい赭ら顏の勘造や、蒼白い祖母を、手頼りとして懷かしく思ひながら、父や母や弟や妹が釣ランプの下て食事をしてゐる自分の家の樣子をまざ／＼目に浮かべてゐた。

「もう何日かゝつたら大阪へ着くだらうな」と、私は勘造に聞いた。

「さうさ。日和さへよけりや三日だが、風が出りや何日かゝるか分らん」と、勘造は卒氣なく答へた。

そこへ、多喜次が德利を提げて歸つて來た。知人の家て御馳走になつたと云つて、酒臭い息をしてゐた。「飯が出來たら先に坊つちやん方に上げて、貴樣はこれを燗をせい」と勘造に命じて、煙管を啣へながら祖母の方へ向いて、「御退屈てせう。何かお慰みになる事があるとよう御座いますがな」

「御飯を食べたら寢るからいゝよ。明日から播州路へ入れば、晝間は船から名所見物が出來るし、陸を

車て行つたりするよりや、どれほど氣樂てい丶か知れんぞな」

「そりや景は至極よう御座いまさあ。淡路島を横に見て、明石から舞子の側を通る時にや、私なんぞても歌の一つぐらゐは讀む氣になります」

「若しも坂越へ寄れるやうてあつたら、お地藏樣へお詣りしたいものだ。あのお地藏樣へはこれが生れる前に代參を立て丶願掛けをしてゐながら、まだ一度もお禮參りに行かんのだから」と、祖母は私の方を顧みた。

どんな願掛けをしたのだらう。石佛なんぞに祈つたつて何の役に立たうぞと、私は竊かに嘲つたが、しかし、自分に關係のあるその坂越の石地藏とかは見たくなつた。明石や須磨は名を聞いてさへ胸が躍つた。

「其所へは二三日中に行けるか知らん。祖母さんは行つたことがありますか」

「よう覺えては居らんけどな‥‥」

祖母は四十年も前に、曾祖母に隨いて西國巡禮をしたことを、朧ろ氣な記憶を辿つて途切れ〳〵に話した。幾度も聞かされてゐるのだけれど、初旅のこの舟の中ては身に染みて感ぜられた。‥‥春の日の暮れ方紀三井寺へ詣つて御詠歌を唱へて和歌の浦を眺めながら里へ下りて、ある由緒ありげな家て宿りを求めると、其所の主人が二人の顏をつく〴〵見詰めて、中々人品のい丶巡禮さんだ。「醫者か坊主か神主か、但しは長か。一か二か」と聞いたから、「これても武士の家に生まれたのぢやわいな」と、曾祖母

が答へたと祖母は語つた。その言葉は昔の響きを傳へて床しかつた。

勘造は先つきから焼いてゐた鰻を盆に乘せて持つて來た。飯は釜から直かについて呉れた。少し蒸氣のある温かい飯を空腹へ掻込みながら、「船の御飯はお甘いよ。大きな船へ家中の者が乘つて、方々へ漕いて行つたら面白いだらうな」と悦しがつた。勘造は舟玉樣へお燈明を上げたり酒を供へたりして、自分達も盃を執つた。

私は飽くまで食べて腹帶を緩めてから、暫く忘れてゐた周圍を眺めた。何所からも人聲は聞えなくなつて、岸を洗ふ波の音ばかりが耳へ入つた。「さあ、もうお休みな」と、祖母は夜具を延べた。私は衣服を着たまゝ横になつたが、背は痛いし狹苦しくて、快く寢入り難かつた。と、ふと海へ下ろされた籠の中の魚がパチャ〳〵音を立てゝゐるのが耳についた。仰向いても寢返つても、星ばかりが目に映つた。何日もこんなにして寢なければならぬかと思ふと、不安心でならなかつた。て、身體を持上げて艫の方を見ると、赤い顔した二人が賭博をやつてゐるのか、胡座を掻いて毛脛を出して賽を轉がしてゐた。「坊ちやん、まだ寢なさらんのか」と、多喜次はやがて此方を顧みて、「今苫を掛けて上げますぜ」と云つて、目顔で勘造を差圖した。

菅茅の荒苫で圍まれて、廣い夜から目を遮られたゞけても、心が稍々安まつて、何時か深い眠りに落ちた。

目を醒ました時は、最早朝日が枕許に差込んでゐた。苫を取つて顔を出すと、蒼い波は皺をつくつて

ゐたが、風はさして強くはなかつた。何方を見ても日は冴えて、町の後の青葉に包まれた小山の方へ家々の朝餉の煙が吹流れてゐた。勘造は夜明け前にその日の飲み水を汲んで來て、湯も沸かして、食事さへ濟めば漕出す用意をしてゐた。

かの石船は斜めに帆を揭げてそろ〳〵動いてゐた。私達の船も帆柱を立てて港を乘出した。多喜次は啣へ煙管で梶を取つた。港を離れると、横さまに風が吹付けて、船も稍々搖めいた。「寢て居れ〳〵」と、私に勸めながら、祖母は枕を出して横になつた。が、私はわざと元氣を見せて、彼方此方と座を移しては眺めを貪つてゐた。昨夕の港は次第に影が薄くなつて、船は播州灘に差しかゝつた。木の葉のやうに散らばつた漁船の間を九州通ひの汽船が水を切つて進むと、うねつた波は私達の船にも突掛つた。私は思はずよろめいて、蒼くなつて船端に攫まつたが、すると、多喜次は赤らんだ小さい目で笑つて、「坊つちやんも、あの蒸汽船へ乘つて大阪へ行きなさりやよかつたのに。九蟠へ行つて乘りなさりや、一日で大阪へ着きますのに」と云つた。

私もさう思ひながら、汽船を見返つてゐると、祖母も頭を持上げて遠く見やつて、「蒸汽は早いけど、臭い匂ひがするから嫌ひぢや。矢張遲くても、乘りつけた船の方がいゝ」と云つた。

「だけれど、僕は蒸汽船へ乘りたいな。あんなのに乘つとれば、どんなに風が吹いても心配はないだらうな。……僕は歸りしなには是非蒸汽船に乘りたいよ。祖母さん、さうして呉れませんか」

「ぢや、お前一人で乘つて御覽。一人で家へ歸れるかい」

「えゝ。一人だつて構はんさ」

私は元氣を裝つてさう云つてゐる中にも、胸苦しさを覺えた。て、思はず首俯しになつて口の中に浸み出る唾を吐いてゐた。これが船醉ひか知れないが、これぐらゐて醉つたりしては昨日の廣言の手前が恥かしい氣がしたので、懸命に我慢して見たけれど、次第に息をするのも術なくなり出した。「赤穗の御崎が見え出した」と船頭は敎へて呉れたが、恐ろしい海へは目を向けないで、横になつて身體を縮めて爪の先て舟板を毟つてゐた。今まで氣のつかなかつた潮の香や魚の臭ひが鼻に浸入つて厭な氣持を起させた。勘造が魚の水を替えにかかると、船は一層激しく搖めいた。私は陸が戀ひしくなつた。靑葉の繁つた裏庭のすがく〵した空氣を吸ひたくなつた。「もう二度と船には乘りたくない。……このまゝ島へても何處へても上げて呉れゝば」と願つてゐた。

「もう醉ひなさつたな。」と多喜次の聲がした。「逆つくんなら、海の中へどしく〵お吐きなされ」

うとく〵してゐた祖母は、その聲で目を醒まして、私の側へ匐寄つて、私の背を摩つて呉れた。私は最早堪へ切れなくなつて、船端へ手を掛けるや否や、ゲロく〵胃の腑の中の物を吐いてしまつた。が、すると、稍々氣持がよくなつたので、顏を上げて見渡すと、何時か陸近くなつてゐて、磯馴松や藁家などが鮮かに目に映つた。

「些とは氣持が直りましたか。」多喜次は元の所に緖い胸を出して悠長に足を伸して笑ひながら、「これつばかりて醉つちや仕樣がありませんぜ。此處等は丸て泉水の中と同じだ。これから鳴門を出て、熊野沖か

土佐沖へ行つた日にや、どんな日だつてこんなものぢやない。三四年前に紀州の勝浦でレンコ鯛を積込んで出て、大風雨を喰つた時にや、勘造でさへ反吐を吐きやがつたんですぜ。……あの時や貴樣も弱つたなあ」

「うん」と、勘造は鰻籠を船底へ收めた後で、棕櫚箒で舟板を磨きながら、唸るやうに答へた。

「だが、二三度あんな目に會つときや、貴樣も一人前にならうあ。」と、多喜次は親分面してえらさうに云つて、「しかし性分だな。白髮の生へるまで漁夫になつとつても、時と場合て波に中てられて病人のやうになる奴があるからな。」

勘造は船の穢れを氣にするのか、私が汚した船端を直ぐに拭つた。私はつとめて氣を引立てたが、苦い汗が湧出て胸が詰まるやうだつた。目を瞑つて手を投出して、微かに息を吐いてゐた。午餐は用意されたが、箸を執る氣もしなかつた。せめて何處かの港へ早く着いたらばと願つたけれど、日はまだ眞上に輝いてゐた。風の工合がいゝから今日は飾磨泊りだと、船頭が話し合つてゐるのを聞いて、私は飾磨といふ土地を待焦れた。大阪や西京は今は念頭に浮ばなくて、只磨飾へ着くことがこの舟旅の目的のやうに思はれ出した。……飾磨へさへ着いたら裸足て冷たい土を踏んで、思ふ樣陸の夜風に觸れてやらうと、それを樂みに術ない氣持を慰めた。室津の港をも一寸首を上げて見たばかりだつた。子育地藏のある坂越の方を指差されると、祖母は合掌して何やら祈つてゐたが、私はその方へさへ碌に目を留めなかつた。祖母と多喜次とは折々村の噂などしてゐたが、勘造はそんな話には加はらないで、時々出拔けに聲を

張上げて唄を唄つた。

午過ぎから南風は勢ひを増して、薄黒い雲も現はれた。船は陸から遠くなり近くなりして進んだ。飾磨の港へ近づいた時には日がまだ高かつた。船首(みよし)を廻して港へ入りかけると、船は急に烈しく波に揉まれて飛沫は私達の顔に觸れた。帆は卸されて、二挺櫓は力を籠めて操られた。

碇が卸されて船が繋がれると、私はよろ〱と立上つて、直ぐに陸へ上らうとした。「遠方へ行かんやうにおし。そして、歸り途を忘れんやうに」などと戒める祖母の言葉をよくも聞かないで、急いで岸へ飛上つた。踏み應へのする安固な土を踏むと生返つたやうな氣がして、ぐら〱した船は見るも厭になつた。模樣のやうに牡蠣の殼の喰入つてゐる舟板を壁代りにした煮賣屋の角を曲つて、町の中へ足を進めた。

人家を離れた小高い砂丘には低い松が疎らに生へて、その眞中に小さな叢祠(ほこら)があつた。扉には繪馬や草鞋が釣下つてゐた。私は暫くその前の石に腰を掛けた。港は一面に見下ろされて、薄墨色の雲の彼方にはぼんやり淡路島が見えた。港の外の小島は雲間を洩れた夕日に煙つてゐた。私は夕日を受けて黄金色に耀く郷里の前の小島を思出した。阿彌陀如來の金色の光の差してゐる淨土の繪圖を思出した。そして、美しい日の入りを其處で見てから丘を下つたが、まだ船に乘る氣にはなれなかつた。四辻に立つた道しるべには、姫路や大阪への里程が刻まれてあつたが、それを見ると、此處から陸路を通つて大阪へでも何處へでも行きたくなつた。竈を燃付けてゐる家や、膳立をしてゐる家を見ると、家の中で食事をする人が羨ましくなつた。

饑えを感じながらも、まだ反吐さうな氣持がするので、私は薄暗くなるまで町を散歩して海岸へ出た。細い燈火の點いてゐる自分達の船を見付けて安心して、暫く側の岸に蹲んで、芥を浮べた滿潮を見てゐたが、すると、ふと後から私を呼立てる拗造の聲がした。道を迷つたのかと思つて、其處中を捜してゐたと不平らしく云つた。

船では夕餐の用意をして私を待つてゐた。が、私は再び吐出すのが恐ろしくて、箸を執るのも躊躇された。船頭はこの夜も酒盛をしながら、日和の話などしてゐた。船頭の話を聞くまでもなく、私の目にも空模樣は怪しく見えた。雲は頻りに亂れてゐる。私は明日の旅も心元なくて、祖母に向つて頻りに訴へてゐたが、ふと、後に人の氣色がしたので、驚いて振返ると、不思議の姿をして女が船へ入つて來たのだつた。女は「御免やす」と云つて、苫の下を潜つて、無遠慮に船頭の側へ寄つて座つた。

「あれは誰れなの?」と、私は小聲で祖母に訊いた。

「あれが總嫁だ」と、祖母が答へた。

總嫁だとか遊女だとか云ふ名前は、以前から聞覺えてゐたが、見るのは今が初めてだつた。で、物珍らしく思ひながらその女の顏へ目を据えた。顏は小さいのに頭の髮は大きく重さうに結つてあつた。臙脂の濃い唇の間からニッと白い齒を出して笑つて、「煙草一服呼んどくれやすな」と云つて、船頭の太い煙管を執つた。

「何を迷つて俺等の船へやつて來たんだい。お前の好きやんは、今時分お前の家へ會ひに行つとるだら

うぜ」と、多喜次は笑ひ〳〵云つた。
「よさそうな船頭はんの顏が苫の間から見えたからやがな。……安うしときまつせ」
「大阪で商ひをして來にや、俺等の懷には一文錢もありやせんぜ」
「吝い事お云ひやすな。これだけに負けときますがな」
惣嫁は片手で煙管を持つて、相手の顏へ煙を吹付けながら、つと片手で多喜次の手を自分の袂の中へ引込んで、「あんたやから負けといて、これだけ。……え」と首を傾けた。
「高い〳〵」と、多喜次は首を振つたが、手は引出さなかつた。
「ぢや、かうしときますがな。……え」
惣嫁はさう云つても、相手が首を振るのを見ると、邪慳にその手を踏退けて、「勝手におしいな、吝い頭船はん」と睨んだ。勘造は面白さうに笑つた。
多喜次は女から煙管を取返して吸ひながら、「今日はお客樣がゐなさるから、安くも高くもお前達を相手にや出來んぢやないか」
「お家はんは横向いてゐやはるがな」と、女は振返つたが、私を見ると會釋して招いた。私は不快に感じて顏を背けた。そして、我が眞向きに見詰めてゐるのが、船頭達の邪魔になるやうに思はれたので、座を立つて苫の外へ首を突出した。外は眞暗で星一つ見えなかつた。岸邊の道から按摩の笛の音が聞えた。船と陸とで話をしてゐる高い聲が何處からか風に吹かれて聞えて來た。

「お家はんお八釜しう」と、間もなく女の聲がした。衣服の裾をまくつて岸へ飛上つてゐるのが見えた。「若い船頭はん、後から一人てわたいの家へお出てんかいな」と、振向いて呼立てゝから、女は闇の中へ姿を消した。「わはゝ」と勘造は大きな聲て笑つた。

私は苫の中へ入つて所在なさに身を横へた。多喜次は目を細めて身體を搖すぶり／＼珍らしく唄を唄ひ出した。勘造は寢そべつて拍子を取つてゐたが、やがて、「親方、一つやらうか。今夜はわしが勝つ番だ」と、釣箱の底から賽ころを取出した。

「あの總家を賭けるか……」

「何でも承知だ。今夜も負けりや、わしは只働きだ」

二人が賽を伏せたり起したりするのをチラ／＼見ながら、私は何時の間にか寢苦しい眠りに就いた。例になく夜中に二度三度も目が醒めた。二人は足の方へ薄い蒲團を掛けたばかりて手を投出し、高鼾をかいてゐる。祖母は足を屈めて微かな寢息を洩らしてゐる。私は自分ばかりてなく祖母の身をも哀れに感じた。そして「祖母さんは何故こんなつらい思ひをしてまて大阪見物に行く氣になつたのだらう」と怪んだ。

私がもぢ／＼身體を動かすと、祖母も目を開けて、「蒲團の外へ出んやうにおし、風を引くから」と戒めて、夜具の上から私を撫でた。が、蒲團の外へ出ようたつて出る餘地はなかつた。少しずり出れば頭は船端に閊へた。

夜が更けるに近づくにつれて、苫に吹付ける風は烈しくなつた。船底が小氣味惡く揺れてゐる。苫を揭げて覗くと小雨が顔に降濺いだ。小用に起きた船頭は大欠伸をして、「今日は一日骨休めだ」と獨言を云つた。

明るくなつても苫は取拂はれなかつた。夜具を片付けて、私達は船頭の働きの邪魔にならぬやうに片隅へ寄つたが、多喜次は雲行を眺めて、今日は船を出さぬことに極めて勘造に言渡した。私はそれを聞いて一先づ安心したけれど、つらい旅が一日長引くと思ふと悅しくもなかつた。

雨の雫は舟板の上にポタリ〳〵落ちてゐる。祖母は黑く染めた入歯を取つて退屈醒ましに磨いてゐる。勘造はずぶ濡れになつて水を汲んで來ると、褞袍に着替えて焙烙で蠶豆を炒り出した。多喜次は大胡座て煙草ばかり吸つてゐる。私一人は所在なさに苫の間から港の中を隙見して時を過ごした。

祖母は磨いた入歯を口に收めてから、枕を出して假睡をした。勘造は炒立ての豆を一握り私の傍へ持つて來て、自分達もポリ〳〵嚙んだ。私の外には風をも雨をも苦にしてゐる者はないやうだつたが、やがて二人のヒソ〳〵話を聞くともなしに聞いてゐると、祖母と私との事をも彼此云つてゐた。

「厄介者が乘つてさへ居らにや、この位の風は押切つて、正午から出掛けるのだがなあ。どうもあの二人が妨げになつて仕樣がない」と、多喜次が顰み面して云ふと、

「構ふことはない、どし〳〵船を出したらいゝぢやないか。一日違つても大分の損だぜい」と、勘造は尻上りの呆けた口調て云つた。

「しかし、さうも行かんしな。俺も浮つかり引受けて來たんだから」

私は二人の言葉を聞くと、肩身が狹くて心細くなつた。手頼りにしてゐる頑丈なあの二人が手頼りにならないやうに思はれた。「多喜次が隨いてりや大丈夫だ」と、父が安心して云つてゐたのに…………

私は目を据ゑ耳を澄まして、二人の話を聞洩らすまいとした。が、話は最早外へ移つてゐた。今年の漁の出來榮えや問屋の掛引や、私にはよく解らないことだつた。

「どうせ今日中には凪ぎさうぢやないから、午飯を食つたら遊んで來ようか」と、多喜次に欠伸交りて云つた。

「わしも陸へ上りたいな」と、勘造はニヤ〳〵笑つて、「昨夕の貸しがあるから、親方の行くとこへわしも連れて行つて吳れんさい。さうしたら貸しは帳消しだ」

「勝手なことを吐すぜ。俺が何處へ行くか分りもせいで」

「ふゝん」

勘造の奴小鼻に皺を寄せて厭らしい笑顏をしてゐたが、親方も承知したらしい口吻だつた。

そして、何處へ行くのか、茶漬で午飯を濟ますと、衣服を着替えて、私達を殘して陸へ出掛けた。祖母は煙草錢にと云つて、金を包んで遣つたやうだつた。

吹降りの中を、一本の傘を差合つた二人が、急ぎ足で歩いて、煮賣屋の角を入るまで、私は一心に隙見した。それが見えなくなると、祖母に向つて、「直きに歸つて來るんだらうか。何處まで行つたんだら

う」と訊いた。家にゐると同じやうに何時も落着いて、何があつても驚きもせねば、心配さうな顔もしない祖母は、「お酒を飲みに行つたのだらう」と靜かに答へた。

「お酒なら船で飲んだらいゝだらうに」と、私は不思議に思つて、「風がもつと强くなつて、船が流されてもしたらどうするんだらう。祖母さんはこれまで船で方々へ行つたんだから知つとるだらうのに、何故こんな船に乘つて來る氣になつたんです。僕は今度からどんな事があつたつて、こんな船にや乘りやしない。神戸へでも大阪へでも陸を歩いて行つてやらあ。その方がどのくらゐ氣樂で面白いか知りやしない」

「いや／＼。お前はまだ長旅をしたことがないから、何も分るまいが、毎日草鞋掛けて歩いたり人力車に乘つたりするのも難儀なものでな。それより船に乘つた方が矢張ましなのだよ。どうせ遠方へ行くんだから、このくらゐの風に會ふのは我慢せにやならん」

「さうかなあ。僕は陸を歩く方がいゝと思ふけどな。……多喜次なんかも僕等が邪魔になると云つとるんだもの」

「成べく邪魔にならんやうにおし。船賃はやるんだから、さう／＼氣兼ねをするにや及ばんけれど」

先つき耳に觸れた二人の内輪話を、私が聞かせたけれど、祖母は只微笑したばかりだつた。

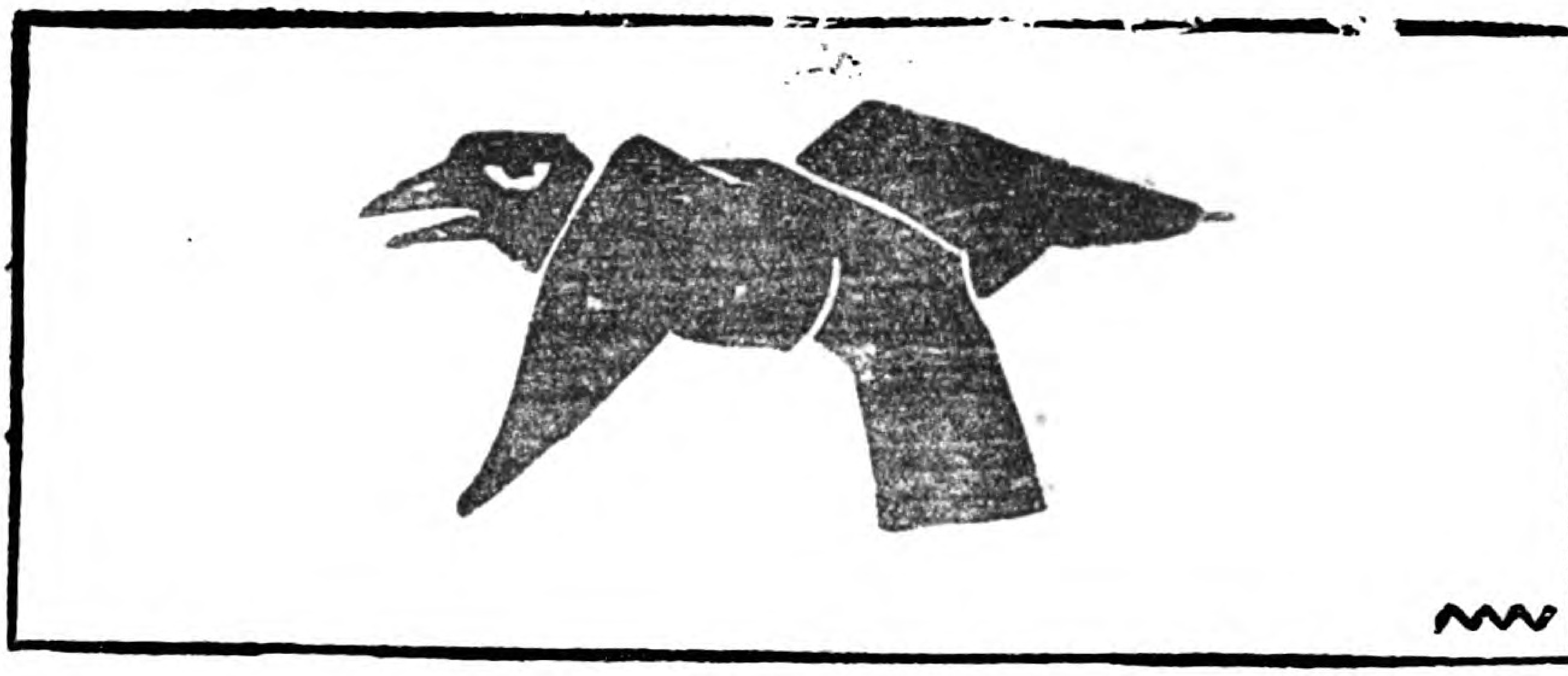
暫く立つて、二人は眞赤に醉つて歸つて來た。そして、足元をひよろつかせながらも、鰻籠を改めたり、船底の閼伽を汲出したりした。仕事が濟むと、二人は頭を並べて正體なく眠入つた。

「明日は晴れるぜ。晴れさへしたら夜明け前にでも出て行かう」と、多喜次はその夜空を見上げて云つ

て、私の方へ振向いて、

「坊つちやん。明日の晩には明石へ着きますぜ」

私はその時さして明石や須磨〻見たいとは思はなかつた。……只一刻も早く厭な旅を終ることのみ望んてゐた。それまてはどんなつらい事をも辛抱しやうと覺悟して。



わしも知らない

武者小路實篤

登場人物

釋迦
目蓮
流離王
その龍姫
好苦梵士
小供、待、僧侶、腰元等大勢

一

（釋迦一人何か考へながら靜かに林の内を歩いてゐる。目蓮、釋迦を捜しに來て見つける。目蓮は心配にたへかねてゐる）

目蓮。一寸御話いたしたいことが御座いますか。御邪魔にはなりませんか。
釋迦。目蓮か。なんだ？
目蓮。はい。（釋迦と顔を見合せ、涙ぐむ）
釋迦。…………
目蓮。世尊の御心の内を御察しいたします。
釋迦。目蓮、御前もさぞつらいだらう。人々はまだ氣がつかないらしいな。
目蓮。人々はたゞ恐れてをります。しかしまだ望みはもつてをります。
釋迦。さうか。いぢらしいことだな。
目蓮。どうしても助かりませんか？
釋迦。今度は助かるまい。
目蓮。あなたはどうなさる御つもりです。
釋迦。わしは默つて見てゐる心算だ。それより他はわしには許されてゐない。
目蓮。それでも、それではあまりむごたらしくはおぼしめしませんか。
釋迦。むごすぎる、さすがのわしも今度は少し迷つてゐる。だがそれはわしには許されてゐない。わしはたゞ人々の虐殺されのを見てゐなければならないのだ。
目蓮、流離王と云ふ人間は恐ろしい人間ださうて御座いますね。

釋迦。流離王が恐ろしいと云ふよりも、流離王の内に燃えてゐる恨が恐ろしいのだ。流離王は先年わが釋種の爲に耻かしめられたことを報ひないては我慢が出來ないのだ。さうして今この城の内に樂しさうにくらしてゐる人々は皆それが爲に近い内に虐殺されるのだ。殊に可哀さうなのは男の子や女の子だ。目蓮、あすこに樂しく遊んでゐる子供等は皆近い内に流離王の軍勢につかまへられて弄殺にされるのだ。

目蓮。はい。私もさうかと存じてをりました。あの子供等の可愛いゝ姿を見るにつけて私は涙がこぼれます。

釋迦。わしもだ。あの子供等はあまりに可愛すぎる。わしはあの子供等の顏をまともに見ることが出來ないのだ。

目蓮。私もで御座います。

釋迦。わしは人間の運命はすべて知つてゐる。わしはわしの力で助けることの出來ない多くの人間の運命を知つてゐる。わしはそれを見る度に可哀さうだと思はぬことはない。だが今度程可哀さうだと思つたことはない。だが、わしはたゞ見てゐるより仕方がないのだ。

目蓮。それでも。

釋迦。さうだ。それでもだ、しかしそれでも見てゐるより仕方がないのだ。お前はまだ眞に自分の力を知らない。わしの力を知らない。運命の力を知らない。だからどうかすればどうにかなると思つてゐ

られる。しかしわしにはわしの力がわかり過ぎてゐる。だからわしは今度はたゞ見てゐるより仕方がないのだ。
目連。それならばどうしてもあの可憐な人々をたゞ見殺しにするより仕方がないのでございますか。
釋迦。さうだ。仕方がないのだ。
目連。あの人々の最後の希望も消えたので御座いますか。
釋迦。さうだ、消えたのだ。
目連。世尊！
釋迦。目連。
目連。恐ろし過ぎることとて御座いますね。
釋迦。さうだ。
（小供の群、遊びながら顯はれ、二人を見、二人を圍んで環をつくつてぐる〳〵廻りながら遊ぶ）
釋迦。可愛いゝ奴だ。
目連。本當に……（目蓮涙ぐむ）
男の子一。小父さんが泣いてらあ。
女の子一。何が悲しいの？
男の子二。目にごみが入つたの！

目蓮。あゝ目にごみが入つたのだよ。

女の子二。見て上げましやうか。

目蓮。いゝよ。もうとれたから。それよりいゝ子だから向ふへ行つてお遊び。小父さん達は今用があるのだから。

男の子一。向ふへ行かう。

皆。行かう。行かう。（おどるやうに走けて消える）

目蓮。世尊！私はもうどうなつてもよろしい。どうかあの子供等をたすけて下さい。たすけて下さい。

釋迦。わしだつて助けたい。しかし助けることは出來ない。それがこの世の運命なのだ。

目蓮。どうしてもあの小供等は皆、殺されるのでございますか。

釋迦。さうだ皆殺されるのだ。一人のこらず殺されるのだ。それも一通の殺され方ではない。

目蓮。默つてゐて下さいまし。默つてゐて下さいまし。

釋迦。お前は人の運命を見るのが怖ろしいのか。しかし可哀さうな小供達だ。何も知らない。何も知らない。だが殺されなければならない。

目蓮。あゝ、私にはどうしていゝかわかりませね。私の信仰の弱いことはいくらでもあせめ下さい。私はどうしていゝかわかりません。

釋迦。（嚴かに）目蓮！

目蓮。はい。
釋迦。すべてのことは過ぎてゆく。過ぎゆく嵐だ。過ぎゆく洪水だ。過ぎゆく戰だ。死屍はいくら山を築かうとも、血はよし川の如く流れやうとも、斷末魔の叫びは天地に響かうとも必ず過ぎてゆく。さうしてゆく先きは海だ。涅槃だ。
目蓮。（他の事に心を奪はれてゐる者のやうに）涅槃て御座りまするか。
（二人沈默。退場）

二

（迦毘羅城の一室。始め誰もゐない。たゞ下の方ではげしき戰ひの有樣、のゝしる聲、わめく聲、つるぎの音、この時あはたゞしく二人の女、極度の恐怖におそはれながらかけ込み、逃げまわる。それを追ひかけて、好苦梵士四人の兵士をつれておどり込む。）
好苦。この室を血てけがしてはいけない。その女子供を窓から投げ捨てよ。
（兵士ども女を室から投げすてる）
好苦。よし〳〵。（窓の處にゆき）味方の大勝利ぢや。敵はのこり少なになつた。王樣もさぞ御滿足てあらう。（一時に下て萬歲の叫び聲聞へる。打苦梵士も窓から下に向つて手をふる）どれ、王樣をこゝに御案內申さう。室をかたづけておけ。

兵士皆。はっ、
（好苦梵士退場兵士室をかたづけながら）
兵士一。王樣の恨みも之てすつかりはれた。
兵士二。はれ過ぎたやうなものだ。
兵士三。男も女ものこらず殺した。小供は皆つかまへた。
兵士四。それて王樣を耻かしめた奴はのこらず死んだわけだ。
兵士三。なにを王樣はそんなにお憤りになつてゐるのだい。
兵士一。君はまだ知らないのかい。先年王樣がこの城にお客樣て御いてになつた時、うつかりと新築の講堂があつたので、お入りになつて、さうして其處てお休みになつたのだ。
兵士三。あゝ。
兵士一。處がその家は元來こゝの王樣になるべきはずの釋迦の爲にたてたもので、釋迦が入る迄は誰も入ることが禁じてあつたのだ。其處へ釋種の奴が兼々生れが卑しいと云つて輕蔑してゐた、我等の王樣が入つたので、釋種の奴等はすつかり怒つたのだ。さうして皆て王樣を耻かしめたのだ。さうして王樣のお歩きになつた處は穢れたと云つて皆けづりとつたのだ。さうしてお休みになつた處はすつかりつくりなほしたのだ。だから王樣はすつかりお怒りになつたのさ。
兵士三。さうかそれてはお怒りになるわけだね。

兵士一。それでつまり今度は其の復讐なのだ。腹いせなのだ。
兵士二。（口を入れ）だからのこらず殺せと云ふ御命令だつたのだ。
兵士三。さうか、それですつかりわかつた。（兵士四。窓にゆき）
兵士四。隨分高いよ。さつきの二人の女はひしやげてしまつてゐる。女を殺すのは勿體ないな。
兵士二。何を云つてやがるのだ。（窓により）隨分死んでゐるな。敵の死骸許りだ。
兵士一。（窓にゆき）今迄あいつ等が皆生きてゐたのだと思ふと可笑しいね。
兵士三。何人位い死んでゐるだらう。
兵士四。五六萬はゐるだらう。見渡す處、死骸許りだからな。大勝利だ。
兵士二。足音がする。きつと王樣だ。

（皆、お出迎ひに入口の方にゆく。流離王、好苦梵士等をつれて機嫌よく入つてくる。流離王、窓より下を見る。下で兵士共の狂へるやうに萬歳を叫ぶのが聞へる。王樣それに會釋する。）

流離王。（好苦梵士に）味方は大勝利だつた。之で數年來のわしの胸の中のうさもはれた。子供の外は一人ならず殺したらうな。わしを耻かしめた奴は一人のこらず殺したらうな。
好苦。御意の通りで御座います。
流離王。それでわしの胸もはれた。小供は何人位い捕虜にいたしたかな。
好苦。男と女、各々五百人づゝで御座います。

流離王。小供は何にも知らない。許してやつてもいゝと思ふが、お前はどう思ふ。
好苦。御言葉に背きまして恐れ入りますが。決してお許しになつてはいけないと存じます。彼等は何時までも子供ては御座いません。さうして一生、自分等の生命を助けられたことを難有がらずに、親兄弟の殺されたことをうらみます。さうしてどんなことをたくらむかわかりませぬ。之はどうしてもお殺しになるより仕方がないと存じます。
流離王。何時もながらお前の云ふことは尤だ。早速殺させることにいたさう。
好苦。それがよろしゆう御座います。どうして殺させましやう。何か面白いお樂みになるやうな。さうして後世にまて語り傳へられるやうな趣向て殺させましやうか。さうして意氣地のない釋迦の度膽をとりひしいてやりましやうか。
流離王。それは面白いだらう。
好苦。私にお任せ下さいまし。
流離王。よし。

（好苦梵士、兵士の長を呼び何か囁く。兵士の長畏つてさがる）

流離王。どう云ふ趣向ぢや？
好苦。面白い殺させ方をいたさせますから、御覧下さいまし。
流離王。お前の趣向ならさぞ面白いことてあらう。兵士共、苦しゆうない。見たければ見るがいゝ、

兵士皆。はつ。

（流離王、好苦梵士は同じ窓より下を見、兵士達は他の窓にゆき下を見る）

流離王。死骸の山を築くのか。

好苦。いゝえ、空地(あきち)をつくるので御座います。

流離王。さうか。この土地はさぞ肥へることであらう。穴をほり出したな。生きうづめにする心算(つもり)なのか。

好苦。まあ見てゐて下さいまし。

流離王。穴の數は千はないな。

好苦。五百で御座います。

流離王。さうか。一つの穴に男の子と女の子を入れるのだな。

好苦。さうでは御座いません。女の子の方は國へ土産(みやげ)に持つて歸つて、あの波咤羅(はたら)の池に投げ込もうかと存じております。

流離王。それもよからう。あの池はどうせうめることになつてゐるからな。その上に宮殿でも建てさせやうか。穴はあれでもういゝのか。あまり淺すぎはしないか。

好苦。まあ見てゐて下さいまし。（好苦梵士下に向つてなにか合圖をする。暫くして）

流離王。あはゝゝゝ子供等は皆わしの方を見てゐる。あの何とも云へない顏はわしに助けてくれと云つ

てゐる。

好苦。助けろとおつしやつてはいけませんよ。

流離王。誰が助けるものか。（暫く沈默）皆首だけ出してゐるな。之からどうしやうと云ふのだ。段々面白くなつて來たな。

（好苦、再び合圖をする。下の方にて數百人の士卒が重いものをころがすやうなカケ聲聞ゆ。暫くして不意にやむ。）

流離王。あの何千貫あるかわからないやうな車はどうしたのだ。

好苦。あれは先き程見つけた車で御座います。釋種の奴等が地ならしにてもつかつたものかと思ひます。

流離王。あの車をどうするのか。あゝさうか。あの車であの子供等の頭をひきつぶすのだな。

好苦。御意の通りで御座います。

流離王。さすがはお前の考へぢや。

（好苦梵士三度合圖をする。下で再び以前のカケ聲聞ゆ。窓によつて見てゐるさすがの兵士達も餘りの殘酷さにおどろいてゐる。一人の兵士は腦貧血を起してしやがんで頭を押へる。）

流離王。好苦梵士。面白く子供の頭がつぶれてゆくな。釋迦にこの有樣が見せてやりたい。

三

（「世尊には尼拘留園におはしまして、流離王が爲す業の一伍一什を御覽じ給へど、只一言も宣はず、十大弟子五百の阿羅漢皆

側に侍りて默然」たり。暫くして目蓮釋迦の前に進み)

目蓮。矢張り私達はこゝにかうしておりますればいゝので御座いますか。

釋迦。いゝのぢや。

目蓮。今。七萬の釋種は皆殺しにあひ。五百の童男、五百の童女の生命は流離王の弄ものにならうとしております。それでもかうしておりましていゝので御座いますか。

釋迦。いゝのぢや。

目蓮。阿羅漢の内には親兄弟を見殺しにするのがつらくつて、自ら縊殺ぬ方がいゝと思つて居りますものも澤山御座います。それでもこゝにかうして皆を見殺しにしていゝので御座りますか。

釋迦。いゝのぢや。

目蓮。阿羅漢の内には迷を起しかけておるものも御座ります。何とか、こゝにおります理由を敎へて戴きたう御座ります。

釋迦。目蓮。お前にも似合はないことを云ふな。我が敎は過去、現在、未來を通して宇宙の調和に從がう道ぢや。數十萬の人の生命、何萬の子供の生命がよし惡人の手に失なはれやうと、我が敎は嚴然と聳へてゐる。我が敎は現在のみの敎へてはない。我が敎はやがて失ふこの世の生命を無上のものとはしてゐない。我が敎は我等の生命によつて失はれはしない。又流離王の虐殺て失なはれもしない。もしわれ、現在の情にうごかされて流離王の手許に荒れこむか、或は流離王の前に憐みを請へば、我が敎

は立ちどころに崩れるのである。わが教は宇宙の教ぢや。過去、現在、未來の教ぢや。一時のこの世の愛によつて亂されるべき教ではない。もし汝等の內に我が教に心を滿すことが出來ず、今虐殺されつゝある憐な人間の爲に自分の身を捨てないでゐられないものがあれば、われとわが身を捨てるがいゝ。だがわが教、過去、現在、未來をつらぬくわが教に從がうものはこの處にわれと共にゐるがいゝ。さうして亂されかけたるこの世の狂ひをくひ留めるがいゝ。すべてのものは消えてゆく、しかしわが教は消えてはゆかない。わが教に從がうものは、宇宙の心を心にしなければならぬ。涅槃の心を心にしなければならない。今、何萬の人は歸るべき處に歸つた。目蓮。お前はさうは思はないか。

目蓮。はつ。（目蓮、畏まり禮をし、座にもどる）

釋迦。（まぼろしを見るやうに）今五百の男の子は首だけ出して生きうづめにされてゐる。鐵の車にその首をつぶされてゐる。あのわめく聲、あの骨のくだける音。あれが流離王や好苦梵士の出來る最も強い仕事なのぢや。彼等はわが教をあのやうにくだきたがつてゐる。しかしわが教はくだかれない。あゝ、すべては恐ろしい靜かさに歸つた。五百の男の子は生れた處に歸つたのぢや。憐れなのは五百の女の子ぢや。彼等は救ひを求めて救ひを得ない。だが波吒羅の池は彼等を故鄕に歸すであらう。さうして流離王も、好苦梵士もやがては自らきづく高樓と共に燒け死ぬのぢや。

（誰れ云ふともなく、嬉しげの息聞へ、嬉しげに「それは本當ですか」と云ふ聲聞ゆ）

釋迦。お前達には流離王や、好苦梵士の燒け死ぬのが嬉しいのか。彼等は燒かれて死ぬ。しかしそれは

喜んでいゝのか、悲しんでいゝのかわしは知らない。彼等はわしとちがう力に導かれて生きてゐる。彼等は焼かれなくともやがて死ぬ。しかし彼等は焼き殺される。さうして彼等と共に何千と云ふ可憐な男や女、小供や老人も焼け死ぬのぢや。わしは彼等を憎めない。

（沈　默）

四、

（黒い幕の前は。土地の若い男三人）

甲。いゝ月だ。

乙。今日も亦あのお城では酒宴だ。

丙。今日は七日目ぢやないかい。

甲。何が。

丙。七日の内に必ずあの七重のお城が焼けて、あすこにゐるものが殘らず焼け死ぬと云ふ風評があつてから。

乙。さうだ七日目だ。

甲。焼けさうもないね。

丙。俺はきつと燒けると思ふよ。あんな慘酷なことをして立てたお城だからね。
乙。あのお城の床下では今でも女の子の泣き聲が聞へるさうだ。何しろ五百の女の子があの下に生き埋めにされてゐるのだからね。
甲。何にしろ恐ろしいことだつた。
丙。あのお城は燒けないはづはない。きつと燒ける。
甲。燒けないよ。
丙。賭をしやうか。
甲。しやうとも。
乙。あの人達は何時でもあの七重の塔の一番高い室で酒宴をしてゐるね。もし火事があつたらどうする心算だ。
丙。あいつ達は流言を輕蔑してゐることを人々に見せてゐる心算でゐるのだ。それが天罰なのだ。
甲。天罰なんかあるものか。
丙。天罰はなくともお城は燒けるのださうだ。さうしてあすこにゐる人々は皆燒けるのださうだ。王樣も好苦梵士も。
乙。勝手に燒ける奴は燒けるがいゝ。しかし又新らしい王樣がくるだらう。
甲。それは來る。

乙。流離王様よりいゝ王樣がくればいゝが。どうでもいゝや、勝手になるがいゝ。
甲。何しろ燒けないよ。
丙。何しろ燒けるよ。
乙。今日も亦盛な酒宴をやつてゐるらしい。
丙。もう少し向ふへ行かう。
（三人退場。黑い幕とれる。流離王の宮殿の最も高き一室。酒宴の最中）
流離王。好苦梵士、今日は七日目ぢやな。七日目がもうぢき過ぎる。
好苦。さやうで御座います。七日目も殆んどすぎました。
流離王。あはゝゝ。火事もないやうぢやな。
好苦。流言と云ふものはかうしたものにきまつております。
流離王。大いに飲まう。皆遠慮をするな。（側に侍つてゐる龍姬に）お前はまだ怖いか。
龍姬。はい。どうもまだ氣がおちつきません。早く夜があけてくれゝばいゝがと思つております。
流離王。もうぢき夜もあけるだらう。（舞踏をする男女等に）又舞へ。
（男女數名音樂にあはせて舞ふ。腰元共見てゐる人々に酒をついで廻る。舞はおはる。）
流離王。御苦勞。酒をついでやれ。（龍姬に）久しぶりに今夜はお前の舞を見せてもらいたい。皆のものにも見せてやれ。

龍姫。今夜だけはお許し下さい。

流離王。いや、今夜だから是非舞へ。

好苦。是非私どもゝ拝見いたしたく存じます。

龍姫。それでも今夜だけは、胸さわぎがしてとても舞ひ終ることが出來ませんから。

流離王。是非舞へ。わしの命令だ。

（龍姫是非なく立ち上り、舞ふ。まさに舞ひの終らんとする時、不意に風が起り、家をゆすぶる。龍姫顔色を失なひ。自失して立つ。又心づきからく舞ひ終る。風は益々ふく。龍姫席にもどり流離王の手をかたく握ぎる。一寸皆無言、風の音に耳をすませる。

流離王氣がついたやうに。）

流離王。あはゝゝ。皆そんなに風が恐ろしいのか。臆病どもだな。風がなんだ。七日目と云ふ流言が恐ろしいのか。風よ。もつと吹けよ。吹けるだけ吹け。さうして臆病者共を嘲笑へ。あはゝゝ面白いつ

好善梵士お前は風を恐れはしまい。

好苦。御意の通りで御坐います。私達は天も恐れません。地も恐れません。死も恐れません。恐れるのはたゞ我が君の御心に背くこと許りで御坐います。釋迦を信じてゐる人々はこの風を喜びましやう。さうして今にもこの宮殿が燒けるかと心待ちをしてゐるで御坐いましやう。しかし夜があけて見ると風はやんでをります。うらゝかな朝が來ます。さうしてこの宮殿は以前にもまして安らかに麗はしく輝くことで御座いましやう。さうして我が君の光はいやが上にも輝き渡ることで御座いましやう。

流離王。よく云つた。好苦梵士、お前は本當に我が片腕だ。我が子だ。我が友だ。我が師だ。お前がわしのそばにゐてくれるのは獅子が翼を得たやうなものだ。（龍姫に）さあ好苦梵士に酒をついてやれ。

龍姫。はい。

好苦。難有く戴きます。皆、一緒に我が君の萬歳をおとなへいたしましやう。

（皆立つ）

好苦。萬歳！

皆。萬歳！

（萬歳を三呼す）

流離王。さあ。皆遠慮なく酒をのめ。今晩は無禮講ぢや。わしは今晩程嬉しいことはない。皆、わしと一緒に喜んでくれ。心おきなく酒をのんでくれ。（龍姫に）お前も腰元どもと一緒に皆に酒をついてやれ。

今夜は無禮講ぢや。

（風一きわはげしくなる）

流離王。（立ち上り）さあ人々舞へ。出來るだけ賑かな曲をやれ。

（人々亂れおどる。さうして調子にのり切つた時、火事だ、火事だ、と云ふ聲何處ともなく聞へ。あはてる人々の足音亂れ聞こへる。音樂はばつたりやみ、同時に人々舞をやめる）

流離王。何んだ。火事ぢや？　皆のもの苦しゆうない。早く逃げろ。好苦梵士、逃げられるか逃げられ

ないか。見てまゐれ。

好苦。はつ。

（人々は戸口からとびだし。又室に逃げこみ、窓から下を見たり、戸口から出て見たり、うろたへ切つてゐる。この時一人の腰元とびこみ。恐怖のあまりうわ言のやうに）

腰元。火事です。火事です。放火(つけび)です。一人の女が氣が狂つて火をあつちこつちにつけたのです。火事です。火事です。

（人々は決心せるやうに。戸口から消へ或は窓からとびおりる。腰元も、無意味に走り廻つてゐたが、戸口から消へる。のこつたのは流離王と、流離王にかぢりついてゐる寵姫と、方々見廻つて歸つて來た好苦梵士の三人。烟は入り出す。）

流離王。（寵姫の耳をおさへ、寵姫の顔を強く胸にあて好苦梵士に）どうだ望みはあるか。

好苦梵士。御覺悟が大事かと存じます。下はすべて火の海で御座います。

流離王。さうか。

（流離王。いきなり寵姫を突きとばし。寵姫の「あれつ」と云ふ言葉の出るか出ない内に、腰の刀をぬき寵姫をさし殺す）

好苦梵士。我が君には氣でもお狂ひになりましたか。

流離王。いや。こんなことでは氣が狂はぬわ。わしは流離王ぢや。たゞわしが戀する女の見苦しい様が見たくなかつた迄ぢや。

好苦。恐れ入りました。

（烟はますます〳〵はげし）

流離王。お前はこの火をどう思ふ？　天罰だと思ふか。

好苦。いえ、いえ、私はたゞ臆病な女が七日目の内に必ず焼けると言ふ流言を信じ切つて、恐怖のあまりに氣が狂ひ、自ら火を放つたのだと存じます。天罰では決して御座いません。偶然なことで御座います。

流離王。さうぢや、偶然ぢや。偶然ぢや。わしもさう思ふ。釋迦を信じる人々に偶然のことだと云ふことを知らすことが出來ないのが無念ぢや。（戸口からまひ込む煙を見て）だがいゝ。覺悟はいゝか。お前の劍をぬけ。

好苦。はつ。（劍をぬく）

流離王。わしが合圖とともにお前はその劍をもつて美事にわが胸をつらぬけ。わしはこの劍をもつてその時お前の胸をつらぬく。

好苦。畏まりました。

流離王。勇士の最後を後世にまで語りつたへるものがないのが恨みぢやな。

好苦。御意の通りで御座います。

流離王。足の下がそろ／＼あつくなつて來たやうぢや。覺悟はいゝか。いざ！

（合圖の終るやいなや、互に胸をつらぬき倒れる。煙はます／＼はげし、三十秒許りして、一人の女逃げこみ、この場の有様を見て）

一人の女。王様が死んだ。王様が死んだ。王様が死んだ。（室の内を逃げまわり。又戸口から逃がれやうとして、煙にまかれてたほれる。風一きわ强くふく）

五

（林、朝早く、うらゝかな天氣、昨夜の嵐をたゞ倒れた木、散つた枝が語つてゐる。小鳥が嬉し氣にさえづつてゐる。釋迦、目蓮、靜かに登場）

目蓮。うらゝかな天氣て御座います。

釋迦。嬉しさうに小鳥が囀つてゐる。

目蓮。昨日の嵐によく死なゝかつたものでございますね。

釋迦。死んだものがないとも限るまい。生きてゐるものだけがうたつてゐるのだ。

目蓮　昨夜の風は夢のやうて御座いますね。たゞ倒れた木や、散つた技だけが昨夜の嵐を語つてをりますが。

釋迦。…………

目蓮。世尊。流離王の宮殿も燒けたさうて御座いますね。

釋迦。燒けた。

目蓮。さうして皆燒け死んださうで御座いますね。

釋迦。皆燒け死んだ。

目蓮。すべてのことは夢のやうで御座いますね。

釋迦。曾つて二人のまはりを廻つた子供等も今は安らかに眠つてゐやう。惡夢の後の安らかな眠りのやうに眠つてゐやう。わしはあの子等のことを忘れはしない。だがそれはわしの敎を弱くはしない。流離王や好苦梵士も今となればわしの夢の色を濃くしに來たやうなものだ。消えてゆけばお前達の恨みものこるまい。さうして彼等は火事に燒けずともやがて消えてゆくのだ。

目蓮。すべてのことは過ぎました。

釋迦。しかし又生れる。何度でも生れる。わしの敎を覺らぬものにとつてはこの世に生きることは迷ひの内に生きることだ。さうして平和な夢を見るものは稀だ。今、朝日は輝きわたる。だが今に夕べがくる。すべてはめぐる。死ぬ、生れる。生れる、死ぬ。流離王の許に親兄弟、或は子供を仕へさせてゐた人々は今はさぞ悲しんでゐるであらう。誰が仕幸か、誰か不幸か誰が知らう。わしの敎がゆきわたらない内は人々は無意味に惡夢を生んで、われとわが身を苦しめることであらう。さうして他人を苦しめることであらう。小鳥は啼いてゐる。日はうらゝかに照り渡つた。すべてのものは何事もないやうな顏をしてゐる。さうして道ゆく人に逢へば多くの人は何事も知らないやうな顏をしてゐやう。迦毘羅城の滅亡も流離王の宮殿の燒けたことも彼等はたゞ笑ひ話にすますであらう。わしは彼等の爲

にそれを喜ぶものだ。だがわしはわが敎に從つてすべての人が調和して生きてゆくことを望んでゐる。さうしてさう云ふ時の來るのを夢想してゐる。

目蓮。いつさう云ふ時が參りましやう。

釋迦。それはわしも知らない。

（沈　默）

（一三、一一、二二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

明治官界の秘事逸聞

崇古生著

四六版六百五十頁
上製頗美本函入

定價壹圓卅錢
郵税十二錢

官場回顧

維新に於ける制度の變革は振古未曾有の事に屬し幾多の波瀾を經て今日の開明を導きたるものなれば苟くも現代を識らんとする者は必らず過去五十年前の官場を回顧せざる可らず然かも風物幾變徃事生死の境に馳驅したる大官諸公は日に月に凋落し史蹟亦漸く湮滅せんとす著者此に慨あり材を當年の逸話に取りて廟廊の變遷を記述し最も趣味ある筆致もて明治初頭の事情を眼前に描く文勢躍々として表裏悉さゞるはなく誠に明治の光耀を萬代に傳ふべき絶好の人國記也

本書は曾て時事新報に連載し大喝采を博したり

發行所 東京日本橋區本銀町

株式會社 **啓成社**

電話本局二一〇〇番
振替一〇二五五番

（中付八の一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

最新英語界の燈明臺

本書の下には如何なる疑問も影を留めず。

文學博士上田萬年先生
文學博士上田敏先生
合著

正譯英和新辭典

堅牢美本 堅四寸九分横二寸四分
全一冊 紙數約一千三百五十頁 **特價九十錢**（正價金壹圓）郵稅內地金八錢

英書を譯讀又は復習するに、最も適當にして手頃な辭書、勞力少くして學力の進歩を速ならしむる簡易明瞭な辭書、一言すれば我大、中、專門諸學生の要求にピタリと嵌る辭書は如何なる組織にし、如何なる解決法を用ふべきかといふことに就いて著者兩先生が多年苦心研究を重ねられ、愈々完全無双の辭書として出來たのが本書である。本書は語彙といひ、解釋といひ、圖解といひ、徹頭徹尾在來の辭書と選を異にした最も斬新な、最も正確な、最も詳密にして懇切な辭書である。此辭書を用ひたなら、英書の譯讀は容易になり、上達の速力は確かに二倍する。論より證據、外の辭書で要領を得ぬことも、此辭書を開けば直に分る。他の辭書に無い新語も此辭書には有る。原書、譯書ドンナ辭書を持つて居る人でも此辭書は是非共備へなければならぬ。實際本書はあらゆる辭書に無い長所を有し、之を用ひると否とで、語學力に千里の差を生ずるからである。『事實はそれ自身を雄辯に說明する』。試みに一本を手にして見られよ。

見本進呈

如何なる辭書を有する人も必本辭書を備へざる可ず

今回弊社の新築記念として本書特賣部數の中五部毎に**金壹圓の圖書切符を抽籤にて進呈**致します、故に本書に挿入の番號券は、御保存を願ひます。

發兌元 東京神田（振替五〇一番 四一三〇 電本一〇三六）合資會社 富山房

（中付八の二）

丁抹 カリン・ミヒアエリス作

新刊 既成

驚嘆的小説

エルジ・リントネル

佐藤緑葉氏譯・小林徳三郎氏畫

■新らしき婦人問題の提供■

カリン・ミヒアエリスは丁抹の女流作家なり。瑞典のエレン・ケイ女史が戀愛の自由、個人生活の完成を叫び、眞甲より人生に命令せんとするに對し、カリンは小説によりて婦人の内部生命を語り、其根本に横る秘密を暴露せり。著者曩に『危險なる年齡』を著はして歐州の讀書界を沸騰せしめたるが、本書は「更に大膽に、一層深刻に婦人を解剖して、餘す處なく其眞相を發表せり」、本書はカリンが新らしき婦人問題に下したる鐵案なり、何人も本書を讀まば、得る處多く、敎へらるゝ處多く、又考へさせらるゝ處多かるべし。

■赤裸々なる内生活の告白■

▶四六版クロース美装函入＝定價八十錢郵税八錢◀

大好評 離婚せる四十女の **思ひ切つた告白** 第五版

優美装幀函入三百卅頁・定價八十錢送料八錢

本書は曩に「危險なる年齡」と題して丁抹に於て出版せられ大膽なる現實暴露なりとて歐米の讀者界を驚倒せしめたるもの。著者カリン・ミヒアエリス女史。小野秀雄譯。卷頭黒岩周六氏の四十頁に亘る大論文を掲ぐ。上記「リントネル」と共に此忌憚なき告白を見られよ。

發行所 東京神田松下町一〇 振替東京一四八一四番 以文館

(中付八の三)

■夏目漱石 鳥井素川 杉村楚人冠 澁川玄耳 四先生序

米窪太刀雄著

海のロマンス

定價壹圓六拾錢 郵税金十二錢

大成丸世界帆走記成る

□内容□

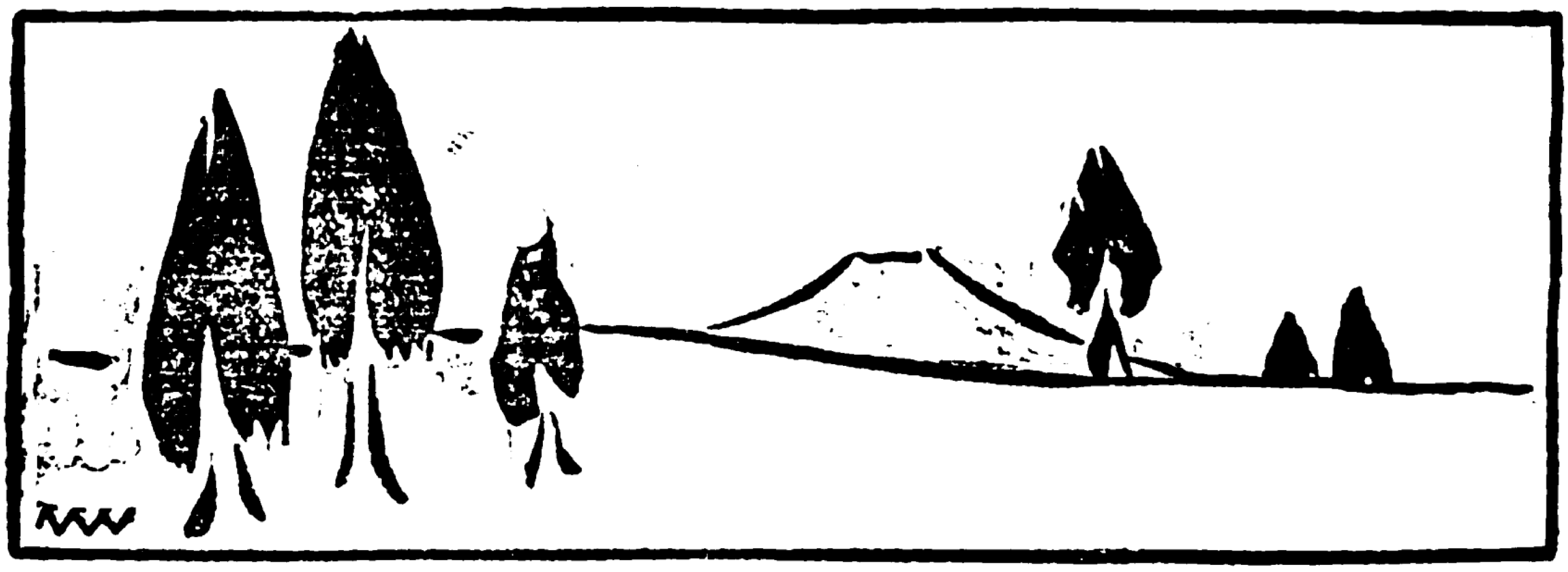
一、さらば芙蓉峰……
二、帆船のロマンス……
三、アレクルサムと彼の郷土……
四、百十七日陸を見ず……
五、南阿の南端……
六、セントヘレナ……
七、鹿と龜とカメレオン
八、南米の美都……
九、慘憺なる航海を續けて
十、南洋より故國へ……

東京朝日新聞連載

■是れ我國に於て最初に現はれたる而して最も優れたる**海洋文學**なり。曾て太刀雄氏の『大成丸世界周船記』が東京朝日の紙上に掲載せらるゝや、何人か此の船中にありて■**艶麗**なる筆を以て此の通信をなし前人の未だ描く能はざりし河洋美を説きつゝ此の**情緒**多き**航海記**を送るならんと**驚嘆**の眼を睜らざる者あらざりき。焉んぞ知らん此の筆者は尚ほ年若き無名の一練習■學生ならんとは。太刀雄氏今や新たに筆を採り數百頁を書き加へて**空前の世界帆走**■**記**を完成し、茲に『**海のロマンス**』と題して出版し、新しき大正三年の文壇を飾るに至れり。

(中付八の四)

發兌 東京神田錦町 振替四一二三 **中興館**　東京神田錦町 振替六二九四 **誠文堂**



醫局の窓

長田幹彦

精煉所の方から五時の汽笛が呻めくやうに聞えてくると、尾崎は見かけゐた患者の尿檢査表をばたりと伏せて長たらしい欠伸をしながら卓子からしぶしぶ起ち上つた。少時の間何をする元氣もなさゝうにその儘狹い醫局のなかを彼方此方と歩き廻つてゐたが、やがて北側に續いた窓の傍へ來かゝると、腕拱みをしながらふつとそこへ立止つた。

二三日前に磨かせたばかりなので、窓硝子はてかてか冷たく透き徹つて、そこからは鑛山の宏大な工場々々や、四圍に迫る山々が手にとるやうに眺められた。まだ五時だといふのに脚の早い冬の日はもうとつぷりと暮れて、赭禿になつた向ふ山の頂だけが夕陽の餘光を受けてあかあかと燃えてゐる。そこらには

そろ〳〵寒さうな薄闇が此處彼處の物蔭に湧き起つて、晝間ならば選鑛場の屋根越しに一々指呼される山の峽の各飯場々々や、なだらかな山腹の傾斜につれて谿間の方へ展がつてゐる疥癬やみの膚のやうな町の家並もうつすり立罩めた暮靄の底に隱れて、黃ろい灯だけが幾列となく縞のやうになつてぽつりぽつりと瞬いてゐる。そしてアーク燈の點つた鐵橋の上には歸りを急ぐ勞働者や坑夫や女工が蟻のやうに打群れて斷絕なしに町の方へ蠢めいてゆく。

尾崎はつまらなさうにそこらへ眼をさまよはせてゐたが、やがて瞳を轉じて今度は西山の中腹に閊つてゐる第四番坑の坑道の方を眺めた。そこには葉を振ひ盡くした雜木が疎らに生へ續いて、くつきり山の頂線を描き出してゐる夕榮空には四五羽の烏が大きな環をゑがきながら高く低く飛びつれてゐる。山は頂へ近づくほど薄明をもつて、四五日前に降り積もつた雪が皺襞から皺襞へ不思議な斑紋を描いてはゐるが、一點の灯さへ見えぬ片側の漆黑の山膚からは晝間の作業の凄まじさにひきかへて、まるで無人境のやうな寂しさが張り落ちてくるのである。

尾崎は今にも出さうな欠伸をじつと押し堪へて、細めた眼をしばたゝきながらまじまじしてゐたが、到頭我慢しきれなくなつたと見えて、蟹のやうに兩手を張り延ばして縱けさまに欠伸をした。と、その途端に今迄筋肉の何處かに潛在してゐた疲れが堰を切つたやうに節々へ集まつて、何とも云ひやうのない倦怠の心持ちが脊筋から肩先へするすると瀰漫してきた。

彼は嘆息をつくやうに、

「あゝ到頭今日も暮れてしまつた。明日も明後日も、またその次の日もその次の日も、兎に角俺がこの土地にゐる間はこんな風にして無意味な月日が過ぎてゆくのだ。厭だ、厭だと云ひ續けてゐながら、俺はもう四箇月餘りもこんな下らん土地に引留められてゐるのだからなあ。」と、彼は心のなかで獨語のやうに呟いた。そして今更のやうに身のまわりを振顧りながら過去つた無爲な月日を思ふと、彼は情ないほど氣が滅入つてくるのであつた。

彼は此頃になつてしみじみ自分の現在の生活を呪咀する氣になつた。つまらないとか、飽き足りないとかいふ程度は通り越して、もうすべてが彼にとつては無意義て、空虚てあつた。何んの刺激もなく、興味もないこの山間の鑛山町が彼にはまるて自分を强縛してゐる桎梏のやうに思はれた。何うにかしなければならぬ。どうにかしてこの桎梏から自由にならなければならぬ。――此頃彼の頭に宿つてゐる考へはすべて此れてあつた。殊に自分の趣味性から小説や雜誌を耽讀する癖のある彼はそんな問題に觸れてゐる作品に出遇はす度に、自己革命とか、自覺的生活とかいふやうな大業な主題のなかへ自分を嵌め込んでみて、譯もなくいらいらした氣持ちになるのであつた。そして自由な、豐麗な色て塗られてゐる都會の生活が彼には唯一の憧憬の對象となつてゐるのであつた。そこに住む人は皆美しく、そこにある事物はすべてが複雜で、潑溂とした活氣に充ちてゐるやうに思へた。そこへさへ行けばすべてが意の儘になる、自由に衒耀やかに、そして眞箇の自己の生活を營むことが出來る。若い作家の作品のなかなどて、華やかな灯や、脣の紅い女て彩られた公園の夜や劇場の夜などの光景が惹きつけられるやうに巧

みに描寫されてゐるのをみると、彼は東京にゐた短かい間の貧しい記憶を辿つてさまざまな空想を空想の上に積み重ねては、若い胸を留めどもなく踊らすのてあつた。

彼が初めてこの鑛山の町へ來たのは今年の眞夏のことてあつた。東京から八十里ばかり離れたさる市て育つた彼は、その生れ故鄕て醫師となるべき一通りの教育を受けた。それも正規の學校へ入つたといふのではなく、親戚の醫師の家へ厄介になつて、そこて解剖書や生理書を暗記的に獨修したのてあつた。それでもどうか斯うか前期試驗にも及第して、去年の秋二十五て到頭醫師の免狀をとつた。さうなると今まで自分を小さなものに思つてゐた彼は、急に廣々とした人生の大海へ浮きあがつたやうな氣がして、若々しい野心と一緒に限知られぬ前途が彼の眼の前に展がつて來たやうな愉悅を覺えるのてあつた。殊に若年て一廉の醫師になつたといふことが、彼には此の上もない誇りだつたのてある。て、年老つた兩親達がその市て開業させやうと云ふのを無理に振り切つて、その儘修業にかこつけて眞驀に東京へ飛び出した。そして知己を賴つて、その紹介て山の手のさる小さな外科病院の助手に入つた。そこて彼は今年の春から夏へかけての三箇月をぶらぶらと過ごしてしまつた。その間に彼は歡びと驚きの眼を瞬つて、都市の生活の一端を偸みゝたのてある。若い人々には一種の禁制の果實とも云ふべき美果を口にしたのてある。

彼を此の鑛山の附屬病院へ周旋したのは東京て新たに得た館山といふ友人てあつた。初めは東京を離れることを嫌つて幾度となく二の足を踏んだが、四十圓といふ彼にとつては莫大な月收が到頭最後に彼

を誘惑した。四十圓あれば彼は何んなことでも出來ると考へた。少し約ましくやつて行けば、再び東京へ出てくる折の資金位は譯もなく蓄まると思つた。そして友人の口車に乘せられて、一年や二年は田舍廻りをしてくるのもいゝと思つた。彼は有乎無乎のうちに決心をきめて、再び行李を纏めて到頭東京をたつてしまつた。

それでも此の土地へ落着いた最初の間は面白可笑しい日が續いた。見聞きする物ごとがすべて珍らしくて、今迄に知らないいろいろなことを覺えた。殊に荒々しい鑛山のことなので、ダイナマイトが破裂しそこなつたり、坑道が崩壞したり、トロが崖から墮ちたりする度に、一度に十何人といふ負傷者が擔ぎ込れるのをみると、怖ろしい中に彼は何とも云へない快さを覺えるのであつた。そして無智な坑夫達の口から「先生」「先生」と立てられるにつけても、彼の稚い自尊心は非常な歡びを感じるのであつた。

併しその面白い月日も長くは續かなかつた。今ではもうすべてが彼にとつて反對の結果を齎らした。何もかも自分を取圍むすべてのものに飽きあきしてしまつた。といつて彼は今更何うする譯にも行かなかつた。あゝもしやう、斯うもしやうと思へば思ふ程彼は自分の身の儘にならぬのをより深く知るばかりであつた。四十圓の月收が何れほどの價値をもつてゐるかといふことも痛いほど明白に知つた。それだけ取つても月々幾らかづゝ借金をしてゆかねばならぬのを思ふと、月給の袋を衣嚢に入れる度につくづく厭になつた。そしてしまひには何のために働いてゐるのだか分らないと思ふやうな焦々した氣持ちになることも珍らしくなかつた。

彼はまたいつものやうに借金の高と、月給の振分け先とを思ひ合はせて、東京へ出る資金の融通方法を考へはじめた。いつもと同じ失望かまた彼の心を暗くした。何うにかして遁げ出せば、遁げられないことはないとしても、その無謀さが彼には餘りによく分りすぎてゐた。彼は當分の間、矢張りかうしたまゝて辛抱してゐなければならぬのを思ひ返へすと、息塞るやうな不快を覺えずにはゐられなかつた。そしてまるて砂を嚙むやうな寂しい生活を振顧へると、他人にばかり幸ひしてゐる世の中がつくづく恨めしくさへなつてくるのであつた。

彼は腕拱みをした儘長い間そんな埒もない考へに責められてゐたが、そのうちにもう四邊にはすつかり夜が擴りつくして、一樣の暗闇のなかにはさまざまな灯の影だけが浮き上つて來た。ふと氣づくと、いつのまにか醫局にも電燈がついて、塵ばんだ笠の影からまるて彼を嘲るやうに明るい光を投げてゐる。彼は吐き出すやうに舌打ちをして、その儘窓際を離れた。と、その時、廊下の方から足音が聞えて、隅の方の扉口から丸々と肥えふとつた山田といふ薄鈍の看護婦がついと入つて來た。

「おや、先生。まだ此處に被居つたんですか。もう宿直室にちやんと晩餐が出來てますのよ。」地の者の癖に東京辯を眞似て、甘つたれた云ひ方をするのが嫌味だつた。

尾崎は態と眉を顰めて返事をしなかつたが、やがて焦々した聲て、

「先生はもうお歸りになつたか？」

「院長先生てすか？　えゝ、もう先刻お歸りになつたわ。今日は會議がある日だから事務所へお廻はり

になつたてしよ。」

「矢野君は？」

「矢野先生は宿直室に被居るわ。回診が濟んだから、もう歸らうかなんて外套を着かけてらしつたわ。」

と、いひながら山田はそろそろそこら片付けはじめた。

尾崎は今夜宿直に當つてゐるのを思ひ出すともううんざりしてしまつた。で、益々不愉快な氣持ちになりながら、跡始末を山田に吩咐けてその儘荒々しい靴音を殘して醫局を出た。

別棟になつた宿直室へ來てみると、同僚の矢野が外套をはをつたまゝかつかと炭火の熾つた大火鉢へ股火をしながらもう一人の鈴木といふ看護婦をつかまへて笑談口をきいてゐた。鈴木は内氣な、歇斯的利性の女なので、何か少し立入つたことでも云ひかけると眞氣になつて理詰めをする癖があつた。醫員達はそれを面白いことにして、暇な時などには彼女に揶揄ふのを樂しみのひとつにしてゐた。

矢野は尾崎が入つて來るのをみると、例の開け放しな聲で、

「やあ、尾崎君。丁度いゝ處へ來た。今面白い事が起つてるんだ。君は氣付かんか、此頃鈴木の腹が漸次せりだして來たやうぢやないか。」

尾崎はまるで氣乘りがしないやうに薄笑ひを洩らしながら矢野と對向ひの椅子に腰を下ろして、卓子の上へ並べた肉鍋や汁椀などには眼も呉れず、衣嚢から卷煙草を取出して火を點けた。

「なあ、君。いくら隱したつて此ればかりは隱せるもんぢやないさなあ。」と、矢野は探つたさうな眼つ

さて尾崎の顔を覗き込みながら、
「病的に腹部の膨滿を起したのならお前のやうにさうぴんぴんしてゐられやせんよ。何と云つたつてそりや妊娠さ。一體誰れの因果の胤を宿したんだ。もうかうばれてしまつちや仕方がない、有體に白狀してしまへよ。」
「厭な先生ねえ。御笑談も可い加減にして下さいまし。莫迦々々しい。」鈴木は眞氣になつて腹をこつこつ叩きながら、「この通り懷爐ぢや御座いませんか。私は貴方がたの思つてらつしやるやうなそんな不品行な女ぢやありませんわ。そりや潔白なんですからね。」
「はゝゝ。潔白か。どんな潔白な女でも子供だけは生むからな。お前も生理學の一般ぐらゐは心得てゐるんだから、そんな簡單な理屈が分らんことはあるまい。淨瑠璃の文句にもある通り、母親ばかりで出來る子はなし、お前もいゝ年をして獨りてゐるんだからどうせ男の一人や二人は持つとるだらう。藥局の水島か、それとも事務の木下か。尤も木下の方が年も若いし、男前もいゝからな……」
「まあ、酷いことを。御笑談にもそんな事を仰有るのは失敬ぢや御座いませんか。人を莫迦になさるのも大抵になすつて下さいまし。」と、疳高な聲で云つて、鈴木は口惜しさうな眼つきをして矢野の顔をきつと睨んでゐたが、やがて急に涙ぐむで、「何とても仰有いまし。どうせ私は馬鹿なんですから。」と、云ひ捨てゝその儘はたばた室外へ驅け出して行つた。
「はゝゝ。到頭行つちまいやがつた。」と、矢野は獨りて笑つて、「彼奴を揶揄ふのが一番面白いよ。あ

れて色氣があるんだから振るつとるぢやないか。」

矢野はさう云ひながら尾崎の顔を見たが、いつもと違つて一向尾崎が彈んて來ないので張合ひぬけがしたやうに大きな伸びをしながら正面の柱時計へ眼を移して、

「やあ、もう六時半だ。どりやそろそろ歸るかな。」

尾崎はその時初めて顔をあげて、嘆息を吐くやうな聲て、

「あゝ、厭だ、厭だ。今日はどうしたんだか莫迦に氣が沈んて可かん。どうだ、矢野君。これから三山亭へても行つて飮まうぢやないか。」

「そりや御馳走になるならつきあつても可いが、併し今夜は君の宿直ぢやないか。」

「なあに、十一時の回診までに歸つて來りやいゝさ。格別急患はないんだから。」

「はゝゝゝ。また始まつたな。」と、矢野は狡さうな眼つきをして、鬚をひねりながら、「そんなことを云つて、君や一體金を持つとるのか?」

「金なんか持つとるもんか。又借りて來るのさ。」

「そりや可かん。君の借りて來るは當てにならんからねえ。」と、矢野は抑へるやうに云つて、少時の間にやにやしながら考へてゐたが、やがて何か思ひついたやうに、「それよりも今夜は小使に酒を買つて來させて此處て一杯やらうぢやないか。僕もなんだか今夜は宅へ歸つても詰まらんやうな氣がするから。」

「贅澤を云ひ給ふな。君なんざあ宅へ歸りやちやんと妻君がゐて、晩酌の仕度をして待つてゐるんぢや

ないか。まあ、僕を見給へ。そこへ行くと獨身者は實に憐れなもんさ。何處へ歸つたつてやさしい言葉ひとつかけて呉れる奴を居らんし……。」尾崎は妙に氣負つて云つた。

「はゝゝ。又詰らんことを云ひ出したぜ。君はさう思ふかも知らんけど、嬶の面ももう此頃ぢや見飽きたからね。それよりも久し振りで飮みながら君の氣焔でも拜聽しやうよ。」と、肉鍋のなかを覗いてみながら、「今夜の肉は旨さうだ。もう半斤ばかり買はせやうぢやないか。」

「併しどうせ飮むんなら酌をする女のゐる處へ行つて飮まうぢやないか。男同志ぢや寂しくつて堪らんよ。」

尾崎は何彼と澁つてゐたが、衣嚢に殘つてゐる金の手薄なのを思ふと到頭諦めて自分から小使を呼びに立つた。

酒の弱い尾崎は一時間も經たないうちにもう顏を眞紅にほてらせて、盃も箸も置いてしまつた。矢野の方は病院でも飮みてのひとりなので、けろりとした顏で時々肉鍋をせゝりながら手酌でちびりちびり飮み續けてゐた。

尾崎は漸次と熱して來て、矢野に押被せるやうな語調になりながら、

「僕は此頃になつてつくづくさう思ふんだ。此れからの所謂新時代の人間は始終自分といふものを批評してゐなくちやならないんだ。自分を監視し、自分を導いて冷やかに世に處して行かなくちやならない。

そして始終境遇を變へて、その間に自分を刺激し、鞭韃して行かなくちやならない。それをするにやこんな町にゐちやとても駄目だ。こゝはまるで牢獄のやうなものだ。決して若いものゝ定住してゐられる處ぢやない。こんな處に住んでゐちや折角發展すべきものも途中で腐つてしまう。」

「さう云へばさうだが一併し僕に云はせれば世の中といふものはさうばかりも云へないさ。君はまだ若いからすべてのものごとを上面ばかりで見てしまう嫌ひがある。」と、矢野は落着いた聲で云つて、「住む處なんか何處だつて大して違ひはないさ。考へやうひとつで何うでもなる。都會に住んでゐたからつて、必ずしも豪くなれると定まつたもんぢやないさ。それに人間の相場なんて云ふものは一旦社會へ出てみれば大概當りのつくものだからねえ。」

「そんな馬鹿なことがあるもんか。君みたやうに先に見切りをつけて達觀してゐられりやいゝが、僕等には到底そんな消極的な考へては滿足が出來ん。僕等は飽くまで運命を作つてゆかなければならない。今てこそこんな詰まらん病院の醫員なんかをしてゐるけど、これが何う發展して、何んな立派な地位に上れんとも限らんからなあ。それをするには何を云つても東京だよ。これから事業でも起さうといふには東京にゐなくちやとても駄目だ。東京は實にいゝからねえ。」

「はゝゝ。馬鹿に東京が戀しくなつたね。君の七むづかし議論よりもその一言の方が正直だ。そんなに戀しけりやいつそ思ひ切つて東京へ歸つたらいゝぢやないか。」

「無論近々のうちに歸るさ。もう此間からその計畫ばかり考へてゐるんだが。」尾崎は肩を張つて云つた

が、やがてまた急に調子を落として、一併し今歸るとなると百圓ばかり金が要るからね。それだけ金を纒めるにやこれて一寸骨が折れるからねえ。それさへ出來れば明日にも行けるんだが。」
「それ見給へ、矢張り駄目なんぢやないか。世の中のことゝいふものはさう思つた通りに行くもんぢやないよ。いゝ加減な處で見切りをつけて置かないと、却つてそのために苦しむよ。」矢野は年寄りじみたことを云つて、又盃を重ねながら、「それよりも此處で一人好きな女でも捜し給へ。さうすりや東京なんか戀しくなくなるよ。」
「いや、僕はそんなことは斷じてしないつもりだ。そんなことをしたらもう僕の前途は破滅だ。」
「はゝゝゝ。大業なことを云ふ男だね。」矢野は眞から可笑しさうに笑つて、「時に此間ちよつと拜聽した君の情人の話は何うなつたね？　あれから薩張り噂を聞かないが、まさかもう捨てゝしまつた譯でもあるまいね。」
「情人つて何んだい？」尾崎は一寸思ひ出せないので、どきまきしながら聞き返した。
「忘れつちまつちや仕樣がないなあ。そら君に惚れて此處まで追駈けてくるつて云ふあの東京の娘さんさ。」
「あゝ、あれか。あんな者は仕樣がないさ。」尾崎は恥かしさうに眼を逸らしながら、口のなかで呟いた。
「仕樣がないことがあるもんか。それだけ惚れて呉れりや結構ぢやないか。何うだね、ひとつその娘さんを正式に此地へ呼んぢや。」

その言葉と一緒に尾崎の胸には東京で逢つた一人の女の姿がくつきりと浮き上つて來た。それは彼地の病院へ勤めてゐた頃一緒にゐた看護婦だつた。年ももう二十三で、容貌から云つても眼につくほどの女ではなかつたが、性來多淫な女と見えて、他の醫員や藥局生といろいろな噂を立てられてゐながら、尾崎のぼつと出の初心な處へ打込んで、いつともなく變な素振りを見せるやうになつた。尾崎はそれが妙に恐くて始終逃げ腰になつてゐたので、その間には到頭最後まで何の關係も出來ずに濟んでしまつた。彼が此地へ來てからもその女からは時々繪葉書などを寄越したが、彼の方に氣がないので三度に一度も返事を出さなかつた。

つい此間醫局での茶話しにいろんな惚話が出た時、彼は釣り出されて何の氣なしにその女のことを喋舌つてしまつた。まさか看護婦とも云ひかねたので、相當な家の娘といふことにして、事實にあつた出來事の上へいろいろ勝手な空想や小說を綯ひ交ぜて、いかにも彼の器量がいゝやうな筋立てに仕組んで誠しやかに話した。矢野はそれを覺えてゐたのであつた。

かう矢野から切り出されてみると、醉つた尾崎の胸には今迄に覺えない變な氣持ちがふいに湧きあがつてきた。自分でも嘘だとは知りつゝも、さうして話した話の面白可笑しい筋道がいつか事實の記憶を變形させて、その女が今迄よりもずつと美しい姿になつて心象の面に映つて來た。顏立にも氣質にもまだ自分の知らない美點が潛んでゐるやうに思はれて、その女はさまざまな思ひ出とゝもに漸次と彼の心へ浸蝕して行つた。彼は矢野の言葉に一々感傷的な誇張された調子で受答へしながら、その女との關係

を以前の話よりも一層美しい小説にした。そして自分でもその感興に引摺られて醉つたやうな心持ちになりながらその女のことを頻りに思ひ耽りだした。

十一時を打つと間もなく、さつきの山田が病床日誌を小脇に抱へて宿直室へ入つて來た。重症患者だけ回診して歩く時間が來たのである。

「まあ、矢野先生。まあだ被居つたんですか。」と、山田は呆れたやうに云つて、火鉢の傍へ歩み寄りながら、「おや、おや、またお酒がはじまつてるのねえ。厭だわ。」

「はいはい。生意氣なことを云ふな。酒呑みが嫌ひなんと云へる面か。」矢野は少しづゝ醉つて來たので、聲の調子も埒がなくなつて、「今夜はもうお前でも我慢する。さあ、此方へ來て酌をしろ、酌をしろ。」と突如山田の手を握つてぐつと引寄せた。

山田は態とらしく諂めきながら、

「御笑談なすつちや可けませんのよ。これから回診が始まるんぢやありませんか。尾崎先生。もう時間ですよ。」

「はいはい。今夜はお前の當番が。尾崎君と一緒でさぞ嬉れしいだらう。」と、矢野は猶ほも執拗く戯れかけながら、「ねえ、尾崎君。此奴は君に惚れとるんだから、今夜ひとつ口說いてやり給へ。頭のねぢはちつとぐらゐ緩んどつても、女に變りはないんだからな。はいはい。」

「嫌な先生。」山田は執られた手を振りもぎつて、その手で矢野の胸をとんと突きながら、「私が誰れに惚

れてゐやうと餘計なお世話ですわ。そんな下らない管を卷いて被居らないでさつさとお宅へお歸んなさいよ。奥さんが首を長くして待つてらしやるぢやありませんか。」と云ひ捨てゝその儘戸口の方へ逃げて行つた。そしてそこで厭な顔をしながらしぶしぶ起ちあがつて來る尾崎を待ち受けて、その後へぴたりと軆を摺り寄せながら病室の方へ出て行つた。

矢野は忌々しさうな顔つきをしながらその後を見送つてゐたが、やがて未練らしく酒の滴をきつて、もぞもぞ歸り支度をしはじめた。

回診を濟ますと、尾崎は病室からその足で宿直室へ歸つて來て、さつきの椅子へ同じやうな格好をしながらがくりと腰を下ろした。矢野の惡巫山戲の圖に乘つて、機もあらば煩く戯れかゝらうとする山田をやつとのことで追拂つて、彼は人目を忍ぶやうにこつそり手盛りで冷えきつた茶漬けを二三杯掻込んだ。

小使を呼んで跡片付けをさせてしまうと、彼はやつと初めて自分の體になつたやうな安心を覺えて、煙草に火を點けながらうつらうつらとさつきの續きを考へはじめた。今度は自分の考へを邪魔する他人が端にゐないので、何んなことでも自由に考へつくすことが出來た。そのうちに彼は我ながら可笑しい程神經が興奮してきて、白けた醉ざめの心持ちの底から一刻もじつとしてはゐられないやうな焦だゝしさが燃えあがつてきた。そして胸はいつのまにか女のことで一杯になつて、何う考へなほしても手紙か

何かで二人の間に消息を通じて置かなければ氣が濟まないやうな氣持ちになつて來た。

彼は何かに引寄せられるやうにふらふらと起ちあがつて、隅の方の用具棚から鑛山用の罫紙と封筒と硯を取卸して來た。そしてそれを明るい電燈の下に並べて、遠く深沈とした夜の底へ消えてゆく夜警の撃柝の音を聞きながら書くべき文言を考へはじめた。

一行書いては消し、二行書いては破りしてゐるうちに到頭十二行の罫紙に細かい字で四枚もかいてしまつた。此地へ來てからの地位や、月收や、生活狀態をまづ恐ろしく誇張した筆で事細かに書き綴つた。そして今の寂しい遣る瀨ない氣持ちや、東京にゐる間はさほどにも思はなかつた人の事が此頃になつてしみじみ慕かしく思はれるといふやうなことを行から行を追つて書き續けてゐるうちに、筆の先には漸次と油が乘つて來て、誇張された情緒とゝもにいつのまにか女の心を囚へずには置かないやうな美文が出來あがつてしまつた。そして最後に若し暇があつたら見物旁々此地へも遊びに來てくれといふことをいかにも親切な文言で書添へたあとで、からりと筆を擱いて、彼は嬉れしさうに何度も何度も初めから讀み返した。我れながら巧いと思はれる句節へ來る每に彼は小さな聲をたてゝ讀んだが、四度目になるとやつと思ひ切つてそゝくさ封筒へ收めた。そして明日の朝の第一便に間に合ふやうに態々寐てゐる小使を起こして事務所の前のポストまで入れにやつた。

それから三十分ばかりの後に、尾崎は粗末な木製の寐臺の上で獨寐の寒さに慄へながらまじまじしてゐた。窓から見える夜の空には數限りもない星がきらきら冷たく輝いて、選鑛場の貯水池へ水を落とす

音が地の底から匍ひあがつてくるやうに微かに聞えてゐる。尾崎の頭には埒もない妄想が次から次と映つたり消えたりした。彼は漸次と妄想の幸福に醉つていつた。

それから十日餘りも經つてからのことである。毎日毎日郵便配達の來るのばかり氣にして、東京からの返事を待ち焦れてゐた尾崎も今は惡夢から覺めたやうにやつとすべてを思ひ諦めて、再びもとの寂しい焦だゝしい氣持ちに歸らうとしてゐた頃である。

その日は第二番坑で坑夫の爭鬪があつて、宿直と交替になる間際に三名ばかりの重傷者を擔ぎ込んで來たので、その手當てに思はぬ時間を費して、尾崎は八時頃になつてやつと宿へ歸つて來た。

宿といふのは鑛山から鐵橋を渡つて町へ出やうといふとつゝきの通りにあつた。矢張り鑛山で書記を勤めてゐる老爺の家で、表では煙草やこまこました雜貨などを賣りながら年寄り夫婦にお清といふ十歳ばかりの貰ひ子の小娘と三人きりで至極小體に暮らしてゐる家だつた。尾崎はその二階の八疊を賄ひ付きで借りてゐたのである。

尾崎はいつものやうな沈んだ氣持ちで歸つて來て、奥の間から火の消えたやうな聲で挨拶する老婆の聲を聞き流しながら自分の室へあがると、先づ最初に眼についたのは机の上に載せてある一通の手紙であつた。彼は俄かに胸を踊らせながら又糠よろこびになるのかと思つて、そつとそれをとりあげて見ると、右あがりに書き流した彼の名宛はまさしく女文字だつた。藤野つるといふ裏書きをみるまでもなく、

彼はそれが東京の女から來た手紙であることをその刹那に感知した。

彼は外套も何も着た儘で机の前へぺたりと腰を据ゑた。そして慄へる指先で封を切つて一氣に讀み下した。行から行へ移るごとに胸は譯もなく波だつてきて、時々棒のやうのなものが鳩尾から喉もとへ込みあげてくるやうで、彼は息苦しさうに絶えずごくりごくりと喉を鳴らしつゞけてゐた。

その手紙によると、女はもう外科病院にはゐなかつた。麹町のさる看護婦會へ身を寄せて、今では派出看護婦として働いてゐるのであつた。それ故尾崎の手紙も轉々と方々へ轉送されて、漸う一昨夜はじめて派出先で女の手に落ちたのであつた。

女は尾崎からの手紙を此の上もなく喜んでゐた。殆んど文章をなしてゐない口語でその喜びを繰り返し繰り返し書いてあつた。そして半分から先はあなたがそんな心持ちでゐて下さらうとは夢にも思はなかつた、私はこんな嬉しいことはない、私は頼る人もない捨小舟の身だ、どうか末長く見捨てないで下さい、と云ふやうな口說文句をうるさく書き聯ねて、もう十年も前からお互に戀仲であつたやうな親しさがみせてあつた。そして最後に是非逢ひ度いから四五日うちに派出先から暇が出次第、その日の汽車ですぐさま戀しいあなたのお傍へ遁げてゆくといふことを思ひ迫まつた女心を打割つてみせるやうな言葉で書き添へてあつた。

尾崎は餘り意外な便りなので、却つて度膽を拔かれてしまつた。抑へ難い歡びは胸に溢れてゐながら、何だか嘘のやうな氣ばかり先へ立つて、雀躍りして喜ぶやうな噪いだ心持ちには何うしてもなれなかつ

た。そして眞箇に女が來るとすれば先づ第一にその準備からしてかゝらなければならないと思ふと、もうすつかり悄氣きつてしまつた。

女を迎へるには何よりも先づ金が欲しかつた。その方は月給の前借でもして融通をつけるとしても、融通のつかないのは現在彼を包む周圍の狀況であつた。手紙では豪勢な社宅住ひでもしてゐるやうに書いてやつたが、現在こんなみすぼらしい貸間に燻ぶつてゐるのを見たら女は何と思ふだらう。此町へ入つたが最後化の皮はたちどころに剝がれてしまうのだと思ふと、彼ははたと當惑してしまつた。そしてもう何を云つても取返しのつかないのを思ひやると、あんな手紙を書いたことがつくづく情なくなつてきた。

併しそんな臆病な氣持ちも長くは續かなかつた。あの藤野は決してそんな女ぢやない、こんなことはほんの小供らしい惡戯だもの、これ位なことで愛想を盡かす譯は決してない、からと事情を打割つて訴へればきつと自分の位置を理解して吳れるに相違ない。さう思ふと彼の心はその刹那にぱつと明るくなつた。彼は次々と込みあげてくる歡びに身を浸しながら涙ぐむだやうな眼つきをしてうつとりしてゐたが、到頭我慢しきれなくなつて突如机に向つて藤野への返事を書きはじめた。

愈々女が來ると云ふ日は朝から大雪で、氷のやうな北山おろしが粉雪を卷きたてながら鑛山の町へ眞向に吹きつけてゐた。

尾崎は定めの時間に病院へ出るには出たが氣がそわそわしてまるで落着いてゐられなかつた。昨日夕方になつて女から明日の一番で發つといふ最後の電報を受取つた爲め昨夜は夜〻と夜おちおち眠れもしなかつたので、それでなくてさへ彼は胴忘れでもしたやうに呆然してゐた。事實、愈々ほんとうにあの女がやつて來るのだとすると、彼はまるで夢のやうな心地がするのであつた。毎度の手紙で行く行くと云つては來るものゝ、昨日まではそれが事實に實現されやうとは信じてゐなかつた。ほんとにさうなつたとすれば、事のなりゆきが餘りに意外で、餘りに突飛である。初めて手紙を書く日まではまるで心にも留めてゐなかつた女が、今自分の戀人になつて一日路の長い旅路をはるばる訪ねてくるのである。彼にはそれが不思議に思はれてならなかつた。そしてその藤野といふ女もよく考へてみると、彼には戀人になり得るほど知己でもないやうに思はれる。僅か三箇月ばかり一つ病院に勤めてゐたといふだけで、お互に膝を突き合はせてしみじみ話し合つたこともなければ、手を握り合つたことすらない。そして今まで經來たつた閱歷も、素性も、心持もまるで知合つてはゐなかつた。それを思ふと、尾崎は世の中の事が上面は難かしさうに見えてゐても、存外容易く、簡單に動いてゆくのに驚かずにはゐられなかつた。そして今更ながらなりゆきといふものゝ不思議をつくづく感じた。

尾崎は午後になると愈時の經つのが待ち遠しくなつて、仕事が暇になるとじりじりしながら窓の傍へやつて來て、衣嚢へ兩手を突込んだ儘獨りでぼんやり窓から戶外を眺めた。雪は稍小降りになつたが、

それでも風はなかなか止まなかつた。すぐ眞下の平地には處々に小高い吹き溜りが出來て、運鐵場の屋根から先は降る雪の脚に閉ざゝれて全く展望を遮られてゐた。尾崎は天氣を氣遣つたり、これから逢ふ女のことなどでもう胸が一杯になつてゐた。

尾崎と對向ひの卓で働いてゐる矢野は此頃彼の容子がまるで變つて來たのを怪しんで、寄ると觸ると彼を冷評した。その時も彼は暖爐の前へ陣取つてぷかりぷかり煙草ばかり吸つてゐたが、ふと薄笑ひを含んで、

「おい、尾崎君。そんな寒い處へ突立つて一體何をしとるんだ？　こつちへ來てあたり給へな。此頃君は全く變だよ。何うしたと云ふんだい？　もう可い加減に白狀したつていゝぢやないか。」

「ふむ、何んでもないさ。」と、尾崎も窓際から暖爐の傍へ歸つて來て、「少し大事件が起つてゐるもんだから……。」

「大事件？　扨ては女でも出來たかね。」

「まあそんな事だ。さう思つてゐりや間違はないさ。」

「こりや怪しからん。そんなことを僕に隱しだてする法があるかい。さあ、白狀し給へ。」と、矢野は浮々した調子で云つて、隅の卓で講談本を讀み耽つてゐる山田の方を振顧つて、「おい、山田。手術室へ行つて、大きな朧盤を一枚持つて來い。」

山田は吃驚したやうな顏をあげて、

「何てす？　膿盤？」

「うむ。此れから尾崎先生が惚氣を仰有るさうだから、お前膿盤を持つて此處へ來て立つてゐろ。」矢野は顎を掬ひあげながら云つた。

「まあ、厭だ。何かと思つたら、御笑談も可い加減になさいよ」山田は間の拔けた笑ひかたをしながら又顏を伏せてしまつた。

尾崎は今まで女の來ることをふつりとも矢野に打開けなかつたが、もう何うにも我慢が出來ないので、いつそ話してしまはうと腹をきめた。彼は急に得意らしく笑ひながら、山田には聞えない程の低い聲て、

「實はね、君に話したあの女ね、あれが愈々此地へやつて來ることになつたんだよ。僕はもう困つちやつてねえ。」

「はゝ、大方そんなことだらうと思つた。何も困ることはないぢやないか。結構なこつだ。」矢野は態と落着き拂つた調子て云つて、「そしていつ頃來るんだね？」

「今夜の汽車て着くんだ。此の天氣だから何うかとは思つてるが。」

「えつ、今夜？　恐ろしく氣が早いんだねえ。尤もさうだらう、それほど思ひ合つてるんぢやねえ。て、何かい、此間の君の話ぢや親御さんが不承知のやうだつたが、そつちの方はうまく妥協が出來たのかね。」

「さあ、それが何うも疑問だがね。あの女のことだからまた無茶をやるんぢやないかと思つて實ははらはらしてゐるんだ。」尾崎は漸次と虚言をつくことに興味を持つてきて、「實は此間から度々手紙で來る來

るつて云つて來たんだが、僕の方ぢや今來られちや大事だからねえ。それに前後の事情を冷靜に考へてみると、第一親は不承知なんだし、僕とても今あの女を何うするといふ氣もないしね。といつて今突き離しや何んな無茶な眞似をせんとも限らんから僕も一時は途方に暮れてしまつたんだ。て、その事を細かく手紙に書いてね、もしあなたが僕の爲めを思ふのならもう暫らく待つてゐて呉れと云つてやつたんだが、何うしても承知しないんだ。何んでも行く、若し行つてあなたが逢つて下さらないやうなら私はその時こそほんとうに覺悟をきめる。つまり自殺してしまうと云ふ意味なんだね。そこまでいけば僕はもう一言もないからその儘放つといたんだ。と、昨夜になつて突然電報で明日一番で發つといつて來たんだ。どうもその電報の容子なんかで見ると尋常一樣の手段で來るんぢやないらしいんだね。家出して遁げて來るらしいんだが。」さう云ふうちに尾崎の顏は眞實そんな境遇に身を置いてゐる人のやうに自然と熱してきて、眼まで何處となく濕んできた。

矢野はその顏をまじまじみてゐたが、到頭釣り込まれて、

「ふむ。面白い。君もこれでなかなか色男だね。僕なぞも若い時分には女に緣の薄い方ぢやなかつたが、そんな女にや一度も出遇はしたことはないね。そりや餘程熱つぽい女だぜ。要心しないと君の仕向けひとつぢや大變なことをおつぱじめるぜ。」

「其處なんだ、僕の心配してるのは。僕たつて此れて大きな野心を持つてる男なんだからね、今そんなつまらん女に引懸つて、一生を棒に振つちまうのは厭だからねえ。」尾崎は昂然と云つて、眉を顰めなが

ら、「質に困つたもんだ。」

「お察し申すよ。併しまあ可いさ、君等はまだ若いんだもの。女で苦勞するんなら苦勞のし榮えがあらあね。」矢野は輕い嫉みを唇に出しながら冷評すやうに云つて、ふいにまた山田の方へ言葉を逸らしながら、「おい、山田。そんな下らんものを讀んどらんで、ちつと尾崎先生のお惚氣でも拜聽しろよ。尾崎先生は東京の綺麗な娘さんに惚れられて大變な目に逢つてるんだぜ。お前なんぞがいくら惚れたつて、足許にも寄りつけやせんぜ。」

山田は殘り惜しさうに頁を繰つてゐたが、到頭ばたりと本を伏せて、

「なあに？」と、云ひながら暖爐の方へ寄つて來た。

「いゝやさ、尾崎先生の處へ今夜東京から情人が遁げて來るんだといふのだよ。」

「まあ、さうですか。御馳走樣ですわねえ。」

「はゝゝゝ。綺麗を口をきいてやがる。まあよく考へてみろ、折角お前が惚れとつたのが片思ひになるんだぜ。さぞ口惜しいだらう。」と矢野はいつもの癖で山田の手を握りながら、「だからもう尾崎先生なんぞに惚れずと、俺に乘り換へろよ。今日は幸ひ宿直だから俺が口說いてやる。云ふことを聞けよ。はゝゝゝ。」

「まあ、厭らしい。誰れがあなたみたいな人の云ふことなんか聞くもんですか。」山田は握られた手を振りもぎらうとして身を悶いた。

「はゝゝ。柄にないことを云ふなよ。なあ、尾崎君。これでも人を振る氣でゐるから凄まじいぢやないか。」

尾崎は矢野がこんな山田のやうな女を捕まへて面白さうに揶揄つてゐるのが淺猿ましくてならなかつた。まあ俺をみろ、俺の處には東京から女が逼げて來るんだぞ、といふやうに肩を張りながら彼は厭な顏をして煙草ばかり吸つてゐた。

矢野はそれを見ると急にまた言葉の調子をかへて、

「併し、尾崎君。そんな綺麗な娘さんなら是非僕にも紹介し玉へ。公開して置く方が却つて蟲がつかんでいゝぜ。」

「そりや無論紹介するが、……」蟲がつくといふ言葉がひどく尾崎を侮辱するやうに響いたので彼は眼に角を立てゝついと窓の方へ向いてしまつた。そしていら〳〵した聲で獨語のやうに「よく降るなあ、せめて風だけでも止んで呉れりやいゝが。」

「とてもこの樣子ぢや止まんね。それにかう積もつちや胸突坂はとても車は通ふまい。仕方がない、馬橇をはづむんだね。」

尾崎にはさう云ふ矢野の言葉が一々反感をもつて聞きなされた。彼はすべてに敵意を示すやうに昂然と肩を張つた。

その夜も雪に暮れて、寒氣を恐れる家々ではもうすつかり戸を卸してしまつた頃、尾崎は鑛山の町から一里半ばかり離れた寂しい停車場へ來てゐた。厚外套に體を包んで、待合室のベンチにしよんぼり腰をかけながら、彼は何とも云ひやうのない緊張しきつた心持ちで窓の外に降りしきる雪を眺めてゐた。幸ひ鑛山所屬の馬力屋で馬橇の支度を引受けて呉れたので、彼はもう唯女の乘つてくる列車を待つばかりであつた。

天氣が天氣なので旅をする物好きもないとみえて停車場はいつになくがらんとしてゐた。薄暗い電燈はストーヴの焔と光を爭ひながら待合室の板壁にしみつくやうな影を描いて、寒い風が吹き込んでくる度に入口の方から粉のやうな雪片がちらちら迷ひ込んで來た。彼は來がけに呷つた酒が殘つてゐるので、人さへゐれば誰れでも構はず話しかけ度いやうな浮いた氣持ちになつてゐたが、何處を見ても薄暗い光と雪の喘ぐ音ばかりなので、しまいには鉛のやうな寂しさが心の底まで食ひ入つてきた。女に逢つたら最初にあゝも云はう、かうも云はうと考へてゐた種も盡きる、空想の源も今はもうすつかり枯れつくしてしまつたやうなので、彼はその寂しさを紛らかす何ものをも持たなかつた。唯煎りつくやうな思ひで來るべき列車を待つた。

八時を打つと間もなく突然報知器がりんりん鳴り出した。それと一緒に次の驛へでもゆくらしい雪靴をはいた一連の農夫がぞろぞろ停車場へ入つて來て、驛夫はプラットフォームへ出る、電話の聲は聞える、四邊が急にざわついて來た。そして定刻よりも二十分ほど遲れて、やつと遠くの方から汽笛の聲が

かすかに聞えて來た。
それを聞くと尾崎の胸は俄かに痛いほど躍つてきた。列車の轟響が近づいて來ると一緒に體ぢうが冷たくなつてゆくやうて、彼は手足を慄はせながらぢつと眼を瞑つて立ち度いのを押し堪へてゐたが、到頭我慢がしきれなくなつて改札口まて歩み出た。
丁度その時列車は鼻先のプラットフォームへ來て停車した。騒々しい蒸氣の音とゝもに驛名を呼んて歩く驛夫の聲が流れて、どの車室もどの車室も薄暗い光がさしてゐるばかりて殆んどがらあきなので、戸を開ける音も二つ三つ聞えたきりだつた。と、最後から二つめの三等車の戸がさつと開いて、そこから眞黑な人影が雪の上へすつと降りた。薄闇のなかなので姿貌は分らなかつたが、漸次近寄つて來るのを見ると、それは束髮に結つてコートを着た女だつた。ほの白い顏はやがて遠くからにつと笑つて、聞き馴れた聲が、
「尾崎さん。」と、二度程呼んだ。
尾崎はかつとしてその瞬間云ふべき言葉を奪はれてしまつた。そして女が電燈の光の射す處までやつて來た時になつてやつと慄へをおびた頓狂な聲て、
「やあ、藤野さん。」と、呟いた。
「まあ、ほんとに尾崎さんてしたわねえ。この雪てすからまさか迎ひになんか來て下さりやしまいと思つて、私どうしやうかと思つてましたのよ。まあ、これて安心致しました。」と、女はさも安心したやう

な口調で云つて、切符を驛夫に渡しながら尾崎の傍へ近寄つて來た。そして着換へても入つてゐるらしい信玄袋を持ちかへて、ちよつと襟巻きに手をかけながら、「ほんとに暫らくで御座いましたわねえ。まだ此間ぢうはお手紙を有難う御座いました。私到頭やつて參りましたわ。」と、落着いた聲で挨拶して、厚く化粧した顔に嬉しさうな笑ひを浮べた。

尾崎は女の言葉に壓されて、とつて置きの挨拶はひとつも云ひ出せなかつたが、それでも默つてゐる譯にはいかないので、

「さぞ寒かつたでせう。」と、取つて附けたやうに云つた。

「え、ほんとにねえ。福島邊まではそんなでも御座んせんでしたけど、乘換へてから此方の寒さといつたらありませんでしたわ。それに東京をたつ時には雲が少しばかり降つて居ただけですのに、此方へ來るに從つて雪が深くなるんで驚いてしまひましたわ。」

「さうでせうとも。此地も今朝から降り出したんだけど。」と云つて、尾崎はもぢもぢしながら、「兎に角急いで町へ行きませう。」

「町までは隨分あるんで御座いますか？」

「いや、一里と少しです。」と、尾崎は事もなげに云つて、停車場の入口の方へ廻つた。そしてすぐ前の運送屋の土間で爐にあたつてゐる馬方たちを大聲で呼んで橇の用意をさせた。

やがて二人はヅックで掩ひをした狹い橇のなかへ體をぴたり押し合ひながら坐つた。薄濕りのした毛

布や、木枠が觸るので女は氣味が惡さうにもぢもぢしてゐたが、やがて云ひ譯でもするやうに、

「これが橇つて云ふものなんですか。私初めて乘つたんですよ。隨分搖つてますのねえ。」

「えゝ、車だといゝんだが、なにしろこの雪ぢや橇でなくちや通はないもんですからね。」

「さうですとも。でも面白う御座いますわ。」

その時、馬方が「どう」と云つて鞭を入れると、橇はするすると音も立てず動きだした。そして少しづつ速力が加はつてゆくにつれて、馬の首につけた鈴が氣忙はしい響を闇路に流しはじめた。

尾崎は女が默つてしまつたのでそれを氣にしながら、話の緒を求めて、

「今朝は一番でしたか。」と、分りきつたことを訊ねた。

「え、實は昨夜の夜汽車でたゝうと思つてゐましたんですけど、患者さんのお宅でお床上げのお祝ひがあつたもんですからついはづせなくつてねえ。ほんとに一日も早くあなたにお眼にかゝり度くつて堪らなかつたんですよ。」

「私はまたあんなに云つて來たけど、まさかほんとに來て與れやしまいと思つてたんです。ほんとに意外だつた。」尾崎は稍落着いて來たので後先を考へながらをづをづ云つた。

「まあ、隨分ですわねえ。私はそんな女ぢや御座いませんわ。かうしやうと思つたら何んなことでも思ひ切つてやり遂げる性分なんですもの。」と、女は熱つこい調子で云つて、「でもお驚きになつたでせうねえ。若い女の身でこんな遠い處までたつたひとりで出掛けて來るなんて隨分ですわねえ。でもあなたの

お傍へ行くんだと思ふと、ちつとも恐いことなんかありませんてしたわ。」

尾崎は默つて答へなかつた。外套の襟に顏を埋めながら闇のなかで唯にやにや笑つてゐた。

そのうちに橇は漸次と阪路へかゝつた。それと同時にはげしく左右に搖れはじめて、或時は女の髮の毛が冷々と尾崎の頰へ觸れることさへあつた。そして時々掩ひ布の隙間から肌を刺すやうな風がすつと吹き込んで來て、馬の蹴上げる粉雪が容赦もなく顏へ吹きつけた。

女はコートの袖をあげてそれを避けてゐたが、やがて齒の根も合はないやうな聲で

「ねえ、あなた。外套のなかへ入れて下さらなくつて?」と、囁いて、突如尾崎の外套の翼をめくつてそのなかへ肩を入れた。そして氷のやうに冷えきつた手で彼の手に觸つて、

「こんなに龜手んぢやつたんてすもの、溫めて下さいな。」

尾崎はともすると頰と頰とがさわりさうなのを氣にしながら妙に押默つて、女のするがまゝに任せてゐた。

女は甘えるやうな調子で、

「でも、あなたから初めてお手紙を頂いた時はほんとに嬉れしかつたわ。餘り嬉れしかつたもんだからつい患者さんの前で口を滑らしちやつて、さんざ冷評されましたわ。でもそれまでは貴方が私のことなんか思つてゐて下さらうとは夢にも知らなかつたんてすものねえ。全く私の思ひが屆いたんてすわねえ。」

女がそんな甘い言葉を饒舌りつゞけてゐるうちに橇は一里半の雪路を眞驀に馳り過ぎて、ほの白い樹立の彼方にはやがて粉雪にかき暮れながら町の灯がちらちら隱見して來た。そしてだらだら阪を一息に馳り下ると、間もなく大通りの中程にある大きな宿屋の前へ來てすつと止まつた。女をひとまづ落着けるために、そして又ひとつには自分の嘘て固めた憐れな境遇を女に知らせないために、尾崎はさつき出掛けにふつと思ひついて此の旅館を撰んで置いたのであつた。

二人は橇を下りて、卸し戸の側についた覗りの小障子を開けて中へ入つた。

四邊もうしんと更け靜まつた頃である。町にも物音ひとつ聞えなくなつて、小窓の雨戸には雪の吹きつける音ばかりがさらさらと喘ぐやうに響いてゐる。

二人は湯上りに酒を飲んだので節々も溶ろけてゆくやうなだらけた氣持ちになりながらひとつ炬燵にあたつて埒もない饒舌を續けてゐた。

女はやつと思ひきつたといふやうに、

「ても、ねえ、尾崎さん。こゝはあなたのお宿ぢやないんてせう。お手紙にや家を持つてらしやるやうに書いてあつたぢやないの。」

「無論持つてますさ。この直ぐ下の通りにあるんだが何しろ恐ろしく穢いところだし、それに食器もなけりや蒲團もないもんだから……。」

「そんなものは何うだつていゝぢやないの。こんな宿屋なんかへくるよりもあなたのお宅へずつと着いた方がどんなにしんみりしていゝか知れやしないわ。あなたも隨分水臭いのねえ。きつとなんなのよ、お手紙にやあんなことを書いてあつても、お宅にや誰れか綺麗な人でも被居るんでせう。きつとさうだわ。」

「そんな馬鹿なことがあるもんですか。何の證據があつてそんなことを云ふの……。」と尾崎が眞氣になつて辯解しやうとするのを、女は輕くそらして分厚な脣に媚びを現はしながら、

「ほゝゝ。そりや笑談ですけれど、ほんとにこんな宿屋なんかへ來るのは詰らないぢやないの。餘計なお金を費ふだけ損だわ。それよりや有るものを拂ひ集めて世帶を持つたやうな鹽梅しきにやる方がどんなにいゝか知れないわ。」

「私もさう思つたんだけど、なにしろ男の一人世帶だもんだから、餘り殺風景のやうでねえ。」

「却つてその方がいゝわよ。」と、女は椅の上でじつと男の顏をみた。そして暫らくの間頭のなかの考へを纏めてもするやうにひと處に眼を据ゑて默つてゐたが、やがてしんみりした調子になつて、

「私もね、實は此頃自分の體の始末についてそりや苦心してるのよ。年だつてもう若かあないんですし、いつまでこんな看護婦なんかしてぶらぶらしてたつて仕樣がないから、ひよつとして固められるものなら今のうちに身を固めてしまひ度いと思つてるの。あなたは私の氣心をよく知つてらつしやるから、御相談するんだけれど、何う處置をしたらいゝでせうねえ。」

「さあ。」尾崎は差當り當惑して、「若かあないつたつて、また二十歳だいぢやありませんか。」

「あら、可哀想なことを仰有るわねえ。これで三十にでもなつてたら何うすることも出來やしないわ。」

と、女は拗ねるやうに笑つて、また眞顔になりながら、「それで今度もね、どうせ東京にゐたつて詰ないんだから、もしあなたさへ御迷惑でなかつたら私當分此地に居たいと思ひますのよ。あなただつてお一人ぢや御不自由でせうから、女中でも傭つたと思つて置いて下さいましな。その代り御飯でも何でも炊きますわ。さうしてなるだけ儉約して仲よく暮さうぢやないの。」

「そりやいゝが、併し東京の方に何か責任が殘つてやしないの？」尾崎は稍當惑はしたがそれでゞ胸を躍られるやうな嬉れしさを覺えながら訊いた。

「いゝえ。そんなことはありやしませんわ。今の看護婦會にや會員として世話になつてるきりで、生活の方は私ひとりでやつてるんですから、手紙一本でいつても脫けられるんですわ。それに私はあすこの會長さんに憎まれてるもんだから、ちつともいゝ口を分けて與れないの。」

「そんな風なら當分此地へ居て御覧なさい。倦きたらまた東京へ歸るさ。」と、尾崎は態を鷹揚にいつて、

「でもさうすりやさし當つて荷物も取寄せなけりやならんでせう。」

「え、そりや譯ないわ。私達は派出に出つけてますから、身のまわりのものはちやんと行李に入れていつても出られるやうに用意してあるんですもの、手紙でもやつて直ぐに取寄せますわ。」

「なるほど。そりや都合がいゝ。」尾崎はもうすつかりその氣になつて、それとなく先の空想を描いてゐ

た。魂ヶ揺ぐやうな歡びがいつかさまざまの不安を心の底から壓し除けてしまつた。

女はその儘暫らく炬燵の櫓に顎を凭せかけながら考へてゐたが、やがて、

「でもねえ、あなた。まるまるあなたの御厄介になるのもお氣の毒ですから、私も稼げるだけ稼ぐわ。あなたの勤めてらつしやる病院ぢや私のやうなものは傭つて呉れないでせうか。」と、尾崎の氣を咬るやうに云つた。

「そりや東京で修業した人だから喜んで傭ふだらうが。」

「もしさうだと共稼ぎで嬉れしいわねえ。でもそんなことをしたら貴方のお顔にかゝりやしなくつて?」

「そりや無論困るさ。だからそんな事をしなくたつていゝんですよ。私だつてあなたひとりぐらゐ何うでも出來らあね。」尾崎は誇りを傷けられまいとするやうに氣負つて云つた。

「そりやさうでせうけど、私みたいな者が轉げ込んで來て御迷惑をかけちやほんとに濟まないわ。」女は男の心を溶ろかさうとするやうに「でもほんとに貴方もお變りになつたのねえ。東京に被居つた時分とはまるで見違へるほどお立派におなりなすつたわ。今ほんとにどれ位收入がおありなさるの?」

それを聞くと尾崎は急に臆病らしい眼色になつて、

「さあ、月によつて違ふけど。……尤も病院の方ぢや五十圓ばかりしきや貰つてないけど、別に手當にもつくし、それに時々内密の往診がありますからねえ。」と、まことしやかに云つた。

「まあ、それぢや隨分いゝ收入ぢやありませんか。失禮ですが東京に被居ちやとてもそれだけは取れま

せんわねえ。」

「さうですとも。併しそれても此地ぢや幾ら取つたつて足りやしませんよ。寂しいもんだからつい酒を飲んだり、惡い遊びをしたりしていつも借金ばかりしてゐます。」

「まさか。」と、女は信じないやうに笑つて、「でもお若いのにお一人てはねえ。ほゝゝ。」と揶揄ふやうな聲を出して笑つた。

尾崎は何と思つたかさつと顔を赧めて、急に話題をかへながら、

「いや、併し私もいつまでこんな處に燻つてやしませんよ。來年にでもなつたらひとつ東京へ出て大いに活動しますよ。」

「結構ですわ。此地でうんとお金を蓄めて、東京で開業でもなさいよ。あなたは眞面目だからほんとに頼もしいわ。」女はしみじみ頼りにしてゐるやうな口調で云つた。

その時、廊下の方で足音がして、寒さうな女中の聲が障子の外から、「まだお寐みになりませんか。」と呟いて通つた。

その翌朝十時過ぎになつて彼等はやつと眼を覺ました。手水を使つて身じまひを濟まして部屋へ歸つて來ると、二人とも妙に眩ぶしいやうな眼つきをしながらその儘小窓のところへ突立つて、すぐ直下に見える町の雪景色を眺めた。

空は昨日のやうにどんより曇つて、粉のやうな雪が相變らずちらちら降りしきつてゐる。町の家々は一夜のうちに丸々と雪の衣を被つて、程遠くない通りでは雪掻きをする人の罵り騷ぐ聲ががやがや騷々しく聞えてゐる。鑛山の精煉所や選鑛場の大建物は雪に埋もれた谿間にひとつひとつやつと見分けられて、煙突から立騰る毒々しい黑烟だけが眞白な山の脊を上へ上へと匍ひあがつてゆく。すべての上に立迷ふものは寂しい白色の反映ばかりであつた。

女はその光景をつくづく眺めてゐたが、やがて感に堪へないやうに、

「隨分山の中だわねえ。私は鑛山だつて云ふからもう少し賑やかな處かと思つたわ。」

「寂しい處だらう。とても若い者はこんなとこに長く住んぢや居られやしない。」尾崎は女の顏色を讀みながら迎合するやうに云つた。

「全くだわねえ。」と云つて、女は鑛山の方を指しながら、「ありや何んです？」

「あれが鑛山さ。彼處が精煉所で、此方のが選鑛場だ。」

「まあ、あれが鑛山なんですか。ぢやあすこから金や銀が出來てくるんだわねえ。」

「いや。此處は銅山だから銅ばかりしきや出來やしないさ。そして彼處の山の端れの處に小さな西洋造りの家が見えるだらう。あれが病院さ。」

「へえ。あれが。」女は侮むやうに云つて、「幾つぐらゐ病室があるの。あれぢやさう澤山はなさゝうね。」

「いや、あれだつて二十や三十はあるさ。それに今度手術室も最新式のやつに改築したから。」

女はそれには答へなかつた。豫想がまるで外れてしまつたやうな氣の抜けた顏をしながらその儘寒いといつて炬燵のなかへもぐり込んでしまつた。そして暫らくの間冷たい眼つきをして尾崎の横顏をじろじろ偸みゝしてゐたが、ふと思ひついたやうに、

「もうそろそろ病院へ被往る時間ぢやないの？」と訊ねた。

「え、九時からなんだが、併しどうせ遲れたんだから今日は缺勤してしまひませう。」

「そんなに怠けちやいけないわねえ。でも代つて下さる醫員の方は被居るんでせう。」女はてんから馬鹿にするやうな調子で云つたが、やがて身のまはりを顧みるやうな心細い顏になつて、「ほんとにこんな處へたつた一人で放つとかれたら耐らないわねえ。お天氣でもよければ辛抱も出來るけど。」

尾崎は氣持ちにそぐわないやうなてれた薄笑を浮べたぎりで何とも云はなかつた。そして半紙を取寄せて缺勤屆を書いて、使ひに持たせて病院まで屆けさせた。

二人は到頭その日一日炬燵のなかで寐たり起きたりして、取留めもない時を費してしまつた。

その翌日はけろりと天氣が變つた。大空は拭いてとつたやうに蒼々と澄み渡つて、日の光にぎらぎら照り輝く眞白な山々の膚にも町の家々にもすがすがしい雪晴れの氣持ちが一面に溢れてゐた。軒先にきて囀る雀の聲が何處となく嬉しさうで、それを聞いてゐる尾崎の心は昨日に引きかへて妙にそわついてゐた。

尾崎は餘り女が煩く云ふので、その朝宿屋を引上げて自分の宿へ歸ることに腹をきめた。二日二晩の逢ふ瀬で尾崎は稍女に疲れて來た。そしてから打開けて話し合つてみると、女の心持ちも、價値もすつかり分つてしまつたやうな氣がして、女の身のまわりからは少しづゝ匂ひがぬけてゆくやうにさへ思へた。どうせ斯うなつてしまへばいつ迄嘘をつき了ふせるものぢやない。近いうちには孰れ洗ひ晒らしに總てが曝露れてしまうに極まつてゐる。それよりも今のうちに自分の方から打割つて眞實の境遇をみせてしまう方が却つて女の氣を惡くしないで可いかも知れない。こんな考へから彼は女を自分の宿へ連れてゆくことにしたのであつた。

十時を打つと彼は支拂ひを濟まして女に急き立てられながら宿屋を出た。通りではもう大方雪掻きも濟んで、兩側に堆たかく積まれた雪の山は眼にちかちか浸み渡るやうに明るく映り輝いてゐた。低い家並の上にみえる山々もいつもより際だつて高く高く聳えたつて、底明るい積雪からは幻のやうな影がふらふらと澄み渡つた紫色の蒼空へ立騰つてゆくやうに見えた。そして二三日の間停滯してゐた貨物を運ぶ橇の鈴が通りすがりに彼方でも此方でも賑やかに聞えて、明るい空氣を更らに明るくしてゆくやうに思はれた。

女は粗末な銘仙か何かではあつたが此邊では珍らしい派手な柄の着物を着てゐたので、町の人達は怪訝さうに彼等の顏をぢろぢろ見て通つた。尾崎は自分の職務を知られるのを恐れて、氣恥かしさうに眼を伏せながら女よりも十歩ばかり先を大股にぼくぼく歩いて行つた。

宿へ着くと幸ひ店番をしてゐる婆さんの姿も見えないので、尾崎は足音を忍ぶやうにこつそり上へあがつた。女は初めて尾崎が煙草でも買ひに入つたのだらうと思つて店口の處でためらつてゐたが、彼が階段の中途から此方を振顧つて手招きをするので變な顔をしながら默つてその後に隨いて行つた。

二階へ上つてみると尾崎の部屋の八疊はまだ雨戸が閉てきつてあつた。尾崎は暗闇のなかをがさがさ手探りながら肱懸窓の戸を開けたが、それと一緒に明るい雪明りがさつと流れ込んで、見すぼらしい部屋の有様は一々女の眼に映つた。留守にしてゐた間に一度も掃除をしなかつたとみえて、閒内は一昨日出た時の慌だしい儘になつてゐた。行李は蓋を開けはなした儘になつてゐる、平常着は丸めて壁際へ放り散らかしてある、机の上には飲みさした湯呑や、鏡や、雜誌や、古襟飾などがごちやごちやに取散らしてあつて、本箱の上の眼覺時計は丁度午前三時を指したまゝで止まつてゐる。

女は部屋の隅へ突立つて、呆れたやうな眼つきをしながら四邊をおろおろ眺めまわしてゐたが、やがて、

「此處があなたのお宅なの。」と冷たい聲で云つて、寒さうな格好をしながらその儘そこへ腰をおろした。

尾崎はその時建て附けの惡い障子をがたぴしさせてゐたが、一寸後を振顧つて、

「隨分穢い處でせう。」と、云つた。女から何か云はれない先に豫防線を張つて置くつもりで云つたのだが、その聲は妙に白けきつてゐた。そして態と大風に手を叩いて、娘に火を持つて來るやうに命じて、そのまゝ机の前へごそりと趺坐をかいた。

女は暫らくの間煤けた天井や、汚點の出た襖などを見まはしてゐたが、何處か刺をもつた調子で、

「あなたもまだ書生ッ氣がぬけないのねえ。もう少しそこらを奇麗にしとおさきすつたらいゝぢやないの。此れぢや病院の先生方のお部屋とは見えないわ。」

「併しこれだつて此處邊ぢや奇麗な家の方ですぜ。こんな山の中だから貸間なんぞといつたつて碌なものはありやしないんだもの。」尾崎は臆病な眼つきをしながら辯解するやうに呟いた。

女はそれには答へなかつた。

そこへ階下の娘が大十能へ釜下の榾火の燻ぶる奴をこてこて盛つて上つて來た。尾崎は不器用な手つきてそれを小火鉢へ移した。煙草の吸殼が一杯放り込んであるので、移された火は更らにもやもやと煙つた。尾崎はそれをそつと女の方へ押しやりながら、

「さあ、もうちつと此方へ寄つておあたんなさい。何といつても兎に角此處は私の家なんだからゆつくり足をのばして、自由にしてください。」尾崎は娘の手前虚勢を張るやうに云つた。

女は默つて火鉢の傍へいざり寄つて來た。そして四に折つた毛布の上へ坐つて、顏をしかめながらやけに火箸で火をほぢくりはじめた。やつと煙がとまると、我儘な地金を出すやうな聲で、

「ねえ、あなた、炬燵はないの？　此樣な火鉢ぢや寒いわよ。」

「さあ、階下へ行つてゐるだらう。持つて來させませう。」と、尾崎はないのを承知てから云つてはたばた階下へ降りていつた。そして娘を呼んで炬燵の調達を頼んだが、生憎家には餘つたのがないと云ふの

て、仕方なしに五圓紙幣をもたせて態々下の町まで行火を買ひにやつた。そして二階へ歸るついでに彼は裏の間から鐵瓶をもつて上つて、不器用な手つきで茶を入れはじめた。女は始終嘲けるやうな薄笑を鼻の先に漂はせながら彼のきよそきよそした容子を注視してゐたが、時々勝手な口を入れるばかりで、自分から手を下しては茶椀ひとつ動かさうとはしなかつた。すべての豫想に裏切られた失望と焦だゝしさがやがて彼女の瞳にありありと描き出されて來た。

仕出し屋もので晝飯をすますと、彼等は又行火へもぐり込んで、抑へてゐた疲れが急に出て來たやうに生欠伸ばかりしつゞけながらうとうとしてゐた。もう二人の間には話すべき話の種も盡きてしまつたやうに思はれた。尾崎はそれでも何かしら心を刺激する考へが殘つてゐて、時々眼を輝かしながら此れから先の相談なぞを女に持ちかけた。女はそれに生返事をした。そしてのんびりした雪溶けの雨滴れの音や、眠りを誘ふやうな行火の溫氣に身を浸しながら別なことを考へてゐるらしい樣子をしてゐた。

鑛山の方で消魂しい二時の汽笛が鳴り出すと女はふと思ひついたやうに尾崎の顏をみて、

「あなた今日も病院へ行かないの。」と訊いた。

「いや、今日は出なくつちやならんのだけれど、もう遲くなつたから。……」

「私が來たからつてそんなに怠けちや可けないわ。それに何んな患者が出來てるか分らないんだから今日に此れから出勤なさいよ。院長さんに睨まれて罰俸でも食つたら何うして？」女は弟でも扱ふやうに

云つた。

尾崎は頭をやけに掻きながら、

「そんな馬鹿なことはないが。……」と、云つて强ゐて平氣な顏はしてゐたが、その時心の底には俄かに手不足な病院のことが映つて來た。矢野がひとりで轉手古舞ひをしてゐる有樣や、院長が髯をびくびくさせながら看護婦達を怒鳴りまわしてゐる有樣を思ふと、彼は餘りに責任を怠つてゐたのがひどく氣になつてきた。而かも今日は無斷で缺勤してゐるので、彼には院長の思惑が怖ろしかつたのである。

彼は到頭行火からしぶしぶ起ち上つた。そして折角脫いだ洋服をもう一度着なほして、聽診器や手帳も衣嚢へ入れて見たが、何だか後髮をひかれるやうに未練が殘るので、又火鉢の前へ坐つて煙草を吸ひだした。

女はそれをみると、いらいらしたやうに、

「何をしてるのよ。行くんならさつさと行つたら可いぢやありませんか。早く行つて早く歸つてらつしやい。私もたつた一人でこんな處につくねんとしてゐるのは厭だから。」

「もう遲いんだから夕方の回診に間に合へばいゝのさ。」兎に角ちよつと顏を出して來やう。」尾崎は女の顏色を讀むやうな臆病な眼つきをして、やつと起ち上つて、階段を下りた。

戶外へ出ると、朝のうちと違つて四邊の景色は妙に翳つてゐた。軒先に續いた雪堤には紫色の陰影が出來て、何處からともなく冷たい風が路一杯に吹き滿ちてゐる。彼は宿を離れるに從つて女のことを思

ひだしながら、泥で汚れた雪の上を漸次と病院の方へ歩いて行つた。

鐵橋からだらだら上りの阪路を登りつくして、彼はをづをづ病院の玄關へ入つた。受附をちよつと覗いてその儘醫局の方へ入らうとするとその途端に彼は廊下の曲り角の處で院長の髯面とぱつたり行遇つた。後には看護婦の山田が妙に取濟ました顔をして注射の道具を抱へながら隨いてゐる。

尾崎は低く頭を下げてその儘逃げるやうに行過ぎやうとしたが、院長はつと立止つて、

「おい、尾崎君。」と、持ち前の意地の惡さうな聲で呼び留めた。そして彼の方へ向き直つて、「君は體が惡いとか云ふ話だが、何うしたんだ。」

「は、少し腸を傷めましたもんですから。」尾崎はどぎまぎしながら答へた。

「ふむ、それで發熱でもしたのかね。」

「はあ、發熱もしましたし、下痢が强かつたもんですからつい缺勤いたしまして……。」

「さうか。」院長は眞顔で合點いたが急に皮肉な眼つきをして尾崎の頭から足の先までぢろぢろ眺めまわしながら、「併しそんなに下痢などをするものが家を外にして出歩いとつちや可かんぢやないか。あゝして外へ出られる位の容體なら病院へ來られん筈はない。」

「いや、先生、それは……。」尾崎はさつと顔を赧めて吶りながら辯解しやうとしたが、院長は重々しい聲でそれを遮つて、

「嘘を云ふのは止め給へ。君は今朝通りを歩いとつたぢやないか。君の方ぢや知らんかもしれんが、私

は確かに見た。それに病氣なぞと僞つて缺勤するなぞは實に怪しからん話だ。私用なら私用と何故ほんとうのことを云はんのだ。今頃からそんなことで怠け癖をつけるやうでは役に立たん。醫者の職務といふものは決してそんなものぢやない。」と、いつものやうに長談義をやり出しさうにしたが、その時藥局の窓口から藥劑師の水島が何事かと思つて蜻蛉のやうにてかてか分けた頭をぬつと出したので、院長もその儘聲の調子を落として、「兎に角一昨日の患者が一人は化膿する、一人は盲腸部の創から腹膜炎を起こす、それに疑似チブスの患者も出てゐるんで此方ではもうまるで眼がまわるやうな忙がしさなんだ。君ひとりゐない爲めにどれほど困つたか知れやせん。ほんとに此れから以後はもう少し誠實にやつて呉れんと端が迷惑する。」と、ぶつぶつ口小言を云つて怒つたやうな顔をしながら病室の方へ歩いていつた。

尾崎は赧くなつた顔をあげてそつと院長の後姿を偸みゝたが、その時ふと笑ひながら此方を見返つてゐる山田と視線が合つたので、彼はてれ隱しにペロリと舌を出した。と、山田も、水島もその様子が滑稽だつたのでクスリと噴笑した。院長は恐い顔をしてもう一度振顧つたが、何とも云はうとはしなかつた。怒りは鬚だらけなその顔を眞黑に染めてゐた。

尾崎は何んだかひどく氣恥かしくなつてこそこそ醫局の戸を開けてなかへ入つた。なかでは矢野と事務の木下が暖爐の傍へ碁盤を持ち出して、忙がしくもなさゝうな顔をしながら頻に碁を打つてゐた。碁盤の傍には厚燒煎餅の空袋と飲みさした茶碗が置いてあつた。

「やあ、矢野君。どうも失敬した。大變に忙かしかつたさうだね。」尾崎は人の氣を讀むやうな眼つきを

しながら後から聲をかけた。

　矢野はちらりと彼の方を振顧つたが、

「やあ、尾崎君か。君にも呆れたよ。いくらいゝ人が來たつて、二日も缺勤をするのは酷いぢやないか。僕こそいゝ面の皮だ。」

「いや、失敬、失敬。休むつもりぢやなかつたんだが、實は少し重大な事件が起つとつたもんだから。」

「何を云つとるんだ。來る匆々惚氣を聞かされて耐るもんか。顔でも洗ひ直して來給へ。それとも莫比の注射でもやつてやらうかね。はゝゝゝ。」矢野は笑ひながら白い石を先々と置いて、「それに君に女を連れとる處を先生に見付かつたんだと云ふぢやないか。餘り見せびらかして歩くからそんな事になるんだよ。」

「いや、今も廊下でさんざ先生から油を絞られて來たんだが、僕は何處で出遇はしたかちつとも知らんのだよ。先生は君にも何とか云つとつたかい？」尾崎は半ば得意らしく半ば心配らしい顔をして訊いた。

「云つとつたところぢやない。大變に怒つとつたぜ。そして僕に女の素性を根掘り葉掘り訊ねたよ。僕は君に對する好意上知らん知らんで通したが、何んでも先生の方ぢや僕と君とがぐるになつて隱し合つてゝもゐるやうに邪推してゐるらしいのだ。」

「ふむ、惡い事は出來ないもんだね。あの女がそんなに先生の眼についたのかなあ」尾崎は顎を撫でながら云つた。

「なんでも先生は何處かで一二度逢つた女だと云つとつたぜ。尤も先生は此地へ來る前に東京の赤十字に居つたんだから或は何處かでほんとに逢つたことがあるのかも知れんが、それにしても可笑しな話ぢやないか。」矢野は隅の方の狹い盤面を爭ひながら獨語のやうに云つた。

尾崎はそれを聞くと急に眼の色をかへて矢野の横顏をきつと見たが、矢野が格別氣を入れて話してゐるやうでもないので、やつと安心して、

「そんな馬鹿なことがあるもんか。東京はそんな狹い處ぢやないさ。それに僕の女の家と赤十字とはまるで方角が違ふんだからね。」と反抗するやうに云つた。併しさうは云ふもの丶彼の心にはその話が萬更不可能なことでもないやうに思へて、いろいろな想像が次々と浮んで來た。それと同時に女の經歷や、素性が急に氣になり出して、彼は今迄にないもだもだした氣持ちになつた。

矢野は爭つてゐた個所を埋めてしまうと又口をきつて、

「さうして女の豫後はどんな鹽梅だね。無論君の處方ひとつで安靜になつたらう。」

「いや、なかなかさうぢやないね。まづ不良の方だ。」尾崎は又氣が變つてにやにや笑ひながら云つた。

「嘘を吐いちや可かんぜ。君の寐呆けた顏をみると、ちつと藥が利き過ぎてるやうだぜ。は丶丶丶。一昨日の晩なぞはさぞお樂みだつたらうねえ。僕は宿直で大いに奮慨しとつたんだぜ。」

「いや、何にしろ女が此地へやつて來た事情が事情だから、さう甘くはなつてゐられんさ。着く匆々から泣いてばかりゐるんだから始末にいかんのだ……。」と、云つて尾崎は顏を顰めながら一昨日からの

いきさつを頭の中で小説に仕組みだしたが、その時、醫局の戸があいて、そこから山田がつと入つて來た。

　彼女は尾崎の顔をみるとクスリ噴笑して、

「先生。お加減は如何？カンフルで注射なさらなくつていゝんですか。」

「はゝゝ。いやこの上カンフルを用ゐちや大變だ。」矢野は勝負のつかない盤面を容赦もなく壞はして、

「それよりも睡眠不足なんだからズルホナアルでも貰つて來てあげろよ。」

　四人は卑しい顔つきをしてどつと笑ひ崩れた。その笑ひ聲が消えない間に又戸が開いて、院長の怒氣を含んだ顔がぬつと戸口に現はれた。

　矢野は退け際に宿直室に入つて來て、尾崎に女を紹介しろといつて煩くせがんだ。尾崎はさつき醫局で衆人稠坐の前で散々院長に怒鳴り散らされた揚句、今夜の宿直まで命ぜられてもうむしやくしやしてゐた最中なので、初めは手強く斷はつたが、到頭自分でも自棄になつて、二三時間病院をあける氣になつた。

　二人はこつそり小使室の戸口から戸外へ出た。とつぷりと暮れはてた大空には冷たい夜風が音もなく吹きみちて、向ふ山の頂にはいつの間にか凍つたやうな寒月がのぼつてゐるので、そこらに降り埋んだ雪はぼうつと蒼白く明るんでゐた。ふたりは眞白な息を吐きながら寒さうに肩をすくめてそのなかを漸

犬と町の方へ降りて行つた。尾崎は襟卷のなかで頻りに院長に對する不平をぶつぶつ云ひ續けてゐたが、ともすると凍つた道に靴を取られさうなのでしまひにはふつりと口を噤んでしまつた。

宿へ歸つてみると、女はいつの間に知己になつたものか、階下の茶の間へ入り込んで老人夫婦とひとつ炬燵に入りながら睦ましさうに話し合つてゐた。尾崎はほの暗い洋燈の影に彼女の横顔をみた時、平常から餘り氣受けのよくない老人達が何かと自分のことを彼女に饒舌つてしまつたらうと思ふと突嗟に妙に腹立たしい氣持ちが胸を突いたが、態と笑ひ聲になつて、

「さあ、矢野君、ずつと上つて呉れ給へ。いま明りをつけるから。」と云つて先へ立つて二階へ上つた。燈を點して火の消えた火鉢の前へ矢野を坐らせると、間もなく階下から女が衣紋をつくろひながら上つて來た。そしてつかつか不遠慮に間内に入つて來て、立つたなりで、

「お歸んなさい。」と膠もない挨拶をした。

尾崎は矢野の手前顔を顰めてちよつと眉をひそめたが、女の樣子をみるとまた氣臆れがして、

「この方が昨日話した矢野君だ。」といつて女に矢野を紹介せた。

と、女は人馴れた笑顔になつて、

「まあ、矢野先生て被居いますか。私は藤野と申します。どうぞこれから宜しく。」と、云つて、矢野の爺むさい格好をぢろぢろ上眼てみた。

矢野は腹の底まで見えるやうな笑ひかたをして、

「いや、これは改まつた御挨拶て恐縮します。尾崎君にや始終厄介にばかりなつてるので、はゝゝ。此れからひとつお心安くお願ひします。」と云つて女の方へ向き直りながら、氣を利かしたつもりて、「東京から此様な田舎へ被來つちやさぞつまらんてせう。併し尾崎と御一緒なら又格別かも知れんが、はゝゝ。」

「まあ、厭だ。」女も釣込まれて笑つたが、別段顔色を動かさず、「何てすか急に思ひ立つてやつて參りましたもんてすから、薩張り様子が分らないんて御坐いますよ。それに尾崎さんがこんな風にして被居るとは知らなかつたもんてすから、大變御迷惑をかけちまひまして……。」と、一昨日の晩とはまるて別人のやうな調子て云つて、その儘火を取りに階下へ立つて行つた。

矢野は思惑がはづれてしまつたやうな興ざめた顔になつて、尾崎の方へ顔を寄せながら、「おい、尾崎君。僕はもう少し若い人かと思つたら、もういゝ年ぢやないか。そうして失敬なことを云ふやうだが、餘り別嬪ぢやありやせんぢやないか。」と、小聲て云つた。

尾崎は厭な顔をしててれ隱しに强ゐて唇だけ笑つた。

「それに大分腹もしつかりしてゐるやうだし……。」と、矢野は尾崎の顔を正面にみながら怪しむやうに云つて、「僕にはどうも腑に落ちんところがあるが、一體君の話はほんとうなんかい。擔いぢや可かんぜ。」

「馬鹿なことを云ひ給ふな。噓だと思ふなら手紙を見せてやらう。」と、云つて尾崎は眼に角を立てなが

ら机の抽出しに手をかけやうとしたが、矢野はそれを抑へて、

「そんなに大きな聲を立てるもんぢやないよ。手紙なんか見たつてしやうがないぢやないか。併し兎に角君の云ふ處がほんとうとしてゞ僕にはどうも男のために涙をこぼすやうな女とは思はれんね。いやに薄情らしい顔つきをしとるぢやないか。」

尾崎はそれに答へやうとして口をもぐもぐさせてゐたが、そのうちに女が階下から火を持つて上つて來てしまつた。

三人はやがて火鉢をかこんで妙に彈まない調子で話をしはじめた。話の繼穂はともすると途斷れがちだつたが、好奇心に燃えてゐる矢野はそれでも意地惡く女の言葉尻を追ひまわして、そこから二人の間の關係を嗅ぎつけやうと力めた。

話が東京のことに及んだ時、矢野は東京へ裁縫の修業に出てゐる自分の妻の妹の事を云ひ出して、

「失禮ですが、あなたは何處の學校に出ておいでゞした？」と訊ねた。

女はその言葉の意味をどう取つたのか急に嘲けるやうな皮肉な顔をして、

「私なんぞはまるで無敎育な女ですわ。ちやんとした女醫學校か何かへでも入つてゐましたら、先生方の治療上の御意見なんぞも伺ふことも出來るんですけど、何しろ早く父に死別れてしまひましたもんですから、ほんの出來合ひの勉强てね、今ぢや患者さんに病理のことなんか聞かれても返答に困るやうな始末なんてすもの、ほんとにお恥しい譯てすわ。」

矢野はそれを聞くと、
「はゝあ。」と云つたきり怪訝な顏つきをして尾崎の方をぢろりとみた。尾崎は堪らないやうに顏を背けてしまつた。
女は調子に乘つて猶ほも言葉を續けながら、「私は赤十字の講習生をして居りましたんですが、何を云つても彼處が一等ですわ。先生方は皆さん親切に指導して下さるし、それに實地實地と仕込んで下さるもんですから、從つて腕のしつかりした人が澤山出來るんです。なんと云つてもこの看護婦といふ職業ばかりは經驗と實地なんてすからね、いくら學說の方ばかり出來たつて患者さんを手にかける段になりや腕のある人にや敵やあしません。私も幸ひ彼處で育てゝ頂いたおかげでその方ぢや學校出の方に負けないつもりですわ。」
矢野はその時になつて初めて彼女の素性がすつかり分つてしまつたので、態と眼にたつやうな冷笑を浮べながらまた尾崎の方をみた。そして飽くまで意地の惡い調子て追窮するやうに、
「ねえ、尾崎君。この方が赤十字にゐられたのなら、先刻の先生の話も或は事實かも知れんねえ。君の話ぢや赤十字なんぞにまるで關係がないと云ふことだつたから、あの時にや不思議だと思つとつたが……。」
尾崎は肩を揺りあげたばかりて一言も口をきかなかつた。
女は二人の樣子が變なので、「誰方か何か私の事でも仰有つたんてすか？」と、不安さうに口を入れた。

「いや、實は先刻ね、うちの院長さんがあなたを知つてゐるつて云ふ話が出たんですよ。」と、矢野は冷評かすやうに云つて、「あなたがたは知るまいけど、今朝二人で歩いてゐる處を院長さんが見付けちやつたんだ。」

「まあ、厭だこと。院長先生つてどんな方だらう。お名前は何ん云ふ方なの?」

「岩田と云つて、軍醫あがりで、もと矢張り赤十字にゐた人なんですよ。」

「岩田先生。」女はみるみる顏色を動かしたが、それでも態とらしく小首を傾けながら口では何喰はぬ調子で、「そんな先生が被居つたか知ら。誰方だらう。お眼にかゝつたら思ひ出すかも知れないけど。」

一座はこんなことですつかり白けきつてしまつた。矢野はしかたなしに病院にゐる山田や鈴木の話しを持ち出して、女に氣焔でも吐かせて腹を癒やうと思つたが、女はもうてんから馬鹿にして相手にならなかつた。

一時間ばかり經つと、矢野は到頭我慢しきれなくなつて、尾崎にさんざ當てこすりを云つてその儘歸つて行つた。

尾崎は女と對向ひになると今まで心に鬱してゐた不快さが俄かに込みあげてきたやうに鼻を鳴らして、

「私は今夜位厭な思ひをした晩はありやしない。折角あなたが看護婦をしてる事を隱していたのに、

つまらんことを饒舌つてしまふもんだから私まですつかり面目を失くしちやつた。矢野は性が惡いから又病院でいろんな噂を立てゝ私を玩具にするにきまつてゐる。」

女はさう云ふ尾崎の顏をきつと見てゐたが、やがて針を含んだ調子で、

「ぢや何んですか、私が看護婦をしてゐりやあなたのお顏にでもかゝるんですか？」

「いや、さう云ふ譯ぢやないけど、そんなことが聞えちやまづいぢやないか。何處か相當な家の娘にして置く方があなたにも私にも利益だ。第一人の聞えが可いぢやないか。」

「だつてほんとに看護婦をしてるんだから仕樣がありやしないわ。」女は投げ出すやうに云つて、また尾崎の顏をきつと見つめながら、「あなたはその手で私をお誑しなすつたのね。」

「なに、誑した。何故そんな事を云ふんです？」尾崎はさつと顏色を變へながら云つた。

「お誑しなすつたぢやないの。旨いことを云つて私を東京から此處まで引張り出してさ。私今日階下のお婆さんにすつかり貴方のことを聞いちやつたわ。」

「階下の婆あが何を云つたんです。それを聞かして下さい。」尾崎は呻りながら女の方へ詰め寄つた。

「何を云つたつて可いわよ。それを此處で云やあ貴方が顏を顰くするばかりだわ。」女は冷やかに云つて、「手紙ぢや大層立派な先生におなりなすつたやうに書いてあつたけど、ありやみんな嘘なんだわねえ。貴方も見かけによらない酷い方だわ。」

尾崎は何か云はうとしてぐつと唾を呑んだが、女は蔑すむやうな眼つきでそれを抑へて、

「そりや女は男にや誑かされるやうに出來てるんだけど、私はあなたみたいな人に誑されてこんな山の中へのめのめやつて來たのかと思ふとほんとに口惜しいわ。私もこれまで隨分男にや酷いめに逢はされたけど、今度みたやうな莫迦々々しい目に逢つたのは初めてだ。」

「だつて、初めに來ると云ひだしたのはあなたぢやないか。」尾崎もひどく怒氣を含んで云つた。

「まあ、私だつて。隨分勝手なことを云ふわねえ。ぢや來るやうに持ちかけたのは誰てせう。」

「そんなことを私が知るもんか。勝手にやつて來といて、今になつてそんなことを云つたつて駄目さ。」

「何んですつて？　もう一度云つて御覽なさい。人を莫迦にしてる。」女の眼はその言葉と一緒に火のやうに燃えて來たが、やがてぶるぶる唇を慄はせて、「女だと思つて莫迦にすると、今に酷い目に逢つてよ。私にだつて考へはあるんだから、今に覺えてらつしやい。」

二人は險はしい眼つきをしてその儘口を噤んでしまつた。

その間に長い時が過ぎていつた。

尾崎は時々鼻を啜りながら一處に眼を据ゑて考へ込んでゐたが、そのうちに張りつめてゐた顏の筋肉もゆるんで來て、漸次ゝ賴りなさゝうな表情が眼のまわりに集まつて來た。そして火箸を抓んで今度は頻りに灰をせゝりだしたが、突然女のやうに體をしなしなさせて訴へるやうな聲で、

「藤野さん。」と、低く、女の名を呼んだ。そして殆んど絕對服從の態度になつて、

「皆私が惡かつた。どうか氣を惡くしないで下さい。貴女にこんな迷惑をかけるつもりは毛頭なかつた

んだけど、つい自分の考へが立至らんかつたもんだから、いろいろあなたを誑かすやうな事をしちやつて。……それに今夜は矢野の云ひ分がひどく氣に障つたもんだから、つい貴女にまで突懸つちやつてほんとに濟まなかつた。どうか勘辨して下さい。」と、手を合はせんばかりに云つた。

女は默つて返事もしなかつた。

と、尾崎は今度はしれしれつくり笑ひをして、甘えるやうに、

「そんなに氣むづかしい顔をしてゐないでさあ、男がこんなに謝まつてゐるんぢやありませんか。私は決してあなたを誑かす氣で嘘をついたんぢやないんだ。貴女がこんな處まで態々やつて來て呉れたことに就いては私は全く感謝する言葉もないくらゐに思つてゐるんです。だから今夜のことは水に流して、どうかお願ひだから機嫌を直して下さい。ねえ、ねえ……。」と、熱心に云つて、彼はその儘女の傍へ摺り寄つて、そつとその手を取らうとした。

女はそれを素氣なく振りきつて、

「笑談しちや可けなくつてよ。莫迦々々しい。私はもうあなたの自由にやならないわよ。」と云つてついと立ち上つて、「あなたは私が惚れてると思つてゐるんでせうけど、私や初めつからあなたの事なんか何とも思つてやしないんですよ。」と、憎々しげに云ひ捨てゝ、その儘ばたばた階下へ降りて行つてしまつた。

跡に取殘された尾崎は呆けた顔をして女の出て行つた階子口を見送つてゐたが、そのうちに冷たい意

識が返つてくると譯もない憤怒がむらむらと込みあげてきて、ひとりで齒をくひしばりながら心のうちであらゆる言葉をもつて女を罵つた。そしてどうしても坐に落着いてゐられないので、突如外套を取つてはをりながら階子を降りて、店へは斷りもせずにふいと戸外へ飛び出してしまつた。

何處へ行く當てもないので彼は寂しい大通りから鑛山の方へぶらぶら歩いて行つた。三山亭の前まで來ると、表座敷には明るい燈がついて、酌婦達が手拍子で戯れ唄をうたひながら底拔け騷ぎをやつてゐる。それをきくと彼は急に焦りつくほど酒が欲しくなつて、幾度か躊躇した末到頭そこの家の戸をあけてなかへ入つてしまつた。

彼はその奥二階で酌婦を相手に泣きごとのやうな管を卷きながら夜更けまで酒を呷つた。

勘定の時になつて彼は初めて宿の机の上へ財布を置き忘れて來たのに氣がついた。その譯を話して頻りに勘定を貸して吳れるやうに賴んでみたが前々から大分滯つてゐるので三山亭ではどうしても承知しなかつた。で、到頭彼は外套をかたに置いて寒さに慄へながらそこを出た。

滑りがちな雪路をやつと月光に導かれて病院まで辿りつくと、彼はまづ醫局から飛び出して來た鈴木の慌たゞしい容子に驚ろかされた。鈴木は彼の姿をみると突如に聲をかけて、

「先生。何處へ行つてらしつたんです。皆して何んなにお探し申したか知れません。」と、云つて、七號室にゐる患者が危篤に陷つたことを告げた。

「なに、七號室？　俺はそんな患者は知らん。勝手にしろ。」尾崎は呂律のまわらぬ聲で怒鳴つた。

「御笑談を仰有つちや可けませんよ。此間二番坑で腹部に負傷をして、腹膜炎を起した患者で御坐います。先生が手當をなすつたぢやありませんか。」

「うむ、彼奴か。あんなになつちやもう到底助かりやせん。お前達のうちで誰れか注射をしてやれ。」彼はその患者の顏も思ひ出さずに唯から云つた。

鈴木は泣きさうな顏になつて、「そんな無理なことを仰有つちや困つてしまうぢや御坐いませんか。ひどく苦しんで居りますんですから、どうか一度御回診なすつて下さいまし。」と訴へて、無理にも引き立てゝゆかうとするやうに尾崎の腕を執らうとした。

「煩いッ。」尾崎はそれを振り拂つて、とろりとした眼の底に焦々した怒りを輝かしながら、「そんな死にかゝつたものを俺が診たつて何うなる。死ぬ奴は死なして置け。天命だ。馬鹿めッ。」と、譯も分らぬ肝癪を起こして、折柄何事かと思つて飛び出して來た小使の親爺を突きのけて、ふらふらしながら廊下を宿直室の方へ歩いて行つた。

鈴木は到頭泣き出して、「私の責任になりますから。」と、云つて後から隨いて行つたが、それに答へる尾崎の言葉はもうまるで埒がなかつた。そして宿直室の前へ來ると彼は踰け込むやうにそのなかへ入つて、中からぴしんと戸を閉めてしまつた。

鈴木は暫らくの間戸の外に立つて樣子を伺つてゐるらしかつたが、やがてすごすごとした足音を殘し

て出ていつてしまつた。尾崎の耳にはその物音も聞えなかつたので、まだ隙見をしてゐるものとでも思つたか、外にゐる彼女を押倒すやうにもう一度さつと手荒く戸を開けた。そこから首を出して四邊を見まわしたが、更け靜まつた廊下には人の氣勢もないのでやつと安心して大卓の前の椅子へ歸つて來てがくりと腰を卸ろした。そして何か大事業でも仕逐げた後のやうな氣になつて無上に肩を怒らかして虚勢を張つてゐたが、そのうち何と思つたか、ついと手をのばして電燈を消してしまつた。

西へまわつた月は後の窓から蒼ざめた氷のやうな光を四邊一面に漲らせた。町の灯も今は殆んど消え落ちて、大地を掩つた積雪だけが不思議な色にきらきら輝いてゐる。じつとその光景を見つめてゐるうちに、醉つた彼の腦底には女のことや、東京のことが徒らな空華のやうになつて次々と燃えあがつて來た。理性の痲痺した彼にはもうすべてのことが可能に思はれて來た。彼は大聲をあげて叫び度いほど心の自由を覺えた……。

それから一時間ばかりして鈴木は山田を起こして二人連れでもう一度宿直室へやつて來た。その時には尾崎はもうベッドのなかへもぐり込んでぐつすり寐込んでゐた。寐ながら泣いてゞもゐたものとみえて、枕の掛布には大きな汚點が出來て乾きゝらぬ涙が眼尻の處に殘つてゐた。

二人は一生懸命になつて搖り起こしたが、彼はどうしても起きやうとはしなかつた。

翌朝、彼は寐起きに山田から昨夜の醜態をすつかり聞かされた。そして山田はいつにない眞面目な顔

になつて、今曉二時に七號室の患者は到頭死亡してしまつたことを彼に告げた。そして臨終の恐ろしい苦悶の模樣なぞを詳しく話して聞かせた。

尾崎はそれを聞くと眞蒼になつて打踣めされたやうに悄氣返つてしまつた。昨日院長の話しては或は持ち直すかも知れないといつてゐたその患者の容體を思ふと、彼の心には憐れな坑夫の死顏が傷ましく映つて來た。そして全く自分の無責任からその男の死を早めたことを思ふと、何よりも先づ院長の怒罵が恐ろしかつた。

九時を打つと彼はぢつとしてゐられないほどすべてが不安になつて來て、院長も矢野も遲刻したのを幸ひに到頭そつと病院をぬけ出した。そして誰れかに行逢はないやうに態々坑夫達の通ふ飯場の假橋を渡つて下の町から大通りへ出たが、宿の近くまで來かゝると、彼は石油罐をさげた宿の小娘にはたと出遇はした。

彼はこんな小娘にまで氣が憚られるのでその儘知らん顏をして行過ぎやうとしたが、宿に殘した女のことが無上に氣になるので到頭娘を呼び止めてそれとなく樣子を聞いてみた。

と、娘は怪訝さうな顏をして、

「姉さあは今朝早くに東京へ歸るちつて車て停車場さあ行きましたよ。あんたそれを知らねえのかね。」

それを聞くと彼ははつとして體ぢうの血が一時に頭へ集まつてくるやう氣がした。彼は周章てゝその儘宿の方へ歩き出した。

宿へ歸つてみると、なるほど娘の言葉に違はず女の姿は見えなかつた。部屋のなかは昨夜のまゝだつたが、自分の行李の上へ載せてあつた女の信玄袋は影も形もなくなつてゐた。そして明るいすがすがしい朝日の射すなかに女の捨て行つた紙屑だけが方々に散らかつてゐた……。

その晩、病院から歸りがけにまた三山亭へ行つて自棄酒を呷らうと思つて途々月明りで財布のなかを調べてみると、彼はその時になつて初めて十七圓なにがしかの金が失くなつてゐるのに氣がついた。彼は涙含んで腹を立てゝみたが、もうすべては過ぎ去つてしまつてゐた。そして女を呪ふ言葉はいつか自分を呪ふ言葉になつてゐたのであつた。

彼は外套のない寒さに脣の色まで失ひながら寂しい宿の方へすごすご歸つて行つた。

そのことがあつてからもう長い月日が經つてゐる。

尾崎は相變らず日に幾度となく醫局の窓に突立つて、寂しい鑛山の町を見降ろしながら生活の革命や都會の思慕に徒らな時を空費してゐる。彼を取圍むものは依然として矢野や、山田や、鈴木や、木下や水島達で、月々東京から送つて來る雜誌や印刷物は唯その時々に彼の指先へインキの匂ひを滲ませゆくばかりである。そして院長だけは日に月に彼の唯一の生活の對象となつてゆくのであつた。（をはり）



晝の暴虐

田村俊子

ある風の冷たい初冬の朝、美知子の秘藏の紅どりが死にました。

丁度、美知子は朝の手水を濟まして、濡れた手拭をその椽の欄干にかけやうとしてゐた時でした。美知子は今朝にかぎつて、紅どりの可愛らしいさへづりをはつきりと耳にしなかつたので、少し氣にかゝつて軒の日向に出してある鳥籠の方を見たのでした。美知子は、

「あら。」

と叫んで、その美しい目を見張りました。

紅どりは籠のとまり木から逆に落ちて、籠の中の敷き渡した板の上に翼を亂してもがひてゐました。美知子は何うしたのかと思ひながら、あわてゝ手を延

ばして籠を軒からはづしました。そうして、戸を開けて、美知子の小指と同じぐらゐな小さゝを持つた紅どりを、そつと手に握りながら引き出しました。五本の指の先きを丸くして、その中に包むやうにしながら、美知子は紅どりを眺めました。

紅どりは、まだその瞳子を開いてゐました。そうして、眞紅な小さい嘴をすこし開けて、絶えやうとする息を、やう〳〵に繋ぐやうな微かな呼吸をしてゐるのでした。美知子はその苦しさを少してもゆるめてやり度いために、そつと水のところにその嘴を持つていつてやりました。紅どりは水に嘴をつけましたけれども、直ちにそれを拒むやうに、かち〳〵と薔薇の尖げのやうな嘴をふるはせて、あるじの手から差出された水の上から小さい頭を振るやうに見えました。

ちいさな、ちいさな、ちいさな生物のちいさな苦しみ！　極微な生命が消えてゆくその臨終のほそほそしい苦痛が、美知子の温い掌の上に二三秒つゞいてゐました。死から受けるあるだけの苦痛の表情がその他愛のない小さな形の上に、こま〳〵と現はれてゐました。翼のおのゝき、眼の動き―小鳥はあるじの掌の上にも、ぢつとしてはゐられないやうな切なさを、そのからだの全體に表はしてゐるのでした美知子はこの目前に迫つた小さなものゝ死を何うすることも出來ませんでした。そうして、そつと疊の上に日光の射してるところを選んで、そこへおいてやりました。紅どりはそこに置かれると直ぐ、翼をほつと開きそうにして、その儘落ちて了ひました。

紅どりは、その生の最後にもう一度美しい翼をひろげやうとしました。ちいさな可愛らしい生の執着

――紅どりはどんなに死ぬのが厭だつたのか知れなかつたと思ふと、美知子の眼にはおのづと涙があふれて來ました。美知子は、どうかすればその小さい魂がもう一度蘇生るやうに思はれて、掌の上に、そつとのせて見ました。そうして、掌の上で柔らかに紅どりの身體を揺ぶつて見ましたけれども、紅どりの微妙な歌をやどしてゐた小さい魂は、その儘唯幽にきえ〳〵と埒もなく消えていつてしまひました。眞つ黑な漆のやうな紅どりの眼はもう二度と開かなくなりました。こまかな赤い地紋の模樣をつけた可愛らしい衣裳のまゝ、紅どりは、ふくよかな身體を殘して、その眞赤な嘴を堅く閉ぢてゐるのでした。あるかなきかに、この小さな生物のうちに流動してゐた僅な血汐は、その瞬間から紅どりの身體に凝結してゆきました。

「紅。紅。」

美知子はかうして、唇をその頭に押し付けて呼んで見ました。美知子はまた、紅どりを紫鹿の子の襦袢の襟の間からふところに差し入れて、その温みのうちに浸らせても見ました。けれども盡きてしまつた小鳥の命は、もう何うすることも出來ないのでした。

美知子は小鳥の死骸を日光の射す窓の敷居の上においてぢつと眺めました。小鳥はつかみどころもないほどに、ぐつたりとして横になつてゐました。可愛らしくちよこ〳〵と籠の中で飛び廻つてゐた紅どりの姿は、もうこれぎりで見る事は出來ませんでした。

「ぴよぴよぴよぴよぴい――」

かう云つて囀る、あの奇麗な、すこしとぼけた紅どりの聲も、もう聞くことが出來なくなりました。囀るときに、顏を上げて、咽喉のところで拍子を取りながら、一と歌うたつてしまふと、自分の聲の餘韻をしばらくぢつと聞きますやうに、小さい首を傾げてゐる——あの紅どりのいたいけな風情も、もう見ることが出來なくなりました。美知子はその死んだ姿を見守りながらやゝ長い間泣いてゐたのでした。

美知子が紅どりを飼つたのは、一昨年の秋でした。それから今日まで、紅どりは美知子といつしよに二度お正月を迎えたのでした。

樂屋で悲しいことがあつた時も、舞臺で嬉しいことがあつた時も、美知子はいつもこの紅どりを眺めながら、自分の心の中を人知れず語つては暮らしてゐたのでした。病氣が重くなつて、しばらく舞臺を退くやうになつてからも、美知子は、この紅どりの上からさまざまな思ひ出を求めて、そうして懷かしい昔語りを囁いたりしました。自分の華やかな昔を知つて、それをともどもなつかしんで呉れるのは、ほんとうに美知子にとつてはこの紅どりばかりのやうな氣さへするのでした。

舞台へ送られたローズの花束の中に、美知子は紅どりの籠をおいたこともありました。

『可愛らしい紅どり。戀ひしい紅どり。』

そうして、この紅どりの哀れな死は、やがて自分の死ぬといふことを豫示てゐるのではないかと美知子は思ひました。

小鳥の中でも、いちばん小ひさくしほ〳〵としてゐる紅どりの姿は、丁度女の中でもいちばん華奢で小ひさくなよ〳〵としてゐる美知子の姿によく似てゐました。美知子は、少し強く抱きしめれば其の儘ほろ〳〵と花片のやうに崩れて行つてしまひはしないかと思ふ様な、他愛のないからだを持つて生れてきたのでした。さうしてその繊弱な體質の爲に、美知子はつひに自分のあるかぎりを傾けて執着する舞臺の生活をつゞけることが出來なくなりました。

二三年このかた美知子は、健康な身體で舞臺を踏んだことが一度もないくらゐでした。美知子はいつも、重い鬘になやみながら、その繊弱な病ひがちな身體を無理無體に引き摺るやうにしては、切ない舞臺をつとめてゐたのでした。いかなる日にも、美知子は氣分が勝れて、眼のうちがはつきりして、さうしておもたい衣裳を樂な力でひきこなすと云ふやうな、輕い舞臺をふんだことがありませんでした。樂屋のなかの華やかな灯の色も、蒔繪の鏡臺にうつる自分の鬘に挿したかんざしの輝きも、まるで夜更けて人の夢を襲ひにゆく夢魔の瞳子の輝きのやうにさへ思はれることがあるのでした。家に歸つて、床にはいれば、美知子はきつと、心臓のなかの血がすつかりと乾ききつてしまつたやうな苦しさに泣きました。さうして疲れて昏々と眠りに落ちやうとする自分の魂を、おそろしく悩みを持つた現が途切れ〳〵にゆさぶりたてゝ、自分の夢を自分の現に責められ通してゐるやうな不快な眠りのうちに、母に縋つて一と夜を明かしてしまふのでした。

朝になれば、目がくらんで、美知子は頭を上げることさへ出來ない日がありました。何がこんなに自

分を惱ますのか美知子には分りませんでした。病氣の爲だとは、美知子は思ひませんでした。自分一人が虚弱なものに生れ付いて、自分一人が演劇に疲れるのだと思ふと、美知子は自分の仲間のしあはせを羨しく思はずにはゐられませんでした。そうして、おれつたく、泣きたくなる心持を自分で靜におさへて、たとへ舞臺の上で倒れてもいゝと思ひながら、胸を引き緊めて樂屋へ通ふのでした。

暗い、精のない美知子の瞳子の働きも、車の上から自分の出勤する劇場を眺める時には、一時に湧き上つてくる血の激動のために、美しくかがやいて、艶麗な、媚びの深い目許のしほが、その幌のかげにおのづと作られるのでした。それと同時に、病ひの惱みに疲れて鬱しきつてゐたその心が、爽やかな銀の鞭で突かれたやうに、きれいな色氣を含んではつきりとするのでした。

樂屋に行けば、美しい仲間たちが、派出な樂屋着を引つかけて聲高な調子で面白そうに男優の惡る口などを云つて騷いでゐました。美知子もそれにつれて、氣分の惡るさが何所かへ消えてゆくやうな氣にもなりました。

そうして、冷めたい白粉刷毛の肌觸りに、今まで病ひの曇りのなかにすつかりと潜んでゐた美知子の藝術のヴァニチーが、知らず／＼美知子を驕慢に打笑ませてゐるのでした。美知子は唯夢中でした。演技の最後まで自分の魂をしつかりと摑んでゐたあるものが、ふつと弛んだと思つた時に、美知子はきまつて昏倒しました。そうして絶え／＼になつた呼吸の苦しい中から、美知子は聲を上げて泣くのでした。醫者は絶體に、美知子の舞臺に出ることをとゞめました。もし強ひて其れを續けてゐれば、あなたは

もう直き死なゝければならないと云つて、醫者は美知子に舞臺の生活をやめさせやうとしました。けれども美知子にはこの儘舞臺を退くことは出來ませんでした。舞臺の上て、劇場を彩るあの灯の色に眩暈して、それぎり絶息してしまふまでも、女優の生活はやめないと云ひ張つて美知子は聞きませんでした。

多くの仲間を見ても、自分のやうに醫者から舞臺に出ることを禁められやうとしてゐる樣な、不しあはせな人は一人もありませんでした。皆、豐かに肥えて女の中の女のしあはせを集め合はせて生きてるやうな輝いた眼を持つて、元氣よく働いてる人ばかりでした。そうして、舞臺の空氣を匂やかに呼吸して樂しい笑ひをその胸に秘めつゝ暮らしてゐるのでした。藝のために、頭の痛いやうな一瞬間はあつても、たいがいは、樂屋の灯を浴びながら蒔繪の鏡臺に向つて眉を作つてゐれば、氣分の惡るいくらゐはどこかへ消へて行つてしまふと云ふほどだのに、何故自分一人が、こんな不仕合せな、纎弱な身體を持つて生れたのかと思ふと、美知子は自分の肉を掻きむしつてもやりたいほどに、情けなくなつてたまりませんでした。

舞臺の上て生きられないなら、美知子は死んだ方がいゝのでした。美しいあの夢の世界を、美知子の生あるあひだは、どうしても捨てることは出來ないのでした。しばゐの爲に自分の命が盡きるなら、美知子には却つてそれが嬉しいのでした。

他の人だちは、誰れも生き〳〵して、そうして自分々々の華美な生活のなかに自分の心を紅色に溶かし込んて、おもしろそうに美しい夢の世界に花やかな笑ひを放つてくらしてゐるのに、何うして自分ば

かりは、こんな身慘めな、陰鬱な、病ひに閉ぢられる類の色をして、その仲間に入らなければならないのだらうと思ふと、美知子は、手當り次第誰れにでも縋つて、聲のかぎり泣き叫びたいやうな焦つた氣持になるのでした。

海岸へ行つて長い保養をしたり、根氣をよくすると云ふつまらないまじなひなどを受けたりして、美知子は自分の身體の養生につとめますけれども、それは少しも甲斐のないことでした。醫者の云ふやうに、舞臺の生活をすつかりとやめなければ、美知子の身體は癒らないのでした。

『命があつての物だねだからね、當分舞臺を退いてゐては何うだらう。その内に又いゝ時もくるだらうから、さうして身體をすつかり癒してから、もう一度好きな演劇をやることにした方が、いゝぢやないか。』

母のお鶴は、かう云つて美知子にすゝめますけれ共、美知子は聞きませんでした。

美知子の身體はぢり〳〵と衰へてゆくばかりでした。舞臺で使ふ美知子の聲は、だん〳〵に嗄れ〳〵になつて、いつもその聲が聞き辛く慄へをのゝいてゐるのでした。さうしてその技藝も、思ふやうにはのびて行きませんでした。定興行が初まつても、途中で病ひに仆れてしまつて、美知子はきつと其れを勤めつづけることが出來ないやうになりました。氣ばかりはあせつても、美知子は自分の身體を何う動かすことも出來ないのでした。ある興行のとき、中幕の野崎にお染をつとめてゐた最中に、美知子は舞

臺て仆れて、それぎり翌日から立つことが出來なくなりました。そうして美知子は病院に入れられました。

その時から、美知子は座の方から當分靜養するやうに云ひ渡されてしまつたのでした。美知子はそれが泣くほど厭ても、どうしても舞臺を退かなければなりませんでした。

病院を出てからも、美知子はしばらくの間、自分の足で疊の上にも立つことが出來ませんでした。病院にゐた間も、美知子は劇場のことばかり云ひつゞけて、興奮して、安らかな睡眠をとることができないのでした。それで極度に用ひた睡眠劑の中毒もすこしはあつて、退院してからも、美知子の足はすつかりと萎縮んでゐて動かすことができないのでした。それをいつまでも打つ捨つておけば、終ひには腰が立たなくなると醫者は云ひなした。どんなに苦しくとも毎日その足で歩かせつけなければいけないと云はれて、美知子は兩方から瘦せた腕を抱へられながら、萎えてる足をそろ〳〵と歩ませるやうに癖をつけたりしてゐたのでした。

舞臺を捨てゝ生きるなら、美知子は生きない方がいゝのでした。身體がどう癒つても、自分の一生は舞臺を踏んで通すことの出來ない弱い力を持つてゐるのでした。舞臺に出れば、美知子は直ぐに脆い呼吸の下に仆れなければなりませんでした。

美知子は今日まで、同じやうに舞臺の生活をおくつて來た麗子のことを思ひました。麗子が自分よりも、優れた技藝を持つてゐるとは美知子は思ひませんでした。あの下卑た粗雑なアートの表現一とつに

も、美知子は麗子を蔑まずにはゐられませんでした。けれども麗子はだん／＼にいゝ女優になつてゆくのでした。一と芝居ごとに、落着いたしつかりした基礎を少しづゝ作りながら上つてゆくのでした。自分とおない年の二十二才！　美知子はあの薄紅色をしたぽつとりした麗子の頰を思ひました。何のうたほいもなく怜悧そうに小さく光つてゐる麗子の眼を思ひました。そうして、いかなる役も相當の努力て押しこなしてゆく其の度胸の强さを思ひました。すべては强いものが得るのだと思つたとき、美知子は自分の肉の破れるほどな烈しい意氣を感じるのでしたけれども、纎弱なその身體ばかりは自分の手に何うすることも出來ませんでした。

それさへも一年經つた昔になりました。身體だけは舊のやうになつても、まだはか／＼しく其の疲勞のあとが癒りませんでした。轉地をして、病ひのあとを養ひたいにも、美知子はそれだけの費用も持ちませんでした。そうして又、美知子にそれだけのものを與へる人もないのでした。

美知子の舞臺は、病ひの爲にいつたいが陰鬱な影を持つてゐて、それほどの人氣も立ちませんでした。だから、美知子は、昔の生活を振り返つて見ても、そこには、自分のための花のやうな絢爛な世界は見出されないのでした。自分の昔の生活のまはりには、月の光りのやうな、青白い、淋しい、靜かな光りが漂つてゐるばかりでした。そうして、その惱ましげな、靜な光りの中に、美知子の强い憧憬の世界があるのでした。

山下美知子と云ふ名を、誰れも興味をもつて聞かなくなつたことを、美知子はもう悲しいと思ひませんてした。途中で、知る人にあつても、ふと好奇に輝いた眼をして自分を見直してくれるやうな車がなくなつたのにつけても、美知子はこれを淋しい心持で打ち笑むやうなこともなくなりました。ある社會から忘れられることに悲しみも恨みもありませんてしたけれども、唯美知子の若い血は時として自分の熱愛するものゝ爲に湧かずにはゐられませんてした。美知子は昔のある役に扮裝した寫眞などを取り出して、それを眺めてゐるうちに、娘らしくしみ〳〵と泣いてるやうなことは珍らしくないのてした。

「因果だねえ。この娘は！」

お鶴も共涙に誘はれながら、美知子をいたはるよりほかに仕方がありませんてした。さうして、芝居と云ふものから一切美知子を遠ざけて、一日も早くその虚弱な身體に適當した新たな幸福な生活を美知子に求めさせなくてはならないと、母は考へました。

「私はどつちにしても死ぬのだから、それなら舞臺の上で死なしてもらひたい。然うでなければ、私は死ぬにも死にきれやしない。」

美知子は、かうして、寢てゐる間も、起きてゐる間も、昔の生活の月のやうな青白い靜かな夢の光りの中に、憧憬の一點の血汐を漏らせては、纖弱な肉につゝまれた、己が魂をふるはせてゐるのてした。

紅どりの死んだことが、やがて自分の死に近づいてゐることを豫示されたやうな果敢なさを思ひなが

ら、美知子はそれを掌にのせた儘、母のところへ持つて行つて見せました。

「可哀想にねえ。お前の行くのを待つてゐて息を引き取つたんだらうよ。」

美知子は涙含みながら、いつまでも見守つてゐました。柔らかな毛並みは、今までのやうに滑らかな手觸りを與へてゐました。閉ぢた眼から、小鳥の涙かと思はれるやうな露が潤んでその眼のまわりを浸してゐました。『紅の方が先きへ死んだわねえ。』

美知子は瘦せたその頰に傳はつてくる涙を、袂で拭きながら、この可愛いゝものを何うすればいゝか分りませんでした。

「よく葬つてやりませう。今度もまた紅どりに生れてくるやうにつてね。」

美知子は母の言葉を聞きながら、今度は自分が死んだら、何に生れ代つてこよと云つて祈つて貰はうかと思ひながら、

「紅い女優に生れかはつてこないか知ら。」

「然うさね。」

美知子は、紅どりを、鼻たゝきの入つてゐた小箱に入れて、上から粉おしろいを振りかけてやりました。そうして小さな庭に下りてゆきました。

初冬の空は、くつきりと晴れてゐました。松と紅葉と、色を交ぜたその間を、何處からか流れてきた煙りが薄つすりと陰をまつはらせてゐました。

美知子は、花壇の隅の白菊の下に、紅どりを葬つてやりました。お染をした時の友禪の振りの袖が、紅どりを入れた小箱のまわりに色をたゞへてちら／＼と其れを包むやうな氣がしたのでした。美知子は悲しい幻影を追ひながら、丁寧に土をかけて、そうしてその前に合掌しました。

美知子の唯一とつの慰みだつた紅(べに)の聲が、初冬の紺碧の空に消えてしまつてから、美知子の朝夕がげつそりと淋しくなりました。三年のあひだ、一度は自分の掌の上にのせて其小さい頭に接吻をしたいと願つてゐた紅どりは、とう／＼その掌の上にのせる時が來ましたけれども、其れが紅どりの生の最後なのでした。

美知子はこの頃になつて、この紅どりの死んだことが、やがて自分の死ぬことを豫示(しらせ)てゐるのだとは思へないやうになりました。それよりも、死ぬと云ふことよりも、もつと恐しい事實が近づいてくると云ふ豫示のやうな氣がするのでした。

自方の生命(いのち)のやうに可愛がつた小さな物が、ある朝ほつつりと消へて行つたと云ふことは、自分の身に何か不幸なことが起つてくると云ふ占ひに違ひないと美知子は思ひました。自分の手から可愛いゝものを奪はれたと云ふことは、それと同時に自分の生活のなかからも何かしらある物を奪はれたと云ふ暗示に違ひないと美知子は思ひました。そうして其れは何なのか美知子には分りませんでした。唯自分が

死ぬのではないと云ふことだけが美知子にははつきりと分つてゐるのでした。

自分が死ぬのではないと考へられるのは、それは美知子の身體が、思ふよりは快い方に向いてゆくからなのかも知れませんでした。自分の身體が快くなれば、美知子はもう一度昔の生活に復れる筈でした。あの憧憬の世界へもう一度自分の魂を柔らかに浸すことが出來る筈なのでした。けれども、そこまで進んでゆく徑路の間に、何か、可愛いゝものを突然に失はれたと同じやうな不測な不幸が潜んでゐるやうな氣が美知子はするのでした。ふとすると、自分の一生はこれぎりで埋れてしまふのではないかと云ふ樣な、不安な悲しい思ひにふさがれるのでした。

母のお鶴が散々才覺をして長い間を持ちこたへて來た生活の費用も、もうこの頃では何うにもその繰り廻しがつかなくなつてゐるのでした。母子は何かやらなければ、一日の食も得られないほどに窮迫しきつてゐるのでしたけれども、お鶴は美知子に然うしたいやな事が聞かせたくなくつて一日々々と、さまざまな、遣り繰り算段にその日を濁してゐるのでした。

それに、美知子をもう一度芝居の中に入れてそれて金錢を取らせると云ふことはお鶴はもう爲たくないと思つてゐるのでした。一時は身體が快くなつても、又舞臺を踏めば、美知子は今までと同じやうに病苦にくるしまなければならないと云つて、醫者は美知子が舊の生活に復ることをとゞめてゐました。お鶴は其れが恐しいのでした。どれほど多くの報酬が得られるにしても、あゝした切ない勤めは決してさせまいと自分の心に誓つてゐるのでした。我が子が、喘ぎ苦しみながら、突き放されるまでも芝居と

云ふものに取り付いてゐる哀れな姿を見ると、お鶴は眞から芝居を呪はずにはゐられませんでした。そうして、口癖のやうに、

「舞臺の上で死にたい。」

と云ひ張る美知子の心を、母は恨めしく思はずにはゐられないのでした。

美知子も、生計(くらし)のことでお鶴が苦しんでゐることを知らないではありませんでした。然うして、然う云ふ事實に迫られるほど、美知子は一日も早く舞臺に出なければならないと思ふのでした。自分が働かなければならないと思ふのでした。

「もう舞臺に出られる。」

美知子は斯う思つて、お鶴にその事を話しましたが、お鶴はそんな事は聞き入れませんでした。

「ぢやあ何(ど)うして暮らしてゆくの。この先きを。」

「いゝえ。どんな事があつても今のところ、あなたはまだ舞臺には出られないよ。もつと養生をして、すつかり身體を快(よ)くしなければいけません。お醫者が云ふのではもう決してあんな事をしてはいけないと云ふのぢやないか。」

「お醫者がなんと云つたつて、くらしに困れば仕方がないぢやありませんか。」

「直ぐ病氣になれば同じことぢやないか、もういや〱お前(まい)さんのあの苦しみを見るのは。」

母子は斯う云つて爭ひました。

『ほんとうに、なまじ遊藝なんぞを仕込まなければよかつたと思ふよ。學校の先生でもしてくれる方がまだしもよかつた。』

「ぢやあ何うすればいゝの。」

「だから私もいろ／＼考へてゐる。」

お鶴はそれぎりで後を云ひませんでした。

美知子には母の思つてゐることがよく分つてゐるのでした。

「そんなことは厭だ。」

美知子は胸の中にしつかりと斯う思つたぎり、自分も何も云はずに過ぎてゐました。美知子が舞臺に出てゐた頃から、たいへんに美知子を可愛がつてゐる人が一人あつたのでした。そうしてお鶴はいまでも、美知子には知らさずにその人の恩にあづかつてゐるのでした。お鶴は、美知子をその人に縋らせて然うして安氣なゆつくりした暮らしをさせたいと考へてゐるのでした。

「何をするにも、後楯がなくつてはならない、これから先き、又役者をするにしてもさ。」

お鶴は時々斯う云つて、自分の考へをすこしづゝ漏らそうとしてゐるのでしたが、美知子はそんな事は聞きたくないのでした。

一日々々と自分の周圍に迫つてくるさま／＼な事實のうちに必らず不幸を伴つてくると云ふしらせが

紅どりの死の中に含まれてゐるのだと、美知子はかたく信じるやうになりました。美知子はどうしても落着いてはゐられませんでした、今、自分を何うにかしなければ、自分はどうしても舊の生活に復れなくなるのではないかと思つて、そゞろ心にもなるのでした。そうして自分はもう捨てものになつて了つたやうな悲しい氣がしました。何所からも捨てられてしまつて、もう二度とあの世界へは歸つてゆかれないのではないかと思はれました。病氣の爲とは云へ、あんまり離れ過ぎてしまつた芝居の人たちが、この頃の美知子には却つて悲しいやうにも思はれるのでした。美知子は、その人たちを誰れも――彼れも

『今のうちに、あの人たちの御嫌機を取つておかなければいけない。時々あの人たちを訪ねておかなければいけない。』

――と思い浮べました。

然うしなければ、便宜を失つてしまふと、美知子はいろ〳〵賢く思ひめぐらしました。けれども其れは思つたゞけの事なのでした。翌日になれば、美知子は誰れのところへも行く氣はしないのでした。

斯うしてゐる間に、自分の周圍にある不幸が湧いてくる――と美知子はそこいらを見詰めるやうにして思つて見ました。今のうちに自分からこゝを動かなければ、その不幸の恐しい手に捉へられなければならない。自分は今のうち、昔の人たちのところへ近づいて行かなければいけない。そうして、その人たちのなつかしい手で、もう一度自分を引き上げて貰はなければならない。――美知子はかう思ひつゞ

けながら、自分の身體はぐつたりと疲れてゐて、自分の思ふまゝには動きませんてした。舞臺に出てゐた頃、絶死するほどに苦しみながらも、毎日々々心を引き緊めて家を出て行つたやうな、あの凄じい抵抗力は、美知子の今のからだの上にはとても求めることが出來ませんてした。一日も早く、昔の生活に復りたいとは思ひながら、その遠ざかつた生活のなかにもう一度新奇に入つてゆく順序を思ふとき、美知子はそれがこの上もなく、憶劫なことに思はれるのてした。

「阿母さん。日下さんのところへ行つて話をして來て下さいな。」

美知子は毎にかう云つて請求んだりしました。日下と云ふのは、美知子が専屬してゐたある劇場の座主なのてした。

「當分そんなことは思い切つておいてなさいと云ふのに、お前さんが何をしないても、私が何うにかしてやつてゆくから、芝居へ出るだけはよしておくれ。私は自分が煩ふとも、お前さんの煩ふのはほんとに見てゐたくはないからね。」

お鶴の返事はいつも斯うてした。それて美知子は自分が日下のところへ出て行つて、よく話をして見やうかとも思ふのてしたけれども、それも不揃になつてしまつた身服裝のことを思ふと、美知子は恥かしくして出る氣にもなりませんてした。

「いつたい何うすればいゝのかしら。」

美知子は思ひなやみながら、縮緬細工の手すさみなどに日を暮らしたり、おもしろくもなく、琴など

彈いて、やるせない淋しい夜るをおくつたりしました。

『私は何うしたつて芝居はやめないわ。誰れも構つてくれなくつても、私は何所へ流れていつても芝居をして暮らす。それがいけないつて事はありやしない。』

美知子はしみ〴〵と泣きたくなるやうな心持て、斯う考へたりしました。

そうして、母の云ふやうな意味とは違つた意味て、自分を引き廻してくれる頼母しい人が一人欲しいやうな氣もしました。

今まて戀と云ふことを、一度も覺えずに來たことも美知子はこの頃になつて淋しい一とつに數へてゐるのてした。美知子はほんとうに戀を知りませんてした。舞臺に出てゐた頃、美知子に心をよせて、なんの彼のと云つた人はありましたけれ共、自分から、あつい、まことの戀の心を覺えたやうな男は一人もなかつたのてした。

『自分があるところまて、上りついた時てなければ、自分の思ふやうな戀人は見付かりはしない。』

美知子はいつも斯う思つてゐました。けれども、この世に生れて何一とつ與へられなかつた自分は、もうこの儘て朽ちてゆくのかも知れない。紅があの死に際に、もう一度美しい翼をひろげやうとして、その儘命が滅していつたやうに、自分ももう一度心の翼を張らうとしながら、この儘消えていつてしまふ藝術のいのちなのかも知れないと、美知子は思ひました。自分の求めるやうな戀人とは、この生きてゐる間ては目と目を可愛らしく見合はせることさへなくつて濟んでしまふのてはないかと思ふと、美知子

は胸の喘ぎのほかに、まだしほらしく喘ぐものがこの纖弱な肉のなかに潜んでゐるやうな氣がして、味氣ないのでした。

美知子は日下のところへ、或る日に手紙を書きました。身體が思ひのほかに快くなつたこと。そうして、もう一度舞臺で働きたいと云ふことなど、こま〴〵と認めました。書くのに、少し氣はさしましたけれども、今の自分が生計の上から云つても、何うしても一日も早く働かなければならないと云ふ事も添へて。そうして、しばらく舞臺を休んだことだから、どんな端役に使はれても、それは自分は覺悟してゐると云ふことなども書きました。

手紙を書きながら、美知子は、日下の黑い髯を思ひ浮べてゐました。

「女優の資格のうちで最も條件は、どうしても體質だと思ふね。どんなに容貌がよくとも才分があつても體質の弱いものは到底女優なんて職業はつゞけられないね。」

いつか美知子に日下が斯う云つたことも美知子は思ひ出してゐました。

紅どりの死が、この手紙の返事を占なつてるやうな氣が美知子はしました。――返事がよければ、自分はもう直き死ぬ運命を持つてゐることになるのかもしれない。もし又、返事がわるければ、自分は虛弱な身體を持て餘しながら、この先きあるかぎりの不しあはせを見ると云ふことになるのに違ひないと美知子は豫測しました。返事のいゝと云ふ事は、日下が美知子の賴みを聞き入れることなのでした。返

事のわるいと云ふ事は、美知子の賴みに應じないと云ふ意味なのでした。

手紙を出してしまつてから、美知子は紅どりの死から自分で自分の易をこしらへたことを後悔しました。どちらにしても、自分の上にいゝことは落ちてこない占ひを立てゝ、そうして、この上にも一人して思ひ騷ぐのは馬鹿々々しいと美知子は思ひました。けれども然う思ふ傍から、自分のこの果敢ない生と、紅どりのいぢらしい死とが、ある宿命の一端に結びついてるやうな氣がして、美知子にはその占ひを思ひ捨てることが出來ないのでした。そうして、あの手紙の返事は、きつと、自分の考へてははかりきれないやうな、思ひの外の返事が書かれてくるかもしれないと、思ひ返して胸を安めやうとしたりしました。

美知子は幼少い時から、何かこのひろい宇宙に、自分を見守つてゐてくれる優しい慈愛深い眼を持つた人が一人あるやうな氣がして仕方がありませんでした。そうして其れが神樣かとも思へるのでした。何所にゐるのか分らないその慈愛に富んだ一人のものに、美知子は悲しい時にも苦しい時にも、唯ぢつと縋りついて、そうしてしみ〴〵と泣いてゐたやうな氣がするのでした。自分が一人して泣いてる時には、きつとその慈愛に富んだ優しい一人のものが、自分を撫で愛しんでくれるやうな氣がするのでした。そうして其れは、いつも美知子が苦しむ時にばかり、慈愛深く現はれるのでした。

美知子はそれを觀音さまにしておきました。美知子は、いろ〳〵な神や佛の偶像のうちで、觀音の顏

と姿がいちばんに好きだからでした。基督の顔も好きでしたけれ共、それよりも觀音の方に親しみが深いやうな氣がして、美知子は自分の心を溫く慈しんでくれるものは觀音さまだとしておきました。

何かあれば、美知子は直ぐに觀音の姿を心に描いて、そうして其の半眼の美しい眼を見詰めながら祈りをこめました。舞臺につとめてた間も、美知子は他の仲間たちのやうに信心と云ふことを初めてゐました。そうして其れは觀音さまばかりなのでした。美知子は、賑やかな町を遊びながらに淺草の觀音へお詣りに行つてこやうと思ひました。美知子は午後から一人して出かけました。

舞臺を退いてから、外に出ることがあつても美知子はなるたけ派出々々した服裝をしないやうにしてゐました、今日も美知子はお鶴に輕い銀杏返しに結んでもらつて、華美な色氣はどこかに潜んでるやうな扮りをして出かけたのでした。

切れの長い美知子の眼に、きれるやうな磨がれた光りが滿ちてゐました。頰が瘦せて、一としほ濃く見える其の眉毛のどこかに、憂ひの影をまつはらせながら、美知子は、冬の日光の下を、たよ〲と步きました。電車に乘つても、美知子はその隅に小さく腰をかけて長い袖を重ねてゐました。

赤い旗や紫の旗が、ひら〲と商店の前に吹き亂れてゐる賑やかさを電車の窓からさし覗いた時、美知子はふとした眩暈を感じましたけれども、仲店の敷石を踏んでゆく頃には、目のまわりがはつきりして、奇麗な花かんざしの色などに、娘々したこゝろもちがおのづと浮いたりしました。觀音堂に上つて美知子はそこで手を合せましたけれども、いつも家にゐて優しいお姿を思ふ時のやうな眞實な一心な祈

念はおこらないのでした。美知子はあたりの人に目を配りながら、ちよいとお辭儀をしただけで、直ぐに裏手の階段を下りてゆきました。

龍頭觀音の噴水が、霧のやうに輕くさや〳〵と水をふいてゐました。すつかり葉の落ち盡した大銀杏の木を後にして、その前のロハ臺に赤い襯衣の袖口を出して腕組みをした男が一人、腰をかけてゐました。噴水の霧のかげに、僅な人がばらりと群れてゐました。空がよく晴れてゐながら、ふしぎな綠の氣體がぽつとひろがつてゐて、そこには日光の影が見えないのでした。

美知子は冷めたい道を横切つて、樂隊の聞こえる池のふちへ廻つてきました。そうして、いちばん端の、女しばゐの小屋の前を通つたときに、美知子はふとものずきに、入つて見たい氣がしましたが、其の邊にうろ〳〵してゐる呆平た群集が自分を見てゐるやうなので、其の儘何氣ない顏で行き過ぎましたけれども美知子はあの小屋の中で、自分と同じやうな道に生きてる女たちが、どんな顏をしてどんなことをやつてゐるのかと思ふと、どうしても覗いて見たくてならないのでした。美知子は五六歩その前を過ぎてから、又後に戻つて、そうつとその木戸口をはいつてゆきました。

小屋の中は眞つ暗で、唯汚いものゝ形のあつまりがもや〳〵としてゐるばかりでした。美知子はその汚れに濕つた蒲團を敷く氣にもならないで、横の羽目板の前によりかゝりながら立つてゐました。舞臺の上では、淺黄小紋の上下をつけたさむらひが、領主のやうな人に何か云はれてゐるところなのでした。どちらも美い顏だつたので、美知子はぢつとその顏を見詰めてゐました。領主は暴君のやうでした。

そうして其の彌十郎と云ふ家來を憎んでゐるらしく見えました。しまひにその暴君が彌十郎の妻を斬り捨てゝその首を彌十郎の前に投げ出すと、彌十郎は欝憤みなぎるやうな表情で、其の首を抱へながら、よろぼひながら引つ込んでゆきました。美知子はそれだけで小屋を出ました。

美知子は外に出てから、よの中の底の方に棲んで暮らすと云ふ事を考へてゐました。自分の行く先きは暗いけれども、よの中の底の方に棲んでくらしたくはない。自分はやつぱりよの中の一段高いところで驕りにかゞやいてゐたい。

「私はどうしても世の中の底の方に落ち込んで生きてゆかなければならない樣になるのだらう。」

そうして、この虚弱な身體に、自分の手で食べるものをあてがつてやらなければ、何うすることも出來ないのだと思ふと、美知子は一時に心の中が眞つ暗になりました。

ぽそ〳〵とした風をして、何の味も風情もない人たちが、けづればばら〳〵と粉になつて落ちそうな堅い黄色い皮膚をして、こちん〳〵とした下駄の音を立てながら打群れて歩いてゐるのを見ると、美知子は癇が高くなつていやでたまりませんでした。美知子は公園を出るとそこから車に乘つて、濱町の家まで歸りました。

四五日經つても日下からまだ返事がないのでした。もう一度、あすこで自分を使つてくれなければ、田舍の方へ買はれて行つても芝居をしやうと美知子は心を定めてゐました。

日下からの返事がおそいほど、ふしぎに美知子の胸にだん〳〵演劇の熱が高まつてゆくのでした。演技と云ふことを思ひ詰めてゐれば、その儘ふら〳〵と心が狂つてゆくやうに美知子はしばゐの爲にその心を燃やしてゐるのでした。美知子は唯、しばゐの灯が戀ひしくてたまりませんでした。

ほんとうに、自分はどんな端役でもいゝ。もう一度舞臺を踏みたい。樂屋の風呂場で、あの薄白くにぢんだ灯の色を見詰めながら、自分の舞臺姿の幻影にうつとりしながら甘い悲哀の快さをもう一度味はつて見たい――

美知子は舞臺の上で昏倒した苦しさをすつかりと忘れてゐました。あの喘ぎ苦しんだ呼吸の切なさなどは思ひ浮べて見やうともしませんでした。

しばゐと云ふ事を、強い心で噛みしめる時、美知子は何うしても自分の身體をかよわいものに思ふことが出來ませんでした。あの美しい憧憬の世界へ入つてゆかうとしてゐる自分には、身慘めな病ひなどが取りついてゐやうとは何うしても思へないのでした。これから先き麗子のやうに生き〳〵と舞臺の上で働くのだと思ふと、それと同時に、今までの惡るい夢はすつかりとこれかぎりに消へて行つてしまつて、新らしいよろこびに滿ちたしあはせな未來が向いてくるのだと云ふやうな嬉しさがあふれるのでした。

日下は自分を迎へてくれるかもしれないと。美知子は時々、自分の蔭に、につと打ち笑んで愛の手を差出してる運命の姿を垣間見たやうな心持で、かう思ふことがありました。さうして自分は昔の生活に復る。病ひなどもすつかりと失くなつて、他の仲間の女優たちのやうに、自分にもしあはせばかりが集

つてくる。そうして自分は一生懸命に藝をみがく。阿母さんもそれて安心して、私の成功するのをよろこんで見てくれるやうになる。私たちはお醫者に逢つて、なんても仰山に病氣を取り扱ふことを笑つてやる――美知子は斯う思ふのでした。

美知子の心には、眞實性をもつたこまぐとしたものが、いつぱいに擴がつてゆきました。自分には見ることの出來ないある力に、しつかりと縋つてゐるやうな甘えたあたゝかひ心持にもなりました。そうして、自分と云ふものが辛い運命の下に泣き悲しんてこの世を終らうとはどうしても思へませんでした。自分はその目に見えないある慈愛のものに、慈しまれなければならないやうな氣がして、美知子の心が優しくおのゝきました。そうして、ある一とつの願ひが、成就と云ふ信念を帶びてその心の隈にしつかりと纏つてゐることを思ふと、美知子は嬉しさにいつともなく涙含んてゐるのでした。

その時から二日經つて、座主の日下から返事が來ました。

その手紙は丁寧で親切でした。もう少し身體を靜養した方があなたの爲だと思ふ。いつても此劇場へ歸りたければ歸れるのだから、心を落着けてゆつくり靜養をした方がいゝ。もし生計の爲に必要なるものがあるなら、個人として應分の助力はして上げてもよい。其の内に一度氣分のよい日に訪ねてこられては如何？　云ふ意味の手紙なのでした。

自分の身體はもう舊に復つたと云つてやつたのに、もう少し靜養をした方がいゝと返事をして來たの

が美知子には分りませんでした。こんな位なら、いつそ一と思ひに拒絶をしてくれた方が思ひきりがついていゝのにと思ふと、何事も自分の思ふやうにはすら〳〵と運んでゆかない世の中の事實が恨めしくてなりませんでした。

美知子はこの間日下に手紙をやつた事をお鶴に打け明けながら、その返事を見せました。「だからどうせ駄目なことは知れてゐるのに。——

「駄目つて一と口にも云へないわ。いつでも歸らうと思へば歸れるつて書いてあるんですもの。」

「それはお座なりだよ。お前のやうな弱いものに到底難儀な舞臺はつとまりやしないんだからね。」

お鶴は、俯向いて手紙の端をこまかく疊んでゐる美知子の姿をしげ〳〵と眺めました。

「どうしてもお前さんは芝居をやりたいのかい。思ひきつてしまふ譯にはいかないんだね。」

「思ひきれないわ、どうせ自分の力でお飯をいたゞかなけりやならないんなら、やつぱり自分の好きなことをして一生を送りたいわ。どうしたつて、私はしばゐに疲れて死んでしまふのだから——どうせ長いことはありはしないんだから——又やくしやになればもつと重い病氣になつて死んでしまふんだつて云はれてるんですもの。私はそれでもいゝ。どうせ早く死ぬのなら、然うして死んでしまつた方がいゝから。」

美知子はこんな事を云ひながら、泣いてゐました。どんな思ひをしても、しばゐから離れまいと云ふ自分の執着心に、美知子は我れから悲しくなつてゆくのでした。

不思議な機運で、一流の劇場に、その美しさを保たせてゐたのも、夢のやうな一つ時でした。いつた

ん其所から追はれた自分は、この先き、どこへ、どこへと落ちこんで行くのであらうと思ふと、美知子は唯一人ぽつち闇の世界へ抛り込まれたやうな氣がするのでした。

「そんなに思ひ詰めたつて仕様がない。其れよりは自分からあくせくしずに、しばらく凝つとしてるより仕方があるまいと思ふよ。どうせ女は一人立ちはできないにきまつてるんだから。」

お鶴は美知子に早く緣をかためることをすゝめました。どうしてもお鶴は美知子に男を添はせなければ、一時も安氣には過ごされないやうな氣がするのでした。

美知子が芝居へ出てゐた頃には、お鶴も相當におやつしをして、皺の多い小さい赤ら顔にいつぱい愛嬌をたゝえてゐたものでしたけれ共今では姥の面を捨てたあとのやうに、臉の萎びた撓んだ眼をして、險相な眉付をして、そうしてそゝけた筋肉がその口尻の兩端にだらりとした曲線をかいてゐました。美知子は母のその顔を見ると、この頃にもなく、そのまゝその胸のところに抱きつきたいやうななつかしさと悲しさを覺えました。そうして、母の手にさへ縋つてゐれば、なんの事もなくやすやすと、つまづき易い浮世の道をしづかに歩いてゆかれるやうな、賴り深い情けを感じながら、美知子はしばらくの間は、母が何を云つてゐるのかも分らずに咽び上げゝ泣きつゞけました。

美知子にはどうしても母の云ふことは聞かれないのでした。美知子は自分の執着するものゝ爲に、自分の繊弱な身體を虐げられるならそれでも仕方がないと思つてるのでした。美知子はある傳手から、仙

臺の方へ乘り込むことになつてゐる下つ端の新派の連中のなかへ、自分の身體を賣ることにきめてしまひました。

「旅へ出れば二三日して直ぐ病氣が起るにきまつてゐるよ。」

「えゝ知つてますよ。」

「それで何うするの。」

「田舍の芝居小屋で血を吐いて死ぬばかり。」

美知子は斯う云つて自分の家を出ました。兩國のある料理屋で、美知子は買はれてゆくその興業師に逢ひに行く日なのでした。

その人たちは、美知子を離れの座敷で待ち受けてゐました。若い番頭が一人隨いて、他に、今度の興行に同じやうに買はれてゆく若い貧相な俳優が一人來はせてゐました。美知子はその離れに通されて、さうして其の人たちに逢ひました。美知子は見ると直ぐその興行師の顏がいやでたまりませんでした。

興行師の顏は、骨を抜いてしまつて肉だけを丸く膨らましたやうな大きな平たい顏でした。そのどす蒼い顏の色は脂肪ですつかり照つてゐました。さうして、血の色のない薄い唇に、唾液がいつたいに滲みてゐて、物を云ふ時には眉に八字をよせながらその薄い唇を尖がらせるのでした。

「役者はみんな田舍でたゝき上げてくるんでさ。」

興業師は然う云つて美知子を見ながら笑ひました。太つた膝前から、濃いお納戸地の友禪縮緬の長襦

衶がぞろりと出てゐるのでした。

「役者はなんても、自分の藝を自分て鞭撻しなくつちや駄目てす。それにや田舍廻りが一番て、田舍を稼いてりや腕はどし〳〵達者になります。生れた土地てばかり御贔屓を願ひ奉つてゐちやいつまて經つたつて一向進歩しませんからな。女優さんなんかも、一とつ大奮發てそこいら中驅け廻つて見るやうでなくつちやいけません。どうして、田舍は馬鹿に出來ませんよ。東京の役者衆なんぞより豪勢なのがありますからな。田舍の役者が、一とつ人氣が出たとなつちやあ、そりやあ響いたもんてすからな。」

興行師は切り口上て、手を膝の上に突きながら美知子にこんな事を云ひました。さうして、ぶよ〳〵した手に小さい盃を持つて、それを美知子にさしました。

美知子はふと、黑い髭をもつた日下のことを思ひ浮べました。さうして、この相手に對しては言葉少なの味氣ない心のうちに、日下座主のことをぢつと懷しく思ひしみてゐるのてした。

もつと身體を靜養しなくてはいけないと云つてくれたあの座主の心持は、自分に對してはどんなにか優しい恩愛のあるまごゝろを含んでゐたもののゝやうに、今の美知子にはしんみりと受け取ることが出來るのてした。いつても歸りたい時には歸れると云つたあの座主の言葉は僞てはないに違ひない。——自分勝手に斯うした道へ踏み込んてくる前に、あの座主に逢つてもう一度よく相談をすればよかつたと思ふやうな悔いの心が、美知子の俯向いてる胸のなかに萌し初めてゐました。

それに、美知子がかつて東都の一流の劇場て、その名をうたはれてゐた事を看板にして、田舍の客を

おどろかすつもりでゐる興行師の腹がその言葉のはし〴〵に現はれるのを聞いてゐると、美知子はちよつと、日下座主に對しても濟まないやうな氣がするのでした。昔の自分の經歷などはこの場ぎりで捨てゝもらひたいと思つて、美知子はそれを興業師に、初心らしい恥ぢを含みながら話して見ましたが、興行師は、たゞ、

「はあ。」

と云つて笑つてゐました。そうして、

「役者はやつぱり苦勞をしたもんでなくつちや、ほんとのところへは入つていかれません。なんでもどたんばで叩き上げなくつちや駄目です。」

と興行師はまじめらしく云ひました。

そうして、田舍芝居によくある役者の失敗ばなしなぞを、いろ〳〵と面白さうにもう一人の男に話してゐました。

美知子は直ぐに切り上げてそこを出ました。外にはひどい風が吹いてゐました。瞬くたびに聲があるやうに、星がするどい光りを放つてゐました。夜るの河水が黒くちゞれて、金屬のやうなかたい冷めたい船の灯が、時々その上を細い線を曳きながら眞つ直ぐに貫いてゆきました。美知子はショールに襟を埋めながら河岸傳ひに、寒い道を自分の家の方へ歩いてゆきました。

何もかも決着してしまつたあとのやうな物憂さを感じながら、美知子の心にはわりあひに暗い蔭がさ

してはゐませんでした。溢り溢りしてゐたものが快く流れ初めてゆくのを恍惚と、自分の心が見詰めてゐるやうな靜な氣持て美知子はゐるのでした。そうして、さつき厭てたまらなかつた與行師の顏も馴染みのない一座の人たちに對する不安さも、みんな美知子の眼の前から消へてしまつて、美知子はたゞ自分一人のあこがれの世界を思ひました。

家に歸ると、美知子は母の愚痴を聞きながら、歌などうたつて早く床にはいりました。其の夜半に美知子は發熱の苦しさに目が覺めました。

目が覺めると直ぐ、また病氣が起つたのぢやないかと美知子は思ひました。思つた機にどんと慟悸を打ち初めてから、その慟悸がいつまでもやみませんでした。美知子は起き上つて、しばらくの間括り枕の上に突伏してゐましたが、だん〳〵に自分の身體に浮動し初める病ひの切なさを意識しながら、美知子は、あしたになれば直ぐ癒つてしまふに違ひないと、すべてを打ち消すやうに一生懸命に斯う考へてゐました。この病ひと云ふことから、いやな聯想などはすこしも起したくはありませんでした。

美知子は、さも病魔の手に引き入れられることを拒むやうにあはてゝいろ〳〵な、いろ〳〵な、昔の舞臺の美しい自分の姿ばかりを思ひ並べて、たゞ、その中に浸らうとつとめました。そうして、あの興行師につれられて、仙臺の芝居へ行くと云ふことが、だしぬけに嬉れしくてたまらなくなりました。美知子は一點にしがみつくやうに心を緊めて、絕叫したいほど嬉しい、嬉しい、と思ひつゞけながら、その儘熱におそはれる眠りのうちに、いつともなくうつら〳〵と落ちてゆきました。

（をはり）

一握の藁

田山花袋

一

龍太は言ひ出した。『兎に角今夜行くことにする。十時の夜汽車で出かける。サア何時歸つて來るか、それは聞かずに置いて呉れ。自分にも解らない』

此頃、龍太には何も解らなくなつた。これまで目あてにして進んで行つた幻影は、何時崩れるとなく崩れて行つて、もう何も彼もかれの心を惹くやうなものはなくなつて了つた。書棚には一杯埃がたかつたまゝになつてゐた。机の上の原稿紙は一月もそこに置いたまゝになつてゐた。

門のあたりをサッと掠めて通つて行く時雨の音が、靜かにかれの魂に染み込んで、夜もすがらぱつちりと眼を闇の中に明いてゐることなどもあつた。時にはさうして靜かに床の上に横つてゐることすらかれには堪へ難かつた。明方が

殊にかれを堪へ難くした。水霜にぬれた樹々の間から薄白く光る殘月の影は、今までに經驗したことのないさびしさと悲しさとの濃淡の紋をかれの頭に織り込んで行つた。草の上の白い霜、がさこそと小籔を渡つて行く風、黎明の明るい光の中に黒くはつきりと現はれて見える落葉の林、鉋屑のころ〳〵ところがつて行く垣の傍の道――さういふものが常にかれの周圍にあつた。

書齋の一隅にある籐椅子は、かれの伴侶として長い間其處に据ゑられてあつた。かれは其上で疲勞をやすめたり思想をあつめたり長い長い小說に讀み耽つたりした。そこから下りて、かれは憧憬と奮鬪との世界に出て行くのを習ひとしてゐた。明るい町の灯も其處で想像した。

机も書籍も筆も、長押にかけてある額も何も彼もかれに興味を惹かなくなつたと同じやうに、最後の休息所であり最後の同伴者であつたその籐椅子も、今では全くかれに背いて行つた。身を横へたと思ふと、すぐかれは其處から起上つた。

「あゝあゝ！」

からかれは口癖のやうに言つたが、その口癖すらも此頃ではもうかれの口から出なくなつた。かれは唯立つたりゐたりしてゐた。

かれは今まで繙いて見たこともない本を開いて見た。それは厚いクロウス表紙の本であつた。そこには遠い島のことがかいてあつた。一月の中大抵は濃霧につゝまれて、二日と靑空の見えないといふやうな土地や、冬になつて了ふと全く無人島になつて了ふやうな土地のことが詳しく書いてあつた。荒れに

荒れた海を船は三日も四日も漂つた揚句、大きな流氷に封じ込められて、何うすることも出來なくなつて了つた話や、崖と崖との間に僅かに狹い土地を開いて、馬鈴薯や蕎麥や稗を栽えて、そして一年二年とすごして行つた人の話なども書いてあつた。海鳥の白い糞の一面に附着してゐる岩、膃肭獸の數限りもなく群集してゐる島、橇を犬にひかせて積雪の中を旅して行く住民、さういふ寫眞にかれは長い間見入つてゐたりした。『そんな生活が今の自分に何ういふ關係があると言ふのだらう？』こんなことを考へて龍太は黯然とした。

今まで過ぎて來た生活は、一つ一つ繪になつてかれの眼の前を通つて行つた。何の爲めに自分は努力した。何の爲めに自分は生活した。明るい灯、はなやかな生活、一歩一歩切開いて進んで行く奮鬪、それが何だ。こんなこともかれは考へた。意義があり、生命があると確信した自己の生活が、何の意義も何の生命も持つてゐないといふ風に考へて來るのが龍太自身にも不思議に思はれた。過去も將來も、現在すらも意味のない空々しい Blank page になつて了ふたのにかれは驚かされずには居られなかつた。氣が附くと、若い人達は若い妻を持つて、そして若い新しい生活を始めてゐた。書齋のすぐ裏のところに出來た小さい貸家の中にも、矢張さういふ人達が住んでゐた。二十年前のかれ等夫婦が矢張其處に住んでゐた。

『若い人達の修業する機關はよくそろつてゐますけれども、私達の爲めには誰もさういふものを拵へて置いて呉れないから困りますね』

からある友達が落附いた靜かな聲で言つたのを龍太は時々思ひ出した。

その冬はかれに取つては今まで經驗したことのないやうな淋しい寒いものであつた。何も彼もかれに背いて行つたりかれを脅やかして行つたりした。かれは友達をたづねて行く氣にもなれなかつた。饒舌と、皮肉と、意地と、陷穽との滿ち渡つてゐる社會へも出て行かうとも思はなかつた。正月の初には、かれは都會を離れた山の上に朝日の當る家をたづねて行つて、其處で二日三日を送つた。西風の寒く吹いて來る日影の薄い田舍の溫泉場へも出かけて行つた。其處でかれは昔知つてゐた女に逢つたりした。其女は寒むさうに袖を合せて、そして昔の話をした。「もう私も二十七になるわ」などと言つた。龍太はその女のゐる家の前を通つて、朝早く停車場へ行つた。

停車場にゐる車掌も、街道を通つて行く百性も、交番の前にぽつねんと立つてゐる巡査も、車にいろいろな荷物を載せて出かけて行く小商人も、皆なそれぞれ意味のある生活を營んでゐるのに、かればかりは、さびしい空しい心を抱いて、そしてそこらに彷徨いてゐた。それが龍太には辛かつた。

ある小さな谷合のやうなところでは、二人の小商人が車に腰をかけて、そして樂しさうに何か話してゐた。

「もう午だな」

「さうなるかな……それぢやぽつぽつ出かけべいか」

こんなことを言つて、一人が車を挽き出した。一人は大根だの人參だのの入つてゐる籠をかついでを

してその跡に續いた。何かおもしろさうに話しながら歩いて行つた。その小さな光景が何故か龍太には涙を催さしめた。狹い谷合には、日影が明るくさし込んでゐた。竹籔の中の野碓が獨りで上つたり下りたりしてゐた。龍太は二人の小商人の阪を登つて行くのをいつまでもいつまでも見てゐた。

『そんなことを言つたつて、あんまり急ぢやありませんか。歸つて考へて明日行つたら好いでせう』

忠實な細君はかう言つて龍太の急な思ひ立をとめた。

龍太はしかし落附いてはゐられなかつた。一人で考へて見たいやうな問題が澤山に前に横つてゐた。長い間住んでゐた家の門に入つて、あの書棚のあの書齋の中で籐椅子に身を横へて見たところで仕方かなかつた。ほつねんとしてはゐられなかつた。

かれは細君をつれ立つて郊外の町を歩いて行つた。月の明い夜であつた。龍太は默つてゐた。細君はさびしさうな白い顏を月の光の中に見せてかれの跡について歩いた。若い時樂しさうに嬉しさうに並んで歩いた追憶などは、二人にはもう餘りに遠い昔になつてゐた。

町の通りに小さな郵便局があつた。龍太はツカツカと入つて行つた。電燈の明るくついた中では、若い男が頻りに郵便物を調べながら血色の好い希望の多さうな顏を此方に見せてゐた。久し振でたづねて行かうとする友達の許へ電報を打つて、そしして龍太が出て來る間、細君は寒さうにして其處に立つて待つてゐた。

默つて二人は歩いて行つた。

「行くやうに打つて來たんですか」

路の角に來た時、細君は思ひ切つたやうにして訊いた。

「あゝ」

「矢張、今夜行くんですか」

「あゝ」

細君は何も言はなかつた。路はだら／＼と下りて行つた。月は狹い汚い町の上に氷のやうに冷たく冴えてゐた。

スコチッの背廣に外套に靴――唯それだけであつた。子供達はもう大抵寐てゐた。二番目の男の兒が一人起きて、茶の間の電燈の下て、机を出して、明日の課業の下調をしてゐたが、餘りガタピシさせるので、

「父さん、何處かへ行くの？」

かう目を丸くして訊いた。

二

狹い三等室はぼんやりと薄暗かつた。何ういふ停車場があるか、何處を汽車が通つてゐるか、そんな

ことを龍太は考へなかつた。帽子をかぶたまゝ車窓に頭を凭せかけて、唯、汽車の動いて行くのに任せてゐた。廣い世界が唯かれの前にあつた。

荒れた唇だの、箒やうな頭だの、目脂のついた眠さうな眼だのが其處にも此處にもあつた。色の褪めた古い毛布をすつぽりと頭から被つて高い鼾を立てゝゐるやうな人達もあつた。龍太は眠つたり覺めたりしてゐた。自己の生活がかういふ人達の生活の中にあるといふことが不思議であつたりした。足を當てゝゐたスチイムの管は段々冷たくなつて行つた。

をりをり眼を覺して、龍太は外を見た。闇の中に星が煌々と閃めいてゐた。

「これぢや山も天氣だらう」

「降られちや大變ですからね」

すぐ後にゐる夫婦者らしい二人づれは小聲でこんなことを言つてゐた。

山の上に來たといふことは、急に寒くなつて來たので知れた。車掌の持つたランタンがチラチラして地上にある白い雪がそれと指された。谷合のやうなところを汽車は通つて行つた。ある停車場では、小さな舍の中で、ランプを點けて、火をカンカン起して、何か面白さうに話し合つてゐる二三人の詰襟の男が、汽車の留つた龍太の窓のすぐ前のところに見えたゐた。廣いライフの中にそこだけくつきりと現はれてゐる縮圖のやう感じられて、龍太は溜息をついた。龍太はその明るい群の中に自分を入れてそして長い間いろ〳〵なことを想像してゐた。

明方近い頃までには、汽車はもう百哩以上も走つてゐた。雪は次第に深くなつて來てゐた。四邊の山の一面に雪に埋められてゐるのもそれを微かに闇の中に見えてゐた。鐵橋――谷川――星の光――停車場の名の青い中に白く出てゐる六角燈――助役の持つた小さなランタン――庇に長く連つてゐる大きな氷柱――やがて龍太の下りる停車場は來た。龍太は小さな包を抱えて、そして暗い停車場へと下りて行つた。

龍太の心は遠い昔を辿つてゐた。其處には三十年前に唯一度來たばかりであつた。その時から今まで。それがかれに取つては大きな問題であつた。今からかれの其身の亡びるまで。これがまた一層かれに取つては大きな問題であつた。其頃はかれはまだいろ〳〵なものを持つてゐた。世の中といふ大きな誘惑もあれば、女といふ不可解の謎もあつた。體には血が漲つてゐた。いかやうにしても生きて行かれる年月であつた。かれは好奇心に躍る心を抱いて、谷合の道を勇んで通つて行つた可憐の少年を思ひ起さずにはをられなかつた。『しかし、今は、これから先は？』かう思ふと、かれは堪らなくさびしくなつた。何を伴侶にして、何を誘惑物にして、かれはこれから先を送らうとするのか。世の中か？　女か？　物質か？　金か？

その問題は長い間かれの胸に絡み着いて離れなかつた。谷を越えて、丘へ上ると、山から下ろして來る風が寒くかれの身に迫つて來た。耳が切れさうになつた。

雪に半ば埋められたやうになつて、人家がポツ〳〵其處此處に見えてゐた。日はまだ昇らないが、朝

日の光は既に明るく四邊に漲り渡つてゐた。その光を受けた山の雪は薄紅色に輝いてゐた。眠むさうな顏をして戸を明けてゐる女などもあつた。ある家では、手桶を下げて、雪道を傳つて、家の前にある井戸端に水を汲みに來やうとする婆さんなどもあつた。高原の上の村はやがて朝日に輝いて見えた。

龍太の訪ねて行つた村は、山と山との谷合のやうなところにあつた。『東京のお客さんでしたな』から言つて、昔見た其家の細君は襷を外しながら迎へた。半ば白髮になつた友達は、『昨夜電報が來ましたから、今朝な、途中までてゝも迎へを出さうと思つてるとこでごわしたが――早うごした』から言つて、奥から出て來た。

『年を取つたね?』

『いやはや、もうこんなでごわす…』から云つて龍太の顏を見て、『あんたも隨分白い』

昔の友達は矢張昔話したやうな調子で話した。室は同じ室だ。家も同じ家だ。山も同じ山だ。床にかゝつてゐる幅物も同じ幅物だ。龍太の身には過去と現在と將來とが一つになつて押寄せて來た。

何の爲めにさうした山の中へわざ〳〵訪ねて行つたかわからないやうな旅だ。から龍太は思つた。炬燵に當つて、拙い地酒を飮んで、雪にふり籠められて、昔の追憶を話し合つたとて、矢張、それは何にもならなかつた。齒を黑く涅めた上さん、弓のやうに腰が曲つたお婆さん、汚い着物を着て青い洟を垂

した娘、さういふ中で送つた人達の生活は決して羨しいものではなかつた。『平和――唯平和があるばかりだ。爛れた平和は、生きながら墓の中に入つて了つたやうな平和だ。しかし、これでも猶、都會の生活よりもまことの生活に近いだらうか。目覺めた生活は此處にもあるだらうか』龍太は緣側から滴の落ちる細い雪路を厠の方へ歩きながら、こんなことを考へたりした。

雪は軒近くまで高く積つてゐた。ある家では、裏の方がすつかり家根から一面に埋められてゐるので穴居の民のやうに、深く穴を掘つて、辛うじて其中に往來することが出來るやうにして置いた。南に面した室が唯日に向つて明けられてあるばかりで、裏は何の家でも皆戸を深く閉めて置いた。

龍太は以前來た時のことを繰返した。其間に過ぎ去つた年月と、生れたり死んだりした人のことなどが絶えずかれの頭にあつた。かれは雪の中につけられた細い道を辿つて、村の方へと行つて見たりした。矢張同じ鎭守があつたり寺があつたりした。

寺の墓地の中には、かれの知つてゐる男が一人埋められてゐる筈だつた。龍太はせめてそこに行つて、お詣りしやうと思つて出かけた。しかし、雪が深いので、寺の本堂の前にすら行くのが容易でなかつた。

「墓場には道がつけてあゝませんでな」

から寺男は言つた。

「さうですな、雪でも解けねえぢや、お墓のお參りは出來ねえな」

こんなことも言つた。

かれはそこから引返した。

「あれは何てす?」

朝日の當る丘の上を指して龍太は訊いた。そこにある小さな家は半ば雪に埋められてゐた。

「何アに、あれは葡萄だの林檎だのを栽培してゐるんです」

「土地のものてすか?」

「いゝえ、他所から來たんてごわす。……碌なものも出來ねんてさ」

「一體、葡萄など出來るんですか」

「資本を多くかければ、出來ないこともごわすめいが――資本をかけないでは、何をしたつて駄目てがんさ」

丘の向ふには、大きな山がすつかり雪に包まれて、キラキラ朝日に光つて見えてゐた。

他所の人といふ言葉が第一に龍太の好奇心を惹いた。他所からかういふ山の中に來て、村の人々から全く離れて、さういふ處で菓物栽培をやつてゐる人の生活が見たくなつた。かれは言つた。

「近所の人てすか」

「なアに、東京もんてす」

「行つて見たいもんてすね。この雪ても行かれるてせうか」

『行つたッて何もありやしやせん』

『さうですかね』

しかし龍太は出かけて行つた。村を離れてから、少し行くと、其處に小さな谷があつた。碧い水が此方の岸に偏つて流れてゐた。橋を渡ると、細い路がついてゐた。かれは其處をつたつて、一歩々々登つて行つた。路が細いので、靴が滑つて、幾度となくかれは膝をついた。

丘の上はやゝ平らになつてゐた。葡萄畠の雪に埋れたのが其處にも此處にもあつた。林檎の畠らしい竹の棚が半分壞れかけてあつたりした。

小さい家は其奥にあつた。

さうした光景は不思議にもかれの胸に强いある印象を與へた。何んな生活でも、新しい生活、まことの生活、かう考へたかれには、因習の多い村の人達の生活よりも却つてさういふ生活が意味深く感ぜられた。『御免なさい――』かう挨拶して龍太はその小家の戸を明けた。

圍爐裏の火に燻つてゐる大きな榾火が先つかれの眼に映つた。薄く靡いた烟――その中に年の頃四十二三と見える、鬚の深い、丈の高い大きな男が座つてゐたが、吃驚したやうにして突然入つて來た洋服姿の客を見た。傍で子供に乳を飮ませてゐた上さんは、半ば身を起して此方を見た。

『飛んだお邪魔をしますけれど――』

かう言つて龍太は來意を告げた。

收稅吏とて思つたらしい不安が始めてとれたといふやうな顏をして、主人はやが龍太を圍爐裏の傍に導いた。「いや――私等駄目です。失敗の歷史ですから」主人はこんなことを言つて、龍太の顏を見た。龍太の眼にも悲慘な生活狀態がそれとなく覗(うかゞ)はれた。

「イヤ、もう駄目です――何しろ、寒いですから、御覽の通りの雪ですから」

主人は新に榾の細いのを一つ二つ圍爐裏の中に入れた。ぱつと燃えた火は、小さい室を明るく見せた。

「この向ふの山の下のところに目をつけてやつたんですけども……何うも思ふやうに行きません。何しろ、雪が多過ぎますから」

「もう餘程やつてゐるんですか」

「もう五年になります。今年こそ、今年こそと思つてやつて見たんですけれど……何うしても駄目です」

それは東京に長くゐて、多少は其途にも經驗のある人であつた。何うしても、しつかりした基礎を固めなければならないと思つて、此向ふの村に知人のあつたのをたよりに、俄かに此處に移住して來た。

「妻は餘り進みませんでしたけれど……無理にすゝめてやつて來たんですが」主人はそんな處まで話を持つて行つた。

「それは雪かひどいんですから――北海道よりもひどいかも知れません。それに、土地のものが旨くつかへませんや――」

こんな話もした。龍太はそこに一時間ほどゐた。葡萄や林檎の話を何彼と聞いた。歸る時には、主人は外まで出て送つて來て呉れた。――其夜から恐ろしい吹雪が始まつた。空には灰色の暗い雲が散ひかゝつて、輕い細かい雪片が下から上へと渦き上つた。東京の客をたづねて來た村の人達は、途中まで歸つて行つて、とても駄目だと言つて、また引返して來た。

龍太は終夜眠られなかつた。山の上の小さな家が絶えずかれの眼の前にあつた。『かういふ夜はたまらんよ、あの山の上にゐては――』かうさつき誰かと言つた言葉がそれからそれへと思ひやられた。『それてもまた好いかも知れない。都會の中の暗鬪獸鬪よりも好いかも知れない』龍太はかう思つて、明るい都會の灯を眼の前に浮べて見たりした。風雪は荒れに荒れた。

「さうですね、此處等の田地はまだ安う御座いますよ」

龍太の友達はこんなことを言つた。龍太と二人並んで歩いて行く路は、白い雪の中に一筋眞直に踏み固めてあつた。細い谷川は紺青の色をして寒さうに路に添つて流れてゐた。龍太の背廣姿は足駄を穿いた友達の丈よりも餘程高く見えた。龍太の歸るのを村外れまで友達は送つて行くのであつた。

龍太はこの山の中に來て始めて住んだ百姓のことなどをだを考へてゐた。路も其時分には無かつたに相違なかつた。林と草籔ばかりであつたに相違なかつた。その村の木を伐倒し、草籔を刈り荒地を耕し、そして段々村らしい村にして行つた人達のことがかれの胸に往來した。隙間の多い板張りの小屋や、傍に

立てかけてある鋤犁や、土を運ぶための畚や、ぶす〳〵燻りながら終日燃えてゐる燒火や、さういふものもかれの眼の前に浮んで見えた。事業を始めた人々の生活がまたしてもかれの無意味な頽廢した生活に引較べて考へられた。『いつそ百姓にならう。北海道の曠野の中にこの身を埋めて了はう。さうすれば、何の事もないのだ。其處にはもう女の幽靈もやつて來ない。世の中から來る針でさゝれるやうな刺戟もやつて來ない。皮肉なあのキヨロ〳〵した氣味のわるい眼を氣にしないでも好い。頭の上には唯青い空があるばかりだ。キラ〳〵した星の影があるばかりだ』一月ほど前かれはこんなことを考へた。それがまたかれの頭に力強く蘇つて來た。

『一町、五百圓位――さうですかな。東京近在から比べれば安いもんですな』

かれはこんなことを言つて歩いてゐた。まだ耕されない草籔や森や荒地が到る處にあつた。ある山懷のやうなところには、芦だの蒲だのの雪に埋み殘されてある向ふに小さい家が一軒しよんぼりとして立つてゐた。『此處のところは不思議なところでしてね。昔から湯が沸くッて言はれたところですがね。冬でも雪の積り方が少いんですから、そんな氣味が何處かにあるか知れませんよ。あの家は、村の者か溫泉を始めるなんて言つて建てこんですか、矢張思ふやうに行きませんでね。……資本が少いものですからな』友達はかう龍太に言つて聞かせた。

やがて路の傍にあるその明家の中に入つて行く龍太の姿が見えた。龍太の眼には、やがて鐵色をした水の一杯に湛えられた汚ない大きな浴槽が映つた。一度浴客が衣をぬいて入つたらしい棚の跡なども其

處此處に殘つてゐた。
龍太はやがて其處から出て來た。
『汚くなつてゐるでせう』
『え、隨分ひどくなつてゐる……。しかし、折角思ひ立つたんだから、もうすこしやつて見れば好いのに……それにしても、分析はして見たんですか』
『縣廳の技師が何か賴んで來て、何かゴトゴトやつてゐましたけども……碌なことは何うせ出來やしないんですから』
『見込があるなら惜しいもんだ――』
『なアに、あなた……』
二人は默つて步いた。朝日は美しく谷合にさし込んで來てゐた。振返ると、あの果物栽培をやつてゐる男の小屋はまともにその日影を受けてキラキラと雪に閃いて見えてゐた。
『もう澤山です。あまり遠くなると、歸るのが大變だから』
から言つて、龍太は友達の遠く送つて來るのを辭した。
『なアに、まだ、此處はわし共の村の中ですから……いゝえ、何アに、歸るッてわけはありやしません。まア、もう少し行きませう。いつまたお目にかゝれるか知れやしないんですから』
二人はまた步き出した。

それは丘の陰になつてゐるやうなところであつた。路は川に添つて眞直に向ふについてゐた。簑を着て、カンジキを穿いた男が、すれ違ひさまに丁寧にお辭儀をして行つた。笠のやうな形をした大きな松の枝からは雪か朝日に溶けてばらばらと雫になつて落ちてゐた。

やがて谷は盡きて野は二人の前に展けた。水車の氷つて動かなくなつたのなどが其處にあつた。

二人の立留つたところには橋がかゝつてゐた。

『ぢや、東京に來たら、是非寄つて呉れたまへ。何うも遠いところを難有う』

『ぢやお別れしますかな……折角、お出下すつても、何の御構ひするようなものがなくつて……え、さうです。こゝから向ふは外の村になつてゐるんです。ぢや、大事に行つていらつしやい』

橋を渡つて行く龍太の後姿はさびしさうに此方から見えた。路は低い丘の上から、百姓家の垣に添つたところを向ふの方へと出て行つてゐた。低い丘に凭つた人家かまともに朝日を照されて、點々として黑く雪の中に見えてゐた。龍太は一度二度、三度まで振返つて見た。送つて來た友達も長い間その橋のの袂ところに立つて此方を見てゐた。最後には手を振つたのを龍太は見た。

『空虚は依然として空虚だ。何うにもならない。破産した自己の思想に、一點の光明を放つて呉れるやうなものは矢張無かつた。自分は何處までも自分で行かなければならない。自分のことをするものは、自分より他に何もない……。自分は長い間、友達を信じた。自己の周圍を信じた。世の中を信じた。然

し、友達は自分に何をして呉れたらう。自己の周圍や世の中は果して自己の爲めに何をして呉れたらう。……四十以上になつて、かうした思想の空虛に出會さうとは誰が思つてるだらう。……しかし、そんなことを思つたつて仕方がない。空虛なものは充實させなければならない。自分て、自分て、自分の力て……。』

こんなことを考へながら、龍太は歩いた。『自分て、自分の力て……』かう再び叫んだかれは、自己を振返つて考へて見ない譯には行かなかつた。空虛と戰ふことの辛さが犇とかれの身を襲つて來た。自己の力も自己の體格もそれに打克つことが出來ないといふことを考へてかれは黯然とした。雪に反射した光線はキラキラとかれの頭を眩惑させた。

ふと見ると、そこに井戸があつた。かれは小さな包を雪の上に置いて、井戸に伏せてある釣瓶を取つてそして水を汲んだ。かれは口を釣瓶に當てゝ、ガブガブと水を飲んだ。さも〳〵渇いた心を潤すものゝやうに――。

井戸側に積つた雪はバサと音を立てて水の中に落ちた。

停車場の前のある茶屋では、白粉を顏に塗つた筒袖を着た汚ない酌婦が厭に人の顏を覗き込むやうにして酒を勸めた。膳や德利などの一杯に並んでゐる棚、鬚の生えた狡猾さうな顏をした爺、燒こげのところ〳〵にある疊、糸屑やら埃やら鼻紙やらの雪の雨滴の上に落ちてゐる廊下――そこからかれは遁れるやうにして停車場へと行つた。

汽車は喘ぐやうに凄じい音を立て積雪の中を進んで行つた。レールの兩側には、雪かきを持つた人達が汽車の通つて行く間を傍に偏つて休んでゐた。雪は次第に深く深くなつて行つた。

谷川の細く流れてゐる傍を掠めて通つて行つたりした。大きな樹の梢近くまで雪の積つてゐるやうなところもあつた。何處を見ても唯白かつた。山の裾の深い谷に靡き落ちてゐる斜面には枯れた木の枝が針のやうにツンツン立つてゐるのが見えた。大きな山脈の背に當るやうなところを汽車は此方から向ふに越えて行つてゐた。

雪に埋れたある町は、丁度其の背中を此方に見せてゐるやうであつた。家屋と堆雪とは殆ど平行して、その上に半鐘臺だの電信柱だのが立つてゐた。大きな氷柱の並んでゐる軒なども見えた。雪を丸るく切り抜いた中には、子供の遊んでゐる緣側や、手水鉢や手拭や萬年青の鉢などが見えた。此方から向ふへとレールを越えて行く簑笠を着た旅客などもあつた。

「そこには大きな酒屋がある筈だ」

龍太はこんなことを考へて、その中にその見覺えのある家屋を見出さうとした。しかし汽車は早く通つて行つて了つた。

眼に映つて行く山だの木だの宮だのと、頭に見えてゐる若い愛嬌のある女の顏とは暫くは一緒になつて、かれの心に絡み着いてゐた。しかし、そんなことは皆な過去だ。創痍の痕さへ殘してゐない過去だ……。

かれは何んなに堪へ難い夜を送つたらう。『男の一分が立たない』から叫んで、とめる細君とつき離して、そしてその闇の中を衝いて出かけて行つたこともあつた。かれは闇の中に立つてゐるかれを再び眼の前に描き出すことが出來た。……微かな聲……明るい光……人の輕く歩いて行く足音……。門から人の入つて來る氣勢がした。かれは蝙蝠のやうにひたりと其身を暗い壁に寄せかけた。やがてマッチをする音がして、パッと暗い闇が明るくなつた。其處に蒼白い背の高い男の顏が見えた。やがて火は消えて、再びもとの闇にかへつた。

かれの身を寄せた壁は雨にぬれてゐて冷めたかつた。かれは其處で自分の半生を考へた。かれの頰は涙にぬれてゐた。『誰も自分の心は知らない』其時かう言つて、かれはその涙を右の手に拭つた。

龍太は汽車の中を見廻した。絆纏を着た男がすぐ其前にゐた。その隣には子供の乳を吞ませてゐる色の褪せた女がゐた。向ふの方にはこの近在の娘だらうと思はれるメリンスの帶をしめた女づれが二三人外を指して何か語り合つてゐた。龍太は不思議な氣がした。氣が附くとこの堆雪の中を走つてゐる汽車の中の一室の存在といふことをかれは考へてゐた。『存在といふことが不思議だ。かうして人間が存在してゐるといふことが不思議だ。自分のやうな人間とかゝいふ人間とがかうして此處にあるといふことが不思議だ』

ある停車場は、丁度越えて行く大きな山脈の背のやうなところにあつた。雪は降り出して來た。今朝日影に輝いた大きな山はすつかり灰色の空の中に埋れて、灰のやうな細かい雪片は、物を賣る男の新し

い桐油の上にチラチラと落ちた。

「また吹かなけりや好いが」

かう誰かが言つてゐた。

人足達は鍬で雪を掬つてはそれを堆雪の上へと投げてゐた。

山脈の靡いた上を汽車はやがて通つて行つた。そこでは雪は少くとも一丈以上あつた。雪かきを持つた人足達の吹雪と煤烟と堆雪の中に包まれて立つてゐるさまが微かに窓の中から見えたりした。ある處では綺麗な繪のやうな谷川に添つて汽車は凄じく駛つて行つてゐた。

もう日の暮れる頃であつた。ある停車場からある溫泉場に行く路を龍太は歩いてゐた。午前から午後にかけて降つた吹雪は一時止んて、青い空が覗くやうに灰色の雲の中から見られた。夕日の彩やかな光線が雪の上に斜に明るくさし渡つた。

それは停車場のある町から、谷川の崖に添つて上へ上へと登つて行くやうな路であつた。電柱がところ〱に立つてゐて、その向ふに路のついてゐるのが指さゝれた。

劒をガチヤ〱言はせた巡査が三人ほど龍太の前を話しながら歩いて行つた。停車場を出た時、龍太がその巡査の一人に訊いた。『溫泉まで餘程ありますか。』と、その巡査は振返つて、『私達も行くんです。何アに三四町位なもんです。私達についていらつしやい』かう言つて前に立つた。

『溫泉宿では何處が一番好いんですか』

『それも、私達の行くところが一番大きい家です。一緒にいらつしやい。』

て、龍太はその跡に跟いて行つた。巡査達は頻りに何か話してゐた。縣から巡回の警部が來たので、それを御馳走してやらうといふ計畫らしかつた。一人は部長だつた。

少し行くと、今下りた停車場はすぐ下に手に取るやうに見えた。レールが長く長くつゞいてゐた。壞れた貨車が一臺遠く離れて置いてあつて、それに夕日が當つてゐた。谷川の水の音がサアと聞えた。

高原の上のやうなところにその溫泉場はあつた。二階建の家屋が半は雪に埋れて、湯氣が家々の浴槽から白く颺つてゐた。道の眞中にある大湯からは、手拭を下げた浴客達が出た。

三十分後には、龍太は大きな二階屋の下の六疊の火燵に當つて、雪に埋れた溫泉場のさびしさを頭に浮べたりなどしてゐた。浴槽は廊下を通つて行つたところにあつた。長い間を山から引いて來た溫泉は、もう餘程溫くなつてゐた。寒いので容易に出られないで龍太がゐると、其處にさつきの巡査が入つて來て、『寒いですな』などと言つた。生れは栃木縣で三年前から本縣に來たなどと頰髯の多い中年の巡査は龍太に話した。

その巡査達は二階の大きな一間にゐて、酒を飲んで、元氣な聲で、唄などうたつてゐた。それが龍太のゐる下の座敷まで聞えて來た。それすら龍太には羨しかつた。『生効のある生活と言ふのは、何ういふ生活だらう。努力の生活だらうか。歡樂の生活だらうか。……それは何方にしても、兎に角、心を打開い

て、束縛を脱して、安んじてこの世に生きて行く生活であらねばならない』こんなことを龍太は考へてゐた。龍太の頭には都會生活の痛い刺戟、無意味な不[illegible]な交際、人にさへ逢へばジロ〳〵顔を見られるやうな突詰めた生活があり〳〵と見えて來た。あさましいやうな恐しいやうな寒しいやうな生活、その生活の中に入つて行かなければ――その中に入つて神經を過敏にしたり、慾情を盛にしたり、人と爭つたり、酒を飮んだり、女を戯れたりしなければ生活して行かられないやうな生活をかれは思はずに居られなかつた。

中年の女がやがて龍太の前に夕飯の膳を運んで來た。それはいやににや〳〵した赤い色の袖をヒラシヤラさせてゐるやうな女であつた。寒さを凌ぐために一本つけさせた酒を何うしても自分で酌をしなければすまさせないといふやうな調子で、いきなり龍太の當つてゐる火燵の向ふ側に、『御免なんし』と言つて上にかけてある蒲團をまくつた。

龍太はその女のするさまをじつと見てゐるやうな人であつた。さういふ女の生活を飽きるほど見て來たかれには、容易にかうした調子になつて行つた女の半生を知ることが出來た。卑しい笑ひ、厭はしい表情、人を人とも思はない素振――さういふものにもかれはもう飽きた。かれは唯見詰めてゐた。

女は一人で饒舌つた。

聞きもしないことが段々その唇に上つて行つた。『私にも一杯頂戴ね、好う御座んすね』かう言つて自分で酌をして飮んだりした。『それはこれでも苦勞してるだよ。こんな雪の山の中に來てるのも男の爲め

だよ」などな言つて卑しい笑ひ方をした。

「いくつになるね」

笑ひもせずに、かうまともに龍太に訊かれて、「いやだよ、旦那は――これでも旦那よりは若いつもりだよ」

「それや僕よりも若いだらう」

龍太は笑はずには居られなかつた。

「旦那は丁度位だらう。私はこれでもまだ丁度になるには一二年間があるんだよ」

かう言つて女は快活に笑つた。

女の話す言葉の中から、龍太は女の生涯を略知ることが出來た。生れは新潟だと言つた。つい昨年までは直江津にゐたと言つた。其處で女はつまらぬ若い男に關係して、やがて愛憎をつかして、出刄庖丁て追ひ廻されるやうな目に逢つて、そして此處に暫し身を躲してゐるのであつた。「これさへやらないと好んだけども」と親指を出して賭博を打つ眞似をして、「これをやつちや、末の見込が立たないからね」

女は命じもしないのに、酒の代りを持つて來たりした。注文もしないものを、「好いてせう」と言つて無理に持つて來てお膳の上に並べたりした。龍太よりも先に先づ女は醉つた。靜かに考へやうと思つてやつて來た龍太は此處にも恐ろしい罪惡の生活の橫つてゐるのを見た。龍太はこの女とこの夜を過さなければならない不愉快を想像して、やがてかうしては居られないやうな氣がして來た。

龍太は旅行案内をひろげて見た。最後の下りが十一時に此處を通つて行くことになつてゐた。かれは危難から救はれたやうな氣がした。晝間通つた路だ。停車場まではわけはない……かう思つて、時間が來たら立つて行くことに腹をきめて、そして獨り女の饒舌るのに任せてゐた。

一時間ほど前に、かれは立つ支度をした。女は吃驚したやうな顔をしてかれを見た。あてにした金を取ることの出來なくなつたといふことが一番女を失望させたらしく見えた。「い丶ぢやありませんか、もう遲いから」かう言つて女は執念く引留めた。

晝間通つた路はすつかり氷つてゐた。電燈の柱がところ〴〵に立つてゐるので、路には迷はずに下に下りて行くことが出來たが、靴を穿いてゐるので、滑つて幾度深い雪の中に身を埋めたか知れなかつた。闇の中には谷川が音高く流れてゐた。

停車場にはランタンが微暗くついてゐた。東京の方へ出す用事の端書を書いて持つてゐたので、かれは停車場に入る前に、入口にある小さな郵便函を手さぐりにさぐつて、それを入れて、そして停車場の中へ入つて來た。見ると、其處に僅かな火を前にして、二人の青年が腰をかけてゐた。一人は茶を賣る仲買て、一人は郵便配達夫てあつた。

「氣の毒てすけど、今、あそこに入れて來たんてすが、出して來て呉れませんか」龍太がかう賴むと、配達夫は立つて行つて、もう一度鍵を明けてその端書を大きな鞄に入れて呉れた。

「寒い、寒い」

かう言ながら外から突然此方へ入つて來るものがあつた。それは矢張仲賣の一人で二十になつたかならないか位の少年であつた。いきなり茶を賣る男の前に腰をかけて、微かになつた火に手をかざしながら、『寒い、寒い。最終は一番辛い』

『また、寢ばなを起されたんだらう』

郵便配達夫は笑ひながら言つた。

『とても堪らない。こんなところにつとめてゐちやうだつが上らねえ。もう逃げることにきめた――』

少年は大きなあくびをしながら、『おゝ寒い。べらぼうに寒い。雪が一丈二尺もあるんだから、無理はねえやなア。……本當にもうつとまらねえ。一文だッて殘るぢやなし、折角好い心地に寢てゐれば起されるし、辛けりや辛いで旨いことでもあるなら好いけど……全く冬はかなはない』

『全くだよなア』

茶を賣る青年が傍から調子を合せた。

『己だッて立身しなけりやならねえからな。親もあるんだからな。もう逃げるにきめた。二三日經つたら逃げるんだ……。こんな寒いところに物好にゐないたッていくらも好いところがあらア』

また大きなあくびをした。ありもしない火を足で掻廻しながら、『汽車の奴ア、しみつたれだなア。火がもうありやしねえ』龍太が茶を買つて熱いのを吹き〳〵飮んでゐるのを見て、『お茶屋はそれても好いなア、一杯位ごまかしたッて、主人にはわかりやしねえんだから……そこへ行くと、己達の主人は—

緩だ。一々數へて見るからなア」

郵便脚夫は默つて足をコツコツさせて、時間の來るのを待つてゐた。

汽車は赤い焔を堆雪の中に漲らしてやがて遣つて來た。閑と滑る氷道と雪と微暗いランタンとがさびしい旅客の前にあつた。龍太は刺すやうな寒氣に身を震はせながら、列車の中に入ると共まゝ、堅い窓に體を寄せかけて眠つた。

三

箒のやうな髮をして、汚れた青縞の筒袖を着て、草鞋をはいた媼達がドヤドヤと三等室に入り込んで來た。魚を入れて來た丸い籠を五枚も六枚も重ねて持つてゐるものもあれば、天秤棒を突立てゝそれに凭りかゝるやうにして立つてゐるものもあつた。ある媼の持つた財布には錢が重さうにヂャラヂャラと音を、立てゝゐた。

腥い磯の臭は、俄かに室内に漲り渡つた。『えらい漁だ。三十年以來ないッていふ話だぜ。鰮の集つてるのはそりや凄いもんぢやてな。漁師がその上に乗つかつても落ちるやうなことはねえさうだ。こゝにゐる上さん達は、皆な濱ぢや安いから汽車に乘つて昨夜此處まで持つて來たんだ。いゝ捗きだぜ』傍にゐる男がこんなことを言ふと、『なアに、矢張駄目だよ。汽車賃が出る位のもんだよ』などと媼達の一人は言つて笑つた。

「己が濟よりか、新濟の方がしつかり捕れるぞえ。それはえらい案だ」

などと一人は言つた。

夜はもう明離れてゐた。太い鐵色した腕、肥つた脂切つた顏、荒い唇、動物に近い單純な眼などが其處にも此處にもあつた。龍太はさうした女の生活を頭に浮べて考へずには居られなかつた。かれは心の躍るのを覺えた。『かうした生活から比べたなら、自分等の生活は何んなにだらけた、爛れた、みだらな生活であつたらう。かれ等の生活は體のすべてに力といふ力が充ちわたつてゐるやうな生活ではないか。……しかし、自分には出來ない。原始に近い、本能ばかりで生きてゐるやうな生活はもう自分等は出來なくなつてゐる。種々な罪惡や、習慣や、惡德や、陋劣な卑怯な考や、さういふものがしつかりと自分等の生活には固く固く絡み着いてゐる。虛飾の殼たの虛僞の殼だの社會の殼だの、いやそれ等何よりも恐ろしい婬蕩の殼が自分等の體に常に無限の浪費を要求してゐるではないか。自分等はその爲めに勞れた。その爲めに魂を削られた。その爲めに肉體をそがれた――』龍太は猶續けた。『肉で肉を削ぐのも平氣な生活だ。魂て魂を亡すのも何とも思はないやうな生活だ。快樂を追求するに滿足せずに、我々は快樂を玩弄した。我々は本能の命ずるものを幼稚として、本能を玩弄することを却つて貴い意義のある生活とした。神經のコナ〳〵に粉碎されるのを見て我々は喜んだ。無邪氣と誠實とを見て我々は笑つた。我々は人間の持つた渾べての惡德を實行することを得意とした。我々の生活には惡づれと、皮肉と、玩弄と、掠奪とがあるばかりだ。涙は笑ふべきものとして却けられ、同情は憐むべきものとして葬り去

られた――我々の生活の一つを聞いても、かれ等はその恐ろしさに戰慄するであらう。かれ等は眼を見張つてさういふ生活があるかと驚くであらう。』

それからそれへと龍太の考は續いた。龍太は涙の頬を傳つて落ちるのを知らなかつた。

海近い停車場には、さういふ人達が澤山に見受けられた。籠を五つも六つも重ねて、赤い脛を出して、プラットフォムを彼方から此方へと駈けて歩いてゐるものなどもあつた。靑い色をした魚の籠は窓の外を行つたり來たりした。『何うだ、ア?』などいふ聲が窓から聞えた。

停車場を幾つか通り越した。その大漁のあつたといふ村をも通つて行つた。不思議にも其處は靜かであつた。赤い模様のついたドテラを着て、漁師が二三人ブラ〳〵歩いてゐるのを見るばかりであつた。藁葺に板葺の交つたヂックサックした漁村の向ふには灰色の海が遠く展けて見えた。

波除の長い板塀を波は凄しい勢をして越して來た。窓は明けられなかつた。暗澹とした海――暗い灰色な波頭ばかりを微白く見せた海は大きなロールをころがしたやうに絶えず岸に押寄せて行つた。大きな鷲の翼のやうな暗い雲は海の半面を凄じく蔽つてゐた。やがて吹雪はしぶいて來た。凄じい煤烟と、海と、吹雪と、暗い地獄のやうな隧道とが續いた。

時の間に海は雲に包まれて了つた。隧道を出た時には、吹雪と煤烟との渦を卷いた中に微かに暗い波の轉つてゐるのを見るばかりであつた。凄じい音を立てゝ汽車はまた長い隧道に入つた。

龍太は妻や子供のことを考へてゐた。何うした聯想がさういふところにかれをつれて行つたか、それは龍太かれ自身にもわからなかつた。立つて來る夜、『父さん、何處かへ行くの？』から言つて眼を丸くして父親の方を見た男の兒をかれは思ひ出してゐた。『歸つて行つたつて、矢張同じ生活だ。同じ女と、同じ人間と、同じ社會とが自分の周圍にあるばかりだ――』

暗澹とした海がまた見え出した。

『靜かに考へやう』

から思つて出て來た願をかれは漸く滿足させることが出來るやうに思つた。それほどその室は靜かであつた。入口の帳場から此處まで來るには、長い廊下を通らなければならなかつた。若い娘々した、友禪の赤い帶をしめた女中が初めに其處にかれを案内した時、龍太は訊いた。『隣の間にお客がゐるんですか？』

『いゝえ』

その女中は笑ひながら答へた。

折角、海が近いのに、雨戸を閉めて置くのもつまらない。『明けられないのですか？』から龍太が女中に訊くと、『でも、風がヒドウ御座いますから』から言つて躊躇してゐたか、それでも立つて行つて三枚ほど前の雨戸を明けて吳れた。しかし矢張それは徒勞であつた。海と室との間には、高い風除の芦の垣

が出來てゐた。微かに海の微光を見ることが出來るばかりであつた。風を帶びた吹雪は時の間にその明けた緣側を濡らした。

一枚毎に雨戶についてゐる明り取りの硝子から明るい光線が室の内に微かにさし込んで來てゐた。始めは暗く陰氣だと思つた光線にも龍太はやがて馴れて行つた。家の周圍から襲つて來る海の音と松の音とはかれの心を底深く落附かせるに十分であつた。かれは女中が火を入れて呉れた火燵に身を寄懸けて、つめたい櫓の火燵板に長い間熱したかれの頰を當てゝゐた。

漸くなつてかれは風呂場に案内されて行つた。風呂には綺麗な湯が漲るやうに沸いてゐて、赤く熱した鐵砲は、入ると、ジ、ジと音を立てた。中にはコオクスが赤く赤く見えてゐた。

『何年振りの靜けさだらう。かうした靜かな心持を自分は何時經驗したらう』

こんなことを考へながらかれは長い間湯に浸つてゐた。海の鳴る音が微かに何處かで聞えてゐたかと思ふと、遠くの室で鳴る呼鈴の音に返事をして、長い廊下をバタバタ輕く女中の驅けて行く足音が靜かに聞えた。ふと三味線の音がした。

さつき見た色彩を龍太は思起さない譯に行なかつた。この旅館に入つて來た時、第一にかれの眼に着いたのは、長い袖をひるがへした二三人の雛妓が廊下のところに固つて立つて何かコソコソ話をしてゐる光景であつた。『あれだな！』龍太はこんなことを考へながら、波の音と松の音とに雜つて靜かな冴えた三味線の音を聞いた。

『靜かに考へやう』から思つてかれは女中のさつき敷いて行つて呉れた溫かい蒲團の中に身を入れた。何處の室にも、その近くには客のゐるやうな氣勢もなかつた。枕元には古風な行燈がついてゐた。ふと見ると、其處に何か書いてあつた。――去りし女房の形見とて行燈に殘せし針のあと――そこにはその昔の小唄が書いてあつた。

『靜かに考へやう』

しかし龍太は靜かに考へることが出來たであらうか。かれは思ひもかけない惡魔が忽ちかれを襲つて來るのを見た。それは Huysmans の所謂 Elorence であつた。耳を嚙むことに興味を持つた、艶やかな巧みな表情と笑とを持つた女であつた。

恐ろしい Elesh だ。忽ちかれはその方へ體も魂も奪はれて行つた。其處に龍太は居た。明るい灯の中に靜かな音樂の中にかれはかれの爛れた姿を發見した。悶えた神經と勞れた魂との中に……。

何遍かれは其處から引返すことに力を費したらう。何遍かれは意氣地のない自己と腹立しい自己の姿とを罵つたであらう。かれは百日の忍耐を一刹那の中に破壞して去つた。離れた心を忽ち元の罭の中に押込めて行つた。――かれは煩悶した。かれは夕方になると、いつもじつとしてさびしい書齋の中に落附いてゐられないかれを見た。細君は悲しさうな、しかし笑ふやうな調子で、『貴方は何うしても家には落附いてゐられないんですね』と言つた。龍太は闇の中にその姿を沒して行くかれを見た。時にはかれは勞働(ウォーク)に逃げやうと苦心した。『さうですとも……若い靑年時代に運動の必要なのはその爲めですとも、

肉體とを勞らせて了はなければ――ヘト〳〵になるほどに肉體を勞らせて了はなければ、性慾に打克つことが出來ないものです』からかれはある若い青年に向つて言つたことを思ひ出した。かれは机にのみ頭を向けた、『勞働（ウオーク）――勞働（ウオーク）――』かれはから喘ぐやうに叫んだ。しかしその叫びのいかに弱く力の乏しかつたことよ。勞働は忽ちかれに叛いて向ふに行つて了ふのに躊躇しなかつた。

感覺は忽ちかれを輕い肉の痛みに伴れて行つた。女は男の耳を柔かに嚙んだ。柔かな輕い肉の痛！それは今でもかれの感覺の上に生々（いき〳〵）として殘つてゐた。かれの體も魂も忽ちそつちへと偏つて行つた。

夜毎にかれは明るい町を歩いた。サッポロビールの廣告塔は赤くなつたり青くなつたりしてかれの眼の前を通つて行つた。電車が行つたり來たりしてゐる。群集が波を打つやうにひろい明るい街を通つて行つてゐる。其處にも此處にも料理屋の灯がかゞやいてゐる。快樂を誘ふ空氣は濃く厚くかれの周圍を取巻いてゐる。かれはカフエのドアを排して、其中に入つて行つて、長い間その片隅に座つてゐるかれを發見した。酒も女給仕がさつきついて行つたまゝになつて置いてある。シガーも半分吸つたまゝになつてゐる。かれはをり〳〵長い苦しさうな溜息を吐いてゐる。幾組の人の群は出たり入つたりしてゐる。中には女を伴れた男などもゐる。棚の上に並べてあるいろ〳〵な色をした酒が電燈に照されてキラキラしてゐる。

龍太は長い間飲まずに放つて置いた酒に初めて脣を當てたかれを見た。と、其處にも此處にも女の顔は見え出して來た。灯の中にも、酒の中にも、かれの持つて來て讀んでゐる雜誌の字の行間の中にも：

…。龍太は財布を出して、急いで金を拂ふかれを見た。かれは町の通りの方へと出て行つた。
氣が附くと、かれは女の方へ靡いて偏つて行く男の心を深く深く考へてゐた。波の音が屋ヶ撼すやうに聞えてゐた。行燈の光がチラチラと動いた。
龍太は思ひめぐらした。『何故惡い。何故それがわるい』から心の中に叫んで、そしてかれは長大息を吐いた。かれの半生に絡み着いたさまざまの女の姿をかれは頭に浮べて見た。唯同じ家にゐる運命を持つた爲めばかりに、――絶えず顏を合せてゐる成行になつた爲めばかりに、五人の子供がやがてその間に生れて來たやうなかれの妻のことなども考へて見た。
妻はある時言つた。『私は何ういふものか、昔からさうでした。いつでも傍に放つて置かれるやうな具合になつて了ふんです。私は覺えてゐますがね。それは丁度六歳位の時でしたね。私が兄と仲好く遊んでゐると、キッと近所の可愛い女の兒か何か來て、兄と仲好になつて、私はいつもそつちへ行けッて言ふやうな素振をされて了ふんです。私と何うしても遊んで吳れないんですね。その時ほど悲しいと思つた時はなかつたんです。兄さんが遊んで吳れない。から云つていつも母のところに泣いて行つたんです。今日本橋にゐる人ね。あの人なども兄と仲好で、私はいつもそつちのけにされて了つて、よく泣いたもんですよ。……考へると、何うしても、私はさういふ不運なのかも知れませんよ。傍に放つて置かれる……さういふ星なのかも知れませんよ。私の母が矢張さうですから。それに、さういふ運と云つたやうなものは一生ついて行くもんでせうね。年が老つてからも、子供に傍に放つて置かれるやうになるもん

てせうね。しかし、さうした星なら、仕方がありませんね』

かう言つた妻の言葉が龍太の胸に力强く蘇つて來たりした。かれの通つて行く大きな道の傍にゐて、そして何處までもかれについて行くやうな女の生活をもかれに考へずには居られなかつた。

かれは到る處にかれの妻と子供とを置いて想像した。丘の上の果樹栽培者にも、草分の事業をした百姓にも矢張さうした妻と子とがついて行つてゐた。龍太は過ぎて來た生活を考へて黯然とした。

……急に明るい女の顏がかれの渾べてを占領した。『自己に力、もし力が殘つてゐるとすれば、その力を與へて呉れるものはその女の明るい顏ではないか。生命の本當の流は其處にあるのではないか。生命の本當の流れをつかむことが出來ないで、それで苦しんでゐるのではないか』龍太はかう踏へて考へた。Giocondaのことなどがかれの頭に烈しい力で上つて來た。

傍を見ると、茶代の禮にさつき女中の置いて行つた此處の旅館の風景を撮した繪葉書が二三枚そこらに散ばつてゐた。かれは蒲團の中から手を延して、それを一枚取つて、色鉛筆を包の中からさがして、女にやる文句をそれに書いた。

宛名を書いて、明日は朝早く女中に入れさせやうと思つた、かれはそれを行燈の傍に置いた。

あくる朝、其の繪葉書をかれは細かく破つて棄てた。勘定をして立たうとする時にもまだその細かい破片はあちこちに散ばつて白く見えてゐた。

龍太は矢張、生命の本當の流を何處に求めて好いか分らないやうな人であつた。海には日が當つてゐた。

北に進むにつれて、雪は愈々深くなつて行つた。何處まで行つても、人は樂しさうな顔をして笑つて暮してゐた。豚小屋のやうな汚ない長屋にも、つきばきの襁褓が吊してあつた。大きな停車場からは、軌道の狹い短かい鐵道が山奧の方へ向つてわかれて行つてゐた。掘立小屋のやうな小さな停車場は半ば雪に埋れて、掘つた穴のやうな中から人は出て來た。かうした山奧にも町があり村があり人が住んでゐるかと思はれるやうなところもあつた。

龍太は所在の分らない寶をさがすやうな旅客であつた。ある夜は疲れて靜かに眠つた。ある夜は眼を闇の中にあけて終夜床の上に輾轉反側した。ある田舍の町では、吹雪に降こめられて、三日三夜を其處に送らなければならなかつた。その室は二階になつてゐて、其處から中庭にある八ツ手の青い葉に雪の積るのが覗かれた。『今日もフキ』こんなことを言つて女中は寒さうにバタドタと前の廊下を通つて行つた。

其處には政治運動にわざ〳〵遠くからやつて來たといふやうな人も泊つてゐた。この雪の中でと思ふやうな堆雪の中で、今夜は演說會があるなどと言つて、カッパを着て、そして出かけて行く青年などもあつた。かれの向ふの室には、毎晩遲くまで明りがついて、樂しさうに酒を飮んでゐる人達が泊つてゐ

た。

二階から下りて行くと、天井の高い古い座敷に大きな圍爐裏を圍んで、その旅籠屋の家族の人達が住んでゐた。厚い帳面を前にして、眼鏡をかけて、その家の老いた主婦は長い間其處に座つて何か物勘定をしてゐたりした。神棚には大きな眼の白い達磨が置いてあつた。夜は燈明の灯に花が咲いた。夕方には、

『一晩御厄介になりやすかな』

蓑も笠も一杯に雪に白くなつた旅客がかう言つて入つて來たりした。と、主婦は飛んで出て、『まアまア大變で御座んしたらう、このフキては――』などゝ言つて、旅客の體の雪を丁寧に拂つてやつて、湯氣の立つ湯を盥に取つてその前に据ゑた。圍爐裏の傍で一あたりあたつてから旅客は二階の室の方へと案內されて行つた。

長い庇の中に道がついてゐて、其中を人達はぞろ〳〵と通つて行つた。荒物屋、呉服屋、乾物屋、旅籠屋と軒は段々につゞいて行つた。何處の家の中も皆な一目に見えた。赤いメリンスの片や、莫大小のシヤツや、青物の綠や、乾鮭や――さういふものが人の通る店先に一杯に並んでゐた。目のさめるやうな赤い蟹の足などもあつた。龍太の姿はこの庇の中の通りにも見えた。

町の盡きたところに大きな川が流れてゐた。それは重り合つた雪の白い山の中から流れ落ちて來て、これから平野に出やうとするやうな川であつた。長い長い橋が此方から向ふに渡されてあつた。龍太は其處にも長い間立つてゐた。雪をわたつて來た寒い朝の風は、剃刀のやうにかれの顏を吹いて通つた。

橋の下では、繋いで置いた舟を流されまいとして、船頭が三人も四人も寄つてたかつて綱を杙に結ひたりしてゐた。龍太の前には雪の白い大きな山脈が續いた。

「この力――この力があるではないか。まだ、此の體と魂との中には、これほどに物を痛感する力がこもつてゐるではないか。お前は何故それを用ゐやうとしないか。そこからお前の行くべき路が開けて行くではないか。……お前の前に横つてゐる年月の爲めに、お前は殘つた力を十分に働らかせなければならない義務を負つてゐるではないか」

龍太の内の聲はかれに向つてかう叫んだ。橋の下には錆色をした水は漲り渡つて流れてゐた。猶ほ身動きもせずに立盡してゐた龍太の頰からはやがて冷たい涙が落ちた。向ふからは早立の旅客の橇が勇ましく橋を渡つて來た。

四

高い石階の上をかれは登つて行つた。雪片は巴渦のやうに下から上へと捲きあげられた。かれは蝙蝠傘を疊んで、吹雪の吹くのに任せて、そしてお宮のある高いところへと上つて行つた。

そこには眺望臺があつた。それは一目に北海の見渡されるといふ名高い眺望臺であつた。かれは勇氣を鼓して半鐘臺のやうな階梯に手をかけた。氷つた階梯はツルツルと滑つた。それでもかれは登つた。蝙蝠傘が邪魔になるので、中途でかれはそれを下に投げ棄てた。かれは上へ上へと登つて行つた。中ほ

どにある眺望臺でもかれは猶足をとゞめなかつた。風雪は凄しくかれの體を天上に捲き上るやうに思はれた。一歩一歩かれは登つて行つた。頂上は四疊半位の狹い狹いところであつた。龍太は欄干に凭つて、そして遠く眸を放つた。風雪に包まれた北海は暗澹としてかれの前に展げられてあつた。此處から右に見えるといふ名高い遠い大きい島も見えなかつた。

龍太はそこで始めて都にかへる心を起した。

五

歸つて來た都はやつぱり依然としたもとの都であつた。寒い風は吹き、煤烟は靡き、電車の線は遠くうめくやうに鳴つた。妻の顏も矢張蒼白くさびしさうに見えた。『母さん行つて來ますよ』かう言つてそして娘は學校に出かけた。

今年六つと五つになる二人の女の兒は、『はアい、行つてゐらつしやい』『左樣なら』などと言つて終日無邪氣におばさこつこをして遊んでゐた。

雜誌記者は相變らず原稿の心配をして、誰の原稿は毎月遲くなつて困るなどゝ言つてゐるし、批評家は、『今月の文壇のさびしさ加減はないね。何うだあの作の描いてことは』などゝ言つてゐるし、町の通のカフエには、例の定連が集つて、椅子を一隅に集めて、何かがや〳〵と嵐のやうな議論をやつてゐるし、何處に行つても、渇したかれの心に新しい泉を湧かして呉れやうなものは見當らなかつた。かれは外國

の本を賣る大きな赤煉瓦の二階へもわざ〳〵出かけて行つて見た。しかしそこにもダンヌンチオがゐたり、イブゼンがゐたり、ストリンドベルヒがゐたりするばかりで、かれの好奇心をさそふやうなものは一冊もなかつた。それらの本に書いてある烈しい積極的な樂天說や、暗い佗しい灰色のやうな運命說や、皮肉な冷やかな人生觀や——さういふものも始めの中こそかれの孤獨の伴侶ともなり、かれの思想の糧ともなつたが、今ではそれはもう何等の反響をもかれの胸に傳へなかつた。かれの求めるものは、もつと實際的のものでなくてはならなかつた。紙に書いた空しい言語では滿足が出來なかつた。

かれは十年前のかれを想像した。その頃にはこの二階も、かう大きな、ガランとしたものではなかつた。かれは其時分には渴した人のやうな熱い希望を抱いて、そしていつも其二階へと上つて行つた。通に面したドアを明けると、いろ〳〵な西洋雜貨の並んでゐる店があつて、靴ぬぎのところに草履が二三足並べて置いてあつた。薄暗い光線の中で、本と本との間に人知れず挾れてゐる新しい本をさがし出した時のかれの喜悅は果して何んなであつたらうか。かれは戀人に向ふやうにして新しい紙の匂ひのする本に向ふのが例であつた。かねて注文して置いたフランスの短篇作者の全集が來た時などは殊にかれには忘れられない深い喜悅の鮮かな印象を與へた。その日は雨が降つた。かれの每日勤めてゐる二階の電話に、その店からその電話のかゝつて來た時にはかれはじつとしてはをられなかつた。かれは無理に原稿の金の前借をして、そして雨を衝いてすぐその二階へと出かけて行つた。その熱した心の要求！　それは今は何處に行つたらう。かれは棚の上にある本を出して見ては、すぐそれを元のところに入れた。かれは

不幸福な生涯を送つたある詩人の詩集一卷と舊敎の敎義を書いたやうな本とを買つて、さびしさうな顔をして其處から出て來た。

ある友達は地理と傳說とを一緒にしたやうな話をした。

『それは君、面白いよ。多摩川の水を荒川に落すやうな大工事を昔の人はしてゐるんだからね。さうだね、武藏野の開墾といふことは德川時代に始まつたんだが、その時分のことを考へると中々面白いよ。板橋から川越の方へ出て行く街道があるだらう。あそこに野火止といふ村があるがね。あれが中々面白いところだよ。最初、村を拵へた人が面白い人だつたと見えて、あそこの通からは、何處まで行つても武甲山が眞直に見えるやうに村をつくつてゐるから面白いね。それからその多摩川から引いた疏水も、その出來た時のことがちやんと武藏風土記に書いてあるが、出來上つて三年經つても水が來ない。來ない譯がないがとお役人達が不思議にしてゐると、其工事をやつた大百姓の一人が、何アに、大丈夫です、きつと來ますと言つて信じて疑はなかつた。段々聞いて見ると、溝を掘つてから、第一埃が以前ほどでなくなつた。それに野菜が近年になくよく出來た。溝には來ないが水は確かに來てるんだ。今に御待ちなさいと言つてゐる中に、三年經つて始めて水が來た。かういふことが書いてある。その疏水が今でも久米の方から來て、彼方此方を灌漑して、水車を動したり、食物を洗ふ水となつたりして、そして志水といふ村を通つて、川越の北から出る川の上を鐵管で越して、荒川に落ちてゐるから面白いぢやないか』

かう言つて、其の友達はその他いろいろ研究した町やら村からの興味のある話をして聞かせた。山の中に圍まれた煙草の出來る町の話をしたり、縣境にある丘の上に開けた町の話をしたりした。「何でも外國の知識ばかり豪いやうに言つてゐるが、日本人も隨分面白い意味のあることをしてゐるんだよ」などと言つた。

その友達は若い時には、直覺といふことを重じて、幾に天啓のあるといふことなどを常に口癖のやうに言つてゐた秀麗な青年であつた。星のやうにかゞやいた小さな一冊の詩集を抱いて、教會の會堂に胸のもだえの救ひを祈つたやうな人でもあつた。

「さうだね、昔から比べると、路が狹くなつたやうな氣がするにはするね。しかし、あうかなり深くは掘つたやうな氣がするね」

などとも言つた。

その友達に龍太は言つた。

「何うも落附かなくつて困る……君にはそんなことはないかえ？」

友達は笑つて何も言はなかつた。「酒を飮むかえ矢張」などと言つた。

この友達は龍太の家にやつて來て、子供を大勢並べて、「皆な大きくなつたな。これがあの子か、大きくなつたな……まだ此間までこんなだつたつけ」などと言つて笑つた。

ある友達は、

「君、相變らず飲むかね」

「此頃は駄目になつたね」

「そんなことはないだらう。この間、彼方に行つてゐたら、宜しく言つてゐたよ。ちつとも來ないつて言つてた。本當に行かないのかえ？　ちつと出かけて行かうぢやないか。」

龍太は默つてゐた。いろいろのことがかれの頭を往來した。

ある若い友達は言つた。「さうかも知れませんね。人間には轉換期といふことが何うしてもあるやうだ。私達には、さういふことはまだよく解りませんけれど、貴方にしても、足立君にしても、それから島田君にしても、さういふ感じが今丁度來てるツつて言ふところなんですね。所謂危機ですね」

龍太は友達の群だの、親類の人達だの、周圍の社會だのを見廻すやうな人であつた。をり／＼新聞に出る名士や大官の死に對しても、じつとしてはゐられないやうな心持がした。かれの抱いた箇人主義は、今や愈々社會や周圍を切落して、獨り生きて獨り死なねばならないやうなさびしい冷たい個人主義に立つてゐるのをかれは發見せずにはゐられなかつた。

六つと五つになる二人の女の兒は、終日、無邪氣なことを言つて、おとなしく仲好く奥の一間て遊んでゐた。

龍太がほつねんとして、書齋の籐椅子に横つてゐると、おばさごつこをしたり大人の眞似をしたりす

るの聲がよく此方まで聞えて來た。
『よく入らしやいました』
『何うぞ御上り下さい』
など言つてゐるかと思ふと、本を讀む眞似をする聲があとから聞えた。『千代さん、あなた隱れてゐらつしやるんですもの――』から小さい方の女の兒は讀んだ。
『整ちやん』
『千代ちやん』
から互に呼ぶ聲も常に聞えた。
大きい方の兒がリボンの片を何處かからさがして來て、妹の方の兒の髮を結ひてやつたりした。『本當によくおとなしく遊んでゐますよ。もうちつとも手はかゝらなくなつてしまつた。外に出るにも、二人一所につれて行つてやらないと、喧しく言ひますけど、二人て遊ばせて置けばそれはおとなしい……』こんなことを妻が言つてゐたのを龍太は思ひ出した。
年兒て、あとのが生れた時には、姉の方が泣いて泣いて仕方がなかつた。母親が抱いてゐると、枕を持つて來て、これを寢かして、自分を抱けと言つて仕方がなかつた。牛乳をきらつて、一時は糸のやうに細く痩せて了つたことなどもあつた。それが今ては互に救け合ふやうになつた……。一人の存在と否とは一人の生命に關係するほどの深い結合力を生じて來た。

それを考へると、龍太はライフを思ひめぐらさずには居られなかつた。複雜した心理の悲慘な姿はさういふ幼いものゝ上にも遺憾なく働いてゐた。

『千代ちやん』

『整ちやん――』

籐椅子の上に身を横へてその無邪氣な聲を聞いてゐた龍太の頰にはいつか淚が流れて來た。

六

薄日の當る日の午前、龍太はかれの姿を山の手のある通に見出した。それはかれの友達が外國に行く決心をしたといふ話を聞いた翌日であつた。かれは通りから細い橫町へと入つて行つた。そこには官吏や敎師や會社員などが多く住んでゐた。四ツ目垣や二階屋が其處にも此處にも見えた。

そのあたりはかれが若い時代を過したところであつた。通の肴屋の上さん、燒芋屋の娘、小間物屋の番頭――さういふ人達をもかれはよく知つてゐた。かれはキヤラコの紋付の羽織を着て袴を穿いた自分の姿や、得意さうに新調の洋服を着て茶皮の靴をはいて車に乘つて行くかれの姿を明かに眼の前に描き出すことが出來た。そこには藝術と生活の犧牲になつて自から動脈を切つて自殺した小說家の一度住んだ家などもあつた。かれは其家によくその小說家をたづねた。秀麗な目をした丈の高い姿がありありとかれの眼に見えて來た。『ヤ、しばらくてしたね』かう言つて出て來た詩人の眼は夜更しをする爲めにいつ

も充血して赤くなつてゐた。龍太は過ぎ去つた時を繰返さずには居られなかつた。大きな湖の中に漂つてゐる身であることが染々とかれの胸に迫つて來た。

「流れ行く潮だ！」

かれはかう獨語した。

外國に行く決心をした友達のことも胸に上つて來た。その友達とは長い間一緒の路を歩いて來た。年も略同じだ。『若い人の爲めにはいろ〳〵敎育の機關が出來てゐますけれど、われ〳〵には社會は何の機關をつくつてゐて呉れないから困りますな』と言つた人だ。六十の手習をしやうとした決心が龍太の胸にある深い暗示を與へた。

龍太の姿はある横町からある横町へと曲つて行つた。寺の墓地であつたやうな陰氣なところが、すつかり開かれて、家屋が澤山に出來てゐた。その中の一軒を龍太はおとづれた。

そこには若い小說家が住んでゐた。

『今、一寸、醫師に行きましたが、ぢきに戻つて參りますから』かう言つて色の白い丸顏の愛嬌のある細君は、玄關に立つてゐる龍太を二階へと導いて行つた。去年生れた子供の泣く聲が下できこえた。

二間づゝきの明るい二階の四疊半の方には卓が置いてあつて、そこの高窓から、山の手の坂になつた町が一目に見渡された。本箱には外國の小說だの新刊物だのが一杯に詰つてゐた。此家の主人の書いた新刊の短篇書などもその中に雜つてゐた。

『もう、本當に、子供に追はれて一日まご〳〵してゐるんで御座いますよ』やがて茶を運んで來た細君は、初めて逢つた人とは思はれないやうに馴々しく龍太を欵待した。龍太の書いた小説の中の子供の話などをして、『本當に子供を持つた方でなくつてはわかりませんよ。私などあれを讀んで泣きました』などと言つた。龍太は七八年前に自分が山の手にこれと同じやうな生活をしたことを思ひ出さずには居られなかつた。龍太の妻も矢張初めて生れた子に追はれて暮した。

やがて主人は歸つて來た。『風邪ッて、さうひどくもありませんのですけれども……わるくこじらさない中にと思ひまして』などと言つて、龍太の前に來て座つた。龍太はこの主人の關係してゐる雜誌に賴まれた作の出來なかつたことを謝して、それからいろ〳〵文學上の話に移つて行つた。外國に行く友達の話なども出た。

『何うも矢張轉換期ッて言つたやうな時機なんですかね』

などと言つた。龍太は、

『私などもやつぱりさうですよ。今迄考へて來たことがすつかり熔けて流れて了つたやうな氣がしてゐますから……。何も彼も興味をひかなくなつたッて言ふことが一番打撃ですね。何かつかまる藁しべのやうなものがなくなつては、流されて行つて了ふやうな氣がしますよ』龍太はかう言つて考へて、『島田君の今度の決心なども、だから、私などには好い暗示にもなつてゐますよ。あの二階の狹い壁の中から、思ひ切つて出て行かうとする心持が私にはよくわかりますよ』

主人はその友達の行くといふ外國の文學を研究してゐる人であつた。名高い短篇作者の書いた繪の入つた原書などを澤山出して龍太に見せた。中には龍太が英語で讀んで感心した本なども雜つてゐた。それは男と女の深い心理の複雜した光景を描いて見せたやうな作であつた。『えらい挿畫が入つてゐますね。丸で何かのやうですね。日本では、とてもこんな本は出せませんね』かう言つて主人は笑つた。

午飯の御馳走になつて、心持よくビールに醉つてそして龍太は出かけた。ふとすぐれた作家の描いたシーンがかれの頭に蘇つて來た。海岸からはがきを出さうとした女のことを頭に浮べながら龍太は歩いた。その女はまだかれの心に執念く絡みついてゐた。

靜かな心持で歩いてゐたかれは、再び如何ともすることの出來ないさびしい自然の身に迫つて來るのを覺えた。龍太の身には悔恨やら追憶やら哀愁やらが犇と押よせて來て、持つてゐるその力を發揮するやうな餘裕は何處にもなかつた。唯、身の流れて行くのを覺えるばかりであつた。

龍太は普通つた山の手の町を靜かに歩いて行つた。せめて漲る心に任せやうといふのが、かれの勢一杯の心の狀態であつた。旅に出て、行くところまで行つて、生活を立て直さうとした決心は、要するに決心だけで、何うにもならないものだといふことが段々知れて來た。かれは二階の狹い壁の中から健氣にも出て行かうとした友達を思ひながら歩いた。

その友達の生活は艱難の多い生活であつた。山の中から出て來て、郊外に住んでゐた頃には、かれはよく其處に出かけて行つた。眞の努力の痛苦を龍太はよく其處で見た。かれの生活にもその友達の努力

の影響は常に働きつゝあつた。從つてかれは母親のない子供を置いて、その二階から出て行かうとする友達の心持を單に勇ましいとか羨しいとかいふだけの感じを持つて見ることが出來なかつた。友達の決心も矢張大きい潮の中に一握の藁しべを得やうとする努力ではないか。

七

その友達の外國に立つて行くといふ日は、雨がしめやかに降つてゐた。龍太が行つた時には、停車場には、友達を送る人達がもう大勢集つて來てゐた。學者もあれば、小說家もあつた。詩人もゐれば書家もゐた。友達の作品を愛讀してゐる靑年も澤山來て見送の群に加つてゐた。

友達は平生つけたことのない洋服を着て、周圍を取卷いた大勢の見送人に對して、その色の白い顏を見せてゐた。紺絣の羽織を着た子供達は、親類の女達につれられて矢張見送りに來てゐた。

龍太はその傍に行つて、

『鎌倉まで行きますか』

『え、そのつもりです』

龍太は鎌倉行の自分の切符と、子供の爲めの入場券とを買つて、そしてそこから戾つて來た。かねて知つてゐる人達の顏は其處にも此處にもあつた。文壇の人達の十の八九は此處に集つてゐるかとさへ思はれた。年を取つて背けなくなつたやうな人もゐれば、新しい才能を抱いてやがては文壇の視聽を集め

る流行兒にならうとするやうな人達もゐた。ある人の眼は輝き、ある人の眼は淀み、ある人の眼は鋭い皮肉の光を放つた。

お互に作品の批評をして、お互に拙い感情を抱いてゐるやうな人達は、各自に自分の味方をさがして其方の方に行つて何か頻りに饒舌つてゐたりした。『一つ、何うです、貴郞もつゞいてお出かけになつては』龍太はある作者からこんなことを言はれた。

『行くのも好いが――さう流行物のやうに誰も彼も行かなくつたつて好いぢやないか』

背の高い劇の方の作者はこんなことを言つて笑つた。

友達の志を壯とする人は澤山あるだらう。友達の出かけて行くことを羨む人も澤山あるだらう。しかし、再び生活を始めやうとする心持を知つてゐる人は、この大勢の中に幾人あることか? かう思つた龍太は自己の問題に觸れずには居られなかつた。

かれは默然として立つてゐた。

かれの眼の前には、山の中で見た菓物栽培の夫婦者が見えたり、荒蕪地を耕す草分の百姓が見えたり、小說の中に書いてある二人の半老いた獨身者が見えたりした。『かういふ都會生活から逃がれて行くものは仕合せだ。皮肉、冷笑、憎惡、罵詈――さういふものの漲りわたつてゐる文壇ではないか。ある人は藝術の爲めに自己の人格を失ふのをも頓着しなかつた。ある人はある親しい友達をモデルにしてその秘密を世の中に示した。ある人は親の愛を忌憚なく描いた。否、自己をすら冷やかな解剖臺に上せて何とも

思はなかつた。人間の理想と偶像破壞とが常に到る處で衝突して生々しい血汐を流した。疲れた、本當に疲れた神經だ』

龍太はこんなことを考へてゐた。

汽車の窓から顏を出して見送りの人達に對してゐる友達の顏は蒼白かつた。何處となくそは〳〵してゐるやうな樣子にも見えた。新聞記者の持つた寫眞機械は到る處から友達の顏に向けられた。やがて靜かに汽車は出た。

『何が羨しいと言つて、毎月小說を書かせられる苦艱を遁れて來たといふことが一番羨ましいですね。これから二年なり三年なり、自分の仕たいと思ふことが出來るんだから、それが羨しい。』

龍太はかう言つて友達の顏を見た。

『それも、今度決心した一つにはなつてゐるんですよ――』

友達はかう言つて笑つた。『ひとつ、もとの書生になつた氣で勉强して來やうと思ひますよ』などとも言つた。

鎌倉の別莊に龍太とその友達とは半日ほどゐた。庭には四季咲の赤い躑躅に靜かな雨が降つてゐた。春ももう闌になつてゐた。別莊の入口の四疊半には、友達の持つて來た新調の鞄と蝙蝠傘とが置いてあ

つて、編上げの靴が其處から黒く光つて見えてゐた。友達は座敷から立つて來て、その靴を明けて、餞別に貰つた埃及煙草を出したりした。

　別荘の主人は友達が山から都へ出る時に多少世話になつた人であつた。龍太も知つてゐた。友達とかれと二人して別荘の主人を山の中の寒い大きな家に訪ねて行つたことなどもあつた。紀念の爲め――かう言つて三人は其處で寫眞を撮つた。田舍町にその Studio を持つてゐる瘦せた寫眞師の蒼い顏は、細かい雨の中に長い間見えてゐた。

　午飯の御馳走になつた室は、光線の十分に入つて來ないやうな一間であつた。主人の持つてゐた『誕生日』に友達も龍太も其の名を記したりした。友達は昔の人の詠んだ歌を自分の作つた本の扉に書いた。やがて雨は春の雨に似合はないやうな音を立てて來た。日暮近く三人はその雨を衝いて停車場の方へと急いだ。

　汽車の煙は白く固つて畠の上に落ちた。

　友達は、ある停車場で窓を明けて青い麥の中に折れ曲つて行つてゐる路を眺めた。その路には紺の蛇目の傘が一つさびしさうに此方から向ふへと歩いて行つてゐた。その路の向ふには海があつた。

「此頃は大分好いさうですけども……あゝいふ病氣ですからな」

　主人は傍から言つた。

其處に、友達の知つてゐる若い女が肺を病んで療養に來てゐた。鎌倉て、電報を打つて、停車場まで出てゐて下さいと言はうとしたが、さう思つた時には、もう間に合はなかつた。友達は、『ぢや、私一人ちよつと下りて寄つて行きませうか。病氣が病氣てすから、逢つて行きたいと思つてゐるんてすけれども……』などと言つてゐた。しかしそれも出來さうに思はれなかつた。『寄るのはもうよします』などと友達は言つた。

その停車場を汽車が動き出して行つても、友達は猶ほその白い顏を其處から放さなかつた。ポプラの青い葉で圍まれた小學校の、背の低い桃だの、青い麥の畠だのがその前を通つて行つた。雨はまた盛に降つて來た。友達はやがて窓を閉めて、元の座にもどつた。汽車の煙は依然として白く固つて畠の上に落ちてゐた。

『此方(こつち)は雪てすね』

から別莊の主人に言はれて、龍太は外を見た。山畑のところ〳〵は、夜目にもそれと白くなつて見えてゐた。電車は闇の中を明るい溫泉の方へと急いで走つてゐた。

『まだ降つてますか』

窓から外に手を出してゐる龍太に向つて友達は訊いた。

『いゝえ、もう止んてゐます。大したこともないんてすね』

から龍太は言つた。

橋を渡たり、山の裾のやうなところを通たり、谷川の白く闇の中に漲り落ちてゐる傍を掠めたりして、電車はやがて山の麓にある停留場へと着いた。明るい灯がチラチラした。降つた雪はもう雪汁になつてゐた。

靴を穿いた友達だけを車に乘せて、二人は闇の道を溫泉場の方へと行つた。谷川は凄じく上から漲り落ちてゐた。崖に添つて二三軒固つた家には、三味線の音などが聞えてゐた。

「溫泉場に入つて來た感じは好う御座んしたね」

大きな二階の一間に落附いてから、別莊の主人はかう龍太に言つた。二人は雨の中に明るく見えた溫泉場を頭に描いた。そこに後れて入つて來た友達の顏を見て、

「私達の方が早う御座んしたね」

などと主人は言つた。

龍太も友達も主人も靜かな落附いた心になつてゐた。

龍太は輕く醉つた身を長く籐椅子に横へて、いろいろなことを考へてゐた。

今朝停車場へ送つて來た大勢の中にゐた女達――色の白い背の高い綺麗な顏、――髮の長く出た銀杏返し――かれの空想はやがてかれを川の岸のある明るい一間へとつれて行つた。つゞいて夏の夜の暗く

光る水の中にぼんやりと三つ四つの白い顔が見えて來るかと思ふと、橋の下を通つて行く舟の艫尾に提燈が一つ暗くついてゐるさまがちらと見えた。龍太は大きなある三階の家から出て、橋の傍で電車を下りて、通りと通りの間にある小さなお宮の境内を拔けて、そしてよく其の友達の家に行つた。その友達の家の小さな入口の前には、いつもメリンスなどを張つた張板が二三枚夕日に立てかけてあつた。門を明けると、八ッ手の綠の葉が見えた。子供達が騷いでゐた。『ゐらつしやいますか――』かう云つて、龍太はその狹い二階へと登つて行つた。氣が附くと、龍太の眼の前には、吹雪の中に高く聳えてゐる海岸の眺望臺が見えてゐた。

『何も彼も過ぎ去つて行きますね』

『本當ですね』

『かうして靜かに君を送つた一夜もすぐ昔になつて了ひますね』

こんな話を龍太は友達とした。

硝子戸の向ふに見えてゐる山を指して友達は言つた。

『そら、いつか話したことがありますね。……そら、私が昨年の正月此處に來てゐた時の話ですよ。あの山の上に、ロシアのカソリックの會堂がありましてね。そこに年を取つた牧師がゐるんですよ。何でも明治の初年に日本に來た人だ、ニコライなどよりも早かつたツて言ふことですよ。中々人物ださうです

けども、日本に來てゐるロシアのカソリックの人達と意見が合はないので、この山の中に引込んださうで、老いて了つたやうな人ですッて。私は行つて見ましたがね。かういふ異郷に來て、一生をかういふ山の中に過した人の生活といふことがいろ〳〵考へられましたよ。え、さう〳〵殆ど世の中と交渉を絶つてゐるやうな生活でしたよ。」

「この山に路があるんですか」

かう龍太は訊ねずには居られなかつた。

友達は向ふの方を指して、「そこから橋を渡つて行くと、路がついてゐるんですよ。細い路ですがね。灌木などの一杯に生えてゐるやうなところを通つて行くんですがね。……さう、上はちよつとひろい平らなところになつてましてね。そこに會堂があるんです。」

「面白いですね。かういふ溫泉場のすぐ上に、さういふ人が住んでゐると言ふのは何だか不思議な氣がしますね」

かう言つて山の上を見た龍太には、それが他の話のやうには思へなくなつて來た。龍太は默つて谷の上に聳えてゐる山を見た。外國に行く決心をした友達の心持なども繰返して考へられて來た。

晴れた朝だ。

溫泉場の外れになつてゐるやうなところから、路は川の方へと下りて行つてゐた。三人は通りから其

方の方へ行つた。

町の外れにある小さな温泉宿から客が入りに來るやうな浴槽が河の畔に出來てゐた。トタンで張つた屋根の下には、暗い狹い浴槽があつて、路から下駄ばきで、石階を下りて、そして入つて行くやうになつてゐた。明るい午前の日影が板圍ひの隙間からさし込んでゐて、暗い浴槽の中がそれを微かに窺ふことが出來た。脱いだ衣服が其處の石彼處の棚にかためて置かれてあつた。

女の唇だの乳だのが黒く光る湯の中におぼろげに見えてゐた。

後れて來た友達は『これは面白い。』かう言つて立留つて『丸で繪ですね。これは面白い。……』さも印象の深い光景に出會したやうにして、暫く立つてそれを見てゐた。

『入つて見たくなりましたね。……何うです、一つ一緒に入つて見ませんか』

こんなことをも言つた。龍太も主人も笑つて川の岸に立つてゐた。

『本當に Picturesque ですね。かういふシーンは見たいたッて見られやしませんよ……さん込んでゐる光線が好いぢやありませんか。私は何うしてか、かういふのを見ると、すぐ Sensual な感じが起つて來て仕方がありませんがね』友達はかう言つたが、それもてまだ飽足らないといふやうに、暫く立つて見てゐたが、『一つ見せて戴くかな』こんなことを言つて、石階を下りて浴槽の前に行つて、そして長い間其處に立つてゐた。

龍太は年齡が伸れて行く深い Sensual な境を頭に浮べずには居られなかつた。女の髮をわざと長く解

かせて見たり、齒と齒との合ふ音の快感を貪つたりする境の不思議な感覺は俄かに龍太の體に蘇へつて來た。噛まれた耳の快感が强い力を持つてかれを襲つて來た。

滊車に乘り込んだ友達の位置がちよつと分らなくなつたので、龍太と主人とは長く續いた客車の前を彼方へ行つたり此方へ來たりしてさがした。

「此處てす」

見ると、先に行つた主人は手を擧げてゐた。龍太は急いて其方へと走つて行つた。見ると、友達は大勢の旅客の中に窮屈に挾まれたやうになつて立つてゐた。人が一杯にゐて窓のところに顏を出すことも出來なかつた。

「ぢや、御機嫌よう」

「左樣なら」

滊車は靜かに出て行つた。さびしさうにして長い旅に上つて行つた友達の顏は長い間龍太の頭に絡みついてゐた。かれは主人と大船てわかれた。さびしい旅がかれの前に續いた。

八

平野の中の寺にゐる友達の顏は依然としてさびしさうてあつた。痩せた、どす黑い、皮膚の荒れた血

色は、龍太の心を暗くせずには置かなかつた。

龍太は書齋の中にゐるに堪へないで、二三日前から此處にやつて來てゐた。庫裡のひろい座敷には、矢張り硝子の箱の中に以前見たと同じやうな本が入つてゐて、赤い毛氈をかけた机の上にはモウパッサンの短篇集が載つてあつた。

寒山拾得の古い幅物――拙い田舍の繪師の筆を揮つた幅物が依然として大きな床の間にかけてあつて、下には例の剝製にした雉子の置物が置いてある。何も彼も何じた。此處には時が經つてゐないかとさへ疑はれた。

葬式が來ると、友達は緋の僧衣を着て、白足袋をはいて、拂子を持つて、本堂の方へ行く長い廊下を歩いて行つた。やがて低い唸るやうな讀經の聲が聞えて來た。鉦がけたたましく鳴つた。

茶の間に置いてある火鉢、ひろい暗い臺所の椽、何百年か知れない黑い煤のたまつた天井、二つつゝきの土竈のある土間、汚ない古い高流し、くるゝの十分にきかなくなつた大きな扉、さういふものが矢張依然として龍太の眼の前にあつた。龍太は本堂に添つて、裏の森の方へ行つて見た。杉の黑い樹立の中には矢張黑い淀んだ澤水が惡魔の眼のやうに光つて見えてゐた。

これまでにも龍太は度々其處にやつて來た。此處はかれに取つて唯一の隱れ場であつた。かれはいつも世の中の煩累から逃がれて來た。「あそこに行つて來る」かう云つては出かけて來た。

かれに取つては、いろ／＼な追憶のある寺だ。其處でかれは燃えるやうな熱い心を靜めた。さま／＼

の批評、さま〴〵の罵詈、さま〴〵の攻撃、さういふものも此處に來ると、かれは皆な忘れて了ふのが例だつた。女に對する苦悶を持つて來たこともあれば、心に對する不安を背負つて來たこともある。『あゝ疲れた――』かう言つて、その長火鉢の前で長大息をついたことも一度や二度ではなかつた。

『何の爲めの努力だらう。何の爲めに、自分等はこんなに齷齪してゐなければならないのだらう。もう疲れた――』

かう龍太が言ふと、

『少し休息する方が好い。しかしいくら努力をしても仕甲斐のない努力をしてゐる人は世の中に腐るほどあるぢやないか。君などはそんなことを言つては贅澤だ。努力ずるんだよ、矢張、仕方がないから』

友達はかう言つていつも慰めて呉れた。しかしさうした言葉もかうかれには空しい慰藉であつた。

龍太は言つた。

『しかし、年齢から――內部から來るのは何うすることも出來ないね。君だつてさうだらう。若い時代には、努力するやうに體が出來てゐるんだ。例へば、毎日食ふ飯でも、かれ等はまだ二十年かそこらしか食つてゐない。何を食つてもめづらしい。何んなものを食つても旨い。見るもの聞くものすべてめづらしい。子供を見ると、一番よくわかるが、かれ等は食ふことが目的で、旨い拙いが目的でない。だから、何んなものでも平氣だ。かれ等に取つては食ふて大きくならなければならない目的しかないのだ。若い人達も矢張さうだ。努力しなければならないんだ。努力するやうに出來てゐるんだ。努力するのが

かれ等の生きてゐる目的なんだ。僕等だつてさうしてやつて來た。しかし、年齢はさうして置かない。僕等の前には死がそろ／＼芽を出してゐる。死の最初の一歩に僕等は向ひつゝある。まだ、そんなことを言ふ年てはない、外國人を見たまへなどゝ人は皆な言ふけれど、イブセンの劇などを讀んで見たまへ。皆な老年といふことを痛感した作が多いてはないか。『建築師』でも、『小アイオルフ』でも、『ジオン、カブリエル、ボルクマン』でも皆なさうぢやないか。かれは決して少年や青年の爲めに劇を書いてゐやしない。――生の努力は僕はもう散々やつて來た。今度は死の努力をやらなければならないのだ。死　努力に入る扉の前に僕等は立つてゐるのだ』

『それはそれに相違ないけれど……』

かう言つて友達は笑つた。友達には生の努力も死の努力も問題になつてゐないやうに見えた。湖の中に漂つてゐるのに、何もすがるものなどなくつもいゝ。流れるまゝに漂つてゐさへすれば好いのだ。それが一番平安だ。つかまる一握の藥などがあつては却つて邪魔だ。かう思つてゐるやうにも見えた。

『それもさうだね』

かう言つて唯笑つた。龍太の苦惱などは耳にも留めなかつた。

この友達の落附いた、物に動かされない心持は、かれが常に美しいとも思ひ、豪いとも思ふところのものであつた。何んなものを持つて來て打つけられても、その友達はいつも笑つて受けた。龍太は今まで何んなにいろいろなものを持つて來て、この友達に打つけて行つたらう。怒るやうなことも、淋しが

らせるやうなことも、餘りだと思はせるやうなことも何も彼も持つて來て投げつて、そして何等かの安心を得て歸つて行つた。しかし今は投げるにも投げることの出來ないさうな苦痛を龍太は持つてゐた。さびしい風の音と、遠くから來る汽車の響と、茶の間から見えるいつも同じやうな風の方向を知らせる赤い青い旗と、桑燒の德利と、友達の細君の顏と、はしやいだ元氣な調子で唄をうたひながら。三味線を彈く娘の顏と、それ以外に龍太は何物をも得ることが出來なかつた。

龍太は獨りでよく出かけて行つた。停車場のレールを越えると、向ふには野がひろ〳〵と横つてゐた。田には昨年稻を刈つたまゝの切株がところ〳〵に殘つてゐて、葉の落ちたひよろ長い榛の木が田の畔を取卷いてゐるのが見えた。青い草の萠え出した小川には、午後の日が明るくさして、小さな魚がちよろ〳〵と泳いでゐた。

眼界を遮つた森のかげには、大抵白堊づくりの土藏か新しい藁葺の屋根かが見えた。龍太は其處に住んでゐる人達の生活を想像しながら歩いて行つた。野の眞中を横つて通つてゐる某町から某町に通ふ街道には、をり〳〵ベルの音がして自轉車が通つて行つた。

野の四面を取卷いた山々にはまだ雪が日にかゞやいてゐた。

龍太は昨日友達に賴まれて、田舍の寺に行つて演說をしたことを頭に浮べてゐた。かれは無理に賴まれて三十分ほど演壇に立つた。『飛行機が出來、自働車が走つてゐる巴里の郊外半日路のところにさういふところがあるので御座います。十二世紀からと申せばもう八百年以上もさうしてゐるので御座います。

其處にゐる信徒は一生口を開くことを禁じられてゐるのです。また一度その敎へに入つた人は、今まで社會で何んなことをしてゐた人でも、どんな豪富でも、何んな英雄でも、何んな名高い人でも、皆な同じやうに唯々信徒になつて了ふので御座います。其處に入ると、姓名といふものがなくなつて了ふのです。皆な同胞です。考へて御覽なさい、何の誰と言ふ名がないといふことと、口を開かずに默つてゐることと、これだけでも、何んなに變つた生活が開かれるでせうか。そしてかれ等は朝は四時に起き、十一時に晝飯を食ひ、夜の六時には床に入つて寐て了ふのです。その間にあるのは、勞働と祈禱ばかりです。そして死ねば、棺にも入れず、衣をも纒はせず、そのまゝ土に埋められて了ふのです。何うです、これて八百年―千年も經過してゐるのです。さういふことが人間に出來てゐるのです。そしてそこに住んでゐる人は、自分の國にあのやうな血を流したすさまじい革命があつたのも知らず、ドイツ兵に巴里の城下を蹂躙されたことも知らず、自動車、飛行機が出來たといふことも知らず、女の溫い肌――それどころでは御座いません、女のいかにつくられてあるかといふことも知らずに、一生を送つて行くので御座います。さういふ生活がこの世の中にあつて、たとへ千人にせよ二千人にせよ、さういふ人間が生存してゐるといふことを考へますと、かうしてじつとしては暮してゐられないやうな心持がいたすので御座います。私達の生活には、何といふ騷々しさと忙しさと淺間しさとがあるでせう。饒舌、皮肉、懊惱、さういふものばかりで充されてゐるでは御座いませんか。他人を嫉んだり、自分を悲しんだり、何うかして慾を滿さうと考へてゐる人ばかりで御座いませんか。でなければ憤恚とか嫉妬とかいふ恐ろしい炎

に身を燒いて自から亡びて了ふやうな人ばかりては御座いませんか。……沈默と勞働、それより他に私達はまことの生活を營むことは出來ないのです』

荒くれた手や、色の褪めた唇や、あぐらをかいた足や、しよぼしよぼした眼や、さういふものゝ前て、かういふ演說をしたことをかれは頭に浮べながら歩いた。龍太はさういふ演說をする心持になつた自己を振返つて考へて見ない譯には行かなかつた。

九

故鄕の方へと龍太は出かけて行つた。

半は丘半は泥淖のやうなところにある町の下をかれは步いた。半鐘臺と高い大きい欅の老木と古い錆びた沼とを持つは町はひろい平野の春の中に始めて目を覺しかけたやうに見えた。

沼には草が新しい芽を出し始めてゐた。破れた垣からは盛を過ぎた梅の花が白く覗くやうに見えてゐた。城趾から士族屋敷の方へと龍太はやがて步いて行つた。子供の時分かれの敎はつた先生の碑は城趾の公園の中にあつた。その前にかれは長い間立つてゐた。

『モスリンの方へ出るには此方を行つて好いでせうか』

ある路の角て、洋服を着た男にかれはこんなことを聞かれた。かれは默つて點頭いてそして通り過ぎた。

町にはかれの從弟もゐれば、かれを知つてゐる年寄もゐた。かれの知つてゐる若い妓などもゐた。しかし、かれは誰をも訪ねる氣にならなかつた。かれはそこの停車場から北へ行く汽車に乘つた。

外國に行く友達がいよ／＼神戸から立つといふ日には、龍太は丘の中にあるさびしい溫泉場の一間にゐた。細かい雨が降つてゐる中に桃の花が目も覺めるやうに見えてゐた。龍太は赤い表紙の洋書を一册其處に持つて來て讀んでゐた。二人の中年の男が田舍に行つて、まことの生活を始めやうとする心持が絕えず龍太の心を動かした。龍太は幾度となく長大息を吐いた。

かれのゐる室の高い窓からは、公園になつてゐるやうな廣場が一目に見渡された。大きな櫻の木からは絕えず花が散つてゐた。子守が二三人ぶらんこに乘つてゐるのも見えた。

『まことの生活――』さういふ問題がまた押寄せて來た。

新しく出來たある停車場の前には、大工や左官達が寄り集つて、一生懸命て家を建てゝゐた。

『べらぼうに寒いな』

『まだからッ風が止みやがらねえ』

『もう好い加減に止んでも好い時分だな、もう、ぢきお釋迦さまぢやねえか』

一人の年を取つた方の大工は、『それでも、停車場が出來たんて、こゝあ賑やかになるアな。店が澤山

に出來るやうになるァな。こゝいらは、田圃の中だから仕やうのねいところだッたんだが……。えらいとこへ停車場をこしらへやがつた……』

『これでも、こゝの地面に家をたてるのは、餘程、鐵道の奴等にヒョコ〳〵頭を下げなけりや許可にならないんだッてな。弓さんなんか餘程取られたやうだぜ』

『勝手なことをしやァがるな』

鉋屑が風に吹かれてあちらこちらにころがつて飛んで行つた。一軒出來上つた板圍ひの茶店には、髯の生えた百姓面をした中年の男が、瀬戸物の安火鉢を挾んでもう一人の若い男と何か話をしてゐた。前にはひろい野がひらけてゐた。

停車場には町に出かけて行く娘達の赤いメリンスの帶が見えたり、百姓の上さんの荒れた唇が見えたりした。新しい停車場の中を新らしい制服をつけた若い車掌が元氣よく歩いて行つた。

龍太の姿は長い間其處に見えてゐた。かれは其處で東京の方へ行く汽車を待つた。

十

龍太は矢張落附いてはゐられなかつた。『今年一年は靜かに休息するつもりです』などと表面は言つてゐても、心は絶えず何物をか求めてそれに縋らうと焦つてゐた。何んなものでも好い、縋るものがあれば、何んな小さなものでも好いとかれは思つた。落附いて机の前に座つてゐられないのがかれには何よ

りも辛かつた。

明方近く、かれはいつも眼を大きく闇の中に明けていろ〳〵なことを頭に浮べてゐた。半年も一年も歸つて來ないやうな長い旅に上らうと思つて、電球を捻つて、旅行案内を床の上で繙けて見たりした。かれは琉球に近い絶海の孤島にゐる友達の死を惜んだ。その友達さへ生きてゐるならば、かれは一番先に其處に出かけて行つたに相違なかつた。椰子の葉の大きな樹の蔭、ハブのゐる草籔、暑い暑い日影の下に赤銅色の肌を見せて半ば裸になつてゐる土民、さういふものをかれは想像した。かれはその友達から送つてよこして呉れた寫眞を箱の中に捜した。

二三年前の夏、其の友達は久り振りで、東京に出て來て、川に近い灯の明る室で一緒に酒を飲んだ。その時龍太は『君のやうな友達を持つてゐるのは心强いよ。僕等は今はかうして世の中に働いてはゐても、何時隱れ家が必要になつて來るかわからないからね。其時は逃げて行くからね。かくまつて呉れるね。』などと言つて笑つた。それが痛切にかれの胸に思ひ出されて來た。『あの友達さへ生きてゐたら――』龍太は思ひをかけた絶海の孤島が今は全くかれに背いて去つて行つて了つたことを考へて長大息を吐いた。

日は日と經ち、月は月と經ちた。目の覺めるやうな新緑も段々濃い深い緑に變つて行つた。生溫い重苦しい空氣は草に木にも鬱陶しく漲り渡つた。かれは頭を抱へるやうにして、佗しく雨の降つて通る薄暗い窓の下にゐた。

外國に行つた友達からは、行く先き々々から繪端書が屆いた。それにはジヤンクの帆影の無數に漂つ

てゐる港があつたり、支那人の店の一面に連つてゐる賑やかな町があつたりした。Blank page! Blank Page! などと書いてあるものもあつた。渺茫とした海の中を世離れて漂つて行く友達の生活が龍太には限りなく羨しかつた。

龍太は都會の明るい通の方へ行かうと思はないこともないではなかつた。友達をも訪問しやう、例の騷々しい Cafe にも行かう、新聞をも見やう、雜誌をも讀まう、兎に角沈滯した自己の生活を立直す方法をも考へなければならない。こんなことを狂熱的に考へることもないではなかつた。しかし、其處にはジロジロと氣味わるく人を見るやうな厭な目や、冷笑しながらお世辭を言ふやうな冷たい顔や、人の心を落付かせて置かないやうな尖つた心持などが一杯に滿ちわたつて居た。『そんな生活など何うでも好い。自己から、さうだ、先づ自己から立て直して行かなければならない』かう思つて、行きかけた路を途中から引返して來た。

ある日のことであつた。龍太は俄に思ひ立つたやうに妻に言つた。『さうだ。日光に行かう。あすこの山の中に行つて一人で少し考へて來やう。あの寺はまだ明いてゐる筈だ。』

『だッて、貴方一人で何うするんです?』かう妻は笑ひながら言つた。

昨年の春あたりから、龍太の家に常にたづねて來る一人の書生があつた。をり〳〵小說などを書いては持つて來た。髮を長く生した、色の黑い丈の高い青年で、田舍にゐて、親達の言ふまゝに藥學校に行つて勉學してゐれば、三四年の後には一人前の藥劑師になれる身分を、好きで文學に志して、學校に通

ふ爲めに親から買つて貰つた自轉車を賣飛ばして、「一文も親には世話にならない」と言つて、そして東京へやつて來た男だ。「あれを伴れて行かう。そして自炊をさせやう。それに、己だッて飯位炊ける。昔の書生生活に戻るんだ。さうだ、さうしやう」から龍太は言つた。

二三日經つた後には、龍太とその青年とは、山の方へ行く汽車の中に膝を並べて乘つてゐた。行李、鞄、風呂敷包みなどが汽車の中の上に載せられてあつた。龍太の鞄の中には二人の中年の男の物語を書いた小說などが入れられてあつた。青年は雜誌やら新刊物やらを澤山龍太の書齋から持つて來て、熱心にそれに讀み耽つてゐた。

青年に取つては、この世の中は希望の多い生効のある樂しい愉快なものらしく見えた。何んなに辛い慘めな生活ても、靑年に取つては生に向つて突進して行く勇ましい道程てあつた。何んなものても面白いといふやうな調子て、雜誌の中のあらゆる小說を讀み盡した。

「矢張、讀んだり、書いたりする他仕方がありませんね。勉强するんてすね。私も一つ紀念になるやうな作を出て書いて見ませう」書生はこんなことを言つた。

山は段々近くなつて行つた。大きな杉並木などもやがて見え出した。綺麗な水が小さな瀨をなして流れてゐた。

同じ事
(A study)

小山内薫

人物

主人。二十八歳、文學者、實業家の子。

客。三十一歳、文學者。

女中。

(客は主人に對して、比較的ぞんざいな言葉を使ふが、それは決して主人を眼下(めした)に見てゐるからではない、親しみ一つからさうした言葉使ひをするのである。主人は客に對して、比較的丁寧な言葉使ひをするが、これも媚びようとしてゐるのではない、先輩に對する以前からの純な敬意がかういふ習慣を作つて了つたのである。だから、丁寧な物の言ひやうの中にも、十分遠慮のない親しい調子が籠つてゐなければならぬ。)

場　所

主人の父の家。

日本風の座敷に西洋風の室内裝飾した主人の書齋。

ライチング、テエブルの置いてある前の硝子窓から中庭の新綠が輝いて見える。

縁側續きの土藏の白壁が、青葉を通して來る朝の日の光に、薄青く染まつてゐる。

何處かで目白の鳴く聲が時々する。初めは誰も座敷にゐない。暫くすると、部屋の外に女の聲と男の聲がする。

女中。（部屋の外にて）どうぞこちらへ。

客。（部屋の外にて）有難う。

〔正面の襖明く。客、登場。微醺を帶びてゐる。女中、その後に添ふ。〕

女中。　どうぞお掛け遊ばして。

客。（椅子の一つへ疲れたやうな腰をおろす）まだお休みなんだらう。

女中。（笑つて）只今御目覺めになりました所でございます。どうぞ暫く。

客。（笑つて）どうぞ御ゆつくり。

〔女中退場。間。〕

客。（小さな欠を一つする。自分の眼の前をぢつと見詰める。稍芝居掛かつた憂欝な表情）

〔女中、紅茶のタッセと新聞を持つて登場。〕

女中。只今御飯をあがつて入らつしやいますから、暫くどうぞ。

客。（女中が這入つて來ると同時に、直ぐ前の快活な顔に戻る）ええ、ええ、どうぞ御ゆつくり。

〔女中退場。〕

客。（右の袂から卷烟草の袋を三つ出して、それを卓の上に列べる。一つ一つ種類が違ふ。いづれも袋が破けて呑みかけてある。女中の持つて來た新聞は一目見ただけて手を觸れずに、自分の左の袂から幾つにも折つた新聞を一枚取り出して、丁寧にそれを擴げる。その時、電車の乘換切符が一枚袂から一緒に出て、床の上に落ちる。氣が附かない。新聞を讀みながら、三種の烟草を代りばんこに呑む）

〔主人、登場。〕

主人。入らつしやい。

客。（新聞を置いて立つ）お早う。

〔二人一緒に腰を掛ける。女中、紅茶のタッセを二つ持つて登場。前に客に出した一つを手にして直ぐ退場。〕

客。折角寝てる所を起して濟まなかつたね。
主人。いえ、もう起きる時分なんです。
客。こんなに早く。
主人。(白々しく) ええ。この頃は夜遊びをしませんから。
客。あやしいもんだね。(自分は餘程皮肉なつもりで)宜しく言つてましたぜ、クロコダイルが。
主人。(平氣で) 昨晩はどちらでした。
客。(狼狽して) ゆうべは何處へも行きやしない。
主人。(平氣で笑ひながら客の手にしてゐる新聞の一面を遠くから指さす)
客。(主人のする事が分らないで) なに。
主人。その「呼賣」といふ赤い丸い判が承知しません。あなたは今朝往來で初めて新聞を見たんでせう。
客。(言ひ當てられて、人の好ささうな苦笑をする)
主人。(疊みかけて) 大分この頃は御盛んださうですね。
客。どう致しまして。とても君にやあ敵はないさ。(辯解的に) 君は「好き」て行くんだが、僕は「嫌ひ」て行くんだから。
主人。(落ち附いて) さう簡單にも言へませんよ。私だつて好きになつたり嫌ひになつたりします。
客。(羨ましさうに) てもまあ君は好きな時の方が多いんだらう。君があゝいふ所へ行つてる時の樣子

を見ると、如何にもよく調子が合つてるもの。「おれの家はここだ。」といふ風な、如何にも落ちついたゆつたりした氣持が見えてるもの。

主人。（好い加減に笑つて聞いてゐる）

客。（段々誇張的になる）ところが僕と來ちやあ全然嫌ひなんだからねえ。厭で厭で堪らないんだ。もうあの門を一目見ると、ぐつと肝癪が起つて來るんだ。あの門を一歩這入ると、僕はそこいらにウロウロしてる車屋でも地廻りでも、誰でも相手にして喧嘩がしたくなるんだ。播摩屋へ這入れば這入るてあのクロコダイルさ。僕は天下にあいつ程厭な婆あはないと思つてゐる。あの眞黑な低い鼻をいやにピコつかして、「今夜はどちら。花里さんが心配してましたよ」などとやられると、總身の毛がよだつて來るね。

主人。（茶かすやうに）でも、それから先きは萬更でもないてせう。

客。（益々眞面目に）ところが大違ひさ。一體あゝいふ所にゐる女ぐらゐ癪に障るものはない。醜女の版元はここでございといふやうなのが、自分では天下一の美人だ位に思つてやがるんだからね。デレデレグニヤグニヤした男ばかり相手にしてるものだから、僕のやうなゴツゴツしたのが行くと、「あら、花林糖さんが又來たよ」なんて言やがる。

主人。（又茶かすやうに）大層惡く言ひますね。ゆうべ何かあつたんですか。

客。（やはり眞面目に）いいえ、何もありやしない。例の通り行つて例の通り歸つて來た計りさ。うん

と不愉快な空氣に漬かつて、女々しい感情を荒らして來たんて、今朝は餘程頭の工合が好いんだ。

主人。（やはり冷やかすやうに）熱いお湯へ顔をしかめながら這入る型てすね。（と言つたが、何か思ひ出して、少し眞面目になる）さう言へば、全くあなたはあすこへ行くと別人のやうになりますね。私はこないだ初めてお供をして、實際驚きました。

客。（得意らしく）お守の一件かい。

主人。（病人の容態を心配するやうな顔附きて）ええ。ああいふ所にゐる人間はみんな迷信家なんてすから、あんな物てもああやつてお宮へ入れて大事にして毎日拜んてゐるんてす。それをあなたは引き摺り出して紙屑ても燃やすやうに火鉢の火へ燻べて了ふんてすもの。

客。（益々得意て）は、は、は。五六枚あつたね。成田山だの、水天宮だの、金神様だの。僕は罰が當つて呉れれば好いと思つてやつたんだが、別に罰も當らないね。つまらない。

主人。どうしてあんな亂暴が出來るんてせう。（探るやうに）から、醉ふと、芝居氣が出て來るんぢやないんてすか。

客。（少しも感情を傷つけられずに）芝居氣。無論、芝居氣も幾らか混つてゐるね。併し、八分は本氣なんだ。（又段々誇張的になる）僕は何かて再び起てないやうなひどい目に會ひたいと、終始さう思つてゐるんだ。ちよい〳〵人には虐められるが、やつぱりまだ僕の生きてるやうな虐められ方だから物足りない。滅茶滅茶にやッつけられて、迚も起てないやうにして貰ひたいんだ。どうせ世間はさうい

ふもんなんだから、早くさうして貰ひたいと思つてるんだ。ところが世間といふ奴は中々さう早く片を附けない。ちびり、ちびりとお出でなさる。丁度、年といふ奴が僕等の髮の毛を一本一本白くして行くやうに、世間といふ奴は人間の手や足を一本宛、ゆつくり〳〵捥いて行くのだ。それが僕のやうな肝癪持には迚も待つてゐられないから、何か一度に惡い事をして、一度に滅ぼされて了ひたいんた。(間)ゆうべも僕はこんな事をやりかけたんだ。電燈の線をナイフで切つて吉原中を闇にして了ふんだね、同時に自分はナイフから感電して消えて無くなつちまふのさ。

主人。(びつくりして)ほんとにそんな事をしかけたんですか。

客。(得意で)ほんとうとも。三階の欄干の直ぐ前に丁度太い線が一本來てるんだ。あいつを切つてやらうと思つたんだが、とう〳〵留められて了つた。

主人。(安心して)また大分酔ひましたね。

〔女中登場。日本茶の盆と菓子鉢を卓の上に置き、手紙端書などと一緒に帶封をした雜誌を一つ主人に渡し、前の紅茶のタッセを片附けて行かうとする。〕

主人。菓子は駄目だ。ビイルがあるだらう。きのふ貰つた林檎と一緒に持つておいで。

女中。はい。(行かうとする)

主人。おい、おい、この菓子を持つてかないか。このお客樣は見るのもお嫌ひだとおつしやるんだ。

〔女中笑ひながら菓子鉢を持つて退場。〕

客。(穩やかな調子に歸る)何だね、雜誌は。

主人。(冷やかに雜誌の帶封を切る)「東京文林」です。

客。(心配さうに、又得意さうに)ははあ。又何か吾々の事が出てゐるね。

主人。(雜誌を好い加減に繰りながら)今度は出てないやうですよ。

客。(侮けるやうに)珍らしいこッた。

主人。(少しも憤慨せずに)先月でしたかねえ、寫眞入で「耽溺文士列傳」とかいふのが出てゐたのは。

客。(腹立たしげに)さう、さう。

主人。(面白さうに)あれを親父に見られて、すつかり怒られッちまひました。けれども内の親父の言ひ草は面白いんです。「こんな物を書くやうな下等な奴に知れるやうな場所で遊ぶからいかんのだ。もつとうんと上等な所で遊べ。かういふ下等な記者が窺ひ知る事の出來ないやうな場所で遊べ。」と、かう言ふんです。なあにどこで遊んだつて書くにやあやつぱり書くんですが、それでもあれから親父が餘計に小遣を呉れるやうになりましたから好い鹽梅だと思つてゐます。

客。(眞面目に)好い阿父さんだ。阿父からしてさうだから、君はどこへ行つても、あゝ落ちついてゐられるんだね。實に羨ましい。(間)僕などは資金をみついて呉れる親父はなしさ。自分の稼いで取るものを、お袋に内證で側から蕩盡して了ふんだ。それも面白くてするならまだ好いさ。僕のは面白くも何ともなくてやるんだからね。

主人。(疑ふやうに)ほんとにそんなに面白くないんですか。

客。(初めは本當の感情が出るが、中途からやはり誇張的になる)さつきも言ふ通りさ。一體僕は「眞實」といふものを眞面に見る事が出來ない人間なんだね。眞面に「眞實」にぶつかつて行くだけの力が僕にはないんだね。(下女登場。ビイルと林檎を置いて退場。主人、ビイルを二つのコップに注ぐ。この間も客構はず話し續ける)丁度視力の弱い人間が太陽をまぼしがるやうに、僕のやうな弱い人間はとても「眞實」を正視してゐる事が出來ないんだ。そこで、どうかして「眞實」を見まいとするんだ、「眞實」を逃げやうとするんだ。自分に何か好きで好きで堪らない物があれば、それに沒頭して始終醉つてゐる事も出來るといふものだが、悲しいかな僕には一つもさういふ物がない。そこで成るべく厭な物不愉快な物を選んで、その中へ飛び込まうとするんだ。さうして始終腹を立てて感情を荒らしてゐれば、どうにか「眞實」が忘れてゐられるやうに思ふんだ。「生活が單調でつまらないから強い刺戟を求めるんだ」などといふやうな、そんな無邪氣な人生觀から遊ぶんぢやない。出來物で痛む股へ錐を突き通して、出來物の痛みを忘れようといふやうなヤケな遣り方なんだ。(誇張が濟むと又辯解の調子になる)失敬だけど、勿論君の耽溺だつて、唯「遊びたいから」といふだけの物ぢやあるまい。けれども君は生れつきそれが好きでそれに醉へる方だから羨ましい。醉つて忘れられる方だから羨ましい。(ビイルを一息に飲む)

主人。(すぐ又客のコップにビイルを注ぎ、話をそらすやうに)でも、あなたの方が私より酒は強い。

客。（主人の言葉を少しも皮肉に取らないで）酒には醉へるが、「遊び」には醉へない。女にも醉へない。三味線にも醉へない。（又一杯飲む。主人、又注ぐ）それをさういふ雜誌などを見ると、「歡樂を追ふ」とか「歡樂を求めてる」とか、さういふ事が書いてある。僕等が遊ぶのも、銀座あたりの若旦那が藝者の尻を追つかけるのも同じに書いてある。

主人。（冷靜に）でも形に現れたところは、やつぱり同じですからねえ。吾々のだつて、あんまり體裁は好くないでせう。

客。（やはり主人の言葉を少しも惡く取らないで）それは外面ばかりを見るからさ。彼等は内部を見る事を知らないんだから駄目だ。

主人。（やはり冷やかに）外面のと内部のと、そんな事は考へてもゐないのでせう。私は唯燒けるから書くんだと思つてゐます。羨ましいから書くんだと思つてゐます。こなひだの「耽溺文士列傳」を書いた男なども、天下國家の爲に大分憤慨してたやうですが、あの男は大分「六區」の通だと言ひますぜ。吾々の遊びが少くとも六區以上なのが、あの男には氣に入らなかつたのでせう。

客。（どこまでも正直に）君はさういふ風に悟つて了へるから、實に羨ましい。僕は憤慨してる男をどうしても實際憤慨してる男として考へなければ、外に考へやうがないんだ。僕は世間で輕蔑する新聞の三面記者だとか雜誌の六號記者だとかいふ者をも、一種の道學者として考へずにはゐられないんだ。即ち自分の正面の敵として考へずにはゐられないんだ。

主人。（客に對する或理解を得て）だからあなたはいつても小說の中に、ああいふ手合に當たるやうな文句を、きつと何處かに書いて置くんですね。私なんぞは小說を書くのに、初めつから「傾城買四十八手」か「娼妓絹籭」てゞ書くやうなつもりで書いてゐますね。さうしてあれだけの物が書ければ大したもんだと思つてゐます。「梅兒譽美」も好うございますが、「卷中艷話多しといへども、男女の志情然と濁りなきを並べて」なんてアポロジイが時々出て來るので厭になりますね。

客。（主人の言葉に反對しようと思ふが、元來腹の底までデカダンスの氣分に漬かつてゐる人ではないから、もう反抗的な誇張した修辭に drk きて了つて、爲方がなしに默つてゐる）

主人。（その際を利用して、巧みに話題を變へる）さう言へば近頃暫くお作が出ないやうですが、何か長い物でもやつてるんですか。

客。（又穩かな調子に歸る）いいえ、なんにもやつちやゐない。

主人。（ほんとに心配して）また頭の工合でも惡いんですか。

客。ああ。

主人。每年今時分になるといけないんですね。

客。どうもこの、新綠といふ時分になると、頭の奧の方が蜘蛛の巢でも掛かつたやうにモヤモヤして來て困るんだ。

主人。もう隨分古い話ですね。

客。 さう。もう隨分古い話だ。

主人。（憫むやうに）私は原因を知つてゐますよ。

客。 原因、（間。自分で自分を欺く）原因なんかありやしない。

主人。 でも、みんな知つてる事ぢやありませんか。

客。（辯解的に）初めは原因といふやうなものもあつたか知らないが、もう今ぢやあなんにも覺えてやしない。唯毎年今頃になるとひりてに頭がむしやくしやして來るんだ。生理的に唯頭が痛んで來るんだ。慢性なんだね。慢性の――『新緑病』とでも言ふんだらう。

主人。 私は丁度あの時分あの人の弟と同級だつたんです。

客。（直ぐ釣り込まれる）さう。成程。さうだつたね。

主人。 勿論その時分はなんにも知らずにゐたんですが、あとで色々弟から聞きました。

客。 今でもあの弟と交通してるのかね。

主人。 思ひ出したやうに時々尋ねて來たり、手紙を呉れたりするんです。

客。（わざと外の事を言ふ）あいつは少し拔けてるやうだつたね。

主人。 ええ。ですから何もかも私にしやべつちまふんです。隨分あの當時は色々ごだ〳〵したんださうですね。

客。（厭みとは知らずに）なあに、ごだ〳〵したのは僕の頭ばかりさ。向うは極めて平和に嫁に行つて

了つたのさ。

主人。（追窮するやうに）さうでもないやうですぜ。

客。（無理に諦めた調子で）なあに、僕は青二才だし、先方は立派な紳士だから、問題にも何もなる筈がないんだ。人間の魂などに直打があると思つたのが、こつちの間違ひさ。

主人。（わざと客の知つてる事を言ふ）でも嫁に行つてから、家庭がうまく行かないので、親達もあとて大分後悔したらしいやうですぜ。

客。（自分の既に知つてる事を人の口から聞いて、少しは復讐的の愉快を感じながら、無理にそれを押し隱して）なあに、何處へ行つたつて家なんてものは餘りうまく行くもんぢやないさ。

主人。（皮肉に）あなたの所へ來てもですか。

客。（やはり眞實の感情を隱して）ああ、さうとも。

主人。（客の心を探るやうに）けれども若し向うの主人が死ぬとか、或は離縁になるとかして、あの人が一人になるとしますね。そして、あの人があなたに會ふとしますね——

客。（少し眞實の感情を出す）そりやあ別問題さ。僕の言つてるのは昔の話さ。もう決して二度と來つこのない十年前の話さ。

主人。ところが、この頃噂に聞くと、あの人は家へ歸つてるといふ話ですぜ。

客。（悉く眞面目になる）ほんとかい、それは。弟から聞いた事かい。

主人。弟から聞いたんぢやありませんけど、弟の友達から又聞きに聞いたんです。

客。（狼狽して）へえゝ、面白いね。（今まで忘れてゐたビイルを思ひ出したやうに又一杯飲む）

主人。なんでも亭主が死んだとか言んですがね。

客。え。（心中非常に驚いたが、直ぐ又強いて冷淡な調子になる）大分酒飲みだといふ話は前から聞いてゐたがね。ぢやあ、やつぱりそれで身體でも毀したんだらう。

主人。それで家へ歸つてるといふ話なんです。（眞實客の爲に或レメヂイを與へようとして）どうです一度會つて見ちやあ。

客。さあ。逢つて見ても好いね。（と思はず言つたが、ふと氣が附いて、釣り出された「自分」を又心の奥の方へ納つて了ふ）よさう、よさう。今會つて見たところでしやうがない。

主人。（眞面目に）でも、或は又新らしい世界が開けて來るかも知れませんぜ。

客。（疑ふやうに）新らしい世界。僕はそんな物があるとは思はないね。人間の運命は先きの先きまでもうちやんと極まつてゐるものさ。僕の運命などにはもう黴が生えてゐる。

主人。（やはり眞面目に）その黴も人間の力で拭き落とせる事があるといふぢやありませんか。

客。（起つて來る空想を努めて斥けようとする）いや、駄目だ、駄目だ。もうそんな話はよさう。歸つたら歸つたで好いぢやないか。僕はもうこんな人間になつちまつたんだ。今の僕とあの先生との間にはもう毛筋程の關係もなくなつてるんだ。

主人。(追窮する)ても、やつぱり今時分になると、頭が痛むんでせう。

客。(逃げるやうに)もう廢し給へと言つたら。頭の痛むのは時候のせいだよ。

主人。(どこまでも眞實を知らうとする)ても、こんな事を聞けばやつぱり變な氣がしませう。

客。(敗北して)だから、もう廢す事にしようぢやないか。(間。ふと或事實を思ひ出し、それに諦めの力を得ようとする)こないだも君、こんな話があるんだ。何處の歸りだつたかな。(間)さう、さう。向島の歸りだつた。

主人。(餘り責めるのも氣の毒だと思つてゐる所へ、ふと客が何か外の話をし出したので、直ぐそれに調子を合はす)村越君と一緒に行つた時ですか。

客。いや、さうぢやない。それより二三日前だ。馬鹿に朝早く出ちまたんて、家へ歸るのは少し工合が惡いから、本所の栗田ね。あいつの家へ寄つたんだ。すると、奴こんな話を始めるぢやないか。あの、吉川先生ね。

主人。ええ、去年亡くなつた。

客。さう、君はとう〳〵あの先生に會はなかつたつけね。(間)あの先生の奥さんが僕の所へ嫁に來たいと言つてると、かう言んだ。

主人。へええ。そいつあ面白い。

客。僕もあんまり話が不思議なんてびつくりしちまつたさ。そりやあ成程、先生の奥さんはまだ若い

し、どつかへもう一遍嫁に行くといふ話は僕も聞いてゐたさ。

主人。　金持を探してるといふ噂がありましたね。

客。　さう、なんでも、金持て女房に踊も習はせれば三味線の稽古もさせるといふやうな家に行きたいといふ話だつたのさ。それが君僕のやうな貧乏書生の所へ來るといふんだからおかしいぢやないか。それに吉川先生は、まあ言つて見れば僕の師匠筋だ。僕は弟子として後進として先生の家へ出這入りもしたんだし、奥さんにも先生の奥さんとして、始終ビク／＼しながら挨拶をしてゐたもんだ。年も無論僕より二つか三つ上だ。それも、先生の生きてゐる時分に、始終親しく口でも利いてゐたんなら又格別だ。そんな事は唯の一度もありやしない。あんまり嘘らしいから、栗田め、又變な事を言ひ出して、おれを試すなと思つたから、尚よく確めて見ると、どうも本當らしいんだ。お里の阿母さんにも先生の阿父さんにも相談をしてゐたのを現に栗田が聞いたと言ふんだ。

主人。　へええ、それからどうしました。

客。　そこで僕も少し妙な氣になつた。から何だか新らしい不思議な運命が自分を待つてゐるやうな氣がして、ちよいと胸がドキ／＼して來た。けれども、まだ栗田の言ふ事が信じられないから、好い加減にあしらつて歸つて來たのさ。

主人。　成程。

客。　併し僕の胸ん中にはもう何か變な物が殘つて了つた。どうしても嘘か本當か、それを確めなけれ

ば氣が濟まないやうな氣がして來た。そこで色んな方面から當つて見ると、どうも栗田の言つたのが本當らしい。僕はそれでもまだ妙だとは思つてゐたが、何となくから興奮して來て、誰か友達にその話がしたくて堪らなくなつて來た。

主人。　あなたはあの奧さんが好きなんですか。

客。　別に好きぢやないんだ。好きになる程附き合つて見ないんだからね。まあ、どつちかと言へば、嫌ひな方さ。向うでも僕はあんまり好きぢやないらしいんだ。あの奧さんはなんでも好きな人と嫌ひな人を終始ちやんと二つに分けてゐる人ださうだが、僕の聞いた所ぢやあ、たしかに僕は嫌ひの部に這入つたゐた筈なんだ。（間）それでもやつぱり人間は妙なものさね。そんな話を聞くと、ちよいと妙な氣が起つて來るもんだ。

主人。（又いつもの突つ込む癖が出る）奧さんが綺麗だからでせう。

客。（眞面目に）さう。そりやさうかも知れない。

主人。（笑つて）それからどうしました。

客。　それからね。直ぐその話を人にしようかと思つたんだが、でも若しさうでもなかつたら好い恥さらしだと思つて、言ひたいのを我慢して誰にも言はずにゐたんだ。（間）言はなくつて好かつたよ。なあに、それつきり別になんにも話はなかつたんだ。その內、君、村田子爵の所へ嫁に行くといふ事が新聞に出て、間もなくお輿入れさ。

主人。　へえ。ちつとも知らなかつた。もう行つちまつたんですか。
客。（殘念さうに）行つちまつたとも。
主人。　それぢやあ栗田の話はやつぱり嘘だつたんですか。
客。（眞面目に）いや、嘘ぢやなかつたらしいね。
主人。　それぢやあ分からないぢやありませんか。
客。（段々落ち附いた諦めの調子になつて來る）僕にも分からないんだ。まあ、なんだらう。思ふやうな所がないんで、氣紛れにそんな事でも考へたんだらうが、決行するだけの勇氣もなくてゐる内に、華族の口があつたんで、その方へ極めつちまつたんだらう。一言も僕の方へ直接に話があつたわけぢやないから、どうもしやうがないさ。
主人。（少し冗談らしく）へえ、そいつあ殘念でしたね。
客。　殘念まで來てるなら、まだ好いさ。そこまで來てやしない。或はまるでなんにもない話なのかも分らないんだからね。まあ世間の事は大抵さうしたもんさ。何か斯う新らしい事が始まりさうになるから、好い氣でその氣になつてると、やつぱりなんにも始まりやあしないのさ。希望なんてものも、その欺されてゐる間の話さ。人間はいつまで立つたつて、どうにもなるものぢやない。いつになつたつて同じさ。生活が變るなんて、よく人が言ふが、それは上部だけの事さ。人生はいつまで立つても同じ事さ。

主人。（少し勇氣が挫けたが、それでもまだ希望があるやうな氣がして）だけど、吉川先生の奥さんの話と今の私の話とでは大分場合が違ひませう。

客。いや、どうだか分かつたもんぢやない。やつぱり氣を揉むだけ損をするのが落ちだらうぜ。

主人。でも、たしかに亭主が死んだとして、家へ歸つてるとしたら、一寸面白いぢやありませんか。

（間。或地歩を得さうな言葉を思ひつく）なにも一緒になるのどうのと言ふんぢやありません。久しぶりで會つて見たら、話だけでも面白からうと思ひます。

客。（直ぐこの一句に動かされる）そりやまあさうさね。

主人。（第二の地歩を作る）向うももう隨分年を取つたでせう。あなたとは幾らも違はないんださうですね。

客。（直ぐにそれに乘る）一つ下だと思つた。

主人。さうでせう。して見りや、女の三十ですから、もう隨分おばあさんです。それに色々家庭の苦勞もしたらしい話ですから、隨分やつれてもゐませう。その家庭に勞れた女と、今でもやつぱり昔のやうに若いあなたとが差し向ひになつて、向うは昔通り眞面目な口の利きやうをする。あなたはあなたで、世の中をすねたやうなソフィストらしい口の利きやうをする。長い間離れてゐた二つの心が突然又ぶつかつて、一度は驚いて、それから段々互に昔の面影を探し始める——側で聞いてゐても隨分面白さうに思はれますがね。

客。（强いて冷やかに）さう藝術的に行けば好いがね。併し、なんだね、唯逢つて見るだけなら、ちよいと面白いかも知れないね。（間。迷つて）いや、よさう。やつぱり廢した方が好い。（又段々落ちついた本當の諦めになる）僕といふ人間はやつぱりかうして今まで通りにやつてる方が好いんだ。親しみのない世間を放浪して、始終「假の宿」にゐるやうな落ち附かない氣持てゐる方が好いんだ。少しでも親しみのありさうな世界へ足を突つ込むと、直ぐその氣になつちまふ質なんだからね。どうしたつて決局世間は人間に親しいもんぢやないんだから、やつぱりそんな危險なシチユエエションには近づかない方が得策だと思ふ。僕は今の僕で澤山だ。この儘一生ぐづ〳〵言ひながら、死ぬまで生きてればそれて好いんだ。どう引つくり返して見たつて、どうせ人生はさういふもんなんだから。

主人。（一旦得た地歩を又失なつて、氣の毒さうに寂しく笑ふ）

〔女中登場。ビールの新らしい瓶と、手紙を一通手にしてゐる。〕

女中。若旦那樣。どうも相濟みません。先程このお手紙が御一緒に參つてゐたのを、私のゐない間に寺田さんが新聞の下に入れて了つたのを只今までちつとも氣が附かずにゐたのでございます。どうも遲なはりまして。

主人。（快活に）女の手紙ぢやないかい。また寺田の奴檢閲しようとしやがつたな、しやうのない爺いだ。

女中。いいえ、さうぢやございません。全く知らずに新聞の下に入れて了つたんださうでございます

よくお詫びをして呉れつて、寺田さんもさう仰つしやいました。

主人。好いさ、好いさ。(手紙を受け取る)

〔女中退場〕

主人。(手紙をその儘机の上へ置かうとして、ふと差出人の名を見る)おや。

客。どうした。

主人。(或希望を得て)こりや面白い。あの人の弟から來たんですぜ。

客。(恐れるやうに、手紙の封筒を覗いて見る)成程。さうだね。

主人。(得意で)ぢやあ、愈々ほんとうですぜ。きつとその事を言つて來たんです。前から私が色々あなたとの事を聞いてゐましたし、それにあいつゝあなたの事を好終心配してましたから。

客。(心の内に或戰ひが起る)

主人。どうてす。若しさうだつたら會つて見ますか。

客。(強いて自分を抑へる)いや、逢ふまい。

主人。(皮肉に)ぢやあ、この手紙はこの儘明けずに置きませう。(手紙を机の上に置く)

客。(縋るやうに)明けたつて好いぢやないか。

主人。(一層皮肉に)あなたに會ふ氣がないのに、明けて見たつてつまりませんもの。元々私には關係のない事なんですから。

客。（憫みを乞ふやうに）さう言つちまやあ、それつ切りの話だが、でも、折角來た手紙だから――どうせ一度は明けて見るんだらう。

主人。けれども、あなたに關係のない手紙なら今見る必要はないんです。かうやつて外の手紙も（前に女中の持つて來た手紙や端書を指す）見ずにあるんですから。

客。（段々自分が出さうになる）そんな事を言はずに、まあ明けて見給へな。事實を知るだけでも好いぢやないか。

主人。（飽くまで皮肉に）でも、あなたは眞實を知るのが厭な筈でせう。

客。（終に自分の感情を欺く事が出來ないで）ぢやあ、會ふ。會ふよ。ほんとに言へば僕だつて會ひたいんだ。

主人。（喜んで）それ御覽なさい。

客。會ひたいには會ひたいんだが、恐くもあるんだ。

主人。（迫るやうに）ぢや會ひますね。會つて見ますね。

客。會ふ。きつと會ふ。（獨語のやうに）なあに自分さへしつかりしてれば好いんだ。

主人。（力をつけるやうに）さうですとも。（間）ぢやあ明けますよ。

客。（決心して）明け給へ。

〔主人、封筒の口を裂いて、手紙を引き出し、直ぐ讀み始める。或期待の沈默。暫くして、主人

手紙を讀んで了ふ。失望の表情。沈默。」

客。(主人の言葉を待つてゐたが、堪へ切れなくなつて)どうしたね。

主人。(極めてつまらなさうに)姉さんが子供を生んだんださうです。産後の肥立が惡いので、暫く鎌倉の別莊へ行つてるので、自分もそこへ遊びに行つてるといふんです。

客。(がつかりして)それつ切りかい。

主人。それつ切りです。

客。ぢやあ、さつきの話は噓だね。

主人。これの間違ひだつたんですね。

客。なんだ。つまらない。(少し怒つて)だから僕の言はない事ぢやない。

主人。(ほんとに詫まる)どうも濟みません。

客。(叱るやうに)なにも君があやまる事はない。

主人。(負けて、默つて了ふ)

客。やつぱり僕は元の僕なのさ。今朝君の所へ尋ねて來た時の僕なのさ。「新緑病」にかかつて弱つてる僕なのさ。(投げるやうに)それだけの話さ。

主人。(初めて今迄自分の知らなかつた或物に觸れたやうな氣がして來る)

客。何か有りさうになつて來たつて、やつぱり決局なんにも有りやしないのさ。

【稍長き間】

主人。（今まで一度も手を附けなかつたビールを、急に一杯目をつぶつてぐつと飲むと、センチメンタルな震へ聲て）どうです。何處かへこれから飲みに行きませうか。

客。（つまらなさうに）さうさねえ。行つても好いが、やつぱり同じ事だらうぜ。まあ、やつぱりかうやつて話してゐようよ。

主人。（客の氣持に厭されて、立ちかけた腰を又おろす）さうですねえ。ぢやあ、やつぱりかうやつて話してゐませうか。

【沈默。遠くの部屋で鈍い、時計の音がだるさうに十一時を打つ。】



大鹽平八郎

鷗外

一、西町奉行所

天保八年丁酉の歳二月十九日の曉方七つ時に、大阪西町奉行所の門を敲くものがある。西町奉行所と云ふのは、大阪城の大手の方角から、內本町通を西へ行つて、本町橋に掛からうとする北側にあつた。此頃はもう四年前から引き續いての飢饉て、やれ盜人、やれ行倒と、夜中も用事が斷えない。それにきのふの御用日に、月番の東町奉行所へ立會に往つて歸つてからは、奉行堀伊賀守利堅は何かひどく心せはしい様子て、急に西組與力吉田勝右衞門を呼び寄せて、長い間密談をした。それから東町奉行所との間に往反して、けふ十九日にある筈てあつた堀の初入式の巡見が取止になつた。それから家老中泉撰司を以て、奉行所詰のもの一同に、夜中と雖、格別に用心するやうにと云ふ達しがあつた。

そこで門を敲かれた時、門番がすぐに立つて出て、外に來たものの姓名と用事とを聞き取つた。門外に來てゐるのは二人の少年であつた。一人は東組町同心吉見九郎右衛門の倅英太郎、今一人は同組町同心河合郷左衛門の倅八十次郎と名告つた。用向は一大事があつて、吉見九郎右衛門の訴狀を持參したのを、ぢきにお奉行樣に差し出したいと云ふことである。

上下共何か事がありさうに思つてゐた時、一大事と云つたので、それが門番の耳にも相應に強く響いた。門番は猶豫なく潛門をあけて二人の少年を入れた。まだ曉の白けた光が夜闇の衣を僅に穿つてゐる時で、薄曇の空の下、風の無い、沈んだ空氣の中に、二人は寒げに立つてゐる。英太郎は十六歲、八十次郎は十八歲である。

「お奉行樣にぢきに差し上げる書付があるのだな。」門番は念を押した。

「はい。ここに持つてをります。」英太郎が懷を指ざした。

「お前がその吉見九郎右衛門の倅か。なぜ九郎右衛門が自分で持つて來ぬのか。」

「父は病氣で寢てをります。」

「一體東のお奉行所附のものの書付から、なぜそれを西のお奉行所へ持つて來たのだい。」

「西のお奉行樣にでなくては申し上げられないと、父が申しました。」

「ふん。さうか。」門番は八十次郎の方に向いた。「お前はなぜ附いて來たのか。」

「大切な事だから、間違の無いやうに二人で往けと、吉見のをぢさんが言ひ附けました。」

「ふん。お前は河合と言つたな。お前の親父様は承知してお前をよこしたのかい。」

「父は正月の二十七日に出た切、歸つて來ません。」

「さうか。」

門番は二人の若者に對して、こんな問答をした。吉見の父が少年二人を密訴に出したので、門番も猜疑心を起さずに應對して、却つて運びが好かつた。門番の聞き取つた所を、當番のものが中泉に屆ける。中泉が堀に申し上げる。間もなく堀の指圖で、中泉が二人を長屋に呼び入れて、一應取り調べた上訴狀を受け取つた。

堀は前役矢部駿河守定謙の後を襲いで、去年十一月に西町奉行になつて、やう〳〵今月二日に到着した。東西の町奉行は月番交代をして職務を行つてゐて、今月は堀が非番である。東町奉行跡部山城守良弼も去年四月に現職に任ぜられて、七月に到着したのだから、まだ大阪には半年しかをらぬが、兎に角一日の長があるので、堀は引き廻して貰ふと云ふ風になつてゐる。町奉行になつて大阪に來たものは、初入式と云つて、前からゐる町奉行と一しよに、三度に分けて市中を巡見する。初度が北組、二度目が南組、三度目が天滿組である。北組、南組とは大手前は本町通北側、船場は安土町通、西横堀以西は神田町通を界にして、市中を二分してあるのである。天滿組とは北組の北界になつてゐる大川より更に北方に當る地域で、東は材木藏から西は堂島の米市場までの間、天滿の青物市場、天滿宮、總會所等を含んでゐる。北組が二百五十町、南組が二百六十一町、天滿組が百九町ある。豫定通にすると、けふは天滿組を巡見

して、最後に東照宮附近の與力町に出て、夕七つ時には天滿橋筋長柄町を東に入る北側の、迎方東組與力朝岡助之丞が屋敷で休息するのであつた。迎方とは新任の奉行を迎へに江戸に往つて、町與力同心の總代として祝詞を述べ、引き續いて其奉行の在勤中、手許の用を達す與力一人同心二人で、朝岡は其與力である。然るにきのふの御用日の朝、月番跡部の東町奉行所へ立會に往くと、其前日十七日の夜東組同心平山助次郎と云ふものの密訴の事を聞せられた。一大事と云ふ詞が堀の耳を打つたのは此時が始てあつた。それからはどんな事が起つて來るかと、前晩も殆寐ずに心配してゐる。今中泉が一大事の訴狀を持つて二人の少年が來たと云ふのを聞くと、堀はすぐにあの事だなと思つた。堀のためには、中泉が英太郎の手から受け取つて出した書付の內容は、未知の事の發明ではなくて、既知の事の證驗として期待せられてゐるのである。

堀は訴狀を披見した。胸を跳らせながら最初から讀んで行くと、果してきのふ跡部に聞いた、あの事である。陰謀の首領、その與黨などの事は、前に聞いた所と格別の相違は無い。長文の訴狀の末三分の二程は筆者九郎右衞門の身圍である。堀が今少し精しく知りたいと思ふやうな事は書いてなくて、讀んでも讀んでも、陰謀に對する九郎右衞門の立場、疑懼、愁訴である。きのふから氣に掛かつてゐる所謂一大事がこれからどう發展して行くだらうか、それが堀自身にどう影響するだらうかと、とつおいつ考へながら讀むので、動もすれば二行も三行も讀んでから、書いてある意味が少しも分かつてをらぬのに氣が附く。はつと思つては又讀み返す。やう／＼讀んでしまつて、堀の心の內には、きのふから知つて

ゐる事の外に、これ丈の事が殘つた。陰謀の與黨の中で、筆者と東組與力渡邊良左衞門、同組同心河合郷左衞門との三人は、首領を諫めて陰謀を止めさせようとした。併し首領が聽かぬ。そこで河合は逐電した。筆者は正月三日後に風を引いて、續いて持病が起つて寢てゐるので、渡邊を以て首領にことわらせた。此體では事を擧げられる日になつても、取詮働くことは出來ぬから、切腹して詫びようと云つたのである。渡邊は首領の返事を傳へた。それならゆる〳〵保養しろ。場合によつては立ち退けと云ふことである。これを傳へると同時に、渡邊は自分が是非なく首領と進退を共にすると決心したことを話した。次いで首領は倅と渡邊とを見舞によこした。筆者は病中やう〳〵の事で訴狀を書いた。それを支配を受けてゐる東町奉行に出さうには、取次を賴むべき人が無い。そこで隔所を見計らつて托訴をする。筆者は自分と倅英太郎以下の血族との赦免を願ひたい。尤も自分は與黨を召し捕られる時には、矢張召し捕つて貰ひたい。或は其間に自殺するかも知れない。留置、預けなどと云ふことにせられては、病體で凌ぎ兼ねるから、それは罷にして貰ひたい。倅英太郎は首領の立てゝゐる塾で、人質のやうになつてゐて歸つて來ない。兎に角自分と一族とを赦免して貰ひたい。それから西組與力見習に内山彥次郎と云ふものがゐる。これは首領に嫉まれてゐるから、保護を加へて貰ひたいと云ふのである。

讀んでしまつて、堀は前から懷いてゐた憂慮は別として、此訴狀の筆者に對する一種の侮蔑の念を起さずにはゐられなかつた。形式に絡まれた役人生涯に慣れてはゐても、成立してゐる秩序を維持するために、賞讃すべきものにしてある返忠を、眞の忠誠だと看ることは、生れ附いた人間の感情が許さない。

その上自分の心中の私を去ることを難んずる人程、却つて他人の意中の私を許くに敏なものである。九郎右衛門は一しよに召し捕られたいと云ふ。それは責を引く潔い心ではなくて、與黨を怖れ、世間を憚る臆病である。又自殺するかも知れぬと云ふ。それは覺束ない。自殺することが出來るなら、なぜ先づ自殺して後に訴收を貽さうとはしない。又牢に入れてくれるなと云ふ。大阪の牢屋から生きて還るものゝ少いのは公然の秘密だから、病體でなくても、入らずに濟めば入るまいとする筈である。横着者だなとは思つたが、役慣れた堀は、公儀のお役に立つ返忠のものを、周章の間にも非難しようとはしない。家老に言ひ附けて、少年二人を目通りへ出させた。

「吉見英太郎と云ふのはお前か。」

「はい。」怜悧らしい目を見張つて、存外怯れた様子もなく堀を仰ぎ視た。

「父九郎右衛門は病氣で寢てをるのぢやな。」

「風邪の跡で持病の疝痛痔疾が起りまして、行歩が慨ひませぬ。」

「書付にはお前は内へ歸られぬと書いてあるが、どうして歸られた。」

「父は歸られぬかも知れぬが、大變になるまでに脱けて出られるなら、出て來いと申し付けてをりました。さう申したのは十三日に見舞に參つた時の事でございます。それから一しよに塾にゐる河合八十次郎と相談いたしまして、昨晩四つ時に脱けて歸りました。先生の所にはお客が大勢ありまして、混雜いたしてゐましたので、出られたのでございます。それから。」英太郎は何か言ひさして口を噤んだ。

堀は暫く待つてゐたが、英太郎は默つてゐる。「それからどういたした」と、堀が問うた。
「それから父が申しました。東のお奉行所には瀨田と小泉とが當番て出てをりますから、それを申し上げいと申しました。」
「さうか。」東組與力瀨田濟之助、同小泉淵次郎の二人が連判に加はつてゐると云ふことは、平山の口上にもあつたのである。
堀は八十次郎の方に向いた。「お前が河合八十次郎か。」
「はい。」頰の圓い英太郎と違つて、これは面長な少年であるが、同じやうに小氣が利いてゐて、臆する氣色は無い。
「お前の父はどういたしたのぢや。」
「母が申しました。先月の二十六日の晩であつたさうでございます。父は先生の所から歸つて、火箸て打擲せられて殘念だと申したさうでございます。あくる朝父は弟の謹之助を連れて、天滿宮へ參ると云つて出ましたが、それ切どちらへ參つたか、歸りません。」
「さうか。もう宜しい。」かう云つて堀は中泉を顧みた。
「いかが取り計らひませう」と、中泉が主人の氣色を伺つた。
「番人を附けて留め置け。」かう云つて置いて、堀は座を立つた。
堀は居間に歸つて不安らしい樣子をしてゐたが、忙しげに手紙を書き出した。これは東町奉行に宛て

て、當方にも訴人があつた、當番の瀨田、小泉に油斷せられるな、追附參上すると書いたのである。堀はそれを持たせて使を出した跡で、暫く腕組をして强ひて氣を落ち着けようとしてゐた。

堀はきのふ跡部に陰謀者の方略を聞いた。けふの巡見を取り止めたのはそのためである。然るに只三月と書いて日附をせぬ吉見の訴狀には、その方略は書いてない。吉見が未明に倅を托訴に出したのを見ると、方略を知らぬのではない。書き入れる暇がなかつたのだらう。東町奉行所へ訴へた平山は、今月十五日に渡邊良左衞門が來て、十九日の手筈を話し、翌十六日に同志一同が集まつた席で、首領が方略を打ち明けたと云つたさうである。それは跡部と自分とが與力朝岡の役宅に休息してゐる所へ襲つて來ようと云ふのである。一體吉見の訴狀にはなんと云つてあつたか。それに添へてある檄文にはどう書いてあるか。好く見て置かうと堀は考へて、書類を袖の中から出した。

堀は不安らしい目附をして、二つの文書をあちこち見競べた。陰謀に對してどう云ふ手段を取らうと云ふ成案がないので、すぐに跡部の所へ往かずに書面を遣つたが、安坐して考へても、思案が纏まらない。併し何かせずにはゐられぬので、文書を調べ始めたのである。

訴狀には「御城、御役所、其外組屋敷等火攻の謀」と書いてある。檄文には無道の役人を誅し、次に金持の町人共を懲すと云つてある。兎に角恐ろしい陰謀である。昨晚跡部からの書狀には、慥な與力共の言分によれば、さ程の事ではないかも知れぬから、兼て打ち合せたやうに捕方を出すことは見合せてくれと云つてあつた。それで少し安心して、こつちから吉田を出すことも控へて置いた。併し數人の中

分がから符合して見れば、容易な事ではあるまい。跡部はどうする積だらうか。手紙を遣つたのだから、なんとか云つて來さうなものだ。こんな事を考へて、堀は時の移るのをも知らずにゐた。

二、東町奉行所

東町奉行所で、奉行跡部山城守良弼が堀の手紙を受け取つたのは、明六つ時頃であつた。

大阪の東町奉行所は城の京橋口の外、京橋通と谷町との角屋敷で、天滿橋の南詰東側にあつた。東は城、西は谷町の通である。南の島町通には街を隔てて籾藏がある。北は京橋通の河岸で、書院の庭から見れば、對岸天滿組の人家が一目に見える。只庭の外圍に梅の立木があつて、少し展望を遮るだけである。

跡部もきのふから堀と同じやうな心配をしてゐる。きのふの御用日にわざと落ち着いて、平常の事務を片附けて、それから平山の密訴した陰謀に對する處置を、堀と相談して別れた後、堀が吉田を呼んだやうに、跡部は東組與力の中で、あれかこれかと慥かなものを選り拔いて、とう〳〵荻野勘左衞門、同人倅四郎助、磯矢頼母の三人を呼び出した。頼母と四郎助とは陰謀の首領を師と仰いでゐるものではあるが、半年以上使つてゐるうちに、その師弟の關係は讀書の上ばかりで、師の家とは疎遠にしてゐるのが分かつた。「あの先生は學問はえらいが、肝積持で困ります」などと、四郎助が云つたこともある。「そんな男か」と跡部が聞くと、「矢部樣の前でお話をしてゐるうちに激して來て、六寸もある金頭を頭からめり〳〵と咬んで食べたさうでございます」と云つた。それに此三人は半年の間跡部の言ひ付けた用事を、

人一倍念入にしてゐる。そこを見込んで跡部が呼び出したのである。

さて捕方の事を言ひ付けると、三人共思ひも掛けぬ樣子て、良久しく顏を見合せて考へた上て云つた。平山が訴はいかにも實事とは信ぜられない。例の肝積持の放言を眞に受けたのてはあるまいか。お受はいたすが、餘所ながら樣子を見て、いよ〳〵實正と知れてから手を着けたいと、折り入つて申し出た。後に跡部の手紙て此事を聞いた堀よりは、三人の態度を目のあたり見た跡部は、一層切實に忌々しい陰謀事件が譃かも知れぬと云ふ想像に伴ふ、一種の安心を感じた。そこて逮捕を見合せた。

跡部は荻野等の話を聞いてから考へて見て、平山に今一度一大事を聞いた前後の事を精しく聞いて置けば好かつたと後悔した。をとつひの夜平山が來て、用人野々村次平に取り次いて貰つて、所謂一大事の訴をした時、跡部は急に思案して、突飛な手段を取つた。尋常なら平山を留め置いて、陰謀を鎭壓する手段を取るべきてあるのに、跡部はその決心が出來なかつた。若し平山を留め置いたら、陰謀者が露顯を悟つて、急に事を擧げはすまいかと懼れ、さりとて平山を手放して此土地に置くのも心許ないと思つたのてある。そこて江戶て勘定奉行になつてゐる前任西町奉行矢部駿河守定謙に當てた私信を書いて、平山にそれを持たせて、急に江戶へ立たせたのてある。平山はきのふ曉七つ時に、小者多助、雇人彌助を連れて大阪を立つた。そして後十二日目の二月二十九日に、江戶の矢部が邸に着いた。

意志の確かてない跡部は、荻野等三人の詞をたやすく聽き納れて、逮捕の事を見合せたが、旣にそれを見合せて置いて見ると、その見合せが自分の責任に歸すると云ふ所から、疑懼が生じて來た。延期は

自分が極めて堀に言つて遣つた。若し手遅れと云ふ問題が起ると、堀は免れて自分は免れぬのである。跡部が丁度この新に生じた疑懼に惱まされてゐる所へ、堀の使が手紙を持つて來た。同じ陰謀に就いて西奉行所へも訴人が出た、今日當番の瀬田、小泉に油斷をするなと云ふ手紙である。

　跡部は此手紙を讀んで突然決心して、當番の瀬田、小泉に手を着けることにした。此決心には少し不思議な處がある。堀の手紙には何一つ前に平山が訴へたより以上の事實を書いては無い。瀬田、小泉が陰謀の與黨だと云ふことは、既に平山が云つたので、荻野等三人に内命を下すにも、跡部は綿密な警戒をした。さうして見れば、堀の手紙によつて得た所は、今まで平山一人の訴で聞いてゐた事が、更に吉見と云ふものの訴で繰り返されたと云ふに過ぎない。これには決心を促す動機としての價値は殆無い。然るにその決心が跡部には出來て、前には腫物に障るやうにして平山を江戸へ立たせて置きながら、今は目前の瀬田、小泉に手を着けようとする。これは一昨日の夜平山の密訴を聞いた時にすべき決心を、今偶然の機縁に觸れてしたやうなものである。

　跡部は荻野等を呼んで、二人を捕へることを命じた。その手筈はかうである。奉行所に詰めるものは、先づ刀を脱して詰所の刀架に懸ける。そこで脇差ばかり挿してゐて、奉行に呼ばれると、脇差をも疊廊下に抜いて置いて、無腰で御用談の間に出る。この御用談の間に呼んで捕へようと云ふのが手筈である。併し萬一の事があつたら切り棄てる外ないと云ふので、奉行所に居合せた劍術の師一條一(はじめ)が切棄の役を引き受けた。

さて跡部は瀨田、小泉の二人を呼ばせた。それを聞いた時、瀨田は「暫時御猶豫を」と云つて便所に起つた。小泉は一人いつもの疊廊下まで來て、脇差を拔いて下に置かうとした。此疊廊下の横手に奉行の近習部屋がある。小泉が脇差を下に置くや否や、その近習部屋から一人の男が飛び出して、脇差に手を掛けた。「はつ」と思つた小泉は、一旦手を放した脇差を又掴んだ。引き合ふはづみに鞘走つて、とう〳〵小泉が手に白刃が殘つた。様子を見てゐた跡部が、「それ、切り棄てい」と云ふと、弓の間まで踏み出した小泉の背後から、一條が百會の下へ二寸程切り附けた。次に右の肩尖を四寸程切り込んだ。小泉がよろめく所を、右の脇腹へ突を一本食はせた。東組與力小泉淵次郎は十八歳を一期として、陰謀第一の犧牲として命を隕した。花のやうな許嫁の妻があつたさうである。

便所にゐた瀨田は素足で庭へ飛び出して、一本の梅の木を足場にして、奉行所の北側の塀を乗り越した。そして天滿橋を北へ渡つて、陰謀の首領大鹽平八郎の家へ奔つた。

三、四軒屋敷

天滿橋筋長柄町を東に入つて、角から二軒目の南側て、所謂四軒屋敷の中に、東組與力大鹽格之助の役宅がある。主人は今年二十七歳て、同じ組與力西田青太夫の弟に生れたのを、養父平八郎が貰つて置いて、七年前にお暇になる時、番代に立たせたのである。併し此家ては當主は一向當主らしくなく、今年四十五歳になる隱居平八郎が萬事の指圖をしてゐる。

玄關を上がつて右が舊塾と云つて、ここには平八郎が隱居する數年前から、その學風を慕つて寄宿し

たものがゐる。左は講堂で、讀禮堂と云ふ匾額が懸けてある。その東隣が後に他家を買ひ潰して廣げた新塾である。講堂の背後が平八郎の書齋で、中齋と名づけてある。それから奥、東照宮の境内の方へ向いた部屋々々が家内のものの居所で、食事の時などに集まる廣間には、鏡中看花館と云ふ匾額が懸かつてゐる。これだけの建物の内に起臥してゐるものは、家族でも學生でも、悉く平八郎が獨裁の杖の下に項を屈してゐる。當主格之助などは、舊塾に九人、新塾に十餘人ゐる平の學生に比べて、殆何等の特權をも有してをらぬのである。

東町奉行所で白刃の下を脱れて、瀬田濟之助が此屋敷に駈け込んで來た時の屋敷は、決して此出來事を青天の霹靂として聞くやうな、平穩無事の光景ではなかつた。家内中の女小供はもう十二日前に悉く立ち退かせてある。平八郎が二十六歳で番代に出た年に雇つた妾、曾根崎新地の茶屋大黒屋和市の娘ひろ、後の名ゆうが四十歳、七年前に格之助が十九歳で番代に出た時に雇つた妾、般若寺村の庄屋橋本忠兵衛の娘みねが十七歳、平八郎が叔父宮脇志摩の二女を五年前に養女にしたいくが九歳、大鹽家にゐた女は此三人で、それに去年の暮にみねの生んだ弓太郎を附け、女中りつを連れさせて、ゆうがためには義兄、みねがためには實父に當る、般若寺村の橋本方へ立ち退かせたのである。

女小供がをらぬばかりでは無い。屋敷は近頃急に殺風景になつてゐる。それは兼て門人の籍にゐる兵庫西出町の柴屋長太夫、其外縁故のある商人に買つて納めさせ、又學生が失錯をする度に、科料の代に父兄に買つて納めさせた書籍が、玄關から講堂、書齋へ掛けて、二三段に積んだ本箱の中にあつたのに、

今月に入つてからそれを悉く運び出させ、土藏にあつた一切經などをさへそれに加へて、書店河内屋喜兵衞、同新次郎、同記一兵衞、同茂兵衞の四人の手て銀に換へさせ、飢饉續きのために難儀する人民に施すのだと云つて、安堂寺町五丁目の本屋會所て、親類や門下生に緣故のある凡三十三町村のもの一萬軒に、一軒一朱の割を以て配つた。質素な家の唯一の裝飾になつてゐた書籍が無くなつたので、家はがらんとしてしまつた。

今一つ此家の外貌が傷けられてゐるのは、職人を入れて兵器彈藥を製造させてゐるからである。町與力は武藝を以て奉公してゐる上に、隱居平八郎は玉造組與力柴田勘兵衞の門人で、佐分利流の槍を使ふ。當主格之助は同組同心故人藤重孫三郎の門人で、中島流の大筒を打つ。中にも砲術家は大筒をも貯へ、火藥をも製する習てはあるが、此家てはそれが格別に盛んになつてゐる。去年九月の事てあつた。平八郎は格之助の師藤重の伜良左衞門、孫槌太郎の兩人を呼んて、今年の春堺七堂が濱て格之助に丁打をさせる相談をした。それから平八郎、格之助の部屋の附近に戸締をして、塾生を使つて火藥を製させる。棒火矢、炮碌玉を作らせる。職人を入れると、口實を設けて再び外へ出なさい。火矢の材木を挽き切つた天滿北木幡町の大工作兵衞などがそれてある。かう云ふ製造は昨晩まで續けられてゐた。大筒は人から買ひ取つた百目筒が一挺、人から借り入れて返さずにある百目筒が二挺、門人守口村の百姓兼質商白井孝右衞門が土藏の側の松の木を伐つて作つた木筒が二挺ある。砲車は石を運ぶ車だと云つて作らせた。要するに此半年ばかりの間に、絃誦洋々の地が次第は喧噪と雜遝とを常とする工場になつてゐたので

ある。

家がそんな模樣になつてゐて、そこへ重立つた門人共の寄り合つて、夜の更けるまで還らぬことが、此頃次第に度重なつて來てゐる。昨夜は隱居と當主との妾の家元、攝津般若寺村の庄屋橋本忠兵衞、物持て大鹽家の生計を助けてゐる、攝津守口村の百姓兼質屋白井孝右衞門、東組與力渡邊良左衞門、同組同心庄司義左衞門、同組同心の倅近藤梶五郎、般若寺村の百姓柏岡源右衞門、同倅傳七、河內門眞三番村の百姓茨田郡次の八人が酒を飮みながら話をしてゐて、折々いつもの人を壓伏するやうな調子の、隱居の聲が漏れた。平生最も隱居に親んでゐる此八人の門人は、とう〳〵屋敷に泊まつてしまつた。此頃は客があつてもなくても、勝手の爲事は、兼て塾の賄方をしてゐる杉山三平が、人夫を使つて取り賄つてゐる。杉山は河內國衣摺村の庄屋て、何か仔細があつて所拂になつたものださうである。手近な用を達すのは、格之助の若黨大和國曾我村生の曾我岩藏、中間木八、吉助である。女はうたと云ふ女中が一人、傍輩のりつがお部屋に附いて立ち退いた跡て、頻に暇を貰ひたがるのを、宥め賺して引き留めてあるばかりて、格別物の用には立つてゐない。そこでけさ奧にゐるものは、隱居平八郎、當主格之助、賄方杉山、若黨曾我、中間木八、吉助、女中うたの七人、昨夜の泊客八人、合計十五人て、其外には屋敷內の舊塾、新塾の學生、職人、人夫抔がゐたのである。

瀨田濟之助はかう云ふ中へ駆け込んで來た。

四、宇津木と岡田と

新塾にゐる學生のうちに、三年前に來て寄宿し、翌年一旦立ち去つて、去年再び來た宇津木矩之允と云ふものがある。平八郎の著した大學刮目に訓點を施した一人で、大鹽の門人中學力の優れた方である。此宇津木が一昨年九州に遊歷して、連れて來た孫弟子がある。これは長崎西築町の醫師岡田道玄の子で、名を良之進と云ふ。宇津木に連れられて親元を離れた時が十四歳だから、今年十六歳になつてゐる。

この岡田と云ふ少年が、けさ六つ半に目を醒ました。職人が多く入り込むやうになつてから、隨分騷がしい家ではあるが、けさは又格別である。がた〳〵、めり〳〵、みし〳〵と、物を打ち毀す音がする。しかと聽き定めようとして、床の上にすわつてゐるうちに、今毀してゐる物が障子襖だと云ふことが分かつた。それに雜つて人聲がする。「役に立たぬものは討ち棄てい」と云ふ詞がはつきり聞えた。岡田は怜悧な、思慮のある少年であつたが、餘り思ひ掛けぬ事なので、一旦夢ではないかと思つた。それから宇津木先生はどうしてゐるかと思つて、頸を延ばして見ると、先生はいつもの通に着布團の襟を頤の下に挾むやうにして寢てゐる。物音は次第に劇しくなる。岡田は心のはつきりすると共に、尋常でない此屋敷の現狀が意識に上つて來た。

岡田は跳ね起きた。宇津木の枕元にゐざり寄つて、「先生」と聲を掛けた。

宇津木は默つて目を大きく開いた。眠つてはゐなかつたのである。

「先生。えらい騷ぎでございますが。」

「うん。知つてをる。己は餘り人を信じ過ぎて、君をまで危地に置いた。こらへてくれ給へ。去年の秋からの丁打の支度が、仰山だとは己も思つた。それに門人中の老輩數人と、塾生の一半とが、次第に我々と疎遠になつて、何か我々の知らぬ事を知つてをるらしい素振をする。それを怪しいとは己も思つた。併し己はゆうべまで事の眞相を看破することが出來なかつた。所が君、ゆうべ塾生一同に申し渡すことがあると云つて呼んだ、あの時の事だね。己は代りに聞いて來て遣ると云つて、君を殘して置いて出席した。それから歸つて、格別な事でもないから、あした話すと云つて寢たのだがね、實はあの時例の老輩共と酒宴をしてゐた先生が、獨り席を起つて我々の集まつてゐる所へ出て來て、かう云つたのだ。一大事があるが、お前方はどう身を處置するか承知したいと云つたのだ。己は一大事とは何事か問うて見た。先生はざつとこんな事を說かれた。我々は平生良知の學を攻めてゐる。あれは根本の致だ。然るに今の天下の形勢は枝葉を病んでゐる。民の疲弊は窮まつてゐる。草妨礙あらば、理亦宜しく去るべしである。天下のために殘賊を除かんてはならぬと云ふのだ。そこて其殘賊だがな。」

「はあ」と云つて、岡田は目を睜つた。

「先づ町奉行衆位の所らしい。それがなんになる。我々は實に先生を見損つてをつたのだ。先生の眼中には將軍家もなければ、朝廷もない。先生はそこまでは考へてをられぬらしい。」

「そんなら今事を擧げられるのですね。」

「さうだ。家には火を掛け、與せぬものは切り棄てゝ立つと云ふのだらう。併しあの物音のするのは奥

から書齋の邊だ。まだ舊塾もある。講堂もある。こゝまで來るには少し暇がある。まあ、聞き給へ。例の先生の流義だから、ゆうべも誰一人抗爭するものはなかつた。己は明朝御返事をすると云つて一時を糊塗した。若し諫める機會があつたら、諫めて陰謀を思ひ止まらせよう。それが出來なかつたら、師となり弟子となつたのが命だ、甘んじて死なうと決心した。そこで君だがね。」

岡田は又「はあ」と云つて耳を欹てた。

「君は中齋先生の弟子ではない。己は君に此場を立ち退いて貰ひたい。擧兵の時期が最も好い。若しどうすると問ふものがあつたら、お供をすると云ひ給へ。さう云つて置いて逃げるのだ。己はゆうべ寢られぬから墓誌銘を自撰した。それを今書いて君に遣る。それから京都東本願寺家の粟津陸奥之助と云ふものに、己の心血を灑いだ詩文稿が借してある。君は京都へ往つてそれを受け取つて、彦根にゐる兄下總の邸へ往つて、大林權之進と云ふものに逢つて、詩文稿に墓誌銘を添へてわたしてくれ給へ。」かう云ひながら宇津木はゆつくり起きて、机に靠つたが、宿墨に筆を浸して、有り合せた美濃紙二枚に、一字の書損もなく腹藁の文章を書いた。書き畢つて一讀して、「さあ、これだ」と云つて岡田にわたした。

岡田は草稿を受け取りながら、「併し先生」と何やら言ひ出しさうにした。

宇津木は「ちよいと」と云ひ掛けて、便所へ立つた。

手に草稿を持つた儘、ぢつとして考へてゐる岡田の耳に、廊下一つを隔てた講堂の口あたりから人聲が聞えた。

「先生の指圖通、宇津木を遣つてしまふのだ。君は出口て見張つてゐてくれ給へ。」聞き馴れた門人大井の聲てある。玉造組與力の倅て、名は正一郎と云ふ。三十五歳になる。

「宜しい。しつかり遣り給へ。」これは安田圖書の聲てある。外宮の御師て、三十三歳になる。

岡田はそつと立つて便所の戸口へ往つた。「殺しに來ます。」

「好い。君早く逃げてくれ給へ。」

「併し。」

「早くせんと駄目だ。」

廊下を忍び寄る大井の足音がする。岡田は草稿を懐に捩ち込んて、机の所へ小鼠のやうに走り戻つて、鐵の文鎭を手に持つた。そして跣足て庭に飛び下りて、植込の中を潜つて、塀にぴつたり身を寄せた。

大井は抜刀を手にして新塾に這入つて來た。先づ寢床の温みを探つて、あたりを見廻して、便所の口に來て、立ち留まつた。暫くして便所の戸に手を掛けて開けた。

中から無腰の宇津木が、恬然たる態度て出て來た。

大井は戸から手を放して一歩下がつた。そして刀を構へながら言分けらしく「先生のお指圖だ」と云つた。

宇津木は「うん」と云つた切、棒立に立つてゐる。

大井は酔人を虎が食ひ兼ねるやうに、良久しく立ち竦んてゐたが、やう〳〵思ひ切つて、「やつ」と聲

を掛けて眞甲を目掛けて切り下した。宇津木が刀を受け取るやうに、俯向加減になつたので、百會の背後が縦に六寸程骨まで切れた。宇津木は其儘立つてゐる。大井は少し慌てながら、二の太刀で宇津木の腹を刺した。刀は臍の上から背へ抜けた。宇津木は縁側にぺたりとすわつた。大井は背後へ押し倒して喉を刺した。

塀際にゐた岡田は、宇津木の最期を見屆けるや否や、塀に沿うて東照宮の境内へ抜ける非常口に駆け附けた。そして錠前を文鎭で開けて、こつそり大鹽の屋敷を出た。岡田は二十日に京都に立ち寄つて、二十一日には彦根へ着いた。

五、門出

瀬田濟之助が東町奉行所の危急を逃れて、大鹽の屋敷へ駆け込んだのは、明六つを少し過ぎた時であつた。

書齋の襖をあけて見ると、ゆうべ泊つた八人の與黨、その外中船場町の醫師の倅で僅に十四歳になる松本隣太夫、天滿五丁目の商人阿部長助、攝津澤上江村の百姓上田孝太郎、河内門眞三番村の百姓高橋九右衞門、河内弓削村の百姓西村利三郎、河内尊延寺村の百姓深尾才次郎、播磨西村の百姓堀井儀三郎、近江小川村の醫師志村力之助、大井、安田等に取り巻かれて、平八郎は茵の上に端坐してゐた。

身の丈五尺五六寸の、面長な、色の白い男で、四十五歳にしては老人らしい所が無い。濃い、細い眉は弔つてゐるが、張の強い、鋭い目は眉程には弔つてゐない。廣い額に青筋がある。髷は短く詰めて結つて

ゐる。月題は薄い。一度喀血したことがあつて、口の惡い男には青瓢簞と云はれたと云ふが、現にもと頷かれる。

「先生。御用心をなさい。手入れがあります。」驅け込んで、平八郎が前にすわりながら、瀨田は叫んだ。

「さうだらう。巡見が取止になつたには、仔細がなうてはならぬ。江戶へ立つた平山の所爲だ。」

「小泉は遣られました。」

「さうか。」

目を見合せた一座の中には、同情のささやきが起つた。

平八郎は一座をずつと見わたした。「兼ての手筈の通りに打ち立たう。棄て置き難いのは宇津木一人だが、その處置は大井と安田に任せる。」

大井、安田の二人はすぐに起たうとした。

「まあ待て。打ち立つてからの順序は、只第一段を除いて、すぐに第二段に掛かるまでぢや。」第一段とは朝岡の家を襲ふことゝて、第二段とは北船場へ進むことゝてある。これは方略に極めてあつたのてある。

「さあ」と瀨田が聲を掛けて一座を顧みると、皆席を起つた。中て人夫の募集を受け合つてゐた柏岡傳七と、檄文を配る役になつてゐた上田とは屋敷を出て往つた。間もなく家財や、はづした建具を奧庭へ運び出す音がし出した。

平八郎は其儘端坐してゐる。そして熱した心の內を、此陰謀がいかに萌芽し、いかに生長し、いかな

る曲折を經て今に至つたと云ふことが、夢のやうに往來する。平八郎はかう思ひ續けた。己が自分の材幹と値遇とによつて、吏胥として成し遂げられるだけの事を成し遂げた上で、身を引いた天保元年は泰平であつた。民の休戚が米作の豐凶に繫つてゐる國では、豐年は泰平である。二年も豐作であつた。三年から氣候が不順になつて、四年には東北の洪水のために、天明六七年以來の飢饉になつた。五年に稍常に復しさうに見えるかと思ふと、冬から六年の春に掛けて雨がない。六年には東北に蝗蟲が出來る。海嘯がある。とう／＼去年は五月から雨續きで、冬のやうに寒く、秋は大風大水があり、東北を始として全國の不作になつた。己は隱居してから心を著述に專にして、古本大學刮目、洗心洞劄記、同附錄抄、儒門空虛聚語、孝經彙註の刻本が次第に完成し、劄記を富士山の石室に藏し、又足代權太夫弘訓の勸によつて、宮崎、林崎の兩文庫に納めて、學者としての志をも遂げたのだが、連年の飢饉、賤民の困窮を、目を塞いで見ずにはをられなかつた。そしてそれに對する町奉行以下諸役人の處置に平かなることが出來なかつた。賑恤もする。造酒に制限も加へる。併し民の疾苦は增すばかりで減じはせぬ。殊に去年から與力內山を使つて東町奉行跡部の遣つてゐる爲事が氣に食はぬ。幕命によつて江戶へ米を廻漕するのは好い。併し些しの米を京都に輸ることをも拒んで、細民が大阪へ小買に出ると、捕縛するのは何事だ。己は王道の大體を學んで、功利の末技を知らぬ。上の驕奢と下の疲弊とがこれまでになつたのを見ては、己にも策の施すべきものが無い。併し理を以て推せば、これが人世必然の勢だとして旁看するか、町奉行以下諸役人や市中の富豪に進んで救濟の法を講ぜさせるか、諸役人を誅し富豪を脅して其私蓄を散ず

るかの三つより外あるまい。己は此不平に甘んじて旁看してはをられぬ。己は諸役人や富豪が大阪のために謀つてくれようとも信ぜぬ。己はとう〳〵誅伐と脅迫とによつて事を濟さうと思ひ立つた。鹿臺の財を發するには、無道の商を滅さんてはならぬと考へたのだ。己が意を此に決し、言を彼に托し、格之助に丁打をさせると稱して、準備に取り掛つたのは、去年の秋であつた。それからは不平の事は日を逐うて加はつても、準備の捗つて行くのを顧みて、慰藉を其中に求めてゐた。其間に半年立つた。さてけふになつて見れば、心に逡巡する怯もないが、又踊躍する競もない。準備をしてゐる久しい間には、折々成功の時の光景が幻のやうに目に浮かんで、地上に血を流す役人、脚下に頭を叩く金持、それから草木の風に靡くやうに來り附する諸民が見えた。それが近頃はもうそんな幻も見えなくなつた。己はまだ三十代で役を勤めてゐた頃、高井殿に信任せられて、耶蘇教徒を逮捕したり、奸吏を糺彈したり、破戒僧を羅致したりしてゐながら、老婆豐田貢の磔になる所や、兩組與力弓削新右衛門の切腹する所や、大勢の坊主が珠數繋にせられる所を幻に見ることがあつたが、それは皆間もなく事實になつた。そして事實になるまで、己の胸には一度も疑が萌さなかつた。今度はどうもあの時とは違ふ。それにあの時は己の意圖が先づ恣に動いて、外界の事柄がそれに附隨して來た。今度の事になつてからは、己は準備をしてゐる間、何時でも用に立てられる左劵を握つてゐるやうに思つて、それを慰藉にした丈で、動もすれば其準備を永く準備の儘で置きたいやうな氣がした。けふまでに事柄の捗つて來たのは、事柄其物が自然に捗つて來たのだと云つても好い。己が陰謀を推して進めたのではなくて、陰謀が己を拉して走つたのだと云

つても好い。一體此終局はどうなり行くだらう。平八郎はかう思ひ續けた。

平八郎が書齋で沈思してゐる間に、事柄は實際自然に捗つて行く。屋敷中に立ち別れた與黨の人々は、受持々々の爲事をする。時々書齋の入口まで來て、今宇津木を討ち果したとか、今奥庭に積み上げた家財に火を掛けたとか、知らせるものがあるが、其度毎に平八郎は只一目そつちを見る丈である。

さていよ／\勢揃をすることになつた。場所は兼て東照宮の境内を使ふことにしてある。そこへ出る時人々は始て非常口の錠前の開いてゐたのを知つた。行列の眞つ先に押し立てたのは救民と書いた四半の旗である。次に中に天照皇大神宮、右に湯武兩聖王、左に八幡大菩薩と書いた旗、五七の桐に二つ引の旗を立てて行く。次に木筒が二挺行く。次は大井と庄司とで各小筒を持つ。次に格之助が着込野袴で、白木綿の鉢巻を締めて行く。下辻村の獵師金助がそれに引き添ふ。次に大筒が二挺と鑓を持つた雜人とが行く。次に略格之助と同じ支度の平八郎が、黒羅紗の羽織、野袴で行く。茨田と杉山とが鑓を持つて左右に隨ふ。若黨曾我と中間木八、吉助とが背後に附き添ふ。次に相圖の太鼓が行く。平八郎の手には高橋、堀井、安田、松本等の與黨がゐる。次は渡邊、志村、近藤、深尾、父柏岡等重立つた人々で、特に平八郎に親しい白井や橋本も此中にゐる。一同着込帶刀で、多くは手鑓を持つ。押へは大筒一挺を挽かせ、小筒持の雜人二十人を隨へた瀬田で、傍に若黨植松周次、中間淺佶が附いてゐる。

此總人數凡百餘人が屋敷に火を掛け、表側の塀を押し倒して繰り出したのが、朝五つ時である。先づ主人の出勤した跡の、向屋敷朝岡の門に大筒の第一發を打ち込んで、天滿橋筋の長柄町に出て、南へ源

八町まで進んで、與力町を西へ折れた。これは城と東町奉行所とに接してゐる天滿橋を避けて、迂回して船場に向はうとするのである。

六、坂本鉉之助

京町奉行所で小泉を殺し、瀬田を取り逃がした所へ、堀が部下の與力同心を隨へて來た。跡部は堀と相談して、明六つ時にやう／＼三箇條の手配をした。鈴木町の代官根本善左衛門に近郷の取締を托したのが一つ。谷町の代官池田岩之丞に天滿の東照宮、建國寺方面の防備を托したのが二つ。平八郎の母の兄、東組與力大西與五郎が病氣引をしてゐる所へ使を遣つて、甥平八郎に切腹させるか、刺し違へて死ぬるかのうちを選べと云はせたのが三つてある。與五郎の養子善之進は父のために偵察しようとして、長柄町近くへ往くと、もう大鹽の同勢が繰り出すので、驚いて逃げ歸り、父と一しよに西の宮へ奔り、又懼れて大阪へ引き返ししなに、兩刀を海に投げ込んだ。

大西へ使を遣つた跡て、跡部、堀の兩奉行は更に相談して、兩組の與力同心を合併した捕手を大鹽が屋敷へ出した。そのうち朝五つ近くなると、天滿に火の手が上がつて、間もなく砲聲が聞えた。捕手は所詮近寄れぬと云つて歸つた。

兩奉行は鐵砲奉行石渡彦太夫、御手洗伊右衛門に、鐵砲同心を借りに遣つた。同心は二人の部下を併せて四十人てある。次にそれては足らぬと思つて、玉造口定番遠藤但馬守胤統に加勢を願つた。遠藤は公用人畑佐秋之助に命じて、玉造組與力て月番同心支配をしてゐる坂本鉉之助を上屋敷に呼び出した。

坂本は荻野流の砲術者て、けさ丁打をすると云つて、門人を城の東裏にある役宅の裏庭に集めてゐた。そのうち五つ頃になると、天滿に火の手が上がつたので、急いで役宅から近い大番所へ出た。そこに月番の玉造組平與力本多爲助、山寺三二郎、小島鶴之丞が出てゐて、本多が天滿の火事は大鹽平八郎の行爲だと告げた。これは大鹽の屋敷に出入する獵師淸五郎と云ふ者が、火事場に驅け附けて引き返し、同心支配岡翁助に告げたのを、岡か本多に話したのである。坂本はすぐに城の東裏にゐる同じ組の與力同心に總出仕の用意を命じた。間もなく遠藤の總出仕の達しが來て、同時に坂本は上屋敷へ呼ばれたのである。

畑佐の傳へた遠藤の命令はかうである。同心支配一人、與力二人、同心三十人鐵砲を持つて東町奉行所へ出て來い。又同文の命令を京橋組へも傳達せいと云ふのである。坂本は承知の旨を答へて、上屋敷から大番所へ廻つて手配をした。同心支配は三人あるが、これは自分が出ることにし、小頭の與力二人には平與力蒲生熊次郎、本多爲助を當て、同心三十人は自分と同役岡との組から十五人宛出すことにした。集合の場所は土橋と極めた。京橋組への傳達には、當番與力脇勝太郎に書附を持たせて出して遣つた。

手配が濟んで、坂本は役宅に歸つた。そして火事裝束、草鞋掛て、十文目筒を持つて土橋へ出向いた。蒲生と同心三十人とは揃つてゐて、本多がまだ來てゐない。集合を見に來てゐた畑佐は、跡部に二度催促せられて、京橋口へ廻つて東町奉行所に往くことにして、先へ歸つたのださうである。坂本は本多が

ために同心一人を留めて置いて、集合地を發した。堀端を西へ、東町奉行所を指して進むうちに、跡部からの三度目の使者に行き合つた。本多と殘して置いた同心とは途中で追ひ附いた。

坂本が東町奉行所に來て見ると、畑佐はまだ來てゐない。東組與力朝岡助之丞と西組與力近藤三右衞門とが應接して、大筒を用意して貰ひたいと云つた。坂本はそれまでの事には及ばぬと思ひ、又指圖の區々なのを不平に思つたが、それでも馬一頭を借りて蒲生を乘せて、大筒を取り寄せさせに、玉造口定番所へ遣つた。晝四つ時に跡部が坂本を引見した。そして坂本を書院の庭に連れて出て、防備の相談をした。坂本は大川に面した北手の展望を害する梅の木を伐ることと、島町に面した南手の控柱と松の木とに丸太を結び附けて、武者走の板をわたすことを建議した。混雜の中で、跡部の指圖は少しも行はれない。坂本は部下の同心に工事を命じて、自分でそれを見張つてゐた。

坂本が防備の工事をしてゐるうちに、跡部は大鹽の一行が長柄町から南へ迂廻したことを聞いた。そして杣人足の一組に天神橋と難波橋との橋板をこはせと言ひ付けた。

坂本の使者脇は京橋口へ往つて、同心支配廣瀨治左衞門、馬場左十郎に遠藤の命令を傳達した。これは京橋口定番米津丹後守昌壽が、去年十一月に任命せられて、まだ到着せぬので、京橋口も遠藤が預りになつてゐるからである。廣瀨は傳達の書附を見て、首を傾けて何やら思案してゐたが、脇へはいづれ當方から出向いて承らうと云つた。

廣瀨は雪駄穿で東町奉行所に來て、坂本に逢つてから云つた。「只今書面を拜見して、これへ出向いて

參りましたが、原來お互に御城警固の役柄ではありませんか。それをお城の外で使はうと云ふ、遠藤殿の思召が分かり兼ねます。貴殿はどう考へられますか。」

坂本は目を睜つた。「成程自分の役柄は拙者も心得てをります。併し頭遠藤殿の申付であつて見れば、縱ひ生駒山を越してでも出張せんではなりますまい。御覽の通拙者は打支度をいたしてをります。」

「いや。それは頭御自身が御出馬になることなら、拙者もどちらへでも出張しませう。我々ばかりがこんな所へ參つて働いては、町奉行の下知を受けるやうなわけで、體面にも係るではありませんか。先年出水の時、城代松平伊豆守殿へ町奉行が出兵を願つたが、大切の御城警固の者を貸すことは相成らぬと仰やつたやうに聞いてをります。一應御一しよにことわつて見ようぢやありませんか。」

「それは御同意がなり兼ねます。頭の申付なら、拙者は誰の下にでも附いて働きます。その上叛逆人が起つた場合は出水などとは違ひます。貴殿がおことわりになるなら、どうぞお一人で上屋敷へお出になつて下さい。」

「いや。さう云ふ御所存ですか。何事によらず兩組相談の上で取り計らふ慣例でありますから申し出しました。さやうなら以後御相談は申しますまい。」

「已むを得ません。いかやうとも御勝手になさりませい。」

「然らばお暇しませう。」廣瀬は町奉行所を出ようとした。

そこへ京橋口を廻つて來た畑佐が落ち合つて、廣瀬を引き止めて利害を說いた。廣瀬はしぶりながら

納得して引き返したが、暫くして同心三十人を連れて來た。併し自分は矢張草駄穿て、小筒も何も持たなかつた。

坂本は庭に出て、今工事を片附けて持口に附いた同心共を見張つてゐた。そこへ跡部は、相役堀を城代土井大炊頭利位の所へ報告に遣つて置いて、書院から降りて來た。そして天滿の火事を見てゐた。强くはないが、方角の極まらぬ風が折々吹くので、火は人家の立て込んでゐる西南の方へひろがつて行く。大鹽の進む道筋を聞いた坂本が、「いかがでございませう、御出馬になりましては」と跡部に言つた。「さればサ」と云つて、跡部は火事を見てゐる。暫くして坂本が「どうもなかなかこちらへは參りますまいが」と云つた。跡部は矢張「さればサ」と云つて、火事を見つてゐる。

七、船場

大鹽平八郎は天滿與力町を西へ進みながら、平生私曲のあるやうに思つた與力の家々に大筒を打ち込ませて、夫婦町の四辻から綿屋町を南へ折れた。それから天滿宮の側を通つて、天神橋に掛かつた。向うを見れば、もう天神橋はこはされてゐる。ここまで來るうちに、兼て天滿に火事があつたら驅け附けてくれと言ひ付けてあつた近郷の者が寄つて來たり、途中で行き逢つて誘はれたりした者があるので、同勢三百人ばかりになつた。不意に馳せ加はつたものの中に、砲術の心得のある梅田源左衛門と云ふ彥根浪人もあつた。

平八郎は天神橋のこはされたのを見て、菅原町河岸を西へ進んで、門樋橋を渡り、樋上町河岸を難波

橋の袂に出た。見れば天神橋をこはしてしまつて、こちらへ廻つた杣人足が、今難波橋の橋板を剝がさうとしてゐる所である。「それ、渡れ」と云ふと、格之助が先に立つて橋に掛かつた。人足は拔身の鎗を見て、ばら〳〵と散つた。

北濱二丁目の辻に立つて、平八郎は同勢の渡つてしまふのを待つた。そのうち時刻は正午になつた。方略の第二段に襲擊を加へることにしてある大阪富豪の家々は、北船場に簇がつてゐるので、もう悉く指顧の間にある。平八郎は倅格之助、瀨田以下の重立つた人々を呼んで、手筈の通に取り掛かれと命じた。北側の今橋筋には鴻池屋善右衞門、同庄兵衞、同善五郎、天王寺屋五兵衞、平野屋五兵衞等の大商人がゐる。南側の高麗橋筋には三井、岩城桝屋等の大店がある。誰がどこに向ふと云ふこと、どう脅喝してどう談判すると云ふこと、取り出した金錢米穀はどう取り扱ふと云ふことなどは、一々方略に取り極めてあつたので、ここでも爲事は自然に發展した。只錢穀の取扱だけは全く豫定した所と相違して、雜人共は身に着けられる限の金銀を身に着けて、思ひ〳〵に立ち退いてしまつた。鴻池本家の外は、大抵金庫を破壞せられたので、今橋筋には二分金が道にばら蒔いてあつた。

平八郎は難波橋の南詰に床几を立てさせて、白井、橋本、其外若黨中間を傍にをらせ、腰に附けて出た握飯を嚙みながら、砲聲の轟き渡り、火焰の燃え上がるのを見てゐた。そして心の内には自分が兼て排斥した枯寂の空を感じてゐた。晝八つ時に平八郎は引上の太鼓を打たせた。それを聞いて寄り集まつたのはやう〳〵百五十人ばかりであつた。その重立つた人々の顏には、言ひ合せたやうな失望の色があ

る。これは富豪を懲すことは出來たが、窮民を賑すことが出來ないからである。切角發散した鹿臺の財を、徒らに烏合の衆の攫み取るに任せたからである。

人々は默つて平八郎の氣色を伺つた。平八郎も默つて人々の顔を見た。暫くして瀬田が「まだ米店が殘つてゐましたな」と云つた。平八郎は夢を揺り覺されたやうに床几を起つて、「好い、そんなら手配をせう」と云つた。そして殘の人數を二手に分けて、自分達親子の一手は高麗橋を渡り、瀬田の一手は今橋を渡つて、內平野町の米店に向ふことにした。

八、高麗橋、平野橋、淡路町

土井の所へ報告に往つた堀が、東町奉行所に歸つて來て、跡部に土井の指圖を傳へた。兩町奉行に出馬せいと指圖したのである。

「承知いたしました。そんなら拙者は手の者と玉造組とを連れて出ることにいたしませう。」跡部はかう云つた儘すわつてゐた。

堀は大井の機嫌の惡いのを見て來たので、氣がせいてゐた。そこで席を離れるや否や、部下の與力同心を呼び集めて、東町奉行所の門前に出た。そこには廣瀬が京橋組の同心三十人に小筒を持たせて來てゐた。

「どこの組か」と堀が聲を掛けた。

「京橋組でござります」と廣瀬が答へた。

「そんなら先手に立て」と堀が號令した。

同階級の坂本に對しては命令の筋道を論じた廣瀬が、奉行の詞を聞くと、一も二もなく領承した。そして鐵砲同心を引き纏めて、西組與力同心の前に立つた。

堀の手は島町通を西へ御祓筋まで進んだ。丁度大鹽父子の率ゐた手が高麗橋に掛かつた時で、橋の上に白旗が見えた。

「あれを打たせい」と、堀が廣瀬に言つた。

廣瀬が同心等に「打て」と言つた。

同心等の持つてゐた三文目五分筒が煎豆のやうな音を立てた。

堀の乘つてゐた馬が驚いて跳ねた。堀はころりと馬から墜ちた。それを見て同心等は「それ、お頭が打たれた」と云つて、ぱつと散つた。堀は馬丁に馬を牽かせて、御祓筋の會所に這入つて休息した。部下を失つた廣瀬は、暇乞をして京橋口に歸つて、同役馬場に此顛末を話して、一しよに東町奉行所前まで來て、大川を隔てて南北兩方にひろがつて行く火事を見てゐた。

御祓筋から高麗橋までは三丁餘あるので、三文目五分筒の射撃を、大鹽の同勢は知らずにしまつた。

堀が出た跡の東町奉行所へ、玉造口へ往つた蒲生が大筒を受け取つて歸つた。蒲生は遠藤の所へ乘り付けて、大筒の事を言上すると、遠藤は岡翁助に當てて、平與力四人に大筒を持たせて、目附中井半左衛門方へ出せと云ふ達しをした。岡は柴田勘兵衛、石川彦兵衛に百目筒を一挺宛、脇勝太郎、米倉倬次

郎に三十目筒一挺宛を持たせて中川方へ遣つた。中川がゐらぬので、四人は遠慮にことわつて、蒲生と一しよに東町奉行所へ來たのである。跡部は坂本が手の者と、今到着した與力四人とを併せて、玉造組の加勢與力七人、同心三十人を得たので、坂本を先に立てて出馬した。此一手は島町通を西へ進んで、同町二丁目の角から、內骨屋町筋を南に折れ、それから內平野町へ出て、再び西へ曲らうとした。

此時大鹽の同勢は、高麗橋を渡つた平八郎父子の手と、今橋を渡つた瀨田の手とが東横堀川の東河岸に落ち合つて、南へ內平野町まで押して行き、米店數軒に火を掛けて、平野橋の東詰に引き上げてゐた。さうすると內骨屋町筋から、神明の社の角をこつちへ曲がつて來る跡部の纒が見えた。二町足らず隔たつた纒を目當に、格之助は木筒を打たせた。

跡部の手は停止した。與力本多や同心山崎彌四郎が、坂本に「打ちませうか〱」と催促した。坂本は敵が見えぬので、「待て〱」と制しながら、神明の社の角に立つて見てゐると、やう〱烟の中に木筒の口が現れた。「さあ、打て」と云つて、坂本は待ち構へた部下と一しよに小筒をつるべかけた。烟が散つてから見れば、もう敵は退いて、道が橋向まで開いてゐる。橋詰近く進んで見ると、雜人が一人打たれて死んでゐた。

坂本は平野橋へ掛からうとしたが、東詰の兩側の人家が燒けてゐるので、烟に噎んで引き返した。そして始て敵に逢つて混亂してゐる跡部の手の者を押し分けながら、天神橋筋を少し南へ拔けて、豐後町を西へ思案橋に出た。跡部は混亂の渦中に卷き込まれて、とう〱落馬した。

思案橋を渡つて、瓦町を西へ進む坂本の跡には、本多、蒲生の外、同心山崎彌四郎、糟谷助藏等が切れ〴〵に續いた。

平野橋で跡部の手と衝突した大鹽の同勢は、又逃亡者が出たので百人餘になり、淺手を負つた庄司に手當をして遣つて、平野橋の西詰から少し南へよぢれて、今淡路町を西へ退く所である。

北の淡路町を大鹽の同勢が一歩先に西へ退くと、それと併行した南の瓦町通を坂本の手の者が一歩遲れて西へ進む。南北に通じた町を交叉する每に、坂本は淡路町の方角を見ながら進む。一丁目筋と鍛冶屋町筋との交叉點では、もう敵が見えなかつた。

堺筋との交叉點に來た時、坂本はやう〳〵敵の砲車を認めた。黒羽織を着た大男がそれを挽かせて西へ退かうとしてゐる所である。坂本は堺筋西側の紙屋の戸口に紙荷の積んであるのを小楯に取つて、十文目筒で大筒方らしい彼黒羽織を狙ふ。さうすると又東側の用水桶の蔭から、大鹽方の獵師金助が獵筒で坂本を狙ふ。坂本の背後にゐた本多が金助を見付けて、自分の小筒で金助を狙ひながら、坂本に聲を掛ける。併し二度まで呼んでも、坂本の耳には入らない。そのうち大筒方が少しづつ西へ歩くので、坂本は西側の人民に沿うて、十間程前へ出た。三人の筒は殆同時に發射せられた。

坂本の玉は大砲方の腰を打ち拔いた。金助の玉は坂本の陣笠をかすつたが、坂本は只顏に風が當つたやうに感じただけであつた。本多の玉は全く的をはづれた。

坂本等は稍久しく敵と鐵砲を打ち合つてゐたが、敵がもう打たなくなつたので、用心しつつ淡路町の

四辻に出た。西の方を見れば、もう大鹽の同勢は見えない。東の方を見れば、火が次第に燃えて來る。四辻の邊に敵の遺棄した品々を拾ひ集めたのが、百目筒三挺車臺付、木筒二挺內一挺車臺附、小筒三挺、其外鑓、旗、太鼓、火藥葛籠、具足櫃、長持等であつた。鑓のうち一本は、見知つたものがあつて平八郎の持鑓だと云つた。

玉に中つて死んだものは、黑羽織の大筒方の外には、淡路町の北側に雜人が一人倒れてゐるだけてある。大筒方は大筒の側に仰向に倒れてゐた。身の丈六尺餘の大男で、羅紗の黑羽織の下には、黑羽二重紅裏の小袖、八丈の下着を着て、裾をからげ、袴も股引も着ずに、素足に草鞋を穿いて、立派な拵の大小を帶びてゐる。高麗橋、平野橋、淡路町の三度の衝突で、大鹽方の死者は士分一人、雜人二人に過ぎない。堀、跡部の兩奉行の手には一人の死傷もない。雙方から打つ玉は大抵頭の上を越して、堺筋ては町家の看板が蜂の巢のやうに貫かれ、檐口の瓦が碎かれてゐたのである。

跡部は大筒方の首を斬らせて、鑓先に貫かせ、市中を持ち步かせた。後にこの戰死した唯一の士が、途中から大鹽の同勢に加はつた浪人梅田だと云ふことが知れた。

跡部が淡路町の辻にゐる所へ、堀が來合せた。堀は御祓筋の會所で休息してゐると、一旦散つた與力同心が又ぼつ／＼寄つて來て、二十人ばかりになつた。そのうち跡部の手が平野橋の敵を打ち退けたので、堀は會所を出て、內平野町で跡部に逢つた。そして二人相談した上、堀は跡部の手にゐた脇、石川、米倉の三人を借りて先手を命じ、天神橋筋を南へ橋詰町まで出て、西に折れて本町橋を渡つた。これは

本町を西に進んで、迂廻して敵の退路を絶たうと云ふ計畫であつた。併し一手のものが悉く跡へ〳〵とすざるので、脇等三人との間が切れる。人數もぽつ〳〵耗つて、本町堺筋では十三四人になつてしまふ。そのうち瓦町と淡路町との間で鐵砲を打ち合ふのを見て、やう〳〵堺筋を北へ、衝突のあつた場所に驅け付けたのである。

跡部は堀と一しよに淡路町を西へ踏み出して見たが、もう敵らしいものの影も見えない。そこで本町橋の東詰まで引き上げて、二人は袂を分ち、堀は石川と米倉とを借りて、西町奉行所へ連れて歸り、跡部は城へ這入つた。坂本、本多、蒲生、柴田、脇並に同心等は、大手前の番場で跡部に分れて、東町奉行所へ歸つた。

九、八軒屋、新築地、下寺町

梅田の挽かせて行く大筒を、坂本が見付けた時、平八郎はまだ淡路町二丁目の往來の四辻に近い處に立ち止まつてゐた。同勢は見る〳〵耗つて、大筒の車を挽く人足にも事を闕くやうになつて來る。坂本等の銃聲が聞えはじめてからは、同勢が殆無節制の狀態に陷り掛かる。もう射撃をするにも、號令には依らずに、人々勝手に射撃する。平八郎は暫くそれを見てゐたが、重立つた人々を呼び集めて、「もう働きもこれまでぢや、好く今まで踏みこたへてゐてくれられた、銘々此場を立ち退いて、然るべく處決せられい」と云ひ渡した。

集まつてゐた十二人は、格之助、白井、橋本、渡邊、瀬田、庄司、茨田、高橋、父柏岡、西村、杉山

と瀬田の若黨植松とであつたが、平八郎の詞を聞いて、皆顏を見合せて默つてゐた。瀬田が進み出て、「我々はどこまでもお供をしますが、御趣意はなるべく一同に傳へることにしませう」と云つた。そして所々に固まつてゐる身方の殘兵に首領の詞を傳達した。

それを聞いて悄然と手持無沙汰に立ち去るものもある。待ち構へたやうに持つてゐた鎗、負つてゐた荷を棄てて、早足に逃げるものもある。大抵は此場を脱け出ることが出來たが、安田が一人逃げおくれて、町家に潛伏したために押へられた。此時同勢の中に長持の宰領をして來た大工作兵衞がゐたが、首領の詞を傳達せられた時、自分だけはどこまでも大鹽父子の供がしたいと云つて居殘つた。質樸な職人氣質から、平八郎が企の私欲を離れた處に感心したので、強ひて與黨に入れられた怨を忘れて、生死を共にする氣になつたのである。

平八郎は格之助以下十二人と作兵衞とに取り卷かれて、淡路町二丁目の西端から半丁程東へ引き返して、隣まで火の移つてゐる北側の町家に踏み込んだ。そして北裏の東平野町に拔けた。坂本等が梅田を打ち倒してから、四辻に出るまで、大ぶ時が立つたので、この上下十四人は首尾好く迹を晦ますことが出來た。

此時北船場の方角は、もう騷動が濟んでから暫く立つたので、燒けた家の址から青い烟が立ち昇つてゐるだけである。何物にか執着して、黑く焦げた柱、地に委ねた瓦のかけらの側を離れ兼ねてゐるやうな人、獸の屍の腐る所に、鴉や野犬の寄るやうに、何物をか搜し顏にうろついてゐる人などが、互に顏

を見合はぬやうにして行き違ふだけて、平八郎等の立ち退く邪魔をするものはない。八つ時頃から空は次第に薄鼠色になつて來て、陰鬱な、人の頭を押さへ附けるやうな氣分が市中を支配してゐる。まだ燬砲や鎗を持つてゐる十四人は、詞もなく、稻妻形に燒跡の町を縫つて、影のやうに步を運びつゝ、東横堀川の西河岸へ出た。途中て道に沿うて建て並べた土藏の一つが燒け崩れて、壁の裾だけ殘つた中に、靑い火がちよろ〳〵と燃えてゐるのを、平八郎が足を停めて見て、懷から卷物を出して焰の中に投げた。これは陰謀の檄文と軍令狀とを書いた裏へ、今年の正月八日から二月十五日までの間に、同盟者に記名調印させた連判狀てあつた。

十四人はたつた今七八十人の同勢を率ゐて渡つた高麗橋を、殆世を隔てたやうな思をして、同じ方向へ渡つた。河岸に沿うて曲つて、天神橋詰を過ぎ、八軒屋に出たのは七つ時てあつた。ふと見れば、棧橋に一般の舟が繫いてあつて、船頭が一人艫の方に蹲つてゐる。土地のものが火事なんぞの時、荷物を積んて逃げる、屋形のやうな、餘り大きくない舟てある。平八郎は一行に目食はせをして、此舟に飛び乘つた。跡から十三人がどや〳〵と乘り込んだ。

「こら。舟を出せ。」から叫んだのは瀨田てある。

不意を打たれた船頭は器械的に起つて纜を解いた。

舟が中流に出てから、庄司は持つてゐた十文目筒、其外の人々は手鎗を水中に投げた。それから川風の寒いのに、皆着込を脫いて、これも水中に投げた。

「どつちへても好いから漕いてをれ。」瀨田はかう云つて、船頭に艪を操らせた。火災に遭つたものの荷物を運び出す舟が、大川にはばら蒔いたやうに浮かんでゐる。平八郎等の舟がそれに雜つて上つたり下だつたりしてゐても、誰も見咎めるものはない。

併し器械的に働いてゐる船頭は、次第に醒覺して來て、どうにかして早くこの氣味の惡い客を上陸させてしまはうと思つた。「旦那方どこへお上がりなさいます。」

「默つてをれ」と瀨田が叱つた。

平八郎は側にゐた高橋に何やらささやいだ。高橋は懐中から金を二兩出して船頭の手に握らせた。「いかい世話になるのう。お前の名はなんと云ふかい。」

「へえ。これは濟みません。直吉と申します。」

これからは船頭が素直に指圖を聞いた。平八郎は項垂れてゐた頭を擧げて、「これから拙者の所存をお話いたすから、一同聞いてくれられい」と云つた。所存と云ふのは大略かうである。此度の企は殘賊を誅して禍害を絶つと云ふ事と、私畜を發いて陷溺を救ふと云ふ事との二つを志したものである。然るに彼は全く敗れ、此は成るに垂として挫けた。主謀たる自分は天をも怨まず、人をも尤めない。只氣の毒に堪へぬのは、親戚故舊友人徒弟たるお前方である。自分はお前方に罪を謝する。どうぞ此同舟の會合を最後の團欒として、袂を分つて陸に上り、各潔く處決して貰ひたい。自分等父子は最早思ひ置くこともないが、跡には女小供がある。橋本氏には大工作兵衞を連れて、いかにもして彼等の隱家へ往き、自

送するやうに勸めて貰ふことを賴むと云ふのである。平八郎の妾以下は、初め般若寺村の橋本方へ立ち退いて、それから伊丹の紙屋某方へ往つたのである。後に彼等が縛に就いたのは京都であつたが、それは二人の妾が弓太郎を殘しては死なれぬと云ふので、橋本が連れてさまよひ歩いた末である。

暮六つ頃から、天滿橋北詰の人の目に立たぬ所に舟を寄せて、先づ橋本と作兵衛とが上陸した。次いで父柏岡、西村、茨田、高橋と瀬田に暇を貰つた植松との五人が上陸した。後に茨田に瀬田の妻子を落して遣つたと云つて自首し、父柏岡と高橋とも自首し、西村は江戸で願人坊主になつて、時疫で死に、植松は京都で捕はれた。

跡に殘つた人々は土佐堀川から西横堀川に這入つて、新築地に上陸した。平八郎、格之助、瀬田、渡邊、庄司、白井、杉山の七人である。人々は平八郎に迫つて所存を問うたが、只「いづれ免れぬ身ながら、少し考がある」とばかり云つて、打ち明けない。そして白井と杉山とに、「お前方は心殘のないやうにして、身の始末を附けるが好い」と云つて、杉山には金五兩を渡した。

一行は暫く四つ橋の傍に立ち止まつてゐた。其時平八郎が「どこへ死所を求めに往くにしても、大小を挿してゐては人目に掛かるから、一同刀を棄てるが好い」と云つて、先づ自分の刀を橋の上から水中に投げた。格之助始、人々もこれに從つて刀を投げて、皆脇差ばかりになつた。それから平八郎の默つて歩く跡に附いて、一同下寺町まで出た。ここで白井と杉山とが、いつまで往つても名殘は盡きぬと云つて、暇乞をした。後に白井は杉山を連れて、河內國澁川郡大蓮寺村の伯父の家に往き、鋏を借りて杉

山と倶に髮を剪り、伏見へ出ようとする途中で捕はれた。
跡には平八郎父子と瀬田、渡邊、庄司との五人が殘つた。そのうち下寺町で火事を見に出てゐた人の群を避けようとするはずみに、庄司が平八郎等四人にはぐれた。後に庄司は天王寺村で夜を明かして、平野郷から河内、大和を經て、自分と前後して大和路へ奔つた平八郎父子には出逢はず、大阪へ様子を見に歸る氣になつて、奈良まで引き返して捕はれた。

庄司がはぐれて、平八郎父子と瀬田、渡邊との四人になつた時、下寺町の兩側共寺ばかりの所を歩きながら、瀬田が重ねて平八郎に所存を問うた。平八郎は暫く默つてゐて答へた。「いや。先刻考があると は云つたが、別にかうと極まつた事ではない。お前方二人は格別の間柄だから話して聞せる。己は今暫く世の成行を見てゐようと思ふ。尤も間斷なく死ぬる覺悟をしてゐて、恥辱を受けるやうな事はせぬ」と云つたのである。これを聞いた瀬田と渡邊とは、「そんなら我々も是非共御先途を見屆けます」と云つて、河内から大和路へ奔ることを父子に勸めた。四人の影は平野郷方角へ出る畑中道の闇の裏に消えた。

十、城

けふの騷動が始て大阪の城代土井の耳に入つたのは、東町奉行跡部が玉造口定番遠藤に加勢を請うた時の事である。土井は遠藤を以て東西兩町奉行に出馬を言ひ付けた。丁度西町奉行堀が遠藤の所に來てゐたので、堀自分はすぐに沙汰を受け、それから東町奉行所に往つて、跡部に出馬の命を傳へることに

なつた。

土井は兩町奉行に出馬を命じ、同時に目附中川半左衞門、大塚太郎左衞門を陰謀の偵察、與黨の逮捕に任じて置いて、晝四つ時に定番、大番、加番の面々を呼び集めた。

城代土井は下總古河の城主てある。其下に居る定番二人のうち、まだ着任しない京橋口定番米倉は武藏金澤の城主て、現に京橋口をも兼ね預かつてゐる玉造口定番遠藤は近江三上の城主てある。定番の下には一年交代の大番頭が二人ゐる。東大番頭は三河新城の菅沼織部正定忠、西大番頭は河内狹山の北條遠江守氏春てある。以上は幕府の旗下て、定番の下には各與力三十騎、同心百人がゐる。大番頭の下には各組頭四人、組衆四十六人、與力十騎、同心二十人がゐる。京橋組、玉造組、東西大番を通算すると、上下の人數が定番二百六十四人、大番百六十二人、合計四百二十六人になる。これ丈ては守備が不足なので、幕府は外樣の大名に役知一萬石宛を遣つて加番に取つてゐる。山里丸の一加番が越前大野の土井能登守利忠、中小屋の二加番が越後與板の井伊右京亮直經、靑屋口の三加番が出羽長瀞の米津伊勢守政懿、雁木坂の四加番が播磨安志の小笠原信濃守長武てある。加番は各物頭五人、徒目付六人、平士九人、徒六人、小頭七人、足輕二百二十四人を率ゐて入城する。其内に小筒六十挺弓二十張がある。又棒突足輕が三十五人ゐる。四箇所の加番を積算すると、上下の人數が千三十四人になる。定番以下の此人數に城代の家來を加へると、城内には千五六百人の士卒がゐる。

定番、大番、加番の集まつた所て、土井は正九つ時に城内を巡見するから、それまでに各持口を固め

るやうにと言ひ付けた。それから十分のものは鎧櫃を擔ぎ出す。具足奉行上田五兵衞は具足を分配する。鐵砲奉行石渡彦太夫は鐵砲玉藥を分配する。鍋釜の這入つてゐた鎧櫃もあつた位て、兵器裝具には用立たぬものが多く、城內は一方ならぬ混雜てあつた。

九つ時になると、兩大番頭が先導になつて、土井は定番、加番の諸大名を離れて、城內を巡見した。門の數が三十三箇所、番所の數が四十三箇所あるのだから、隨分手間が取れる。どこに往つて見ても、防備はまだ目も鼻も開いてゐない。土井は暮六つ時に改めて巡見することにした。

二度目に巡見した時は、城內の士卒の外に、尼崎、岸和田、高槻、淀などから繰り出した兵が到着してゐる。

坤に開いてゐる城の大手は大井の持口てある。詰所は門內の北にある。門前には柵を結ひ、竹束を立て、土俵を築き上げて、大筒二門を据ゑ、別に豫備筒二門が置いてある。門內には番頭が控へ、門外北側には小筒を持つた足輕百人が北向に陣取つてゐる。南側には尼崎から來た松平遠江守忠榮の一番手三百三十餘人が西向に陣取る。略同數の二番手は後にここへ參着して、京橋口に遷り、次いで跡部の要求によつて守口、吹田へ往つた。後に郡山の一二番手も大手に加はつた。

大手門內を、城代の詰所を過ぎて北へ行くと、西の丸てある。西の丸の北、乾の角に京橋口が開いてゐる。此口の定番の詰所は門內の東側にある。定番米津が着任してをらぬので、山里丸加番土井が守つてゐる。大筒の數は大手と同じてある。門外には岸和田から來た岡部內膳正長和の一番手二百餘人、高

槻の永井飛彈守直興の手、其外淀の手が備へてゐる。

京橋口定番の詰所の東隣は焰硝藏である。焰硝藏と艮の角の靑屋口との中間に、本丸に入る極樂橋が掛かつてゐる。極樂橋から這入つた所が山里で、其南が天主閣、其又南が御殿である。本丸には菅沼、北條の兩大番頭が備へてゐる。

靑屋口には門の南側に加番の詰所がある。此門は加番米津が守つて、中小屋加番の井伊が遊軍としてこれに加はつてゐる。靑屋口加番の詰所から南へ順次に、中小屋加番、雁木坂加番、玉造口定番の詰所が並んでゐる。雁木坂加番小笠原は、自分の詰所の前の雁木坂に馬印を立ててゐる。

玉造口定番の詰所は巽に開いてゐる。玉造口の北側である。此門は定番遠藤が守つてゐる。これに高槻の手が加はり、後には郡山の三番手も同じ所に附けられた。玉造口と大手との間は、東が東大番、西が西大番の平常の詰所である。

土井の二度の巡見の外、中川、犬塚の兩目附は城内所々を廻つて警戒し、又兩町奉行所に出向いて情報を取つた。夜に入つてからは、城の內外の持口々々に篝火を焚き連ねて、炎焰天を焦すのであつた。跡部の役宅には伏見奉行加納遠江守久儔、堀の役宅には堺奉行曲淵甲斐守景山が、各與力同心を率ゐて繰り込んだ。又天王寺方面には岸和田から來た二番手千四百餘人が陣を張つた。

目附中川、犬塚の手で陰謀の與黨を逮捕しようと云ふ手配は、日暮頃から始まつたが、はか〴〵しい働きも出來なかつた。吹田村で氏神の神主をしてゐる、平八郎の叔父宮脇志摩の所へ捕手の向つたのは

翌二十日で、宮脇は切腹して溜池に飛び込んだ。船手奉行の手で、川口の船を調べはじめたのは、中一日置いた二十一日の晩からである。城の兵備を撤したのも二十一日である。

朝五つ時に天滿から始まつた火事は、大鹽の同勢が到る處に大筒を打ち掛け火を放つたので、殆風のない日ではありながら、思の外にひろがつた。天滿は東が川崎、西が知源寺、攝津國町、又二郎町、越後町、旅籠町、南が大川、北が與力町を界とし、大手前から船場へ掛けての市街は、谷町一丁目から三丁目までを東界、上大みそ筋から下難波橋筋までを西界、内本町、太郎左衞門町、西入町、豐後町、安土町、魚屋町を南界、大川、土佐堀川を北界として、一面の焦土となつた。本町橋東詰で、西町奉行堀に分れて入城した東町奉行跡部は、火が大手近く燃えて來たので、夕七つ時に又坂本以下の與力同心を率ゐて火事場に出馬した。丁度火消人足が谷町で火を食ひ止めようとしてゐる所であつたが、人數が少いのと一同疲れてゐるのとのために、暮六つ半に谷町代官所に火の移るのを防ぐことが出來なかつた。鎭火したのは翌二十日の宵五つ半である。町數で言へば天滿組四十二町、北組五十九町、南組十一町、家數、竈數で言へば、三千三百八十九軒、一萬二千五百七十八戸が災に罹つたのである。

十一、二月十九日の後の一、信貴越

大阪兵燹の餘焰が城内の篝火と共に闇を照し、番場の原には避難した病人産婦の呻吟を聞く二月十九日の夜、平野郷のとある森蔭に體を寄せ合つて寒さを凌いでゐる四人があつた。これは夜の明けぬ間に河内へ越さうとして、身も心も疲れ果て、最早一歩も進むことの出來なくなつた平八郎父子と瀬田、渡

邊とてある。

四人は翌二十日に河内の界に入つて、食を求める外には人家に立ち寄らぬやうに心掛け、平野川に沿うて、間道を東へ急いだ。さて途中どこで夜を明さうかと思つてゐるうち、夜なかから大風雨になつた。やう／＼産土の社を見付けて駈け込んでゐると、暫く物を案じてゐた渡邊が、突然もう此先きは歩けさうにないから、先生の手足纒にならぬやうにすると云つて、手早く脇差を拔いて腹に突き立てた。左の脇腹に三寸餘り切先が這入つたので、所詮助からぬと見極めて、平八郎が介錯した。渡邊は色の白い、少し齒の出た、溫順篤實な男で、年齢は僅に四十を越したばかりであつた。

二十一日の曉になつても、大風雨は止みさうな氣色もない。平八郎父子と瀨田とは、渡邊の死骸を跡に殘して、産土の社を出た。土地の百姓が死骸を見出して訴へたのは、二十二日の事であつた。社のあつた所は河内國志紀郡田井中村である。

三人は風雨を冒して、間道を東北の方向に進んだ。風雨はやう／＼午頃に息んだが、肌まで濡れ通つて、寒さは身に染みる。辛うじて大和川の支流幾つかを渡つて、夜に入つて高安郡恩地村に着いた。さて例の通人家を避けて、籔陰の辻堂を捜し當てた。近邊から枯枝を集めて來て、おそる／＼焚火をしてゐると、瀨田が發熱して來た。いつも血色の惡い、蒼白い顏が、大酒をしたやうに暗赤色になつて、持前の二皮目が血走つてゐる。平八郎父子が物を言ひ掛ければ、驚いたやうに返事をするが、其間々は焚火の前に蹲つて、現とも夢とも分からなくなつてゐる。ここまで來る途中で、先生が寒からうと云つて、

瀨田は自分の着てゐた羽織を脱いで平八郞に襲ねさせたので、誰よりも强く寒さに侵されたものだらう。平八郞は瀨田に、兎に角人家に立ち寄つて保養して、跡から來るが好いと云つて、無理に田圃道を百姓家のある方へ往かせた。其後影を暫く見送つてゐた平八郞は、急に身を起して焚火を踏み消した。そして信貴越の方角を志して、格之助と一しよに、又間道を步き出した。

瀨田は頭がぼんやりして、體ぢゆうの脈が鼓を打つやうに耳に響く。狹い田の畔道を踏んで行くに、足がどこを踏んでゐるか感じが無い。動もすれば刈株の間の濕つた泥に足を蹈み込む。やう〳〵一軒の百姓家の戶の隙から明かりのさしてゐるのにたどり着いて、瀨田ははつきりした聲で、暫く休息させて貰ひたいと云つた。雨戶を開けて顏を出したのは、四角な赭ら顏の爺いさんである。瀨田の樣子をぢつと見てゐたが、思の外拒まうともせずに、圍爐裏の側に寄つて休めと云つた。婆あさんが草鞋を脫がせて、足を洗つてくれた。瀨田は火の側に橫になるや否や、目を閉ぢてすぐに鼾をかき出した。其時爺いさんはそつと瀨田の顏に手を當てた。瀨田は知らずにゐた。爺いさんはその手を瀨田の腰の所に持つて往つて、脇差を拔き取つた。そしてそれを持つて、家を駈け出した。行燈の下にすわつた婆あさんは、呆れて夫の跡を見送つた。

瀨田は夢を見てゐる。松並木のどこまでも續いてゐる街道を、自分は力限駈けて行く。跡から大勢の人が追ひ掛けて來る。自分の身は非常に輕くて、殆鳥の飛ぶやうに駈けることが出來る。それに追ふものの足音が少しも遠ざからない。瀨田は自分の足の早いのに頗滿足して、只追ふものの足音の同じやう

に近く聞えるのを不審に思つてゐる。足音は急調に鼓を打つやうに聞える。ふと氣が附いて見ると、足音と思つたのは、自分の脈の響くのであつた。意識が次第に明瞭になると共に、瀨田は腰の物の亡くなつたのを知つた。そしてそれと同時に自分の境遇を不思議な程的確に判斷することが出來た。

瀨田は跳ね起きた。眩暈の起りさうなのを、出來るだけ意志を緊張してこらへた。そして前に爺いさんの出て行つた口から、同じやうに駈け出した。行燈の下の婆あさんは、又呆れてそれを見送つた。

百姓家の裏に出て見ると、小道を隔てて孟宗竹の大籔がある。その奧を透かして見ると、高低種々の枝を出してゐる松の木がある。瀨田は堆く積もつた竹の葉を踏んで、松の下に往つて懷を探つた。懷には偶然捕繩があつた。それを出してほぐして、低い枝に足を踏み締めて、高い枝に投げ掛けた。そして罠を作つて自分の頸に掛けて、低い枝から飛び降りた。瀨田は二十五歲で、脇差を盜まれたために、見苦しい最期を遂げた。村役人を連れて歸つた爺いさんが、其夜の中に死骸を見付けて、二十二日に領主稻葉丹後守に屆けた。

平八郎は格之助の遲れ勝になるのを叱り勵まして、二十二日の午後に大和の境に入つた。それから日暮に南畑で格之助に色々な物を買はせて、身なりを整へて、驛のはづれにある寺に這入つた。暫くすると出て來て、「お前も頭を剃るのだ」と云つた。格之助は別に驚きもせず、連れられて這入つた。親子が僧形になつて、麻の衣を着て寺を出たのは、二十三日の明六つ頃であつた。

寺にゐた間は平八郎が殆一言も物を言はなかつた。さて寺を出離れると、平八郎が突然云つた。「さ

あ、これから大阪に歸るのだ。」

格之助も此詞には驚いた。「でも歸りましたら。」

「好いから默つて附いて來い。」

平八郎は足の裏が燃えるやうに逃げて來た道を、渇したものが泉を求めて走るやうに引き返して行く。傍から見れば、その大阪へ歸らうとする念は、一種の不可抗力のやうに平八郎の上に加はつてゐるらしい。格之助も寺で宵と曉とに溫い粥を振舞はれてからは、靈藥を服したやうに元氣を恢復して、もう遲れるやうな事はない。併し一歩々々危險な境に向つて進むのだと云ふ考が念頭を去らぬので、先に立つて行く養父の背を望んで、驚異の情の次第に加はるのを禁ずることが出來ない。

十二、二月十九日後の二、美吉屋

大阪油懸町の、紀伊國橋を南へ渡つて東へ入る南側で、東から二軒目に美吉屋と云ふ手拭地の爲入屋がある。主人五郎兵衞は六十二歲、妻つねは五十歲になつて、娘かつ、孫娘かくの外、家内に下男五人、下女一人を使つてゐる。上下十人暮してゐる。五郎兵衞は年來大鹽家に出入して、勝手向の用を達したこともあるので、二月十九日に暴動のあつた後は、町奉行所の沙汰で町預になつてゐる。

此美吉屋で二月二十四日の晚に、いつものやうに主人が勝手に寢て、家族や奉行人を二階と臺所とに寢させてゐると、宵の五つ過に表の門を敲くものがある。主人が起きて誰だと問へば、備前嶋町河内屋八五郎の使だと云ふ。河内屋は兼て取引をしてゐる家なので、どんな用事があつて、夜に入つて人をよ

こしたかと訝りながら、庭へ降りて潜戸を開けた。

戸があくとすぐに、衣の上に鼠色の木綿合羽をはおつた僧侶が二人つと這入つて、低い聲に力を入れて、早くその戸を締めろと指圖した。驚きながら見れば、二人共僧形に不似合な脇差を左の手に持つてゐる。五郎兵衛はがた〳〵震えて、返事もせず、身動きもしない。先に這入つた年上の僧が目食はせをすると、跡から這入つた若い僧が、五郎兵衛を押し除けて戸締をした。

二人は緣に腰を掛けて、草鞋の紐を解き始めた。五郎兵衛はそれを見てゐるうちに、再び驚いた。髮をおろして相好は變つてゐても、大鹽親子だと分かつたからである。「や。大鹽樣ではございませんか。」

「名なんぞを言ふな」と、平八郎が叱るやうに云つた。

二人は默つて奥へ通るので、五郎兵衛は先に立つて、納戸の小部屋に案内した。五郎兵衛が「どうなさる思召か」と問ふと、平八郎は只「當分厄介になる」と丈け云つた。

陰謀の首領をかくまふと云ふことが、容易ならぬ罪になるとは、五郎兵衛もすぐに思つた。併し平八郎の言ふことは、年來暗示のやうに此爺いさんの心の上に働く習慣になつてゐるので、ことわることは所詮出來ない。その上親子が放さずに持つてゐる脇差も、それとなく威嚇の功を奏してゐる。五郎兵衛は只二人を留めて置いて、若し人に知られるなら、それが一刻も遲く、一日も遲いやうにと、禍殃を未來に推し遣る工夫をするより外ない。そこで小部屋の襖をぴつたり締め切つて、女房にだけわけを話し、奉公人に知らせぬやうに、食事を調へて運ぶことにした。

一日立つ。二日立つ。いつは立ち退いてくれるかと、老人夫婦は客の樣子を覗つてゐるが、平八郎は落ち着き拂つてゐる。心安い人が來ては奥の間へ通ることもあるので、襖一重の先にお尋者を置くのが心配に堪へない。幸に美吉屋の家には、坤の隅に離座敷がある。周圍は小庭になつてゐて、母屋との間には、小さい戸口の附いた板塀がある。それから今一つすぐに往來に出られる口が、表口から西に當る路次に附いてゐる。此離座敷なら家族も出入せぬから、奉公人に知られる處もない。そこで五郎兵衞は平八郎父子を夜中にそこへ移した。そして日々飯米を測つて勝手へ出す時、紙袋に取り分け、味噌、鹽、香の物などを添へて、五郎兵衞が手づから持ち運んだ。それを親子炭火で自炊するのである。

兎角するうちに三月になつて、美吉屋にも奉行人の出代があつた。その時女中の一人が平野郷の宿元に歸つてこんな話をした。美吉屋では不思議に米が多くいる。老人夫婦が毎日米を取り分けて置くのを、奉公人は神樣に供へるのだらうと云つてゐるが、それにしてもおさがりが少しも無いと云ふのである。

平野郷は城代土井の領分八萬石の内一萬石の土地で、七名家と云ふ土着のものが支配してゐる。其中の末吉平左衞門、中瀨九郎兵衞の二人が、美吉屋から歸つた女中の話を聞いて、鄕の陣屋に訴へた。陣屋に詰めてゐる家來が土井に上申した。土井が立入與力内山彥次郎に美吉屋五郎兵衞を取り調べることを命じた。立入與力と云ふのは、東西兩町奉行の組のうちから城代の許へ出して用を聞せる與力である。

五郎兵衞は内山に糺問せられて、すぐに實を告げた。

土井は大目附時田肇に、岡野小右衞門、菊地鐵平、芹澤啓次郎、松高縫藏、安立諸太郎、遠山勇之助、

齋藤正五郎、菊地彌六の八人を附けて、これに逮捕を命じた。

三月二十六日の夜四つ半時、時田は自宅に八人のものを呼んで命を傳へ、すぐに支度をして中屋敷に集合させた。中屋敷では、時田が美吉屋の家宅の摸様を書いたものを一同に見せ、なるべく二人を生擒にするやうにと云ふ城代の注文を告げた。岡野某は相談して、時田から半棒を受け取つた。それから岡野が入口の狹い所を進むには、順番を籤て極めて、爭論のないやうにしたいと云ふと、一同これに同意した。岡野は重ねて、自分は齡五十歳を過ぎて、跡取の倅もあり、此度の事を奉公のしをさめにしたいから、一番を讓つて貰つて、次の二番から八番までの籤を人々に引かせたいと云つた。これにも一同が同意したので、籤を引いて二番菊地彌六、三番松高、四番菊地鐵平、五番遠山、六番安立、七番芹澤、八番齋藤と極めた。

二十七日の曉八つ時過、土井の家老鷹見十郎左衞門は岡野、菊地鐵平、芹澤の三人を宅に呼んで、西組與力内山を引き合せ、内山と同心四人とに部屋目附鳥巢彥四郎を添へて、偵察に遣ることを告げた。岡野等三人は中屋敷に歸つて、一同に鷹見の處置を話して、偵察の結果を待つてゐると、鷹見が出向いて來て、大切の役目だから、手落のないやうにせいと云ふ訓示をした。七つ半過に鳥巢が中屋敷に來て、内山の口上を傳へて、本町五丁目の會所へ案內した。時田以下の九人は鳥巢を先に立てて、外に岡村桂藏と云ふものを連れて本町へ往つた。暫く本町の會所に待つてゐると、内山の使に同心が一人來て、一同を信濃町の會所に案內した。油懸町の南裏通である。信濃町では、一同が内山の出した美吉屋の家の圖

面を見て、その意見に從つて、東表口に向ふ追手と、西裏口に向ふ搦手とに分れることになつた。

追手は內山、同心二人、岡野、菊地彌六、松高、菊地鐵平の七人、搦手は同心二人、遠山、安立、芹澤、齋藤、時田の七人である。此二手は總年寄今井官之助、比田小傳次、永瀨七三郎三人の率ゐた火消人足に前以て取り卷かせてある美吉屋へ、六つ半時に出向いた。搦手は一歩先に進んで西裏口を固めた。追手は續いて岡野、菊地彌六、松高、菊地鐵平、內山の順序に東表口を這入つた。內山は菊地鐵平に表口の內側に居殘つてくれと賴んだ。鐵平は一人では心元ないので、附いて來た岡村に一しよにゐて貰つた。

追手の同心一人は美吉屋の女房つねを呼び出して、耳に口を寄せて云つた。「お前大切の御用だから、しつかりして勤めんではならぬぞ。お前は板塀の戶口へ往つて、平八郎にかう云ふのだ。內の五郎兵衞はお預けになつてゐるので、今家財改のお役人が來られた。どうぞちよいとの間裏の路次口から外へ出てゐて下さいと云ふのだ。間違へてはならぬぞ」と云つた。

つねは顏色が眞つ蒼になつたが、やう／＼先に立つて板塀の戶口に往つて、もし／＼と聲を掛けた。併し敎へられた口上を言ふことは出來なかつた。

暫くすると戶口が細目に開いた。內から覗いたのは坊主頭の平八郎である。平八郎は捕手と顏を見合せて、すぐに戶を閉ぢた。

岡野等は戶を打ちこはした。そして戶口から岡野が呼び掛けた。「平八郎卑怯だ。これへ出い。」

「待て」と、平八郎は離座敷の雨戶の內から叫んだ。

岡野等は暫くためらつてゐた。

表口の内側にゐた菊地鐵平は、美吉屋の女房小供や奉公人の立ち退いた跡で暫く待つてゐたが、板塀の戸口で手間の取れる様子を見て、鍵形になつてゐる表の庭を、緣側の角に附いて廻つて、戸口にゐる同心に、「もう踏み込んではどうだらう」と云つた。

「宜しうございませう」と同心が答へた。

鐵平は戸口をつと這入つて、正面にある離座敷の雨戸を半棒て敲きこはした。戸の破れた所からは烟が出て、火藥の臭がした。

鐵平に續いて、同心、岡野、菊池彌六、松高が一しよに踏み込んで、殘る雨戸を打ちこはした。

離座敷の正面には格之助の死骸らしいものが倒れてゐて、それに衣類を覆ひ、間内の障子をはづして、死骸の上を越させて、雨戸に立て掛け、それに火を附けてあつた。雨戸がこはれると、火の附いた障子が、燃えながら庭へ落ちた。死骸らしい物のある奥の壁際に、平八郎は鞘を拂つた脇差を持つて立つてゐたが、踏み込んだ捕手を見て、其刃を横に吭に突き立て、引き拔いて捕手の方へ投げた。

投げた脇差は、傍輩と一しよに半棒て火を拂ひ除けてゐる菊池彌六の頭を越し、襟から袖をかすつて、半棒に觸れ、少し切り込んでけし飛んだ。彌六の襟、袖、手首には、灑ぎ掛けたやうに血が附いた。

火は次第に燃えひろがつた。捕手は皆焔を避けて、板塀の戸口から表庭へ出た。

彌六は脇差を投げ附けられたことを鐵平に話した。鐵平が「そんなら庭にあるだらう」と云つて、彌六

を連れて戸口に往つて見ると、四五尺ばかり先に脇差は落ちてゐる。併し火が强くて取りに往くことが出來ない。そこへ最初案內に立つた同心が來て、「わたくし共の木刀には鍔がありますから、引つ掛けて搔き寄せませう」と云つた。脇差は旨く搔き寄せられた。柄は茶絲卷て、刃が一尺八寸あつた。

搦手は一歩先に西裏口に來て、遠山、安立、芹澤、時田が東側に、齋藤と同心二人とが西側に並んで、眞ん中に道を開け、逃げ出したら挾擊にしようと待つてゐた。そのうち餘り手間取るので、安立、遠山、齋藤の三人が覗きに這入つた。離座敷には人聲がしてゐる。又持場に歸つて暫く待つたが、誰も出て來ない。三人が又覗きに這入ると、雨戸の隙から火焰の中に立つてゐる平八郎の坊主頭が見えた。そこで時田、芹澤と同心二人とを催促して、一しよに半棒で雨戸を打ちこはした。併し火氣が熾なので、此手のものも這入ることが出來なかつた。

そこへ內山が來て、「もう跡は火を消せば好いのですから、消防方に任せてはいかがでせう」と云つた。遠山が云つた。「いや。死骸がぢき手近にありますから、どうかしてあれを引き出すことにしませう。」遠山はかう云つて、傍輩と一しよに死骸のある所へ水を打ち掛けてゐると、消防方が段々集つて來て、朝五つ過に火を消し止めた。

總年寄今井が火消人足を指揮して、燒けた材木を取り除けさせた。其下から吉兵衛と云ふ人足が先づ格之助らしい死骸を引き出した。胸が刺し貫いてある。平生齒が出てゐたが、其齒を剝き出してゐる。次に平八郎らしい死骸が出た。これは吭を突いて俯伏してゐる。今井は二つの死骸を水で洗はせた。平

八郎の首は燒けふくらんで、肩に埋まつたやうになつてゐるのを、頭を押さへて引き上げて、面體を見定めた。格之助は創の樣子で、父の手に掛かつて死んだものと察せられた。今井は近所の三宅といふ醫者の家から、駕籠を二挺出させて、それに死骸を載せた。

二つの死骸は美吉屋夫婦と共に高原溜へ送られた。道筋には見物人の山を築いた。

十三、二月十九日後の三、評定

大鹽平八郎が陰謀事件の評定は、六月七日に江戸の評定所に命ぜられた。大岡紀伊守忠愛の預かつてゐた平山助次郎、大阪から護送して來た吉見九郎右衛門、同英太郎、河合八十次郎、大井正一郎、安田圖書、大西與五郎、美吉屋五郎兵衛、同つね、其外西村利三郎を連れて伊勢から仙臺に往き、江戸で利三郎が病死するまで世話をした黄檗の僧剛嶽、江戸で西村を弟子にした橋本町一丁目の願人冷月、西村の死骸を葬つた淺草遍照院の所化堯周等が呼び出されて、七月十六日から取調が始まつた。次いで役人が大阪へも出張して、兩方で取り調べた。罪案が定まつて上申せられたのは天保九年閏四月八日で、宣告のあつたのは八月二十一日である。

平八郎、格之助、渡邊、瀬田、小泉、庄司、近藤、大井、深尾、茨田、高橋、父柏岡、伜柏岡、西村、宮脇、橋本、白井孝右衛門と暴動には加はらぬが連判をしてゐた攝津森小路村の醫師横山文哉、同國猪飼野村の百姓木村司馬之助との十九人、それから返忠をし掛けて遲疑した弓奉行組同心小頭竹上萬太郎は磔になつた。然るに九月十八日に鳶田で刑の執行があつた時、生きてゐたのは竹上一人である。他の

十九人は、自殺した平八郎、渡邊、瀬田、近藤、深尾、宮脇、病死した西村、人に殺された格之助、小泉を除き、彼江戸へ廻された大井迄悉く牢死したので、磔柱には鹽詰の死骸を懸けた。中にも平八郎父子は燒けた死骸を鹽詰にして懸けられたのである。西村は死骸が腐つてゐたので、墓を毀たれた。

松本、堀井、杉山、曾我、植松、大工作兵衞、獵師金助、美吉屋五郎兵衞、瀬田の中間淺信、深尾の募集に應じた尊延寺村の百姓忠右衞門と無宿新兵衞門とは獄門、暴動に加はらぬ與黨の内、上田、白井孝右衞門の甥儀次郎、般若寺村の百姓卯兵衞は死罪、平八郎の妾ゆう、美吉屋の女房つね、大西與五郎と白井孝右衞門の倅で、穉い時大鹽の塾にゐたこともあり、父の陰謀の情を知つてゐた彥右衞門とは遠島、安田と、杉山を剃髮させた同人の伯父、河内大蓮寺の僧正方、西村の逃亡を助けた同人の姉壻、堺の醫師寛輔の二人とは追放になつた。併し此人々も杉山、上田、大西、倅白井の四人の外は、皆刑の執行前に牢死した。

密訴をした平山と父吉見とは取高の儘譜代席小普請入になり、吉見英太郎、河合八十次郎は各銀五十枚を賜はつた。此中で酒井大和守忠嗣へ預替になつてゐた平山は、番人の便所に立つた留守に詰所の棚の刀箱から脇差を取り出して自殺した。

城代土井以下賞與を受けたものは十九人あつた。中にも坂本鉉之助は鐵砲方になつて、目見以上の末席に進められた。併し兩町奉行には賞與がなかつた。



わなゝき

徳田秋聲

（一）

埃々した近所の病家を三四軒廻つてから、安井は聽診器だの處方箋だのゝ入つた小形の折鞄をかゝえて、深いパナマの廂に、暑い日差を受けながら、はづまない顔をして、高臺の下の方の窪地のやうな町にある自分の家へ歸つて來た。

燥いだ汚い道路や、不揃ひな家並の板塀、二階の簾、硝子戸、ペンキ塗の葭屋の看板などに、四時頃の西日が黄色く濁つた光を投げて、家のなかはどこも澱んだやうな蒸苦しい靜かさに倦んでゐた。

向側の人家の背景になつてゐる崖の斜面の叢に、黐竿を持つた

沈默な子供達の影が動くかと思ふと、往來には鬢あげをした頭髮に毛筋立を挿して、縮れ毛の目尻の下つた子や、顔に吹出物のした女の、中型の浴衣に幅の狹い帶をしめて、狸湯の方へ歩いて行く阿娜めいた姿が見られた。と、風がどこからか戰ぎ出して、白いものを着た床屋の小僧が、長柄の杓杓で、深い溝から水を汲上げては撒いてゐた。

安井は何か困つたことがあるか、考事をする時かの癖になつてゐる、口髭の毛根を指頭で引張り〳〵、もうそろ〳〵お産の近づいて來たらしい妻の體のことや、その場合の準備のことなどを考へながら、歩いてゐたのであつたか、重いドアのはまつた入口から玄關へ上ると、書生の居睡をしてゐるらしい暗い藥局の口を些と覗いて、解剖圖などの額のかゝつた診察室の卓子のうへに折鞄をおいて、そこへ腰をかけた。そしてペンで一二枚の處方を書くとしやがれたやうな底艶のある聲で藥局を呼つけた。

目の切の細い、鼻の高い、頭蓋骨の尖つたやうな北海産の書生が、擂潰されたやうな聲で返辭をしながら其處へ出て來た。顔が蒼白くて、脂肪氣のぬけたような手足が、纖細かであつた。

「あ、それから先生、××から使が來て、昨日頂いた藥が、如何しても突返して收まらないから、加減して頂きたいさうです。」書生は出て行きかけに小戻して言つたが、安井は眼鏡の奥から不安な目をぎろつかせて、髭を引張つてゐるだけで、何とも答へなかつた。そして暫くレースのカアテンを引いた縁側から庭へ、視線を辷らせてゐた。黝黒な淡紅色の花をつけた百日紅の枝葉が、じめ〳〵した庭一杯に蔽被さつて、初夏の頃に書生と一緒に種子を撒いたり、鉢から移したりして丹精した草花が、其陰に

よろ／＼と瘦細つてゐた。草花に限らず、診察室や二階の客間の飾附などについても、安井はこゝへ開業した當座、色々の計畫や豫想を持つてゐた。そして見積を立てゝ敷物を買ひに出たり、材料を買つて來て、器用にまかせて機械棚を拵へて、それにペンキを塗つたり、二三日大工と左官屋とを入れて、其方此方修繕を加へたあとを、長いあひだ自分で氣長にぽつ／＼手を入れて來た。汚い壁が綺麗な壁紙で貼られたり、居室に棚がつられたり、洗面臺が拵はれたりした。夏になつてからそこらが夏向の美しい敷物に取換へられた。それで圍ひの塀を取替へて、門を新しくさへしたら、構が悉皆立派になりさうに思へた。

しかし安井にはこれが充分樂しい家とは見えなかつた。然うして綠色の安樂椅子や、機械のぎつしり詰つた棚や、總て此前に居た支那人が仕荒したと云ふ家が、豫想以上に見榮のするものになつた診察室の眞中に坐つてゐると、この六七年そつち此方飛廻つて歩いてゐた放縱な放浪生活に頽廢しきつた心と體を、先づ當分は靜かに劬つておけさうな氣もしたが、潮の干滿のやうな其月々の患者の增減や、返して行かなければならぬ債務の壓迫などが、時々弱い心を突搖つた。そして到頭支へ切れない日が來さうに思はれて來ると、破壞的な自暴な氣分さへ動いた。つい去年の春までゐた朝鮮や、友達の働きに行つゐる南米の空などが、可懷く想像された。朝鮮で二年弱ぬ夫婦のやうに同棲してゐた、嫉妬深い女のことも想出された。その女と一緒になつた前後と、手を切る迄の生活ほど、强い魅力を以て、自分を惹着けたものはなかつた。今ではもう歸つた當座ほどの興奮も感銘もなくなつてしまつたが、安井は時々それを想出すと、生効のあつた其二年間の經驗が、惜しいやうに思はれた。其に長いあひだ軍隊にもゐたし、

戰地にも渡つて、野獸のやうな生活にも馴され、頭腦の狂ひさうな窮屈で放縱な滯陣の物すさびにも耽つて來た。

「こゝは御覽のとほり、藝者屋と待合とがどん〳〵建ちますから、今に大した盛り場になりますぜ。貴方のやうな御商賣には、持つて來いです。」

この家を見に來たとき、意氣な人柄な家主が、手附の請取を書きながら、お世辭を言つた。

安井はその時、四梱か五梱の大きい行李にぎつしり詰つた着物、大禮服、佩劍、書物、京城で女の知合の骨董屋から買取つた高麗燒の茶碗や花瓶、それに醫療機械と、そんな物が、下宿の部屋にあつた限て、纒まつて持つて來た金は、途中の湯泉場で浪費したり、東京へ歸つてから、昔し行きつけた遊場へ一と夏浸つてゐるあひだに、空になつて了つて、田舍から取寄せた金で、漸と下宿が引拂へたくらゐであつたが、そんな色町などの背景をもつた此の場所が、望ありさうに見えた。女を惹着ける力も、自分に具つてゐるらしく思へた。

（二）

安井は奧へ入ると、上衣を脫棄て、長火鉢の前に胡坐を組んだが、重い腹をかゝえた田鶴子は、緣の明みへ針箱を持出して、田舍の生家から送つて來たメリンスの片で、產れる子の不斷着を縫つてゐた。色が淺黑いながらに、皮膚が水々して、潤味をもつた目に凄い底光があつた。

目の前には、廂とすれ〳〵に亞鉛板の塀で劃られた隣の物干竿に薄汚い勞働着や、子供の浴衣などが

かゝつて、その空隙から漸と蒼空が見透かされ、手内職でもしてゐるらしい女の、子供を叱る聲などが時々洩れて來た。

安井はそこに出てゐた菓子器から、蒸菓子を二つ三つ撮んで、むしや〳〵食べながら、赤い片などの散かつた部屋のなかを物珍しげに眺めてゐたが、まだ誰のものとも判明しない、肚の赤子に對する長い間の疑惑や反感などから、幼着と云つては、天笠木綿の尺片一つさへ、自分の懐からは買つてやつたことのなかつたのが、慘酷なように思へて來た。そして自分の體がこゝへ居坐れるか如何かすら解らない田鶴子が、その事については、一ト言も言出し得ないのが可憐く思へた。女は時とすると、安井の目に太てゐるとしか見えなかつたり、男の心に高を括つて、安心してゐるとしか思へなかつたりした。

「もう何時出るかも判らないから、精々と縫つておかなけあ。」

女は見詰められてゐる顔をあげて、胸を反しながら、苦しげな呼吸遣をして、厭味を言つてゐるような哀訴してゐるような淋しい微笑を洩した。

安井は今夜にても、一緒に通へ出て、赤子に被せて寢すような蒲團地や、着替の片などを買つてやらうと思附くと、それが何時からか自分の心に待設けられてゐたことのように悦しかつた。それに處女として親や兄から配はれた此女の前身が、たとひ何てあらうと、現在の女より今少し自分に愛相のいゝ氣の利いた妻でありさへすれば、そんな事などは問題にする必要もなささうに思へた。

山國の町に育つた女は、肴るから、體ががつしりして、肉着もかた〳〵してゐた。輪廓の大きい顔て、

濃い地藏眉毛、丸く刻んだような形のいゝ鼻、締つた口元なども整つてゐたが、鳶色した大きい鈍い目に、無智と剛愎とが現はれてゐた。媒介者の家で盃をすまして、女の母親と一緒に、町に近い溫泉場へ二三日遊びに行つた時から、安井は太い其の首のような女の心に觸れたように感じたが、女を着飾らせて、汽車や腕車で、遠近の親類まはりをした時も、夜汽車で東京へ連れて來た時も、二人のなかには新婚の夫婦らしい情味が、少しも湧かなかつた。して女は始終重苦しいほど無口で、さうかと思ふと、時には世間見ずの自分勝手な話がはづむと、新婚の花嫁には相應しくないほど、無恥な表情をして、鈍い、ゆつくり〱した調子でお饒舌を續けては、男の氣分を壞し〱した。それに女は肉體も完全ではなかつた。溫泉場で過された二三日の新婚旅行から歸つて來ると、女から不思議な反撥心をもつて酬ゐられた男は、この時幾年振かでふとそこの或料理屋で出會した昔し馴染の女と、幾日も〱秘密な出逢を樂んでゐた。

東京へ來てからも、男に對する女の素振に變りがなかつた。其にはそんな生理的缺陥から來るヒステリーが添つて、或晩などは不意に昏倒して、目を半眼に開いたまゝ、全く知覺を失つて了つた。安井は深い不安と恐怖に襲はれて、深夜に友達の醫師を呼寄せて、診察して貰つたりした。

翌日知合の或婦人科の大家が來診したとき、女は漸と覺醒してゐたが、それでもまだ視覺や聽覺が充分ではなかつた。そして綿密な診察の結果、姙娠だと云ふことが知れたのであつた。

「先づ三月の終りでせうな。」その醫師は何事もなげに言つた。そして結婚當初からの日數の計算が、女の

前生活に對する或疑惑を孕んでゐた。

「それに多少狹隘もあるようですが、兎に角癒つたら、も一度診ますから寄越してごらんなさい。」老實なその醫師は、さう言殘して歸つて行つた。

「どうも可怪い。」

安井は醫師を送出してから、診察室へ入つて來ると、そこの肱掛椅子にどかりと腰かけて、書生の新海と、先刻から奧の室の椅子に耳を傾けてゐた友達の側へ來て呟いた。神田の方に開業してゐる其友達は、てぶ〳〵肥つた體にフロックを着込んで、新婚の祝に家見舞をかねて、丁度來合せてゐた處であつた。安井は病人の側で洋食にビールなどをぬいて、その友達の口をついて出る毒氣のないエロチックな話に笑興じてゐた。近頃亡くなつた妻の迹へ、三人目の新しい妻を迎へて酷く元氣づいてゐる此男の生活力は、持病もちの庇弱い安井などには、何處まで充實してゐるのかと可羨しかつた。

「何だか少し可怪いな。偶然としたら背負込んだんかもしれないぞ。」其友達も體を搖りながら獨語した。

「けれど己などの喙を出すところぢやないから、まあ能く調べて見るさ。」

新海も傍ににや〳〵して居た。

友達が歸つて行つてから、安井は醫師や友達の言葉に輕い反感を抱きながら、病人の枕頭に胡坐を組んでゐた。今迄に見たことのない血色の鮮かな、輪廓のくつきりした女の横顔が、しつとりと汗ばんだようになつて、黑々と豐かな髮が、氷を當てるために釋かれたまゝ、白い枕に蔽被つてゐた。安井は何

事もなささうに、すや〳〵眠つてゐる其顔を透して、女の秘密を嗅出さうとでもするやうに恍然見詰めてゐたが、「田鶴々々」と微聲に呼ぶと、女の唇が微に動いて、甘えるやうな無邪氣な聲で返辭をした。

「もう痛くはないか。」

「え。」女はまた微に應へたが、自分自身の體に何事が起つてゐるかを知らないらしかつた。

二三日してから、詳しい診察を受けさすために、俥に載せて送出した時は、女はもう悉皆氣分が恢復してゐた。安井は二三軒病家を廻つてから、時刻を見計つて其醫師を訪問した。

「貴方のお子さんとして差閊ないやうです。」醫師は昨日よりか少し變つた報告をしながら言つた。

「然云ふ例は世間に幾多もありますので、訴訟なんかになる場合に、醫師が喚出されたり何かして、ひどく面倒なものですよ。しかし貴方の場合は大丈夫でせう。」

醫師は安井の安心するやうに、巧く日數を合して話してゐるらしく思へたが、醫師の言ふとほりに、たとひ其日數に多少の疑念があつても、姙娠期間の平均數に合つてさへゐれば、法律上それが自分の子でないと云ふ證據にはならなかつた。

「どうもB—の診察は、此間と今日と違つてゐる。」安井は歸りに立寄つた親類の家の茶の室へ入つて來ると、言出した。

「B—は如何だといふんです。」長火鉢の前に坐つてゐた其處の主人が、苦い顏をして訊いた。

「何に、まだ三月の終りなんてところまで行つてゐないんださうだ。」

「それで日は合つてるんですか。」
「だから、そいつは子供が產れて見なければ駄目なんだよ。それも妊娠期間の平均數を目安にするんだから、眞實のことは判りませんよ。」
「始末の惡いもんだね。」
「眞實始末がわるいんです。」安井は泣きたいような笑方をして、「だから家にゐたつて、些とも面白かないんだよ。」と傍に坐つてゐる從姉妹筋にあたる細君の顏を眺めた。
「新婚夫婦の情味なんて、些ともありやしないんだ。もう最初から然うなんだ。」
「私少し變なことを聞きましたよ。」細君は安井の顏を眺めながら言出した。
「へえ、どんな事……。」
「今だから言つても可いでせうけれどね、貴方の奥さん田舍で變な風說があつたんださうですよ。」
「へえ、何だつて。」
「店のものと何か惡い風評が立つてゐたんですて。」
「誰がそんなこと言つたの。」安井は反抗的な苦笑を洩した。
「それも人の言ふことですから、眞實だか何だか判りやしませんわ。だけどがK―さんが來て、そんな話をしてゐましたの。まだ貴方があの人を貰はない前にですよ。」
「然うかな。」

「事實は兎に角、そんな噂があるだけでも、返す口實は充分ぢやないか。」主は始終顏に渦巻いてゐる莨の烟に目を瞬きながら言つた。

「そしてもつと好い奧さんを貰ひなさいよ。」細君は目で笑ひながら言つた。

安井は細君がいれてくれた、自分の好きなココアを一杯飮むと、直に家へ歸つて來たが、自分のお人好てあつたのが腹立しかつた。そして女とは口も利かずに、二階へあがると、興奮した心持て、田舍の兄へ手紙を書いたのてあつたが、妻の秘密を兄へ知すのが不安てあつた。そして其が順序よく兄の方て調査がとゞいて、總てが破壞され、夫婦別をする時の寂しさと物足りなさとが思遣られた。嫉妬と興味とが、不思議な彼の愛著心を唆つた。それてその手紙は、幾日も本のあひだに挿まれたまゝ、出すのが躊躇された。

「あれ、そんな事私は知りませんよ。」

女はある晩、安井に其事を詰問された時、濃い眉毛を動かしながら應へた。女はその時、安井と床を並べて寢てゐた。

「それは大方兩親が一緒にしようと思つてゐた、店の若いものゝとなんてせうけれど、私は少しも知らないとてすわ。」

安井は女の口から、自分の空想してゐる事實のどん底を覗いてみたかつたが、平凡な女の答が唯それ限てあるのが物足りなかつた。

「我々の結納がすんでから、結婚式をあげるまでの間、お前はその男と逢つてゐたらう。」安井は自分の感情を虐げたり、興味を刺戟したりするために、わざと女を挑發するやうな調子で言つた。

女は仰向いたまゝ「いゝえ」と答へたが、そんな事を訊くのを不審がるやうに、それきり沈默に陷ちてしまつた。

（三）

安井は此月に入つてから、滅切殖えて來た患者の數や、月末の收入などを頭腦で計算しながら、お産についての色々の入費などの見積を立てゝゐた。然し今のところ、まだ借金の埋立てに廻すだけの金の餘裕はつかなかつた。それが何時返せるかと云ふ見込も、容易につきさうになかつた。診察室の設備にも、まだ〳〵金をかけねばならなかつたし、初めの觸込ほどにはない、妻の身の廻りのものなども、自分の手から拵へてやらなければならなかつた。

口重で、無愛相な妻と一緒に坐つてゐると、安井はいつでも然した生活の壓迫を感ずるのであつたが、終に頭腦がごや〳〵して來て、丁度幾箇もの病氣に冐されてゐる患者の體を預かつてゐる時のやうな、不安と悟かしさを感じた。すると生活に對する其日其日の努力の果敢なさが思はれるやうに、人類の疾患に對する醫師研究の效果範圍が疑はれたりした。

「でもまあ己なんざ、そんな悲觀する方でもないさ。これで婦人臺でも据つければ、まだ〳〵患者を吸收する餘地はある。」

安井は何時からか考へてゐる婦人臺のことを想出すと、明日にでも何處からか金の工面をして至急に据えつけて、見たくて堪らなかつた。そこへ載せて、療治をしてやるやうな女が、今の處だけでも二三人はあつた。

「そんなに甘いものを召食つて、また病氣が出ると困るでせう。」細君はこの二三日前の夜の苦しみを想出しながら、言出した。安井はその時も、持病の發作に襲はれて、徹宵ぜい〳〵言つて悶えてゐた。細君はおち〳〵寢もしないで介抱してゐた。安井は何時もの習慣になつたゐる鹽化アドレナリンの注射を二回も試みて、漸といくらか眠るとができた。

「大丈夫だよ。」安井はポケツトから、亞砒酸丸の小い罎を取出して、二粒ばかり口へ投込むと懈い體を座蒲團のうへに橫えてまし〳〵天井を瞶めてゐたが、胸が息だはしくて、目蓋が氣懈かつた。それは先天的弱い呼吸器の故もあつたが、長い間の放浪生活から來た疲勞や神經衰弱も手傳つてゐた。結核菌がもう肺を冐してゐるらしい兆候も感ぜられた。安井は時々憶出したやうに、自身ツペルクリンの注射を、數回續けて見たこともあつた。すると又思ひがけない暴飮から、劇しい喘息に襲はれなどして、擬頽しかゝつた自分の肉體が、もう手のつけようのない、暗いじめ〳〵したものゝやうに思はれたが、それも慣れて來ると、次第に感覺が鈍らされて來た。

晝も靜な暗い診察室に、パツと電氣が點れて來ると、綠色の卓子掛や椅子や、鉢のゼラニユムの葉の重りに、濃い美しい色彩が活々して來て、白いレースの窓帷などに夏の夜らしい氣分が動いた。安井は疲

れた神經が初めて蘇生つたやうに、ばさゝゝした白地の單衣に着替へなどして、二三人の患者を診ると、やがて細君をつれて買物に出かけた。

人通の疎な宵の口の町は森としてゐた。白っぽい塵除を着た安井と少し離れて、田鶴子は草履を穿いて重い足を運んでゐたが、夕涼の東京の町を良人と一緒に散歩してゐる嬉しさに、胸を唆られると云ふともないらしかつた。彼女は始終溜息ばかりついてゐるやうな薄暗い茶の室が氣塞になつて來ると、時々風通しの好い二階へ上つて、東向の窓の手摺に凭れて、本郷臺の有福らしい屋敷うちの庭や、立派な家建を眺めたり、裏の貧民窟が一ト目に見える西向の高窓から、寺院の棟などの見える小石川の高臺の森影を眺めたりして氣を晴してゐたが、恁して來てゐても東京に落着けるか落着けないかすら判然しないのが手頼なかつた。一時田舍から姑が來てゐた時からの習慣て、夜になると裏から通りの方へ出かけて、明日の總菜の仕込などをする外は、表の土を蹈むなどう云ふとも、滅多になかつたが、まだ眞の取着いたばかりの身上て、世帶道具などの整はない家のなかも、賴つき端がなかつた。そして東京の暮しの總てが田舍で想像してゐたとは、全然違つたものてあつた。

「東京々々つて、どんな家かと思つたら、恁麽大きな行李ばかりごろ〳〵して、簞笥一つないなんて……。」

田鶴子は書生と一緒に茶の間にゐる時、押入から片か何かを捜しながら言つたが、零落れかゝつた生家から、自分が何一つ嫁入道具らしいものも貰つて來られなかつたのも、寂しかつた。安井は借金など

のあることを來たばかりの妻に打明けるのが、憚られたが、新世帯の様子を見に來た姑の目からは、不斷の着替すら餘分には持つて來ない嫁が、初めから媒介者に擔がれてゐたやうで業が煮えた。

「あれこそ剛情な女だぞえ。煮沸なども全然何にも知つてゐない癖に、私が何か言つても返辭もしやしない。私はお前が可哀さうだからて言ふだわの。」

姑は時に安井を二階へ呼上げては、離縁談を持出した。

しかし安井は、女を田舍へ返してしまつた後の自分が考へられた。放浪と遊蕩とに慣された自分の放縱性が可恐しくもあつたし、何かを漸と取集めて築きあげやうとしつゝある巣の潰えるのも不安であつた。離縁や結婚の費用も、田舍の兄の懐ばかり當にしてゐる譯には行かなかつた。氣弱い母親や、興味の目で見てゐる親類などから拒否されてゐる、女も不憫であつた。じめ〳〵しい不決斷な心が、次第に女の方へ絡はりついて行つた。

田鶴子は死ぬやうな親子の喧嘩を傍觀しながら、姑から何を言ひかけられても、口も利かずにゐるような日が、幾日となく續いた。

電報で母親が呼寄せた兄と一緒に、母親が噴々して歸つて行つてから、自分に妥協の口實と安心とを與へるやうな結果を期待しつゝ、田舍の媒介者と時々交渉を進めつゝある良人に、女は何の疑を挾まぬらしかつた。

買物から歸つて來ると、書生が新しい往診の來たとを告げた。

女は疲れた體を、長火鉢の側に休めながら、色々の美しい片の入つた包すら未だ釋かずにゐたが、安井はまだ何處も見せない女を、本郷の通まで連出して、歸りに親類の家へも茶を飮みに顔出して來たのであつた。女はこの頃買つてやつた派手な浴衣などが體に似合つて、白粉を塗つた顔も、餘所の家の座敷の電氣の下などで見ると、見增りがするやうであつた。

「靜いちやんも秀二ちやんも、此頃はちつとも見えませんね。如何してふつつり足が止まつたんだらうつて、然う言つてゐるんですよ。眞實に寂しうございます。」田鶴子はお愛相を言つた。つひ此頃まで、良人からも何の世話もやかれず、自分からも言出しかねてゐた腹のとなどもそこの細君に訊かれるのが嬉しかつた。田鶴子は此月の初めに漸と腹帶などを締めて貰つたのであつた。

「お顔の樣子ぢや、何うやら男の子らしうござんすね。でもお體格がいゝから、必然安產ですよ。」

「何てすか、初めてて些とも勝手がわかりませんから。」田鶴子は何如かすると見せる、可愛い目をしながら言つてゐたが、衆に凝視められてゐるようて極惡かつた。

二人は倉皇にそこを出て、暗い屋敷町を突ぬけて、家の方の窪地へ降りて來たが、田鶴子は包のなかにある片を、是から自分の手一つて幾箇かの着物なり蒲團なりに縫はなければならぬ忙がしさと樂しさが想像されて、疲勞も打忘れてゐた。

「田舍ぢやお宮詣をするのに、皆な七子だの縮緬だの紋附に染めて、それはお金をかけるんですよ。」田

鶴子は安井に話しかけたが、安井は取合はうともしなかつた。
「先生、福武藏と云ふ家からちよッと診察に來て頂きたいさうてす。」藥局て何かの講義錄を見てゐた書生が、入つて來た二人の顏を、にや〳〵見比べながら、鼻にかゝるかすれた聲て言つた。
「へえ。」と安井は塵除も脫かずに、突立つたまゝ書生の顏を眺めて首を傾げた。
「聞かない名だな。」
「今度新に出來た家ださうてす。」書生は茶の間と藥局との間の廊下の隅に凭れてゐながら、使から聞取つた場所を話した。それは夏の初頃其邊の貧乏長屋を取壞して、新築された然云ふ種類の家の一つであつた。安井には直に其見當がついた。
「二三度先生に診て貰ひに來たとがあるつて言つてゐました。多分△△にゐた小竹と云ふ女でせう。何ても然云ふ話てした。暫く餘所へ行つてゐて、近頃自分の名て一軒出したんださうてすから。」
安井は直に其女の誰てあるかが感づけた。此二三月頃に二三度診察して、患部を洗つてやつたり何かしたことも思出せた。女は目のしほ〳〵とした、揉上の長い愛嬌のある顏をしてゐた。手足などもすんなりと節の伸びた方て、年は廿三だと云ふのてあつたが、體には一度子供を產んだ形迹すらあつた。
「誰が來たんだ。」安井は妻が押入から出してくれた餘所行に着替へると、これも以前朝鮮にゐた時分、女が見立つてくれた上方趣味の派手な角帶を捲つけながら訊いた。
「多分抱えか何かてせう。姉さん〳〵つて言つてゐましたから。」書生は矢張にや〳〵しながら應へた。

「きつと又遲いてせう。」細君は洗ひたての白足袋の表を飜しながら、書生と顏を見合せて呟いたが、そんな家を廻ると、安井は善く若い女に取捲かれて、無駄口を利きながら遊んで來ることが多かつた。

少時すると、安井はごちや／＼した新開の藝者町を歩いてゐたが、何處を向いてもまだ木香の除れないやうな、落着のない粗雜な新築ばかりであつた。そして少しばかり歩くと、もうそこが薄汚い貧乏町であつたり、寂しい片側町であつたりした。偶には竹格子の櫺子窓の奥で、鏡臺に向つて化粧をしてゐる片肌脱ぎの女などが簾越しに見透されたが、色町らしい匂は何處にも嗅げなかつた。

尋ねる家が、直に搜しあてられた。目隱しに遮へられた二階の手摺に簾が下つて、明い電氣の灯影が、そこから前の空地へまで洩れてゐたが、上り口には、婆やと抱えらしい十六七の女とが、晩飯の餉臺に向つてゐるところであつた。

女は軟かい蒲團を被て二階に寢てゐた。そして抱えの先觸で上つて行つた安井の顏を見ると嫣然して、「おや先生來て下すつたの」と起上らうとした。病氣のせいか、女は此春頃見た時に比べると、滅切頬肉がおちて、顏に淋しみが添はつて來たやうであつたが、女振は寧ろ一段見優りがされた。

「如何したんです。」安井は、折鞄を下におきながら、女の前へ來て坐つた。

「何だか矢張可けませんのよ先生。」と女は白い敷布に褁まれた蒲團の上に起上つて、櫛捲にしてゐる頭髮の素毛を掻あげながら、人懷こい調子で言つた。

「あれから暫らく餘所へ行つてゐたさうぢやありませんか。」

「は、少し譯があつて家の方へ行つてゐたんですけれど、五月頃歸つて來てまた出てゐたんですよ。こゝはつひ此頃初めたばかりなんですの。」
「ぢやもう商賣はしないつて譯ですか。」
「處がなか〱然は行かないんですの。」
「ぢやお座敷だけ――」安井は鞄を取り上げながら、「ではちよッと診ませう」といつて器械を取出した。そしてそれを下からく取寄せさした金盥に自身拵へた消毒藥のなかへ浸すと、手首や指頭なども悉皆消毒して、仰向に臥かした患者の後へまはつた。
「矢張り毎日洗はなくちや不可せんね。」安井は診察を了つてそこを離れると、手や器械を消毒しながら女の顏を眺めた。女の若い肉體にある秘密な或る罪惡の迹が彼の興味と好奇心とを惹いた。
「それに體も衰弱してゐますね。事によつたら私が毎日來て洗つてあげても可い。」
「然うですか。私そんなに惡いんですか。」
「いや大したことはない。少し續けてやりさへすれば、直ぐ癒りませう。まあじつと寢てゐた方が可いですね。」安井は手を拭き〱蒲團の上へ來て坐つた。そして抱えがぬいてくれたサイダなどを飲みながら、暫く話してゐた。
　女は以前函嶺にゐた頃のことなどを話出した。看板を買つてこの家を出さしてもらつた今の旦那は、其頃からの關係であつた。旦那は神田の方の或家作持であつた。そして地所や家屋の周旋などを仕事に

してゐる人間らしく思はれた。

「左に右結構な身分だね。」

「貴方こそ好い御身分だわ。私なんか、それは充らないんですよ。」と女は毛穴の立つたような頬などがぼつと赧んで來て、「私は奈何して恁う何かが思通りに行かないんでせう。」

「ぢや情夫のために苦勞でもすると云ふんだらう。」安井は其體から想像される、女の背景を思出しながら、釣出すように言つた。

「そんな譯でもないんですけれどね。」と女は極惡さうに、團扇で顏を煽ぎながら、「苦勞するのならまだ可いんですけれども、別れて了つたんぢや爲樣がないぢやありませんか。」

「おや〳〵。」と安井は髭を引張りながら剽輕らしく言つて、「旦那に見つかつたつて云ふ譯だね。」

「多分吩咐ける奴でもあつたんでせうよ。」

「それで其男はもう來ないの。」

「不思議なことには、ぴつたり足が止つてしまつたの。」女は苦笑した。

「誰かゞ水をさしたんだ。」

「それに家の首尾も惡くなつてゐましたからね。」

「とかく浮世はさうしたものさ。」安井は鼻唄でも謳出ひさうな調子で言つた。

「眞實にさうだわ。」

「お察しますよ。」安井は痛いような聲で笑出した。

「あら、先生は人が惡いのよ。」

「まあお大事になさい。」安井はにや〳〵しがら鞄を膝のうへへ取上げた。

「どうも有難う。」女は面喰つたように言つて、眞紅な顔をして俛いた。

「また來ませうね。」安井は握手てもしないばかりにして、やがて段梯子を降りた。

安井はいつにない燥いだような心持になつて、ふら〳〵と藝者屋町を歩いてゐた。朝鮮て出會したような面白い事件が、まだ何處かに自分を待受けてゐるやうな氣持もされて、獨て微笑まれた。此間中から頭腦に引懸つてゐるお産や何かゞ、面倒臭い、充らないことのように思はれて來た。何のために田鶴子や何かのために、くよ〳〵してゐなければならぬのか解らないような氣もした。

薄暗い、溝の臭の鼻にたつ横町から突ぬけようとすると、構造のいやに凝つた門のある家や、忍びかへしのある塀板などが續いて、待合の軒燈が、そこにも此處にも出てゐた。何處かの二階で、じやか〳〵言ふ三味線の濁みた撥音につれて、場末の藝者らしい調子はづれの唄の聲が、浮づつて聞えた。

安井はばさ〳〵したような體に、久しく嗅いだこともない、酒の慾が劇しく渇いて來た。何か底のぬけるような騷ぎをして、暴れまはりたいような獸性慾が、體中に湧立つて來るようてあつた。

家へ歸ると、妻はまだ帯もとかずに、火鉢の側に孑然と坐つてゐた。寢床がそこに延べられて、薄暗い電氣が、暗鬱な色を部屋中に漂はしてゐた。

「まあ随分おそい。」

妻は訴へるような目で、安井を見迎へた。

四

いつも其頃になると隣の長屋で小娘が温習を遣初める。常盤津の三味線の騒音が耳につくと、安井はうつら／＼と快い夢心地に陥ちてゐた微睡からさめた。安井はこの二三日の暴飲で、頭脳がぼんやりしてゐた。胸にも懈い一種の壓迫を感じた。それに今日はS―の住つてゐる或寺院の若い僧徒の注射日であつたので、午後に俥で出かけて行つたのであつたが、その坊さんが此頃滅切快くなつたのに調子づいて、少し遠くへ出歩いたのが原因で、俄に思ひがけない變調を來して、劇しく咯血した後だつたので、安井は不斷のように平氣では體に觸つてゐられなかつた。

古いその寺院には、以前肺結核で死んだ僧徒が一人住込んでゐたとがあつた。そして若い僧徒の體にそんな形迹を認めたとき、安井は其他の多勢の僧徒達にも、一々試驗を施したが、十有餘人の僧徒達には、誰も彼もツベルクリンの顯著な反應が認められた。不斷びん／＼してゐる快活なS―自身の健康すらが疑はれて來たのであつた。安井の目には、由緒ある市中の其大伽藍が、危險な肺病院か何かのように思はれて來た。が、氣にもならなかつた。安井は長いあひだ其等の幾人かに注射を續けて來たのであつたが、もう第三期に進んでゐる若い坊さんの成行が不安になつて來た。

「奈何だらう。あの男は助かるだらうか。」坊さんでありながら、或大學の法科を出たS―は自分の部屋

へ安井が呼入れて訊いたが、安井は孰ともつかずに首を傾げるより外なかつた。

「だつて己の言ふとほりにしやせんのだもの。」安井はにや〳〵笑つて、「しかしあれてまた持直すかも判らないよ。」

「一體このツベルクリンの注射なんてものは、人によつて利くとも言ふし、全然無害無效だと云ふ說もあるし、僕なんぞも君がやれつて云ふから、まあ遣つてはゐるようなものゝ、何だか胡散くさくて信賴する氣になれんね。」Sーは熱が出い〳〵して、少しも量が進まないのに焦燥して、暫時中止してゐる自分の注射に就いて聽糺した。

「君の前だけれど、是なんざまあお醫師の金儲けだね。」

「爲樣がないよ。さう言つたつて中には利くものも、あるんだから。現にTー君のなんぞは成績が極めていゝぜ。量もぐん〳〵進む。聽診上症候がまるで一變して來たよ。」安井は樂觀的な返辭を與へたが、一時誰にも彼にも勸めた注射療法に、患者達も自分も厭氣がさしてゐた。

「子供はまだ出ないかい。」Sーは初めから何かと立入つた相談に與かつてゐる細君問題について言出した。一旦離緣と決した細君を、出產の時まで保護しておくことになつたのもSーの意見であつた。開業するについても江戸ッ兒肌の世話好きなSーが自分の方から乘出して、其方此方奔走して、金を引出してくれたり何かしたのであつたが、田舍から乘込んで來た細君は、第一印象からしてSーの氣に加はなかつた。Sーは長いあひだ何事も打明け合つて來た友達の、女に對する眼識に疑が起つて來た。そして其

本質が何であらうと、其處へ出逢つたものに動かされて行くやうな安井の心や、愚痴をこぼし／＼醜いものに執著して、づる／＼引摺られて行く腑效なさが憫まれた。Ｓ—は安井の女房になるやうな女を、自分の頭腦のなかで長いあひだ想像に描いてゐた。

「如何考へたつて、他はお前んとこの長火鉢の前に坐らせておく女ぢやないよ。ね、奥さん貴方はどう思ひます。」Ｓ—は安井の親類のＫ—の家で一緒に落合つた時などに、その細君の前でつけ／＼言ふのであつた。

「さあ、如何云ふものでございませうかね。」細君は剽輕なＳ—の調子に、くす／＼笑つてゐた。

「それぢや貴方は如何なのがお好です。」

「私は矢張り下町趣味の女が好ですな。此方の思つてゐることを丁と呑込んで、何かに氣を利してくれるやうなのでなくちや面白くありませんな。」

安井は傍ににや／＼して苦笑してゐたが、女の種類に好尙の差別をおいたり、一人の對象物を取決めて、それに熱中したりしてゐられる人の心持が寧ろ不思議にさへ思はれた。爛れ合つてゐた前の女から、病的な可恐しい嫉妬の目を以て監視されてゐた時ですら、周圍の色々の女が始終彼の心を惹著けずにはおかなかつたことを思ひ出してゐた。秘密な遊び場所を女に捜しあてられて、刄物三昧をされた時ですら、安井の心には二人の女が、同じやうな肉の力を以つて繫がり合つてゐた。

「己はお前のやうなローマンテイストぢやないからな。女の選擇標準が全然違つてゐるんだ。」安井は心

てさう思つたのであつた。

寺から歸ると、安井は久しく手かけて來た若い坊さんの死狀を、まざ〳〵見せつけられるやうで、不思議に神經が怯えてゐたが、それらの人達に注射を續行して、月末の收入の胸勘定などしてゐる自分や新海の健康狀態が急に氣になり出したが、其不安は直に毎時のやうに、鈍い悠久の哀愁のなかに吸込まれて了つた。

「お前の體も餘程可怪しいぜ。顏の色つたらありやしない。」Sーに然う言つて、自分の氣懈さうな目差や、肉の萎え疲れたやうな顏を瞶められた時、安井は自分の生活力に對する自信が裏切られるやうであつたが、肉體から泌出して來る腐頽の匂も、鼻神經に嗅しめられるやうであつた。

安井が目をさました時、妻は矢張り赤子の着物を縫つてゐたが、此頃時々家をあける良人の擧動に對する疑惑の影が、窶れた顏に蔽隱せなかつた。そして其を感づかせては、迚も素直に歸つて行きさうに思へなかつた。安井は女の苦痛を見ずに濟むやうな方法を、先刻もSーと評議したのであつたが、女に印象を殘さすやうな手段を取るには、金の工面から考へなければならなかつた。

「必然還すよ。前の女と別れた時だつて、己は言出すと驀直に決行した。それて手切だつて田舍への土産だつて、女の滿足するだけのとは丁としてやつたんだ。」安井はさう言つてSーに誓つたが、別れる時の思が、今から想像された。

書生の居眠をしてゐる、閑寂した玄關の方に、誰やら輕い駒下駄の音がした。安井はその時、今朝爲

殘しておいた屏風を持出して、妻に手傳はせて、白い紗を張つてゐた。屏風は四五日前に診察室へ持込まれた、新しい婦人臺の圍ひにするために、自分で工夫を凝して、近所の指物屋へ注文したものであつた。安井は纖細な檜で組立てられた其骨に棧で挾んで張詰めるように裁たれてある紗の片を、器用な手容で丹念に張つてゐた。それでまた男や女の或種類の患者がいくらか引寄せられさうであつた。

「御免ください。」優しい女の聲が玄關口から聞えて來た。

安井は襖の蔭から、診察室を通して、窃と玄關口を透視た。そして書生の背後へまはつて、低聲に囁起した。

「よく寢る人。」妻は屏風の蔭に突立つたまゝ、目で嘲笑つてゐた。

「あのう、ちよツと先生に……。」書生はにや〳〵しながら取次いだ。

安井が出てみると、玄關に立つてゐるのは、待合の女中風の年增であつたが、其は小竹と云ふあの女から、翌日の午後の二時に、其の女中の待合まで來てほしいと云ふ願を、托かつて來たのであつた。

女はづつと快くなつて、今では其のちも續けて通つてゐた安井の家へ來る必要もなくなつてゐた。

「一體何ですか。」安井は髭を引張りながら、色の小白い、目鼻立のぱらりとした女中の顏を瞶めた。

「何ですか、是非先生にお話したいことがあるさうです。」女中は生眞面目な顏をして、其だけのことを傳へると直に歸つて行つた。

五

黄色に澱んだやうな日影の一杯に漾つた部屋のなかに、漸と目がさめたばかりの安井が、赤い友禪の肩當のある黄縞の夜具に裹まつて臥てゐた。昨夜足を蹈外して段梯子から落ちたとき傚してしまつて、眼鏡をかけてゐない近眼に痛いほど日光がしみて、赤く爛れたやうに充血してゐた。

「如何なの、胸のところは。もう痛くはなくて?」

女は枕頭に坐つて、敷島の空袋をひねくりながら訊ねた。外には氣疎い飴屋の太鼓などが聞えて、日がもう大分闌けてゐた。

「うゝ」と、安井は唸るやうに言つて、漸と傷みの感ぜられて來た肱のところを擦りながら、宵からの事件を思出さうとするやうに、目を瞬いてゐた。

「お君さんなんかに、餘り揶揄ふから然うなのさ。貴方は浮氣ものだわよ。」女は猥らな流眄を見せてほッと小い溜息をついた。

昨夜安井が友達のXーと餘所で飲んで、その足で女から定められた此家へ崩れ込んだのは、もう餘程遲くであつた。そして二人はまた其處で飲初めたのであつた。年增の女中がそこへ來て、お酌をしたり、笑談を言合つたりした。安井はもう大分醉つてゐたが、飲む後から〳〵と舌や唇は乾いて、酒が水のやうに、爛れた胃の腑に吸收されて行つた。

寂のある咽喉から、しやかれたやうな、黑人じみた聲で、調子づいて唄が謳はれたり、器用な物眞似が出たりした。

「ほんとに巧いんのよ此人は。」女中は餉臺にこぼれた酒の汚點を拭きながら、惚々したやうに其顔を眺めた。

小竹の家の抱えの若い女が、側に三味線を持つたまゝ、時々調子を合はさうとしては、合しそぐねて、含羞んだやうな顏をして、目を瞬つてゐた。

「ほんとにお上手ね。」女は白粉のまだらな顏の目元や小鼻のあたりに、くしやくした小皺を寄せながら、氣乘のしない調子で言つた。

「そんなに巧けれあ己を情夫に持たないか。」安井は手甲で弛んだ口から垂れる涎を拭きながら、縺れた呂律で言つた。

「結構、願つたり叶つたりだ。だけど小竹さんに叱られてよ。」

「小竹なんか……。」と、安井は鼻で笑つた。

「貴方いけないわ。お衣が臺なしよ。」世帶崩してゝもありさうな女中が、拭巾で安井のぐらつく手から膝へだぶく零れる酒を拭取つてゐた。

「こんな著物は家へ行けあ、幾許でもあら。」安井は女の頸首へ、ぐだくした手を絡ませながら引寄せようとした。

女中は引寄せられたまゝ、甘たるい聲を揚げて體を踠いた。そして其手をはづすと、「いけないわよ」と後髮などを掻揚げてゐた。

安井とお君との間に、拳などが初まつてから、座敷が一層浮立つて來た。お君は負けると、自暴にぐい〳〵酒を呷つた。そしてほーつと息を吐きながら、興奮したような顏をして、きやつ〳〵と騷出した。拳がやむと、部屋が急に閑寂して來た。ふと安井がふら〳〵と起つて、裏の梯子の方へ行つたが、狹い段梯子は中程から螺旋なりに曲つて險しかつた。安井は鼻唄を謳ひながら、暗いその梯子を降りかゝつたが、一歩足を踏外したと思ふと、突落されるように四五段引摺られて、其まゝどさりと緣の板敷に投り出されてしまつた。

安井は聲も立てずに、そこへ平伏つたまゝ暫く身悶えも爲得なかつたが、森とした耳元へ心臟の鼓動ばかりがどき〳〵と微に響いてゐた。四下は眞暗で、障子に電氣の影が薄すらと差してゐた。安井は無意識に起上つて、段梯子に這かゝらうとしたが、肋に劇しい痛みを覺えて、呼吸が塞るほど胸が重苦しかつた。人を喚ばうとしても、舌が硬ばつて聲を立てる力さへなかつた。

衆が寄つて來て、安井を二階へ抱あげ、次の室の蒲團の上へ横はらした時、安井はうん〳〵唸りながら、苦しさうに手足を動かしてゐた。お君が若い方の女に氣附を持つて來させたり、自ら水をコップに汲んで飲せたりした。

「肋骨をへし折つちやつたい。」安井は呻吟くように言つた。

「え、そりや大變……些とお見せなさいよ。」とお君は急いで胸を披けたが、何の事もなかつた。

「痛いの、待つていらつしやいよ。」お君は猪口の酒を持つて來て、自身口に啣んで、吹かけなどした。

「もう可いわ〳〵。貴方も小花さんも彼方へ往つていらつしやい。大丈夫私が引請けてよ。」お君は安井の體に粘着いて猶て介抱してゐた。
「邪魔だい〳〵。みんな彼方へいつてろい。」安井は縺れた舌で叫んで、ぐな〳〵した手を振りながら、踏反かへつた。
　明日の午後にこゝて逢ふ約束になつてゐる小竹が、やつて來た時、お君はまだ側に坐つて、安井の足腰を揉んでゐた。
「如何したの。」小竹は派手な浴衣に小幅の帯をしめて入つて來たが、然した二人の姿が目に入ると、ふいと次の室へ引返して、默つて莨を喫つてゐた。
「小竹さん遲いぢやないの。大變だつたわ。」お君は薄恍けたような顏をして、男の傍を離れて來た。
「だつて、今夜はれこが奈何しても歸らないんだもの。」小竹は不味さうに莨をふかしながら、「寢てゐるの。」
「今やつとお寢みになりましたよ。」
　小竹に引渡して、女中が降りて行つてから、女は微聲に鼻唄を謳ひながら、私と傍へ寄つて行つた。
安井は咽喉がぜい〳〵云つて、苦しさうてあつた。
「きつともう如何かしてゐるんだわ。」女は夜明頃まて、そんな事を言續けてゐた。
「えへ〳〵」と安井は時々笑ひながら、應答をしてゐたが、持病の發作の來さうな咽喉が苦しくなると、

起上つて袂から持合せの藥を搜して、口へ入れてゐた。

　二人連立つてそこを出たのは、午近くてあつた。外は今日も蒸暑い日が、じり〳〵照つて、疲れた安井の目に强い刺戟を與へた。頭腦もふら〳〵して、病人のやうな倦怠を覺えた。

「ほんとうに可笑かつたよ。」女につれられて、其家の二階へ上つて横になつた時、安井はぼつ〳〵頭腦に浮んで來る印象を想出しては、笑を洩してゐたが、恁した女との經緯が、如何展がつて行くかと、不安な彼の興味を唆つた。

　部屋には、涼しい風が吹通つて、昨夜旦那の寢てゐたらしい蒲團が、赤い裏を飜して、手摺の簾影に干されてあつた。

「好いものを見せませうか。」女は浮々した調子で起つて行くと、床の間に飾つてある萌黄の風呂敷に包まれた箱のなかゝら、何やら踊の裝束を出して見せた。

「これ鶴龜の時被るのよ。旦那はそれあ藝人だけれど、目が片方義眼ですよ。年だつてもう五十三だわ。」

　女は自分が箱根にゐる時からの馴染の、其爺さんの身のうへや、自分との關係や、こゝの世帶向きのとなどを、何くれとなく話出した。つひ此頃まで深いなかになつてゐた男のとや、其男の胤を宿したときの苦心なども話した。箱根にゐた頃出來た子供が、此春預けておいた親の家で死つた事も聞された。

　新海に捜しあてられて、安井のそこを出たのは、もう午過てあつた。

　安井は歸るとすぐ、二三人待つてゐた患者を診察した。そして、腕にいつもの鹽化アドレナリンの注

射をすると、二階へあがつて、掻巻を被いて寢た。

机のうへには、何時からか取かゝつて、其まゝ氣脱のしてゐた生殖器に關する著書の原稿や、材料の切抜などが散かつてゐた。それはお産や何かて、出費の多い此頃の經濟を補ふためてあつたが、引受けさうな本屋が見つからないので、一時中止の形になつてゐたのてあつた。

「これても又やることにしよう。」

慘な自分の生活が考へられて、安井は厭な氣がさして來た。こつ／＼當のない仕事に手を着けるのも、賴なかつた。

昨夜の胸の傷が、またそく／＼痛出して來た。安井は新海が買つて來た氷に、胸を冷しながら、うつら／＼と眠に沈んて行つた。

五

若い坊さんのT―が、長いあひだ寢てゐた寺院の古びた部屋て、到頭死んて了ふまでに、安井はその寺へ幾度足を運んだか知れなかつた。安井が最後に使を受けて驅つけたとき、T―の瘦細つた綺麗な軀は、もう大理石のやうに冷くなつてゐた。醫師として最善を盡したつもりの安井は、疾からその時の來るのを豫想してゐた。Tの病氣は、涼氣が立つてから、段々惡い傾向を現して來るばかりてあつた。

「これからは己達の領分だよ。長々お世話さまだつたね。」初めから病人の世話をして來て、倦まなかつたS―が、笑ひながら言つたが、今朝まで口を利合つてゐた友達の死が、彼の心にも顏にも暗い影を投げて

ゐた。

安井は何事にも善く氣のつくS—から、豫想以上の禮などを貰つて、引退つて來たが、同じやうな黒い影が、自分にも絡りついてゐるやうで、家へ歸つても心が重かつた。丁度差迫つた金の必要に頭腦を惱ましてゐたところへ、其だけの額が思ひがけなく入つて來たので、それで先づ一時を凌げさうに思へたが、信頼してゐた自分の手から放されて、死滅の陰に吸込まれて行つた青年の蒼白めた死顏が、長いあひだ同情と皮肉の目で瞶めてゐた自分の心に、まざ〳〵と映つてゐた。

茶の室には誰の影も見えなかつた。茶簞笥の上におかれた時計が、冷い色に光つて、かち〳〵と單調な音を刻んでゐる外何の音も聞えなかつた。安井は今そこへ來てゐたと云ふ女が出して、茶を飮んで行つたらしい茶道具を引寄せて、餘熱の薄い鐵瓶から湯をついて、咽喉を潤してゐたが、田舎へ歸した田鶴子や赤子のことなどが、矢張り想出されて寂しかつた。

田鶴子を歸したのは、つひ二週ほど前であつたが、S—や親類の男などに迫まられて、さうと決心するまでに、惑ひ易い安井の心は幾樣に變化したか判らなかつた。

S—が或晩、安井の親類の男を說起して、連立つて安井に離縁を勸めに行つたとき、安井は家にゐなかつた。S—達は、此頃よく遊びに來て、赤子を診察室や門のうちへ出したり、產後の田鶴子に食べさしてやるやうなものや、安井の酒の肴などを拵へては歸つて行くと云ふ女と、安井との情交が、段々深みへ陷つて行くことを感づいてゐたので、その日も矢張女の家へ遊びに行つてゐるものらしく想像された。

「如何です。少し覺醒させてやらないと、玄關の人氣に係りますね。」Sーは茶の室に赤子を抱いてゐる田鶴子へは、挨拶もせずに、二階へあがつて行くと、安井の机に肱をかけながら言出した。
それは雨霽りの、しつとりした冷かな或晩であつた。田鶴子の周圍には、其方此方から子供に祝つてくれた贈物の包などが、幾箇も〳〵積んであつた。その中には過分にはづんでくれた彼女からの祝なども交つてゐた。
田鶴子はお産のあつた晩から、外で泊る癖のついた良人の留守を、赤子を抱いたり寢かしたりして、不安な遣瀬ない時を過してゐた。お産の時期が、疑惑の雲のかゝつてゐた良人の心に、或確實な證左を與へて了つたらしくも見えたが、お産少し前に、芝の方に居る田舍の兄の或友達を訪ねたとき、自分に不利な風評を聞かされてもしたかのやうにも考へられた。田鶴子には、赤子を瞶める時の安井のいら〳〵しい目が、それを語つてゐるとしか思へなかつた。
安井は時々赤子を膝に抱取つて、丸々したその手首などに接吻してゐた。一と晩身の周の書物などから字を引出して、自分の家に相應しいやうな名を命けたりした。赤子は頭臚も顔の輪廓も、目鼻立も、母親酷肖であつた。
安井の歸を待あぐねたSー達は、二階で色々の評議を凝してから、引取つて行つた。田鶴子は泣立てる赤子を抱出しながら、玄關まで送つて出たが、鬢を無造作に引詰めて、髮を束ねた顔の血色が、まだ充分でなかつた。潤みをもつた目や、おど〳〵した擧動には、不意に襲つて來た二人の用事を感づい

たらしい、深い苦悶と哀顔の色が蔽隱せなかつた。

六

安井は妻のいつも坐りつけてゐた長火鉢の前に坐つて、欺して田舎へ歸してからの成行などを思廻してゐた。田鶴子は丁度出京してゐた安井の親類の或老人につれられて歸つて了つたのであつたが、安井は家を出て行く其姿を見送るのが厭であつた。それで自分も金策の用向などのために、兄の田舎の停車場まで一緒に同車することに決めたのであつた。

安井は、不意に其事を言渡された時、どきまぎしながら荷拵をしてゐた田鶴子の姿が、哀れに思出されて來た。時刻が迫つてゐたので、田鶴子は急いで押入のなかゝら、持つて歸るようなものや、自分と赤子の體につけて行く物を擇出したりしてゐたが、心がおど／＼して、重い錘か何かに絡はれてゐるようであつた。自分の手が何をしてゐるか感じがなかつた。同じものが幾度も取上げられたり、入れて了つた物を、無我夢中になつて搜してゐたりした。

汽車のなかでも、田鶴子は潤んだ目をして、始終不安な沈默に陷つてゐた。そして如何かすると取縋るように、良人に話かけたが、自分の暗い疑惑は自分でじつと裹んでゐた。

「それでは成るたけお早く……。」

用事がすむと、後から行くことに話しておいた安井の、プラットホームを出て行く姿に聲かけながら、窓から寂しい笑顔で覗いてゐた田鶴子の姿も、忘れられなかつた。

それに名まで選んでやつた軟かい赤子の體に、もし少しでも自分の血が頒たれてゐたとしたら。そして其子が、きつと再縁につくとになる母親から取殘されるか、人の手に渡るかして、田舍の寂しい町で、其邊の汚い子供達のなかに交つて育つものとしたら。安井は痛々しい其姿が、まざ〲と目に見えて來た。何處までも暗い影を背負つて行かねばならぬ子供の運命も豫想されるようてあつた。事によつたら、子供だけ引取つて、自分の傍て育てゝやりたい願が、また新しく彼の心に湧いて來た。

「おい新海。」安井はそんな考を振落さうとするように、「女が何か言置いて行かなかつたか。」

新海がにや〲しながら、縁側へ出て來た。

「小花さんに何か言つてゐましたつけが……もし先生と一緒に菊見に行くようだつたら、自分も行きたいつて……大方そんな事てせう。」

「何を言つてゐるんだ。自分が此間旦那と一緒に見て來たと言つてる癖に。」安井は詰らなさうに外方を向いたが、眞の些細な事ではあつたが、自分の心に在る何かを女に感潜られたようて、悶〲してゐた頭腦が、一層怏々して來た。

「それて××の藥價をくれたか。」

「くれなかつたてす。何だか大變怒つてゐました。可怕かつたてすよ。」

「何だつて。」

「彼處の親爺、『僕を上へあげましたから、くれるとたらうと思つてゐましたら、逆樣に小言をいつたて

す。薬價はそれは僅かなものだから、上げないとは言はんが、如何か殺さなくて濟む子供を殺してしまつたようて、お宅の先生のお見立を疑ふ、なんて……。僕は初めてあんな奴に出會して、面喰つちつたてす。」

安井は薄笑してゐた。

「莫迦にしてら。中途で醫師を取替へてみたり、後でまた此方へ擔込んで來たりするから駄目なんだ。」安井は苦々しげに言つたが、哀れな自分の我が侮蔑に夷げたように感じた。

女がしげ／＼出入するようになつてから、其邊から來る人達に限らず、一般の患者の足の、目に見えて遠いて來たことが、また氣に懸りだした。

やがて安井は菊見のことを確めるために、二階にまだゐる小花の方へあがつて行つたが、小花はそこへ持込んて來てあつた鏡臺の前に坐つて、ちやうど顏を扮つてゐた。

痔て惱んでゐた小花が、手術のために此處の二階へ來ることになつたのは、田鶴子が歸つてから、まだ幾日もたゝない程のことてあつた。

「如何するの。出かけるの。」安井は出突に段梯子の口から、優しい言をかけたが、自分だけては、今日退院することになつてゐる小花と、その約束をした今朝ほどの興味が、もう離散りかけてゐた。

「え、行つてよ。」女は振顧りながら言つた。

「止さうぢやないか。」安井は部屋へ入ると、髭を引張りながら、女の背後に突立つた。

「厭よ。連れて行つて頂戴よ。」女は背中にさはる安井の膝に、肩を持せかけるやうにして、鏡の底に映る自分の顔に見入つてゐた。

「でも何だか曇つて來たやうぢやないか。」

「大丈夫だわよ。」女は鏡の前を離れると、窓の手摺につかまつて、空を覗いた。

「姐さんにもう話したつて……。」

「え……。ねえ、二人限で行つて、若しか姐さんに叱られると困るでせう。だから私言つちやつたわ。」

女は無邪氣さうに笑つたが、若いなりにも荒んだ貧弱な肉體の影が、その目元にも見られた。

安井は時々この女が、何を考へてゐるかと知りたいやうな好奇心が湧いたが、賣春婦らしく痿れついた綺麗な慘な顔と向合つてゐる時に、悲哀と嫌惡とを感じずにゐられなかつた。

階下で小竹の聲がして、着飾つた其姿が二階に現はれて來た。そして神經質な目で二人の顔を見比べながら、部屋へ入つて來た。

「さあ早く行きませう。旦那が來ない前に歸れるやうに。」

女は手摺の出窓に腰かけてゐる、安井の傍へ來て、肩を揺りながら言つた。

「何をそんなに考へていらつしやるの。必然また奧さんのことでせう。」

女を二人裏口から出してやつてから、暫らくたつて安井も玄關口から出て行つた。

兩國の國技館をぐる〳〵廻つて出た頃には、日影が大川の蒼い水の上に、もう薄れかゝつてゐた。三人はそれから淺草へまはつて、そこて晩飯を食べてから、歸路に就いた。

「旦那がやつて來ましたよ。」

途中て二人に別れて來た安井の姿を、茶の間に見つけると、新海が急いで出て來て告げた。

「二度も三度も來ましたよ。それは可怕しい見脈て、お宅の先生は、一體どんな人間てすなんて……確に目の色が變つてゐました。」新海は怠屈な留守居に起つた出來事を、調子づいて話した。

塵除をとると、安井は長火鉢の側へ來てがつかり坐つたが、猫板のうへにある田舍の兄からの手紙が、ふと彼の目を惹いた。披いて見ると、それは田鶴子の問題が、悉皆解決したと云ふ報知てあつた。女の子も、同時に引取らせることに決つたことも、明白てあつた。安井は頼みの細綱が切れたような氣がした。

○定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢）
但清國を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢

以上郵稅共

▲但し新年號等臨時增刊號は各倍額に付普通號二冊の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

本號に限り特價金七拾五錢郵稅

送金注意

一 誌代郵稅は一切前金とす、金切の場合は發送を……
一 郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地と指定し拂渡局を東片町局と指定あれば途中盜取の虞な……
一 振替貯金口座は東京三十四番なり
一 郵券代用必ず一割增の事
一 集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料共）

一 受領證請求は必ず返信料金を要す

大正二年十二月廿二日印刷納本
大正三年一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込……　中……

印刷所　東京市牛込……

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日 第三種郵便物認可
大正二年十二月